

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年1月5日

謹賀新年。それにしても、12月は「朝生」monthでござり マンス

(1) 「朝生」300回記念パーティに呼ばれた

明けましてお目出とうございます。今年もよろしく願いいたします。

12月は珍しく、講演会や討論会に呼ばれ、結構充実し、多忙な年末でした。それも「朝生」がらみなのです。

発端は、12月4日(木)でした。「朝まで生テレビ」が300回を迎えたというので、その記念と感謝のパーティが開かれたんです。午後7時から全日空ホテルでした。僕は、朝生には6回ほど出ましたから、全300回のうちの2%ですね。野村秋介さんや木村三浩氏はもっと出ています。平成2年の「日本の右翼」に出たのが初めてでした。13年前ですね。それから、「天皇制」や「憲法」など、大きなテーマの時に出してもらいました。

「憲法」の時は、「今の憲法だっていい点はある。9条だって理想としては立派だ。それに近づくようにしたらいい」と発言したら、「何を軟弱なことを言ってるんだ。そんなことで日本を守れるか！」と野村秋介さんに叱られました。僕は、この発言の後に、「世界平和の理想が実現するまでは軍備は必要だから、時限法で軍隊を認めたらいい」と言ったんですが、すでに野村さんは会場に向かっている所でした。

そうです。このテレビ出演の後に叱られたんじゃないかと、川崎の寿司屋で一杯飲みながら「朝生」を見てたんですな。そしたら皆、下らん理想論、平和論ばかり喋る。鈴木までが左翼と同じことを言ってる。けしからん！ と思ったんです。すぐにタクシーを飛ばしてテレ朝に駆けつけた。生放送中だから、他の人なら入れない。でも、野村さんはレギュラー出演者だ。だから入った。そして、後ろの客席（というのかな。ギャラリー席か？）に座って、やおら発言したんですな。あれには私も驚きましたね。

そんなこんなで色々なことがあった「朝生」でした。「朝生」に今まで出た人は延べ3000人を超えるそうですから、全員は来れません。でも主だった人は随分と来てました。

元「朝日ジャーナル」編集長の下村満子さんにお会いしました。「編集長対談」を当時やっていて、野村秋介さんとやったのが印象に残ってます。野村さんは「俺のことを右翼と言わないでくれ」と言ってました。「右の翼しかないなんて変だ。これは差別用語だ！」と言うんです。これは正論ですね。血盟団事件の井上日召は「ワシは鳥ではない。翼なんかない」と言ってました。鳥類のワシは鳥ですが、ワシ（自分）は鳥ではないんですよ。じゃ、いつも自分のこともワシと言い、『わしズム』という本を出している小林よしのりさんは鳥なのでしょうか。右翼なのでしょうか。

ともかく、野村さんに、「右翼」というなと言われて、困った下村さん。「じゃ、何と呼ばばいいんですか」と聞いた。「日本浪漫派と呼んでくれ」と野村さんは答えてました。カッコヨい。でも、残念ながら、野村さんの提案にもかかわらず「日本浪漫派」とは呼ばれませんでした。相変わらず「右翼」「新右翼」という呼び名だけが罷り通ってるのでござります。

この日は、田原さんが、奥さんを連れて来てました。「朝生」300回はひとえに田原さんの力です。そして、田原さんを支えた奥さんの力です。ですから「田原夫妻に感謝する夕べ」といった感じでした。いろいろと懐かしい人々にも会いました。

(2)シアターアプルで、いきなり「朝生」に出た！

そしたら急に、「朝生」に出ることになりました。12月21(日)です。後で、この話をしたら、「何で知らせてくれなかったのよ」と皆にお叱りを受けました。「テレビで見たのに…」「ビデオは録ってないの？」とも言われました。残念ながら、テレビでは放映しませんでした。だからビデオにも録ってません。でも、「朝生」です。でも、本当の「朝生」ではありません。本当の朝生なら毎月、最終金曜日の夜にやってるんです。「じゃ、ニセの朝生に出たのか？」って。そうです。ニセの朝生に出たんです。

それに僕だって、出るつもりじゃなかったんです。前日は徹夜の仕事をして眠たかったし、21(日)は昼から仕事があって、じゃ夜はコントを見ながら寝てりゃいいやと思ったんです。「ザ・ニュース・ペーパー」という過激なコント集団があります。辛辣な社会批判をやって、左翼には大モテの〈お笑い〉です。なんせ社民党や日共や日教組、労働組合はもとより、中核派から

も呼ばれるんです。でも、この日は新宿のシアター・アプル（コマ劇場の地下です）でした。昔から僕は見ているし、ゲストとして何回か出演したこともある。だから招待券が来たんです。12月19.20.21の三日間、公演をしたんですが、21(日)の午後5時からの回だけが〈特別〉だったんです。「スペシャルバージョン公演。パロディ・朝まで生テレビ」だったんです。

こりゃ面白そうだ、と思って行ったんです。それに、あの松尾貴史も出るという。松尾は天才芸人ですよ。そして、「朝生」のパロディビデオを出している。新宿TSUTAYAにも置いてたが、「キッチン。徹底討論・朝までナメてれば」というのと、「朝までもっとナメてれば」という二本だ。めちゃ面白い。司会の田原総一郎はもとより、30人ほどの朝生出演者を全て一人でやる。そして、後で合成して、本物の激論になっている。凄い。大島渚、西部邁、野坂昭如、辻元清美、高坂正堯、伊藤昌哉、黒川紀章、藤本義一、小田実、広瀬隆、俵孝太郎、舛添要一、栗本真一郎、岡本太郎、塩田丸男…といった人々を全て、松尾がやる。顔も似てるし、声もそっくりだ。とんでもない事をやる人だと思った。それも、当時はCGもなかったから、やたら苦勞をしてビデオを作ったという。

この松尾がニュース・ペーパーに出るんだから、きっと彼が田原総一郎をやるんだろうと思った。もしかしたら、全員を一人でやるのか。ウーン、それは無理か。でも、果たしてどうなるんだろう。ドキドキ、ハラハラして見に行きました。そしたら、「あっ鈴木さん、いい所に来ました。じゃ、鈴木さんも出てよ」といわれた。他に、上田清司さん（埼玉県知事）、小森陽一さん（東大教授）、石坂啓さん（漫画家）も出るという。他は、ニュース・ペーパーの芸人だ。

こりゃ困った。まじめに討論したらいいのか。それとも、コントだから、お笑いをするのか。「まア好きにやって下さいよ」と言う。ヒデー。打ち合わせも何もない。そんで舞台に上げられた。

「でも、これはパロディですよ。だったらどんな暴言はいてもいいし、司会者に水をかけてもいいんですよ。首しめてもいいんですよ」と念を押した。「いいですよ」と言う。じゃ、田原総一郎（役者）に水をかけてやろう、と思っていた。でも、いくらコントでも、東大教授や埼玉県知事に乱暴は働けない。困るよな。知事を殴ったら、「右翼、埼玉県知事を襲う！」なんて新聞に出ちゃう。「ザ・ニュース・ペーパー」の事件が本物の新聞（ニュース・ペーパー）に載っちゃう。だからこれは出来んよ。やけに制約の多いパロディだ。

松尾は田原役だと思ったが、大島渚で出た。その後は、浜田幸一役で出た。大島の時は、怒って小泉首相（役者）にペットボトルを投げつけていた。本物の首相だったら、すぐに逮捕だよ。最初の予定では30分位とってたが、何と1時間40分もやっちゃった。私も、がんばってやりましたよ。

「もうこうなったら自衛隊を出せ！」と吠えてやった。「自衛隊の中にも三島由紀夫を信奉する人間が多勢いる。イラクに行ったら、レジスタンスと共闘し、米軍と闘え！」と言ったわさ。「特攻隊、奇襲、ハラキリ…なんでもやれ！ それで第三次世界大戦が起こりゃ、望むところだ！」と。

そして司会の田原総一郎に、「田原のバカ！ お前が一番悪いんだ！」と怒鳴りつけてやりましたよ。本当の朝生じゃ、こんなことは出来ん。水をかけてやろうと思ったけど、「やっぱり右翼だからあんな粗暴なことをやるのよね」と思われちゃマズイ。だから、それだけは思いとどまったんです。

ともかく、激しく、そして、面白かったですね。そうそう、朝生なのに、小泉首相は元より、土井たか子も出てくるわ、金正日も、ブッシュも、パウエルも出てくる。そんな中で、我々も発言しなくっちゃならない。本物の朝生よりも大変でしたよ。

(3)札幌で辛淑玉さんと天皇制をめぐり激論



この二日後、札幌に行きました。「朝生」によく出ている辛淑玉（しん・すご）さんと一騎打ちでした。それも、天皇制をめぐって。呼んでくれたのは、市民団体「日本の戦後責任を清算するため行動する会」。名前をみても分かるように左翼的な市民団体だ。だから、僕を呼ぶことに反対する人も多かった。ところが辛さんが、強く推薦してくれたのだ。その辺の事情は、この会の模様を取り上げた「札幌タイムス」（12月25日）にこう出ていた。

〈異色の講演が実現したのは、行動する会に講演を打診された辛さんが、引き受ける条件として鈴木さんとの“共演”を提案したため。国家にしばられることを良しとしない辛さんは、愛国運動

を続けてきた鈴木さんを「自分の言葉で語る人」と表現、立場の違う同士だからこそ話し合えると、壇上で本音をぶつけ合った)

これを読んでホロリとしましたね。それほどまでして僕のことを呼んでくれたのか、と有り難かったですね。ひるがえって自分はどうかなんだろう。それほどまでして、左翼の人達に手を差しのべていただろうか。反省した。誰とでも話し合う、と思い、そうしてきたつもりだ。でも、自分から、そういう機会を積極的に作ろうとしたか。まだまだ不十分だった、と思う。

その点、辛さんは偉い。この点で私は、まず負けている。それに人材派遣の仕事で、企業で講演することの多い辛さんは、話がうまい。さすがプロは違うと感心して聞き入っていた。でも、討論もしなくちゃならないので、非才ながら必死に頑張りました。そのせいか、かなり突っ込んだ話し合いになったと思います。

ここ札幌では、この市民団体は毎年、天皇誕生日に集会をやってるんです。勿論、天皇制はいらないという講師がいつも来てるようですが、今回だけは、〈是か非か〉の大激論ということで、人も集まりました。又、ミュージシャンの朴保（パク・ポー）さんのミニライブもあり、盛り上がりしました。朴さんは映画「夜を賭けて」の音楽監督もしてるんです。最後は、朴さんの歌に合わせて、皆で、歌い、踊りました。「鈴木さんも舞台上に上がって踊りなさいよ」と辛さんに言われて、いやいや踊りました。「札幌タイムス」にはその写真がバッチリと出ています。「まるで天皇誕生日を祝して踊っているようですね」と記者も言っていました。まア、そう思われるのもいいでしょう。

参加した反戦オバちゃんたちからは、「踊る右翼を初めて見ました」なんて言われるし…。二人の討論のあと、厳しい質問も出ましたが、左翼相手の集会はなれてるので、何とか切り抜けました。その後、二次会というか、忘年会でした。ジンギスカン料理の「義経」でやりました。ほら、源義経は日本を脱出して、モンゴルに行き、ジンギスカンになったんです。だから、料理屋の名前が「義経」なんです。辛さんは、サーピス精神一杯で、朝鮮の革命歌や軍歌を歌いまくり、踊りまくる。それに、元学生運動家が多いから、すぐに肩を組んで革命歌をうたう。私も歌いましたよ。「インターナショナル」「ワルシャワ労働歌」「国際学連の歌」…と。

そしたら、一人の男が、「すみません」と私に謝る。「何ですか」と言ったら、「私は昔、法政の中核派でした。鈴木さんの講演会をつぶしたのは私

です。すみませんでした」

「ゲッ、お前か。この野郎！」と思ったけど、「いいですよ。昔のことは」と言いました。中核に限らず、革マル、四ト口、社青同…と、いろんな所からつぶされましたよね、私は。

法政の時は、あるサークルが呼んでくれたんです。「いいよ、行くよ」と言ったんですが、そのサークルが中核に脅されて中止してしまった。「鈴木を呼んだら、お前ら命ねえぞ」「学内を歩けねえぞ」と脅された。

まるで暴力団だ。中核派は少なくとも思想を持った集団だし、抑圧と差別をなくし、理想社会をつくろうとして日本を革命しようとする集団のはずだ。そうした集団が、そんな暴力団のようなことをしていいのか。

「僕は一人で行く。そっちは全都動員でも全国動員でもして何千人と集めたらいいだろう。そして、僕を徹底糾弾し、論破したらいいだろう。何なら、わざと負けてやってもいい。そうしたら、自分たちの新聞に『右翼を粉碎した』と書けるじゃないか」と僕は言った。しかし、中核は聞く耳を持たない。呼んでくれたサークルも、「殺されるのは嫌だ」と怯えて降りてしまった。

その時の中核派がいたんだよ。ジングスカン屋に。「中核派をやめて北海道に帰ってきてる人は多いんです」と言っていた。それで、学生運動の話に華が咲いたんだわさ。「今考えたら、何で反対して、つぶしたのか分かりませんね」と言っていた。そうだよ。辛さんじゃないが、意見が違うからこそ話せるんだよ。皆同じ考えなら、「イギナシ・イギナシ！」で終わってしまい、人間の進歩もないし、何も考えないよ、と言ってやった。

「でも、中核派をやったんだから、根性もあるし、ノウハウもあるだろう。がんばんなさいな。一水会だって、元中核派がハイテク部門を担当してるんだよ」と言ったら、驚いていた。他にも右翼の新聞を作ってる人で元中核派の人もいる。じゃ、元中核派で集まって、同窓会でもやったらいいじゃないか、とも言った。

天皇誕生日には、毎年、こうした集会をやってるが、いつもは30人か40人だという。ところが、今回は「辛さん効果」だろう。150人ほどが集まり、超満員で、補助イスを次々と運び込んでいた。又、札幌では、こうした「左右激論」が余りないのか、新聞でも取り上げられていた。「北海道新聞」（12月24日）では、「天皇制や愛国心。論客熱いバトル」と三段抜きの記事。「毎日新聞」（12月24日）では六段抜きの記事で、

〈札幌。天皇誕生日に論客討論会。

「愛国心は暴力装置」

「社会にとってプラス」〉

そして、「札幌タイムス」（12月25日）は、

〈天皇誕生日に、左右の立場超え。 在日3世、辛淑玉さんと
新右翼・鈴木邦男さん。 「国家と個人」テーマに講演〉

ともかく、実り多い討論会でした。呼んで下さった方々にもお礼を言います。これからは、「辛淑玉一座」を結成して全国を回る。というのもいいじゃないですか、と僕は提言したのですが、さて、どうなりますやら。

(4)締めはロフトで宮台真司さんと…

さて、この三日後の12月26日(金)、今度は新宿のロフトプランワンで、やはり「朝生」常連の論客・宮台真司さんとトークをした。「愛国心とナショナリズム」だ。初め二人の討論だったが、吉田司さん（ノンフィクション作家）も加わってもらった。

吉田さんはかつて月刊「現代」で天皇問題を書き、右翼に押しかけられたことがある。「風流夢譚」事件のようになってはかなわないと思い、成田に逃げた。その意味では、〈天皇体験〉のある人だ。高みから天皇論を分析・解説してるだけの人とは違う。ぜひ、話してもらいたいと思った。

それに、最近出た本がよかった。『天皇の戦争責任・再考』（洋泉社新書）だ。池田清彦、八木秀次など7人が書いているが吉田司さんのが一番よかった。やはり、〈天皇体験〉のある人は腹がすわってると思った。

さらに、産経新聞に、子供の頃読んで印象に残った本として、『家族口ビソソ』をあげていた。もう絶版で、どこにもない本だ。しかし、産経は本の写真を撮るために必死で探した。そしたら、国会図書館に一冊だけあったそうだ。（天皇論とは何の関係もないけど、思い出したので書いたんだよ）。

そうそう、メインの宮台さんだ。今や一番の売れっ子だ。愛国心やナショナリズムの本も多い。最近、姜尚中さんと対談した『挑発する知』（双風舎）が売れている。この中で、宮台さんは言っている。

〈私は、子々孫々の繁栄を考えるのが国益だと思う。ある一世代の逃げ切りの可能性を考えるようでは、ナショナリストの本義

を果たしてるとは思えない)

その通りですね。「ナショナリストの本義」か。いいですね。今や右傾化の時代で、「おれはナショナリストだ」「俺も愛国者だ」という人が多い。又、愛国者であれば何でも許されるような風潮だ。しかし、愛国者になり、〈運動〉をすることによって暴走することも多い。国を愛するためには、それなりの〈資格〉がいるのではないか。トレーニングが必要なのではないか。そんなふうにも思う。

どっかの小学校の通信簿で「愛国心」の項目があったという。いやだね。「私はこの国を愛してます」といったら「A」なのか。それに、口先だけで判断するのもおかしい。それよりも、その子供が何を行っているかだよ。「愛国心がある」といいながら、他人をいじめ、「先生、〇〇君は、非国民です！」なんて告げ口する奴なんて、いやだよな。違いますか。反対に、「愛国心なんて分かりません」と言いながらも、他人にやさしくする人の方がいい人でしょう。

僕は「愛国心」なんてものは、心の中で持っていればいい。公言すべきもんじゃないと思う。国に限らず、ひとに対しても、「愛する」という事、全てに言えるけどね。「俺はお前を愛してる」といって、女をつけ回してる男は一杯いる。「これだけ愛してるのに、どうしてお前は分かってくれないのだ」と女を脅してる奴もいる。愛国心も似るとよ。考えてみりゃ、〈日本〉もかわいそうだよね。こんな下らない人間たちに「愛してるんだ！」と、いって迫られている。追っかけ回されている。「愛国心」というストーカーに追っかけられてるのが、今の〈日本〉だよ。ホロリ。と、同情しちゃいまんねん。

と、そんなことも含めて、宮台さんと話したいと思ったのに、彼は遅れに遅れた。ロフトではその後、夜のライブが11時半から始まるので、我々のトークは、遅くとも10時40分に終わらにゃならん。これを無理いって11時まで延ばしてもらった。そしたら、10時50分に宮台さんはやっと来た。ラスト10分だけ、本人に喋ってもらって閉会。まあ、宮台さんとは又の機会にゆっくり話したい。

吉田司さんとも、ゆっくり（天皇体験）を話そうと思っていたら、成田に逃げた所まで話した時に宮台さんが来た。それで、こっちも中途半端になった。これも次にやろう。

と、新たな課題を次の年に託して、年末のトークライブは終わったのであ

りました。

【お知らせ】

(1) 1月10日(土)、中野武蔵野ホールで、松林宗恵さん（映画監督）と快樂亭ブラックさん（落語家）のトークがあります。そして、松林監督の「人間魚雷回天」が上映されます。貴重な映画です。ぜひ、見て下さい。この日のレイトショーですので、午後9時から開始です。

(2) 1月14日(水)午後7時から、高田馬場シチズンプラザで一水会フォーラムがあります。講師は何と初代タイガーマスクの佐山サトルさんです。テーマは「極右革命を語る」です。これも聞かなきゃソンです。

それと、「レコンキスタ」1月号は何と、12ページです。それに1面と12面がカラーです。一水会30年の歴史始まって以来です。内容も充実してます。僕も原稿を2本書いてます。ぜひ読んで下さい。年間購読6千円です。一水会は tel 03(3364)2015 FAX 03(3365)7130です。

(3) 1月20日(火)は、ニュース・ペーパーがやっている「大人のしゃべり場。ライブ塾」に私が出ます。午後7時から、高田馬場のTRICK STERです。会費は2千円です（ドリンク、おつまみ付き）。

テーマは、「年初め。日本を斬る」です。場所は、高田馬場駅（新宿寄り）を下りて、右に出て、線路沿いに新宿方面に4分です。ESP、ラーメン「俺の空」、日本通信教育連盟をすぎて宏陽ビルがあり、その地下です。

新宿区高田馬場4の2の36 宏陽ビルB1F ライブ塾「TRICK STER」
03(5348)4767

(4) 1月23日(金)は大森で集会ですね。えーと、何だっけ。湯沢中学校の同窓会か。あっ皆さんには関係なかったね。すんません。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年1月12日

イエスの超記憶術の松尾貴史。対するは、読書的修正ノルマ主義の私。

(1)新約聖書の目次は今でも暗誦できます

今ここに聖書があります。新約聖書です。日本聖書協会が出版したものです。定価は1,100円+税となっております。きちんと税は払うのです。神のものは神に、カエザルのものはカエザルに返すのです。といっても、ある左翼出版社のように、「+悪税」なんて皮肉的に書いたりはしません。

この聖書は決してホテルから盗んできたものではなかとです。ホテルにはよく置いてありますね。あれはギデオン協会が置いてるんですね。ホテルで寝る前に読んでる人がいるのでせうか。不思議です。「牧師さんや熱心なクリスチャンは読むだろう」と言われるかもしれませんが、そんな人は常に持って歩いてます（私のように）。

さて、この新約聖書の目次を開いてみます。28の項目があります。初めから言えばこうなってます。

「マタイによる福音書」「マルコによる福音書」「ルカによる福音書」「ヨハネによる福音書」「使徒言行録」「ローマの使徒への手紙」…と。

今、聖書を見ながら書いてますが、実は見なくても書けます。全て暗誦できます。なぜなら高校の時に暗記させられたからです。ミッションスクールでしたから、「聖書」の時間があります。国語、英語、世界史、日本史と同じように必修です。絵画や書道や音楽は選択科目ですが（私は勿論、絵の才能があったので絵画をとりましたがな）、「聖書」は必修です。試験もあって、60点以下だと落第です。卒業できませんし、ましてや大学にも行けません。その他に、毎朝30分の礼拝が義務づけられてました。

だから、新約聖書の目次は今でも空で言えます。そうそう。教育勅語は右翼になって一度、覚えました。今は忘れちゃった。歴代の天皇陛下のお名前は全く分かりません。覚えようともしませんでした。無理だと思ったし、右

翼になる時に「試験」もなかったのです。普通の人達（といっても僕よりちょっと昔の人達）は皆、小学校で暗誦させられたそうです。井上ひさしさん、矢崎泰久さん、亀井淳さん、猪野健治さん…たちは今でも覚えているそうです。「あの頃は強権的な天皇制国家だったから…」と言いながらも、でも「神武、綏靖、安寧、懿徳…」と楽しそうに暗誦してみせます。「嫌な思い出」なら、忘れたらいいのに、ずっと覚えてるんですね。案外、小学生なんかは覚えるのが好きだし、楽しいのかもしれない。ほら、JRの駅を全部言えるとか、恐竜の名前を全部言えるとか…。いますよね、小学生が。そんなものでせう。

さて、僕たちは高校で覚えさせられたのです。だから楽しいわけはありません。でも覚えなきゃ、地獄のような高校を卒業できません。だから、泣く泣く覚えました。奴隷の記憶術です。ただ、今、机の上にある聖書とは、ちょっと違います。翻訳が違います。私らの時は、こういう目次でした。

「マタイ伝」「マルコ伝」「ルカ伝」「ヨハネ伝」「使徒行伝」「ローマ人への手紙」…。最後まで書いてみましょうか。でも、ここで記憶力をひけらかす必要もありませんね。だからこの辺でやめます。

しかし、今でも不思議なのですが、「これは歌にして覚えたらいいよ」という奴がいたんです。同級生です。そして「鉄道唱歌」で覚えるんだよ、と言いました。「へエー、こいつは天才だ！」と思いました。「鉄道唱歌」というのは、「汽笛一声、新橋を今わが汽車は…」という歌です。東海道線の駅が次々と出てきます。それにならって、聖書の目次を覚えればいいと言ったんですな。

つまり、こう歌うんです。皆しゃん、歌って下さい。

「マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ。使徒、口、コリ、コリ、ガラエペソ…」

さあ、覚えましたか。「ローマ人への手紙」の後は「コリント人への手紙」(1)、「コリント人への手紙」(2)、「ガリラヤ人への手紙」…と続くからです。

私も、だから「鉄道唱歌」で覚えました。日本に「鉄道唱歌」があってよかった。でなかったら、もっともっと苦勞し、血ヘドを吐いて覚えにゃならん所でした。これを教えてくれた同級生は私の「命の恩人」です。

…と、ずっと思っていました。

ところが、ドンデン返しがあったのです。「人生はすべからく推理小説だ」と言われる由縁です。高校を卒業して20年ほどたったある日、何気なく

三浦綾子の『新約聖書入門』（カッパブックス）を買ったんです。彼女は熱心なクリスチャンです。曾野綾子という人もいますが、同一人物ではありません。「曾野綾子が三浦朱門と結婚して三浦綾子になったんでしょう」と言う人がよくいますが、違います。人生はそう単純ではないんです。（でも、二人とも、クリスチャンだし、綾子だから、間違えるんでしょうな。あれっ、綾子という名前の人は全員、クリスチャンなんですか）。

三浦綾子は名作『氷点』とか『塩狩峠』、『ひつじが丘』、『積木の箱』などいろんな小説を書いた人です。内容は結構残酷です。他の作品も僕も随分と読みましたが、やはり残酷な話が多いですね。「これも神の試練だ」

「思（おぼ）し召しだ」とか言って、ポンポンと人が死んでゆきます。いや、作家が登場人物を、やけに簡単に殺しちゃうんです。神がついてるから、かえって残酷な展開になるのかな、と私は思いました。

さて、話を戻ませう。三浦の『新約聖書入門』の話です。彼女も北海道にいた時に（ずっといたんだけど）、教会に通ってたんです。その時、「新約聖書の目次を覚えなさい」と牧師さんに言われたんだそう。試験はないけど、健気にも彼女は覚えたんです。でも、ここが凄いんです。その時、牧師さんは、「『鉄道唱歌』で覚えるといいです」とアドバイスしてくれたんだそうです。ギョエ！と叫んじゃいましたね、私は。何だ。高校の同級生の「発明」じゃなかったんだ。日本のキリスト教徒は全員、この「鉄道唱歌」で覚えていたんだ。それも牧師が率先して…。

こんなことでいいのか！ と私は義憤に駆られましたね。そんなにまでして、こんなもの（目次だよ）を覚える必要があるのか。馬鹿らしい。問題集を渡す時に、アンチョコも一緒に渡すようなもんじゃないか。それに、ずっと昔から、こういう覚え方をしてたんだよ。不真面目な！ もしかしたら、フランシスコ・ザビエルが日本にキリスト教を伝えて以来、何百年と、これはやられてきたのか！（それはないか。ザビエルがきたのは信長の時代あたりだろう。だったら「鉄道唱歌」はなかった。じゃ、何の歌で覚えたんでしょ？ 又もや、謎が増えちゃった）。

今、年表を本棚から取り出した。ザビエルがキリスト教を日本に伝えたのは1549年だ。今から450年前か。勿論、「鉄道唱歌」も鉄道もないやね。じゃ、「籠かき唱歌」か何かで覚えたりして。そんなのもねえか。

山村良橘の『世界年代記憶法』（代々木ライブラリー）によれば、「1549年。ザビエル、鹿児島来航」はこう覚えるんだそうです。「以後よく来日、宣教師」です。はい、覚えましたか。

この11年後（1560年）が桶狭間の戦です。そして1568年に信長は、足利義昭を奉じて上洛してます。やはり、何かにかこつけて覚えるというのはいいですね。でも、変に覚えちゃうと困りますよね。「鎌倉幕府の開かれたのは？」と聞かれて、「よい国つくろう鎌倉幕府だから、4192年です！」と答えた人がいたそう。かなり未来の話ですな。本当は「いい国つくろう（1192）」なんですが、「いい国」が「よい国」になったんですな。同じことだけど、年代は随分と離れちゃう。

(2)イエス・キリストの系図を全て暗誦したんです。松尾貴史は

では、新約聖書に戻ります。初めは、マタイ伝（マタイによる福音書）ですね。「イエス・キリストの系図」から始まります。書き出しは、こうです。

〈アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、ユダはタマルによってペレツとゼラを、ペレツはヘツロンを、ヘツロンはアラムを、アラムはアミナダブを、アミナダブはナフシオンを、ナフシオンはサルモンを、サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベドを、オベドはエッサイを、エッサイはダビデ王をもうけた。…〉

多分、皆、きちんと読んでないでしょう。それがどうした…と思うでしょう。これは実は初めの部分で、さらにこの名前だけの文章が、この5倍も続く。最後はこうなる。

〈…このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。

こうして、全部合わせると、アブラハムからダビデまで14代、ダビデからバビロンへの移住まで14代、バビロンへ移されてからキリストまでが14代である〉

つまり、計42代の人名が、ただ、ズラズラと、意味もなく、無味乾燥に続くのだ。牧師さんだって、まともに読みやしない。ああ、うっとうしいな、こんな分かんねえ名前ばかり並べてやがって…と思ってる。2段組みの聖書で、32行。丸々1ページだ。

「それがどうした」と言われそうだが、これを全部、丸暗記した人がある。凄いですね。それに、クリスチャンではない。どの教会だって、そんな滅茶苦茶な試練は与えない。ほら、例の、あの松尾貴史さんですよ。先週、紹介したでしょうがな。天才芸人で、よくモノマネをやっている。「朝まで生テレビ」のパロディ・ビデオを2本も出してる人だ。このビデオでは、一人で「朝生」出演者30人ほどを全てやる。司会の田原総一郎はもとより、大島渚、野坂昭如、辻元清美、小田実などをやる。実によく特徴をとらえている。大島は、やたらと「バカヤロー！」を連発するし、野坂はドモるし、西部邁は手を組んでクネクネして、オカミみたいだし…。政治評論家の伊藤昌哉なんて、ボケちゃって、何を言ってるのか分からない。洩瓶を抱え込み、最後には、「あっ、もれちゃった」といってる。おいおい、そこまでやっていいのかよ、と思ったが、本人からは抗議はこなかったそうだ。文句を言ったら、それまでパロディにされそうだから、恐くて言えなかったのか。あるいは単に、見てなかっただけなのか。

「何で野村さんはやらなかったの？」と聞いたら、「だって、肉体言語が怖いから」と言ってたけど。いや、野村さんをやったら、結構、本人も喜んだと思うよ。だって、女優の黒木香が出てた時、野村さんの隣りで、「あーら、私だって肉体言語ですよーん」と言ってた。まア、裸で勝負してたからだろう。これには野村さんも、怒れずに苦笑いしていた。

さて、話が飛んだな。松尾貴史さんとは誰に紹介されたのか忘れたが、何回か会ってる。彼のライブに招待されて見に行った時だ。かなり前だ。渋谷の円形劇場だったと思う。その中で、この、「イエス・キリストの系図」を暗誦してみせたのだ。

でも、ただ、言ってるだけだと、客も、当てるのかどうか分からん。だから松尾の背中の方に、正しい文章がスライドで出る。だから、間違ってるかどうか客は分かる。大変な真剣勝負だ。この、名前だけがズラズラと32行も続く文章を、何と松尾は一カ所も間違えることなく、暗誦したのだ。「ヒャー、凄い！」と私は驚きました。

それ以来、松尾貴史といえば、パロディ「朝生」もそうだが、それ以上にこの「イエス・キリストの系図」を思い浮かべてしま

う。

さて、12月21日(日)に、新宿のシアターアプルで「ザ・ニュース・ペーパー」の公演があり、そこでパロディ「朝まで生テレビ」をやった。ゲストが松尾だった。という話を先週した。僕も急遽、舞台に上げられて、トーク・バトルに参加した。この後、出演者で二次会に行った。あの佐川一政さん（作家）も来てたので、一緒に行った。その後、喫茶店にも行った。



それで松尾に、ちょっと意地悪して聞いてやった。「あのイエス・キリストの系図はまだ覚えていますか？」と。即座に、「もう全部忘れちゃったよ」と言っていた。「教育勅語」だとか、「枕草子」「平家物語」なんかだったら、意味のある文章だ。リズム感もあるし、情景も浮かべられる。ところが「系図」にはそんなものは何もない。ストーリーもないし、意味もない。だから、そんなものを覚えるのは一番大変だと思う。それに、苦心して苦心して覚えても、残るもんじゃない。自慢できるもんじゃない。

そうした意味のない系図を、ただ暗記のために暗記する。そして、客の前で披露する。それが凄いと思った。「一体、どうやって覚えたんですか」と聞いたら、自分の部屋を思い浮かべて、置き物を連想しながら、覚えていった、と言っていた。

その時のライブのビデオはないんだろうか。それも出したら売れるだろうに。（売れないか）。じゃ、何かの折りに、松尾に「系図」を暗誦してもらい、私が、「目次」の暗誦をしましょう。新約聖書のドッキングだ。でも、あたしゃ、「鉄道唱歌」の音楽がないと暗誦できんなー。

そうだ。蛇足ながら…。「系図」には、「アブラハムからダビデまで14代、ダビデからバビロンへの移住まで14代、バビロンへ移されてからキリストまでが14代である」と書かれている。

この「バビロンに移された」というのは、「バビロンの捕囚」と言う。僕は高校の世界史で習った。悪い異教徒によって、いいキリスト教徒が（いや、この頃はイエス・キリストが生まれる前だから、ユダヤ教徒だよね。）強制的にバビロンに連れて行かれた。と教わった。ミッション・スクールだから、だけじゃない。一般の世界史の本でも、そう書かれている。かわいそうなユダヤ教徒よ、と思っていた。

ところが去年の2月にイラクに行った。その時、バビロンを訪ねた。そしたら、ユダヤ教徒を連れてきたネブカドネザル王は〈悪人〉ではなく、〈英雄〉なのだ。あっ、そうかと思った。いかに僕は、キリスト教（ユダヤ教）史観に染まって教えられていたのか、と分かった。バビロンは今も遺跡が発掘されている。イラクでも大切にしている。特に、フセインさんは、この他、バビロン遺跡を大切にしていた。そして、ネブカドネザル王を尊敬していた。「自分はネブカドネザル王の再来だ」とまで思っていたらしい。

ということを今、急に思い出した。その「ネブカドネザル王の再来」は、キリスト教徒に捕まり、「アメリカの捕囚」になるのでしょうか。

えーと、年表を見ると、「ユダヤ王国滅亡→バビロン捕囚」は紀元前586年と出ています。さっきの「年代記憶法」では。

「拒（こば）むユダヤ人、バビロン捕囚」と出ています。

「新バビロニアにより、滅亡。捕囚期の受難が後のユダヤ教を準備する」と解説されてます。とすると、フセインが捕囚され、それが後の何を準備するのでしょうか。かえって、「アメリカの崩壊」が始まるのかもしれませんが。

(3)私はこんな本を読んできた。今年は

はい、では、年頭恒例の、「読書ノルマ」の発表です。勿論、去年読んだ冊数でんがな。

〈1月（冊）。2月（33冊）。3月（35冊）。4月（45冊）。5月（53冊）。6月（50冊）。7月（38冊）。8月（42冊）。9月（34冊）。10月（40冊）。11月（32冊）。12月（34冊）〉。

以上です。全ての月が30冊のノルマを突破してますね、よかったですね。おめでとうございます。と自分に言ったりして。さらに、40冊以上の月が6ヶ月、つまり半分ですな。さらに、そのうち、50冊を超した月は、3月でんな。ご苦労さまでした。エート、合計して、486冊です。これが去年読んだ数でんがな。それを12で割ると、「月平均40.5冊」読んだことになる。月平均で、40冊を超したというのは近年にない快挙ですね。

それに、金があって、本を沢山買って読んだのではない。むしろ、仕事がなく、貧乏で、だから図書館で借りて読んだのが多い。

1つの図書館で7冊借りられる。同じ区の他の図書館でも7冊借りられる。期間は2週間だ。僕は中野図書館と東中野図書館を利用している。2週間で14冊借りて読む。月にして28冊だ。だから、中心は図書館の本だ。

それに「返さなくてはならない」と思うと、ちゃんと読む。必要な所はメモをとる。そして部屋には本がたまらない。お金もかからない。これはいい。ところがだ。今年の1月から図書館のシステムが変わった。借りられるのは「全部で10冊」になったのだ。だから、今まで月に28冊借りられたのに、今月から月に20冊になってしまった。ショックだ。

よく、「ノルマを決めると軽い本しか読まなくなる」と言う人がいる。ノルマ、記録にだけマニアックにこだわるとそうなるかもしれない。しかし、「月に5冊」でもいいし、「月に10冊」でもいい。ノルマを決めて読むことは必要だと私は思いますよね。それに、「ノルマを決めると…」と言う人に限って、じゃ「重い本」を読んでもかとなると、それもないんだよ。全く読んでない。

僕は、重い本、厚い本、長い本、難解な本も読んでいます。ただ、そればかり読んでると、しんどいし、ノルマも全く果たせない。だから、そんなのは1日に10ページか20ページでもいいと思っている。少しずつ読んだらいい。2、3時間で一気に読める本もあれば、何十時間かかっても読み切れない本もある。それでいいんですよ。

エート、どんな本を読んでたのかなと、去年の手帳（HANDY

MEMORY) を見る。1月の部だ。去年の1月は50冊だ。正月休みがあったし、仕事もなくて本ばかり読んでたんだらう。きっと、ノルマの為に軽い本ばかり読んでたのかな、と思ったら、結構、ズシリと重く、考えさせられる本を読んでいるんだな、この人は。ちょっと紹介してみっか。

『世界の歴史(21) アメリカとフランスの革命』(中央公論社)。

高見順『敗戦日記』(文春文庫)。高見順『終戦日記』(文春文庫)。

そして以下、全て、高見順の本だ。

『草のいのちを』(講談社文芸文庫)

『如何なる星の下に』(ほるぷ社)

『逆流』(岩波書房)

『いやな感じ』(新潮現代文学14)

『文壇日記』(岩波書店)

『闘病日記』(上・下)(岩波書店)

この月は、まるで高見順月間だね。他にも『作家の自伝・高見順』(日本図書センター)とか、高見順の解説書をかなり読んでいる。一人の作家を集中的に読むというのはいいよね。他には、どんな本かな。

リービ英雄『星条旗の聞こえない部屋』

竹田泰淳『快樂(けらく)』(新潮社)

山本周五郎『浪漫小説集』(実業之日本社)

山本周五郎『武道小説集』(実業之日本社)

谷沢永一、渡部昇一『広辞苑の嘘』(光文社)

日本の歴史・21『明治人の力量』(講談社)

奥平康弘・宮台真司『憲法対論』(平凡社新書)

姜尚中・森巢博『ナショナリズムの克服』(集英社新書)

新潮現代文学・6『芹沢光治良』

林房雄・三島由紀夫著『対話・日本人論』(夏目書房)

高見順や三島由紀夫など、昔読んで、再読したのも多い。時間がたって読んでみると、又、違った感じ方をする。同じ本なのに、読む人間の心境や、思想、その時々々の環境、人間関係が違っているからだらう。この月は、菊池寛の『真珠夫人』(文春文

庫) も読んでいる。テレビで放映していたが、あれは、この原作を基にしながら大幅に変えたものだ。どのように変えたのか知りたくて、ビデオ屋から借りて全20巻ほどのを全て見た。面白かった。又、テレビ版の原作として、中島丈博の『真珠夫人』(上・下。扶桑社) も出てるので、これも読んだ。小説、物語はこのようにして作るのか、といったことが少し分かった。文学的には菊池のものが上だと思うが、ストーリーの面白さ、奇想天外さ、ドラマティックな展開という点では、中島の方が圧倒的に面白かった。又、いつかここで紹介してみませう。ではよいお年を。じゃなかった。もう1月も中旬なのに、いかん。では来週。

皇紀2664年1月12日(月)

(右翼の人からの年賀状で、今年は皇紀2664年だと初めて知りました。だから、たわむれに使ってみました。ちなみに仏暦では2547年です。これはタイのお坊さんからの年賀状で知りました。お釈迦さまはキリスト様より500年も早く生まれたんですね)

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年1月19日

私の憲法草案。王制珈琲か共和制珈琲か。そして、大津事件と 司法の独立と西郷伝説

(1)雅叙園で「9条連」の伊藤成彦さんに会った

1月13日(火)、目黒雅叙園に初めて行った。ビックリした。広大な建物だし、内部が又、華麗、かつ豪華。江戸美術展をやっているし、天井はやたらと高い。まるで有楽町の東京フォーラムに入ったような感じ。ここは元々は結婚式場なのだろうか。ともかく、こんな時でもないと入れない。

こん時と言ったけど、別に結婚式に出たわけじゃなか。「JR総連2004年新春賀詞交歓会」に出席したのだ。JR労組の人達とはよく会ってるし、よく呼ばれている。JR東日本労組顧問の松崎明さんと対談して以来の付き合いだ。松崎さんは元「革マル派」のNo. 2だ。かつてはお互い、右と左の翼で敵対してたんだが、今は仲がいい。

それに今や右も左もないだろう。年末の「紅白」では小林幸子の恒例のド派手ドレスを見ようと全国民が注視していたが、後ろにつけた翼が開かなかった。右の翼も、左の翼も開かなかった。ああ、右翼も左翼も終わったんだわさ、と皆は思い知ったのでありんした。そういう時代なんですよ。

そうそう、このJR総連の新年会には全国の労組、国会議員らが沢山、来ていた。そして「イラク派兵反対!」「グローバリズム反対!」を叫んでいた。その中で、「9条連」の人が挨拶していた。

エッ、「9条連って何だ!」と思った。近くにいたソプラノ歌手の近藤日佐子さんに聞いたら、「9条を守って世界に広める運動をしてる人達」だそう。フーン、今時、けなげだと思った。だって、民主党まで改憲を言いだし、世をあげて「憲法改正」ムードの中、9条を守り、さらにそれを日本だけでなく、世界の人々にも知ってもらい、世界中の憲法に9条を入れてもらう。

そんなことを考えてるなんて…。

「9条連」というのは全国にある。埼玉9条連、三多摩9条連、栃木県9条連…と。じゃ、おらも中野9条連にでも入れてもらおうか。近藤日佐子さんは9条連事務局なんだ。

「じゃ代表は誰なのさ」と聞いたら、世話人のように何人もいるそうだ。その中でも代表的な人が中央大学名誉教授の伊藤成彦さんだという。

「じゃ、鈴木さんに紹介しますよ」と言う。そして、会場のあちこちを走り回って伊藤さんを探し、連れて来てくれた。



「あっ、初めして」と名刺を出したら、「何言ってんですか。鈴木さんと一緒に本を作ってるじゃないですか」と言われた。アレッと思った。ポカーンとしてたようだ。そして、「アッ!」と思い出した。そうか、あの時の伊藤さんか、と。

「確か、憲法の本でしたよね」「そうだよ、10年前だよ。ポット出版だったね。あの青年はいい男だったね。元気ですか?」

…と、そんな話をしてるもので、紹介してくれた近藤さんも、啞然としている。「何だ、知ってたの。じゃ、紹介する必要なかったんじゃない」とボヤいている。いや、仕事は一緒にしたけど、会うのは初めてだ。きっとそのはずだ。まてよ…。それで恐る恐る聞いた。

「あの一、お目にかかるのは初めてですよね」「ええ、そうですよ。あの時、一緒に書いた人とは誰も会ってませんね。何なら、あのメンバーに全員集まってもらって、憲法のシンポジウムをやってもいいね」

「そりゃーいいですね。ぜひお願いします」と言った。言ってから気がついたが、一人だけ出席できない人がいる。景山民夫さん（作家）だ。この人はもう亡くなった。「じゃ、残り4人でもいいじゃないですか」「そうですね」という話になった。だから、そのうち「9条連」主催で憲法のシンポジウムをやるでありますよ。

ところで、「9条連」て何の略なの? と聞いた。略語を見ると、すぐに、その正確な意味を知りたくなる。探究心ですよ。いい心掛けだ。それに

しても、ベ平連、勝手連、中ピ連…と、連のついた言葉は多いが。

「9条連」は、正しくは、「憲法9条--世界へ未来へ連絡会」と言うのだそう。伊藤成彦さんは、「僕は第一章（天皇条項）は全部取るべきだと思います」と言う。「じゃ、改憲派ですね」と言ってやった。それではどこをどう改憲するかを皆で論じたらいい。

僕も「9条の精神」は立派だと思う。世界中がその精神に立ち、各国の憲法に〈9条〉を入れたらいい。今すぐには無理としても、その世界大的な理想は立派だ。それを目指した上で、じゃ、今、何をすればいいか。何から出来るかを考えたらいい。まア、それは、シンポジウムが実現したら、もっと深く考えてみたい。

(2) 『私の憲法草案』は画期的・革命的なリレー討論でした

家に帰ってきてから、本箱を探した。スライド式本箱を使っているが、後ろの方に、控え目に入っていましたよ、この本は。

『僕の憲法草案』という本だ。1993年3月26日発行となっている。11年前か。発行はポット出版で、沢辺均さんが代表者だ。03(3478)1774が電話だ。1957円だ。実にいい本だと思う。まだあると思うので、ほしい方はtelしたらいい。

と思ったら、発行所の下に、発売元が書かれている。ここに発売元が移ったのか。径書房（こみちしょぼう）だ。telは03(3234)4608だ。

この『僕の憲法草案』は5人の共著だ。橋爪大三郎、景山民夫、伊藤成秀、呉智英、そして私だ。

「護憲・改憲…公式通りの建前から一步はみ出す憲法論争」と書かれている。5人の共著といったが、5人の座談会ではない。座談会なら私は、伊藤さんに既に会っている。じゃ、各々が、憲法についての思いを勝手に書いたのか。そうでもない。リレー式の討論集なのだ。そのやり方は私が提案した。まず一人が、「憲法草案」を書く。そのゲラを見て、次の人が、「うん、ここはいいが、ここは私と考えが違う」というふうを書く。三番目の人は1、2番目の人の草案を見て、「さらに私なら…」と書く。なかなか画期的なやり方でしょう。

実は、昔、こんな方式の討論があり、一度やってみたいと思っていたのだ。確か、60年代後半だったと思う。「変革の思想とは何か」といったテーマで、三島由紀夫、石原慎太郎、福田恆存、村松剛、小田実、羽仁五郎…らが、次々と書いてゆく。

当時は右も左も芯の強い、スケールの大きい思想家が一杯いたんだ。今とは大違いだ。ともかく、それらの人々に次々と（前の人の論をふまえ、あるいは批判して）自分の変革論、革命論を書く。これは凄かった。ワクワク、ドキドキしながら読んだ。

そのことをポット出版の沢辺さんに言ったら、「じゃ、それで行きましょう」となった。この本の〈第一部〉は「リレー討論。憲法草案を考える」だ。

まず、「橋爪大三郎の憲法草案」が出される。

それを受けて、「景山民夫の憲法草案」

そして、「鈴木邦男の憲法草案」

「伊藤成彦の憲法草案」

が続く。（あれ、呉智英さんはないな）。

〈第二部〉は「憲法草案を読む」となっている。1部の全体の流れを読んだ上で、さらに本人の見解、批判を書くのだ。第一部だけだと、後に行くほど「有利」だ。初めに書いた人は皆から批判されっ放しだ。だから、この第二部がある。

まず橋爪さんが意見を書く。「第一部の憲法議論を検討する」

次に、景山民夫さんが、「国家が宗教を避けて通るのはやめませんか」

そして僕の、「勝った負けたの論争はやめにしよう」

で、終わり。伊藤成彦さんはない。注があって、「伊藤成彦氏は第一部リレー討論の最後のため、辞退されました」とある。ひゃー、謙虚なんだ。

これで本は終わりかと思ったら、何と、第三部がある。これが、何と呉智英さんだ。4人の討論を読んで、その高みから発言している。何と、「第3部。異見・憲法私案を嗤う」とある。わらう、かよ。やけに挑発的だ。それに、全体を見て、最後の最後に言ってるんだからズルイ。他の4人は全く反論も批判も出来ないからだ。

それに、何と何と、皆が真剣に討論してるのにかかわらず、こんなものは「安酒場での豪邸建築議論の滑稽」だと、笑い飛ばす。よくも言ったもんだね。こう言うんだよ。

〈この本の読者や執筆者には悪いんだけど、「憲法草案」だの「憲法私案」だのという出版企画はねえ、私は笑っちゃうんですよ。

だって、月給20万円ほどで社員寮暮らしの安サラリーマンたち

が家を建てるなら白金台の六百坪がいいか芦屋の八百坪がいいか、というんで、「北の家族」でチューハイ飲みながら喧嘩腰で議論しているようなもんでしょ（笑）。

討論だけならまだしも、家の設計図まで引いちゃおうっていうんだよ、酒に酔って朦朧とした頭で（笑）。こりゃ友達がいなくなるよ、精神が御不自由な奴じゃないかって思われて（笑）。おまえが憲法草案なんか作って何の意味があるのって、誰でも思うよね）

全く失礼しちゃいますよね。伊藤さんや橋爪さんに対して、「お前が作って何の意味があるんだ」はないでしょう。

でも、呉智英さん、これで終わりではない。初めにガツンと言っておいて、あとは真面目に憲法私案を述べる。だから、自分だって、「北の家族」に入り込んで、チューハイ飲んで「豪邸建設談義」をしているのだ。

まア、読んでみて下さい。呉さんは、自分も参加してるから、謙遜の意味を兼ねて自虐的に書いたのでしょうか。

ところで、伊藤成彦さんは、この中では最年長だ。後ろの「紹介」を見たら、1931年生まれだ。じゃ今年、73才か。とても見えない。若々しいよ。著書も沢山ある。『軍隊のない世界へ--激動する世界と憲法第9条』（社会評論社）が有名だ。僕も読んだ。他には、ローザ・ルクセンブルグについて書いた本や、ローザの訳書も多い。ローザ研究者といえば、京大助手だった滝田修が有名だ。伊藤さんは知ってるんだろうか。今度会ったら聞いてみたい。

(3)松尾貴史さんと、オレ・オレ・カフェをしました

さて、ここまで書いて、気分転換のために、他のサイトを見て、ネットサーフィンしたり、チャットをしたりした。そしたらいつの間にか天才芸人・松尾貴史のHPにおじゃましていた。あらら、私のことも出てるよ。例のパロディ「朝生」に出演した時の話だよ。その部分をちょい紹介してみっか。

〈新宿シアター・アプルでコント劇団「ザ・ニュースペーパー」スペシャルバージョンのゲスト出演。「朝まで生テレビ」のパロディを、ホンモノの上田埼玉県知事、漫画家の石坂啓女史、プロデューサーの滝大作さん、右翼の論客で元一水会代表の

鈴木邦男さんらと、劇団メンバーが入り乱れての討論会。テーマは「小泉支持・不支持」「イラク派兵賛成・反対」で、私は大島渚と浜田幸一役。定員オーバー707人の観客に、パロディという免罪符で実名を出しての政治家や団体の批評は胸が空く。上田知事は責任が重いらしく、口も重かった。

終演後、脇の「青葉」で中華料理と青島麦酒。観に来ていた元「殺人犯」佐川一政氏、美女らも加わり、新宿らしい四方山話。お開き後、珈琲王国で鈴木氏、佐川氏らとカフェ・オレ。注ぎ方がいつもより地味なので鈴木氏、いささかがっかりの御様子。右翼とは思えない穏やかなお人柄だ。以前にも青山円形劇場でやった「人格懷疑室」を観に来てくれていたのに驚く。私がもう忘れてしまっていたその時のネタを詳しく覚えてくれていたのに驚く。佐川氏も、私のことをマニアックにご存知でまたまた驚き）。

先週のこの「主張」でも書きましたよね。青山円形劇場でやったライブの話は、あれは「人格懷疑室」というタイトルだったんですか。それは忘れてましたが、「イエス・キリストの系譜」を暗誦したのにはビックリして、あれだけは今でも、ありありと覚えています。

ちょっと話は変わりますが、1月10日(土)、中野武蔵野ホールでレイトショーを見た。松林宗恵監督の「人間魚雷回天」だ。この上映前に松林監督と快樂亭ブラックさん(落語家)のトークがあった。会った時、ブラックさんが、「鈴木さん。松尾貴史とコーヒー飲んだんだってね。私にはコーヒー飲みに行こうなんて誘ってもくれないのに」と言ってた。え、ブラックさんとはいつもお酒飲んでるじゃないですか。(この日だって、終わって飲みに行った)。

でも、松尾貴史さんのことは何で見たんだろう。私のHPかな、と思ったが、どうも松尾さんのHPのようだね。お笑い芸人同士、いろいろとチェックしてるのかもしれない。

それにしても、松尾さんは凄いな。喫茶店の未来を透視しています。予告しています。だって、僕らが入った喫茶店は「珈琲貴族」だったんですが、もうすぐ「珈琲王国」になると思ったんでしょう。そう決めつけています。予知能力があるんですな、凄いです。次は王制を打倒して、「珈琲共和国」になるのかもしれない。

この喫茶店は、カフェ・オレが名物なんです。1メートル以上の高さからコーヒーとミルクを同時に、滝のようにしてカップに注ぎ込みます。名人芸です。その美技を見たくて皆、カフェ・オレを注文します。ところが、この日は、混んでいて人手が足りなかったのか、「熟練工」がいなかったのか、初心者のウエイトレスさんがやったので、落差が余りなかったんです。せっかく私が誘ったのに、申し訳ないと思い、松尾さんに謝ったとですよ。

(4)ロシア皇太子ニコライは何故襲われたのか

はい、では次はジンギスカンのお話。一水会で忘年会があり、新年会があります。どちらかだと思うんですが、宇田咲さんに聞かれたんですよ。「なしてジンギスカン焼の鍋は真中が高くなってるんですか？」って。だから教えてやった。

源義経は平泉に逃げて、そこで討死にしたといわれてるが、本当はそこを脱出し、北海道へ渡った。さらに大陸へ渡り、モンゴルに行き、ジンギスカンになった。源義経を音読みにするとジンギスカンになる。

モンゴルでは羊の肉ばかり食う。焼いて食おうと思ったが、鉄板がない。それで、兜の上で焼いた。上に羊の肉をあげると、あぶらが下に落ちてきて、ヘリのところでたまる。そこに野菜を置いて段差をつけて焼く。これがうまい。だから北海道では、ジンギスカンをやる時は、皆、兜型の鉄板の上で焼く。

「それで、具体的な質問ですが、源義経がジンギスカンになったというのは本当ですか」と聞く。

「本当だよ」

「客観的な証拠でもあるんですか」

「うるせえ。本当だと思うよ。本当だと思ったら楽しいじゃないか。ロマンだろうが」

そしたら、今度は別な方向から攻めてくる。

「じゃ、西郷隆盛は誰になったんですか」

「なに言ってんだよ。なんで“じゃ”なんだよ。前後がつながらんじゃねえか」

「ともかく、西郷さんは誰になったんですか」

「誰にもなんねえよ。城山で自決したよ。まア、もっとも、本当は自決しないで、ロシアに渡ったという説もあったけどな。そんなアホなと思われるかもしれないけど、結構信じられてたんだよ。だって、天津事件の原因はこ

れだからね。死せる西郷、生ける津田三蔵を動かす、だよ」

「えっ、大津事件というのは、警備の巡査の津田三蔵がロシアの皇太子ニコライに斬りつけた事件でしょう。死刑にすべきだという政府に対し、大審院長児島惟謙が反対して、〈司法の独立〉を守った事件でしょう」

「おう、おう。知っとるじゃないか。でも、司法の独立なんかよりも、こっちの方が重要だよ。このニコライと一緒に西郷が日本に帰ってくる、と言われたんだな。それで、恐怖にかられて津田はニコライに斬りつけたんだよ」

「ウッソーだ！」

まいったなー。私が今まで嘘をついたことがありますかいな。「本当だよ。洋の東西を問わず大事件なんて、案外と下らない動機で起きるんだよ。あの三億円事件しかり、あの赤報隊事件しかり。皆、考えすぎるから分かんないのじゃ」

「いや、私は信じません。学校でも、そんなことは教わりませんでした」と言う。仕方ない。証拠を見せてやっか。吉村昭の『ニコライ遭難』という名著がある。あれにも書かれているが、図書館に返したんで、今、手元がない。かなり知られてる話だから、他の本でもあるだろうと調べたら、あった。

合田一道の『日本史の現場検証。明治大正編2』（扶桑社）だ。この70ページにこう出ている。

〈実は、ロシア皇太子が来日する時、新聞は競って西南戦争で死んだはずの西郷隆盛がロシアに生存していて、皇太子に随行してくるという報道をしたので、国民の多くはまた戦争になると噂し合った。津田は西南戦争の時、別動隊第一旅団の伍長として従軍し、勲七等に叙せられたが、津田もまたこの噂を信じたようで、知人に、西郷が帰国して政府の要人となれば、勲章を奪われてしまうので困る、と話していたと言い、そんなことも襲撃の原因になったと考えられる〉

どうだ、おそれ入ったか！　と言ってやりましたよ。私は嘘をついたことはありません。私の言うことは全て本当のこと。当然のこと。常識なのです。だから、そんな正直者の私のことを一水会の顧問センス（common sense＝常識）と言ってるんですよ。わかったかいな。

では終わります。以上、中野山麓のみやま山荘からお伝えしました。

【お知らせ】

(1) 1月20日(火)は午後7時から、高田馬場のライブ塾で私が出ます。JR高田馬場の新宿よりに降りて、右に出、線路伝いに新宿方面に歩き4分です。

高田馬場4の2の36 宏陽ビルB1F

ライブ塾「TRICK STAR」です。03(5348)4767

(2) 1月14日の一水会フォーラムは佐山サトルさんでした。大熱演でした。佐山ファンが全国から来て、補助イスも足りなくて、床に座り込んで聞いている人もいました。詳しくは来週に。さて、2月の一水会フォーラムは、2月10日(火)の7時から、高田馬場シチズンプラザです。講師は百地章氏(日大法学部教授)で、タイトルは「憲法改正への基本的視点」です。

(3) 「アサヒ芸能」(1月22日号)に宮崎学さんが「建国義勇軍は右翼ゴッコや! 思想なき世論迎合をテロとは呼ばない」と書いてました。その通りですね。私がHPに書いた文も引用してました。ありがたいです。詳しくは来週に。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン/丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年1月26日

佐山サトルさんに刺激され、私もライブ塾で今年の「吠え始め」

(1) 「タコペ、ふたたび」。佐川一政さんも特別出演してくれた

一体、いくつ位から記憶があるのだろうか。という話しになった。「僕は3才位からだな。その前の記憶はない」と滝大作さん（コメディ作家）は言う。「私は2才から記憶がある」と女子大生が言う。「私は1才からある。もう裸で踊ってた」と沢口ともみさん（ストリッパー）が言う。「でも小さい時の記憶って曖昧ですよ。後で写真で見たり親に教えられたことを実体験と錯覚してる人が多いんです」とインテリの図書館員が言う。

「鈴木さんは？」と聞かれて、「オラは奥手だから幼稚園からの記憶しかない。電信柱にすがりついて、“行きたくねえ”と泣き喚いていた。あれがこの世に出生してからの最初の記憶だ。それ以前は全くない。多分、生まれた途端にオギャーと泣いて、電信柱につかまったんだろう。すでに幼稚園児になってこの世に生まれてきたんですよ」

「……」

そんな馬鹿なと思っても、そんなアンビリーバボーなことはあるんだよ。お釈迦さまは生まれてすぐに歩き出し、3歩あるいてその余り軽さに泣きで…。あっ、これは啄木の歌か。じゃお釈迦様は9歩だったかな。6歩だったかな。ともかく、「洞穴」から出て歩き、「天上天下、唯我独尊」と叫んだんじゃ。凄い。すでに言葉を知ってたんだ。

三島由紀夫は『仮面の告白』に書いてるが、自分の生まれた時を覚えているという。「嘘つき！」と思ったが、今は、いやいや、あの位の天才なら覚えちゃっても不思議じゃなか。と私は思いますね。

寺山修司はもっと凄か。胎内にいた頃からの記憶があるという。暗い中にじっと踞っていた。カミソリの刃のような、隙間から外の世界が見えた。カーテンの隙間を通して光が一筋入ってきたという。こういう光は、「レン

ブラント光線」ていうのですな。絵の好きな人には分かるでせう。

「お母さんがきっとまっ裸で日光浴をしてたんじゃないかしら。股を広げて」と図書館員が言う。「いや、病院の無影燈の光じゃないのかしら。病院で出産の時だったんよ」という定食屋のお姉ちゃん（ちなみに、無影燈とは、影の出ない灯りで、手術の時に使う。渡辺淳一に『無影燈』という小説があり、テレビでは「白い影」と改題されてドラマ化された。昔は田宮二郎が主人公のニヒルな医者演じていた。よかった。最近SMAPの中居正広演じている）。

「いや、洞窟に入ってきた光はストリップ劇場の光よ。しゃがんで、お客さんに見せてたのよ。だから、お客さんの眼と、中の寺山の眼がハッシと合っちゃったのよ」と沢口さん。じゃ寺山のお母さんはストリッパーだったのか。

…と、こんな話をしてたんですよ。1月20日(火)、高田馬場の「ライブ塾」で。私が講師で、テーマは、「夕刻のコペルニクス、ふたたび」だった。うたい文句はこうだ。

〈「SPA!」に長期連載された「夕刻のコペルニクス」がライブ版で復活。自らの身を切りながら、時代を斬る鈴木邦男が2004年の冒頭に日本の行く先を鋭く論ずる〉

「タコペ、ふたたび」と言ったって、連載が再開するわけじゃない。覆水盆に返らず（あっ、こんな難しい言葉を初めて使った。パソコンだから出来るんだ）。後悔先に立たず。ともかく、連載じゃなくて、「タコペ」の雰囲気、過激に喋ってくれ、ということじゃな。でも、この日は滝大作さんとトーク中に佐川一政さん（作家）が特別出演してくれた、熱弁をふるう。〈過激さ〉〈濃さ〉は全て佐川さんに持ってゆかれた。「今日はヘビーな話が聞けて、よかった」とお客さんは大満足だった。特に佐川さんがかかわった「大事件」。その後の「中事件」「小事件」についても、怒りを持って語ってくれた。ナマでしか聞けない話でありました。「タコペ、ふたたび」というより、「佐川さん、ふたたび」でしたね。

滝大作さんも刺激されてか、NHKにいた時の冤罪、謀略事件に巻き込まれた話を初公開。又、返す刀で大河ドラマをバツサリと斬る。「新撰組はガキに迎合した学芸会。ウソっぱちの軽薄番組。もう中止しろ！」と言う。これはそうだよな。まだ二回しかやってないが、批判・抗議の声がNHKに殺到している。近藤勇もカルイし、僕の好きな土方歳三もアホくさくて、カルイ。

やんなっちゃうよ。こんなNHKこそ、「反日」じゃないか（嫌な言葉だけど）。「征伐隊」はこういう奴こそ征伐しなくちゃいかんだろう。あっ、「国賊征伐隊」は捕まっちゃったか。

そうそう、彼らは、「NHK、朝日新聞社も襲うつもりだった」と自供したそうなの。おっ、大河ドラマに激怒したのかな、と思ったら、そうじゃない。

「NHK、朝日は北朝鮮寄りだ」という理由だ。何だ、そんなことか。それよりか、わが国の誇るべき歴史をねじ曲げる大河ドラマの方が問題じゃろうが。

去年やった大河ドラマ「武蔵」は最低の視聴率だった。その上、初回は黒沢明の「七人の侍」のパクリだったと、訴えられた。野盗に村を襲われ、それに対し武蔵が闘うが、雨のシーンといい、地面に刀を突きさしておいて、刀をかえるシーンといい、まったくの、ものマネ。こりゃ裁判でもNHKは負けるだろう。そして、その余波で、新撰組も中止になるじゃろう。こんなことなら昔やった大河ドラマを流す方がよか。井伊大老を主人公にした「花の生涯」とか、長谷川一夫の「赤穂浪士」とか。も一度見たいもんだね。

(2)自衛隊は皆、行きたいんだって (沢口証言)

さて、「ライブ塾」で佐川、滝さんと話をし9時半でお開き。その後は車座になって、お客さんたちと皆で話し合いました。沢口さんは、元自衛官だ。三島由紀夫の檄を聞いて愛国心に目覚め、「三島のあとに続くぞ！」と自衛隊をやめて、決起したそうなの。

でも、三島事件は33年前。その時自衛官だとしたら、22才位。じゃ今は55才か。とても見えない。若い！

「失礼な。三島事件の時はまだ生まれてませんよ」と本人は言うが、まアこれは謙遜。生まれてはいたんでしょ。4年間、自衛隊で国の為に闘い、辞めてから渋谷を歩いていたら、「踊らない」と、カッコいい男に声をかけられた。踊りに行くのかと思ったら、何のことはない。ストリッパーにされた。それで、10年間ストリッパー。イラクには3回も行った。そんで、「反戦ストリッパー」と呼ばれている。

アメリカのイラク攻撃には反対だ。その限りでの「反戦」だ。アメリカとは闘いたいという「好戦派自衛官」だ。去年2月、僕らがイラクに行った時も、一緒に行った。皆のまとめ役だった。

「あの時は、日本から行った人は勝手な行動ばかりで、私は大変だった。デモや集会には私と鈴木さん位しか出ないし、他は勝手に遊びに行っ

いる。「何しに来たんだ」と向こうの人には言われるし…」と一年前を思い出して、悔し涙にくれていた。まア、とにかく、皆、好き勝手にフラフラと遊び歩いてたな。夜中だって、街をほっつき回ってる。勝手にタクシーを雇って、遺跡見学に行く奴もいる。それだけ、自由だし、平和だったんだよ。今じゃ考えられない。米軍が来てから、とても歩けないし、まだ戦争状態だ。

沢口さんは、でも、このイラク行きで、「仕事」が親にバレた。「自衛隊をやめてから出版社に勤めてる」と親には嘘をついていた。ところが、テレビや週刊誌で「反戦ストリッパー」と大々的に出たもんだから、バレてしまった。芸名で踊ってたのに、顔まで出たから親は気が付くわさ。

この正月に帰省したら大変だったそうな。針の筵だったそうな。大声で怒鳴ってくれるんならまだいいが、冷たい雰囲気だけが一家を支配していた。口もきかない。ただ、沢口さんが風呂から上がった時、バツタリ合った母は、全裸の娘を見て、「まあ、その体で…」と言って、絶句したそうな。ドラマチックですね。文学ですね。

「まあ、その体で…」。この後は何と言おうとしたのでしょうか。「まあ、そんな華奢な体で激しい踊りをして、かわいそう」か。「まあ、その体を、ギラギラした男共の飢えた眼差しにさらして、何と、不憫なことよ」なのか。母親の万感の思いが、この一言に籠っていますよね。あるいは、こうかもしれません。「まあ、そんな体でストリッパーで稼げるの？　じゃ、私だって…」。ウーン、これかもしれませんね。謎です。今度、お母さんに電話をして真相を取材してみましょう。

「でも自衛隊は皆、イラクに行きたいんですよ」と沢口さんは意外なことを言っていた。最近、自衛隊のOB、OG会に呼ばれたんだそうな。そして、「イラクに行きたいという人が多すぎて、ふり落とすのに大変だ」と言っていたという。「それは自衛隊や自民党の意図的な宣伝だろう」と言う人もいるが、違う。自衛隊に入ったのなら、やはり自分を主張したいし、認知されたいんだ。危険は承知の上だ。その気概も分かるね。

僕は自衛隊派遣には反対だし、親日的なイラク人を敵に回してはいけないと思う。しかし、政府決定で決まったら、震災地でも、カンボジアでも、イラクでも行って働きたい、という自衛官の気持ちも本当だろう。それは偉いと思う。僕も自衛官だったら、多分、志願するね。そんな、アンビバレントな気持ちになっちゃうよ。

前にも書いたと思うが、三島由紀夫は、自衛隊を半分に割っちゃえと言っていた。一つは「祖国防衛隊」で、これは専守防衛だ。どんな名目でも外国

には出さない。核も持たない。徴兵もしかない。この国を守り、忠誠の対象は天皇だ。

一方、もう半分は「国連警察軍」にあげちゃう。国連には常備の警察軍はないが、日本人が中心になり作る。各国の思惑、国益、利害に左右されない〈中立〉の軍隊を作る。これは国際平和を守るのが役目だ。だから日本のことは忘れる。天皇に忠誠をつくす必要もない。「日本人」であることも忘れて、世界の平和を考えるのだ。ちょうど、衆院、参院議長は党籍を離脱して、〈中立〉な立場で議事を行う。あれと同じだ。

そんなことを三島は33年も前に考えていたんだ。凄いやね。「国防は必要か否か」という論争を世の人々はしてた時に、三島はここまで見ていた。

「日本を守るのは当然だ。しかし、自国さえよければそれでいいのか、といわれる時代がくる。その時に、今の自衛隊をそのまま外国に出すのは危ない。それよりも、自衛隊と別に、国連警察軍に参加させた方がいい」と言っていたんだ。あの時、三島の声に耳をかたむけていたら、今のような政治の混乱、体たらくはなかった。

さて、自伝の話だ。と、唐突に話は変わる。いや、本当は唐突ではない。三島は自伝で、生まれた瞬間の記憶があると言った。寺山はそれに対抗し(?)ムキになって、「おらなんて、胎内の時からの記憶がある」と言った。さて、私の自伝だ。いつか書くとして、どこから始めたらいいのだろうか、と悩んだ。

幼稚園の時に、「いやだ、いやだ」と泣き叫んで電柱にしがみついているシーンから始めるのか。これじゃ、情けなか。だから、三島、寺山を超えて、さらに前から書き始める。

以前、「前世占い」に見てもらったら、「前世は枝豆だ」と言われた。景山民夫さんは「鈴木さんの前世は北条時宗だ」と言っていたのに、大きな違いだ。

じゃ、時宗として、モンゴルと闘っていた頃の話から書き始めようか。いやいや、枝豆の方がいいな。

まア、だから現世でも枝豆が好きなんだろう。「俺に是非を説くな。枝豆が好き」という句もある位だし。

ある学者によると人間は二種類に分けられるそう。な。「枝豆が好きな人と嫌いな人」。そして、「枝豆の好きな人に悪い人はいない」。うん、これは言える。枝豆は「畑の肉」と言われる。タンパク質を肉ではなく、豆でとろうとする。だから肉食の人よりも思想が平和的になる。簡単なことだが真理

だ。

でも、格闘技は好きだな。いやいや、格闘技は、「喧嘩を昇華したもの」だ。下らない争いをしないために、心の平和を得る為に人はルールのある格闘技をするんだ。

(3) 憧れだったね、力道山。そしてタイガーマスクだよ

では、格闘技の話だ。小学校、中学校の頃は相撲ばかりやっていた。今と違い、大相撲は全盛、子供たちは学校の廊下で休み時間は、相撲ばっか、やっていた。月刊の相撲の雑誌も買ってもらい、むさぼり読んでいた。だって、ラジオしかないから、雑誌で見るしかないんだ。

僕が小学校の時に、テレビが開局になる。でも、初めて見たのは中学3年の時、仙台に来てからだ。親類のおじさんに寿司屋に連れて行ってもらい、そこで見た。プロレスをやっていた。力道山だ。それが、プロレスとの初めての出会いで、それ以降、ずーっと、プロレスは見続けている。

しかし、プロレスを「読む」ようになったのがタイガーマスクが出現してからだ。特に、人気絶頂のタイガーマスクが突然、引退した。一体、何が起きたんだろうと思った。それで、「東京スポーツ」や「週刊プロレス」を買うようになった。「見るプロレス」は同時に、「読むプロレス」になった。

そして、いつの間にか、自分もプロレスについて評論を書くようになった。タイガーマスクはUWFに移り、その後はシューティングをつくり、今は掎圏道（せいけんどう）を主宰している。

佐山サトルの本名に戻って、シューティングを作った頃だった。格闘技雑誌の取材で、初めて佐山さんに会うことになった。その頃は、「プロレス評論家」と自称していたし、月刊『プロレス・ファン』に毎月書いていた。プロレスの単行本も5冊出していた。「あれっ、右翼でも同姓同名の人がいますよ」と言われた。「迷惑ですね」なんて返事していた。

さて、佐山さんに会った時だ。月刊『プロレス・ファン』の名刺を出した。「プロレス評論家の鈴木邦男です」と言ったら、即座に、「あっ、鈴木さん。朝生でいつも見てますよ」と言われて驚いたのだ。「朝生は好きで毎回見てますよ」といって、政治の話をする。自分の中の「タイガーマスク像」が変わった。

そういえば、時々政治的な発言をするなど、気づいた。「天皇陛下に見てもらえる格闘技を作りたい」と、どこかで発言していた。凄いことを言う。大相撲、柔道、剣道…のように、天覧試合のできるような、本物の格闘技を

つくりたいという意味だ。プロレスでは恥ずかしくてお見せ出来ない。そう思ったのだろう。

「佐山さんは愛国者なんだ」と思っていた。前田日明さんだって愛国者だし、小林よしのりさんもそうだ。三人とも、僕が知り合った頃は、そんな話など余りしなかったのに、あれよあれよという間に僕を追い越して、熱烈な愛国者になってしまった。

特に佐山さんだ。掣圏道を作った頃からそうだ。ちなみにHPを見たらいい。驚くよ。思想新聞「天壤無窮」を発行し、大東亜戦争の意義を説き、アメリカの占領政策によって日本がいかにか骨抜きになったかと嘆き、国家精神を取り戻さなくてはならない、と叫ぶ。そのために、思想親衛団体「タイガー・ユージェント」を発足させ、他に「秘密組織」を持ったという。



そんな佐山さんを、一水会では呼んだ。1月14日(水)、7:00から、シチズンプラザだ。講演テーマは「極右革命を語る」

こりゃ、人が随分集まるだろうなと思ったら、HPを見て、全国から佐山ファンが来た。いつもの一水会フォーラムの顔ぶれとはかなり違う。北海道や名古屋からも来ていた。補助イスはいくら出しても足りなくて、もういいやと、床に座って聴く若者もいた。

始まる前に、下の喫茶店で打ち合わせをした。「捕虜収容所をどこに作るか、そんな話からしましょうか」なんて言っている。不穏だ。過激だ。反日分子は逮捕して、捕虜収容所に入れちゃうのかな。それをやるのがタイガー・ユージェントか。と、怯え半分、期待半分で心待ちにしていたら、講演が始まると、ガラリとムードは変わって、学術的な話になった。人間の意識

と無意識の話。世界の歴史の話。それがずっと続く。格闘家の話というよりも大学の先生の講義だ。黒板に世界の地図を書いて説明する。そして、なぜ日本が明治維新をやらなくてはならなかったか。大東亜戦争を闘わなければならなかったか。について、縷々語る。

そして、佐山流憂国、愛国について語る。2時間近く、ぶっ通しで話をした。僕も佐山さんには何回か会っているが、こんな形で2時間も大系的に話を聞いたのは初めてだ。よかった。感動した。終わってからも、佐山さんを囲んで、憂国論議に花が咲いたのでありました。

【お知らせ】

(1)次の一水会フォーラムは2月10日(火)の7:00から。場所はシチズンプラザです。

講師は百地章先生(日本大学法学部教授)で「憲法改正の基本的視点」です。ぜひ、いらして下さい。今、論議されている改憲の現状について、又、何をどう改めたらいいのか、について話してもらいます。

(2)3月3日(水)7:30から、ロフトに出ます。元社会党の衆議院議員の上田哲さんとトークします。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン/丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年2月2日

今年のセンター試験は「反日」的か？

(1)世界史で「強制連行」が出たので、大騒ぎ…

今年の大学入試センター試験の問題が「反日的だ」と騒がれている。世界史の試験で、「強制連行」が出たからだ。こんな、ありもしなかったことを、あたかも事実であったかのように試験問題に出すとはおかしい。偏向している！ と産経新聞は噛みついた。又、産経新聞（1月22日）の「正論」では藤岡信勝氏（東京大学教授）が、厳しく批判している。その見出しが何と、「拉致解決妨げるセンター試験問題」。こんな間違った問題を出す奴がいるから、拉致は解決しない。北朝鮮のいい分を代弁したような問題じゃないか、と言う。そして「『強制連行』設問は採点から外せ」と言う。

もう少し詳しく説明する。1月17日に行われた世界史の試験で、「日本統治下の朝鮮」に関連して、次の中から正しいものを一つだけ選ばせる問題が出題された。

- (1)朝鮮総督府が置かれ、初代総督として伊藤博文が就任した。
- (2)朝鮮は、日本が明治維新以降初めて獲得した海外領土であった。
- (3)日本による併合と同時に、創氏改名が実施された。
- (4)第二次世界大戦中、日本への強制連行が行われた。

正解は(4)とされている。「これは、極めて不公正で不適切な設問である」と藤岡氏は言う。

ちなみに、センター試験の問題は翌日の全国紙に全て発表されている。その時、「正解」も公表される。しかし、どれだけの人が読むのか知らないが、二日間にわたって、膨大な量の問題を全ての新聞に掲載する意味があるのか、と疑問視する人もいる。紙の無駄遣いと批判する人もいる。

もう一つ、ちなみに、各大学の入試では「解答」は発表されない。一部、例外的に発表する大学もあるが、ほとんどの大学は発表しない。しかし、大学毎の「過去問」や「赤本」には、「解答」がついてるじゃないかと言う人

もいるだろう。あれは、その出版社で考えた「正解」だ。だから、（たまにあるが）、本によって「正解」が違ふことがある。

さて、この世界史の問題に戻る。藤岡氏が言うには、朝鮮総督府や「創氏改名」は、当時その言葉が使われており歴史的な事実だが、「強制連行」は次元が異なるという。

〈「強制連行」は政治的な糾弾の機能を伴う造語であり、その語の使用者による歴史解釈を示す用語であって、歴史の事実を示す言葉ではない〉

それは、「歴史の解釈」を示す用語であって、「歴史の事実」を指し示す言葉ではないという。さらにこう言う。

〈日本政府は徴兵による戦時中の労働力不足を補うため、「国民徴用令」によって工場などに労働力を動員したが、朝鮮半島についても、1944年9月から徴用が実施された。当時は朝鮮半島の人々も日本人であり、徴用は日本人に平等に課せられた。国家による合法的な行為であった。だから(4)を「第二次世界大戦中、日本本土へ徴用された」とすれば、それは歴史的事実を述べたものであり、設問として何の問題もない〉

〈「徴用」を「強制連行」とするのは不当な言い換えであり、虚構である。「従軍慰安婦の強制連行」説はこの虚構の上に建て増しされたものである〉

ウーン、藤岡氏の言い分も分かる。「徴用」はあった。そして、徴用された人の中には、「俺は朝鮮人だから不当に徴用された」と思った人もいただろう。又、これは「強制だ」「不当だ」と感じた人もいただろう。でもそれは、感情的、政治的言葉であって、「歴史的言葉」ではないという。じゃ、「強制徴用」とでも書けばいいのか。その場合でも藤岡氏は、「いや、国家の合法的行為だから、強制はなかった」というのか。

この「正論」が載った1月22日(木)は河合塾コスモの授業の日だったので、これをコピーして生徒に配った。そして皆で考えた。センター試験を世界史で受験した人もいた。彼はやはり(4)を正解にしたという。そして言う。

「たとえば、少し(4)は変だとしても、他は絶対的間違いなんだから(4)を選ぶしかなかった」と。

「エッ、僕なんて(1)～(4)まで全部正しいと思ったけどな」と言ったら、彼が教えてくれた。

まず(1)だ。「朝鮮総督府が置かれ、初代総督として伊藤博文が就任した」。正しいようだが違う。初代の総督は寺内正毅陸軍大臣なのだ。

(2)「朝鮮は、日本が明治維新以降初めて獲得した海外領土であった」

これも正しそだが違う。初めて獲得した海外領土は台湾なのだ。

(3)「日本による併合と同時に、創氏改名が実施された」これも正しそだ。だが、「同時に」ではない。かなりたってからだ。

つまり、(1)から(3)は歴史的に見て「絶対的間違い」があるから除外される。そうすると、(4)しか残らない。用語が必ずしも正しくないとか、政治的な用語だという批判はあっても、(1)～(3)のような「歴史的に見て絶対的間違い」ではない。だから、(4)をとるしかない。

藤岡氏は、これは、正解ではないのだから採点から外せ、という。しかし、今見てきたように、論理的に考えて、(1)～(3)は間違いだと分かり、不十分ながら(4)にした人を、外すのは不公平ではないか、と僕は思う。(1)や(2)や(3)に丸をつけた人と、苦慮しながらも、「(4)しかない」と考えた人を同じにするのはおかしいだろう。

でも藤岡氏は、それこそ受験生に「踏み絵」を踏ますものだという。そんな大袈裟な問題じゃないだろうと思うが。さらに藤岡氏は「踏み絵」だけでなく、さらに突っ込んで、(4)だって、「引っかけ設問」と思う人もいたはずだ、と言う。

〈例えば、時期についてみただけでも、センター試験の問題が前提としているような、「第二次世界大戦中」だけの出来事を指すとは限らない。日韓併合後の朝鮮半島から日本への移動をすべて「強制連行」としてとらえ、「在日＝強制連行の犠牲者」とするイメージも盛んに吹聴されてきた。

こういう言説を信じていた受験生が、設問の(4)を引っかけ設問であると判断することも大いにありうる。つまり、どちらの立場から、この問題は「正解なし」と判断されうるのである。入試問題は立場の如何を問わず万人が認める知識に限定されるべきである〉

ただ、現代文にしても、「完全に正しい」のはなくて、他が、「絶対的に間違っている」から、これをとるしかない、という設問はある。いくらでも

ある。だったら、これも、(4)をとるしかない。「第二次世界大戦」にやられたのは事実だ。その前にもあったかもしれない。その点で、「不十分」かもしれないし、用語も厳密ではないかもしれない。しかし、「100%間違い」とはならない。その点、(1)は「初代総督」、(2)は「初めて獲得」、(3)は「併合と同時に」が、歴史的にみて、「100%間違い」だ。つまり、歴史の設問だから、そうすると(4)をとるしかない。そう考えた人を、採点から外したら、悪平等ではないのか、と僕は思う。

だが、藤岡氏は、そんなことではなく、こんな発想が「拉致問題を妨げている！」と糾弾する。結論部分を紹介する。

〈誤った不確実な知識を、若い人の頭に、政治宣伝的にたたき込む害毒が、将来に及ぼす影響は計り知れない。こういう虚偽の概念の横行を放置してきたことが、日本人を知的に拘束し、不要な贖罪意識を生み、拉致問題の解決を四半世紀にわたって放置してきた根本原因である。

大学入試センターは、この問題が欠陥問題であることを認め、「正解なし」として採点から除外する措置を速やかにとるべきである〉

(2)国語の方がもっと問題だ。梅崎春生が出た

さて、これに対し、センター入試をやった文科省は、どう回答するかだ。ウーン、そうだね、「今の右傾化の風潮に敢えて“待った”をかけるために出したんだ」とでも言ったら凄いね。「バカヤロー。強制連行はあったじゃないか。文句あんなら公開討論会をやろう！」とでも言えば面白いけどね。でも、まさか、言わんדרうね。

でも心の中では、少しは思っテんじやないかな。と、私は勘ぐるね。だって、「世界史」だけじゃない。「国語Ⅰ」の方が僕は気になった。何も設問が「偏向」してるとか、歴史的な問題があるわけじゃない。でも、「もしかして…」と思ったのだ。

「国語Ⅰ」の第1問は評論文だ。松永澄夫の「哲学の覚醒」が出た。僕が注目したのは第2問だ。梅崎春生の小説「赤帯」が出たのだ。世界史では「強制連行」が出て、国語Ⅰでは梅崎春生か。世の右傾化の流れに抗する人々がいるのかな、と思った。

でも、これだけでは分らんかもしれん。梅崎のこの小説は、終戦後、ソ連の捕虜収容所に入れられ酷使された日本兵の話だ。ただ、ソ連の看守の中にも、「赤帯」と呼ばれる男のように、いい人もいて、別れる間際に、ご馳走してくれた。そんな思い出を書いている。「赤帯」というのは、いつも赤い帯を鉢巻き代わりに頭にしていたのだ。そして、彼自身も、政治犯らしいのだ。

山崎豊子の「不毛地帯」も同じテーマを扱っているが、これは過酷な捕虜生活を、これでもか、これでもかと描いていた。看守と囚人の心温まる交流なんてない。だから梅崎の小説が「親ソ的だ」などと言ってるのではない。どんな地獄の中でも、心やさしい人はいたろう。

でも、ここで言いたいのは、そんなことではない。梅崎春生と聞いて何か思い出さないだろうか。彼の代表作は、「桜島」だ。そして、小林よしのりさんが、この小説のことを、徹底的に批判していたのだ。梅崎は、大学を出てすぐに軍隊に行く。しかし、そこで見たものは、軍隊の現実だ。例えば、学徒兵でも傲慢な奴はいる。特攻隊でも鼻持ちならん奴もいた。…と書いたのだ。戦争が終わってすぐ、昭和21年（1946年）に書いたのだ。そして梅崎は昭和40年（1965年）、50歳で亡くなっている。

だから、もう、「忘れられた作家」に近い。しかし、「桜島」は、敢然として光を放って残っている。僕もこの小説を読んだ時は、頭の中がパニックになった。もう、信じられるものは何もない。そう思った。まさに、コペルニクス的転回だった。

その昔、僕がバリバリの右翼だった頃は、日本軍は全員が〈神兵〉だと思っていた。住民を虐殺したとか、強姦したとか、そんなことは全て左翼のデッチ上げだと思っていた。軍隊内部でリンチがあったというのも嘘だと思っていた。ところが、どうも〈神兵〉ばかりではなかった、と分かりだした。でも、理想に燃えて大東亜解放の為に闘った兵隊さんは多かったんだと思った。それに、少なくとも学徒動員で行った人々。さらに特攻隊、この人たちは、かわいそうでもあるが、素晴らしい人々だ。日本を守るために、学業半ばにして出征し、又、散っていった。この人達の遺書を読むといつも涙が出る。

つまり、学徒動員と特攻隊。彼らだけは永遠に〈聖域〉なのだ。どんなに左翼全盛の時でも、この二者だけは、「犠牲者だ。かわいそうに」と言われ続けた。「日本は侵略戦争をした。日本の軍隊は許せない！」と言う人も、アジアの国々の人だって、この二者だけは批判しない。

左翼の人は、戦争反対を言いながら、学徒動員と特攻隊だけは擁護していた。この人々は〈神〉だと皆、思ったのだ。しかし、梅崎だけが、この「タブー」に踏み込んだ。そして、「いや、彼らの中にも傲慢な奴や、どうしようもない人間もいた」と言った。これにはショックだった。全く考えてもみなかった。エッ！ そんな馬鹿な！ と思った。

冷静に考えてみれば、確かに、彼らも人間だ。学徒兵の中にも、気持ちが荒み、暴れた人だっただろう。鼻持ちならん人もいただろう。でも、こんなことは僕らは一度も考えなかった。又、特攻隊についてだって、「小さなエピソード」は漏れ聞いていた。例えば、20歳くらいの若い健康な人間が死ぬのだ。病気でも何でも無いのに。「何故だ！」とって刀を振り回した青年もいたとか。そんなことは読んだことがある。しかし、ほとんどの人々は生きながら〈神〉になり、静かに神々しく敵艦に突っ込んでいった。そう思っていた。

まア、少々の例外はあったとしても、日本民族の悲しい美談に汚点をつけることはないだろう、と思っていた。それは、僕らの心がやわで、弱いのかもしれない。又、どっかで、戦争の正義を信じたいのかもれしない。だから、梅崎の本を読んだ時にはショックだった。

センター試験に梅崎春生が出た。これで梅崎を初めて知った人も多いだろう。いや、その前にも、彼の「突堤にて」が大学入試に出たことがあるな。しかし、入試では、それ位だ。このセンター入試で初めて知り、「おっ、じゃ又出るかもしれないし、彼の作品を読んでみよう、と思う受験生が多く出るはずだ。そしたら、「桜島」に必ず出会う。そして、戦争のタブー「学徒動員と特攻隊」の重いテーマに突き当たる。さあ、どうする。世界史の「強制連行」どころの問題ではない。

皆も、これは考えてほしい。新潮社の「新潮現代文学」（全80巻）に梅崎は出ているが（第26巻）、一番読みやすいのは、「ちくま日本文学全集」だ。全50巻あるが、文庫版の文学全集だし、読みやすい。僕は全50巻を全て読んだ。1巻が1000円だし、手頃だ。梅崎春生の巻には、次の小説が入っている。

蜷（しじみ）。輪唱。Sの背中。突堤にて。春の月。ボロ家の春秋。赤帯の話。眼鏡の話。桜島。法師蟬に学ぶ。チョウチンアンコウについて。

衝撃の代表作「桜島」が入っている。センター試験に出た「赤帯の話」、大学入試に出た「突堤にて」も入っている。又、「ボロ家の春秋」もいい。

この本の「解説」は中野翠がやっている。「『寸止め』の極意」という題

で。主に、「ボロ家の春秋」について、そう書いている。「桜島」にもそれは言えるかもしれない。しかし、彼女の趣味なのか、「ボロ家」だけを中心に書いている。梅崎といたら「桜島」だろう。それに触れずに解説を書くなんて…と、もどかしかった。中野の「解説」そのものも「寸止め」だ。だったら、俺に書かせてくれたらよかったのに…と、分不相応にも、傲慢なことを考えた。

本の見返しのところに梅崎の略歴が出てたので紹介しよう。梅崎春生（うめざき・はるお）1915～1965福岡の生まれ。五高より東大国文科にすすむ。卒業後、召集を受け、暗号特技兵として九州の基地に配属される。戦後、このときの体験にもとづく「桜島」を発表。ついで「日の果て」、短篇「蜆」、ほかに「輪唱」「Sの背中」など寓話風のユーモラスな作品がある。昭和29年の「ボロ家の春秋」で直木賞。ノイローゼやアル中のため不安な状態のなかで「幻花」執筆。その直後に死去した。

本当は、皆にこの本を読んでもらうのが一番いい。でも、少し紹介しておこう。「桜島」では特攻隊について書いているが、「眼鏡の話」の中で、学徒兵について、こう書いている。

〈学徒兵についても、戦後いろいろの談義もあり、たいへんなギセイ者のように受取られているが、もちろんギセイ者にはちがいないが、ああいう環境に放り込まれて、人間のもっとも悪質な部分を露呈したのも、相当にいたはずだと思う。私の体験からでもそれははっきり言える

今ふり返ってみても、たとえば農村出身の兵士の持つエゴイズムよりも、インテリのエゴイズム、いや、インテリというより学校出、学校教育を受けた者のエゴイズム、権威へのよりかかり方や利用のしかた、その方がずっと厭（いや）らしく、あさましい感じがしている。私も学徒兵であったから、なおのことやり切れなく感じられるのかも知れない〉（昭和30年12月）

これは同じ学徒兵だった梅崎だからこそ言えることだ。当事者だけが持つ、迫力だし、リアリティだ。ただ、ではどんな点で「エゴイズム」「厭らしさ」「あさましさ」を感じたのか。それは書いてない。いくらでも書きたいことはあったのだろう。しかし、「寸止め」にしている。自分も学徒兵だったから、暴くにはしのびないのか。

では最後に、問題の「桜島」だ。ちよっと長いが引用する。

〈坊津の基地にいた時、水上特攻隊員を見たことがある。基地隊を遠く離れた国民学校の校舎を借りて、彼等は生活していた。私は一度そこを通ったことがある。国民学校の前に茶店風の家があって、その前に縁台を置き、二、三人の特攻隊員が腰かけ、酒をのんでいた。二十歳前後の若者である。白い絹のマフラーが、変に野暮ったく見えた。皆、皮膚のざらざらした、そして荒（すさ）んだ表情をしていた。その中の一人は、何か猥雑な調子で流行歌を甲高い声で歌っていた。何か言っては笑い合うその声に、何とも言えないいやな響きがあった。

（これが、特攻隊員か）　ちょうど、色気付いた田舎の青年の感じであった。わざと帽子を阿弥陀にかぶったり、白いマフラーを伊達者らしく纏（まと）えば纏うほど、泥臭く野暮に見えた。遠くから見ている私の方をむいて、

「何を見ているんだ。この野郎」

眼を陰しくして叫んだ。私を設営隊の新兵とでも思ったのだろう。

私の胸に沸き上がって来たのは、悲しみとも憤りともつかぬ感情であった。この気持ちだけは、どうにも整理がつかねた。この感じだけは、今なお、いやな後味を引いて私の胸に残っている。欣然と死に赴くということが、必ずしも透明な心情や環境で行われることではないことは想像は出来たが、しかし眼のあたりに見たこの風景は、何か嫌悪すべき体臭に満ちていた。基地隊の方に向かって、うなだれて私は帰りながら、美しく生きよう、死ぬ時は悔いない死に方をしよう。その事のみを思いつめていた。

---〉（昭和21年9月）

読んですっきりする文章ではない。楽しい文章でもない。しかし、こうした事実もあったんだろう。ズシンと重いものが体に入り、気になって仕方ない。そんな色々なことを考えさせられる文だ。

なお、産経新聞（1月25日付）を見たら、センター試験、世界史の「強制連行」をめぐって、「新しい教科書をつくる会」は文科省に公開質問状を提出するという。

しかし、拉致問題が遅々として解決しないからといって、「お前らが拉致問題を妨げている！」と喰ってかかるのは、何やらやつ当りのような気がす

る。入試の歴史問題は歴史問題だけで論議し、解決したらいいだろう。

【お知らせ】

(1)月刊「創」は2月6日発売です。僕は佐山サトルさん（初代タイガーマスク）と愛国心について書きました。

(2)2月10日(水)は7：00p.m.から高田馬場・シチズンプラザで一水会フォーラムです。百地章氏（日本大学教授）が講師で、「憲法改正の基本的視点」です。

(3)3月3日(水)は7：30p.m.からロフトプラスワンで元社会党の国会議員、上田哲さんとトークです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年2月9日

銘記せよ。永倉万治という偉大な作家がいた！

(1)一度だけ、会ったことがあるんだよ、青山で

その日の午後、人妻とホテルで落ち合うことになっていた。昼さがりの情事。そう思うと体が震えてくるぜ。

いいですね。「体が震えてくるぜ」の「ぜ」がいいですね。「何言っとるんじゃ。自分の文を自画自賛してどうするんだ」って。別に自画自賛しとりません。それに、これは僕の文章じゃありません。こんな文章には憧れてますが、とても書けません。こんな情事にも憧れてますが、チャンスがありません。

これは僕の好きな作家・永倉万治の『ポチャポチャの女』（実業之日本社）から引いたのです。この本の中には、いくつかの短編が収められています。「海に見える部屋」「手配師」「プーケット島」「ポチャポチャの女」「ガールフレンズ」（今、気が付いたけど、フレンズと複数になってますね。いいですね）。…などが入ってるんです。最初に引用した文は、「手配師」の出だしです。

僕は永倉さんとは一度だけ会ったことがあります。そして、それが最後になりました。永倉さんは、2000年10月5日、亡くなられたのです。52才の若さでした。

会ったのは、永倉さんが病気に倒れる前の、まだ元気な時でした。あれっ、そうだったかなと思い、パソコンで検索してみた。永倉さんの詳しいプロフィールが出てきた。

〈ちり紙交換、放送作家、広告プランナー、などを経て作家活動に入る。「東京恋愛事情」にて脚光を浴びる。テレビドラマ化となる。文化放送のコメンテーターをこなすなど、男性誌に数多く連載、前途洋々のさなか、平成元年3月10日、JR中央線四谷駅ホームにて脳溢血にて倒れる〉

でも、これで終わったのではない。これからが作家・永倉万治の本領発揮、奇跡の復活なのだ。

〈生還するも、右半身マヒ・失語症により「永倉さんアナタ、手紙ならばなんとか書けるようになるけど、小説は無理」と言語療法士のヒトに言われ、「カッ!」となり、死にものぐるいのリハビリをつづける。そして、結果は倒れる前よりも倒れてのちの方が作品数が多くなる

「大熱血闘病記」が月刊カドカワに連載されるや、再び奇跡を起こす。のちに文庫化にあたり「父帰る」として発刊。NHKドラマ化となり、全国の多数のリハビリ患者希望の星となる。〉

ここまで読んできて、「あれっ!　じゃ、僕が会った時はリハビリ中だったんだ」と思い出した。

僕が初めて「朝まで生テレビ」に出たのは平成2年(1990年)2月23日の「徹底討論・日本の右翼」の時だった。その次は、翌平成3年(1991年)4月23日の「徹底討論・憲法」の時だった。この時は、川崎でテレビを見ていた野村秋介さんが、タクシーで駆けつけ、「皆、きれいごとばかり言って。聞いてられない」と入ってきて討論に参加したのだ。この時は西部邁、小林節さん達が出ていたが、本当は、僕に対して一番怒っていたのだ。

「何を青臭い理想論を言ってるんだ。ダメじゃないか」と叱られた。

ちょっと話が外れた。なぜ「朝生」の話をしたかだ。永倉さんと会った時のことを思い出そうとしている。その日、新聞か雑誌の取材を受けていた。多分、赤報隊事件(1987年)について取材を受けてたのだろう。事件の話が終わって、何かのキッカケで、「僕は永倉万治が好きで、小説は全部読んでますよ」という話をした。そしたら記者が、「そうですか。奇遇ですね。実は今日、永倉さんの出版記念会があるんですよ。行きませんか」と言う。

「行っていいんですか。ぜひ会いたいですね」となって、そのまま会場に向かったのだ。

そういえば、病気をして、今、リハビリ中だと言ってたな。奥さんが隣りで支えるように立っていた。さらに永倉さんの妹さんがいて、「あっ、鈴木さん。朝生で見てますよ」と言ってくれたのだ。そして、闘病のこと、看病の話などを聞かせてくれたのだ。

だから、会ったのは「朝生」に僕が出た後なんだ。こんな時、日記やメモをつけてればいいんだが、つけてない。いつガサ入れがあるかもしれない

し…。「○月○日、赤報隊と会う」「○月○日、赤報隊と一緒に朝日新聞社を襲撃する」なんて書いてあったら、一発で逮捕だ。でも、わざとそんなことを手帳か日記に書いていて、ひそかにアリバイを作っておく。裁判になったら、「あれは小説でした」と主張する。証人もいるし、アリバイは認められ釈放。国家に賠償を請求し、僕はお金持ちになる。うん、このくらいやってもよかったかな。でも、一回は捕まっちゃう。それに計画どうり行かなかったら、「灰色」のままで一生刑務所にぶち込まれる。やっぱ、変なメモは残さなくてよかった。

しかし、あの日、永倉さんは元気だったな。右半身マヒ・失語症だというのに、立って皆に挨拶していた。もうその時はワープロで原稿を書いていたのだろう。それに、立教大学の時はレスリング部にいたんだ。肉体的にも強い。プロレスも好きで、本にはよく、プロレスの話が出てくる。『フルネルソン』（講談社）なんてタイトルの本もある。楽しくて、面白い本ばかりだ。僕は、大体全部読んでる。そして、かなり影響を受けている。ヒャー、こんな見方、発想があるのか、と驚くことが多い。

たとえばですね、もてない中年男が二人酒を飲んでいる。「どうしてももてないのかね」「なんで女たちは僕らを相手にしないのかね」とボヤいている。そのうち一人が、キッと目を上げて、言うんですね、キッパリと。「こんな不平等はない。もし、今度、女に生まれかわったら、誰にでもさせてやる」と。偉いですね。博愛の精神ですね。そして、思わず笑っちゃいました。

でも、「もし」って言うのは、絶対に出来ないと分かっているから安心して言うんだよね。本当に、女に生まれかわれたら、やっぱり選ぶでしょうよ。あるいは、タダじゃ嫌だとか。又、死にそんな人を前にして、「かわれるものなら、かわってやりたい」と言う人がいるけど、これだって同じだよ。かわれないって分かっているから言うんだよ。卑怯だよ。

さて、永倉万治だ。小説を書く時、主人公は一人称か三人称だ。つまり、私小説のように、「私は…」と書く。これが一人称だわいな。あるいは、三人称にして、「永吉譲二はその日の午後、人妻とホテルで落ち合うことになっていた」と書く。二人称（君、あなた）が主人公になることはない。ジャーナ専の文章演習でもこう言って教えている。これが小説を書く上での定石だ。

しかし、永倉さんの小説には二人称の主人公がよく登場する。「キミは今、目覚めて、さて、歯を磨こうかと思っているんだよね。それから人妻と

ホテルで情事なんだよね」…といった感じで小説が始まる。もっと身近に、「今キミはこの本を読んでいるんだよね、さて、喉が渴いたので台所に行ってお茶を沸かそうかと思ってるんだよね」と書くこともある。「アレ、アレ、俺が主人公なんだ」と読んでる人は驚いて、読み進む。

これは、かなりの高等テクニックだ。僕なんかマネして紹介しても、リアリティがない。でも、永倉さんだと、本当に自分が行動しているように思ってしまう。うまいんですよ、だから。

(2)実は11年間、奥さんが、「執筆活動の手助け」をした

再び、永倉さんのプロフィールに戻る。〈1948年、埼玉県志木市の洋品店に生まれる。本名、長岡恭一。立大ではレスリングをやり、1年休学して、欧州をひとり旅したこともある。プラハの春を体験した。東由多加主宰の「東京キッド・ブラザーズ」に参加する。平成元年（1989年）3月10日、脳溢血で倒れた。〉

ということは前に書いた。その後、リハビリをして、多くの小説を書く。しかし、

〈平成12年（2000年）、10月5日 午後11時25分。脳幹出血のため埼玉県和光市の国立埼玉病院で永眠。52才〉

その後、このプロフィールにはこんなことが書かれている。

〈「エイヤッ」と合気道のかまえをしたまま、亡くなった由。東由多加とは対照的な一瞬の死。横井庄一さんの呼びかけに答えでしまったのだろうか。まだまだ書いてもらいたい方だった〉

一体誰がこのプロフィールを書いたんでしょうね。このプロフィールのあとに、67冊の著作が紹介されている。一番新しいのは『ぼろぼろ三銃士』（実業之日本社）だ。会社をリストラされた中年の三人組のお話だ。457ページのぶ厚い本だ。巻末の「初出版」のところに断り書きがある。これは北日本新聞などの地方紙に連載されたものだ。

「00年4月より12月にわたって順次連載されましたが、同年10月5日、永倉万治氏が急逝したため、絶筆となりました。

282ページ4行目からは、有子夫人が書き下ろしの形で書き継ぎ、完成させたものです」

エッ、こんなのありか、と思った。だって、282ページの3行目で、「絶

筆」「未完」とか書いてお終いにするんじゃないだろうか、普通なら。夏目漱石の『明暗』だって、そうになっている。（もっとも、水村美苗という人が勝手に（漱石に相談もなく）、『続・明暗』を書いている。そして、漱石と一緒に新潮文庫の同じ棚に並んでいる）。

だから、この『ぼろぼろ三銃士』は永倉萬治、有子の共著になっている。ちなみに、永倉万治だったのに後から萬治に改名した。わずらわしいから「万治」で統一して私は書く。

そうそう、問題の282ページ4行目だ。こう始まっている。

〈どいつもこいつも老人のように背中を丸めて地べたに座り込み、お互い言葉を交わすこともなく、携帯電話のディスプレイを見つめている。「シャッキリせんか!」といたかったが、今夜の鯨岡はそれどころではない〉

これが永倉有子のデビューになるわけだ。この本は初版が2001年12月だ。その後、永倉万治のことを書いた『万治クン』（集英社）を出している。これは2003年10月5日に出た。

「どいつもこいつも」から書き始めているのか、奥さんも。と奇妙な感慨を持った。というのは、永倉には『どいつもこいつも』（新潮社・1998年）という本もある。

前に、若い女の子と待ち合わせをしていた。映画館の前だ。ギリギリになっても来ない。そのうち映画が始まってしまった。それでも来ない。やっと来たと思ったら、「ゴメン、ゴメン。でも本読んでたんでしょ」と言いやがる。そして僕の本を見て、「ギョエ!」と叫んだ。それが、『どいつもこいつも』だった。偶然だけど、本に怒鳴られたと思ったんだね。いや、本のタイトルが僕の怒りを代弁してると思ったんだね。

他に、僕の気に入ってる本をあげるとですね。

『黄金バット』（講談社）

『武蔵野S町物語』（ちくま文庫）

『ああ、結婚』（集英社）

『人の気も知らないで』（実業之日本社）

『アルマジロの日々』（幻冬舎）

『大青春』（幻冬舎文庫）

『男はみんなギックリ腰』（集英社）

『四重奏カルテット』（角川書店）

『アナタの年頃』（講談社文庫）

『屋根にのぼれば、吠えたくなくて』（角川文庫）

『この頃は、めっきりラブレター』（講談社文庫）

『東京デート漂流』（講談社）

『インポランス』（講談社）これには「リストラ三銃士」ならぬ「インポ三銃士」が出てくる。多分、本人の実話だろう。

まだまだあるが、書き切れない。2001年に出した『これでおしまい』（集英社）という本もある。永倉万治として一人で書いた最後の本になったのだろう。永倉さんの一周忌を前にして出された。解説は奥さんの有子さんが書いている。

さて、これからが本題だ。永倉さんは大した人だよな。倒れる前より、倒れた後の方が著作が多いなんて。レスリングをやってたし、合気道もやっていた。死ぬ瞬間も、病魔と闘い、投げ飛ばそうとして、「エイヤッ」と気合いをかけて絶命したという。まるで宮本武蔵のようだ。…と思った。倒れた後も、ワープロを習い、30冊以上も書いたんだ。まあ、『ぼろぼろ三銃士』だけは途中で絶筆になったけど、凄い人だ。それにしても、すぐに、書き継いだ奥さんも凄い。しかし、よく、書けたもんだ。全く小説を書いたこともない人なのに…。

と思っていた。これは謎だった。そして、永倉有子の『万治クン』（集英社）を読んだ。読んで驚いた。「謎」は解けた。しかし、複雑な心境だ。かえって、謎のまま心に残っていた方がよかったように思う。よく作家が亡くなると、妻や子供や弟や妹が「思い出」を語って本を出す。（三島由紀夫の場合は、お父さんが書いていた）いいこともあるが、失望させられることもある。『万治クン』は、よく言えば、彼の人間性をもっと身近に感じられた。悪く言えば、彼に対し持っていた「不屈の男」のイメージが壊された。あるいは、読まなかった方がよかったのかもしれない。

永倉有子は万治クンの1才上だ。年上妻だ。1947年東京生まれ。立教大学英米文学科卒業。じゃ、同級生だったんだ。卒業後、万治さんと結婚。そして、

〈制作スタッフとして「東京キッド・ブラザーズ」ヨーロッパ公演に参加。出版社に10年勤務した後、専業主婦に。

89年、萬治氏が脳溢血に倒れて以来、11年間執筆活動を手助けし、その数は30冊を超える。萬治氏の絶筆となった小説『ぼろ

『ぼろ三銃士』を書き継ぎ、共著として完成させ、注目を集める)

「エッ？」と思った。「執筆活動を手助けし」とは何だ。原稿を清書してやったのかな。でも、ワープロを使ってたんだ。じゃ、資料集めなどで協力したのかな、と思った。しかし、そんなことではない。その程度の「協力」ではない。

リハビリをしている永倉さんから、また、小説を書きたいから手伝ってくれと頼まれる。清書してくれと、頼んでるんだな、と思った。ところが…。

〈最初、私の役目はミミズののたくったような文字を判読して、清書することだと思っていた。しかし、作業を始めてすぐに、それだけでは済まないことがわかった。彼の文章は、失語症のためはかなり乱れていた。「てにをは」のまちがいは、まだいいとしても、突然、まったく理解不能の言葉が出てきたり、長い文章の始めと終わりが一致しなかったりと、このまま編集者に見せれば、「再起不能」の烙印を押されてしまう恐れがあった。問題はどこまで私が直すかだ。

……

私は、思い切って断りなしに、原稿に手を加えてみた。こんなダメだといわれたら元に戻せばいい。さいわい、彼は何もいわなかった)

(3)ここまで暴露しちゃっていいのでせうか おいおい、ここまでバラしてしまっていていいのかよ、と思った。永倉だって何か言いたかっただろう。でも、言えないやね。それにしても、これを読む限りじゃ、プロットはあったとしても、病気以降はほとんどは彼女が書いてたことになる。病に倒れてから30冊書いたというが、永倉有子が書いたのか。「おっ、万治さんも、がんばってんな。ワープロだから書けんだよな。偉いな」と思っていたけど、実は奥さんが書いていたんだ。でも、そんなことは全く気づかなかった。それだけ夫婦は一体となっていたんだろう。もしかしたら、奥さんの方が文章がうまかったのかもしれない。

『万治くん』の初めの方で、有子さんが、万治くんの19才の写真を見つけるシーンがある。薄い眉と粘土にナイフで切れ込みをいれたような目。そし

て小さめの口。

〈この顔を見て、私は「埴輪みたい」と笑っていたのだった。
写真の中の19才の彼に向かって、私はそっと語りかける。

「君はまだ知らないんだね。これから君の前に広がる世界のこ
とや、君の身に起こるたくさんの驚くべきこと。そして君がいま
恋をしている女の子が、君の物語を書くことになるなんてこと
も、何も知らないんだね…〉

ウーン、うまいよね。これを読むと、万治くんはとっても優しい男だっ
た。27才の時、有子さんは、万治くんがいるにもかかわらず、他の男が好き
になってしまった。「今年の桜は、どうしてこんなにきれいなのか」と、有
子さんが言うと、

「それは、有子が恋をしてるからだよ」と万治君が答える。ギクツとして、
うるたえる有子さん。そして、「よかったね。好きな人ができて」と言う万
治君。皮肉でも何でもなく、素直に言うんだ。「いいの?」と聞く有子さん
に答える。

〈「いいさ。俺の望みは有子が幸せでいることなんだから。な
んというのかな、娘を思う父親の心境ってそこかな。好きな人が
できたら嫁にやりたいって思っているよ。本当だぞ」

そういうと、永倉は小さい子にするように私の髪をグシャグ
シャとかき回した。〉

こんな大きな愛って凄いですよね。なかなかこんな心境にはなれない。そ
の大きさに負けたのか、有子さんは、又、万治くんの胸に戻るのです。ま
ア、こういう万治くんの大きさだけを書いてくれると、我々ファンとして
は嬉しいんだけど…。でも、こんな掟破りの暴露もあって悲しい。

〈女に関して永倉が清廉潔白だなどと、思っていない。アム
ステルダムの裏窓の女をはじめ、外国に行けば必ずその手の女
のお世話になっていたことは知っている。国内でも市場調査と称し
て結構遊んでいて、一度など私に性病を伝染（うつ）したことま
である。あの時は平身低頭して、一緒に病院通いをしてくれと頼
んだのだ。東池袋の雑居ビルにある性病科に通った時の屈辱感。
普通の女房なら激怒してダイヤの一つも買わせるところを、私は

寛容にも中華料理で許してやった。しかもランチで。それも、これも、遊びだと知っていたからだ)

ところが、「遊び」でない女がいたんだ。「遊び」の部分だって、ばらしちゃ、こりゃルール違反だろうよ、と思っちゃうね。そこまでバラされたら、万治クンもかわいそうだろうが…。

万治クンが入院した直後、事務所の整理に行く。そこで親密な女の写真やら手紙を見つけて、有子さんは激怒するんだ。万治クンの小説に出てくる女性は良子とか、啓子とか、子のつくありふれた名前ばかりだ。ところが、ありふれているが一度も出てこない名前がある。それは万治クンの愛人と同じ名前だったからだ。「平凡な名前で、そのくせ絶対に使わない名前が二つあった」とあるから、愛人は二人いたのか。

その後、又、そのことを思い知らされ、怒り心頭に達して、こう書くんだね。

〈「信じられない……バカヤロー」

私は手紙を破り捨て、住所録の名前と電話番号をマジックで黒々と塗りつぶした。

「どうせ頭がパーになってるんだ。思い出せるものならやってみなさいよ」

自分でイヤになるくらい残忍な気持ちだ。入院直後に感じた恋しい気持ちなど、きれいさっぱりどこかへ吹っ飛んでいた。〉

怖いねー、女は。と思っちゃった。相手は病人じゃないか。「どうせ頭がパーになってるんだ…」なんて、ひどいことを言うね。(そう思っただけか。それにしても残酷だ)。

大体、小説家なんだ。遊んだって、本気になったっていいだろうが。彼はユーモア小説、恋愛小説を書いていた。不倫もあれば、浮気も書く。やってみなくちゃ分かんないこともある。それが嫌なら小説家の女房になんかならなきゃいい。明治、大正の小説家なんて、こんなもんじゃない。すさまじいよ。と言っても、今の世の中じゃ無理かな。

プロフィールの最後にはこう書かれている。

「まだまだ書いてもらいたい方だった。

創作が枯渇しない方だった。

どうしても、このまま終わらせたくない。

語り継ぎ、読み継いでもらいたい」

皆さんも、読んでみて下さい。そして語り合ってください。

【お知らせ】

(1)2月10日(火)7:00PMから一水会フォーラムです。高田馬場シチズンブラザです。百地章氏(日大法学部教授)の「憲法改正の基本的視点」です。改憲問題の本質を語ってくれます。ぜひ、おいで下さい。

(2)3月3日(水)は7:00からロフトです。元社会党の国会議員の上田哲さんとトークです。ロフトの案内を見たら、こう紹介されてました。

「上田哲VS右翼理論家。

イラクが日本に上陸する日」

あの田中角栄が「最も苦手な論客」と恐れた上田哲が、緻密な年表で〈自衛隊がイラクに行くのではなく、イラクによる軍事開国(小泉)〉という歴史的大転換を斬る!

ついに50%を超える国会の“世襲議員”の実名資料を全国初公開! 連日街頭演説の「首相への10円玉運動」「国民投票制」「闇に葬られた最高裁との10年戦争」など。

新右翼からの反論は? 火の出る討論こそ望むところ!

[出演] 上田哲 [Guest] 新右翼の鈴木邦男(一水会)

(3)NHK教育テレビで、北方健三の「三国志の英雄たち」(人間講座で毎週月曜夜10:25~)が始まりました。面白いし、勉強になりますよ。特に「三国志博士」と言われてるビビンパ咲ちゃんは、ぜひ見たらよかとでしょう。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン/丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年2月16日

愛国心なんかなくてもいい。愛校心、愛郷心さえあればいい

(1)オラは昔、「名探偵コナン」と呼ばれていた

「クニオは、すげー読書家だったよな。家に遊びに行ったら、コナン・ドイルがズラーっと並んでたもんな。小学生でコナン・ドイルを読んでもる奴なんていねがったぞ」と石井君に言われた。エッ、そうかよ、と驚いた。小学、中学では僕なんて一冊も本を読んだことがないと思ってたのに。コナン・ドイルといったらシャーロックホームズだ。オラは小学生の時から読んでたのか。

1月23日(金)に、湯沢中学の同窓会に出たんだわさ。去年の6月には地元の湯沢市(秋田県)でやったけど、今度は、在京の同窓生だけが集まった。大森の居酒屋だ。そこで、石井君が、言ったんだ。僕は子供の頃は本なんて読んでない。だから、今になって、ホームズやルパンを読んでもるのに。そう思っていたら、「いや、お前は小学、中学と探偵小説ばかり読んでた」と言うんだ。モーリス・ルブランの「怪盗ルパン」も読んでいたらしい。「それによ、ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』も読んでたよな。湯沢で、ヘッセなんて読んでるわらし(子供)は誰もいねがったぞ」とも言われた。「数学も出来たんだよな。中学生でもう微分、積分をやってたもんな」。ホントかよ。信じられん。まア、昔は理数系の頭だったんだけどな。

「習字も絵もうまかったな」と他の人たちが言う。「だから、物書きになっただか?」と。「習字がうまいのと、文章を書くのは、違うべよな」と教えてやった。

でも、でも、小学生でコナン・ドイルを読んでもるなんて、知らなかった。新しい「自分発見」だった。しばらく皆と話し合っているうちに、少しずつ記憶も甦ってきた。探偵小説好きで、自分でも探偵小説らしきものを書いたようだ。又、湯沢で事件があると、僕が解決してやった。うん、そんなことがあった(ような気がする)。

それで皆に、『名探偵コナン』と呼ばれてたんだよな。オラのことを、「金田一君」と呼んでいた人もいたよ。だから今、アニメでやってる『名探偵コナン』や『金田一少年の事件簿』は皆、オラの少年時代の話なんだわさ。そう思って見ると懐かしい。

さて、同窓会だ。会場になった大森の居酒屋の主人も湯沢中学出身だ。30人ほどが集まって夜遅くまで飲んだ。でも、知らない人が多い。小学校、中学校と一緒にいる人もいるが、全く見たことのない人もいる。話を聞くと、三関中学とか、西馬音内（にしもない）中学の人もいる。「あれ？ 今日湯沢中学の同窓会じゃないの？」と聞いたら、「なに言ってんだ。湯沢高校の同窓会だべさ」と言われた。じゃ、間違ってたのか。でも、幹事の堀君から案内状をもらったんだ。堀君に聞いてみた。

「そんなごと、どうでもいいべえ。同郷の人間だから、いいんだ」と、実にアバウトだ。去年の6月に湯沢中学の同窓会が地元・湯沢でやった。その時、堀君が僕に言ったらしい。「湯沢高校の同窓会を時々、東京でやっている。クニオのおべだ（＝知ってる）奴もいっから、来たらいいんでねえが」と。そこでオラは、「よがす（＝いいとも）」と答えたらしい。そんな会話を交わしてたなんて全く、ほあげっと（＝忘れる）してた。

そうか、なんでもいいやと飲んで、食っていた。もう退職した人もいるし、子供や孫の話ばかりしてる。話に未来がない。展望がない。昔話ばかりだ。30分位は、そんな過去の話もいいが、それ以上になると苦痛だよな。

湯沢市は人口3万位だ。小学校は二つあった。湯沢東小学校と西小学校だ。僕は東だ。しかし、これは取り壊されて、面影もない。中学は湯沢中学ひとつだ。でも、それも取り壊された。それに何と、その跡地に養老院が建っている。そのうち湯沢中学出身者が皆、入るのだろうか。そうすると、事実上、湯沢中学の〈再建〉〈復興〉になるのかもしれない。悲しい再建だ。老人性痴呆症で、「うわー、中学生になった」と喜んで、廊下を走り回るのかもしれない。毎朝、校歌を歌ったりして。中学生になり切って、廊下で相撲とったり、メンコしたりするんだろう。婆さんのスカートめくりする奴もいるだろう。だったらいっそ、名前も「湯沢中学校」にしたらいい。老人ホーム「湯沢中学校」だ。

その湯沢中学を出たら、高校に行く。45年前のままの中学の話をしている。間違わんように。湯沢北高が女子、南高が男子だった。その後、南高には女子も入れるようになった。そして湯沢高校と名前も変わった。大森で

やった同窓会は、この湯沢高校の同窓会だった。だからオラには何の関係もない。といっちゃまずいか。知ってる人はいる。だから堀君もわざわざ呼んでくれたんだ。

「クニオは右翼だよな」と堀君。「オメエの本は随分読んでっ。『夕刻のコペルニクス』も三冊とも読んでるし」と言う。エッ、本当かよ。うれしいね。まーまー、酒飲みねえ。スシ食いねえ。江戸っ子だってねえ。「んでねえ。湯沢だ」。

と話していたら、「んでも、今は、右も左もねえって境地に達したんだよな」と言う。こっちのことをちゃんと知ってる。「それは多分、サンボを習いにロシアに行ったべ。あの時から変わったんだべ」と言う。そうなのか。知らなかった。仕方ねえから、オラも、「んだべなー」と相槌を打った。ロシアの人だって同じ人間だ。イデオロギーなんてなんぼのもんじゃない、とクニオくんは思ったらしい。その辺から「脱右翼」が始まったという。

「それに、ロシアに行って湯沢を見ただよ」とオラは言った。湯沢は秋田美人の産地だ。雪が降っから、オナゴは白くなる。寒いから顔付きも、キリッとなるし、整う。ロシアも同じだ。歌ってる歌も同じだ。ペチカとかカチューシャとか、ソリがどうしたとか。エッ、ロシア民謡が日本に伝わっただけだって？ そうかな。でも、言葉だって同じだ。前にこのHPで書いたけど、「はい」は秋田弁で「んだ」。ロシア弁で「ダー」。「ちやいまんねん」は秋田弁で、「んでねっと」。ロシア弁で「ニエット」。全く同じだ。イエスとノーが同じなんだ。一番重要な意志表示が同じということは、他は推して知るべしだ。（面倒だから例はあげないが）。

「んだが」と堀君は半信半疑だ。「んだよ。だから、湯沢の市長は共産党じゃねえが」とオラは強調した。湯沢も完全にロシアになったんだ。それに、この赤い市長さんは鈴木さんという。鈴木は日本一、多い姓だ。つまり、鈴木は〈日本〉そのものなんだ。「鈴木をみれば日本が分かる」といわれるくらいだ。

「フーン」と堀君。「んだども、ロシアに行って、右翼が治っただが。んでも、愛国心は必要だと思うべー」と理論闘争を挑んでくる。こんな所で「朝生」なんかやってられんよ。だから、突っ放すように言ってやっただよ。

「ウルセー、愛国心なんかいらねえ。湯沢を愛する郷土愛さえあればいい。だからここで、同窓生が集まって酒飲んでんだろうが。国旗、国歌もいらねえ。湯沢中学の校旗と校歌さえあればいい！ よし、皆で校歌を歌お

う！」。そして、オラは立ち上がり、歌いはじめた。皆も、渋々、唱和した。

(2) 「湯沢中学校校歌」の恐るべき大予言

そうそう、湯沢中学校はなくなって、跡地に老人ホームが建ってるといったけど、じゃ、中学はどうなったかだ。別の場所に湯沢南中学と湯沢北中学に分かれて建っている。南北朝に分裂したんだわさ。それで、たわむれにパソコンで両校のHPを見てみた。そしたら何と、オラたちの校歌が、湯沢南中の校歌として、そのまま受け継がれているのだ。やはり、南朝の方が正しかったのだ。オラたちは楠正成だ。と思って感涙にむせんだのでありんした。その感涙ついでに、校歌を紹介しよう。最後に、楽譜も紹介したから、歌えよ。感涙のおすそ分けだ。まず1番だ。

1. 紫匂う 鳥海を

遥かのあなた ふりさけて

我等は競う 春と秋

ああ風雪を 堪え凌ぎ

勉学一路 励みゆく

若竹 湯沢中学校

♩ = 112

mf むらさきにおうちょうかいを
はるかのあなたふりさけて
われらはきそうはるとあきあ
あふうせつきたえしのぎべん
がくいちらるはげみゆくわ
かたけゆざわみなみちがっこう

いい歌だろうが。ちゃんと歌えよ、皆も。私が首相になったら、これが国歌になるんだから。「君が代」はもういいだろう。それと、鈴木姓は日本一多いし、「鈴木を見れば日本が分かる」といわれてるから、日本人を全部、鈴木姓にする。創氏改名だな。皆、鈴木姓なら、日本人全てが親類になる。

そうしたら喧嘩もなくなるし、犯罪もなくなる。国の名前も「日本国」から、「鈴木国」にする。うん、これはいい。そして「神州清潔の民」と昔から言われてるんだから、日本全土を「禁煙ゾーン」にする。タバコを吸いたい人は外国に行って吸ってもらう。それに、「生類憐みの令」を復活する。特に鳥や牛は食っちゃいかん。今回の鳥インフルエンザや、BSE（狂牛病）は、そのための前兆だわいな。別に僕がやったわけじゃないが、〈神の計画〉は着々と進んでるんだわさ。

「生類憐みの令」には絶滅寸前の〈左翼〉も入れる。新左翼、共産党も助けてやる。左翼になる人がいなければ、人工的に養殖し、孵化させる。やはり、いいライバル、いい敵がいなきゃ人間は向上しない。僕らだって、全共闘と闘ってきたんで、鍛えられた。今のように、反米か親米かをめぐる、保守派の内々ゲバなんて、レベルが低くて、やってらんねえよ。

そのことを校歌では、「我等は競う春と秋」と言っている。いい敵を見つけ、競え！　と言ってるんだ。なぜ、「春と秋」かって？　夏は夏休みだわいな。冬は雪だから、何も出来ん。そこで「風雪を堪え凌ぎ」だよ。雪に堪えて、春にはグンと、勃然と伸びるから若竹なんだよ。では次。

2.緑の風に 水光る

雄物の流れ 清らかに
我等は鍛う 身と心
ああ双肩に 国興す
理想を担い 進みゆく
若駒 湯沢中学校

ほらほら、見なせえ。「君が代」なんかいらねえ。校歌さえ歌ってれば、立派な日本人になれるんだ。その証拠に、「ああ双肩に国興す」だもん。中学生に向かって、「この国を興してくれよ！」と〈日本〉は頼んでるんだ。泣かせるじゃありませんか。勃然と立って若竹になった僕らは若駒（若い馬）になって奮い立つんだよ。そして勃然決起し、若い牝馬と交わり、子供を一杯つくれ、と言ってるんだ。神州男児をたくさん産んでくれ！　と中学生に言ってるんだ。気がつかなかったけど、この歌を毎日、毎日歌っていたんで、体の中にしみこみ、後の「愛国運動家クニオ君」が生まれたんですな。愛国者クニオ君誕生まで、あと7年だ。そう思うと実に偉大な校歌だ。では、ラスト。

3.茜の雲に 昇る陽に

希望の翼 うち振りて

我等は望む 高き空
ああ友愛の 花かざし
平和の道を 拓きゆく
若鳩 湯沢中学校

ヒャー、これも〈予言〉に満ち満ちておりりゃすね。「希望の翼 うち振りて」というのは、後にクニオは〈右翼〉といわれるようになるという予言なんだ。しかし、早大では、いい敵・左翼に出会い、闘い、そこで成長する。そしてロシアにサンボを習いに行き、脱右翼をする。「右の翼も、左の翼もない。みんななか翼（よく）」「混浴（混翼）」だと悟る。これがホントの「希望の翼 うち振りて」だ。

そして、火炎瓶やスパイ査問事件などの非合法闘争を経て、「絶対平和」の運動に辿り着く。それが、「平和の道を拓きゆく」だ。去年の2月は、〈反戦平和〉〈戦争反対〉の為にイラクに行った。昔は「右翼暴力団」といわれたのに、この時は、「反戦活動家」になった。正・反・合でアウフヘーベンしたんだよ。そして私は平和の鳩になったんだ。

…と、そんなことをこの校歌は50年も前に言い当て、予言してたんだ。すごい歌だ。日本の国歌として、これほどふさわしい歌はない。最後の「若鳩 湯沢中学校」の所だけ、「若鳩 鈴木国」と変えればいい。「君が代」は、役目が終わった。ご苦労さまでした。

(3)センター試験に、もう一つ、「洗脳」問題があったんだって… フー、疲れた。これは「ノストラダムスの大予言」以上の予言だ。大変なものを発見しちゃった。それに、「鈴木国」建国のための改造法案まで書いちゃった。オラの持てる全エネルギーを使い果たした。だから、今週はこれでおしまい。

と思ったけど、ちょっと附録で、どうでもいい話をする。今年のセンター試験は「偏向している」「反日的だ」と騒いでる人がいる、という話を前にした。「世界史」の問題に「強制連行」が出たので、産経新聞は大々的に取り上げ、批判していた。「正論」欄で藤岡信勝さん（東大教授）も厳しく文科省を追及していた。公開質問状も出した。そして、2月2日の「正論」欄では再び書いていた。

〈「強制連行」設問に開き直る文科省〉と。さらに驚くべきことに、同じ日の産経には、「いや世界史だけでない、現代社会にも偏向、反日設問があったと、噛みついた人がいた。林道義（東京女子大教授）で、見出しも凄

まじい。「入試を洗脳手段にするな」。まず「世界史」の「強制連行」にふれて、許せないといい、もう一つの「偏向問題」を取り上げる。

〈いま一つのイデオロギー的偏向出題は「現代社会」の第一問である。その問題文の中には「女性議員の多い国」を「先進国」とし、スウェーデンでは「外国人にも参政権を認めている」として、それがよいこと、正しいこととして書かれている。〉

これは許せないという。今、〈争点〉になっているものであって、「正しい」と判断し、入試に出すのは「洗脳」だという。そうだろうか。

〈また国会議員の中で女性が占める比率を示すグラフを出して、その国別の順番を当てさせる設問もある。その順番では日本が最下位であり、日本が男女平等で最も遅れているという偏見を受験生に刷り込むことになりかねない〉

でも、実際「最下位」なんだから仕方はない。又、北欧・ヨーロッパの国々では、女性の議員を全体の「1/3以上」などに決めている所もある。つまり、（日本もそうだが）人口の比率では、男女が半々なのに、女性議員が少ない。これでは女性が代表されてない。だから、古い慣習、制度、金に関係なく、女性が出れるようにする。そして1/3なり、半数なりを「女性枠」にする。つまり法によって強制的に「平等」にするわけだ。これは進んだやり方だと思う。そこまで〈強制〉的にやらなくても、女性議員は増えている。日本はその点、遅れている。これは事実である。「洗脳」でもないし、「刷り込み」でもない。

又、18才から選挙権・被選挙権を認める国は、かなり多い。サミット参加国でも、この方が多い。日本は遅れているのだ。ではなぜ、日本はいまだに「20才」にこだわっているのか。何のことはない自民党の党利党略のためだ。世界中では、18才で認めている。しかし、日本でそうしたら、社会党、共産党にドッと票がいく。これが怖くて「18才以上」を認めなかっただけだ。しかし、今は事情が変わってきた。右傾化で、保守的、愛国的な若者が急増した。今、「18才以上」にしたら自民党票がグンと増えるだろう。少なくとも社民党、共産党にはいかない。だから、自民党の方から、「18才以上に認めよう」と言ってくるよ。その点を林は理解してないのじゃないだろうか。

林道義は著書に、『主婦の復権』『フェミニズムの害毒』『家族破壊』な

どがある。著書を見ただけで、思想傾向が分かる。フェミニズムがとにかく嫌いなんだろう。こう言っている。

〈これらの出題の偏りは、おそらく出題者の中に自虐史観を持った者やフェミニストが加わっており、その者たちが党派的に自分たちの思想を押しつけるために入試を利用した結果であろう。高校生や受験生に対する思想的洗脳を行うのに、入試を悪用するとは言語道断である〉

又、最後には、ダメ押しとして、こう言う。

〈出題者に選ばれたという特権を悪用して、党派的偏向的な内容を入試問題の中に忍びこませるという行為は、卑怯であるばかりか、出題者としてのモラルを欠いた犯罪と言いうるだろう。関係者の猛省を促したい〉

「犯罪」とは凄いことを言う。それほどの問題かよ、と思うがね。

そんなことよりも、2月11日の新聞を見て驚いた。どこの朝刊も、「刑法改正」の問題を大きく取り上げていた。建国記念日に、こんな問題が1面トップだ。

野沢太三法相は10日、法制審議会（法相の諮問機関）の部会で、重大犯罪への罰則強化を内容とする刑法・刑事訴訟法改正要綱案を諮問した。それによると、

- (1)有期懲役の最高を現行の20年から30年に引き上げる。
- (2)殺人などの公訴時効を15年から25年に延長する。
- (3)集団強姦罪・同致死傷罪を設ける。

「犯罪抑止」「凶悪化に対処」するためだという。しかし、死刑を廃止して、そのかわり刑罰を強化するというのなら、まだ分かる。でも、死刑はある。無期もある。それで個々の刑期を延ばすのでは意味がない。逆効果だ。

又、時効は15年でいい。何も25年に延ばす必要はない。世界の趨勢にも逆行する反動的なものだ。警察も弱く、マスコミの力も弱かった時代にも時効は15年だった。今は、警察力が比較にならないほど強大だ。それにテレビなどが、警察の「下請け機関」になって、逃亡犯人の映像を流し、情報提供をよびかける。「一億総岡っ引き」時代だ。こんな時に、25年にしようなんて、何を考えてるのだ。これこそ偏向だし、警察国家化だ。

又、外国に行った場合は、「時効は停止」する。つまり、よど号グループ

のように、外国に行ったら15年はおろか、30年以上たっても時効にならない。でも、他の国では、「たとえ外国に行っても時効は停止しない」と決めてる国が増えてきた。これだけ、交通も、マスコミも発達し、警察同士の連絡、協力も出来るのだ。昔とは違う。そうしたことも考えずに、ただ、「厳罰に処せ！」だけではダメだろう。

警察は人手不足だというが、嘘だ。公安なんて、余っている。ゴロゴロしている。これを全廃して、刑事警察に回したらいいのだ。そうしたら問題はすぐに解決する。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年2月23日

野村秋介さんが「民兵組織」を！ 武器調達係が裁判で証言

(1)現金輸送車襲撃犯が「実は…」と供述した

「野村秋介さんが『楯の会』のような民兵組織を作ろうとしてたそうですが、本当ですか」

と、何人かの新聞記者から聞かれた。まさか、と思った。でも、僕が知らないことがあるのかもしれない。それで、野村さんの筆頭門下生だった蜷川正大さんに聞いた。さらに、記者にも蜷川さんを紹介してやった。本当はどうだったのか、側近者から聞いた方がいい。

野村さんは、三島さんを尊敬していた。思想・文学を愛していただけでなく、その生き方を信奉していた。「三島のように生き、三島のように死にたい」と言っていた。事実、そのような生き方だったし、そのような死に方だった。

だが、三島と同じように『楯の会』のようなものを作ろうとしていたとは…。驚きだった。それも、全く奇妙な所から、この話は出てきたのだ。

去年の秋、産経新聞が1面で、デカデカと「スクープ」した記事があった。95年に東京八王子のスーパーで起きた事件で、バイトの女子高生ら3人が射殺された、その事件の犯人が判明した、という記事だった。あの事件のことは覚えている人も多いだろう。金庫を開けさせようと、3人を縛ったが、3人とも番号を知らされてない。それで犯人は無残にも3人を殺して逃げた。そして犯人は捕まってない。

ところが、02年11月に、名古屋で現金輸送車を襲って、逮捕された男がいた。中村泰（ひろし）被告だ。現在73才だ。ところが、彼は貸金庫に拳銃や実弾、さらに青酸カリまで隠し持っていた。彼が持っていた拳銃が、八王子のスーパー3人殺しの時に使われたものではないか。というのだ。「そこまでは確証がない」と他の新聞は書かなかったが、産経だけは、「スクー

ブ」として、大々的に報道した。

さらに、この中村被告は、あの国松警察庁長官襲撃事件の犯人ではないか、とも言われている。今、警察は彼を必死に調べている。ところで、なぜ拳銃14丁と実弾数千発を所持していたかだ。（ちなみに産経新聞では14丁だが、朝日新聞では15丁になっている。なぜ違うのだろうか）。

産経新聞（2月13日付）には、こう書かれている。

〈拳銃14丁と実弾数千発を所持していたことを認めたくて、目的について「武装民兵組織を結成する計画があり、その武器だ」と供述している〉。

産経新聞では、「武装民兵組織」と出ているだけだ。これだと、右翼か左翼か分からない。多分、産経らしい配慮だろう。右翼のことは（良し悪しは別にして）ともかく触れたくないのだ。それでなくても「産経は右翼だ」と思われている。だからこそ、なおさら、右翼のことは載せたがらない。「右翼とは違う。彼らと一緒にされたくない」という気持ちがあるのだ。元社員が言うのだから間違いない。

ところで、「世界日報」（2月15日）には、もう少し具体的に、書かれている。

〈中村泰容疑者は、大量の銃や実弾について、「93年に自殺した右翼活動家をリーダーに民兵組織をつくるつもりだった〉

分かる人が読めば分かる。「93年に自殺した右翼活動家」といったら、野村さんしかいない。これは裁判の過程で証言してるのだ。そうだったら、はっきり書けばいい。産経にしる、この世界日報にしる、奥歯に物のはさまったような言い方だ。この世界日報は統一協会がバックになっている日刊紙だ。だから、ここも余り右翼のことは触れたくないのかもしれない。

ところが、「週刊朝日」（2月20日号）には、こうはっきり書かれている。

〈中村泰被告自身は、拳銃所持の理由をこう「証言」した。

「新右翼のリーダーと20人ぐらいの民兵組織の結成を計画し、自分は兵器調達を任せられた。リーダーが93年10月に自決し、兵員も集まらず、武器が手元に残った」

中村被告は周囲に、「リーダー」が朝日新聞東京本社で短銃自

殺した野村秋介氏だと認めていた)

こうなると、凄い。驚きだ。三島の「楯の会」は100人だったが、野村さんも20人を集めて、同じような民兵組織を作ろうとした。三島は100人の「楯の会」で決起し、国会を包囲し、憲法改正を迫ろうとした。それも、70年安保の激動を逆に利用して、自衛隊の治安出動を促し、それと共にやろうとした。ところが、新左翼はもう壊滅してしまい、とても自衛隊の治安出動どころではない。それで100人の隊員による決起はご破算になった。そして、5人で市ヶ谷の自衛隊に突入し、最後は、森田必勝と二人で自決した。

野村さんは、三島と同じように生き、同じように死にたいと思った。やはり、民兵組織を作り、20人で決起しようとした。ところが、事情が変わり、20人の決起はなしになり、一人で自決した。そして、集めた武器だけが残った。

中村泰被告の裁判所での証言ではそうなる。20人の民兵組織とは何か。「新・楯の会」だったのか。そして、20人とは誰を考えていたのか。いや、それよりも、この話はどこまで本当なのか。

まず、この証言がなされたのは、02年の強盗事件の裁判の控訴審だ。強盗で懲役15年の一審判決が出ている。それに対し、「いや、殺意はなかった」として控訴。その中で、何を思ったか。「実は貸金庫に拳銃・実弾を隠している」と証言。自分に不利になることをわざわざ証言している。調べたら、大量の拳銃と実弾が発見されたので、「再逮捕」された。さらに、大量の青酸カリも発見された。これは「千人分の青酸カリ」だという。つまり、千人を殺せる量なのだ。まさか、これも「民兵組織」の為ではあるまい。

(2)この男、凶暴につき。東大出のモンスターだ

まず、彼が逮捕された02年の名古屋の強盗事件から説明する。02年（平成14年）11月、中村被告は、名古屋市UFJ銀行押切支店で、拳銃を撃って、現金輸送車を襲撃、警備員に重傷を負わせたとして「強盗殺人未遂」などの罪に問われた。中村被告は、「自分は拳銃の知識が豊富で腕にも自信があり、最初から警備員の足を狙って撃った」と主張して、殺意を否認したが、一審、名古屋地裁は殺意を認め、懲役15年の判決を言い渡した。

と、ここまで書いて分かった。控訴審で「自分に不利になることをわざわざ証言した」と思ったが違うのだ。「殺意」がなかったことを証明するために敢えて、拳銃・実弾の隠し場所を教えたのだ。「ほら、こんなに拳銃を

持ってるし、使いなれている。訓練だってかなりやってるし、腕にも自信があった。だから、初めから足だけを狙ったのだ。殺すつもりはなかった…」
と言ってるのだ。肉を切らせて骨を断つ戦法だ。捨て身技だ。前掲の「週刊朝日」にはこう出ている。

〈大量の拳銃や銃弾を持っていたことを明かしたうえで、こう
淡々と主張した。

「山中で射撃訓練した。千発くらい撃った。20メートルの距離
で、大半が3～4センチの標的に当たった」

「（警備員の）足スレスレ狙ったが、足が動いた」

つまり、腕前に自信があり致命傷とならない「足スレスレ」を
狙ったのだから、殺意がない、と言いたいわけだ〉

なるほど一理はある。でも、拳銃に対する「豊富な知識」と「自慢の腕前」は証明されたとしても、大量に銃や青酸カリを持っていたことで、かえって罪は重くなるのではないか。東大出にしては、ちょっと思慮が足りない気がする。（そう、彼は東大出で、さらに、八王子スーパー3人殺し、国松長官狙撃犯とも言われている。そして、もっと凄いこともある）。

この02年の現金輸送車強盗事件も、（東大出らしく）かなり用意周到で、そして、全く意表をつくやり方をしている。いかつい顔付の男が近づいたら、不審に思われ、すぐに警戒される。だから、女に変装して近づいた。まるでヤマトタケルだ。

〈女性用のかつらにマスク、サングラスを着用。背を高く見せる
シークレットブーツの靴底の溝に、足跡を消すためのボンドを
埋め込む周到さで、警備員らを銃撃して5千万円入りのカバンを
奪った。銃弾が一人の警備員の足に命中したものの、別の警備員
に取り押さえられた〉

彼は今、73才だから、この時、71才だ。大したものだ。そうか。靴の足跡を消すためには溝にボンドを埋め込めばいいのか。いいことを教わった。今度はそうしよう。今までは、一回ごとに新しい靴を買い、使い終わったら捨てていた。これでは不経済だ。ボンドで溝を埋めるなんて方法をもっと前に教えてくれれば、僕もたすかったのに。さすが東大出だ。まさに、ジェームズ・ボンドのような男だ。

でも、この東大出、女装したのはいいが、かつらで、マスク、サングラス

じゃな。かえって怪しくなるよ。

それに、こんな危ないことをしなくても、貸金庫に拳銃15丁、実弾数千発、それに千人を殺せる青酸カリを持ってたんじゃないか。それを売ったらよかったじゃないか。何なら、ネットオークションにかけたらよかった。いやいや、これは右翼の民兵組織の為に集めたんだから、売っちゃまずいのか。じゃ、何の為に現金輸送車を襲ったのか。そんなに金に困っていたのだろうか。違う。民兵組織を作ろうとするほどの男だ。目的はもっと高尚だ。

〈また、強盗の目的は「地雷処理団体を支援する会を作るため。活動にも参加し、地雷に触れて死ねればいいと思った」と陳述していた〉（「世界日報」2月15日）

じゃ、カンボジアかアフガンに派遣すればよかった。イラクだって何も自衛隊が行く必要はない。「中村泰と民兵20」が行けばいい。しかし、その民兵組織に私も入っていたのかな。いやいや、そんなことはないだろう。面識はない人だし。まあ、タイなど外国で、僕も拳銃を千発くらい撃ってるし。20メートル離れて中央の的に全弾命中させている。銃の知識も豊富だし、腕も確かだ。このことは『夕刻のコペルニクス・Part3』（扶桑社）にも書いている。ご丁寧に拳銃を撃っている写真までつけて。それを読んで「民兵」にもノミネートされていたのかな。

ところで、中村泰被告の経歴だ。東京に生まれ、旧満州（中国東北部）の大連などで育った。1949年に東大理科二類に入学。しかし、窃盗事件が原因で、2年半で中退した。56年11月、銀行強盗に失敗し、自動車内で仮眠中に職務質問されると、警官を射殺した。東大を中退して、警官殺しをしているのだ。凄まじい人生だ。この事件で無期懲役刑を受けたが、20年後の76年に仮出所した。

ところで、仮出所した76年から今まで（正確には名古屋で逮捕された02年まで）の「足取り」が謎なのだ。この26年間（彼が45才から71才まで）が謎なのだ。その間に、多くの犯罪にかかわったのではないかとされている。たとえば、「産経新聞」（2月13日）によると…

〈警視庁は、平成4年2月に東京都清瀬市の東村山署旭が丘派出所で警察官が刺殺され拳銃が奪われた事件や、7年7月に八王子市のスーパーでアルバイトの女子高生ら3人が射殺された強盗殺人事件との関連に注目〉

〈中村容疑者周辺への調査では、国松孝次・警察庁長官銃撃事件（7年3月）への関与をうかがわせる散文詩などが記されたフロッピーも押収されているが、一連の重要未解決事件と中村容疑者を直接結びつける物的証拠は見つかっていない〉

さらに5通の偽造旅券も発見されている。いずれも自分の写真を添付した他人名義のもので、複数回にわたってアメリカ、香港、フィリピンなどの渡航歴があったという。

さらにだ。どこの新聞、週刊誌にも書いてないが、勿論、（時効になった）あの事件や、この事件についても、「彼がやったのではないか」と調べられている。「赤報隊事件も俺がやった。新右翼のS氏に頼まれてやった」なんて証言されたら、たまらない。

さて、産経新聞は、去年の秋に、八王子スーパーの3人殺しは、彼が犯人だと、一面でデカデカと書いた。又、国松長官狙撃にも、フロッピーがあったと書いている。では、当人は「自供」しているのか。してない。それどころか、八王子のスーパー事件では、はっきり否定している。しかし、国松長官狙撃については疑われたのが〈名誉〉だと思ったのか、思わせぶりの回答をしている。以下は“世界日報”（2月15日）からだ。

〈昨年秋、一部報道で、東京八王子のスーパーで95年に女性3人が射殺された強盗殺人事件への関与を指摘された。中村容疑者は弁護士に、「あれは殺すだけが目的の虐殺だ。疑われるだけで心外」と憤り、「あんな安物（の銃）は使わない」と話したという。一方、週刊誌で警察庁長官襲撃事件と結び付けて報道されると、取材に対し、「否定も肯定もしない」と態度を一変。

「ゴルゴ13は高望みとしても、『長官襲撃チーム』の一員ぐらいの座は占めたい」とコメントを出し、思わせぶりの態度を取っている。〉

(3)果たして、野村さんの武器調達係だったのか

そうか、ゴルゴ13が目標なのか。凄い男だね。この男、凶暴につき、だね。産経新聞では彼が八王子スーパー3人殺しの犯人だ、とスクープしたけど、どうも違うね。これは、〈思想性〉がない。他の事件を見ても、一応、

理屈はつけてるけど、八王子はただの殺しだ。結びつかない。もう、一生刑務所から出れないと思って、いろんな事を言ってるのか。あるいは逆に、もう一度、娑婆に戻る気で喋っているのか。不思議な男だ。

では、最後に、いよいよ「民兵組織」のことだ。果たして野村さんは、「民兵組織」を作ろうとしてたのか。そして、彼に、武器調達を任せたのか。僕は中村被告とは会ってない（多分、会ってないだろう）。だから、この件の真偽は分からない。野村さんは、アウトローの人達とは随分と交流があった。だから、どっかで会ったのかもしれない。たった一度会っただけでも、「親友だ。よく知っている。いつも力をかしている」なんて放言する人は一杯いた。そんな感じの人かもしれない。

でも、これは僕の推測だ。それよりも、野村さんの側近だった、蜷川氏に聞いたらいい。彼なら野村さんのことは全て知っている。蜷川氏は野村さんのあとを継いで二十一世紀書院をやってるし、ここで野村さんの本やテープは全てある。又、野村さんの追悼集会「群青忌」を毎年10月20日にやっていて、その責任者だ。さらに、月刊『燃えよ祖国』を発行し、そこに野村さんの思い出も書いている。ともかく、野村さんについての「生き字引」だ。僕も分からないことがあると蜷川さんに聞いている。だから、今回のことも、聞いた。又、「週刊朝日」の記者にも紹介した。蜷川氏は、「民兵組織」のことを言下に否定した。以下は「週刊朝日」（2月20日号）だ。

〈中村被告は周囲に、「リーダー」が朝日新聞東京本社で短銃自殺した野村秋介氏だと認めているが、野村氏の筆頭門下生だった蜷川正大氏(52)は、迷惑顔でこう言う。

「野村先生は73年まで12年間、千葉刑務所にいたから、そこで（同刑務所に服役していた中村被告と）知り合い、雑談で何か話した可能性はある。だけど、武装組織をつくるなら、門下生が知らないはずがないし、俺はいちばん近くにいたから、少なくとも出所後に接触したことは100%ない」

さらにこう首をひねる。

「野村先生が説いたのは、思想戦争であり、軍事組織とは相いれない。少し勉強すれば、わかるはずなんだけど」〉

うん、こんなところが真相なのかもしれない。しかし、出所してからは本当に接触はなかったのか。どっかで会った時に、「三島さんの『楯の会』のようなのを作りたいね」と言ったのかもしれない。だからといって、中村被

告に「武器を集めてくれ」とは頼まなかっただろう。中村被告は「楯の会」の話だけを覚えていて、武器集めの理由づけに、言ってみただろう。この辺が推理として妥当なところだ。だが、「実は…」と、さらに衝撃的な発言が出て来るかもしれない。

【附録】(1)2月10日(火)、一水会フォーラムに百地章氏（日本大学教授）が講師で来てくれました。

(2)センター試験に「強制連行」が出題された件で、自民党の有志議員でつくる「日本の前途と歴史教育を考える若手議員の会」が総会を開き、この問題を議論した、と新聞に出てました。文科省担当者も招き激しい議論になったようです。この中で、衛藤晟一議員（幹事長）はこう発言しています。

〈「強制連行」は人数も中味もあいまいな政治的用語で、「従軍慰安婦」と同じだ。しかし、これを事実だと勉強しないと試験に通らない。一種の思想教育だ。〉（産経新聞2月14日）

頑張ってますね。この衛藤議員も、実は生学連、全国学協の活動家だったのです。いつか、一水会フォーラムに呼んでもらいましょう。

(3)先々週にセンター試験の「強制連行」のことをこのHPでも書きました。

「これは許せない。偏向だ。洗脳だ」と厳しく批判している二人のことを取り上げました。藤岡信勝さん（東大教授）と林道義さん（東京女子大教授）です。面白いことに、二人とも、かつては共産主義運動をされてたんですね。だから、今、左翼を批判する時も、「洗脳だ」「党派的偏向だ」…と、左翼っぽいことばを使ったりするんですね。藤岡さんは、元は共産党のバリバリの活動家でした。林さんは、東大の学生時代に反日共の活動家でした。

「その時、オルグられた」という人もいました。でもお二人とも今は「左翼が治って」愛国者になってます。

(4)一水会の機関紙「レコンキスタ」は3月で〈300号〉になるそうです。驚きです。おつかれさまです。それで300号を記念し、「レコンキスタ創刊三百号記念 読者の集い」が3月13日(土)午後3時から、高田馬場のシチズンプラザで行なわれます。記念講演は伊波新之助氏（元朝日新聞編集委員）で、「レコンキスタが歩んできた道」です。なお、終わってから、立食による小宴を催します。それで会費は三千元です。ぜひ、いらして下さい。

(5)一水会の副会長だった阿部勉氏のことを書いた本が2月末に出る予定です。山平重樹氏（作家）が書きました。『最後の浪人 阿部勉伝』（恵文

社) です。出たら紹介しましょう。

(6)2月17日(火)の「ニュース23」は「憲法9条を考える」特集でした。木村三浩氏(一水会代表)や、小林よしのりさん、青山リカさんなど豪華な顔ぶれのコメント集でした。

次の日、18日(火)発売の週刊「SPA!」(2月24日号)を見たら、「イラク通に聞く、イラク人とうまくやる方法」にも木村三浩氏がコメントしていました。大活躍ですね。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン/丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年3月1日

宮中晩餐会にはなぜ、和食を出さないのか？ ＝「平成日本のよふけ」が本になっていた＝

(1)警察への第一報は。「三島という酔っ払いが暴れてる」

エッ、こんな本があったのかと驚いた。『平成日本のよふけ』という本が。東中野図書館の棚にあったからだ。それに [2] もあった。ヒャー、本になっていたのか。だったら教えてくれてもいいのに。と思った。

2002年3月17日に見沢知廉氏がこの「平成日本のよふけ」に出た。その後、この番組は「ミライ」と名前が変わり、2003年9月8日に僕が出た。司会は笑福亭鶴瓶さんと南原清隆さんだ。司会の二人は話がうまいし、よく勉強している。見沢氏の回も、よかった。僕の回も、「今までテレビに出た中では最高だ」といわれた。僕がよかったのではなく、聞き手の二人がうまいのだ。

年末に札幌で辛淑玉さんと討論をしたが、たまたま「ミライ」を見たそうで、「あれは、鈴木さんの言いたいことがよく出ていたし、とってもよかった」と言っていた。そうですね、「朝生」と違って、ちゃんと喋らせてもらえたり、それに二人とも聞き方がうまい。リラックスして喋ってもらおうという優しさがある。皆で、つぶし合をする「朝生」とは大違いだ。

この「ミライ」は、実は僕が最後のゲストになった。次の週、9月15日は鶴瓶さんが一人で出て、「平成日本のよふけ」「ミライ」を終るにあたっての「お別れの言葉」というか、「総括」というか、「ラストトーク」だった。6年ほど続いたそうだが、これほど内容の濃い番組もない、と思った。

そしたら何と、初期の分が単行本になっていたのだ。まだ見沢氏の回は載ってない。多分、[3] [4] [5] …と続くのだろう。そしたら見沢氏も、僕も出るだろう。

ともかく、さっそく2冊を借りてきた。家に着くのが待ち切れなくて、喫茶店に入って読み始めた。凄い。面白い。そして内容が濃い。驚いた。読ん

でいて止まらなくなった。それで、4時間も喫茶店にいて、一気に2冊、読破してしまった。

まず、『平成日本のよふけ(1)』（フジテレビ出版）だ。2000年7月20日初版となっている。「人生の大先輩が熱く語る 日本の皆さんへ」と書かれている。本の帯にはこう書かれてる。

「ホンネの話が面白すぎる！

日本の先輩たちが語る 抱腹絶叫の世界」（「絶倒」ではなく、わざと「絶叫」になっている。叫ぶほど面白いんだ）。

ページをめくってすぐに、「巻頭の挨拶」がある。鶴瓶さんと番組プロデューサーの吉田正樹さんの対談形式で「挨拶」している。どうしてこの人達を呼んだかという方針というか、ポリシーが語られている。うーん、そうだったのかと思った。

（吉田）ゲストはスタッフが鶴瓶さんたちに内緒でお願いしています。こだわっているのはやはり一途にやりぬいて貫いた人たちに話を聞きたいということです。一生をかけて何かの仕事をやられた方というのは、結局日本全体の幸せということを考えていらっしゃるような気がします。鶴瓶さんはどんな人に見てもらいたいですか。

（鶴瓶）若い人たちに見てほしいね。失敗を恐れなくてもいい。ころんだ数の多い人は受身も上手いでんな。信念は一つだと思う。早く目標を立てられる人は強いわ。ここに出てくる人は言うてることは違うけど、気持ちは一緒やで。

（吉田）テレビの中で、この番組は冒険でした。報道番組でもない単なるバラエティーが世の中のことを考えるわけですから。でも鶴瓶さんのおかげで、ゲストの一人ひとりの人生から明日のニッポンの夜明けが見えてきそうな気がします。

しっかりとしたポリシーを持って始めたわけだ。司会の二人も優秀だが、スタッフも優秀だ。僕も一度出ただけだが、それは肌で感じた。この第1巻は、取り上げた人が13人だった。

堀田力（元検事）。山本集（画家）、岡本敏子（岡本太郎養女）、佐々淳行（元内閣安全保障室長）、やなせたかし（漫画家）、早坂茂三（元政治家秘書）、木村大作（映画撮影監督）、小田実（作家）、黒木靖夫（元ソニー取締役）、鳩山由紀夫（政治家）、木村政雄（吉本興業常務取締役）、松本

和郎（マツモトキヨシ社長）、上野正彦（監察医）。

この人達は、何度も何度も、いろんな所でインタビューされているんだろう。しかし、それが、この「よふけ」では全く別な角度から話をする。僕らが聞いてない話をする。これは司会の聞き方がうまいのだ。話の引き出し方がうまいのだ。たとえば、佐々淳行は、いつも「あさま山荘」と「東大安田磐攻防戦」の話が主だが、ここでは三島事件について、知られざる事実を語る。

く（佐々）情報というのは常に不正確で不十分ですからね。三島由紀夫事件の第一報が入ったのは、「市ヶ谷の自衛隊東部方面総監室で三島という酔っぱらいが暴れている」と。

まだ切腹する前ね。その時、私らは機動隊だから「いいじゃないの、酔っぱらってたって」って笑ってたんです。それで、午前11時に酔っぱらっているなんてのはまともな商売のやつではないなんて思っていましたよ

かわいそうに。三島は酔っ払いかよ。バルコニーで演説する前だね。益田総監を縛り上げて、立て籠った時だね。部下たちが異変を察して入ろうとしたら、「楯の会」の人が、刀を振り回して入れなかった。部下達にしたら、何が何やら分からん。三島は益田総監の親友だ。ちゃんとアポイントメントを取って、面会に来た。それなのに中で暴れている。これは変だ、と思ったのだろう。それに、三島の甲高い声は、もしかしたら酔っ払いの声に聞こえたのかもしれない。

さらに、その後の「報告」も凄い。

「三島由紀夫は割腹、介錯を受け、首がちぎれている。生死は不明」

首がちぎれて、生死不明もないもんだ。しかし警察のルールでは、聞き取りのまま上司に報告する。勝手に解釈してはいけない。その報告が国家公安委員長まで上がった。そしたら委員長が、「ちょっとこの報告おかしいのではないか。普通、首がちぎれると死ぬのではないか」と（笑）。しかし、正確を期さなくてはならない。生きてるのか死んでるのか確認しなくてはならない。「それで私が出した命令は『救援措置をとれ』でしたね」と佐々は言う。今から考えると、まるでドタバタ喜劇だ。しかし、その時は、皆、必死にやっていたんだ。

(2)天皇陛下もSMAPは知っておられる。しかるに小田実は…

そうそう。司会はずっと鶴瓶さんと南ちゃんだと思ってたら、以前は鶴瓶と香取慎吾だったんだね。香取君も頑張ってる、話に加わっている。小田実の時だった。こういう硬派の反体制オッサンを相手にするのは大変だと思うが、鶴瓶は、うまいね。取扱い方が。あしらい方が。いきなり奥さんの話から聞くんやから。ベ平連とか、政治の話じゃなくて。小田実といえば、ムスツとして、いつでも怒ってるような顔をしている。昔、「朝生」に出てる時も、いつも、怒鳴っていた。黙って聞いている時も、ライオンが獲物を狙っているような顔で、ジーっと睨んでいる。この人、いつだって、政治のことしか考えてないんだろう。家の中だって、奥さんと大声で喋り、論じ合っているんだろう。うーん、しんどい家庭だな。

「でも、キスする時もありますやる」と、いきなり鶴瓶が急襲する。

(小田) そらそや、当たり前やないか。当たり前のことを聞くなよ。もうちょっとちゃんとしたことを聞け。

(鶴瓶) ちゃうがな。そのキスをするに関して想像でけへん。

(小田) なんでやねん、想像力不足やな。

(鶴瓶) でけへん、でけへん。

(慎吾) あつ、どこのタイミングでキスするんですか。「平和主義とか、何とかで」って言ってるところから、「はい、するわ。はい、キス」って。

(小田) もうちょっとまじなことしゃべったらどうか(笑)

これは凄い。あのライオン小田を相手に、おちょくりまくっているよ。小田実も防戦一方や。朝生の論客よりも、こっちの方が手強そうや。さらに二人は逃げる小田を追い、攻めまくる。ヌーやシマウマが逆にライオンをおいかけているようだ。それで、議論をしながら、奥さんに対し、「好きや」とか、「結婚してくれ」と言わはったんですかと鶴瓶は聞くんやけど…。

(小田) そんなこと言うたかどうかわからない。

(鶴瓶) いやいや、そんなん、おかしいやん。ほんなら押し倒してレイプしたんでっか。

(小田) レイプはせんな。俺、嫌いな。人の意志に反することはしたくない。口説き方にはいろいろ口説き方があるって。政治

を論ずるやつもおれば、どっかフューッとやるやつもおる。

どうも、小田は政治を論じながら、口説いたらしいね。そこまで「自供」させられとった。それで、「そんなのズルイやないの。自分の“本職”で相手を口説くのは…」なんて鶴瓶に言われてる。ここまで小田を追撃し、オタオタさせた人はいないよな。さすがは鶴瓶だ。それにしても、「ウルセー。そんな話ばかりするんなら帰る！」とって席を立たなかったんだね、小田実も。「朝生」だったら完全にキレて、帰っとったよ。その点、いくらキツイ追及でも、鶴瓶さんの人柄なんやろう。最後まで小田に付き合っている。「よふけ」の中のトップかもしれんな。この回は。

そうそう、小田実は娘がいるそうや。この時、14才だった。小田は1932年生まれ。だから、今71才か。放映は平成11年。そうすると、50過ぎてからの子供やな。

小田夫妻は政治論議をして、その途中でキスをして、交わって、それで娘が生まれた。政治的、性事的な結果による子供だ。そんな政治的産物の娘でも、SMAPは知っている。「娘さんは知ってはるんですよね」と鶴瓶が聞く。

(小田) いやいや、娘じゃなくて、誰かがスナップ知ってるって言ってたよ。

(慎吾) スマップですよ。

(小田) わかった、スマップ、OK。スマップって何の意味や。

(慎吾) スポーツ・ミュージック・アッセンブル・ピープルです。

へエー、スマップって、そんな難しい言葉の略だったんだ。知らなかった。周りの人に聞いたら、皆、知っていた。じゃ、オラの知識も小田実並みだよ。なさけねえ。でも、SUICAの略は知ってるぞ。そっちの方が絶対凄いと思うけどな。

ところで、『平成日本のよふけ(2)』だ。「笑って泣いて驚いて感動のあの話この話 第2弾！」と銘打っている。この本の中で、元「天皇の料理番」渡辺誠氏が出ている。正式には「宮内庁大膳課」というんだね。宮中のことだから、言えないことも多い。でも、エッと思ったことがある。

(鶴瓶) ところで今上天皇はSMAPはご存じですかね。

(渡辺) もちろん。

今上天皇と、正しい言い方をしている。鶴瓶はインテリだね。それに、渡辺氏は、「もちろん」と即座に断言している。じゃ、SMAPが何の略かもご存じなんですか。又、「新撰組」や「砂の器」も見てられるのでしょうか。紅白歌合戦も。

(3)だから宮中晩餐会はフランス料理なんです

ウーン、なんかこれは〈革命的〉なやりとりのように思いましたね。だって考えてみて下しゃんせ。天皇陛下はSMAPを知っておられるし、テレビでも見ておられる。テレビなんて、ほとんど見る機会もないと思うのに…。一方、14才の娘をもって、テレビはよく見ている小田実は、SMAPを全く知らない。逆のような感じがするけど。ウーン、この事実をどう考えたらいいんだろう。小田実の方が、現世離れをしてるのか。あるいは天皇陛下すら知ってるSMAPだから、反体制闘士の小田は、反撥したのか。分からん。

ところで、渡辺氏のところで、永年の疑問が解けたところがあった。宮中の晩餐会はなぜフランス料理なんだろう。これはずっと疑問だった。外国から日本に来る人には和食を差し上げたらいいだろう…と。どうしてだ？ なんでやる？ そしたら、鶴瓶が私に代わって聞いてくれよる。

(鶴瓶) そうそうそう。宮中の晩餐会に和食は出ないじゃないですか。日本に来たら和食にしたらええのに、みんな、フランス料理ですわな。あれ何でフランス料理にしますねん。和食でよろしいやんか。

「そうだ、そうだ」と声援を送ったね。何で、フランスの真似をするんや。日本の皇室じゃないか。フランスは王様をギロチンにした国やないか。なんでそんな野蛮な国の真似をするんだ！と。でも、渡辺氏は、日本食もお出ししてるけど、ニュースにならないんだ、という。そうかな。ごく身内の、少人数の食事なら、知らないけど、宮中晩餐会といったら、必ずフランス料理じゃないか。

(鶴瓶) だいたいフランス料理がメインでしょう。

(渡辺) 一番の問題はお箸にあるんですよ。あの緊張したなかで、棒二本で、ものを食べるって、むちゃなんです。

(鶴瓶) うまいこと言うわ。

(渡辺) そうじゃなくたって緊張して手震えているのに、出され

た料理がみんな落とされてしまいますよ。ですから後に、日をおため、両陛下とか首相とか、和食の席を設けてお箸の使い方、それからこれはどういういわれでこういう持ち方をするかという、文化面のお話をしながら、十人か十五人ぐらいで食卓を囲む。

そうか。と分かった。理解した。よく、テレビなどでは、箸を器用に使って「スシ、好きです」とか、「テンプラ、グーね」なんて言ってる外人が出るけど、うまく使えるのは例外的だ。それに、あの雰囲気では、皆、ガチガチに緊張している。手や足の震えの止まらない人もいるそうだ。そんな人が、箸を持ったら、イモの煮っころがしを取ろうと思って、ツルッと下に落ちちゃう。コロコロと転がっていく。あっちでも、こっちでも、ツル！コロ！となる。それでは大変だ。枝豆を食べようとしたら、ピュー、ピューと、あらぬ方向に飛んじゃう。

それに、正しい箸の持ち方なんて、僕らも知らない。若い人なんてなおさらだ。それを外国人に強制するなんて酷じゃわいな。箸を「強制使用させた」と後々、外国から批判されるだろうよ。教科書にも載っちゃうよ。「いや、強制ではなかった」と言う人も出て、論争になるじゃろう。

それと、渡辺氏が言ってたが、箸の持ち方、さらに、どうしてこんな持ち方をするのか、それを後でお教えるというのが、僕らだって知らない。なぜ、こんな持ち方をするんだらう。その文化的意味なんて知らない。せっかくだから、この時にちゃんと聞いておきゃよかったじゃないか。鶴瓶さんも。と思っちゃったよ。

ところで、晩餐会を和食にしないのは、実は、箸だけの理由じゃない。もっと大きな理由として…。

(渡辺) 公式晩餐会というのは、プロトコールといいまして、国際儀礼で世界中で、ものを置く位置から、幅から、食べる順から、食べ方から、全部毎年会議をやって決めていますから、何も困らない。世界のどこに行っても、例えばアフリカへ行こうと、韓国へ行こうと、フランス料理は同じような出し方をしているので、何も気を遣うことなく食事が楽しめるわけです。そのために世界中フランス料理にしてるんです。

(鶴瓶) もう明解。それはもう本当によくわかりました。納得いきましたわ。ほんまに。フランス料理というのは、世界の中心な

んでしょうね。英語をしゃべるのと同じようにみんな共通にする。

(渡辺) そうですね。

これには私も納得しました。フランス料理は、フランスの料理じゃないんだね。もう、世界のスタンダードなんだね。共通語というか、〈共通料理〉だ。世界中の元首、外交官も、その食べ方、マナーを心得ている。だから、日本でも出してるんだ。いわば、「優しさ」なんだね。それがもし、「わざわざ日本に来て下さったんだから、日本食で」なんてやったら大変だね。なれない人も多いから。箸は持てないし、おつゆのお椀はフタが取れないし、枝豆は豆が飛んじゃうし。エビとかタイの生きたままの刺身(生き造り)が出たら、卒倒する人もいるだろうし。納豆、とろろなんか出て来たら、もうどうしていいかわからんだろうし。これじゃ、まるで「嫌がらせ」になっちゃうね。だから、フランス料理なんだ。これを聞いてよく分かりました。

そうだ。[2]には藤子不二雄(A)も入っていた。もう一人の藤子・F・不二雄とは小学校の時から、ずっと一緒だし、仲よし。それに二人ともマンガ家として大成してからも、ずっと一緒。家族をもっても、隣りに家を建てた。大きさも、何もかも一緒。あまりにも、ベッタリと一緒なんで、鶴瓶さんか、聞いちゃうんですよ。

(鶴瓶) キスしたことあるんですか？(笑)

(藤子) あるわけないでしょう。ホモでもなんでもない。

(鶴瓶) 精神的なホモやねん。親友というより、肉親じゃないですか。

そうですね、全く。しかし、鶴瓶さんも凄いことを聞くねえ。渡辺誠、藤子不二雄(A)の二人は紹介したけど、他には、[2]にはどんな人が載ってるかということ…。

日下公人(東京財団会長)、松本幸四郎(歌舞伎役者)、山口義夫(元東京国税局査察官)、三木睦子(元内閣総理大臣三木武夫夫人)、青木定雄(MKタクシー・オーナー)、中沢昭(元東京消防署長)、丸山茂雄(ソニー・ミュージックエンタテイメント前社長)、大橋巨泉(タレント)、井原高忠(テレビ界の偉人)、須藤武雄(日本毛髪科学協会顧問)、依田巽(レコード会社エイベックス社長)、村山富市(第81代内閣総理大臣)。

この(2)が出たのが2001年7月です。1429円です。本屋か図書館で探して

みて下さい。これは絶対に読んでお得な本です。僕も、とても勉強になりました。

【お知らせ】

(1) 3月1日(月)発行の「レコンキスタ」(一水会機関紙)は今回で300号です。凄いですね。その300号を記念して、木村三浩一水会代表が、前代表(私です)と対談しています。レコンの創刊時から、今までのエピソードを披瀝してます。読んでみて下さい。

(2) 2月10日(火)、一水会フォーラムの講師は百地章氏(日本大学教授)でした。

(3) 1月31日(土)は和光大学教授・岸田秀先生が定年でやめられ、その「最終講義」でした。私も聞きに行きました。大講堂に500人ほどが集まり、大盛況でした。

(4) 3月6日(土)発売の月刊『創』では、この岸田先生と百地氏のことを書きました。

(5) 3月3日(水)は7時半から、ロフトです。元社会党の衆院議員・上田哲さんとトークです。

(6) 3月3日発売の『ダカーポ』に、朝鮮問題について、コメントを載せてます。

(7) 3月13日(土)は、3時から、レコンキスタ300号、記念大会ですね。ぜひいらして下さい。

(8) 最後に、酒井徹君、凄いですね。さすがは天才大学生です。名前も電話も全て明かして、堂々と闘っています。なかなか、いませんよ、ネットという匿名社会では、実に立派で、すばらしい行為です。「裏主張です」と謙遜して酒井君は言ってましたが、今や、酒井君の方が「表」で、私の方が「裏」です。たいしたものです。がんばって下さい。皆も応援してあげて下さい。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年3月8日

謎解き・万葉集

= 「衣ほすてふ天の香具山」の秘密 =

(1) 「夏来るらし」といってるが、本当は冬の歌だ！（中西進）

日本の神話について、去年一年、考えた。本も百冊ほど読み漁った。特に「古事記」と「日本書紀」だ。民族派だとか、右翼だとか言われながら、この国の神話についてあまり知らなかった。神話は勿論、〈歴史〉ではないが、建国の〈夢〉や〈理想〉が込められた物語だ。歴史上の事実もあるし、あるいはフィクションもある。それらが、渾然一体とまじり合って、大きな物語になっている。

それで、日本の神話をどう考えたらいいか。という事を考えてきた。そして一冊の本を書いた。今年の夏までには出来るだろう。

今日は、その勉強の過程で出会った一つの歌について考えてみたい。もう神話ではないが、持統天皇の話だ。万葉集に載っている持統天皇の有名な歌だ。

春すぎて夏来るらし白妙の

衣ほしたり天の香具山

この歌だ。古文なんか嫌いな人でも、この歌だけは覚えているだろう。僕は高校はミッション・スクールだったが、この歌は好きで、よく口ずさんでいた。きれいな歌だし、情景が目浮かぶようだ。初夏の歌だ。香具山のふもとで、人々が白い衣をほしている。バタバタと。変な技巧もないし、素直な歌だ。高校の国語で習った時は、「衣ほしたり」が「衣ほすてふ」だったような気がする。多分、後で、小倉百人一首にも取り入れられ、その時のよみ方じゃないのかな。

ともかく、「夜ほすてふ」と書いて、「夜ほすちょう」と発音する。「てふてふ」と書いて、読む時は「ちょうちょう」というようなものだ。高校生

の時はこれが面白くて、「夜ほすてす」なんて、ふざけて読んでいた。ホステスがどんなものか知りもしないし、触ったこともない。でも、未知のものへの憧れでしょうな。少年の好奇心なのか。「ホステス」と発音しては、興奮しとったんですな。アホですな。それで、大学生になったら、各地を旅行してみたいとも思ったね。「万葉集」をカバンにほうり込んで。泊まる所は勿論、ユース・ホステスだわさ。そこに泊まって、「衣ほすてす」の歌を詠む。それで街に出たら、ロイヤル・ホステスで食事する。いいですね。ホステスに囲まれて。でも、その頃はまだロイヤル・ホステスはなかったかな。

ところで、この持統天皇の歌について、「そんな解釈は間違っている」と、言ってる人がいる。「初夏に白い衣」というのは違うという。中西進だ。彼の『謎に迫る古代史講座』（PHP研究所）を読んでいたら、書いてあったんだ。これには驚いたね。だって、「バカ、これは夏の歌じゃない。冬の歌だ！」と言ってんだから（バカとは言ってなかったか）。その部分を引いてみる。

〈持統天皇の名歌「春すぎて夏来るらし白妙の衣ほしたり天の香具山」は、雪で白くなった香具山を見て、「あら冬どころか春もすぎて夏が来たらしいわ。まっ白な衣をほしている」と戯れた歌らしいのである。初夏の鮮やかな風景、夏の爽やかな到来などと受け取りたくても、山に衣をほすという歌を古歌から拾い出してみると、みんな雪になってしまうのだから仕方ない〉

エッ！と驚きましたね。冬の歌なのか。雪が積もった香具山を見て、「あら、衣をほしてるようだわ」とギャグを飛ばしているのか。今は冬だけど、もう春が来て、さらに夏まで来た心地がするわ。と言ってんのか。そんな馬鹿な！

と思ったが、ウーン、この解釈の方が面白いなと思った。案外、こっちの方が正しいかもしれない。でも、それなら他にも、こ解釈を言ってる人がいてもよさそうだが、いない。今まで、学校でも誰も教えてくれなかったし、万葉集の解説本だって誰も書いてない。

まあ、この中西さんが、いいかげんな人なら笑って終りにする。たとえば、〈ユダヤの陰謀〉なんてことを言ってる人とか、変な宗教をやってる人なら、僕も信じない。でも、「PHP研究所」が出している。さらに中西さん、れっきとした学者だ。先生だ。この本の奥付けにはこう書かれている。

中西進 1929年東京生まれ。東京大学大学院修了。大阪女子大学長を経

て現在、帝塚山学院長、奈良県立万葉文化館長。文学博士。専門は古代学、日本精神史。著書に『古代日本人・心の宇宙』（NHKライブラリー）、『聖武天皇』（PHP新書）、『ことばの風景』（角川春樹事務所）、『日本人の忘れもの』『中西進と歩く万葉の大和路』（以上、ウェッジ）など多数。

どうです。古代史、万葉集の専門家だ。それに帝塚山学院長だ。こんな人が嘘をつくはずがない。しかし、あまりに突飛な解釈だ。それで周りの人たち何人かに聞いてみた。まず、四宮正貴先生に聞いた。四宮先生は一水会創設の世話人の一人だ。以前、二松学舎大学で国語を教えていた。今は、万葉集の講座を定期的を開いている。この中西説を紹介し、聞いてみた。

「それはありえない」と即座に否定された。「これは間違いなく、夏の歌です」と。

次に、高森明勅さんに聞いた。国学院大学で教えている先生だ。「新しい歴史教科書をつくる会」の事務局長だ。高森先生も、「それはありえないですね」と否定的だ。

さらに河合塾のカリスマ講師・牧野剛先生に聞いた。牧野先生は国語については何だって知っている。その牧野先生も、「それは違うだろう。考えすぎだろう」と言う。三人の大先生に即座に否定されて、僕もウンと唸った。一時は「中西説」は面白いし、案外、正しいのでは、と思ったのに。さらに、こうも思った。もしこれが新古今和歌集だったら文句なしに、「中西説」が正しいと思ったろうになーと。

と思ったら、この歌は新古今集にも入っている。元は万葉集だけど、再び入ってるんだ。それで中西さんは、他の新古今の技巧的な歌と同じように、この歌もそうだと思ったのか。いやいや、中西さんは万葉集のプロだ。学者だ。そんな初歩的なミスをするはずがない。

それにしても、「中西説」に味方する人はいないな。ちなみに大岡信も斎藤茂吉も、否定している。否定してるというより、こんな説は歯牙にもかけてないのだろう。全く触れてない。「中西説」があることさえ知らないのかもしれない。大岡信『私の万葉集（一）』（講談社現代新書）には、この歌の意味をこう書いている。

〈春が過ぎて夏がいつのまにかやって来たらしい。白妙の衣が
乾してある。天の香具山に〉

さらに、こう解説している。

〈持統天皇八年（694年）、都を天武以来の飛鳥浄御原宮（あすかきよみはらのみや）から藤原宮に移しました。香具山は藤原宮の東にある低い山で、天皇はこの歌で、宮殿から山腹に乾されている白い衣を見て夏の到来を喜ぶ気分を歌いました。

春と秋がことに愛されていた当時、夏のさわやかさを読みあげた点で注目される歌です。

後代、『新古今集』巻三夏に再び掲げられてますが、この時は二句が「夏来にけらし」、四句が「夜ほすてふ」となり、その形で小倉百人一首に選ばれていることは周知の通りです。なお、「天（あめ）の」は、地上の物では「香具山」にだけ添えられる語です。香具山は天から落ちてきた山だという伝説によります。〉

(2) 「誤爆」でなければ、「誤読」はいいんじゃないの

そうか。「夜ほすてふ」でいいんだ。「新古今集」や小倉百人一首ではこの形で入ってる。僕らが高校の時に習ったのもこれだ。

春過ぎて夏来にけらし 白妙の
衣ほすてふ 天の香具山

うん。これの方がグッといい。でも、新古今の選者が勝手に直したのかな。持統天皇の歌を。いいのかな。でも、それでグンとよくなったと思うね。ところで、「新古今」では、「巻三夏」に入っている、ということは、やはり夏じゃないの。技巧の限りを尽くした歌が「新古今」には多い。この歌だって、もし技巧的な歌なら、選者が見破っていたら。そして、もし「冬の歌」だと思ったら、本当に「冬」の項に入れるのではないのか。でも、選者をも騙して「夏」の部に潜り込んだのかな。謎だ。

では、もう一冊。やはり万葉に関しては権威というか、名著だよ、斎藤茂吉『万葉秀歌』（岩波新書）だ。もしかしたら、この本は岩波新書の中では最も売れてる本かもしれない。1938年第1刷で、1996年に第84刷だ。今はもっと増刷されてるだろう。

この『万葉秀歌』は上、下巻があるが、上巻に持統天皇のこの歌が出ている。

〈一首の意は、春が過ぎて、もう夏が来たと見える。天の香具山の辺には今日は一ぱい白い衣を干している、というのである。

「らし」というのは、推量だが、実際を目前にしつついう推量である。

この歌は、全体の声調は端巖とも謂うべきもので、第二句で、「来るらし」と切り、第4句で、「衣ほしたり」と切って、「らし」と「たり」で伊列の音を繰返し一種の節奏を得ているが、人麻呂の歌調のように鋭くゆらぐというのではなく、やはり女性にまします御語気と感得することが出来るのである。そして、結句で、「天の香具山」と名詞止めにしたのも一首を整正端巖にした〉

そうか。「春過ぎて夏来るらし」の「らし」は、実際を目前にしていう推量だという。もう夏が来たようだ、とはっきり目で、体で、感じたんだ。これでは「中西説」は成り立たない。と思える。

ところで、「衣ほすてふ」のことだが、これは別に選者が勝手に歌を変えたわけじゃない。元々、「よみ方」がいろいろあるんだ。それに写本の違いもある。うっかりしていた。「平仮名で書いてるのに、読み方がいくつもあるのか？」と思われるかもしれないが、万葉集は、いわゆる平仮名ではない。万葉仮名というか、いわば漢字だ。たとえば、他の歌だが、「吉多礼登（きたれど）」、「暖来良思（はるきたるらし）」というふうに書かれている。茂吉はこの辺を詳しく解説する。

〈この歌は、第二句ナツキニケラシ（旧訓）、古写本中ナツゾキヌラシ（元暦技本・類聚古集）であったのを、契沖がナツキタルラシと訓んだ。第四句コロモサラセリ（旧訓）、古写本中、コロモホシタリ（古葉略類聚抄）、コロモホシタル（神田本）、コロモホステフ（細井本）等の訓があり、また、新古今集や小倉百人一首には、「春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふあまの香具山」として載っているが、これだけの僅かな差別で一首全体に大きな差別を来すことを知らねばならぬ。〉

この訓み方の違いがあって、「アレッ？」と思い、それが又、この歌をより有名にしているのだろう。だから、「万葉集の中で好きな歌をあげなさい」というと、この歌が一位か二位に入るだろう。それは、見たまま素直に

歌っていて、まるで絵のような描写だ。だから、この歌を読む我々も素直に読み、素直に感動すればいい。茂吉もそう言っている。これでは「中西説」はますます分が悪い。

実は、中西説ではないが、この歌には、他にも、違ったよみ方・解釈があったらしい。茂吉はそれに触れている。

〈僻案抄（へきあんしょう）に、「只白衣を干したるを見そなはし給ひて詠給へる御歌と見るより外有べからず」といったのは素直な歌であり、燈に、「春はと人のたのめ奉れる事ありしか。又春のうちにと人に御ことよさし給ひし事のありけるが、それが期（き）を過ぎたりければ、その人をそそのかし、その期おくれたるを怨ませ給ふ御心なるべし」と云ったのは、穿（うが）ち過ぎた解釈で甚だ悪いものである。こういう態度で古歌に相對するならば、一首といえども正しい鑑賞は出来ない〉

他の解釈は許さないんですね。茂吉が「中西説」を聞いたら、烈火の如く怒り、やはり、「甚だ悪い」と言ったでしょうね。でも、「もしかして…」と推理や、私的な解釈をして楽しむのもいいんじゃないだろうか。「一般にはこう言われてるし、事実そうでしょうが、私は、自分の今の状況から、こんな風に読んじゃったな」というのがあってもいいだろう。小説だって、「あっ、これは私のことだ」と思い、勝手に「誤読」している人がいる。いや、その方が多い。だからこそ、小説は売れるのだ。それを現代文の試験のように、「この時の主人公の心理はどれか、次の5つの中から正しいものを選びなさい」なんて、やられると空しい。「正しい読み方」でなくっていい。誤読し、それで、励まされたり、慰められたりする。その方がいいじゃないか。

まあ、中には、「これは私の事を書いてる。許せん。モデル料も払わんくせに」と思った読者が作者を刺しに行った。なんて話もある。筒井康隆や、胡桃沢耕史などはその被害にあった。地方からおばさんが訪ねてきて襲撃した。筒井は警察を呼んで助かった。しかし、胡桃沢は、おばさんにいきなり包丁で刺されて重傷を負った。

これほど思い込みの激しい「誤読」は困るけど、小説はほとんどが「誤読」で成り立っている。（まあ、他人に危害を加えない限り、「誤読」はOKということだよ）。

さて、この歌をもう一度、みてみよう。契沖と細井本の方がいいやね。そ

れに新古今と小倉百人一首になってんだけど、

春過ぎて夏来にけらし白妙の
衣ほすてふあまの香具山

ここに一人の女性がいた。と思いねえ。少々年輩だ。万葉集を手にとり、この歌を読み、感動したとする。いい歌だわ、と思う。それに、女性の天皇が詠んだ歌だ。お仕事も大変だろうに。明るい歌のように見えるけど、けっこう沈んだ気分をうたったんじゃないかしら。私と同じだわ。

私なんて、女性の〈春〉も過ぎちゃったし、夏も来て、もうすぐ秋よ。いいこともなく、男共にちやほやされることもなく、過ぎてしまった〈春〉。「青春」もなかったわね。恋もなく。だから、汚れてもいけないこの身体。まっ白だわ。あっ、風になびく白妙の衣。私に対する当て付けのようだわ。嫌味のような。ああ、人生はむなしいわ。

…と、「誤読」し、感動したとしたら。茂吉には叱られるだろうが、でも、それもありませんのだから。と私は思いますね。どう読もうといいだろう。どう感じようと勝手だろうよ。それに、本当はどんな気持ちで持統天皇は詠んだのか分からない。もしかしたら、「悲しい気持ち」を隠して詠んだのかもしれない。「それは絶対にない」とは言えないだろうよ。

(3)持統天皇の周辺には、こじつけや戯れを享受する雰囲気があったというが…

ちょっと話は外れる。「痩せがえる 負けるな一茶 ここにあり」という俳句がある。大きな蛙と小さな蛙が闘っている。心やさしい一茶は、つい、小さくて痩せている方を応援してしまった。という、ほのぼのとした歌だ。そう言われている。

しかし、痩せ蛙とデブ蛙が闘っている場面は余り僕らは見たことがない。そんな事があるのだろうか。それに、蛙は結構、仲がいい。群れて集まっているし。闘争心が少ないんじゃないか。心優しいし、恩も忘れないというし。

そうそう、カエルをかわいがっていたおじいさんが死んだ時、そのお葬式には何と10万匹のカエルが集まったそうです。そのおじいさんの死を悲しんで。弔問の為に。これはテレビでやっていた。本当の話だ。日本じゃなくて、アメリカの話だけど。いや、正確に言うと、「葬式の日、10万匹のカエルが、この家に集まった」というのが事実だ。「死を悲しんで」かどうか

分からん。カエルは喋らないからだ。

だったら、「死を悲しんで」ということにしたらいい。その方が美しい物語だ。ところが、動物学者が意地悪にも、この「原因」を科学的に究明した。余計なことをしやがる。その調査の結果、こんなことが分かった。この葬式の日、赤ん坊を連れてきた参会者がいた。二階に寝かせておいたら、オギャー、オギャーと泣いた。この声が、カエルの声と同じ周波数、波長なんだという。まずメスのカエルがゾロゾロ集まってきた。交尾期なんであります。そのメスを目当てに、オスがまた、ゾロゾロと集まった。

それだけのことらしい。さらに、スタジオにカエルを集め、実際に赤ん坊を泣かせてみた。そしたら、カエル共は、ゾロゾロと赤ん坊の方に行くんだわいな。というわけで、「カエルの恩返し」のお話は、嘘だったんですね。でも、このメルヘンの方がずっと夢があっていいのにね。「誤読」の方がキレイだよ。

ところで、カエルは闘争心が余りない（ように見える）という話だ。「負けるな一茶 ここにあり」の句を、ある学者は、こう解釈していた。これは、カエルの喧嘩ではない。カエルの交尾だ。ヤセガエルがデブガエルの背中にしがみついて、必死に交尾しているのだ。その「種の保存」というか、生の欲求というか、その姿に感動して、一茶が、「がんばれ！」と声援を送ったのだという。うん、これもありうるな、と思った。

だとしたら、とても、中学や高校の教科書には載せられないな。そうか、本当は「交尾」の句なのに、それでは文学にならないし、子供にも教えられないと思った人々が、意図的に「誤読」して、きれいな俳句にしたのではないだろうか。うん、こっちの方がありうる。

そこで又、「衣ほすてふ」の歌に戻る。中西進は『謎に迫る古代史講座』の中で、斬新な中西説を披瀝しているが、その前に一言、こう言っている。

「すでに書いたことがあるが（『万葉の秀歌』講談社現代新書）、持統天皇の名歌「春すぎて夏来たるらし…」

ここから、彼の「解説」が始まる。それは紹介した。しかし、『万葉の秀歌』にもっと詳しく書いているという。じゃ、それを読んでみようと思った。講談社現代新書なら、どこの本屋にもある。すぐ見つかるさ、と思った。しかし、ない。どこの書店にもないし、図書館にもない。かなり古い本だから絶版になったのか。あるいは、変な解釈をするから取り払われたのか。茂吉の呪いか。持統天皇の呪いか。フリーメーソンの陰謀か。

仕方がない。図書館で注文して、探してもらった。そしたら、やっとあつ

たんですな。野方図書館に一冊あった。それを取り寄せてくれた。一冊と
いったが、(上)(下)の二冊になっている。昭和59年5月20日第一刷発行に
なっている。この歌は（上巻）に出ていた。

「以前から、すでに7世紀の後半にあって季節到来を躍動的に詠んだのだ
といわれ、一般にはそう考えられているが、いわゆる季節の推移感を当歌に
見るのは、早すぎるように思われる」

と言う。その理由として、こう言うのだ。ちょっと長いが、彼の見解を聞
いてみたい。

〈東歌（あずまうた）の「筑波嶺（つくばね）に雪かも降らる
否をかも かなしき児らが布乾（にのほ）てるかも」や、平安時
代の流行歌である風俗歌の“甲斐が嶺に白きは雪かや いなをさ
の 甲斐の裘衣（けごろも）や晒す手作や晒す手作」などは、と
もに山に白いものが見える事実があって、それをどう見立てるか
を楽しんでいる歌である。民衆は見立ての名人で、それを思いが
けないものに連想しては楽しんだのである

『播磨国風土記』 飴磨（しかま）の郡妃（こおりきさき）の里
に、「…品太（ほむだ）の天皇夢前丘（いめさきのをか）に登り
て望み見給へば、北の方に白き色の物ありき。勅りたまひしく
『彼（そ）は何物ぞ』と…舎人、上野の国の麻奈田比〔田へんに
比の一文字。JISコードにない字のためこう表記します〕古を遣り
て察（み）しめ給ふに、申ししく『高き処より流れ落つる水、是
なり』と…即、高瀬の村と号（なづ）く」とある。これも白きも
のを滝と見立てたのである。こうした伝統との連関のなかで、こ
の歌を考えなければならぬのではないだろうか。

持統天皇と志斐の姫（おみな）この、「強語（しひかたり）」
をめぐっての戯れの贈答歌に見られるように、女帝の周辺には、
こじつけをたがいに享受する雰囲気がある。この歌も、香具山の
雪を見て、それを「春も過ぎ、夏が来たらしい。白い布が干して
ある」と冬の後宮から見立てて、戯れ楽しんでいる一首である〉

さーて、皆さんはどう思ったでしょうね。なるほど女帝のまわりには、こ
じつけを享受する雰囲気はあった。だから、冬の雪を見て、それを「白妙の
衣」を見立てる遊び心も可能性としては、あったかもしれない。しかし、こ
の歌が、「戯れ、楽しんでいる一首である」と断定するのはどうか。「こん

な解釈も出来る」「もしかしたら、こんな場面かも」と言うなら分かるが、これほど強く断定されると、逆にホンマかいなと思ってしまう。さらに、茂吉、大岡信をはじめ、万葉研究をしている人で、誰一人、この「中西説」に賛成する人はいない。それも、信憑性が、ちいとないと思う。

というわけで、「解答」のないまま、今回は終わる。しかし、入試に出た時は、困るだろうね。へたに中西の本を読んでた人は落とされるかもしれない。そしたら、これは「洗脳だ」「踏み絵だ」といって抗議するか。でも、共産主義の踏み絵じゃないから、保守派の中の「内ゲバ」になるかもしれない。

【お知らせ】

(1) 2月26日付の「朝日新聞」（北海道版）に私のコメントが出ました。

「イラク派遣こう思う」シリーズの4回目だ。「安易な『愛国心』は危ない」「左翼だらしくなく、右翼も大政翼賛的」と、6段のコラムでした。

(2) 3月3日発売の『ダカーポ』（3月17日号）は、特集が、「いま、ここにある『壁』・日本と韓国と北朝鮮」です。私もコメントしています。

(3) 3月4日(木)発売の『女性セブン』（3月18日号）で女帝論の特集をやっています。「問題提起・雅子さま苦悩の渦中。『女帝論』の弊害」です。私もコメントしています。

(4) 2月27日(金)に静岡の植垣康博さん（元連合赤軍兵士）に呼ばれ、スナック「バロン」で講演してきました。珍しく、店が満員で、私も頑張って話してきました。

(5) 3月1日(月)、仙台の東北学院榴ヶ丘高校の43年ぶりの同窓会でした。又、その日の昼には同校の卒業式に列席しました。ミッション・スクールですので、勿論、日の丸も君が代もありません。聖書を読み、讚美歌を歌う、清らかな卒業式でした。いいですね。詳しくは次号にでも。

(6) 3月13日(土)は午後3時から、「レコンキスタ300号記念 読者の集い」です。会費3千円です。ぜひ、どうぞいらして下さい。

(7) 3月17日(水)は午後7時から一水会フォーラムです。講師は中山嶺雄氏（一日会主宰）。演題は『日本が病める世界を救う』です。場所は高田馬場シチズンプラザです。ぜひご来場下さい。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン / 丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年3月15日

静岡の連赤酒場「バロン」に行ってきた

(1)私は嘘はつきません。踊り子の沢口嬢も証言してくれた

2月27日(金)、静岡市のスナック「バロン」に行ってきました。何も酒を飲みにわざわざ静岡まで行ったではありません。「イラク問題について話してくれ」と言われて行ったのです。「バロン」の店長(マスターというのかな)は、元・連合赤軍兵士の植垣康博さんです。だから、静岡では有名な店です。そこで、左翼っぽい人も一杯来るんです。

開店してもう3年になるそうです。一周年の時は、他に場所を借りて、300人ほどが集まり盛大な集まりをしました。連赤事件を描いた映画「光の雨」の原作者・立松和平さんが記念講演をしました。三浦和義さん、宮崎学さん、風見愛さん(ストリッパー)なども駆けつけてました。

開店したばかりの時は、「1年ももたない」「半年ももたない」と言われてました。ところが、1年もった。だから嬉しくて、一周年パーティをやったんでしょう。それが今や3年目。たいしたもんです。

この「バロン」は酒を飲ますだけでなく、時々、いろんな人を講師に呼んでトークイベントをやってます。まあ、東京のロフト・プラスワンに対抗してるんですな。僕も何回か行きました。でも、いつも人が少ない。5人か6人位しかいない。もっとも、僕だから人が集まらないのだろう。宮崎学さんなどの有名作家が来た時は、店に入り切らなかったというし。又、中村うさぎさんが来た時もそうだったという。

だから、「持ち込み」で3人、連れて行った。メーリングリストで20人ほどに呼びかけた。静岡までは新幹線で1時間。5時半に東京駅を出て、11時半には東京に戻れる。日帰りで旅費は1万円だ。「日帰り・連赤見学ツアー」を募集したわけだ。正確には「連赤見学」じゃないな。「連赤兵士社会復帰 見学ツアー」だな。脚本ライター(志願)の関口君にも声をかけたけど、「夜学の授業がある」というので行けない。植垣さんとロマンスが

あって週刊誌にも書かれた風見愛さんは、「じゃ、行くわ」と言っていたが、仕事が遅くなって行けなかった。そこで、やはりストリッパーの沢口ともみさんと、もう二人の女性が行くことになった。「三人の踊り子を引率して行くマネージャー」といった感じでしたね、私は。

東京駅の「銀の鈴」で集合したんだけど、会うなり、「HPに出てたことは嘘なんでしょう」と二人組は沢口さんに訊いている。失礼な奴だ。私を「嘘つき」呼ばわりしとる。このHPに、前に書いたけど、沢口さんはイラクに行った。「反戦自衛官」として、テレビに連日、出た。それを両親が見て、ビックリ仰天した。「自衛官をやめてからも、かたい仕事をしてると思ったのに…」と腰を抜かさんばかりに驚いた。普通のOLになってるか、出版社に勤めてると思ったのに…。

沢口さん本人も、「出版社に勤めている」と親に言っていたんだろう。誰とは名前を言えないが、ストリッパーをしてる人は、皆、「出版社に勤めている」と親には言っている。出版社は入社時間も自由だし、「出張なのよ」「取材なのよ」と言って地方に行く「言い訳」も出来る。

ところが、「反戦自衛官」として有名になった為に、沢口さんは親にバレた。今年の正月に郷里に帰ったんだけど、家では、針のむしろだったそう。いきなり父親が殴りとばし、母親はヨヨと泣き崩れる。というのならドラマチックだが、そんなことはない。何も触れない。無視なんだそう。ただ、こんな事があった。沢口さんがお風呂に入り、出て来た時、母親とバッタリ会った。職業柄、前を隠したりしない。堂々と出てきた。お母さん、娘の裸を見て、一言、「まあ、その身体で」と言った。あとは絶句。

ここだけがドラマチックな場面でしたね。沢口さんから聞いたので、「これはいい話だ」と感動して、私は書いたんですよ。この言葉の裏には、どんな思いが込められていたのでしょうか。

「せっかく苦勞して育てたのに、ストリッパーになんかなって」という親の悔しさなのか。「そんな可憐な身体を男共のギラついた獣欲の前にさらしているのか」という悲鳴にも似た気持ちだったのか。あるいは、「エッ、この程度の身体でやれんの。じゃ私だって」という対抗心だったのか。ウーン、複雑ですね。現代文の入試ならば、「この母親の心境は次のうちどれか。正しいものを選びなさい」と設問をつくれますよね。勿論、正解は、「じゃ私だって」という対抗心ですね。

ともかく、「まあ、その身体で」と母親が思わず言ったのは本当だ。それなのに、静岡に行った連れの二人は、「あれ本当なの?」「嘘でしょう」と

沢口さんに聞いている。「鈴木さんはよく嘘を書くから…」とも言ってる。ヒデー奴らだ。いつ嘘をついたよ、言ってみろよ、と思ったね。大体、あんな面白すぎる話を、想像や妄想で作れるかよ。作れたら、とっくに大作家になってるよ。沢口さんは、「いや、あれは本当です。鈴木さんの書いてることは全て真実です。私が言ったことを書いたんです」と、ちゃんと証言してくれた。それでも二人は不服そうな顔をして黙り込んでいた。

女性3人組は、「パロン」は初めて。静岡も初めて。植垣さんに会うのも初めて。「殺人犯」に会うのも初めて。そこで、キャッキョッとってはしゃいでいた。パロンに行ったら、活動家くずれの口の悪いおっさんに、「鈴木さん、またキャバクラのネエちゃんを連れて来たの？」とひやかされた。さらに、3人組の1人のコンビニ店員に対し、「おっ、胸の開いてるところがいいね」とジロジロ見てる。口も悪いけど顔も悪いオッサんだ。

それに、「またキャバクラの…」と言われたけど、前回だって違う。3ヶ月ほど前、「日本列島ウラ情報」という雑誌の企画で植垣さんと対談した。編集者の女性と一緒にいった。若くて美人だった。そしたら、この口の悪い人が、いきなり、「鈴木さん、キャバクラのネエちゃん連れて来たの？」と言ったんだ。さすがに編集者はムツとして、「左翼くずれはクズや。嫌いや」と言って、もう口をきかなかった。このオッサんにしたら、しろうとの女性は知らないし、それに大体、友達もないし。だから、きれいな女性を見ると、「キャバクラ嬢」と思うらしい。だから、「キャバ嬢？」と言われたのは、「きれいやね」と言われた褒め言葉だと思って下さいな。編集者も、三人組も。

しかし、沢口さんには助けてもらいましたね。「HPに書いてることは嘘じゃない」と証明してくれたし、さらに、この日は、「イラク報告」までやってくれたし。それにイラク問題では、僕よりも沢口さんの方が詳しい。僕はイラクには去年の2月に一回行っただけだが、沢口さんは三回も行っている。それに、向こうでは演説までしている。被爆二世として、アメリカの残虐さを訴えた。聞いていたイラクの人達は皆、感動していた。でも、「そんなにアメリカに酷い仕打ちをされながら、なぜ、日本はアメリカの言いなりになってるんですか」と聞かれ、答えられなかったという。そうですよね。二度も原爆を投下され、唯一の被爆国なのに、アメリカの言いなりだ。そして自衛隊まで出している。

(2)右も左も、『柔侠伝』の世界を生きとった

ともかく、沢口さんに「助っ人」してもらい大いに盛り上がりました。僕が今まで行った時は、いつも5、6人位しかいなかったが、この日は30人位、集まって、お店が満杯。「なんだ、やれば出来るんじゃないか」「客はいたんだ」と思いましたよ。それに討論のやりとりもよかったですね。じっくりと話し合い、中味の濃い話が出来たと思います。そうだ、沢口さんにもこのHPで報告を書いてもらおう。「おーい、お願いしますよ」（と呼びかけている）。

帰りの新幹線の中で、「でも、なんで『バロン』なの？」と、三人娘が話し合っていた。「鈴木さん。どうして？」と訊いてくる。こっちは本を読んでいるし、喋るのはおっくうだ。それに、「仕事」はもう終わったんだ。「ウルセーな。バロン、バロンという顔をしてるからだよ、植垣さんが」と言ったら、納得しないのか、三人とも不服そうな顔をしていた。じゃ、仕方ない。ここで説明してやるよ。特別サービスだ。

バロンというのは、男爵のことだ。居酒屋でよくジャガバタをキミたちは食べるよね。そのジャガイモは北海道が特産だ。外国から来たバロンが発明したんで、「男爵イモ」と名付けられた。又、昔、オリンピックで馬術競技に出た日本人の男爵がいて、「バロン」と親しまれていた。でも、戦争で亡くなった。敵国アメリカも何とか、このバロンを助けようとしたが、ダメだった。降伏するよりは死を選んだのだ。土方歳三のような男だった。

植垣康博さんも、おじいちゃんが男爵だった。それで連赤時代から、皆に「バロン」と呼ばれていた。「えっ？ あのスキンヘッド・デブが？」と失礼なことを言っちゃいけない。連赤事件で逮捕された時の写真を見てみなさい。やせて、精悍な顔をしている。まるで土方歳三ですよ。

「でも、先祖が男爵だったら、それだけで連合赤軍では、査問・総括されるんじゃないの？」と思うかもしれない。イヤリングをした位で、「ブルジョワ的だ」と言って総括された人がいた。「ちり紙をとってくれ」と言っただけで、「革命家としての覚悟がない」と総括された人がいた。だったら、「男爵」なんかなおのことだ。

「よど号」ハイジャックした9人の赤軍派のうちの1人は、実は、かなり裕福な家だった。ブルジョアだった。それで、仲間に責められ、「スパイではないか」と疑われたこともあった。高沢皓司の『宿命』に書いてあった。下らない理由だと思った。そんなら、リーダーの田宮高麿はどうだ。「高麿」なんてお公家さんの名前じゃないか。これだって、査問の対象になるだろう。

それで、植垣さんだ。男爵だったら、なおのこと査問・総括だ。実際、彼は総括にかけられた。でも、「男爵だから」という理由ではない。「女問題」だ。ストリッパーとの不純異性交際を責められたのだ。いや、違った。同志の女性との交際を問題にされた。そして、「お前は女にもてたい為に運動をやってんじゃないか」と糾弾された。「そうです」と言ったら面白いが、そんな冗談が通じる相手じゃない。又、そんなことを言ったら、「反革命だ！」とあって、即、処刑だ。植垣さんは、「そんなことはない」と言い張り、闘い抜き、そして生還した。

「それで男爵はどうしたの？」って。そんなこと訊かれても困る。植垣さんは元々、男爵でも何でも無い。先祖にも男爵はいない。じゃ、なぜ、おこがましくも「バロン」という名を付けたかだ。ウーン、なんでだろう。彼にバロンという雰囲気があったからか？ ババロアが好きだったから？ えーい、面倒くせえ、バロン吉元（漫画家）が好きだったから、というのはどうだ。うん、これにしよう。

「そんないいかげんな事を…」と三人娘はフグのようにふくれっ面をしていた。

でも、一見、嘘のように見えることが案外と本当なのです。正解はこれなんです。バロン吉元からとったのです。もっと正確に言うならば、バロン吉元の大河マンガ『柔侠伝』が好きで、これからとったんです。このマンガはかなり古い。「漫画アクション」に昭和45年（1970年）の6月11日号から連載が始まり、長期間続いた。この年、70年は、3月に「よど号」ハイジャック事件があり、11月に三島事件があった。連赤事件まであと2年だ。植垣さんは赤軍派の活動家だった。爆弾をつくったり、郵便局、銀行を襲って金をとる「M作戦」に従事していた。ゲリラ闘争の時代だ。そんな時、アジトにこもって、『柔侠伝』を読みふけていた。

同じ頃、私も、高田馬場の阿部勉氏のアパートに転がり込んで、そこで『柔侠伝』を読みふけていた。私は、この年、産経新聞に裏口入社した。住む所がなくて困ってたら、阿部勉氏（「楯の会」一期生）が、「うちに来たら」というので転がり込んだ。阿部氏は、吉田松陰とバロン吉元が好きで、その二人の本を読めと僕もすすめられた。

この年、11月に三島事件があり、その後、阿部氏、犬塚博英氏、そして僕などが中心になり、一水会をつくる。そのことについては、最近出た『最後の浪人・阿部勉伝』（山平重樹著・恵文社）に詳しい。読んでほしい。

では、又、植垣さんの話だ。このマンガが大好きで、さらに、『柔侠伝』

の主人公・柳勘太郎に似てると言われて、誰言うともなく、植垣さんは「バロン」と言われたという。だから、連赤時代も、「バロン」という渾名はあったんだ。でも、そのことで査問されなくてよかったね。

まあ、そんなわけで、スナックの名前を「バロン」にしたわけだ。でも、ちょっと分かりづらいやね。ここまで説明しないと分からない。どうせなら、スナック「連合赤軍」とか、スナック「総括」という名にしたら、一目瞭然なのに。あるいは、「監獄酒場」にしてもいいな。六本木や渋谷にあるそうだが、鉄格子がはまっている。牢屋に入れて鍵をかける。「看守」が食事を運んでくる。そういう監獄酒場があるそう。結構はやってるらしい。

「行きましょう」と植垣さんに行ったら、「27年もいたんだ。もう行きたくない」と言っていた。

じゃ、イメクラ「連赤」をつくるのもいい。「総括プレー」「処刑プレー」とかやって。こりゃ恐ろしそうだな。

では、『柔侠传』の話をもう少し。それにしても、「漫画アクション」に70年6月から連載が始まった。なんてよく覚えていると思うでしょう。本当は覚えちゃらんとです。「70年代だったかな」とおぼろげな記憶があるだけです。全てがそうだ。「あの事件を起こしたのは80年代かな」「あの犯罪をやったのは90年代かな」と、大体、10年単位で覚えちよるだけです。

だったら、なぜ『柔侠传』だけ、正確に覚えているかだ。実は、虎の巻がある。文芸春秋社の『少年少女マンガ・ベスト100』（文春文庫ビジュアル版）という本が手元にある。これを見て、書いてるからだ。1992年刊で、580円だ。『柔侠传』は30位になっている。私は「1位」にノミネートしたのに。そうそう、いろんな人々の「大アンケート」によって、1～100位までが決まっているんだ。この本の中には、私が書いた「私のマンガ論」がかなり長く書かれている。『柔侠传』については短く、こう触れている。

〈「柔侠传」と、この後の「昭和柔侠传」「現代柔侠传」を含めて、これは大河ドラマならぬ大河マンガです。柳勘九郎、勘太郎、勘一の三代にわたる柔道家の目を通して見た日本の激動の歴史がビシビシ伝わってきます。胸を熱くして読みました〉

他には、北村想（劇作家）が、「これ以上面白いマンガに出会っていない」。

李泰栄（CFディレクター）が、「男が泣くシーンをここまで美しく描けた作品はいまだにないのでは…」 中尾亘秀（ジャーナリスト）が、「子連

れ狼」と共に)『漫画アクション』を背負って立った青年誌ジャンル確立の一大功労作」と言っている。

(3)最後の浪人・阿部勉氏の名セリフ。「大義は尊皇・道は忠」

僕は親子三代にわたる大河マンガだ、と書いたが、主人公はこの三人だが、その他にも、勘九郎の父・秋水がいるし、勘一の子供の勘平も出てくるし、正確には、5代にわたる物語だ。明治、大正、昭和と続き、戦争、革命、共産党、右翼と政治的・社会的事件も出てくる。マンガで見る〈日本史〉だ。単なる柔道マンガではない。ぜひ「マンガ喫茶」で読んでみたらいい。この『少年少女マンガ・ベスト100』には、粗筋が出てるので少し紹介すると。

明治18(1905年)、柳勘九郎は柔術家だった父、秋水の志を継いで講道館柔道と対決する。その後、運命は変転し、ヤクザの大親分を殺害し、監獄に入る。大正3(1914年)、勘九郎出所。天覧試合に出て勝つ。さらに駒子と共に満州に渡り、正義の馬賊となる。さらに、昭和11年(1936)に飛び、勘九郎の子、勘太郎を主人公にした「昭和柔侠伝」になる。そして、その子の勘一、勘平の代の「現代柔侠伝」へと舞台は続く大河マンガになる。

〈「『柔侠伝』の主人公は人間本来のリアルな生活臭とさまざまな煩惱をもったマンガ史上初めての“柔”のヒーローなのです」とは作者の言葉(中央公論社版あとがき)。そんな主人公の行動ひとつひとつが好ましい。また出番は少ないが駒子も魅力。〉

駒子以外にも魅力的な女性が沢山出てくるし、政治問題、社会問題にもページを割いている。砂川闘争、安保闘争も出てくるし、その中で、柔道家として闘ってゆく。柔道家なら、〈体制側〉かと思うだろうが違う。大学の運動部ではない。むしろ、親子三代は革新的、反体制的だ。だから、右翼の悪い奴らと闘うし、権力の番犬になった柔道家とも闘う。この「悪役」の中にも魅力的な人間がいる。柔道が強くて、しかも右翼団体のリーダーだ。さらに頭がいい。右翼理論を滔々と述べるし、名台詞もはく。うん、これはいいなーと阿部氏も僕も、読みふけていた。感化されていた。

さて、『最後の浪人・阿部勉伝』の、144ページを開いて下さい。「レコンキスタ」第8号(昭和51年4月1日号)の一面の写真が出ています。ここに阿部氏は、「追悼 前野光保君」を書きました。前野光保という人は、ロマンポルノの俳優でした。ロッキード事件で疑惑の焦点になった右翼の児玉

誉士夫の自宅に小型飛行機で突っ込み自爆した青年です。阿部氏とは交流があったそうです。しかし、この前野青年、別に右翼運動をしてたわけでもなく、いわば「潜在右翼」でした。それに「右翼の巨頭」を狙ったとあって、右翼の人達は沈黙しました。中には、「ポルノ俳優が特攻隊のマネをしやがって」「自殺志願者のパフォーマンスだ」と言う人もいました。その中で、阿部氏だけが、敢然と、前野青年を弁護し、支持したのです。大反響を呼びました。又、これは名文です。格調高い名文です。この本の中でも、部分的に引用されています。

〈大義は尊皇。道は忠。この絶対命題の下、吾々の先人は曾って「反権力」と云ふスローガンを掲げました。資本主義であると共産主義であるとを問はず、諸権力が彼等の詩心を保障する唯一の源泉たる天皇との回路を遮断する危険性を常に内包することを熟知してゐたとしますと、このスローガンは至当であり、そのものそのまが既に詩であったと言へませう〉

〈詩はしばしば死に通じます。そのやうな軌跡を辿った先人には、ざっと見渡して見ますと、例へば来島恒喜、山口二矢、平岡公威、森田必勝がゐますが、最近死んだ前野光保君もやがては彼等の範疇の1人として数へられることになると思ひます〉

〈戦後詩が失はれて久しいと云はれます。跋扈する幾多の散文は詩を嘲笑ひ、檻の中に逼塞した詩は俯き加減に寡黙を続けてゐるうちに、やがて日陰の生活に耐へ切れずに散文に媚び阿ねり、その尊貴性を自ら放棄して来ました。(中略) そのやうな圧倒的な散文支配の状況下で生まれ育った若者達は羽撃かんととしては羽を折られ、叫ばんとしては声帯を破られて来ました。詩の敗北、換言すれば相対性の勝利、それが戦後日本のありのままの姿だと言つてさしつかへないと思ひます〉

歴史的かなづかいで書かれた格調高い文章だ。こんなに素晴らしい名文を書ける人でありながら、何故か、残っている文は二つしかない。一つは、この「レコンキスタ」に載った文だ。もう一つは、「青年群像」(昭和50年6月号)に載った「爆弾投擲者への哀歌」だ。そして二つとも、実は僕が頼んで書いてもらった。

さて、「レコン」の話に戻る。前野青年を悼む文章の中で、「大義は尊

皇・道は忠」と書いている。いい言葉だ。リズムカルだし、スローガンにもなる。阿部氏も凄いキャッチコピーを考えるもんだ、と思った。しかし、「実は…」と後で教えてくれた。「実は、柔侠传にあったんだよ」と。さっき書いたが、「かたき役」の右翼の柔道家が自分の理論を語る時に、これを言ってるのだ。「ヘエー」と思った。こんな格調高い名文を書きながら、さりげなく、マンガからとった言葉を入れておく。そんな〈遊び心〉も持ってたんだ。阿部氏は。ともかく、凄い人でしたよ。もったいない人だった。太宰治か坂口安吾になれた人だったのに。無理を言って、もっともっと書いてもらえばよかった。この阿部氏のことはもっともっと知ってほしい。ぜひ『阿部勉伝』を読んでみて下さい。一水会を作る時のこともよく分かりますし。民族派運動の歴史も分かります。 ということで今回は終わり。スナック「バロン」、バロン吉元、阿部勉と繋がったところで終わりです。

【お知らせ】

(1) 3月17日(水)は一水会フォーラムです。午後7時からシチズンプラザです。講師は中山嶺雄氏（一日会主宰）。演題は「日本が病める世界を救う」です。ぜひおこし下さい。

(2) 「創」（4月号）には連載「鈴木邦男主義」を書いています。これを読んだ三人娘が、「これは嘘でしょう。あんな有名な先生がセクハラをするはずがない」と言っていました。バカな。嘘を書いたら、こっちこそ告訴される。私の書いてることは全て真実です。

(3) 3月3日(水)はロフトで上田哲さんとトークでした。さすがは、元国会議員。そして田中角栄を追いつめた上田さんです。迫力がありません。とても勉強になりました。詳しくは来週に。

(4) 3月4日(土)は、山平重樹氏の『最後の浪人 阿部勉伝』の出版記念会がありました。阿部氏を知る日学同、「楯の会」など昔の仲間たちも集まり、阿部氏を偲び、思い出を話し合いました。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年3月22日

「レコンキスタ」300号記念集会。そしてロフトで上田哲さんとトーク

(1)赤報隊について朝日新聞の伊波さんと「恐怖の対談」をしたっけ

先週は、静岡の植垣康博さんの連赤スナック「バロン」に行って来た話を書きました。2月27日(金)のことでした。その前後の事を、まずザッと紹介しときます。一つ一つ書こうと思ってるうちに、どんどん古くなっちゃうので、あわてて概略だけを書き、あとで、その主だったものを詳しく書いていこうと思ってます。

1月13日(火) JR東日本労組の新年会に出ました。

20日(火) ライブ塾（高田馬場）でトーク。

23日(金) 湯沢中学校同窓会

31日(土) 和光大学。岸田秀先生の最終講義を聞きました。

2月10日(火) 一水会フォーラム。百地章氏（日大教授）が講師です（詳しくはレコン300号と、「創」4月号に書きました）。

22日(日) 岸田秀先生退職記念パーティ。

27日(金) 植垣さんのスナックに行く。

3月1日(月) 東北学院高校同窓会（仙台）。

2日(火) 松尾貴史さんの芝居を観る。

3日(水) ロフトで上田哲さんとトーク。

4日(木) 『最後の浪人・阿部勉伝』出版記念会

6日(土) 松元ヒロさんのソロライブ観る。

7日(日) 「ハッスル2」（プロレス）観る。

12日(金) 「日の丸・君が代」問題でテレビに出る予定だったが、直前に中止になった。

13日(土) 「レコンキスタ」300号記念 読者の集い。（於：シチズ

ンブラザ)

と、こんなところかな。じゃ、近いところから行きますか。「レコンキスタ」は創刊300号で、3月13日は全国から、多くの人々が駆けつけて下さいました。「裏主張」（本当は「表主張」ですけど）の酒井徹氏も来てくれました。「あっ、あの勇気のある酒井君か！」と皆、知っており、感激し、激励してました。3時から、この日は、まず伊波新之助さんの講演がありました。伊波さんは、元朝日新聞編集委員です。とてもいい話でした。「レコンキスタが歩んできた道」と題し、レコン創刊号から300号までの歩みを紹介し、分析しました。実に詳しく、的確に評価し、そして批判するところは批判してました。とてもこれだけレコンを、ちゃんと読み込んだ人はおりません。当事者の僕ですら、「あっ、そうだったのか」「そんなこともあったのか」と再発見することが多くありました。

300号の間には、やめようと思ったこともあったし、本当にきつい時もあった。又、レコンをたった一枚で出して、「何だこれは、ビラじゃないか」と馬鹿にされた時もありました。又、例の事件の時は、「こんな奴らの新聞なんか、いらぬ！」と受取拒否で大量に返ってきたこともありました。だから、当事者としては、そうした、事件や外面的なことばかりが思い出に残ってるんですね。

ところが伊波さんは、「レコンの訴えてきたもの」を中心に、内面的・思想的な面を中心に語ってくれました。特に、レコンに載った中村武彦先生、野村秋介さん、阿部勉氏の主張やインタビューを中心に紹介しました。レコンでなければ聞けない〈視点〉もあって、これは歴史的証言になっていると言っていました。昔、僕は血盟団、5.15事件、2.26事件などの関係者に会って話を聞き、『証言・昭和維新運動』（島津書房）という本を出しましたが、このレコンも、やはり、「維新運動」の証言になってるんですね。あっ、そうなのかなと思いました。

僕にとっては、20年前も、30年前も、つい昨日のように思ってたのに、もう、立派に「歴史」なんですね。伊波さんの貴重な話は、次の「レコン」に載るはずですから、楽しみにして下さい。そうそう、伊波さんとは、「赤報隊」のことについて事件直後に対談してます。「容疑者」の僕が、かなり激しく攻められた対談でした。やんなきゃよかったと後悔しました。

『赤報隊の秘密』（エスエル出版会）という本の中で対談をしたんです。何と、45ページも対談をしている。今、読み返してみても、僕は防戦一方だ。「知ってることは全部喋って、楽になったらどうですか」なんて、遠慮

会釈なく伊波さんは攻めてくる。

〈伊波　そういうことを鈴木さんがしゃべれば、警察も鈴木さんと新しい信頼関係が結べるんじゃないですか

鈴木　何を馬鹿なことを（笑）。僕は常に正直に生きてますから、知ってることは何でもしゃべるし、知らないことはしゃべりませんよ〉

〈鈴木　五・一五事件や血盟団事件の時は財界や政界の暗殺リストを作りながら「これは知り合いだから」ということで、リストから外すということは実際あったということです

伊波　そうですか。私もそれで外されたのかな（笑）

鈴木　そんな馬鹿なことを（笑）〉

笑いながら喋ってるようだけど、これは真剣勝負だったし、本当に大変な対談だった。何とか容疑を逃れようとこっちは必死だし、痛くもない腹をさぐられたくもない。だから、「これは右翼じゃない」と全否定するのに急だったし、必死だった。暴力的なことは一切やってないと否定したら、そこを伊波さんに鋭く衝かれた。

〈鈴木　それはまったくくないです。僕は暴力否定論者ですから

伊波　そんなことはないでしょ。あなたの子分どもはどうですか

鈴木　してませんよ（笑）

伊波　いや、それはにわかに否定はできませんよ（笑）

鈴木　そうですかね

伊波　いいじゃないですか。鈴木さん。あっさり認めましょよ（笑）〉

それに、今読み返してみると、伊波さんは、私をかなり挑発している。公安警察の中には、「あれは右翼のはずがないと言う人もいる」と伊波さんは言う。その理由として、「あんなことをやっても金にならないし、売名にならないからだ」と言う。「右翼をそんなふうに見てるのか！」と、カッと怒らせて、喋らせようという作戦らしい。なかなか高度なテクニックだ。あやうく引っかけりそうだった。こりゃ、警察の取り調べよりキツイ。

又、赤報隊の声明文に、「皇紀」なんかを使っているのは、「右翼」に罪

をなすりつけるための謀略だ、と僕は言った。必死に、「容疑」をかわそうとしてたわけだ。でも、伊波さんに逆に、こう攻められた。

〈伊波 声明文でも鈴木さんはしきりに皇紀何年というのはおかしいと言ってますが、まだ運動を始めたばかりの右翼の若者はそういうものを使いたがると思いませんか

鈴木 ギクッ。そうですね。僕なんかも若気のいたりで昔は使ってました。わざと旧仮名を使ったりとかね。今はそういうことはしませんけど〉

本当に、「ギクッ」と言ったんだ。いやー、鋭い人だと思った。「あれは右翼ではない。その理由は…」と言うと、一つ一つ、その理由に反駁し、つぶしてゆく。たいした人だ。タジタジでしたね、私は。朝日の編集委員と話して、「容疑」を晴らそうと思ったのに、これでは逆に、「容疑」を強めてしまった。今、読み返しても恐い対談だ。

(2)非合法闘争の拠点「宝来家」で、「300号」集会の三次会をした

さて、3月13日(土)の「300号記念読者の集い」だが、まず伊波さんが1時間半ほど熱弁をふるい、その前に、木村代表、鈴木顧問(私です)が話し、5時から立食パーティ。7時頃から、下の「いろり」で二次会。さらに9時頃から、三次会。何と、あの「宝来家」で飲みました。焼き鳥屋なんです。ここの二階にかつて一水会事務所があったんです。あの頃は、合法闘争も非合法闘争も何でもござれでやってました。しょっちゅう、ガサ入れされてました。「毎週のようにガサ入れされてた!」と言う人もいました。この頃の事を知ってるのは、もう、4、5人しかいません。

六畳二間の狭い事務所でしたが、とても濃密な活動をしてました。勉強会もここでやってました。野村さんもよく来たし、唐牛健太郎(元全学連委員長)や桐島洋子(作家)なども講師で来てくれた。そう、いやな思い出もあったな。ここで私は逮捕され、手錠をされて連行された。23日も勾留された。でも、「若者たちの神々」に出た時もここだ。「写真に出てるのは、ここの事務所ですよ」と言ったら、大阪から来た酒井君が叫んだ。「あっ、見ました。それで鈴木さんを初めて知ったんです」。そうか。それはよかったね。それで、「面白い」と思ったのかな。あるいは「感動した」のかな。

「ちゃいます。こんないやな人はないと思いました。だって、“俺達だって命をかけてんだ。天皇打倒論者も命をかける。殺されたっていいじゃないか”と

言ってたんですよ。ひどい事を言う人だと思いました」

エッ、そんな酷い事を言ってたかな。まア、あの頃は、命がけで運動してたし、毎日がピリピリして、張りつめて生きてたけど…。俺達だって命かけてやってる。だから、左の連中も、天皇をチャカしたりするんじゃないで、命をかけて反対運動をやってみる。そんなことは言ったような気がするが。

「殺されても当然だ」なんて、そんなメチャクチャな事は言わんやろ。いくら、当時は過激な運動をしてたからといって。そこで、念のために、本箱を探してその本を取り出した。

『若者たちの神々 Part2』だ。筑紫哲也対談集と下に書かれている。「朝日ジャーナル」に連載したものをまとめた。だから勿論、朝日新聞発行だ。1985年5月15日発行になっている。もう20年近く前だ。1200円だ。このあと、文庫にもなっている。

本の帯にはこう書かれている。

「単一の思想が若者の心をとらえる時代が去り、かわって乱立する生き神たち」

そうか。全共闘に象徴されるような学生運動の時代も終わり、連赤、〈狼〉も終わり、「政治の季節」も去った。マルクス主義も失墜し、〈単一の思想〉が若者の心をとらえる時代が去ったといっているのだ。一神教の時代から、多神教の時代に移ろうとしていたのだ。この「Part2」に出てる神々は12人だ。いや、12柱だ。

野田秀樹、村上龍、林真理子、戸川純、大竹伸朗、橋本治、三宅一生、山本耀司、鈴木邦男、山下和仁、小栗康平、中島梓だ。錚々たる人々だ（私を除いて）。又、これを契機として、大きくなり、羽ばたいていった人が多い（私を除いて）。

本の裏表紙を見たら、筑紫哲也の言葉がこう書かれている。

「それにしても、ここに見えてくる光景は、私を含めた大人たちが自分たちにとっては確固たる宇宙、または大伽藍の疑いない前提とと思っていることが実はかなり怪しげだということを思い知らせてくれる。少なくとも私にはそう思える」

なるほどね。すごい企画だ。すごい意気込みだ。「Part1」「Part2」と続き、3、4まで出たんじゃないかな。「Part1」も凄い人が出てる。浅田彰、糸井重里、藤原新也、坂本龍一、ビートたけし、森田芳光、如月小春、新井素子、日比野克彦、北方謙三、島田雅彦、椎名誠だ。

では、私の「問題発言」だ。ゲッ、ちゃんと喋ってるよ。それもラスト

で。ビシッと。その前に筑紫とのやりとりから紹介しよう。

〈筑紫 右翼が怖いということが天皇制の議論を封殺している。怖いから触れないということで、若い世代の関心が低くなる。それでいいんですか。

鈴木 それは右翼にもマスコミにも責任がある。論争以前のキャンダリズム、揚げ足取り、中傷で問題が起こった場合がほとんどだった。理論的な批判じゃない。

筑紫 しかし、右翼が怒るのは、「神聖にして侵すべからず」という前提があるからですよ。

鈴木 いや、そうじゃなくて、理論的なもので天皇否定だったら論争は構わないし、そういう論争だったらいくらでも右翼の人も出てくると思いますよ。言論の権力を持っているほうが、いくら天皇陛下をばかにしたって、ポルノまがいに軽蔑したって構やしないというかたちで出てくる。ところが、されるほうは反論権がないんですよ。じゃ、しょうがねえ、オレが代わってということになる。

筑紫 しかし、学者が研究をやり、天皇制に触れると、右翼からの圧力などが強く、虚心にやれないという雰囲気がある。

鈴木 それはないと思いますよ。それをやるならば右翼がおかしい。ぼくら、理論的なものなら、いくらでも受けて立つ。逃げることはない。藤田省三が彼の本の中でこんなことを書いていたんですね。

--天皇批判に対してテロで反撃するならば、天皇制は血塗られた刃によってしか守れないものになる。そんな天皇制に果たして価値があるのか、と。そのとおりだろうと思いますね、ぼくは。〉

ウーン、ここまではいいんだよね。お互い、言論で堂々とやろう、と言ってんだから。ところが、続いて、こんなことも言ってんだね、私は。それが、酒井君に衝撃を与えたんだよね。

「でも、一方でこうも思うんです。天皇を批判する人間に度胸がない…と。もし、本当に思想に命をかけるというのならば、殺されたっていいじゃないですか。それくらいの覚悟でやるべきですよ。こっちだって、その覚悟でやってるんですから」

凄いことを言ってる。今だったら、こんなことは言わないね。自分の覚悟としては分かるけど、他人に押しつけちゃいけない。と、今なら思うね。でも、この頃は、突っ張ってたんですね。過激派でしたね。

(3)これはロフト始まって以来の壮挙だね。上田哲先生の「特別授業」が行われた

では、話が飛んで、次にいきます。3月3日(水)のロフトです。上田哲さんとトークをしました。上田さんは、元NHKの労組委員長。そして社会党の議員になり、大活躍をしました。あの田中角栄が最も恐れた「論客」です。国会の防衛論戦では、角栄が論破されて、政策を変更したことも度々あった。というほどです。凄い人です。その後、社会党を離れ、今は、インターネットテレビ局「無党派の声」をやったり、街頭に出て人々に訴えています。



ロフトの「案内」には、「新右翼からの反論は？ 火の出る討論こそ望むところ！」と書かれています。しかし、初めから僕は、〈闘う〉気はなかった。むしろ、じっくりと上田さんの話を聞こうと思った。

僕は実は、上田さんと知り合ってから、かなり古い。上田さんが国会議員の頃だった。だから10年以上前だ。テレビの討論会で初めて会ったと思う。

「朝生」だったかな。いや、違うかな。当時、他にも、衛星チャンネルや大阪のテレビなど、討論番組がずい分とあった。そのどこかで一緒した。それも何度か。

社会党のスター議員だったから、さぞかし、ガチガチの人かと思った。つまり、「ダメなものはダメ！」と言って、一切議論しないような人だと思った。憲法だって、「護憲だ！ 論争すること自体、いけない！」と言うのか

と思った。ところが、全く違うのだ。「憲法は大いに論争すべきだ。そして国民投票にかけたらい。その結果、改憲されるなら、それでもいい」と言う。エッと思った。いわゆる社会党の硬直した姿勢と違うじゃないか。こんな頭の柔軟な人がいたのかと驚いた。それから、上田さんのやっている勉強会に呼ばれて話したこともある。帝国ホテルだったと思うが、政治家がよくやっている朝食を食べながらの勉強会だ。ほう、これが朝食会か、と思った。

何かのおり、朝まで一緒に討論したことがある。「あーあ、眠たいな。これから家に帰ってねよう」と思ってたら、上田さんは、サッカーに行くという。へエー、この眠いのに、サッカーを見に行くなんて、大変ですね、と言った。しかし、見に行くんじゃない。自分がやるんだ、と言う。ヒヤーと驚いた。元気な人だ。あの時だって、60代後半だったと思う。

しかし、それから上田さんは何度か選挙に出たが通らない。又、討論番組も極端に減ったから、一緒に出るチャンスもない。何かのパーティで、たまに会う程度だった。だから、「ロフトに出てくれ」と言われた時は、喜んで駆けつけた。

選挙にはずっと落ちてるし、ショボンとしてるのかなと思ったら、大間違いだった。元気一杯だ。70才を過ぎてるはずなのに、若い。声も大きいし、通る。話に説得力がある。いつもはロフトは7時半から始まるが、その日は、7時からスタート。「はじめに30分ばかり私が話して、そのあとでトークをしましょう」と上田さんは言う。ところが、皆が熱心に聞いてくれるし、本人も気分がよくなって1時間以上も熱弁をふるった。それから、二人のトーク。そして休憩を挟んで質問コーナー。

「二人のトーク」といっても、実は、上田さんのトークなのだ。でも、かえって、それがよかった。普通、ロフトでは、こんなことはありえない。まず、一人の人が一時間以上も話し、客がそれを黙って聞いているなんてことがない。たとえ5分か10分でも、一人だけが喋ったら、他のゲストが遮って、割り込む。お互いに力づくで自己主張をする。まるで、「朝生」のミニ版だ。又、客だって、一人の人がずっと話したら、退屈して、ムズがる。「講義を聞きに来たんじゃねえ。ゲストと闘え！」と喚く。闘牛を見に来た観客の気分なんだ。

ところが、この日は奇跡が起きた。1時間以上も上田さんが一方的に喋ったのに、野次も飛ばない。ザワツキもしない。シーンとして、皆、食い入るように上田さんの話を聞いている。上田さんの情熱に打たれたのだろう。

上田さんは、国会での防衛論争の話をする。角栄とのバトルの話をする。又、今回のイラク問題について話す。それも、スライドで年表や、いろんな資料を示しながら話す。実に分かりやすいし、具体的で、説得力がある。まるで大学の授業のようだ。

いや、大学の授業だって、こうはいかない。どこの大学でも、どんな有名な教授でも、生徒は、大半は寝てたり、私語をしたり、メールをしてたりする。この日のロフトは、それが無い。皆、熱心に聞いている。ビックリした。そして、「これはいいな！」と思った。こういう形のトークライブもあっていいだろうと思った。これから、定期的にやったらいい。初めに、1時間ほど上田さんに喋ってもらい、その次に、僕が聞く。さらに、お客さんからの質問を受ける。全く新しい形式だ。これでやってみよう。

かつての国会での防衛論議の話を聞いていて、昔は、国会の論戦もレベルが高かったんだ、と感心した。今は、そんなレベルの高いのは全くない。そして、惜しいと思った。上田さんを国会に送るべきだ。議員というよりも、首相にすべきだ、と思った。本当にそう思った。

上田さんとのトークの翌日は、阿部勉氏の出版記念会に出た。阿部氏が本を出したのではなく、阿部氏について書いた本が出たのだ。先週も紹介したけど、山平重樹氏が書いた本で、『最後の浪人 阿部勉伝』（ジェイズ・恵文社）だ。定価は2100円。ちょっと高いが、とてもいい本だ。出版記念会は4日の夜6時から赤坂の乃木会館で行われた。この日、初めて本をもらったが、帰って、一気に読んだ。阿部勉氏の人間性がよく出ている。読んでいて、思わず涙ぐんでしまった。阿部氏とは一水会をつくる時からの同志だった。「一水会」という名前を考えたのは阿部氏だった。又、下北沢に阿部氏は下宿してたが、そこを一水会の事務所にした。だから、阿部氏がいなければ、一水会はなかった。この阿部氏の下宿のあと、何回か移って、宝来家の二階になった。古いレコンを見ると、「宝来ビル2F」と出ている。「焼き鳥屋・宝来家二階」じゃ、住所として格好悪いから、そうしたんだ。先週は、『柔侠伝』がらみで阿部氏のことを紹介したけど、又、少しずつ紹介していきたい。

【お知らせ】

(1)「上田哲さんの話をじっくり聞く集いをロフトで定期的にやりたいですね」と僕が言ったら、本当に実現した。次は、4月22日(木)です。イラク問題と防衛、そして憲法についてじっくりと聞き、又、僕の考えも話してみたいと思っています。

(2) 3月26日(金)の「朝まで生テレビ」は、「連合赤軍とオウムと日本」をやるそうです。元連赤兵士の植垣康博さんなど、皆さんよく知ってる人も出るそうです。ぜひ見たらよいでしょう。

(3) 4月14日(水)は、ロフトで環境問題のトークがあり、私も呼ばれています。「アースディ」の人達と一緒に出るらしいです。

(4) 4月15日(木)は7時から高田馬場のシチズンプラザで一水会フォーラムです。講師は四宮正貴先生で、テーマは「自主憲法制定と〈現行憲法三原理〉の否定」です。ぜひご参加下さい。

(5) 3月15日発売の「月刊TIMES」(4月号)に私が原稿を書いています。

「征伐隊の素顔と思想--『素人右翼』が社会を攪乱」です。「月刊TIMES」は大きな書店にはありますが、ない時は、(株)月刊タイムス社へ。

03(5269)8461

(6) 宮崎学さんの『警察官の犯罪白書』(幻冬舎)が出ました。なかなか凄い本です。宮崎さんでなければ書けない本です。スタッフの赤坂さんが送ってくれました。ありがとうございます。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年3月29日

これからは岸田秀先生の時代です。「史的唯幻論」の時代です

(1)麻原の三女が和光大学に合格。でも大学が入学拒否だって

「あれはやっぱり、岸田秀先生が退職したからでしょうね」と新聞記者に訊かれた。岸田秀先生は和光大学の教授で、今年の3月で定年退職になった。『ものぐさ精神分析』などのベストセラーで知られる先生だ。和光の名物教授だった。

「岸田先生がいた時だと、きっと反対するでしょうし、あんなことは通らなかったでしょう」と、その新聞記者は言う。

和光大学の「あれ」と言ったら、もうお分かりでしょう。オウム真理教元代表・松本智津夫（麻原彰晃）被告（49才）＝一審で死刑、控訴中＝の三女（20才）のことです。この三女は、劣悪な環境にも負けず勉強し、和光大学の入学試験を受けて、見事合格した。ところが、大学は「麻原の娘」と分かり、あわてて入学を取り消した。ひどい話だ。岸田先生が辞めた後だし、「うるさい奴もいないから」と急遽決めたのかもしれない。岸田先生さえいたら教授会で反対し、「親が死刑囚だからと言って入学取り消しはおかしい」と言ってくれるだろう。マスコミにも出て、どんどんと発言してくれるだろう。そう思ったんだ。

「私はそんな闘士じゃないよ。それも幻想だよ」と岸田先生は言うかもしれないね。なんせ、「史的唯幻論者」ですからね。

岸田先生の話は今週は書こうと思ったら、急にこの事件が新聞に出てた。タイミングがいいのやら、悪いのやら。産経新聞（3月17日付）に出ていたので、それから先ず紹介しよう。

「松本被告の3女の入学拒否

試験合格後に、和光大」

と出ていた。入学試験を受けた段階で分かっていたら、その時点で、「成績が悪いから」と落としていただろう。ところが、学校側はこの段階では気

づかなかった。合格者を発表した後、誰かに教えられて、気づき、あわてた。誰が教えたのか。勿論、公安だろう。学校側もパニックになった。中には、「合格したんだから入れたらいい」という人もいた（だろう）。又、「いや、毎日、マスコミが来て大変だ。とても勉強どころではなくなる」「そうだ、皆が洗脳されて、オウムの拠点校になったらどうする」…という意見も出、こっちの方が優勢を占めたのだろう。

しかし、大学側も格好悪い。どんな理由であれ、合格した受験生だ。それを取り消したんだ。では、どんな理由で取り消したか。いろいろ大学側も考えたんだろう。新聞にはこう出ていた。

〈和光大学（東京都町田市）の三橋修学長は16日、「本人の自由な学習を守り切れないと同時に、在学生の学習環境を維持できないと考え、入学不許可という苦渋の選択をした」とするコメントを出した〉

これじゃ理由になってない。「どんなにいじめられてもいい。学びたい」と本人が言ったらどうするのか。記者会見して訴えたらいい。あるいは、こんなことで差別されるなんて許せないと裁判所に訴えたらいい。そして、「仮処分」で入学させてもらえばいい。こんなことは出来ないのかな。学長はさらにこんな理由もあげている。

「入学した場合、学内外で特異な存在となり、不安や好奇の目にさらされることを防ぐ自信がない。本人に責任がなくとも、学内の平穏な教育環境を乱す可能性が大きい。

賛否の議論はある。社会の批判のあり得ることも承知の上、この決定をした」

開き直ってますね。大学側は。要は、「騒ぎ」になるのが嫌だ、ということだろう。だったら、有名人やタレントなども皆、入学できなくなる。広末涼子を早大に入れるのも、とんでもない。松本の3女よりも、こっちの方が「大騒ぎ」になっていたし、早大の「平穏な教育環境」は完全に破壊されていた。又、現役生が芥川賞になった場合も同じだ。大騒ぎになり、「平穏な教育環境」は壊される。だから退学してもらおう。そういう理屈になるじゃないか。

この事件は、テレビのニュースでも取り上げられていた。文部科学省の人が出てきて、「合格した人を一方的に取り消しにするなんてちょっとおかしい」とコメントしていた。おっ、いい事をいうじゃないか。だったら、「入

学させる！」と指導したらいい。私学だから文科省は言う資格はないのか。そんなことはない。私学援助もしている。強く言ったらいい。どうしても聞かなかつたら私学援助をストップしたらいい。それでも聞かなかつたら、国立大学に優先的に入れてやったらいい。東大でも京大でも、どこにでも。父親のやったことによって、子供が差別を受けるなんて、どう考えてもおかしい。

そうだ、この件を報じた記事に気になった箇所があった。

「(学長の) コメントによると、試験合格後に入学手続き書類を提出させた際、家族構成などから松本被告の3女と判明したという」

他の誰でもいいけど、松本被告の娘だけは入学させたくない、ということだ。「大騒ぎ」になって、勉強できず、皆が困るとか、本人も変な目で見られてかわいそうだ。そう言ってるようだが、本当は違う。これによって、イメージが悪くなり、入学者、そして志願者が減ることを心配したのだ。特に志願者だ。入学する何十倍もの人が受験する。受験料もメチャ高い。極端にいうと、それで大学の経営は成り立っている。それなのに、「オウムの娘」がいるとなったら、志願者は激減する。そう思ったのだろう。この際、少々批判されてもいいから、入学を取り消そう。そう結論づけたのだ。

しかし、後で「家族構成」を見て、大学側はさぞかし驚いたことだろう。じゃ、志願した段階で「家族構成」を書かせた方がよかった、と思ったかもしれない。来年度からはきっとそうなるだろう。

(2)佐川一政さんと連赤事件の加藤兄弟は、和光出身なんだ

それにしても和光は保守的、防禦的だよね。いかんばい。左翼の先生も多いというのに。そうそう、私が和光大学に行った時ですよ。1月31日(土)に岸田秀先生の最終講義を聞きに行ったんですよ。とてもいい講義でしたね。超満員でしたし、マスコミの人も来てました。その後、パーティになったんです。そしたら、知らない先生に声をかけられた。「右翼の鈴木さんでしょう？」と言う。そして、「どうしてこんな共産党の大学に来たの？」と言う。エッ、和光って共産党の大学なのか。

何でも、聞くところによると、和光は自主独立、反体制の大学で、校歌もないらしい。「校歌のもとに心を一つにしてまとまろう」というのはファシズムに繋がる。校歌なんか象徴されたり統合されたりしてたまるか。という気概があるのだろう。でも学生は淋しくて、ひそかに校歌を作って歌っている。この日も、「当局の目を盗んで伝わっている秘密、非合法の校歌をう

たいます」と学生が歌っていた。どんな勇ましい歌かと思ったら、「ミツワ石鹼」のCMソングの替え歌だ。

「ワ、ワ、ワ、ワが三つ
ミツワ、ミツワ、ミツワ
ワコウ」

なんだ、こりや。つまんねえ歌だ。と思った。学内には左翼らしき立て看板やビラがあるから、左翼学生もいるのだろう。それに先生も左翼が多い。先生自らも「共産党の大学」と自嘲的に言うくらいだ。

そうだ。この問題に対し、自治会はなぜ立ち上がらないのか。昔、早大などでは「授業料値上げ反対」でストになった。これでは貧乏な人は大学に入れない。教育の機会均等を壊すものだ。そういう理由で反対し、ストに突入した。だったら、合格した人間を落とすのも「不平等」だし、大学側の横暴だ。「許せん！ ストに突入しよう！」とやればいい。いま時、全学ストなんかやったら、マスコミでも大騒ぎになる。「よくぞやった！」「教育の機会均等の為、がんばれ！」と支援されるだろう。沢口ともみさんや風見愛さんも駆けつけて、スト支援スト（リップ）をしてくれるでせう。

「昔は和光は学生運動が激しかったですよ」と卒業生の佐川一政さんが言っていた。佐川さんて、そう、パリでオランダ女性を殺して食べた人です。

「佐川さんは学生運動をしなかったの？」と僕は聞いた。そしたら、文学青年だったから学生運動には関心がなかったという。でも、当時は、ムリにデモや集会に誘われたんじゃないのかな。「いや、革マルの親分が友達で、彼が守ってくれたんです」と言う。革マルでも当時は文学青年のような人が沢山いた。それで、「あ、いいですよ佐川さんは。勉強してて下さいよ。そして大作家になって下さいよ」とでも言ったんだろう。和光は共産党も強いけど、革マルも強かったんだ。

共産党は今でも強くて、「細胞」もあるらしい。全国の共産党の子供たちはここに入れられる。僕の知り合いにも、そんな学生がいる。

いや、日共や革マルだけじゃない。連合赤軍に行った人もいる。最近、新潮社から出た加藤倫教の『連合赤軍 少年A』を読んだら出ていた。あの山の中に、兄弟3人で参加した人がいた。加藤三兄弟といわれた。兄は、何と和光大学なのだ。しかし、雪山の総括・ランチで殺されてしまう。

2番目が倫教で、この時まだ未成年。逮捕された時も、だから「少年A」と発表された。この後、「少年A」は何十人もいる。いわば元祖「少年A」

だ。彼がまだ未成年だから、3番目も未成年。彼は「少年B」と発表された。この少年Bは逮捕され、少年院を出てから、「キチンと大学を出なくちゃ」と思い、やはり和光大学に入った。この時は、勿論「少年B」ということは知られている。でも、大学側は、「入学拒否」などしない。あたたかく迎えた。その時は、岸田先生もいただろう。「問題」というなら、こっちの方が大きい。だって未成年とはいえ、「総括」「リンチ」に加わり、人殺しに参加している。さらに、「あさま山荘」では、人質をとって立てこもり、銃撃戦をしている。立派な犯人であり、犯罪者だ。それでも、文句も言わず迎え入れている。自治会の共産党や革マルも反対していない。敵対党派だからといって、「来るな！」なんて言わない。立派だよ。大学側も、自治会側も。その点、麻原の娘は、何の罪もない。お父さんは犯罪をしたんだろうが、しかし、本人は何もしてない。無罪無実だ。試験を受けて合格したのに、親の名前を聞いた途端に不合格にした。そりゃないよね。大学側もだらしがないし、自治会もだらしがない。

考えてもみりゃんせ。和光大学といえば、佐川一政さんを生み、連赤の加藤兄弟を生んだ大学だ。それを誇りにしたらいい。大学案内にも書けよ。表紙にこの三人の写真をデカデカと載せる。「さらに、今年は麻原の娘も入学しました！」と書いて、これも載せる。「おう！ そんなに自由で、破天荒で、おきて破りの大学なのか。だったら俺も入ろう！」「じゃ、私も入るわ！」と全国から志願者がドツと押しかけるでありますよ。私だって、もう一度、入ってみようかしらん。「もう一度」といったって和光には以前に入っていない。昔、高田馬場大学を確か、出たはずだ。だから、和光大学に入り直して勉強するんだ。でも、合格しても、素性を調べられて入学拒否になったら嫌だね。いや、それ以前に、学力がないから入試で落ちちゃうだろうよ。

おっと、教授のことで思い出した。和光は反体制の大学だから、権威的・権力的・帝国主義的な校歌はない。ただ、ひそかに伝えられている「幻の校歌」は「ミツワ石鱈」CMの替え歌だ。なさけねえ。こんなことなら、校歌くらい作ってやればよかじゃないか。と私は思いましたね。

ところが、「校歌」はないが、「第二校歌」はあるんだ。「何で部外者のお前が知ってるんだ」と思われるかもしれないが、ここに証拠の印刷物がある。何かの時に役に立つと思って、密かに保存しておいたんだよ、ワトソン君。

えーと、1月31日(土)に和光大学で、岸田先生の最終講義があり、別室で

立食パーティがあった。さらに2月22日(日)には竹橋のKKRホテル東京で「岸田秀先生退職記念パーティ」が開かれた。皇居の見える素晴らしいホテルの豪華な宴会場で行なわれた。この時やはり、「幻の校歌」が歌われた。さらに、この「第二校歌」も披露された。そして、この歌詞は、案内状にも印刷されている。皆で歌ってほしい、ということか。

これが又、凄い歌だ。勇壮・過激だ。「威風堂々」みたいな歌だ。ちょっと紹介するけんね。

我等精鋭（和光大学第二校歌）

我等精鋭 神に召されて敵の中を進む

我等精鋭 荒野に立ちて 敢然と銃を執る

意気揚々と 徒党を組めば

天も地も激す

見よや 遙か あの硝煙ぞ

我等が軍の印

聞けや 彼方（かなた） あの砲声ぞ

叛逆即道の刻（こく）

ヒャー、凄い歌だ。敵の中を進み、銃を執るんだよ。砲声の中、革命戦争をするんだよ。「叛逆即道」（はんぎやくそくどう）だよ。

これはいい。フランス革命の革命歌（のちに国歌になった）のようだ。中国革命の歌（のちに国歌になった）のようだ。和光の卒業生も、皆、この歌をしっかりと胸に刻んで、巣立っていったんだ。佐川一政さんは、フランスに渡り、革命軍に身を投じた、じゃない、ルネというオランダ娘に銃を突きつけて、引き金を引いた。さらに殺して、ルネを食べた。加藤兄弟もやはり銃を持って立ち上がり、機動隊と銃撃戦を展開した。うーん、この歌どうりじゃないか。立派だ。さらに銃をとって朝日新聞に突撃した人もいたし（いないか）。

でも、こんな過激な歌も、学校が作ったのではない。あくまでも、「校歌はない」のだ。ないけど、学生の間ではひそかに「ミツワ石鹸の歌」が校歌、そして、この「我等精鋭」が第二校歌として、歌いつがれてきたんだ。美わしい伝統ですよ。

そうそう。麻原で思い出した。「俺は毒ガス・サリンだ」という歌をうたってた人もいたな。天才在日歌手の川西杏（チョン・ソヘン）さんだ。サリンの格好をして、サリンを撒きながら歌う。サリンを撒くたって、本当

にやったら死刑だ。だから、サリンに似た(?)紙吹雪を撒くんだよね。前に、ロフトで聞いたけど、いい歌だった。でも最近はやらないな。時局がら、〈自粛〉してるんだろうか。何なら、「和光大学第三校歌」にしたらいい。でも、その前に、麻原の三女を入れてやらんとね。

(3)こんな先生はちょっといない。私は嘘をついちよらん

「でも、いくら何でも『創』に書いたことは嘘でしょう」と新聞記者に言われた。『創』には、岸田先生の最終講義の話を書いたのだ。先生には、『性的唯幻論序説』『一神教VS多神教』『日本人はなぜかくも卑屈になったのか』『日本がアメリカを赦す日』など膨大な著作がある。この日の最終講義は、そのまとめにして、さらに再出発宣言だった。

「歴史というものは、英雄がつくる〈英雄史観〉ものではなく、経済的条件によって決定される〈唯物史観〉のでもなく、本能が壊れて幻想の中に迷い込んだ人々の心が紡ぎ出すもの〈唯幻史観〉なのだ」

という。『史的唯幻論』だ。詳しくは『創』4月号を見てほしいが、人間の発祥から説きはじめる。はじめはアフリカに生まれたのは黒人で、その中から白子(アルビノ)が生まれ、差別された。そして、寒冷のヨーロッパへと追いやられた。その時のトラウマが近代史の中に大きく影を落としているという。

「歴史はトラウマに発する。近代ヨーロッパ人の有色人種に対する差別、侵略、虐殺、搾取、植民地化は、かつて白人種が黒人種によって差別され、寒冷地のヨーロッパへ追い払われた恨み、それに対する復讐を動機としている」

そして日本史だけでなく、世界史を根本的に書き改める必要があると言う。最終講義というよりも、次なる大いなる挑戦に向けての「戦闘開始宣言」だった。

終わると、万雷の拍手。そして、女性たちが花束を次々と捧げる。中には抱きついてる女性もいる。もてるんだ、先生は。でも、こんなことで驚いちゃいけない。パーティに出る前に一旦、研究室に戻ったが、生徒や教え子の女性たちがドツと押しかけて、「キャー、先生！」とかいいながら抱きつく。親愛の情を示すのにもオーバーになるんだな。それが和光流なのかと思っていた。そしたら何と、巨乳のおネエちゃんが、抱きついて、さらに、「ねえ、先生。おっぱい、もんでエ」と言う。何を言ってんだ、こいつは、と思った。ピンクキャバレーじゃないよ。でも先生は、「よし、よし」と言

いながら、リクエストに応じて、もんでいる。「そんな事していいんですか？」と僕は思わず叫んだら、先生は、少しも騒がず、「これも幻想です」。

このシーンは、はっきり見た。目撃者も大勢いた。だから『創』にも書いた。ウソではない。「いくら何でも嘘だろう」と記者は言うし、静岡に言った時の三人娘たちも言う。でも、「嘘」を書いたら、名誉毀損になるよ。私は、嘘なんて書きません。

でも、本当のことだけど、ここまで書いていいのかな、という迷いはあった。『創』に書いたおかげで、「セクハラ教授だ！」と大問題になり、学校を追われるとか。『噂の真相』に写真入りで載っちゃうとか。そうなったら大変だと、あたしゃ、悩みましたよ。そしたら、幸か不幸か、学校はやめたんだし、『噂の真相』も休刊になった。「じゃ、いいか」と思って書いた。

その後、2月22日(日)の退職記念パーティに出て、「しまった！」と思ったね。「書かなきゃよかった」という後悔ではない。逆に、「もっと書けばよかった。あんなもんじゃなかったんだ！」という後悔だ。

だって、先生は、「私はセクハラ教授と言われていました。学校には遊びに行ってたようなもので、それでお金をもらっちゃ申しわけないと思いました。セクハラ教授の証拠写真も後ろの方に貼ってますから見て下さい」と実に堂々としている。後ろをみたら、本当だ。教室や合宿で、女子学生と接吻をしている写真が貼られている。それも、頬っぺにチュッというのではない。唇と唇をしっかりと合わせている（舌だっからめっているだろう）。そんな写真が何枚も何枚もある。思わず写真に撮っちゃった。僕が嘘を言ってないという証拠に、ここに提示しよう。小さな写真が一杯あるので、見にくいかもしれないが…。



たとえば、一番下の段の左から2つ目。しっかり、接吻してますね。下から二段目の左はじ。これも、しっかりしてますね。ここにはないが、他にも、ハダカで女子生徒とフトンの中に入ってる写真とか、いろいろある。こ

こまで、あけっぴろげにやられちゃ、誰も文句を言わん。

それに、万が一、こんな写真が出回り、「セクハラ教授だ！」といっても、女の子の方が、「合意です」「私から襲ったんです」「セクハラじゃありません」と供述し弁護するでしょう。それだけ生徒から慕われ、愛されているんだ。

もう一つ、これは22日のパーティの席上だ。何と、司会者が、「先生とキスしたい人がいたら、いらして下さい！」と言う。そしたら、女の子、おばさんたちがドドドーっと駆けつけて、並ぶ。およそ、40人。その一人一人を抱きしめて、しっかりとディープキスをしてましたよ、先生は。

驚きですね。日本で、どれだけ大学教授がいるか分かんが、こんなことを出来るのは岸田先生だけだ。「これも幻想ですよ」と言っていたが、いいねえ、幻想でも。チクショー、いいなーと興奮し、手が震えていたので、決定的な所は撮れなかったが、三人ずつ、壇上に上がり、まず、左のおねえさんと接吻しようというその瞬間の写真であります。

というところで、今週は終わり。あっ、追加だ。麻原の三女の件だが、産経の記事ではこんなことも出ていた。「公安当局によると、三女は昨年も大学入試で合格したが、入学を認められなかったという」。ますますひどい。大学側は何を考えているのやら。

【お知らせ】

(1) 4月は14日(水)と22日(木)がロフトです。14日は環境問題。22日は上田哲さんとのトークです。上田さんとのトークのテーマは、「疑似二大政党制の深刻危機を抉る」です。

(2) 4月6日(火)発売の月刊「創」(5月号)では東北学院高校(ミッションスクールです)の43年ぶりの同窓会のお話を書きました。いろんな因縁話があるんですよ。

(3) 一水会フォーラムは、4月15日(木)で四宮正貴氏の「自主憲法制定と〈現行憲法三原理〉の否定」です。

(4) 酒井徹氏が「レコン300号記念 読者の集い」のために上京し、そのレポートを書いてくれてます。実に正確だし、文章がうまいですね。木村一水会代表も、「優秀な学生だね」と驚き、絶賛してました。

(5) 「東スポ」(3月25日号)の一面には驚き。「『噂の真相』岡留編集長、謎の美女の乳触りディープキス写真」。「謎の美女」は東スポの連載執筆者だし、やらせくさい。こんなことで一面かよ。だったら岸田先生はどうなる。こんなもんじゃねえよ、と思った。

緊急総括！

3月26日(金)の深夜、「朝まで生テレビ」に出ました。「激論！オウム・連合赤軍は終わらない？」でした。いやー、キツかったですね。喋れなかった。あれも、これも喋ろうと考えてはいたんですが、ダメでした。強引にわけ入って喋るだけの力がないんですね。実力不足です。ダメでした。反省します。自己批判し、総括します。ボカ！ ボコッ（と、自分で自分を殴って総括しちよります）。詳しくは次週に書きます。乃木坂君もファルコンさんもパソコンで画像を取り入れてくれてますので、写真付きで報告ませう。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年4月5日

5年ぶりの「朝生」出演でオタオタ、オドオドしたとよ・物語

(1) 「ウナギの匂いだけがせて」なんてしないよ…と

3月26日(金)、「朝まで生テレビ」に出た。久しぶりだ。緊張したし、キツかった。あの一種、独特な雰囲気は出た人でないと分からないだろう。

「ルールのない闘い」のようだ。おとなしくしてたら、3時間、一言も喋れない。頑張っただろうとしても、なかなか、喋れない。10人以上の人々が、われも、われもと喋るから、すぐに弾き飛ばされちゃう。出演前も出演中も胃が痛くなる。

「朝生に出る」と言うと皆、一様に言う。「頑張っ、ガンガン喋れ！」

「他の人間を怒鳴り散らしてでも喋れ！」「ガツンと一喝してやれ！」…と。まるで格闘技だ。何を喋るか、なんか関係ない。とにかく、たくさん喋れ！ 負けるな！ 圧倒しろ！…と、いうことだ。

そんなプレッシャーもあるから、嫌だ。朝生のプロデューサーに聞いたが、初めての人に出演依頼をすると、「でも、怒鳴らなくちゃならないんでしょ」と言われるそう。怒鳴り合い、ガナリ合う。そうしなくちゃいけないと思わせる。そんなムードがある。強迫観念なのか。まるで、マインドコントロールだ。

でも、せっかくの出演依頼だ。逃げるわけにはいかない。「ロクに喋れないから」「気が弱いから」「激論の場はこわいから」と言って断ったら、「卑怯者め！」「日和見主義者」「負け犬め！」「脱落者だ」と言われる。だから、玉砕覚悟で出た。全く「勝ち目」はないのに、まるで、大東亜戦争だね。



3時間はアツという間に終わり、「あーあ、やっぱりオレはダメだな」と思った。あれも言おう、これも言おうと考え、メモしていったのに、全く喋れない。オラは口下手な東北人だから、こんな場はダメなんだよな、と思った。森達也さんも、「ああ、僕は喋り人間じゃないと思いましたね」と言っていた。オウムを取材した『A』、『A2』を撮った監督だ。「あの話をしたらどうです」「A2を中心に、言論の自由と覚悟の話をして下さいよ」と事前に言った。何とか、森さんに話をふろうとしたが無理だった。僕の隣の土本さんや香山さんも喋る機会がない。「この人たちにももっと喋らせたらどうですか」と言おうとした。でも、その機会もない。漂流していて、一枚の板をつかもうとしている人間のような。自分のことで精一杯で、他人のことを思いやる余裕がない。かわいそうだし、申し訳ない気がしたが、自分の力が及ばなかった。

漂流者に例えたが、他の例でいえば、縄跳びだ。一人でやる縄跳びじゃなく、二人の人間が縄の両はじをもって大きく縄をふる。そこに入ろうとするんだが、なかなか入れない。うまい人や慣れてる人は、ヒョイヒョイ入るのに、僕だけは入れない。ためらい、足ぶみしている。そんな感じかもしれない。

もう一つ例を言うならば、車に乗っていて、一般道から高速に合流する時のようだ。躊躇して止まると、いつまでも合流できない。高速では皆、ビュンビュンと飛ばしている。切れ目がない。自分も入らなくちゃ、と思うが、入れない。

…と、そんな気分ですよ。出たことのある人なら、こんな気持ちも分かってくれるだろう。「いかな、オレも喋り人間じゃないな」「何も喋れなかったな。アホみたいだな」と自己嫌悪に陥り、家に帰って、自己批判し、総括しましたよ。自分で自分の頭をポカポカと殴って、「ドジ!」「バカ!」「だめだな」と査問し、総括し、自己批判してました。

「でも面白かったよ」と言ってくれた人が多かったのには救われました。それに、「連合赤軍事件をあそこまで真正面から取り上げたのはなかった」と言ってくれる人もいました。だから、その点では成功したでしょう。

今回朝生のテーマは「オウム・連合赤軍は終わらない!!」。凄いやね。第204弾だ。朝生も17年たつんだね。僕は初めて出たのは平成2年の「激論・日本の右翼」の時だ。14年前か。それから、「憲法」「天皇制」など、大きなテーマの時に出してもらった。それから空白があって、5年ほど前に一回出た。それでもう終わりだね、と思ってたら、今回急遽出ることになった。連赤問題では別に当事者ではないが、植垣康博さんとは何度も対談してるし、植垣さんの『兵士たちの連合赤軍』（彩流社）の「解説」を書いている。そんな縁で声がかかったのかもしれない。

本番の一週間前に、「朝生」のプロデューサーと会った。この時は、25人位「候補者」をあげていて、まだ決まっていなかった。「連赤兵士の植垣さんと呼ぶ」ということだけが決まり、あとは全て未定だ。僕だって、直前に降るされるかもしれない。

その時点で、木村三浩氏（一水会代表）に話をした。「正式に決まっていけど、出るかもしれませんよ」と。そしたら木村氏が、「ウナギの匂いだけかがせて…なんてことはないですよ。プロデューサーが会ったのなら本決まりですよ」と言う。エッ?と思った。

実は、「ウナギの匂いだけかがせて…」という言葉の方に驚いたのだ。「ウナギの匂いだけかがせてウナギを食わせない」と言って、「気をもたせるだけ」の意味に使われる。よく聞く言葉だ。でも、これは「ことわざ」なんだろうか。それで、旺文社の『成語林・故事ことわざ慣用句』を見てみた。しかし、ない。「ことわざ」じゃないんだね。ここには、ウナギ関連は二つしか出てない。一つは「鰻の木登り」で、「全く不可能なことのたとえ」と出ている。こんな諺なんて知らなかった。[類]として、「蚯蚓（みみず）の木登り」が出ていた。これも「不可能なこと」のたとえだ。しかし、ミミズだったら木に登りそうだ。

それで、ついでだ。「蚯蚓（みみず）の木登り」をひいてみた。こうあった。

「（土中で暮らすみみずが木に登れるわけがないことから）絶対不可能なこと、できるわけがないことのたとえ。「蚯蚓の木登り、蛙（かえる）の鯨立（しゃちほこだ）ち」「蚯蚓の木登り、すっぽんの居合い抜き」ともいう」

フーン。つまらなたとえを考えるもんだ、昔の人は。「かえるの鯨立ち」「すっぽんの居合い抜き」だって。今なら、もっと気のきいたことを言えるだろうに。昔のものだから全ていいわけじゃないし、〈文化〉でもないや

ね。

そうだ、この「蚯蚓の木登り」の次には、「蚯蚓ののたくるよう」という言葉が出ている。「みみずがはい回ったような、乱雑で下手な字のたとえ」だと。不愉快だ。こんな諺（というか慣用句）があるために、我々は迷惑を受けている。故なき差別を受けている。何かというと、「お前の字はミミズののたくったような字だ」と言われる。しかし、今の若者たちで、実際にミミズを見たことのない人は多いだろう。ましてや、ミミズがのたくる姿なんて見てないよ。変だよ。それなのに、「字の下手」な人のたとえとしてだけ残ってる。こんなのは死語にしろ。廃止しろ！ 字の下手な人に対する差別だ。

それに、「のたうつ」のなら、ミミズよりも、ストリッパーだ。舞台上裸で、あえぎ、もだえ、のたうっている（らしい。見たことないから知らん）。じゃ、どうせなら、これに変えたらいい。「お前の字はストリッパーがのたうっているような字だ」。なにやら色っぽそうな字だ。でも、本職のストリッパーの字はどうなんでせう。風見愛嬢とか沢口ともみ嬢の字は。やっぱり、「ストリッパーののたうっているような字」なのかもしれない。

(2)源平合戦は、実はカニやホタルに姿を変えて続いとるよ

エーと、この辞書は、読んでると面白いね。「ミミズ」が木登りしたり、のたうったり。その次は何と、こんな言葉が出てる。「耳取って鼻かむ」。何だ、こりゃ、と思ったね。耳をふさいで鼻をかむ、のかな。でも、出来るわけではない。違う意味だ。

「（自分の耳をもぎとって鼻をかむという意から）とんでもないこととてい考えられないことをするたとえ」

なんだ、すげー言葉だな。[類]として、「目を取って鼻へ押しつける」という言葉も出ている。気持ち悪い。しかしだよ。「とんでもないことのたとえ」と解釈してるけど、こんな言葉を考えた奴こそ、「とんでもない」よ。ちゃいますかね。それに、どうやってこんなたとえを考えるのでしょうか。こんな人は「病気」じゃないのかな。精神的にちょっと病んでんじゃないの。精神科医の香山リカさんに診てもらわなくっちゃ。

昔、こんな人がいたんでしょうか。鼻をかもうとした。でも、ちり紙がない。よし、面倒くせえ、と思って、耳をひきちぎって、鼻をかんだ奴が…。いるわきゃないやね。じゃ、こうかな。昔、江戸時代でもいいや。鼻が出そうになった。ちり紙はない。仕方ないから、たれ流しにしたか、手鼻でもか

んだんだろう。でも、この男は、言ったんだね。

「いやー、あの時はまいったよ。よっぽど自分の耳をひきちぎって、鼻をかもうと思ったくらいだよ。」と。

「うん。そのたとえば面白い」と思った人たちが、はやしたて、それが伝わった。こんなところかな。あるいは何かの文学作品にあるのかもしれない。日本じゃなくても、中国だったらあるかな。「三国志」とか「水滸伝」とか。この世界だったら、ありそうだ。自分の耳だと痛いけど、他人の耳ならちぎって鼻をかみそうだ。日本の戦記ものを読んでると、「ちぎっては投げ、ちぎっては投げ」という描写が出てくる。人間をちぎるんだよ。じゃ、敵の耳だってちぎり、ついでに鼻をかんだ奴だっていたのかもしれない。

いやいや、「例の琵琶法師の話から来たのかもしれないな」と、僕の中の分身「コナン少年」が呟く。つまり、壇の浦で死んだ平家の怨霊が琵琶法師に毎夜、琵琶をかなでてもらう。これに気付いたおしょうさんが、法師の全身にお経を書いてやる。でも耳だけは書き忘れた。そうすると、怨霊からは姿が見えないが、耳だけが見える。怒った怨霊は、耳だけをひきちぎって帰っていった。ご存知「耳なし芳一」のお話だ。

実は、この持ち帰った耳で、平家の怨霊は鼻をかんだという。そこから、この「耳を取って鼻をかむ」という諺が生まれた。のではないのでしょうか。これだったら面白い。

でも、この平家の怨霊もアホですね。闇の中に、耳が二つ浮いていたら、その真中に顔があり、身体があると分かりそうなのに。それに原文では、「力まかせに耳をひきちぎった」とあったよ。「ひきちぎる」とは、何か大きな物体があって、そこからひきはがすことだ。だったら、それが法師の身体だと分かるはずだ。（目には見えなくても）。その（見えない）身体ごと持っていったらよかったのに…。うーん、論理的に考えると、変な話だわい。

ともかく、平家の怨霊は知恵足らずだ。そんなことだから壇の浦では負けて、カニにされちゃった。あの地方では、「平家ガニ」がとれるが、皆、人間の顔（それも、平家の顔）をしている。怨霊がのりうつったんですな。しかし、それを食べる人がいる。気色悪いよな。

でも、壇の浦では源氏だって死んでいる。彼らも、カニになって、「源氏ガニ」と呼ばれている。壇の浦の海の底では、だから今も、カニとなって、源平合戦の第二ラウンドのカニラウンドが戦われているのです。又、「源氏

ポタル」と「平家ポタル」というのもある。（本当だよ。嘘だと思ふのなら、広辞苑を引いてみりゃんせ）。源平の戦いは、今度はホタルに姿を変えて続いているんだわさ。つまり、「源平の合戦」は、壇の浦で、まず人間の戦いとしてやられた。第二ラウンドは「カニ」として戦われた。第三ラウンドは「ホタル」になって戦われた。こんなに長いんだよ。だから、日本の歴史も、ちゃんと、ここまで教えなくちゃあかんがよ。

しかし、「朝生」の話から、遠くはなれてしまったな。「朝生」の戦いも、いつかは、「カニ」になり、そして「ホタル」になって続くのかもしれない。ホタルといえば、鹿児島知覧では特攻隊で死んだ人がホタルになって帰ってきてるといふ。源氏ポタル、平家ポタル、特攻ポタル…と。ホタルは偉いんだ。ただの昆虫じゃない。本当は皆、人間なんだ。たわむれに獲ったりしちゃいけない。ホタルは奥が深い。又、考えてみましょう。

では、ウナギの話に戻ります。（そこから、ミミズ、ホタルに話が進化したんだよね）。三省堂の『辞林21』を見たら、やはり、「ウナギの匂いだけがせる」という言葉は載ってない。ウナギに関しては、次の三つだけが出ていた。

「鰻井 ご飯の上に鰻のかば焼をのせてたれをかけたもの」。別に説明の必要はないか。

「鰻の寝床 間口が狭くて奥行きが深い家や場所のたとえ」 あっ思い出した。一水会が出来た時、初めての事務所は下北沢にあった。阿部勉氏のアパートを事務所にしてたのだ。縦にずーっと長くて、まるで洞窟のようなアパートだった。玄関があって、その奥に三畳の部屋があって、その奥が六畳で…と。「まるで、鰻の寝床だね」と皆で言い合っていた。「鰻の寝床」という言葉を生まれて初めて使って、嬉しかった。それから30年。それ以降、使ったことはない。淋しい。「だからどうした」と言われると困るけど、ただ、思い出したので書いたんよ。

『辞林21』には、もう一つ、ウナギがらみの言葉が出ている。

「鰻登り」だ。「物価が急激に上がっていくこと。と出ている。「鰻登りの物価」などと使われる。同じ登るのでも鯉とは違う。鯉は滝を登ったりするし、いい意味で使われる。でも、ウナギは物価など、余りいい意味には使われない。鯉とウナギの登り方の違い、闘い方の差なんだろうか。あるいは、鯉はきれいだが、ウナギはクネクネして醜い。という外見から見た差別なのだろうか。これも謎だ。又もや（自分の中の）コナン少年に考えてもらわにゃならん。

(3)ロフトの「上田哲方式」を私は提案したんじゃが…

さて、「朝生」の一週間前の話だ。プロデューサーと打ち合わせをした。この時は、25人ほどの名前をリストアップしていた。「この人たちの中から、12人ほどに出てもらおうと思ってます」と言う。僕は、「じゃ、塩見孝也さんとか、三上治さん、荒岱介さんにも出てもらったらいいでしょう。中核、革マル、革労協。それに公安にも出てもらいましょう」と提案した。

「考えておきましょう」と言ってたが、結果的には全て却下された。

2、3日前に、パネラーが正式に決まった。元連赤兵士の植垣さんと、元東大全共闘の小阪さん、元民青の宮崎学さん等だ。特に、連赤のことをやりたいので、植垣さんだという。だったら、はじめに植垣さんに一時間くらい喋ってもらい、残り時間を我々が、おずおずと手を挙げて質問する。そういう謙虚な番組にしてはどうですかと提案した。ロフトの「上田哲方式」を提案したのだ。朝生も、ただ、怒鳴り合うだけにしたら、勿体ない。植垣さんは連赤事件の「生き証人」だ。「生きた教材」だ。じっくりと話を聞いたらいい。でも、この提案も却下された。でもでも、結果的には、この計画は半ば成功したかな、と思う。田原さんも、宮崎さんも、私も、なんとか植垣さんにからみ、植垣さんに喋ってもらおうとしたからだ。サッカーなら、なんとか植垣さんに、ボールを渡し、ゴールに入れさせようとした。そんなところじゃね。私は、ほとんど喋れなかったけど、そういう〈大目的〉は達したわけだ。日本は大東亜戦争に負けたけど、アジア解放の目的は果たした、と言われるけど、それに似ている。(それほど大それたもんじゃないかな)。

それで、ウナギだ。まだ、こだわっとる。一週間前に打ち合わせをしたと木村氏に言ったら、「それで本決まりですよ」と言われた。「いや、私だって25人の候補者の一人だから、本決まりじゃないよ」と言った。木村氏は、「テレ朝に行って、打ち合わせをしたんでしょ。決まりですよ。ウナギの匂いだけかがせるなんてことはないですよ」と言う。

つまり、気を持たせておいて、直前に断わるなんてことはしない。と言うのだ。ウナギの匂いだけかがせて、ウナギを食べさせないなんてことはしない、と言う。

「実は、ウナギを食べたんですよ」とその時、私は言った。比喻と思ったんでしょな、木村氏も。「そうですね。本決まりでしょう」

「そうじゃなくて、テレ朝に行って、本当にウナ丼を食べたんですよ」

「…… (?)」

つまり、こうだ。打ち合わせの場所はどこにしましょうかと話した時、「新しいテレ朝に来て下さい。まだ見てないでしょう」と言う。そんで行った。六本木ヒルズの回転ドアを通過して入った。でもテレ朝は隣りだ。そんで又、回転ドアを通過して、隣りに行った。「じゃ、昼メシでも食べながら打ち合わせをしましょう」と言う。「何がいいですか」と言うから、わたしはベジタリアンだから、ソバかうどんがいいですね、と言ったら、案内してくれた。ところが、昼時日本列島だから、ソバ屋はどこも満員。そんで、目についたウナギ屋に入った。ウナギの匂いもかいだし、ウナ丼も食べさせてもらった。だから、木村氏に、「匂いだけじゃない。本当に食べさせてもらったんだ」と言ったわけだ。「そうですね。本決まりなんですよ。頑張ってるんでしょ。時には、怒ってもいいでしょう」と言う。

じゃ、一週間前にウナ丼を食べたことが〈決定〉になったのかな。名実共に。うーん、面白い話ですね。

しかし、本番まで、キツかったですね。勿論、本番中も、イライラし通して、胃がキューンと痛んだけど。あれも言わにや、これも言わにや、と思ってメモしておいたんだけど、「でも、言えないだろうな」と思っちゃう。僕の隣の、元検事さんなんて、山のようにメモを持って机の上に置いていた。でも、ちょっと喋ると、すぐ他の人に、邪魔され、ピシャリと遮られてしまう。かわいそうだ。「中断するなよ、ちゃんと喋らせてあげなよ」と言おうと思ったが、そう言う機会もない。検事さんも内心ムカムカしてたでしょうね。「犯罪者どもが偉そうなことを言いやがって。日本の秩序を守ってきたのは俺達だぞ。お前らなんて出ていけ！ 退席だ！ ポアだ！」と。いやいや、温和そうな方だから、そんなことは考えなかったでしょう。

うーん、「朝生」の内容にふれる前に、ウナギの話だけで終わってしまったな。すんません。自己批判します。皆には、ウナギの匂いをかがせただけで終わってしまった。すいません。総括します。朝生の内容の話は又、次週にでも書ませう。以上、中野山麓のみやま山荘からお送りしました。

【お知らせ】

(1)朝生の次の日、3月27日(日)は三上治さんの『1970年代論』（批評社）の出版記念会がありました。午後2時から。この席に、田原総一郎さん、植垣康博さん、宮崎学さん、そして私と、前日の出演者のうち4人が出席しました。当然、「朝生」の話で盛り上がりました。塩見孝也さんだけは、「昨日の連赤論議はおかしい！ 植垣は間違っている！ 同土遠山をさらし者にしやがって。謝罪しろ。総括しろ！」と吠えてました。「僕も塩見さん

のことは推薦したのに、力及ばずダメでした。自己批判します」と謝った。

(2)「噂の真相」が休刊になりました。それを記念して、『追悼！噂の真相』（1000円）が出ました。木村三浩氏や僕も書いてます。読んでみて下さい。

(3)3月28日(日)、松尾貴史さんのライブを見に行きました。面白かった。去年の12月にパロディ版『朝生』と一緒に出た。「今回もキツかったけど、あれもキツかったですね」とお話しました。「ロフトプラスワンでぜひ一緒にやりましょう」と言ったら、「ぜひぜひ」と言ってました。「ロフトでは前からやりたかったんです」とも言う。じゃ、すぐに交渉して下さいよ、ロフトの人。と、この場をかりて言っちゃいます。それと植垣さんも、ロフトでやりましょうと言ってた。じっくりと三時間、植垣さんだけの話を聞く集まりをロフトでやりますよ、5月か6月に。

(4)4月6日発売の『創』には、私のミッション・スクール時代のことを書きました。思いがけない〈秘密〉があるとです。それが今も尾をひいておるとですよ。

(5)「朝生」の時もちょっと話しましたが、月刊「現代」で田原総一郎さんが、巨弾連載「戦後」をやっています。4月号は「“バリケードの中の青春”始まりと終わり」で、塩見孝也さんなどが登場しています。5月号（4月1日発売）では連合赤軍の植垣さんが登場します。このために植垣さんと3月3日に対談したそうです。それが今回の朝生で連赤をやるキッカケになったわけです。

(6)一水会フォーラムは4月15日(木)の7時から、シチズンプラザです。四宮正貴氏の「自主憲法制定と〈現行憲法三原則〉の否定」です。

(7)ロフトプラスワンは、4月14日(水)に、アースディ主催の環境問題に出ます。又、4月22日(木)は、上田哲さんとのトークです。「疑似二大政党制の深刻危機をえぐる」です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年4月19日

イラク問題では次から次に大事件が勃発だ

BBSにも書きましたが、やはり、木村三浩氏がやってくれました。4月15日(土)、「3人の人質が解放されましたよ」と現地の木村氏から国際電話が入りました。この日は一水会フォーラムがあった日ですが、その時に電話が入ったのです。木村氏は、イラクには24回も行ってるし、イラクには絶大な信用があり、人脈もあります。だから、人質の救出のために、4月10(土)から現地に行ってきました。

木村氏は、イラクの人脈を全て使って、ゲリラと交渉してました。難航してましたが、やっと説得に成功しました。それを知っていたから、僕は、「人質は2、3日以内に解放されます！」と断言しました。4月14日(水)のロフトに出た時です。そして、まさに、その翌日の4月15日(木)に、解放されました。

国際電話で、「よくやったね」と僕は木村氏に言いました。「すぐ帰国するの？」と聞いたら、「いや、もう一つあるから」と言ってました。そうです。この日(4月15日)の朝、今度は日本人2人が誘拐され、人質になったのです。安田純平さんと、渡辺修孝さんです。そして何と、渡辺氏は、元一水会にいた活動家だったのです。それでマスコミの問い合わせがあって、大変でした。

…と、これは、4月15日(木)の夜に書いてます。以下は、その前に書いたもので、少し古くなりましたが、3人救出の時間的経過も分かるでしょうから、あえて載せます。(追記：夕方、安田、渡辺両氏が解放されました。ホッとしました。現地の木村三浩氏からも国際電話があり、木村氏は20日(火)の朝に帰国するそうです。帰ったら詳しい話を報告したいと思いません)。

(1)木村三浩氏が急遽、イラクに飛んだ

小泉首相でさえ、「情報が錯綜している。どれが本物か偽物か分からない」と言っている。又、福田官房長官は「命にかかわることなので詳細は言えない」と交渉の全てを〈秘密〉にしているが、でも、その実態は、首相の言う通りなのだ。日本人3人が人質になり、「3日以内に自衛隊を撤退しなければ3人を焼き殺す」と、「サラヤ・アル・ムジャヒディン」は脅していた。それが一転、「24時間以内に解放する」と声明を出した。しかし、一向に解放はされない。「解放声明」そのものが偽物だ、という情報も乱れ飛んでいる

今回の犯人グループはスンニ派だという。だったら、バース党に近いし、フセイン残党だろう。バース党といえば木村三浩氏（一水会代表）だ。木村氏はイラクには24回も行き、最もイラクを知り、人脈がある。それに日本人でありながら、バース黨員だ。だから向こうには、絶大な信頼があった。木村氏のおかげで、去年の2月、僕らは開戦直前のイラクに行ってきた。塩見孝也さんや、雨宮処凛、パンタさんなど38人だった。

ともかく、日本で一番の「イラク通」だ。だから、人質事件が起こった時、すぐ、木村氏に電話した。この拉致グループについては知らないと言っていた。ただ、イラクにいる人や、ヨルダンに亡命した人を通じて、「人質を解放してくれ！」と交渉していると言っていた。

「犯人グループは人質をとって日本政府に揺さぶりをかけるのが目的だろう。だから、人質を殺すことはないだろう」と言っていた。「でも、心配だから、自分もイラクに行ってくる」と。「じゃ、今すぐ行った方がいいんじゃないの」と僕は言った。そして、次の日、4月10日(土)に彼はイラクに向かった。

木村氏にしても僕にしても、アメリカのイラク攻撃には反対してきた。去年の2月も、そのためにイラクに行った。又、日本の自衛隊がアメリカの言いなりになってイラクに行くことにも反対だ。今すぐにでも撤退してもらいたい。しかし、今回の人質事件で、撤退することには反対だ。ゲリラに脅されて、撤退するのはおかしい。これで屈したら、同じことを又、何度でもやられるだろう。人質の奪還には勿論、全力を尽くしてもらおう。それと、自衛隊の撤退は別だ。

実は、僕らが去年2月に行った時も、外務省から、「行くな」と言われた。いつ戦争が起こるか分からないし、日本政府としては責任を持ってない。そんな所に行くことはまかりならんと言われた。しかし、それを振り切り、無視して行った。その時、38人の内部で話し合った。我々は政府・外務省の

中止勧告を振り切って行くのだ。だから、イラクに行って、もし戦争になった場合、日本国政府に助けを求めるようなことはすまい、と。

政府の中止勧告を振り切って行くところではない。日本がアメリカの言いなりになってることに反対し、自衛隊派遣に反対なのだ。いわば〈反体制・反政府〉だ。国家に反逆して行くのだ。それなのに、向こうに行って戦争になったからといって、国家に「助けてくれ！」などとは言えない。その時は〈自己責任〉で、潔く死のう、と誓い合った。塩見孝也さん（元赤軍派議長）も、「そうだ、人間の盾になって死ぬ。鈴木君も一緒に死んでくれると言った。我々が死ぬことで戦争を止められるなら本望だ」と言っていた。

僕も、その時はその時、仕方がないな、と諦めていた。観光旅行に行くわけではないし、「戦争反対」の意志表示の為に行くのだ。それは当然の覚悟だと思った。

団長の木村三浩氏は、皆の気持ちは分かりながらも、団長としての責任上、「全員の安全」を第一に考え、危なかったら、すぐにヨルダンに脱出する、と言っていた。無理に「抵抗」の意志を示したり、「人間の盾」になって、死ぬというのは避けたいと思ったのだ。団長としては当然の配慮だ。

ただ、あの時は、戦争直前なのに、危険は一切なかった。いつアメリカが攻めてくるかという、〈外部〉からの危険はあったが、イラク〈内部〉での危険は一切なかった。フセイン政権が強固だったし、その意味での治安はよかったからだ。「独裁国」だから、フセインの悪口は言えない。しかし、それ以外の自由は全てあった。市場には物があふれているし、誰だって気楽に話しかけてくる。又我々も1人で、フラフラと遊びに行っても安全だった。夜中に遊び歩いている人もいたが、危険は全くない。

ところが、今は、フセインの悪口は言えるかもしれないが、それ以外の自由は一切ない。何せ、昼間でも外に出れないし、生命の危険がある。物もない、仕事もない、住宅も次々と破壊されている。内戦状態だ。

そんな時に、3人はイラクに入った。去年僕らがイラクに行った時よりも、もっともっと危険だ。彼らは、「アメリカ軍には近よらないようにしている」と言っていた。つまり、自分たちは、イラクのために行くのだ。だから、間違ってもアメリカ軍に攻撃されたり、誤爆されることがあるかもしれない。でも、イラクの人民やゲリラに襲われることはない。と思っていたのだ。むしろ、同じ「反米の同志」だと、（広い意味で）思っていたのだ。その点は甘かったと思う。

フセイン独裁体制下では、今回のような事件は絶対にありえなかった。一

枚岩だし、そんな分派行動、分裂行動をする人はいない。万が一、何かの間違いで、軍隊や警察に捕まっても、交渉が出来る。（実際、去年の2月には、我々のメンバーのうち、何人かは警察に捕まった。1人でフラフラと街を歩いて、軍事施設を写真に撮ったりして捕まったのだ。しかし、バース党の人が交渉してくれて、すぐに釈放してもらった。つまり、政権は一つだから、交渉するところも明確だ。ところが今は、誰が政権をとってるのか分からない。誰が実力者なのか分からない。又、ゲリラグループも、次々と勝手につくられ、行動している。これでは交渉のしようもない。

(2)反戦・反米活動家たちの甘さ、そして錯綜する情報

だから、フセイン独裁政権下よりも、独裁が倒され、「解放」されたはずの今の方が、メチャクチャなのだ。日本の戦国時代のような。いや、それよりも、もっと悪いだらう。「フセインの時代の方がよかった」という声が出るほどだ。

つまり、「解放」された今の方が、危険なのだ。だから、日本人に対し、退避勧告が出ていた。武器を持った自衛隊だってバグダッドには行けない。それなのに3人は、イラクに入国し、バグダッドを目指した。戦争中ではあるが、我々、反戦活動家、ボランティアを狙うはずがない、という甘えがあったのだ。

又、実際、イラクに行ってみれば分かるが、向こうの人々は親日的だ。日本が好きなのだ。あのアメリカと戦い、「ヒロシマ・ナガサキ」に原爆を落とされた。偉大な国だ。「サムライの国」だと、尊敬している。それだけに、「その日本がなぜアメリカの言いなりになっているのか」という反撥・絶望も大きい。

ともかく、イラクの大多数の人々は親日派だ。だから、自衛隊に対しても襲ったりはしない。日本人の外交官が2人殺された事件でも、「いや、あれはイラクのゲリラではない。米軍の誤射だ！」という説がまだある。最近の週刊誌でも、大々的に出ていた。

ましてや、反米の反戦活動家や、民間人が狙われるはずがないと思っていたのだ。ゲリラらと出会っても、「同じく反米活動をしてるんだ」と分かり合える。そう思っていたのだらう。

ところが、〈味方〉であるはずのゲリラが襲ってきた。そして3人を人質にした。「まさか、自分たちが」と3人も思ったことだらう。必死で自分たちの考えや心情を訴えたのだらう。

その「反米」「反戦」の真意が分かり、「24時間以内に解放」という声明も出た。…のだと思った。ところが、それが、どうも、偽物らしいという話になり、事態は二転、三転だ。

一番有力なのは、「ソフト・ターゲット」を狙ったという説。つまり、自衛隊は武器を持っているし、初めから、命をかけている。彼らを攻撃してもリスクは大きい。それよりは、たとえ、「反米」「反戦」であろうと、民間人を狙った方が人質にしやすいし、日本に揺さぶりをかけられる。そういう「非情な論理」が働いたのではないか。

実際、〈効果〉は絶大だった。特に、3人の家族が連日、テレビに出て、〈解放〉を訴えた。それだけでなく、「自衛隊の撤退」まで訴えた。又、署名も集まったし、これを機に、「自衛隊は撤退せよ」という声が世論調査では上回った。「撤退しない」と言った首相には国民の反撥が集中した。

ゲリラとしては、大して効果があるまいと思い、どっちにしても3日間で釈放しようと思った。ゲリラに対する日本人の反撥が強くなっても困るし。と思った。

ところが、憎しみはゲリラよりも、日本政府に向かった。「3人を見殺しにするのか」「なぜ、自衛隊を撤退させないのだ!」と…。おーっ!とゲリラは思った。こんなに効果があるとは思わなかったからだ。じゃ、もう少し人質にしておいて、揺さぶりをかけてやれ、と思った。そんなところだろう。

さらに奇妙なことがある。ここにきて、「日本人の影」が、指摘されている。産経新聞は、「声明文は革マルの文章に似ている」と言っている。そんなに特定していいのかよ、と思うが、凄いことを言う。又、アラブにいる日本赤軍がからんでいるのではないか、という説もある。東スポ(4月14日)は、「解放声明文」は、疑惑だらけだとして、「不自然な部分が多すぎる。日本人が書いた?」と言っている。日本の情報に余りに詳しすぎるというし、イスラム・ゲリラの文章ではないという。

僕も、初めに声明文を読んだ時にも奇妙だと思った。日本の新左翼が書いたとは思わないが、日米離間を画策し、日本人の政府と人民を分けて考えている。さらに、日本人は尊敬するし、好きだが、今回のアメリカ追隨で、軍隊をイラクに派遣したのは許せない、という論理は、何やら、三島事件の時の檄文のようでもあると、(とっ飛ながら)一瞬思った。

産経新聞や、東スポなどは、毎日のように、その点を指摘している。勿論、人質になった3人は何も分からずに、いきなり襲われて、人質になっ

た。でも、その背後には、日本の左翼、反戦活動家が関与してるのではないか。という疑いを持っているのだ。（産経などは…）

この点は分からない。日本人が事件に関与ということはないと僕は思う。それではまるで、「やらせ」ではないか。日本に詳しいゲリラがいるとは思いますが、声明文を書き、誘拐に関わった日本人がいるとは思えない。

でも、一般には、こんな〈憶測〉があるし、政府の冷たいとも言える態度にも、その疑惑が底にあるからではないか、という説がある。（僕は反対だが）一応、国として、自衛隊は出した。「公」のことだ。それを「人質事件」という「私」のことで覆されてはならない。そういう決意と覚悟が政府にはあるのだろう。ここで、自衛隊を撤退させたら、世界中から非難される。「テロに屈した国だ」として相手にされなくなる。じゃ、金を出して解決しようかと思っても、それも出来ない。金を出すことだって、ゲリラに資金を提供することになる。だから、「自衛隊の撤退はしない」と明言し、その上で、「人質奪還、解放のために全力を尽くす」と言ってるのだ。

政府としては口がさけても言えないが、「勧告を無視して勝手にイラクに行ったくせに」「ふだん反政府的なことを言いながら、こんな時だけ政府に泣きを入れるのか」「ましてや、国の決定した自衛隊派遣を撤退させてくれ、なんて、冗談じゃない」という気持ちなのだろう。それに家族の人々の（気持ちは分かるが）あの余りに感情的な言動にも辟易しているのだろう。

さらに、ましてや、声明文を書いたのが日本人の反戦活動家だとか、左翼だとか、いう説も一部にはある。やらせでやっておいて、自衛隊の撤退を要求するなんて、とんでもない。という気持ちも政府にはあるのだろう。

(3) 「人質はゲストとして遇されている」とイスラム指導者が…

今、家族の言動が感情的といったが、あるいはそれも心配の余りだし愛情のなせる技なのだろう。多分、親は僕らと同じ位かもしれない。いわゆる全共闘世代か。だから、子供と全く同じ思想的地平に立っている。そんな気がした。子供の命を助けるのが一番大事だ。そのためには、国家の決定なんか、覆してやれ！と言ってるのだ。30年前のハイジャック事件の時は、政府が、苦渋の選択をして、「人命は地球よりも重い」と言って、拘置所にいた左翼のメンバーを釈放し、金まで出した。しかし今、その教訓を忘れ、同じことを日本人の多くの人が、政府に要求しているのだ。

3人の子供も、親にそれだけ、思われ、愛してもらっているのだ。これが

もし、僕ならどうだったろうと思う。父親は死んだが、生きていたら、とても、こんなことは言わないだろう。明治生まれの父なら、こう言った。「息子は国の方針に反対して、止めるのもきかずに行った。迷惑をかけて申し訳ない。助けてくれなどとは言えない。国家にあれをしてくれとか、政策を変えてくれなどとも言えない。ただただ、申し訳ない。息子のことは放っておいて下さい」とでも言うのじゃないか。あるいは、せいぜい、「現地の警察におまかせします」と、言うくらいだろう。

と、ここまで書いたところで、4月14日(水)だ。ロフトで、アースディのトークがあるので行った。僕は、今書いたことを話した。しかし、他の皆は、「人質の命を守るために自衛隊は即時撤退しろ！」と叫ぶ。僕だけが孤立した。今は木村氏も行ってるし、ともかく、〈人質救出〉に全力を尽くす。これは最重要だ。こんなことをしては、かえってイラク人やゲリラへの憎悪がつのるだけだと訴える。そして人質を奪還してから、これとは別の次元で「自衛隊撤退」問題を日本国内で話し合う。そして、アメリカにも、はっきりとものを言う。アメリカも引き揚げてもらい、イラクはイラク人にまかす。それが筋だろう。

でも、ロフトでは感情的な反戦論が支配的で、怒号と罵倒が渦巻いていた。塩見孝也、大野拓夫、OTO、増山麗奈さん、そして僕がトーク。又、勝手連の光永勇さんも途中から加わった。増山さんは芸大出のインテリ美人画家だ。「ピンクゲリラ」を名乗って、アースディのデモや集会にも出かけているし、今年は戦争中のイラクにも行って来た。この日のロフトでは、「ピンクゲリラ」の麗奈ちゃんと、「レッド・アーミー」の塩見さんが中心で、盛り上がった。



会場からの質問、怒号も活発で、「昔のロフト」の雰囲気を出した。中には、「今回の人質事件は自作自演じゃないか」という人もいた。そんなことはないと思うが、そう思わせる報道もチラチラある。もし、自作自演で、これだけ日本中の世論を動かしたのなら、これも大したものだ。と僕は思ったし、塩見さんも、そう言っていた。

それで、一夜明けて、産経新聞（4月15日付）を見て驚いた。1面に「日

本人がさらに2人誘拐」と出ていた。ゲリラは「効果」に味をしめて、さらに弱い日本に揺さぶりをかけてきたのだ。正念場だよ。又、3面には「週刊新潮」の広告が出ていた。これにも驚いた。ゲッ！ここまで書くかよ、と思った。特集が、「人質報道」に隠された「本当の話」！ その中で、「共産党一家が育てた“劣化ウラン”高校生」「12才で煙草、15才で大麻。高遠さんの凄まじい半生」「子持ち・離婚。でも戦場カメラマンを選んだ郡山さん」「官邸にまで達していた自作自演情報」「小泉首相を激怒させた人質家族の不遜な態度」。

ヒャーッ凄いね。ゲリラに対する批判なんてない。「人質」批判のオンパレードだ。田中真紀子の娘が離婚したと書いて「週刊文春」が出版差し止めになったが、それどころじゃない。こっちの方が凄い。あるいは「文春」に対抗して「新潮」も差し止めをされたがっているのか。

さて、産経の4面を見ると、今回のゲリラに影響力のあるイスラム教スンニ派のアブドル・クベイン師（ムスリム・ウラマー協会幹部）が産経のインタビューに答えている。人質問題の窓口になってる人だというが、何と、「三人は人質でなくゲストとしての処遇を受けているはずだ」「解放は時間の問題だ」と語っている。少しでも日本人を安心させようとして必死で喋ってるんだろうが、これじゃ、逆効果だね。「やっぱり自作自演じゃないか」と疑惑も呼ぶ。

3人は勿論、被害者だ。怖い思いをして、攫われた。しかし、向こうでは自分たちの立場を必死に訴えただろう。「反米・反戦の活動をやっているのだ。その点では同じ志を持っている」と。そこは、ゲリラも分かっているはずだ。彼ら3人を人質にして日本政府に圧力をかける。しかし、3人とゲリラの間にはシンパシーがある。だから、何とか早く解放したい。そんなアンビバレンツな感情があるのだろう。クベイン師は語っている。

「聖戦士旅団は、日本人三人が米軍と関係がないことを確認したからこそ、解放の声明を出した。それ以降、三人は人質ではなく、ゲストとして遇されているはずだ」

では何故、「解放」されないのか。それについてはこう答えている。

〈(1)小泉純一郎首相が聖戦士旅団をテロリストと呼んだ。

(2)別の政治組織が人質を解放しないよう、聖戦士旅団に圧力をかけている。

(3)米軍の検問が厳重なため聖戦士旅団メンバーの安全が保障

されず人質を解放できない。〉

(4)何と、元一水会の活動家が人質に！

ウーン、こんなところが真相なのかもしれない。それにしても、久米宏の「ニュース・ステーション」、岡留さんの「噂の真相」がなくなったのが、惜しい。今回の問題では、さらに裏の裏まで報道してくれたと思うが。ゲリラも、「自衛隊撤退」だけでなく、この二つの「復活」も要求すればいいんだ。

と、ここまで書いた所で、大事件勃発だ！ 今、15日(木)の朝、朝日新聞の記者から電話がきた。「一水会の人がイラクで人質になったそうですが…」と言う。バカな。木村氏たちは人質を助けに行ったんだ。そう言ったら、

「違います。今日の朝刊に出てるでしょう。3人の他に、新たに2人が人質になったんです。安田純平さんともう1人、渡辺っていう人ですが…」

「あっ、読みましたよ。産経にも一面で出てましたから」

「その渡辺さんは渡辺修孝（のぶたか）さんです」

エッ！と驚いた。元一水会にいた会員だ。平成3、4年には木村氏と共にイラクに行っている。その後、一水会をやめて独自の活動をしていた。野村秋介さんが選挙に出た時も、応援している。又、アメリカに抗議して首相官邸にペンキをまいて逮捕されたこともある。熱い活動家だ。イラクには覚悟して行ったとは思いますが、一日も早い解放を訴えたい。木村氏たちもイラクに行っている。頑張ってもらいたい。

【お知らせ】

(1)扶桑社発行の「エンタクシー」（5号）に木村三浩氏（一水会代表）が原稿を書いています。「緊急帰国報告。ヨルダンでフセインの愛娘ラガドと会う」です。読んでみて下さい。

(2)「レコンキスタ300号記念読者の集い」で記念講演をした伊波新之助さん（元朝日新聞編集委員）が新刊を出しました。『一人によって興る』（TKC出版・1400円）です。とてもいい本です。「最後の事件記者」といわれた伊波さんが、いろいろな事件の取材をもとに、日本への愛と憂いを書いてます。拉致問題も、早くから取り上げて問題にしてみました。僕は赤報隊事件では、事件直後に対談しています。（それは、エスエル出版会の『赤報隊の秘

密』に載ってます)。核心を衝く質問で、ズバズバと攻めてくるし、こっちはオタオタした記憶があります。凄い記者だと舌を巻きました。

(3)4月10日、芸文社から、『プロレスの逆襲!～なぜプロレスはダメになったのか～』(1000円)が発売されました。巻頭は前田日明氏と私の対談です。「アントニオ猪木は懺悔せよ!前田が考えるプロレス再生5カ年計画」です。新横浜プリンスホテルで対談しました。リングスが潰れて意気消沈してるのかと思ったら、逆に、元気一杯で、夢を語ってくれました。他には橋本真也vs吉田豪、鈴木みのるvsターザン山本などの対談が出ています。

(4)4月6日(火)、7時から中野の「雪つばき」で映画監督・松林宗恵さんを囲む会がありました。今年の1月10日から3月26日まで、松林監督の映画、11本が中野武蔵野ホールで上映されました。「人間魚雷回天」「太平洋の嵐」「世界大戦争」「連合艦隊」などの名作が上映されました。その打ち上げを兼ねて、松林監督の慰労会が行われたのでした。発起人は快樂亭ブラックさんで、30人ほどのファンが集まりました。「ウルトラQ」の西條康彦さんも出席されました。

(5)4月22日(木)は7:00p.m.からロフトで上田哲さんとトークです。「疑似二大政党制の深刻危機」です。今回の人質問題についても話します。又、5月13日(木)も上田さんとトークします。6月8日(火)は、やはりロフトで、松尾貴史さん、岸田秀さんと3人でトークをやります。さて、どんな話になるのでしょうか。又、植垣康博さん(元連合赤軍)、中村うさぎさん(作家)と3人でトークを7月上旬にやります。

(6)高田馬場の討論スポット、「トリック・スター」に、5月19日(水)7:00p.m.から僕が出ることになりました。又、6月からは毎月第二水曜日に出ます。今年一年間は続けるつもりです。頑張ってますので、よろしく。テーマなどはそのつど、お知らせします。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン/丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年4月19日

イラク問題では次から次に大事件が勃発だ

BBSにも書きましたが、やはり、木村三浩氏がやってくれました。4月15日(土)、「3人の人質が解放されましたよ」と現地の木村氏から国際電話が入りました。この日は一水会フォーラムがあった日ですが、その時に電話が入ったのです。木村氏は、イラクには24回も行ってるし、イラクには絶大な信用があり、人脈もあります。だから、人質の救出のために、4月10(土)から現地に行ってきました。

木村氏は、イラクの人脈を全て使って、ゲリラと交渉してました。難航してましたが、やっと説得に成功しました。それを知っていたから、僕は、「人質は2、3日以内に解放されます！」と断言しました。4月14日(水)のロフトに出た時です。そして、まさに、その翌日の4月15日(木)に、解放されました。

国際電話で、「よくやったね」と僕は木村氏に言いました。「すぐ帰国するの？」と聞いたら、「いや、もう一つあるから」と言ってました。そうです。この日(4月15日)の朝、今度は日本人2人が誘拐され、人質になったのです。安田純平さんと、渡辺修孝さんです。そして何と、渡辺氏は、元一水会にいた活動家だったのです。それでマスコミの問い合わせがあって、大変でした。

…と、これは、4月15日(木)の夜に書いてます。以下は、その前に書いたもので、少し古くなりましたが、3人救出の時間的経過も分かるでしょうから、あえて載せます。(追記：夕方、安田、渡辺両氏が解放されました。ホッとしました。現地の木村三浩氏からも国際電話があり、木村氏は20日(火)の朝に帰国するそうです。帰ったら詳しい話を報告したいと思いません)。

(1)木村三浩氏が急遽、イラクに飛んだ

小泉首相でさえ、「情報が錯綜している。どれが本物か偽物か分からない」と言っている。又、福田官房長官は「命にかかわることなので詳細は言えない」と交渉の全てを〈秘密〉にしているが、でも、その実態は、首相の言う通りなのだ。日本人3人が人質になり、「3日以内に自衛隊を撤退しなければ3人を焼き殺す」と、「サラヤ・アル・ムジャヒディン」は脅していた。それが一転、「24時間以内に解放する」と声明を出した。しかし、一向に解放はされない。「解放声明」そのものが偽物だ、という情報も乱れ飛んでいる

今回の犯人グループはスンニ派だという。だったら、バース党に近いし、フセイン残党だろう。バース党といえば木村三浩氏（一水会代表）だ。木村氏はイラクには24回も行き、最もイラクを知り、人脈がある。それに日本人でありながら、バース黨員だ。だから向こうには、絶大な信頼があった。木村氏のおかげで、去年の2月、僕らは開戦直前のイラクに行ってきた。塩見孝也さんや、雨宮処凛、パンタさんなど38人だった。

ともかく、日本で一番の「イラク通」だ。だから、人質事件が起こった時、すぐ、木村氏に電話した。この拉致グループについては知らないと言っていた。ただ、イラクにいる人や、ヨルダンに亡命した人を通じて、「人質を解放してくれ！」と交渉していると言っていた。

「犯人グループは人質をとって日本政府に揺さぶりをかけるのが目的だろう。だから、人質を殺すことはないだろう」と言っていた。「でも、心配だから、自分もイラクに行ってくる」と。「じゃ、今すぐ行った方がいいんじゃないの」と僕は言った。そして、次の日、4月10日(土)に彼はイラクに向かった。

木村氏にしても僕にしても、アメリカのイラク攻撃には反対してきた。去年の2月も、そのためにイラクに行った。又、日本の自衛隊がアメリカの言いなりになってイラクに行くことにも反対だ。今すぐにでも撤退してもらいたい。しかし、今回の人質事件で、撤退することには反対だ。ゲリラに脅されて、撤退するのはおかしい。これで屈したら、同じことを又、何度でもやられるだろう。人質の奪還には勿論、全力を尽くしてもらおう。それと、自衛隊の撤退は別だ。

実は、僕らが去年2月に行った時も、外務省から、「行くな」と言われた。いつ戦争が起こるか分からないし、日本政府としては責任を持ってない。そんな所に行くことはまかりならんと言われた。しかし、それを振り切り、無視して行った。その時、38人の内部で話し合った。我々は政府・外務省の

中止勧告を振り切って行くのだ。だから、イラクに行って、もし戦争になった場合、日本国政府に助けを求めるようなことはすまい、と。

政府の中止勧告を振り切って行くところではない。日本がアメリカの言いなりになってることに反対し、自衛隊派遣に反対なのだ。いわば〈反体制・反政府〉だ。国家に反逆して行くのだ。それなのに、向こうに行って戦争になったからといって、国家に「助けてくれ！」などとは言えない。その時は〈自己責任〉で、潔く死のう、と誓い合った。塩見孝也さん（元赤軍派議長）も、「そうだ、人間の盾になって死ぬ。鈴木君も一緒に死んでくれると言った。我々が死ぬことで戦争を止められるなら本望だ」と言っていた。

僕も、その時はその時、仕方がないな、と諦めていた。観光旅行に行くわけではないし、「戦争反対」の意志表示の為に行くのだ。それは当然の覚悟だと思った。

団長の木村三浩氏は、皆の気持ちは分かりながらも、団長としての責任上、「全員の安全」を第一に考え、危なかったら、すぐにヨルダンに脱出する、と言っていた。無理に「抵抗」の意志を示したり、「人間の盾」になって、死ぬというのは避けたいと思ったのだ。団長としては当然の配慮だ。

ただ、あの時は、戦争直前なのに、危険は一切なかった。いつアメリカが攻めてくるかという、〈外部〉からの危険はあったが、イラク〈内部〉での危険は一切なかった。フセイン政権が強固だったし、その意味での治安はよかったからだ。「独裁国」だから、フセインの悪口は言えない。しかし、それ以外の自由は全てあった。市場には物があふれているし、誰だって気楽に話しかけてくる。又我々も1人で、フラフラと遊びに行っても安全だった。夜中に遊び歩いている人もいたが、危険は全くない。

ところが、今は、フセインの悪口は言えるかもしれないが、それ以外の自由は一切ない。何せ、昼間でも外に出れないし、生命の危険がある。物もない、仕事もない、住宅も次々と破壊されている。内戦状態だ。

そんな時に、3人はイラクに入った。去年僕らがイラクに行った時よりも、もっともっと危険だ。彼らは、「アメリカ軍には近よらないようにしている」と言っていた。つまり、自分たちは、イラクのために行くのだ。だから、間違ってもアメリカ軍に攻撃されたり、誤爆されることがあるかもしれない。でも、イラクの人民やゲリラに襲われることはない。と思っていたのだ。むしろ、同じ「反米の同志」だと、（広い意味で）思っていたのだ。その点は甘かったと思う。

フセイン独裁体制下では、今回のような事件は絶対にありえなかった。一

枚岩だし、そんな分派行動、分裂行動をする人はいない。万が一、何かの間違いで、軍隊や警察に捕まっても、交渉が出来る。（実際、去年の2月には、我々のメンバーのうち、何人かは警察に捕まった。1人でフラフラと街を歩いて、軍事施設を写真に撮ったりして捕まったのだ。しかし、バース党の人が交渉してくれて、すぐに釈放してもらった。つまり、政権は一つだから、交渉するところも明確だ。ところが今は、誰が政権をとってるのか分からない。誰が実力者なのか分からない。又、ゲリラグループも、次々と勝手につくられ、行動している。これでは交渉のしようもない。

(2)反戦・反米活動家たちの甘さ、そして錯綜する情報

だから、フセイン独裁政権下よりも、独裁が倒され、「解放」されたはずの今の方が、メチャクチャなのだ。日本の戦国時代のような。いや、それよりも、もっと悪いだらう。「フセインの時代の方がよかった」という声が出るほどだ。

つまり、「解放」された今の方が、危険なのだ。だから、日本人に対し、退避勧告が出ていた。武器を持った自衛隊だってバグダッドには行けない。それなのに3人は、イラクに入国し、バグダッドを目指した。戦争中ではあるが、我々、反戦活動家、ボランティアを狙うはずがない、という甘えがあったのだ。

又、実際、イラクに行ってみれば分かるが、向こうの人々は親日的だ。日本が好きなのだ。あのアメリカと戦い、「ヒロシマ・ナガサキ」に原爆を落とされた。偉大な国だ。「サムライの国」だと、尊敬している。それだけに、「その日本がなぜアメリカの言いなりになっているのか」という反撥・絶望も大きい。

ともかく、イラクの大多数の人々は親日派だ。だから、自衛隊に対しても襲ったりはしない。日本人の外交官が2人殺された事件でも、「いや、あれはイラクのゲリラではない。米軍の誤射だ！」という説がまだある。最近の週刊誌でも、大々的に出ていた。

ましてや、反米の反戦活動家や、民間人が狙われるはずがないと思っていたのだ。ゲリラらと出会っても、「同じく反米活動をしてるんだ」と分かり合える。そう思っていたのだらう。

ところが、〈味方〉であるはずのゲリラが襲ってきた。そして3人を人質にした。「まさか、自分たちが」と3人も思ったことだらう。必死で自分たちの考えや心情を訴えたのだらう。

その「反米」「反戦」の真意が分かり、「24時間以内に解放」という声明も出た。…のだと思った。ところが、それが、どうも、偽物らしいという話になり、事態は二転、三転だ。

一番有力なのは、「ソフト・ターゲット」を狙ったという説。つまり、自衛隊は武器を持っているし、初めから、命をかけている。彼らを攻撃してもリスクは大きい。それよりは、たとえ、「反米」「反戦」であろうと、民間人を狙った方が人質にしやすいし、日本に揺さぶりをかけられる。そういう「非情な論理」が働いたのではないか。

実際、〈効果〉は絶大だった。特に、3人の家族が連日、テレビに出て、〈解放〉を訴えた。それだけでなく、「自衛隊の撤退」まで訴えた。又、署名も集まったし、これを機に、「自衛隊は撤退せよ」という声が世論調査では上回った。「撤退しない」と言った首相には国民の反撥が集中した。

ゲリラとしては、大して効果があるまいと思い、どっちにしても3日間で釈放しようと思った。ゲリラに対する日本人の反撥が強くなっても困るし。と思った。

ところが、憎しみはゲリラよりも、日本政府に向かった。「3人を見殺しにするのか」「なぜ、自衛隊を撤退させないのだ！」と…。おーっ！とゲリラは思った。こんなに効果があるとは思わなかったからだ。じゃ、もう少し人質にしておいて、揺さぶりをかけてやれ、と思った。そんなところだろう。

さらに奇妙なことがある。ここにきて、「日本人の影」が、指摘されている。産経新聞は、「声明文は革マルの文章に似ている」と言っている。そんなに特定していいのかよ、と思うが、凄いことを言う。又、アラブにいる日本赤軍がからんでいるのではないか、という説もある。東スポ（4月14日）は、「解放声明文」は、疑惑だらけだとして、「不自然な部分が多すぎる。日本人が書いた？」と言っている。日本の情報に余りに詳しすぎるというし、イスラム・ゲリラの文章ではないという。

僕も、初めに声明文を読んだ時にも奇妙だと思った。日本の新左翼が書いたとは思わないが、日米離間を画策し、日本人の政府と人民を分けて考えている。さらに、日本人は尊敬するし、好きだが、今回のアメリカ追隨で、軍隊をイラクに派遣したのは許せない、という論理は、何やら、三島事件の時の檄文のようでもあると、（とっ飛ながら）一瞬思った。

産経新聞や、東スポなどは、毎日のように、その点を指摘している。勿論、人質になった3人は何も分からずに、いきなり襲われて、人質になっ

た。でも、その背後には、日本の左翼、反戦活動家が関与してるのではないか。という疑いを持っているのだ。（産経などは…）

この点は分からない。日本人が事件に関与ということはないと僕は思う。それではまるで、「やらせ」ではないか。日本に詳しいゲリラがいるとは思いますが、声明文を書き、誘拐に関わった日本人がいるとは思えない。

でも、一般には、こんな〈憶測〉があるし、政府の冷たいとも言える態度にも、その疑惑が底にあるからではないか、という説がある。（僕は反対だが）一応、国として、自衛隊は出した。「公」のことだ。それを「人質事件」という「私」のことで覆されてはならない。そういう決意と覚悟が政府にはあるのだろう。ここで、自衛隊を撤退させたら、世界中から非難される。「テロに屈した国だ」として相手にされなくなる。じゃ、金を出して解決しようかと思っても、それも出来ない。金を出すことだって、ゲリラに資金を提供することになる。だから、「自衛隊の撤退はしない」と明言し、その上で、「人質奪還、解放のために全力を尽くす」と言ってるのだ。

政府としては口がさけても言えないが、「勧告を無視して勝手にイラクに行ったくせに」「ふだん反政府的なことを言いながら、こんな時だけ政府に泣きを入れるのか」「ましてや、国の決定した自衛隊派遣を撤退させてくれ、なんて、冗談じゃない」という気持ちなのだろう。それに家族の人々の（気持ちは分かるが）あの余りに感情的な言動にも辟易しているのだろう。

さらに、ましてや、声明文を書いたのが日本人の反戦活動家だとか、左翼だとか、いう説も一部にはある。やらせでやっておいて、自衛隊の撤退を要求するなんて、とんでもない。という気持ちも政府にはあるのだろう。

(3) 「人質はゲストとして遇されている」とイスラム指導者が…

今、家族の言動が感情的といったが、あるいはそれも心配の余りだし愛情のなせる技なのだろう。多分、親は僕らと同じ位かもしれない。いわゆる全共闘世代か。だから、子供と全く同じ思想的地平に立っている。そんな気がした。子供の命を助けるのが一番大事だ。そのためには、国家の決定なんか、覆してやれ！と言ってるのだ。30年前のハイジャック事件の時は、政府が、苦渋の選択をして、「人命は地球よりも重い」と言って、拘置所にいた左翼のメンバーを釈放し、金まで出した。しかし今、その教訓を忘れ、同じことを日本人の多くの人が、政府に要求しているのだ。

3人の子供も、親にそれだけ、思われ、愛してもらっているのだ。これが

もし、僕ならどうだったろうと思う。父親は死んだが、生きていたら、とても、こんなことは言わないだろう。明治生まれの父なら、こう言った。「息子は国の方針に反対して、止めるのもきかずにいった。迷惑をかけて申し訳ない。助けてくれなどとは言えない。国家にあれをしてくれとか、政策を変えてくれなどとも言えない。ただただ、申し訳ない。息子のことは放っておいて下さい」とでも言うのじゃないか。あるいは、せいぜい、「現地の警察におまかせします」と、言うくらいだろう。

と、ここまで書いたところで、4月14日(水)だ。ロフトで、アースディのトークがあるのでいった。僕は、今書いたことを話した。しかし、他の皆は、「人質の命を守るために自衛隊は即時撤退しろ！」と叫ぶ。僕だけが孤立した。今は木村氏も行ってると、とにかく、〈人質救出〉に全力を尽くす。これは最重要だ。こんなことをしては、かえってイラク人やゲリラへの憎悪がつよるだけだと訴える。そして人質を奪還してから、これとは別の次元で「自衛隊撤退」問題を日本国内で話し合う。そして、アメリカにも、はっきりとものを言う。アメリカも引き揚げてもらい、イラクはイラク人にまかす。それが筋だろう。

でも、ロフトでは感情的な反戦論が支配的で、怒号と罵倒が渦巻いていた。塩見孝也、大野拓夫、OTO、増山麗奈さん、そして僕がトーク。又、勝手連の光永勇さんも途中から加わった。増山さんは芸大出のインテリ美人画家だ。「ピンクゲリラ」を名乗って、アースディのデモや集会にも出かけているし、今年は戦争中のイラクにも行ってきた。この日のロフトでは、「ピンクゲリラ」の麗奈ちゃんと、「レッド・アーミー」の塩見さんが中心で、盛り上がった。



会場からの質問、怒号も活発で、「昔のロフト」の雰囲気を出した。中には、「今回の人質事件は自作自演じゃないか」という人もいた。そんなことはないと思うが、そう思わせる報道もチラチラある。もし、自作自演で、これだけ日本中の世論を動かしたのなら、これも大したものだ。と僕は思ったし、塩見さんも、そう言っていた。

そこで、一夜明けて、産経新聞（4月15日付）を見て驚いた。1面に「日

本人がさらに2人誘拐」と出ていた。ゲリラは「効果」に味をしめて、さらに弱い日本に揺さぶりをかけてきたのだ。正念場だよ。又、3面には「週刊新潮」の広告が出ていた。これにも驚いた。ゲッ！ここまで書くかよ、と思った。特集が、「人質報道」に隠された「本当の話」！ その中で、「共産党一家が育てた“劣化ウラン”高校生」「12才で煙草、15才で大麻。高遠さんの凄まじい半生」「子持ち・離婚。でも戦場カメラマンを選んだ郡山さん」「官邸にまで達していた自作自演情報」「小泉首相を激怒させた人質家族の不遜な態度」。

ヒャーッ凄いね。ゲリラに対する批判なんてない。「人質」批判のオンパレードだ。田中真紀子の娘が離婚したと書いて「週刊文春」が出版差し止めになったが、それどころじゃない。こっちの方が凄い。あるいは「文春」に対抗して「新潮」も差し止めをされたがっているのか。

さて、産経の4面を見ると、今回のゲリラに影響力のあるイスラム教スンニ派のアブドル・クベイン師（ムスリム・ウラマー協会幹部）が産経のインタビューに答えている。人質問題の窓口になってる人だというが、何と、「三人は人質でなくゲストとしての処遇を受けているはずだ」「解放は時間の問題だ」と語っている。少しでも日本人を安心させようとして必死で喋ってるんだろうが、これじゃ、逆効果だね。「やっぱり自作自演じゃないか」と疑惑も呼ぶ。

3人は勿論、被害者だ。怖い思いをして、攫われた。しかし、向こうでは自分たちの立場を必死に訴えただろう。「反米・反戦の活動をやっているのだ。その点では同じ志を持っている」と。そこは、ゲリラも分かっているはずだ。彼ら3人を人質にして日本政府に圧力をかける。しかし、3人とゲリラの間にはシンパシーがある。だから、何とか早く解放したい。そんなアンビバレンツな感情があるのだろう。クベイン師は語っている。

「聖戦士旅団は、日本人三人が米軍と関係がないことを確認したからこそ、解放の声明を出した。それ以降、三人は人質ではなく、ゲストとして遇されているはずだ」

では何故、「解放」されないのか。それについてはこう答えている。

〈(1)小泉純一郎首相が聖戦士旅団をテロリストと呼んだ。

(2)別の政治組織が人質を解放しないよう、聖戦士旅団に圧力をかけている。

(3)米軍の検問が厳重なため聖戦士旅団メンバーの安全が保障

されず人質を解放できない。〉

(4)何と、元一水会の活動家が人質に！

ウーン、こんなところが真相なのかもしれない。それにしても、久米宏の「ニュース・ステーション」、岡留さんの「噂の真相」がなくなったのが、惜しい。今回の問題では、さらに裏の裏まで報道してくれたと思うが。ゲリラも、「自衛隊撤退」だけでなく、この二つの「復活」も要求すればいいんだ。

と、ここまで書いた所で、大事件勃発だ！ 今、15日(木)の朝、朝日新聞の記者から電話がきた。「一水会の人がイラクで人質になったそうですが…」と言う。バカな。木村氏たちは人質を助けに行ったんだ。そう言ったら、

「違います。今日の朝刊に出てるでしょう。3人の他に、新たに2人が人質になったんです。安田純平さんともう1人、渡辺っていう人ですが…」

「あっ、読みましたよ。産経にも一面で出てましたから」

「その渡辺さんは渡辺修孝（のぶたか）さんです」

エッ！と驚いた。元一水会にいた会員だ。平成3、4年には木村氏と共にイラクに行っている。その後、一水会をやめて独自の活動をしていた。野村秋介さんが選挙に出た時も、応援している。又、アメリカに抗議して首相官邸にペンキをまいて逮捕されたこともある。熱い活動家だ。イラクには覚悟して行ったとは思いますが、一日も早い解放を訴えたい。木村氏たちもイラクに行っている。頑張ってもらいたい。

【お知らせ】

(1)扶桑社発行の「エンタクシー」（5号）に木村三浩氏（一水会代表）が原稿を書いています。「緊急帰国報告。ヨルダンでフセインの愛娘ラガドと会う」です。読んでみて下さい。

(2)「レコンキスタ300号記念読者の集い」で記念講演をした伊波新之助さん（元朝日新聞編集委員）が新刊を出しました。『一人によって興る』（TKC出版・1400円）です。とてもいい本です。「最後の事件記者」といわれた伊波さんが、いろいろな事件の取材をもとに、日本への愛と憂いを書いてます。拉致問題も、早くから取り上げて問題にしてみました。僕は赤報隊事件では、事件直後に対談しています。（それは、エスエル出版会の『赤報隊の秘

密』に載ってます)。核心を衝く質問で、ズバズバと攻めてくるし、こっちはオタオタした記憶があります。凄い記者だと舌を巻きました。

(3)4月10日、芸文社から、『プロレスの逆襲!~なぜプロレスはダメになったのか~』(1000円)が発売されました。巻頭は前田日明氏と私の対談です。「アントニオ猪木は懺悔せよ!前田が考えるプロレス再生5カ年計画」です。新横浜プリンスホテルで対談しました。リングスが潰れて意気消沈してるのかと思ったら、逆に、元気一杯で、夢を語ってくれました。他には橋本真也vs吉田豪、鈴木みのるvsターザン山本などの対談が出ています。

(4)4月6日(火)、7時から中野の「雪つばき」で映画監督・松林宗恵さんを囲む会がありました。今年の1月10日から3月26日まで、松林監督の映画、11本が中野武蔵野ホールで上映されました。「人間魚雷回天」「太平洋の嵐」「世界大戦争」「連合艦隊」などの名作が上映されました。その打ち上げを兼ねて、松林監督の慰労会が行われたのでした。発起人は快樂亭ブラックさんで、30人ほどのファンが集まりました。「ウルトラQ」の西條康彦さんも出席されました。

(5)4月22日(木)は7:00p.m.からロフトで上田哲さんとトークです。「疑似二大政党制の深刻危機」です。今回の人質問題についても話します。又、5月13日(木)も上田さんとトークします。6月8日(火)は、やはりロフトで、松尾貴史さん、岸田秀さんと3人でトークをやります。さて、どんな話になるでしょうか。又、植垣康博さん(元連合赤軍)、中村うさぎさん(作家)と3人でトークを7月上旬にやります。

(6)高田馬場の討論スポット、「トリック・スター」に、5月19日(水)7:00p.m.から僕が出ることになりました。又、6月からは毎月第二水曜日に出ます。今年一年間は続けるつもりです。頑張ってますので、よろしく。テーマなどはそのつど、お知らせします。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン/丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年4月26日

人質が全員帰ってきた今だから言えること

(1)木村氏とクベイシ師のタッグで人質を救出した

僕の言った通りだった。ズバリと適中した。4月14日(水)、ロフトに集まっていた97人の全員が〈証人〉だ。

「今、木村三浩氏（一水会代表）が人質救出の為に現地に行ってます。イラクには一番信頼があり、人脈も一番あります。彼が交渉してるから大丈夫でしょう。2、3日以内に人質は解放されます！」

私はこう断言したのだ。でも、パネラーの人達も客も、半信半疑だった。というよりも、「嘘つけ」「ハッターかましやがって」という顔をしている。パネラーの一人は、「鈴木さんに保障してもらったから帰ってきますよね。安心ですね」と明らかに皮肉っぽく言っていた。あの日、ロフトにいた97人のうち、僕の言葉を信じていた人は、ほとんどいなかっただろう。でも、僕の言った通りになった。

「よく、あんな思い切ったことを言いましたね。こっちは何も報告してなかったのに…」と、木村氏本人も驚き、あきれていました。木村氏は4月20日(火)の朝、成田に帰ってきました。そして、午後、会い、夜までずーっと話を聞いてました。先週の「主張」を読んで、「鈴木さんの推理の通りですよ」と言っていました。「しかし、“2、3日中に人質は解放される”なんて、よく思い切って断言しましたね」と木村氏は言う。

ロフトにいた人も、さぞや驚いたことだろう。次の日、4月15日(木)に本当に3人は解放されたからだ。何なら、ロフトで、もう少し具体的に言ってやってもよかった。「明日の夕方、3人は解放されます！」と。

でも、ここまで言うと、「じゃ、ゲリラの仲間じゃないのか」と疑われる。だから、「2、3日中に解放されます」位でよかったんだ。「何か根拠があって言ったんですか?」「木村さんから連絡があったんですか?」とよく聞かれるが、そんなことはない。テレビや新聞を見てるだけで分かったの

だ。事件を起こす人々の〈心理〉が分かったのだ。僕にだけは見えていたのだ。「もし、はずれたらどうしたの?」と聞かれるが、その時は、「自己責任」だ。百回謝罪しますよ。

木村氏のサイトを見てもらったら分かるが、現地の木村氏からは連絡はなかった。4月15日(木)に、初めてアンマンから国際電話をもらった。一水会フォーラムがシチズンプラザであって、その後、二次会が居酒屋であった。その席上、一水会の横山氏の携帯に木村氏から電話があった。「鈴木さんに代わってくれと言ってます」と言うので、代わったら、「やりました。解放されました」と言っていた。「いやー、さすがは木村君だね。ご苦労さん。木村君ならやると思って、昨日も口フトで、“2、3日中に解放される”と言ったんだよ」といった話をした。

現地の木村氏から連絡をもらったのは、これ一回だけだ。あとは20日(火)の朝、「今、成田に着きました」という電話だ。それで、当日の午後に出会った。

今回の人質事件が起きた時、「ゲリラは日本政府に揺さぶりをかけるのが目的です。3人の人質は殺しませんよ」と木村氏は言っていた。僕もそう思った。ゲリラは、「自衛隊を撤退させる! 3日以内に撤退させないと3人を焼き殺す」と脅した。そしてビデオをアルジャジーラテレビに送った。それが日本でも流れた。ちょっと変だなと思った。声明文も変だ。目かくしをされてるが、そのあと外されて、身ぶり手ぶりでゲリラと話している。「話し合える」ということで、これは、一般の拉致、監禁と違うな、と思った。

「イラク人は皆、日本人が好きだ。親日的だ。ゲリラだって、そうだ。殺しません。だから期限の3日が過ぎて、まだ解放されなかったら現地に行ってみようと思います」と木村氏は言う。その時点で、イラクやアンマンにいる旧フセイン政権下の高官、友人たちに連絡して、救出を頼んでいた。「どうせ行くならすぐに行った方がいいんじゃないの」と僕は言った。「じゃ、明日、行きます。鈴木さんも一緒に行きましょう」と言う。おっ、行ってみようかな、と一瞬思ったが、僕じゃ、現地に行っても役に立たない。語学が出来て、手足になる人間を連れて行ったらいいんじゃないか、と言った。

「じゃ、そうします」と言って、「ハリー・ポッター」というコードネームの男を連れて行った。

イラクはイスラム教の国だ。6割はシーア派だという。しかし、フセイン政権下では弾圧されていた。スンニ派が政権に近かった。フセインはバース党で、これは社会主義政党だ。つまり、バース党とスンニ派がフセイン体制

下のイラクを支配していた。アメリカの攻撃で、フセインは倒れた。しかし、バース党の残党は、国内でまだまだいるし、レジスタンスを続けている。又、ヨルダンなどに逃れたバース党幹部も、外国から指令を出し、国内のレジスタンスと連動し合っている。又、日本では「テロリスト」と言われるが、孤立した過激派がいるのではない。今回の人質事件でも分かるように、イラク全土で、こうしたレジスタンス運動があるのだ。「昼は農民、夜は戦士」と新聞に出ていたが、そんな感じだ。

シーア派とスンニ派は仲が悪い。アメリカはバース党とスンニ派を追放してくれたと喜ぶシーア派もいるが、今は、シーア派も一枚岩ではない。反米闘争をするグループも多く出てきたし、シーア派内部での抗争、殺し合いもある。又、「反米闘争」では、シーア派、スンニ派が共闘する動きも出ている。

木村氏はイラクには24回も行き、人脈も信用もある。イラクの「秘密エージェントだ」「コードネームはイーグルだ」と週刊誌に出ていたほどだ。エージェントどころではない。フセイン政権そのものに奥深く入りこんで、人脈があった。

今回のゲリラはスンニ派だという。だったら交渉するのは木村氏しかいないだろう、と思った。もしこれがシーア派のゲリラだったら、ちょっと難しかった。「でも、いろいろな人のチャンネルを使って、交渉はできたでしょう。ただ、時間はかかったでしょうね」と木村氏は言う。

初め、アンマンからイラクに入り、バグダッドに行こうとした。しかし、バグダッドにいる旧フセイン政権の人や、バース党の人に止められた。木村氏は「フセイン政権と親密な外国人」として狙われているという。本人が殺されたり人質になったのでは、「人質救出」は出来ない。それで、アンマンにいる、バース党の人たちと連絡をとり、イラクのレジスタンスと交渉した。交渉の立役者になった、聖職者協会のクベイシ師とも携帯で連絡を取り合って救出作戦をした。それが成功した。小泉首相は、「いろいろな線があり、どれが功を奏したか分かりませんが…」と言っていた。しかし、6割か7割がた、〈木村＝クベイシ師〉の線で解決したのだ。

(2) 「これは片八百長」ではないか、と私は喝破した

しかし、このクベイシ師。不思議な人だ。3人の解放の時も、そのあとの2人の解放の時も立ち会っている。それ以前の外国人の時も立ち会っている。「犯人は誰か分からないが、向こうから一方的に連絡があった。それを

取りついで、解放に尽力しただけだ」と言っている。「善意の仲介者」だ。でも、そんなことはないだろう。犯人は知っている。しかし、言う必要はないし、言う気もない。人質を解放することによって、イラクの大義を訴えようとした。又、この地が〈戦地〉であり、アメリカに侵略されている。それに対し、農民の一人一人までが、銃をもって闘っている。そのことを示した。さらに、「テロリストではない。罪のない人はこのように解放してるじゃないか」と世界にアピールしたのだ。

米軍にしたって、「クベイシ師はゲリラと共謀してるのだろう」と疑っても、だからといって逮捕は出来ない。この人がいなくなったら、又、人質が出た時に、交渉する窓口がなくなる。ゲリラにシンパシーを持つ窓口というか、交渉役なんだ。「ゲリラとクベイシ師はつるんでるんだらう」と聞いたから、「赤報隊と鈴木さんのような関係ですよ」と木村氏は凄いことを言う。何を馬鹿なことを。僕は赤報隊の〈窓口〉じゃない。〈交渉役〉でもない。でも、クベイシ師の気持ちは分かる。

今回の「誘拐・人質事件」は、「初めに解放ありき」だった。3日か長くて1週間、人質になってもらい、それで、日本政府に揺さぶりをかけて、効果を見る。それだけだった。殺す気は始めからない。「自衛隊が3日以内に撤退しなければ、3人を殺す！」と言ってたが、その気はない。その気がないことは人質の3人にも説明し、理解してもらった。その上で〈協力〉してもらった。

ここからがちょっと複雑だ。3人が反米活動家だということは分かっている。3人を殺す気もない。いわば、「反米の同志」だ。だから、ここは一つ、日本政府を揺さぶるために、「協力」してくれと頼んだ。3人も納得した。だから、ビデオを作る時も、「もっと泣き叫んでくれ！」「もっと怖がってくれ！」というゲリラ側の注文に応じて、オーバーアクションで怖がり、泣き叫んで見せた。こうなると「共犯」だ。いや、そう言っちゃかわいそうか。やはり、脅されて、「やらせ」ビデオを撮られたのだ。命の危険があるから、注文通りの演技をしたのだろう。

もし人質3人が拒否したらどうか。「そんなこと嫌だ！我々のことを心配している人を騙すわけにはいかない」と〈演技〉を拒否したらどうなっただろう。殺されたか。いや、殺されはしなかった。でも、「拒否する自由」はない、と3人は思ったのだろう。結果的には、このビデオを見て、家族は泣いて救出を訴え、「自衛隊を撤退させてくれ！」と叫んだ。「時間がないんですよ！」と記者にまで詰め寄っていた。ゲリラ側の思惑は成功した。やは

り、（結果的にだが）3人が協力した「やらせ」ビデオのおかげだ。

アルジャジーラテレビは、ビデオの大部分は放映したが、「人質が泣き叫ぶシーン」は流さなかった。又、それを入手しながら、日本のテレビ局も流さなかった。「余りに残酷だから」という理由だ。しかし、自主規制せずに流したらよかったのだ。そうしたら、「ちょっとオーバーだ」「やらせじゃないか」と思い、かえって「命の危険はない」と分かったろう。そして冷静な論調ができた。もしかしたら、テレビ局の「自主規制」ではなく、政府主導だったのかもしれない。「人質の命にかかかわる。又、これを見たら家族はどう思う。残酷すぎる。流すべきではない」と。いや、政府からはそんな〈要請〉はなかっただろうが、同じことを考えて、テレビ局は流さなかった。これは人道上、流せないと。そしてミスリードした。バカな連中だ。

だって、政府はこの、やらせビデオを警察に分析させて、「これは人質も協力した演出だ。いわば劇映画だ！」と見破っていた。だから、「ゲリラは殺さない」という安心の上に、「自衛隊は撤退させない。脅しには屈しない！」と言えたのだ。下手くそな演出ビデオを作ったゲリラ側のやり過ぎだ。又、それを信じて、「残酷すぎる」と流さなかった日本のテレビ局がアホなのだ。

それが小泉首相に「自信」をつけさせ、いい格好をさせることになった。

それにしても日本の警察は優秀だね。ナイフをつきつけられ人質が怖がってるシーンを見て、すぐに「やらせ」だと見破った。本当に脅されるのと、「演技して怖がってる」のとは違う。目の動きや手の動きがオーバーになるだけではない。反応が0.1秒、早かったり遅かったりする。そんなことから、これは、「やらせ」だと見破った。凄いもんだ。

それに、イラクでは日本人に対する感情は、とてもいいんだ。ましてや、イラクのために闘い、米軍に反対してる人を殺すわけではない。女性も大切にすし、女性を脅すわけもない。人質は丁重に扱い、「ゲスト待遇」だったのだ。だから、言葉は悪いが、「片八百長」だ。

これはプロレスの言葉だが、プロレスの試合は全て、〈結果〉があらかじめ決まっている。今回も、「殺すぞ！」と脅しているが、殺す気はないし、〈解放〉を前提にしている。その点では、「八百長」だ。しかし、3人は、八百長を知って、誘拐されたわけじゃない。突然襲われ、それこそ命の恐怖を感じて、人質になった。しかし、その中で、「話し合って」協力を求められて、〈協力〉した。「共犯者」じゃないが、「協力」したことは事実だ。

だから、「片八百長」だ。片一方だけが八百長をしかけたのだ。その方

が、より、リアルになる。15年ほど前、蔵前国技館で、アントニオ猪木とハルクホーガンの世紀の一戦が行われた。ホーガンは猪木にアックスボンバーをくらわせた。猪木は鉄柱に頭を打ちつけて、「失神」した。ここまでは「筋書き」通りだ。ホーガンは勝ち、猪木も、やっと目が覚め、悔しがる。そういうストーリーのはずだった。ところが、いつまで経っても猪木は起き上がらない。舌を出してのびている。場内はザワめいた。ドクターがかけ上がる。そして、救急車が呼ばれ、「猪木は死んだ！」と思った。ホーガンも青くなっている。「ヤバイ！殺しちゃったよ！」と思って、リング上を虚脱状態で、ウロウロ歩き回り、両手で顔をおおっている。演技ではなく、本当に「殺した！」と思ったのだ。

でも、これも八百長だった。ホーガンにも、自分のセコンドにも教えなくて、猪木が一人でやった「自作自演」だった。相手にあらかじめいわずに自分だけが八百長をやる、これが片八百長だ。相手のホーガンも、「筋書き」にない展開だから、「しまった。やりすぎだ。大恩ある猪木さんを殺してしまった！」と慌て、怯えたのだ。そして見ていた俺らも本当に信じ、恐怖した。

あの人質の泣き叫ぶビデオを見て、僕はそんなことを思っていた。

(3)日本の「カミカゼ」「サムライ」が救ってくれたんだ！

「イラク人は親日的だ」という話を続ける。日本なんて、どこに行ってもよく思われてない、と僕は自虐的に考えていた。「フジヤマ、ゲイシャ、ソープ、ヘルス」なんていうイメージだろうと。ところが、イラクに行ったら驚いた。皆、「日本はサムライの国だ！」と言う。「えっ、サムライなんてどこにもいないよ」と言おうと思ったが、そう言ってくれる人は、ありがたいと思った。「カミカゼ」もよく知ってるし、「ヒロシマ、ナガサキ」も知っている。

どっかの新聞が書いていた。「ゲリラの声明文にヒロシマ、ナガサキとあった。向こうの人は知らないはずだ。日本人が書いたのではないか」と。バカな記者だ。「ヒロシマ、ナガサキ」は、イラクの人は皆、知っている。日本人よりも知ってるよ。

「日本はアメリカと闘ったサムライの国だ」と尊敬している。反戦自衛官の沢口ともみさんが、「私は被爆二世です。アメリカを許しません」と言ったら、ものすごい拍手だった。大国・アメリカと闘い、そして、力つき、原爆を落とされ、負けた。そんな日本に限りない敬意を持っている。

「そんな日本の文化によって私は救われたんでしょう」と安田さんは言っていた。4月20日(火)の「ニュース23」に出た時に言っていた。安田さん、渡辺さん、そして先に解放された3人も、みなそうだ。アメリカと闘い、サムライの意気を示した、そうした日本文化。そして、戦いで死んでいった先人たちが今回の5人の人質を救ったのだ。

木村氏から聞いて初めて知ったが、アルジャジーラテレビでは、毎日のように、各国の様子を紹介している。そして日本については毎日、30分以上も特攻隊が突っ込むシーンが放映されてるといふ。「これが日本のカミカゼだ。こんなサムライの国。それが日本だ！」と。へエー！と驚いた。そんなことは日本じゃ、全く報道されてない。

「9.11同時テロ」の時に、モスクワのテレビが、「カミカゼ・アタック」と叫んでいた。イラクでも、そう呼ばれていたのかもしれない。「自爆テロだって、日本の特攻隊の影響ですよ」と木村氏は言っていた。そうか。イスラム社会で、自分の体に爆弾をくくりつけて、自爆するというのは、特攻隊まではなかった。「一人一殺」はあったが、「一人多殺」はなかった。大体昔は、爆弾がなかったからだ。多分、日本の特攻隊が爆弾を積んで、敵艦に体当たりする。それを知ってからだ。パレスチナの自爆テロも、〈9.11ツインタワー特攻〉も、全ては、日本の「サムライ」を見習ったのだ。

その意味では、イラクの問題も、パレスチナの問題も、アメリカの問題も、皆、日本の問題だ。日本から発した問題だ。そうとも言える。

(4)新右翼から共産主義者に〈進化〉した渡辺氏

さて、「週刊文春」と「週刊新潮」について、最後に少し触れておく。3人が解放された日(4月15日)、新たに2人が人質になった。フリーカメラマンで、元「信濃毎日」記者の安田氏と、元一水会活動家の渡辺氏だ。この2名が帰国した。4月20日(火)、安田さんは、「助かった理由は？」と聞かれて、「武器を持っていなかったこと」と答え、さらに、(さっき書いたように)、「日本の文化が私を守ってくれた」と言った。これはいい言葉だと思った。

一方、元一水会の渡辺氏は、「日本人だというだけで、こんな目に会うのか」と言っていた。「悪いのは米軍」「謝罪なんてとんでもない」とも言っていた。成田に着いた時は指を立ててガッツポーズをしていた。支援者に向けてのポーズだが、日本中の人に心配かけたんだ。ガッツポーズはないだろう

と思った。

それに、「一緒に帰ろう！」と泣き叫ぶ両親を振り切って、支援者たちと共に帰り、3時から会見していた。そこで、凄いことを言っていた。

「私は共産主義者ですから、日本政府は救出してくれるとは思わなかった」

エッ！共産主義者になったのかよ。昔は一水会だったのに、と思った。週刊誌や新聞に取材されたんで僕は、渡辺氏の「熱心な民族派活動家」時代の話をした。自衛隊をやめて、他の右翼に入り、ビルマのゲリラの支援に行き、その後、一水会に入った。木村氏と共にイラクに二度行き、「沈黙を破った自衛官」シリーズでレコンに何度も登場した。又、野村秋介さんの選挙の時は「風の会」のTシャツを着て、熱心に活動していた。

しかし、「一水会では生ぬるい。もっと命をかけて闘わなくては」と思い、左の運動にかかわっていった。さらに、今は小西さんたちの「反戦自衛官」の集まりで一緒にやっている。

実は、「一水会は左翼的だから嫌だ！」とやってやめて、より過激な右翼運動をしてる人は多い。しかし、「一水会はまだ右翼の残滓がある」と言ってやめて左翼に〈進化〉したのは渡辺氏ただ一人だ。たいしたものだ。まあ、一水会の幅の広さ（だらしなさか？）を示すエピソードではあるう。又、来週にでも書きましょう。

【附録】

(1)4月16日(金)、京橋の映画美学校で講演しました。森達也さん（映画監督）に呼ばれたんです。でも本人は、和光大で授業で授業があって来れず、私一人で話してきました。熱心な学生さんばかりで楽しかったです。終わって、飲み会で、女の子が「タカトウさんごっこ」をしてました。「いろいろイヤなこともされたけど、でもイラク人は嫌いになれない。ワーツ（と泣く）」。誤解されやすい言葉ですね。だから、日本での記者会見は中止になったんでしょう。

(2)4月17日(土)、玉川信明さんの出版記念会と「救援連絡センター35周年の集い」と畑中純さん（漫画家）のパーティに出ました。又、文化人類学者の山口昌男さんに会いました。

(3)4月21日(水)立川志の輔さんに会ったら、言ってました。「イカは乾燥させたらスルメになる。ボランティアは捕まったら『自己責任』」。うまいことを言う。

(4)4月22日(木)、ロフトで上田哲さんとトーク。熱気があって、とてもいい

話でした。でも、ロフトに集まった人に期待する余りでしょうか…。上田さんに叱られてしまいました。詳しくは上田さんのサイトを見て下さい。

(5)前管理人の赤坂細子から携帯に電話がありました。つい、「あっ、タカトウさん？」と言っちゃいました。市民運動をしている女性って、どうして皆、顔が似てくるのでしょうか。不思議です。

【お知らせ】

(1)次の「レコンキスタ」は、今回の人質問題特集だそうです。1面トップは勿論、木村三浩氏です。5月上旬に発行です。又、一水会フォーラムは5月11日(火)で、憲法問題の権威、小林節先生（慶応大学教授）の講演です。

(2)5月13日(木)はロフトで、上田哲さんと、シリーズ第3弾です。「国民投票」について話します。

(3)5月19日(水)7：00から高田馬場の「トリック・スター」で「歌とトーク」の夕べをやります。国民的人気歌手・高橋愛さんが歌い、私が喋ります。

(4)6月8日(火)、ロフトです。松尾貴史、岸田秀、そして私です。「幻想まっしぐら。性から政治までを3人が語る」。「唯幻論者と新右翼とうんちく王がロフトに集結！時事問題、宗教からSEX、フェミニズム、恋愛に至るまでを明るくコミカルに。しかし、どこかアカデミックにフリートークライブを展開！絶対必見」。司会は和光大学の美人女子大生です。

(5)7月6日(火)は植垣康博さん（連合赤軍兵士）と中村うさぎさん（作家）、そして私のトークです。

(6)8月15日(日)は、日本橋で快樂亭ブラックさん（落語家）と私のトークです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年5月3日

週刊誌は怖い。封印していた〈事件〉までが暴露された

(1) 「歴史発見」だね。「新右翼」から「共産主義者」への進化

「エッ？そんな事があったの」「あれは本当なの？」と多くの人から聞かれました。又、メールももらいました。今、発売中の「週刊文春」（4月29日・5月6日ゴールデンウィーク特大号）と「週刊新潮」（4月29日号）に（イラクで人質になっていた）渡辺修孝さんのことが出ていました。それを読んだ人が、聞いてきたのです。

渡辺氏が一水会で活躍してたということは「レコンキスタ」に載ってるし、知ってる人もいます。しかし、一水会を辞めて、「新左翼になった」ということは初めて知った。という人は多いでしょう。又、週刊誌には、僕らも一切喋らなかつたこと、封印していたこと、忘れていたことまでが載っていました。自衛隊や警察（公安）や、今、一緒に運動している新左翼の仲間から聞いたのでしょうか。週刊誌の、その取材力はさすがだと思いました。

渡辺氏が一水会を辞める時に、『Wの真相。元新右翼活動家の自己批判文』という冊子を作り、各方面に配布したとか。一水会事務所でガス爆発を計ったとか。そんなことも暴露されていました。こうしたことは今まで、どこにも書いてません。発表もされませんでした。「レコンキスタ」を読んでも、僕の『新右翼』（彩流社）の巻末の「新右翼関連年表」にも、書かれていません。それが週刊誌記者の精力的な独自取材で知られてしまいました。

まア、イラクでの人質事件が起こらなければ、こうしたことは永遠に表に出ることはなかつたでしょう。僕が書いたものや、レコンに載ったものだけが、「新右翼の歴史」になってました。僕だって記憶があやふやで、間違いが多いと思いますが、僕の書いたものが「歴史」になっちゃうんですね。他に、書いてる人がいないからです。間違っても、書いちゃうと、「新右翼の歴史」になり、書き忘れると、それは「なかつたこと」になるんです。恐ろしいですね。今回、週刊誌に出た「告白文」と「ガス爆発（未遂）」も、双

方（渡辺氏と僕ら）にとって名誉な話じゃないし、忘れた方がいいだろうと思ひ、僕は今まで一切書きませんでした。だから、「新右翼の歴史」「一水会の歴史」の中では、「なかったこと」なのです。だから、今の一水会の人達は誰も知りません。

僕の本いたものだけが「歴史」になり、僕の後だけに「歴史」が出来るのです。（少なくとも、今まではそうでした）。何やら、高村光太郎のあの有名な詩のようですね。

道程 高村光太郎

僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る

ああ、自然よ

父よ

僕を一人立ちにさせた広大な父よ

僕から目を離さないで守る事をせよ

常に父の気魄を僕に充たせよ

この遠い道程のため

この遠い道程のため

そうなんです。僕の後ろに道が出来、歴史が出来たんです。しかし、この「道程」（どうてい）という詩は高校の国語の時間に、立って読まされたけど、恥ずかしかつたな。「この遠い道程のため」という所なんて、「お前も遠い童貞だ！」と周りの奴らに言われちゃって。そう言っただけで冷やかしてる連中も童貞なんやけど。そして、今でもオラは童貞だ。本当に遠い童貞だ。

今、この光太郎の「道程」は大岡信の『明治・大正・昭和詩歌選』（講談社）から写した。他の頁をめくってたら、奇妙な詩があった。

らいおん 丸山薫

「妾（わたし）の希（ねが）いはただ一つ

どうぞこの児が大人になったら

あのらいおんのようになりなすように」

「ぼくの希（ねが）いはたった一つ

カステラのように肥ったこのお母さんを

ぱくぱくあのらいおんに喰わしてやりたい」

三好蓮治の有名な「郷愁」という詩も載ってます。特に、このところですよ。

「海よ、遠い海よ。と私は紙にしたためる。---海よ、僕らの使う文字では、お前の中に母がいる。そして母よ、仏蘭西人（ふらんすじん）の言葉では、あなたの中に海がある」

何度読んでもいいですね。日本語では、「海」の中に「母」という字が入っている。フランス語では母（mere）の中に海（mer）が入っている。もしかしたら、世界中の言葉がそうなのかもしれない。人類は元々は海から陸に上がってきた。その進化の過程を凝縮して母の胎内で過ごすんだ。羊水の中は海水と同じ成分だ。その羊水の海の中で胎児は初めは魚だ。そして両棲類になり、さらに哺乳類になって、オギャーとこの世に出てくる。

えーと、他にもいい詩があるな。と紹介してたら先に進まんけん、やめとこう。

(2) 「憂国の自衛官」になり、ナショナリストとして闘った

では渡辺氏の話に戻る。4月15日(木)の夕方、3人の人質が解放された、というニュースが日本に届いた。ところが翌、16日(金)の朝刊を見たら、新たに2人が人質になったと出ていた。元「信濃毎日」の記者で安田純平さん。もう一人は「ワタナベ」と出ていた。「まさか交替要員で人質になったわけじゃないだろう」と思った。

そしたら朝日新聞から電話があって、「ワタナベ」は一水会の人ですよ、と教えられた。渡辺修孝（のぶたか）氏だった。一水会と言ってたが、元一水会で、6年ほど前に辞めている。新聞社や週刊誌から次々と電話がかかる。だから、知ってるだけのことは喋った。ただ、かわいそうなのは一水会事務局の人だ。電話がジャンジャンかかる。しかし、今事務局にいる横山氏にしる、咲ちゃんにしる、成島氏にしる、誰も渡辺氏のことを知らない。

「木村代表に聞いて下さい」と言いたいが、木村氏はアンマンだ。だから、そんな電話は、僕の方に回してもらった。

しかし不思議だね。随分と、新聞、週刊誌、テレビの取材に答えたのに、「元一水会の活動家だった」と出てたのは、「週刊文春」と「週刊新潮」だけだった。あとは、（取材しながら）、一切無視だ。「一水会の宣伝になるからやめよう」と思ったのか。（だったら、取材しなければいい）。あるいは、現在、渡辺氏が所属する左翼の方が、「載せないでくれ」と頼んだのか。なんせ、かつての新右翼時代のことは自己批判し、「恥ずべき過去」だ

と思っているのだろうし…。でも、そうじゃないらしい。たとえ嫌でも、過去に自衛隊にいた、一水会にいたことは否定できないし、公になっている。じゃ、記事として面白くないと思い、載せなかったのか。その点、「週刊文春」と「週刊新潮」は精力的な取材をし、独自のルートで〈新事実〉をつかんだから、書いたのだろう。

渡辺氏のことを取材された時、一水会時代のことはキチンと話そうと思った。ただ、僕は寝食を共にしたとか、イラクと一緒にいったとか、そういう密着した付き合いはない。だから当時、一緒に運動をしていた会員と元会員を紹介し、（週刊誌に）電話番号を教えてやった。

ただ、一水会を辞める時に何があったのか、よく知らない。会員同士でイザコザ、喧嘩があったのかもしれない。「もし、あったとしても、彼を批判するような事は言うな。彼の真面目な活動家ぶりだけを話してくれ」と頼んだ。彼らは承知してくれ、週刊誌の取材にも応じた。だから、「あの話は出ないだろう」と安心してた。「自衛隊を辞め、一水会に入り、熱心に活動した。しかし、そこでは満足し切れなくなり、もっと命がけの運動を目指して新左翼に進化した」。そういう話をしたし、他の人もそう話した。それ以外の事は言わない。でも、出た週刊誌を見て驚いた。かくしていた「あの事件」も、「この事件」も出ている。ビックリだ。

そうか、いくらこっちが封印し、隠していても取材記者は警察（公安）や自衛隊や、いろんな所に取材に行く。そこで聞いたんだ。「おっ、こんな面白い話があったのか」と、そりゃー、書くだらう。出たからといって田中真紀子じゃないから仮処分出版差し止めにする事も出来ん。「あの事件」も「この事件」も、本来なら、絶対に表に出てこないことだ。「新右翼の歴史」にも書かれない。それがイラクで人質になり、「時の人」になったが為に、いろいろと調べられ、週刊誌にも載った。心ならずも、新右翼の「歴史発見」になってしまった。

僕も知らないことも多かったが、渡辺氏の経歴はこうだ。週刊誌や会員、元会員に聞いた話を総合すると…。

昭和42年栃木県生まれで、36才だ。昭和42年（1967年）といえば、学生運動まっ盛りの時だ。70年の「よど号」、三島事件の時は3才だ。連合赤軍事件（72年）の時は5才だ。東アジア反日武装戦線〈狼〉の連続企業爆破事件（74年）の時は7才だ。もの心のついた時に、これだけの日本を揺るがす大事件があった。それを知る（テレビを通じてだが）。この影響は大きい。（後で触れるが、一水会を辞めて、まず〈狼〉の支援グループに入って

いるし、その後、重信房子の支援運動をやり、そして小西誠の『米兵・自衛官人権ホットライン』に入り、そこから今回、イラクに派遣されたのだ。 「革命前夜」の動乱期に生まれ、子供時代を過ごした渡辺氏は、高校卒業後すぐに自衛隊に入る。熱い心が燃えたのだろう。86年3月に陸上自衛隊に入隊。習志野の特科大隊という大砲を撃つ部隊に配属になり、88年に満期除隊。しかし、この年、10月に再び自衛隊に入り直す。今度は御殿場・板妻駐屯地の対戦車隊だ。だが、翌89年に除隊。

それからは、過激に、今度は〈本物の兵隊〉を目指す。タイ北部のカレン族義勇兵に志願するのだ。これは、反共のゲリラだ。そして日本の右翼団体・大日本誠流社が支持・支援していた。それを知って渡辺氏は、まず、誠流社に入る。そして二回にわたって、ゲリラに参加する。「当時の仲間」の証言が「週刊文春」に出ていた。紹介する。（この記事の見出しは、〈新たな人質。「人間の盾のカメラマン」と「右翼転向活動家」だ。〉）

「現地の兵士は、いつも一人で考え事をしている彼を『ミスター・シンキング』と揶揄していた。当時、何がしたいのか尋ねたことがあるが、『戦争がしたい。傭兵みたいになりたい』と答えていた。『民族主義は？』と聞くと『そんなのどうでもいい』と。目立つならどこでもいいのかと思った」

この後、一水会に入る。ただ、この時は大変だったようだ。大体、右翼の間で、他の団体に移るということは、ほとんどない。渡辺氏は一水会の方が何でも出来そうだと、思ったのか、入会した。向こうを辞めるに当り、木村氏と誠流社の代表が何度か話合っ、円満に移籍は完了した。それほどまでして、渡辺氏は一水会に入りたかったのだろう。又、木村、日野氏は、それほどまでして渡辺氏を欲しかったのだろう。

その当時は、まだ僕が一水会代表だったが、運動面は木村氏、日野氏が全責任をもってやっていた。湾岸戦争の頃で、日本中が騒々しかった。日本はこのままではダメだ、と思う人々も多かった。渡辺氏だけでなく、福田、佐藤、白鳥…と、自衛隊をやめた人がドッと一水会に入ってきた。そして、四谷公会堂では、これらの元自衛官を壇上にあげて、「沈黙を破った自衛官たち」という集会をやり、200人が集まった。そんな活発な運動をやった時だったからこそ、渡辺氏のような熱心な活動家はどうしても欲しかったのだろう。

彼は91年（平成3年）7月22日に入会している。一水会に入会申込書があったので分かったのだ。入会したのはその日だが、それ以前から活動していたようだ。血液型はA型。職業欄には、何と「ナショナリスト」と書いて

いる。自衛隊を辞めて、一水会に入ったが、無職だったのか。「いや、ガードマンなどをしてました」という人もいる。それで生活費はかせぐが、でも「本当の仕事」はナショナリストだ、という気持ちだろう。「よど号」裁判で、柴田泰弘氏は「職業は？」と裁判官に聞かれて、「革命家です」と答えていた。それにならったのかもしれない。ゲリラとして、カレン族義勇兵に参加した時は、「民族主義なんてどうでもいい」と答えていたが、日本に帰ってからは一水会に入り、「ナショナリスト」ですと胸を張っている。ゲリラとして闘う中で、その自覚と自負が生まれたのかもしれない。

(3)一水会の「007」として超過激活動を展開していた

そうだ。今、気が付いたが、入会申込書には受付番号が付いている。何と「007」なんだ。本当だ。でも、一水会の7番目の会員というわけじゃないだろう。1972年の一水会立ち上げの時だって、7人以上はいた。じゃ、彼が入会した91年で7番目か。しかし、この頃は、入会希望者が、沢山いた。じゃ、7月だけで7番目なのか。ちょっと分からない。当時のことを知ってる人に聞いてみよう。あっ、関口君に聞いてみたら分かるかな。彼は渡辺氏と同じ36才だ。入会したのも同じ頃だ。一水会事務所に行ったら、当時、皆で靖国神社に参拝した記念写真があった。渡辺氏も関口氏も入っている。

一水会に入ってから渡辺氏は活発な運動を展開する。入会した翌92年と93年には木村団長らと共に義勇兵（志願）としてイラクに行っている。又、自衛隊に行って、「決起せよ！」と檄を飛ばしたり、首相官邸に赤ペンキをまいて逮捕されている。さらに、92年6月の「風の会」（野村秋介さんが代表）の選挙の時も、寝食を忘れて運動をしていた。松本効三さん（「朝生」の「日本の右翼」に出た人）の下で自転車に乗って、メガホンで叫び、訴え、チラシを撒いていた。「銀輪部隊」だと言っていた。「風の会」のTシャツを着て運動してる写真がありますよと、関口君は言う。だったら、このHPにアップして、紹介してくれよ。

「週刊文春」の記者とは、僕の家近くの Pasta 屋「パーゴラ」で会い、「枝豆パスタ」を食べながら1時間ほど話をした。でも、発売されたのを見たら、紙面の都合だろう、8行位しか載ってなかった。

〈91年には一水会に入会。

「渡辺君は三年ほど所属していたが、一水会の思想は思ったよ

り右翼的で不満があったようです。選挙後は、狼グループ（東アジア反日武装戦線『狼』）や重信房子のグループの支援をしたり、赤軍派元議長の塩見孝也に近付いたりしたようです」（一水会・鈴木邦男氏）

実は、「三年ほど」というのは僕のうろ覚えだ。5年か6年位、いたのかもしれない。「入会」申込書はあるが、「退会」申込書というのではない。だから、はっきりとした日時は分からない。

「週刊新潮」には、自衛隊を辞めてからの活動が詳しく書かれている。見出しは、〈首相官邸に「赤ペンキ」をぶちまけた「反戦自衛官」人質〉

「ある自衛隊幹部」が渡辺氏について話しているが、辞めた隊員一人一人のことを覚えているのだろうか。「あるいは自衛隊の調査隊かもしれませんね」と沢口ともみさんは言う。「私だって、詳しく調べられてますよ」と言う。彼女も元自衛官だ。そして辞めてからはストリッパーになった。埼玉県朝霞と広島に配属になった。渡辺氏が自衛隊にいたのは86年～89年。その頃、沢口さんも自衛隊にいた。場所は違うが、同じく憂国の志を抱いて国の護りについていたので。

「じゃ、ロフトで対談させてくれないかしら」と言ってた。いいですね。やって下さいよ。ロフトの人、見てたら企画して下さいよ。司会は私がやりましょう。

では、「週刊新潮」に戻って、「ある自衛隊幹部」の話だ。「再入隊は珍しくありませんが、彼が有名になるのは、91年秋に朝霞駐屯地での観閲式で、自衛隊を中傷するビラを新右翼の一水会のメンバーと一緒に撒き、警察に身柄を拘束されたことでした」そして、「週刊新潮」は続ける。

〈再入隊までして、自衛隊の飯を食った人間が自衛隊攻撃の側にまわったことは、関係者に衝撃を与えるのである〉

しかし、ここはちょっと違う。たしかに今は、反戦自衛官の小西誠さん達と一緒に運動をやってるが、91年当時は一水会にいて、「憂国自衛官」だった。ビラ撒きをしたのも、「自衛隊を国軍にせよ!」「自衛官は決起せよ!」というビラを撒いたので。「中傷ビラ」ではないし、「自衛隊攻撃」でもない。これは、「ある自衛隊幹部」の勘違いだ。あるいは、自衛隊員への影響を考えて、あえて、こんな表現をしたのか。さらに、「週刊新潮」では…。

「しかし、彼の過激な行動は、それでは収まらなかった。翌92年1月、来日中のブッシュ大統領の歓迎夕食会の会場になっていた首相官邸前の交差点で、

〈湾岸の戦犯に鉄槌を〉

と書いたビラを撒き、官邸に向かって赤ペンキ缶を投げつけたのである。ぶちまけた赤ペンキは「イラク人民の血だ」と言って民間人虐殺に抗議したのだ。そして、この年と次の年と2回、木村氏と共にイラクに行く。又、「レコンキスタ」には毎号のように書いていたし、「一水会通信」にも元自衛官の叫びを連載していた。再び「週刊新潮」だ。

〈道路交通法違反で2泊3日の留置を経験した渡辺氏は、その後、全く正反対の左翼陣営に走ることになる。

「彼は、その後、『米兵・自衛官人権ホットライン』に参加しました。これは、小西誠という反戦自衛官が主宰するグループで、バリバリの左翼活動家の集まりです。反米という点では共通するものの、思想的には180度異なる団体に転じたことになりませう」（前出・自衛隊幹部）

これを読むと、赤ペンキをぶちまけてパクられたのが、左翼に進化するキッカケになった、かのように読める。「これがイラク人民の血だ！」と言って赤ペンキをぶちまけたが、現地では本当に、血を流して人々は死んでいる。こんなことをやっていていいのか。と、悩んだのかも分からない。

しかし、一水会に入り、イラクに行ったことで目覚めたことは確かだ。一部には、「鈴木さんの“左翼本”の影響も大きいんじゃないの？」と言う人もいる。『腹腹時計と〈狼〉』、『がんばれ！新左翼』など、左翼を評価し、支持した本を読んで、マジに考え、突き進んだのではないか、と言うのだ。それもあるかもしれない。だったら、僕の責任もあるだろう。

それと、もう一つ、〈思想〉面だけでなく、団体行動や、右翼的な体質が嫌だったのかもしれない。当時は、活動家が随分といたし、過激な運動をやっていた。警察ともよくぶつかっていたし、ガサ、逮捕も日常茶飯事だった。それに対し、こちらも強固に団結し、闘う必要があった。そんな集団的・、強制的なところが、嫌だったのかもしれない。一人で、自由にやりたかったのかもしれない。そんなこんなで、一水会を辞めた。そして〈狼〉や重信さんの支援グループで活動をし、小西さんの所に行きついた。多分、そ

こは自由にやらせてくれるし、居心地がいいのだろう。立場は違え、「反米」「イラク支援」で闘っているのだ。それはそれでいいだろう。がんばってほしい。

と、ここで終わろうと思ったが、肝心な事があった。一水会を辞め、新左翼に入る時に、向こうだって、「はい、そうですか」と入れてはくれない。これだけ凄い活動歴がある人間だ。「もう新右翼はやめました」と言っても、おいそれとは信用しないだろう。「スパイじゃないか」と疑われる。それで、「新右翼」との決別の「証拠」として、『Wの告白。元新右翼活動家の自己批判文』を書き、各方面に配った。又、一水会事務所での「ガス爆発」（未遂）事件を起こしたのだろう。こっちは一方的な被害者だ。でも、怒り狂った後輩達を必死でなだめた。「真意を問い質せ！」「査問しろ！」という人も多かったが、おさえた。特に、この頃は見沢氏が出所していた。又、同じことをやられたら大変だと思った。彼の耳に入らないようにした。そして泣き寝入りをした。「内ゲバ」や「査問」なんて、もうこりこりだと思ったからだ。渡辺氏も、縁あって一水会に入り、その時は、思う存分、運動したのだ。誇りに思っていていいだろう。そこで、イラク問題にも目覚めだし、反米闘争をする契機にもなった。さらに過激に突き進み、共産主義者にも進化できた。そして、今は、小西さん達と、反米、イラク支援の運動をしている。そこで頑張ってもらいたい。

【お知らせ】

(1)5月6日(木)「創」（6月号）発売です。私は「8年ぶりの『朝生』」を書きました。

(2)5月11日(火)は7：00p.m.から高田馬場シチズンプラザで一水会フォーラムです。「憲法」シリーズ第3弾で、講師は小林節さん（慶応大学教授）です。

(3)5月13日(木)は7：00p.m.からロフトです。上田哲さん（元社会党国会議員）とトークです。「国民投票制」について話します。

(4)5月19日(水)は高田馬場の「トリック・スター」tel 03(5348)4767で「ライブ塾」です。高橋愛さんの歌と私のトークです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年5月10日

イラク問題の本質を衝いてたね。「朝生」はよかった。

(1)木村、小林氏の「反米愛国コンビ」がよかった。健闘した。

凄いですね。木村三浩氏は、4月30日(金)深夜の「朝生」に出てましたね。「激論！憎悪と虐殺!!イラクの未来は」とテーマも凄い。大体、この日は、イラク問題をやるしかない。と思っていた。そして、イラク問題といったら、木村氏だ。それはテレビ朝日でも分かってたんでしょう。木村氏がアンマンから帰国した4月20日(火)に、もう、「出て下さい」と連絡があったという。テレビ局はちゃんと見てるよね。木村氏が現地に飛んで5人の救出に尽力したことを。木村氏と聖職者協会のクベイシ師が携帯で連絡を取り合って、人質解放に成功したんだ。小泉首相は、「どの線が解放に結びついたか分からない」と言ってたけれど、この線ですよ。

そんなことをテレ朝ではよく知ってたからこそ、第一番目に木村氏に「出てくれ」と言ってきたんだ。「じゃ、出演は決定だよ」と僕が言ったら、「まだ正式じゃないからHPに書かないで下さいよ」と言う。「ディレクターから電話があっただけで、いわば、ウナギの匂いをかがしてもらっただけですから」と謙虚なことを言う。「じゃ、早く会って、本当にウナギを食わしてもらえばいいじゃないか」と言ったんですよ、私は。しかし、そんな時間的ゆとりはなかったんでしょう。本番に突入しました。

いやー、よかったですね。久し振りに朝まで起きて、最後まで見ましたよ。今までは、録画しておいて、昼間に少しずつ見ていた。見終わるまで一週間もかかったりして…。多分、そういう見方をしてる人が多いんですよ。中には、録画見てるうちに興奮して、局に電話する人もいる。「〇〇はウルサイぞ！あいつばかり喋らせんじゃない！」とか、「田原はもっと公平な司会をしる！」とか。さらに、「アンケート」に答えたりして。「すみません。放映は昨夜終わったんですけど」と言われちゃったりして。これは本当の話ですよ。だから皆さんも、録画を見てる時は興奮しても局に電話をし

ませんように…。

朝の4時20分まで見たなんて8年ぶりだな、と思った。「でも、先月出たでしょうが」と言われるかもしれないが、あれは当事者だから、「眠い」とか「疲れた」と言ってる余裕がない。ともかく大変ですよ。でも、見る立場だと、「うーん、眠いな」なんて余裕もっちゃう。それに自分が出ない気安さから、木村氏に、「ガンガン喋んなよ。他の奴らは黙れ！と一喝して…」なんて言っちゃった。イラク問題じゃ一番詳しいんだし、「現地に行ったこともない奴は喋るな！帰れ！」と言ってやったらいい。そしたら木村氏に言われた。

「鈴木さんだったら言えますか？」

言えないよね、あの雰囲気じゃ。そのくせ、人が出るとなると、「頑張れ！ガンガン喋れ」なんて言っちゃう。無責任ですね。「自己責任」がないですよ、私も。

しかし、本番で、木村氏は頑張っていましたね。なんか、自信が全身からにじみ出てましたね。説得力が一番あったし。木村氏が喋り出すと、他のうるさいパネラー達も静かになって、「うん、うん」と頷いて聞いてたね。なかなか、ないことですよ、こんな光景は。さすが、イラクに24回も行き、イラクで「最も信頼されている日本人」だけのことはある。

それと、小林よしのりさんもよかったね。2人が議論をリードしていたね。木村氏は、「もし人質の三人が殺されていたら、英雄になっていたでしょう」と衝撃的な提起をしていた。僕なら、恐くて、そんなことは言えないが、木村氏は勇気あるね。確かにそれは言える。カンボジアで死んだ中田厚仁さんもそうだったし、2人の日本人外交官もそうだった。死ねば、誰も「無謀だ」「自己責任だ！」なんて言わない。政府だって絶対に言わない。

まア、無事に5人が帰ってきたから、「安心して」自己責任と言ってるんだろうけど。小林さんはこの時も言ってたけど、右も左も、〈人質〉を利用して自分の主張をしてるだけだと。そうだよ。自衛隊の撤退を求めるほうも、反対するほうも…。

パウエル米國務長官の言葉だって、左翼の方が都合よく利用している。いつもは米帝国主義者の言うことなんて、全然、聞かないくせに。こんな時だけ利用している。パウエルはこう言った。「誰も危険を冒さなければ私たちは前進しない。彼らや、危険を承知でイラクに派遣された兵士がいることを、日本の人々は誇りに思うべきだ」

でも、これは、むしろ米国内向けだし、米兵向けなんだよ。「危険な所へ

はいかない」が徹底されたら、兵士だって行きたくなくなる。これじゃ困る。だから、ボランティアも行ってもいい。若者は危険を顧みずにどんどん行ってくれ！　と言ってるんだよ。

左翼や市民団体は、鬼の首でも取ったように、このパウエル発言を誉め讃えて、「ほら見る、アメリカ人ですら我々の市民運動を評価してるんだ！」と言ってるけど、ちょっと違う。

それに、アースデイの人々とロフトでトークした時も喋ったけど。「私は反戦デモをやった。これこそが日本政府を、世界を動かしている！」と叫んでる人がいる。又、だから、自衛隊の撤退を要求しよう！このデモだけが、人質になった5人を解放する！と言ってた人がいた。まったく嫌になる。又、渡辺氏は、「私は共産主義者だから、日本政府が助けてくれるとは思わなかった」と言っていた。

でも、国家としては、たとえ共産主義者でも、アナーキストでも、反日思想家でも、助ける義務がある。当たり前なことだ。それと同時に、国家に逆らって、危ない所に行くんだ。「何かあっても、国の助けは求めません」と覚悟して行ったらいい。(まア、それでも国家は助けるんだけど)。そして、助けられたら、その時は潔く、「ごめんなさい」「ありがとうございます」と言えばいい。それだけのことだよ。

それなのに、政府も人質も(その背後の支持者も)、オールorナッシングで、自分の主張だけを言っている。これはおかしいだろう。小泉さんもつい「自己責任」と言っちゃったんだろうね。「人質」の方も、「又、仕事を続ける」「危険なところに行くのは当然だ」なんて言っちゃう。これじゃ、売り言葉に買い言葉だよ。小泉さんも、「よかったね。これからは気をつけてね」位にしておけばよかったんだ。又、人質も、言いたいことは山ほどあるだろうが、判断が甘かったことは事実だし、多くの人に迷惑をかけた事も事実なんだから、まず、「ごめんなさい」「ありがとうございます」と言っておけばいい。本当に言いたいことは、時間がたってから少しずつ言ったらいいし、やりたい事も後からやったらいいだろう。

(2)「脅迫文は日本の過激派が書いた」というデマが生まれた背景

つまり、何ですな。「ごめんなさい」と「ありがとうございます」を言っちゃいけないと思ってるんだろうな。市民運動の人や新左翼の人は。「政府が悪い!」「米軍が悪い!」と敵をやっつけ、攻撃する語彙は一杯持っているけど、自分が失敗した時に、謝罪し、感謝する言葉を知らない。そんなこと

をすれば、「自分たちの陣営」の敗北だと思っちゃう。だから個人的に謝ってはいけないと思ってるんだろう。

確かに、「自己責任」という言葉は嫌な言葉だし、それでもって、ボランティア活動、市民運動の全てを否定してくるように思える。だから反撥するんだろう。でも、誤りや、甘さはあったんだろう。それはお詫びしますと言えばいいんだよ。大して難しい問題じゃないと思う。

渡辺氏は、「金を返せとか、自己責任とか、そんなことを言ってんのは一部の人や一部のメディアだけだ！」と怒って言った。その気持ちは分かるが、もっと、一般の人に分かる言葉で言ってほしかったね。それに、このHPで何回も言ったけど、イラクの人々は日本が好きだし、日本を尊敬している。あの大国アメリカと戦い、そして、ヒロシマ・ナガサキに原爆を落とされた。そこまで徹底的に戦った日本を尊敬している。サムライ、カミカゼの国、日本に敬意を持っている。

今、たとえばアメリカの言いなりになって自衛隊を派遣しても、でも、サムライの心は残っていると信じてるのだ。だから、5人の人質を返したのだ。日本の歴史・文化が、彼らの命を守ったのだ。市民運動や共産主義が救ったのではない。

それに考えてみたらいい。フセインのバース党は社会主義政党だった。本来ならば、日本の左翼や市民運動の方を信用し、信頼すべきではないか。それに彼らは、よくイラクに行っていた。ところが、イラクは、日本の木村氏ら「新右翼」の方を信頼した。それは、木村氏の背後に、日本のサムライ、カミカゼ、そして歴史、伝統を見ていたからだ。その点、日本の左翼や市民運動にはそんな背景は何も見えなかった。

それに〈実績〉も違う。湾岸戦争の時は、木村氏率いる一水会の部隊が戦闘服を着て、イラクに向かった。「義勇兵になってアメリカと闘いたい」と申し出たのだ。これにはイラク側も大感激だった。その時から、厚い信頼が生まれたのだ。もっとも、「義勇兵はありがたいが、イラク人だけで闘いますから」と丁重にお断りした。昨日今日、「人間の盾」になると行って行った連中とはキャリアが違うのだ。

話変わって、今井さんと郡山さんの記者会見だ。解放されてから、日本の警察に随分と調べられたという。「自作自演ではないか」と疑われ、それが心外でならないようだ。しかし、警察はあらゆる可能性を考えて調べるのだ。それも仕方ないだろう。それに、ナイフをあてられ、泣き叫ぶ「やらせビデオ」があるんだ。部分的には「協力」してるんだから、疑惑があったの

は当然だ。

ただ、産経新聞が言ってるように、「日本人関与説」はない。産経は書いていた。ゲリラの声明文が「革マルの文章だ」とか。「日本人が書いたものだ」と。又、ビデオを分析して、「言って!」「言って!」と日本語で指示した人がいた…と。しかし、これは嘘なのだ。つまり、産経の嘘のために、3人は誘拐それ自体も「自作自演だ」と疑われて、日本の警察に調べられたのだ。考えてみたら、ひどい産経だ。ただ、産経のいってるようなことを信じてる人もいるだろうから、キチンと書いておこう。これは現地に行ってきた木村氏からも聞いた話だ。それで、この〈謎〉が解けた。

「日本人が関与したかもしれない」という「謎」ではない。なぜ、そんなデマが、まことしやかに流布されたか。その〈謎〉が解けたのだ。向こうのムジャヒディン（ゲリラ）の人々は日本の情報をよく知っている。「ナガサキ、ヒロシマを知ってるのは変だ。日本人シンパが通報し、教えたんだ」というが、違う。さっきも言ったように、日本人以上に、日本のことを尊敬していて、特にサムライ、カミカゼ、そしてヒロシマ、ナガサキを知っている。日本人よりもよっぽど知っている。沢口ともみさん（ストリッパー）は「私は被爆二世です。アメリカと闘います!」とイラクで演説したら、拍手喝采で〈英雄〉になっていた。イラクは、日本のことは、かなり知っている。まず、そのことを知っておいてほしい。次に、木村氏たちの動きも知っている。24回も行って、向こうの人にも人脈があり、奥深い親交があるからだ。

それと同時に、日本の市民運動のデモなどもよく知っている。日本のテレビなどを見て、「おっ、日本でも反米デモをやってるな」という感じで見ている。さらに、日本の市民運動や新左翼が、インターネットなどを通して、イラクに盛んに発信している。アルジャジーラテレビにも送っている。さて、市民運動のデモというが、現実には、いろんな新左翼党派が入り込んでいる。ロフトでアースデイの人と話した時、客席の人が、「アースデイのデモは一般市民がやってるというが、陰で動かしているのは第4インターじゃないか」と言っていた。エッ?そんなことがあるのか、と驚いた。

確かに、いろんな人が入っているだろう。しかし、それがどれだけ牛耳っているか分からない。公安などは、この点を大袈裟にとらえて、「純粋な市民運動なんてない。全ては新左翼セクトが仕切っている」と言っている。それだけ新左翼（過激派）が裏で動いている。だから危険だ。と言ってるわけだ。

しかし、アースデイのデモに出ている、桃色ゲリラを初め、一般の人は全く知らない。「そんなことはない。私たち一般の市民が動かしてるんだ」と思っている。まア、これも事実だ。だが、四つ口（第4インター）にしる、中核にしる、革マルにしる、いろんな所に入りこんでいる。そして、「実は、これは我々が領導してるんだ」と誇示している。そこでイラクだ。そんな日本のデモの様子を一番、詳細にイラクに発信してるのは、実は革マルなのだ。インターネットで発信し、向こうのマスコミに送りつけ…と。さすがは「実務の革マル」といわれるだけのことはある。そして、日本の「反米デモ」の情報は、（ほとんどが）革マル発信なのだ。

そこでイラクの人々も、マスコミも、ムジャヒディンも、それを見て、「おーっ、日本でも頑張ってるじゃないか」と思うのだ。説明や解説だって革マルの文章だ。それを見、引き写して、「日本だって、これだけ自衛隊撤退を要求する市民の動きがある」と声明文に書く。そうすると、どうしても、革マルの文章に似てくる（分析とか、現状把握なども）。そういうことだ。又、こうも考える。つまり、「イラク支援」は、日本の民族派に主導権をとられた。それに焦って革マルが、盛んにイラクに情報を送っている。そうはさせじと、元中核派の小西誠さんたちは「米兵・自衛官ホットライン」を作り、渡辺氏を派遣した。ここでも、中核、革マル戦争があるわけだ。そんなところだ。

種を明かせば、こんな他愛のないことだ。それを知らないから、産経などは、「声明文」を見て、「革マルの文章だ」とか、「日本にも共犯者がいて、声明文を書いてやってるんじゃないか、と言うのだ。かわいそうなのは、人質の3人だ。産経の下らない「推理」のために、疑われ、過酷に取り調べられたのだ。それに対して産経は「間違っでごめんなさい」とも言わない。おいおい、どうした「自己責任」！と言いたいやね。

(3) 〈国益〉なんて言葉は卑しいやね

そうそう、3月の「朝生」に出た時、僕は小林よしのりさんと、CMの時間に、「反米」と「国益」について話した。「反米」については、『創』（6月号）に詳しく書いたんで見てほしい。

もう一つの「国益」の方だ。今、国益という言葉が言われてるけど、卑しいやね。個人エゴと同じく、国家のエゴだもんね。日本は北朝鮮の拉致被害者を自力で救出できない。アメリカに助けをもらうしかない。だから、アメリカのイラク攻撃を支援する。（その結果、イラクの人が何万人死のうと構

わない) と。それが「国益」だ。あるいは石油のためにもアメリカを支援すべきだ。これが「国益」だ。嘆かわしいやね。

あの大東亜戦争だって（全てが正しいとは言わないが）、東亜解放、アジアの植民地解放という理想を掲げて戦った。国家のエゴイズム、自分さえよければいいという国益で戦ったのではない。そういう話を小林さんとした。小林さんも賛成してくれた。「よし、本番でも喋りましょう」と言ったけど、その話は出来なかった。でも、小林さんは「SAPIO」（5月12日号）の「新ゴーマニズム宣言」の中で書いてたね。ズバリと。

〈誇りある民はどの国にいても実利より観念を尊ぶ。

「武士道」は観念であり、「国益」という損得勘定は商人の道である〉

又、人質家族には嫌がらせの電話やファックスが殺到した。それについて、こう言っている。

〈そうやって「私」的に、家族に対して直接、批判や脅迫を突きつける輩が、最近の日本人には多くなっている。多分、産経新聞の読者だろう〉

凄いね。最後の一行は。僕もそうは思っても、なかなか書けないよ。産経ではコラムで、人質家族への電話やファックスは「嫌がらせ」ではなく、「正当な抗議」であり、家族は謙虚に耳を傾けるべきだ、と書いていた。これほどまでに弁護してもらっては、なおのこと、匿名でジャンジャンと批判や脅迫を送るだろうよ。

又、産経では、「声明文」が日本の過激派が書いたのではないかと、何度も書いていた。それに触れて、小林さんはこう書いている。

〈なにしろ産経新聞は、4回に亘って、人質を取ったグループの声明文が、「日本の過激派の文章に似ている」という記事を載せた。インターネットを駆け巡った「人質・自作自演説」に影響された「陰謀説」の記事を「公器」で書いたのである。

そういう説は「私」的に面白がっても、「公」的には書かないのが常識というものだ。この新聞は最近、どんどん卑劣な記事が目立ってきた。あせりがあるのだろう〉

確かに、そうだね。「陰謀説」は、多分、日本の公安が流しているのだろ

う。革マルなどが発信した日本の情報をイラクの人々も見ている、それでムジャヒディンも判断しただけなのに。あるいは公安は、そんなカラクリを知った上で、「ほら見る、文章が似てるだろう。日本の新左翼と向こうのゲリラが共謀してやってるんだ」と産経に吹き込んでいるんだ。それによって、「だから、左翼は危ない。もっと公安の予算をくれよ！人員を増やせ！」と叫んでいる。自分たちの存在価値を高めようとしてるだけなんだ。とんでもない連中だ。

【附録】

(1)米ABCテレビがイラク戦争の米側戦死者の全員を写真と共に発表した。700人以上になるから、えんえんと30分以上に及んだ。しかし、ブッシュ政権を支援し、全米で62の地方局を運営する「シンクレア・グループ」は「反戦ムードを煽る」と、放送しないことを決定した。さらに問題は燃え広がり、この放映ボイコットに遺族が猛反発。「戦死者の名誉を踏みにじるものだ」と。これは遺族の言い分に理がある。それにしてもABCは凄い。4月30日夜、計721人の氏名や軍の階級などを顔写真と共に紹介したのだ。勇気のある放送だ。戦死者を紹介することが「反戦を煽る」なら、戦争そのものが「反戦を煽る」ことになる。皮肉な話だ。

(2)日本の新潟県佐渡で70才の能楽師が逮捕された。女子大生に「わいせつ行為」をしたという。しかし奇妙だ。この能楽師は、新聞に名前も出され、晒し者にされているが、重要無形文化財に指定されている佐渡宝生流能楽を伝承する本間家の第18代当主だ。

こんな偉い人が、女子大生にどんなひどい事をしたかと思って記事を読んだら…。佐渡で行われた薪能の後見として、能楽師が来ていた。女子大生はその後の飲食の場で、能楽師と知り合い、彼の家に泊めてもらった。そして、夜中に、

「女子大生(20)の尻などを無理やり触った。女子大生が携帯電話で警察に通報。駆けつけた佐渡東署員に逮捕された」

これはひどいね。怒ったね。これは女子大生が悪い。男の家に泊めてもらったんだよ。自分の意志で。軽率だ。男だって、「じゃ、いいのかな」と思うだろうよ。女子大生は、「なーに、相手は70才の爺ちゃんだから大丈夫」となめてかかったのか。だったら、闘えばいい。勝てるだろうよ。それなのに、勝手に押しかけて泊めてもらい、尻をなでられたとって、いきなり110番だ。だったら、男の家になんか泊めてもらうな。「自己責任」はどうした！腹が立つ。

そのうち、ラブホテルから携帯で警察に電話する奴も出るだろうよ。「何もしないからと行って泊まったのに、いきなり襲ってきた。捕まえて下さい！」と。それでも警察は出動するのかね。

(3)「正論」(6月号)の広告を見て驚いた。イラク人質問題の特集だが、何と、巻頭は石川水穂(産経新聞論説委員)の「サヨクを論破するための理論武装入門」。今時、凄いですね。もう、論破する必要もないでしょう。骨のあるサヨクもいないし。むしろ絶滅寸前のサヨクをどう保護してやるか。それを考えるべきでせう。一水会なんて、民族派を育てているだけでなく、「共産主義者」もちゃんと育てている。人質になった渡辺氏はそうですよ。一水会を辞めて、新左翼、共産主義者に〈進化〉しちゃったんですから。

【お知らせ】

(1)5月11日(火) 7:00p.m.より一水会フォーラム。高田馬場シチズンプラザ。講師は小林節先生(慶応大学教授)で、テーマは「日本国憲法の行方」。木村三浩氏のイラク・レポートもあります。又、アッと驚く報告とお知らせもあるそうです。

(2)5月13日(木) 7:00p.m.からロフトプラスワン。「世界の中心で怒りを叫ぶ」上田哲氏(元社会党衆院議員)と私のトークです。今回は「国民投票」について。

(3)5月19日(水) 7:00p.m.より、高田馬場ライブ塾で、国民的アイドル歌手・高橋愛さんのライブ。そして私のトークです。ライブ塾(トリック・スター)のtelは、03(5348)4767です。

(4)6月8日(火) 7:00p.m.からロフトです。松尾貴史、岸田秀、そして私のトークです。「幻想まっしぐら。性から政治までを3人が語る」です。

(5)6月9日(水) 7:00p.m.より、一水会フォーラム。今回の講師は何と…! 詳細は次週発表です(勿体をつけて…)。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン/丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年5月17日

初期一水会を創った笹井氏がブラジルから来日した

(1)演説がうまかった。なんせ、「昭和の日蓮」と言われた

5月9日(日)、笹井宏次朗君に会った。久しぶりだ。笹井君なんて言っちゃ失礼かな。もう52才なんだから。でも、昔とちっとも変わらない。若々しいし、元気一杯だ。笹井氏は、元一水会の同志だ。というよりも、一水会を今のような「行動的な一水会」にした人だ。そして23年前に単身、ブラジルに渡った。

23年間の間に、8回帰国している。一週間か10日位、そのたびに日本にいる。しかし、長い間、帰国しないこともあり、いつも、「久しぶり」と言って会っている。この前、日本に来たのは、いつだっけ？ 友人の三浦カズの結婚式に出るために帰国した時でしたよね。と言ったら、あれは8年前だという。「3年前に来たでしょうよ」と言う。でも、三浦カズの時の印象が強いのだ。三浦カズといっても、「ロス疑惑」で逮捕され、無罪になった三浦和義ではない。サッカーの三浦知良だ。笹井氏は、彼がブラジルでサッカーをしてる時に知り合って親友になったのだ。ブラジルの新聞社に勤めていたから、初めは取材で会ったのだろう。そのうち意気投合し、親友になった。その三浦知良が女優の設楽りさ子と結婚した時に、呼ばれて、わざわざブラジルから来たわけだ。

さて、今回は、友人が選挙に出るので、その準備やら応援で来日したようだ。2000年から海外の日本人にも選挙・被選挙権が認められ、南米を基盤にして立つ人がいる。高倉達男という人だ。その人の応援だ。日本で、いろんな人に会ったら、「じゃ、むしろ笹井さんが立った方がいいんじゃないか」と言われたという。そりゃそうだ。彼は行動力はあるし、演説はうまいし、理論家だ。だったら、「次」の可能性もある。それに、ブラジルには、16才の息子がいる。「こいつが頭はいいし、優秀なんですよ」と親バカぶりを発揮する。「行く行くは、ブラジルの大統領にしたい」と夢もデッカイ。

ビックリした。

その頃は、シュワルツェネッガーがアメリカの大統領だ。ロシアは（木村三浩氏の親友の）ジリノフスキーが大統領になっている。又、フランスでは、（やはり、木村氏の親友の）ルペンの娘が大統領になっている。イラクでは、バース党が復活し、木村氏の親友が大統領になっている。日本では、木村氏の息子が一水会三代目になっている。木村氏はその時は都知事か、首相だ。

すごいやね。世界も大きく変わるよ。…と、そんな夢を持たせる会合でしたね。笹井氏の歓迎会は。一水会創設時の世話人だった犬塚哲爾氏が呼びかけて、この日の歓迎会になったのだ。やはり世話人だった四宮正貴氏も来ていたし、元一水会の小宮氏はじめ懐かしい顔ぶれが集結した。

「考えてみると一水会も多彩な人材を輩出したよね。ブラジルで出世した笹井氏はいるし、右翼界の大物になった犬塚、四宮氏はいるし」と言ってる人がいた。「さらに共産主義者に進化した人もいるし」と他の人が言う。イラクで人質になった渡辺氏のことらしい。確かに、多彩だよね。

さて、笹井氏の話だ。彼は、元々は国柱会の活動家だった。国柱会というのは日蓮宗で、田中智学が作った。日蓮が、「われ日本の大船とならん。柱とならん。眼目とならん」と言った。その中から取って、「国柱会」だ。石原莞爾や宮沢賢治などは熱心な信者だった。又、昭和維新運動に与えた影響も大きい。田中智学の息子の里見岸雄は『天皇とプロレタリア』『国体に対する疑惑』などの本を出し、伝統的な天皇論を排し、革命的な天皇論を作り上げた人だ。左翼をも取り込もうとしたのだ。僕も大いに影響を受けた。

『腹腹時計と〈狼〉』『がんばれ！新左翼』を書く時は、里見を意識して書いたような気がする。

さて、その国柱会だが、70年代、「良識復活運動」をやっていた。街頭で車で辻説法をやっていたのだ。左翼からこの国を守り、日本の良識を復活させよう、と訴えていたわけだ。この時僕らは、彼らと知り合い、それが一水会の転機になる。

一水会は、元々は、学生運動OBのサロンだった。酒を飲んで、昔の懐古話をする集まりだった。70年の三島事件以降、昔の活動家仲間が集まり、酒を飲んでいた。「昔はよかったな」「あの頃は命がけで運動したよな」と昔話をしていた。まだ20代の半ばか後半の奴らばかりなのに、もう、「老人」的なサークルだった。三島や森田必勝氏を偲んで酒を飲んでいた。「一酔会」だった。

それが、月に一ぺん位、勉強会でもやろうかとなり、第一水曜日に集まるようになる。この時は、犬塚、四宮、田原、田村、小宮…と「生長の家」の出身者が多かった。それに阿部勉氏のような「楯の会」出身者が加わった。でも、やはり、ただのサロンだったし、サラリーマンのサークル運動だった。

ところが、さっき言ったように、笹井氏たちのような〈現役〉の活動家と知り合い、彼らが合流すると、一水会は突如として、「行動的な団体」に変貌した。元々は活動家の集まりだし、ちょっと休んでいただけだ。それに火をつけたのは笹井氏たちだ。「生長の家」の宗教と、「日蓮宗」の国柱会が合体したとも言える。

国鉄ストに反対して、デモや集会をやったり。防衛庁に抗議に行って捕まったり。これで僕は産経新聞をクビになり、活動家に戻ったが。まア、いろんなことがあって「闘う一水会」になった。そうしたのが笹井氏だ。又、笹井氏は、レコンの編集長も長い間、やっていた。「RECONQISTA」というロゴを描いてくれたのも彼だ。

彼はよく勉強していたし、行動的だった。それに演説がうまい。街頭でも、彼が話し出すと、ワーツと人が集まって聞いていた。大体、国柱会は、いわば〈辻説法のプロ〉だったから、演説はうまいんだね。日蓮だって、道の辻々で人々に「国難が来るぞ！」と説教し、折伏してたんだ。今気が付いたんだけど。と言うことは、右翼の「街宣のルーツ」は日蓮なのか。じゃ、「街宣車のルーツ」は誰かって？ 愛国党の赤尾敏さんが初めて使ったんですよ。元々、赤尾さんは国会議員だった。だから、選挙カーで訴えていた。議員をやめて右翼一筋になってからも、車を使ってやっていた。そのうち、他の右翼の人達も、「それはいい」「効果的じゃわい」と使い始めた。

だから、元々は政党の車も右翼の車も同じ目的で作られ、使われているんだ。ただ、自民党にしる、民主党、社民党、公明党、共産党など、一般の政党は、必ず「演説カー」、「選挙カー」という。間違っても「街宣カー」とは言わない。「街宣カー」「街宣車」といえば右翼の黒い大きな車のことを皆、思い浮かべるからだ。それと混同されたくないと思っているのだ。

(2)笹井氏が一水会を「行動する団体」「闘う新右翼集団」に変えた恩人だ

さて、笹井氏だ。笹井氏の兄貴も運動をやっていて、国柱会にはこの笹井兄弟、そして山田君、元木氏など、イキのいい若い人たちが多勢いたんだね。その若いグループが一水会に合流した。何やら、民主党と自由党の合流

のようだ。あるいは連合赤軍か。いや、それはないな。合法的な運動だから。

こういう「若い血」によって一水会は、「行動的団体」へと生まれ変わったんですな。

それに笹井氏はレコンの編集長もやっていた。「行動」だけでなく、「実務」も出来た。今回、帰国するなり笹井氏いわく。「まだ、みやま荘にいますか?」「そうだよ。生涯みやま荘だよ」と言ってやった。

「あそこでレコンの割り付けをしましたね」と言う。あっ、そうだったか。僕の家で、二人で夜、割り付けをしたなー、と思い出した。彼が、割り付けをして、見出しを考え、写真の指定などをしている。そして、「ここ20行書いて下さい」「ここ10行削って下さい」と言われ、僕も必死でやっていた。そんなことをしてるうちに、白々と夜が明けた。…ということが何回もあった。いや、何年も続いたのかもしれない。レコンの「縮刷版」を見たら分かるが、「編集長 笹井宏次朗」となってる号がかなりある。

笹井氏が演説がうまいというのは、声がよく通るし、声が大きいただけでなく、〈情熱〉があるんだ。一水会の街宣でも、彼が喋れば、歩いてる人たちも、「オッ!」と思い、歩みを止めて、聞いていた。手を振り上げながら、いわば全身で演説をしていた。その頃の勇姿がレコンに、載っている。見てほしい。

そうだ。彼と一緒に入ってきた山田氏のことだ。彼は最近、惜しくも亡くなったが、この人も、演説がうまかった。それに努力家だった。街頭で演説するだけでなく、家の中でも練習していた。「えっ、そんなに家が広いの?」と思うかもしれないが、6畳一間のアパートだ。中野区に住んでたと思うが、木造のアパートの二階に住んでいた。窓を開けると、小さな道路がある。たまに人が通っている。その人たちに向かって、演説をするんだ。洗濯物を干す出っ張りがあるが、そこを市ヶ谷のバルコニーに見立て、三島由紀夫のような気分で、道ゆく人々に訴えるわけだ。

「町内の皆さん! 日本はこのままでいいのでありませんか。あの三島烈士の叫びを思い出して下さい!」と。

下の道を歩いてる人はビックリするよね。今だったら、110番されちゃうかもしれないな。「危ない人がいますよ」なんて。どうせ演説するんなら、ついでに二階の窓から、布に書いたスローガンを垂らせればいい。「自主憲法制定!」とか。「北方領土奪還!」とか。ついでに「立てこもり」までやったりして。

話が脱線するが、この前テレビを見ていたら、お笑い番組で、こんな事を言っていた。「ひきこもりの立てこもりだったら怖いね。これは長引きますよ。10年も立てこもったりして」

まア、形態は似てるかもしれないが、二つは明確に違う。政治的スローガンを叫んで居続けるのが「立てこもり」だ。それに、「人質」を取る。その点、「ひきこもり」は政治性はない。だから警察も動かない。

いや、待てよ。と、ここまで書いて思った。立てこもりは必ずしも政治的スローガンでなくてもいいな。非政治的・個人的な「要求」でも、時々、やられている。逃げていった彼女や奥さんに帰ってきてほしい。でも、いくら電話しても相手にしてくれない。それで思い余って、どっか近所の店などに立てこもる。

こんなことをしたって、逃げた女の気持ちは戻るわけじゃない。ますます離れるさ。でも、一目だけでも会いたいのか。しかし、巻き添えにされた人質も迷惑だよな。犯人への恐怖と怨みはある。と同時に、「逃げた女」に対してだって、文句を言いたいだろう。「お前が逃げるから、無関係の俺達がかんな目に会うんだ。戻ってきてやれよ。少なくとも、一度は愛し合ったんだろうが。お前がちゃんとつなぎとめてくれてたら、他の人は迷惑しないんだよ」…と。



小林節先生（慶応大学教授）

あっ、こんな話はどうでもいいんだ。笹井氏の話に戻る。歓迎会から2日後の5月11日(火)、一水会フォーラムにも来てくれた。この日の講師は小林節先生（慶応大学教授）で、テーマは「憲法改正の行方」だった。この時に、来てくれたのだ。小林先生の講演が終わったあと、挨拶してくれた。

又、二次会では、彼が中心になって、ブラジルの話をしてくれた。小林先生は用事があって、二次会には出られなかったもので、急遽、「笹井氏歓迎会」に変わったのだ。

(3)一水会には多くの人が入り、多勢な人が巣立っていった

さらに、例の「宝来家」に行って三次会をやった。ここは、かつて一水会の事務所があった（この店の二階に）。一水会が最も激しく闘っていた頃の事務所だ。店のおばさんも、びっくりしてた。「まア、笹井さん！」と。

笹井氏からは、ブラジルの日系人の話。外国から見た日本。などについて話してもらった。同席した犬塚哲爾氏が言ってたが、「笹井君は、三島さんの檄文を暗誦してるんだ」。

野分祭の時は、何も見ずに「檄文朗読」をやってみせた。凄い男だ。「今でも要所要所はおぼえてます」と言って、披露してくれた。「教育勅語」や歴代天皇の名前を空んじてる人はいるが、三島さんの「檄文」を暗記してる人は他にはいない。

それにしても、久しぶりの「一水会フォーラム」は懐かしかったようだ。「そうだね。昔は、この宝来家の上で一水会の例会をやってたね」と思い出した。6畳二間だが、一間はビッチリと机がある。だから残った6畳間で、車座になって一水会例会をやっていた。「一水会例会」とか、「一水会講座」「現代講座」と名前も変わったようだ。20人位入れればギュウギュウだった。でも、いろんな人が、この狭い所に来てくれた。元全学連委員長の唐牛（かるうじ）健太郎さん、作家の桐島洋子さん、弁護士の淡谷まり子さん、評論家の小沢遼子さん…などだ。

「でも、あの頃と今では参加してる人の層が違いますね」と笹井氏。

「今日、シチズンプラザに来た時、部屋を間違ったかと思ったんです」と言う。「だって、女の人が多いし、男の人だって、普通の人ばかりだ」。それにこの日は、小林先生の話聞きと、50人以上の人がつめかけ、補助椅子を出すほどの盛況だった。それを見て、驚いていたのだ。

そうか。昔は、もっと小じんまりとやっていたのか。彼がいたのは、一水会の草創期で、やっと（運動体）になったばかりの頃だ。自衛隊をやめた人がドッと入ってきたり、木村氏が中心になって、過激な運動を展開するが、その前なのだ。

「あまり、右翼っぽい顔をした人はいませんね」と笹井氏。そうか。今は、普通の人が多い。昔は、いかにも「右翼だ!」「活動家だ!」といった

顔をした人が多かったのかもしれない。それにかなり激しい運動をしていたから、一般の人や、女性などが、ちょっと近寄れない雰囲気があったのかもしれない。

あるいは、例の見沢氏らの「査問事件」の後遺症があったのかもしれない。あれで一水会はもうつぶれると思った。レコンも終わりかと思った。(地獄)を見た。そこから立ち直ったので、もう、「非合法はやらない」と心に決めた。この時から一水会もレコンも大きく変わった。何とか、合法的で、普通の運動をやろうと思った。市民運動化したわけだ。それは徐々に徐々に変わってきたと思う。しかし、久しぶりに見た笹井氏の目には〈激変〉に映ったのだろう。

当日、一水会フォーラムに来てた人も、笹井氏にさかんに質問していた。「昔の一水会はどうだったんですか？」と。笹井氏は丁寧に答えていた。元一水会会員のS氏が言っていた。「一水会をやめて新左翼に行った人は渡辺氏だけじゃないですよ。もう一人、戦旗派に行った人もいます」。

凄いなー。新左翼に〈進化〉した人が2人もいたのか。「でも、その人は元戦旗派で、一水会に来て、やめて、又、戦旗派に戻ったんです」。

ウン。じゃ何というんだらう。そんな人は、「出戻り新左翼」なのか。一水会はいろんな人がいる。初期は、「生長の家」と「楯の会」だった。それから、笹井氏たちの「国柱会」グループが入ってきた。それから、新左翼から来た人もいる。中核派、戦旗派、共産党…と。昔のレコンを見ていると、そんな人たちが「手記」を載せている。でも、暗くはない。だって、「私はこうして新左翼が治った」「日共が治った」といった文章だからだ。一水会をやめた、渡辺氏にすれば、「私はこうして新右翼が治った」といった感じなのか。実際、一水会をやめる時は、「Wの告白」と題のついた自己批判文を書き、各方面に配付していた。そのことは、「週刊新潮」にも載っていたが。

一水会の二次会の時、一人の美女が来た。運動にも政治にも全く関係ない人だ。笹井氏にお礼を言いに来たのだ。それも僕が呼んだのだ。

僕は大昔、産経新聞に勤めていた。販売局と広告局にいた。その時、広告代理店の人が出入りしていた。その時の人だ。何十年かたって、突然電話があった。お兄さんが重い病で、ある薬が効くというが、日本では製造・販売してない。ブラジルでは手に入るという。それで、ブラジルに知り合いはなにか、というのだ。「あっ、宏次郎がいる」と、すぐに紹介してやった。FAXや電話や、いろいろと連絡も大変だったが、笹井氏は引き受け、駆け

ずり回って、薬を手に入れてくれた。そして、日本に送ってくれた。だから、ものすごく、世話になったのだ。ただ、残念ながら、もう手遅れで、お兄さんは亡くなられた。しかし、妹としてはやるだけのことは全てやった。お兄さんもとても感謝していたという。

今回、「笹井氏が来日してるよ」と言ったら、「会ってぜひお礼を言いたい」と言って、来たのだ。「笹井さんには本当にお世話になりました」と言っていた。又、「紹介してくれた鈴木さんにも」と…。僕だってたまにはいい事をする。

僕の産経時代を知ってるというので、一水会の人がいる聞いていた。「まじめに勤めていたんですか?」「算盤はうまかったらしいですね」…。と。「そうです。有能な社員でした」と言ってくれりゃいいものを。「エ? 仕事なんか口クにしてませんでしたよ」だって。そりゃないだろうよ。頼みを聞いて、笹井氏を紹介し、薬を手配してやったのに…。と、ガックリときたところで、オワリ。

【お知らせ】

(1)5月19日(水)は7:00p,m,より、高田馬場ライブ塾で、美人アイドル歌手・高橋愛さんのライブと私のトークです。高田馬場駅から徒歩3分です。telは03 (5348) 4767です。

(2)6月8日(火)は7:30p.m.からロフトです。松尾貴史、岸田秀、そして私のトークです。「幻想まっしぐら。性から政治まで」です。岸田さんの本は『ものぐさ精神分析』をはじめ、この日のために読み返しています。松尾さんの本も買って今、読んでます。『業界用語のウソ知識』(小学館)、『オカルトでっかち』(朝日文庫)、『犬もネコ舌』(ワニブックス)、『接客主義』(知恵の森文庫)などは面白いです。皆様も、読んでみて下さいませ。

(3)さて、次の日、6月9日(水)ですが、一水会フォーラムに、あの安田純平さんが来ます。イラクで人質になったジャーナリストで、元・信濃毎日新聞記者です。演題は「三泊四日のイラク拘束全真相」です。拘束の一部始終やイラクレジスタンスの現状を語ってくれます。又、木村三浩代表との討論も予定してるそうです。

そうそう、先週は、思わせぶりに、勿体ぶって講師の名前を公表しませんでしたね。「一水会で発表する前に書かないで下さい」と言われてたんです。だから、5/11(火)の一水会フォーラムの後で書こうと思ったんです。そしたら、一水会のHPではすでに発表されてたんですな。「アホみたい」と皆

に馬鹿にされちゃいました。まア、こういうこともあるでしょう。カッコ悪いですね。

(4) 6月16日(水)は7:00からトリック・スターです。

(5) 7月6日(火)は7:00p.m.からロフトで植垣康博さん(元連合赤軍兵士)と中村うさぎさん(作家)と僕のトークです。

(6) 「レコンキスタ」(5月号)が発行されました。16頁で、充実した内容です。1面は木村代表の「占領統治の悪逆が人質事件を発生させた」。2、3面は私が書いてます。このHPに発表した原稿を基にして、書き直し、書き加えました。「人質全員が帰ってきた、今だから言えること」。それに15面には、「平成文化大革命」で、ミッションスクールのお話を書いてます。一水会の宇多咲さんは、「これはよかった。涙が出た」と言ってました。初めてほめられ、感激しました。キリスト教の学校は嫌いで嫌いでたまらなかったのに、でも、卒業後は、キリスト教の影響を色濃く受けている。もしかしたら僕が一番、キリスト教的かもしれない。そのうち、「聖クニヨニヨン」と呼ばれるようになるかもしれない。と書いた所がよかったといいます。レコンは他にも、米兵によるイラク人の虐待問題や、四宮正貴先生の憲法講演など、盛り沢山です。これで500円は安い。年間購読料は6千円です。申し込みは一水会へ。03(3364)2015

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年5月22日

どうせ俺らは裏切り者よ ＝「侍ニッポン」と新たな〈転向の時代〉＝

(1)50年ぶりに壮大な〈謎〉が解けたよ

この歌は知っていた。子供の時から知っていた。なんせ僕の生まれる前に出来たし、映画にもなって歌われた。だから同年配の人は皆、知っているだろう。侍の話なんだが、勇壮な歌ではない。正々堂々と闘うぞ！ という歌でもない。忠義の歌でもない。不思議な歌だ。なにやら、ニヒルで、自虐的なんだ。一体この歌は何だろう。どんな侍なんだろうと、気になっていた。

「侍ニッポン」という歌だ。一番有名なのは三番だ。

〈3.きのう勤皇 あしたは佐幕
その日その日の できごころ
どうせおいらは 裏切り者よ
やぼな大小 落としざし〉

なんだろう。これは。なんて自嘲的、なんて自虐的なんだ。こんなのは「サムライ」じゃないぞ。武士道もないじゃないか。奇妙な歌だと思った。

多分、小学校に入ってすぐに耳にした歌だ。それ以来、50年以上、耳の底に残っている。もしかしたら、この哀調を帯びた歌の〈自嘲・自虐〉が今も残っていて、それが僕の文章を書く上での底流になってるのかもしれない。右翼運動をしながら、「右翼なんて下らねえ」「左翼の方が頑張ってるじゃないか」と書き、それが『腹腹時計と〈狼〉』（三一書房）になった。今の右翼はダメだ。戦前の右翼だけだな、学ぶべきものは…という思いが、『証言・昭和維新運動』（島津書店）になった。又、新左翼が元気がなくなると、『がんばれ！新左翼』（エスエル出版会）を書いた。やっぱり、「侍ニッポン」だよな。「どうせおいらは裏切り者よ」だ。それに、『脱右翼宣言』（株）IPC）なんて本まで出した。そうだ。もっと凄いのがある。

辛淑玉さんと対談本で、『こんな日本、大嫌い』（青谷舎）という本だ。こんなので出している。（さらに凄い奴がいる。元一水会の渡辺修孝氏だ。彼なんて、実際に「共産主義者」にまでなっちゃった。そしてイラクに行つて人質になった）。これはトラウマなんだろうか。あるいは洗脳なのか。小学生の頃に聞いた歌がずーっと耳に残っていて、影響を与え続けていたんだ。この奇妙な歌をもう少し紹介する。えーい、全部紹介しちやえ。

1. 人を切るのが 侍ならば
恋のみれんが なぜ切れぬ
のびたさかやき 寂しくなでて
新納鶴千代 になが笑い
2. 流れ流れて 大利根こえて
水戸はこの丸 三の丸
おれも生きたや 人間らしく
梅の花咲く 春じゃもの
3. 命とろうか 女をとるか
死ぬも生きるも 五分と五分
泣いて笑って 鯉口切れれば
江戸の桜の 雪がふる

今でもこの歌はメロディも歌詞もおぼえている。道を歩いていて、つい口遊んだりする。でも、物語の内容は分からない。何で「裏切り者」なのか。何で、「恋のみれん」が切れないのか。

それに、侍といいながら、「近代的」というか、「実存的」な問いかけがある。そのミスマッチも気になっていた。

そして時は経ち、年月は一気に50年も流れた。今年の5月の連休の時だった。中野図書館で偶然に見つけた。群司次郎正の『侍ニッポン』だ。講談社文庫だ。エッ！こんな本があったのか、と驚いた。僕にとっては、「侍ニッポン」とは〈歌〉であり、〈映画〉だ。そういうイメージしかない。いや歌だけだ。映画は見ていない。いや、50年前に、もしかしたら見てたかもしれないが、おぼえてない。〈歌〉だけがずーっと残っていた。だから、「原作本」があるなんて全く知らなかったのだ。学校でも誰も教えてくれなかった。

50年も経って、あの壮大な〈謎〉が解かれようとしてるのか。興奮して、借りてきて、読んだわさ。この文庫は、講談社の中でも、「大衆文学館文庫コレクション」に入っている。今では忘れられたような名作が随分入っている。いいことだ。〈物語の復活〉と銘打っている。山田風太郎の小説も随分入っている。三上於菟吉の『雪之丞変化』、久生十蘭の『真説・鉄仮面』、林不忘の『丹下左膳』、富田常雄の『姿三四郎』、尾崎士郎の『うそ八万騎』などが入っている。これはぜひ、全巻読んでみたい。

この文庫の『侍ニッポン』は1997年9月第一刷になっている。著者の群司次郎正だが、「ぐんじ・じろまさ」と読む。知らなかった。本の裏カバーに紹介が載っている。

〈明治38年（1905）群馬県伊勢崎市生まれ。水戸中学（現・水戸一高）卒業後、東京本郷の映画俳優学校に入るが、のち新劇に転じ、村山知義、舟橋聖一、河原崎長十郎らの心座に加わる。昭和5年（1930）、『日本嬢（ミス・ニッポン）』、『マダム・ニッポン』『ミスター・ニッポン』三部作で注目され、翌年の『侍ニッポン』でマスコミの寵児となる。第二次大戦中は陸軍報道班員としてスマトラ、ジャワなどに派遣され、帰国後、茨城県大洗町に疎開し船宿を営んで文壇から遠のいた。昭和48年没〉

ということは、自分の体験もあるんだろうよ。この小説には。舞台は幕末だが、一種の「転向小説」なんだろう。そうみると、歌の文句も分かってくる。

ところで、『侍ニッポン』の主人公は新納鶴千代という。「にいろ・つるちよ」だ。歌になった時は、「にいろ」では歌いづらいせいか、「しんのう」になっている。

この新納鶴千代、実は、大老井伊直弼の落胤なのだ、という設定になっている。本の表紙に粗筋が書かれている。この新納が悪旗本から一条卿の姫を救ったことが発端となり、転変波乱の修羅の壺に引きこまれる。二人の美女に惑乱され、封建社会の枠にもはまれず、勤皇佐幕の波にも乗れず、幕末動乱の浮世をさすらうニヒルな侍の孤影。

人を斬るのが侍ならば恋の未練がなぜ斬れぬ。阪東妻三郎主演、西条八十作詞、松平信博作曲の映画主題歌が津々浦々に流れ、一世を風靡した名作。

井伊直弼の落胤でありながら、勤皇の志士たちに誘われて水戸に行く。でも、水戸の志士たちのやり方について行けず逃げ出す。まア、裏切り者だ

ね。でも、この直後、水戸の浪士を中心にして井伊直弼が桜田門で討たれる。このまま、水戸にいたら、一緒になって決起に参加し、父親殺しをやるところだった。うーん、奇妙な小説だ。ふーん。こんな小説だったのか、と初めて読んで、驚いた。しかし、それ以上に驚いたのは巻末の「解説」だった。尾崎秀樹が『人と作品・群司次郎正』として書いている。これを読んで分かった。

(2)右も左も同じだ。中上健次が言った。「連合赤軍は天誅組だよ」

群司は昭和5年、『日本嬢（ミス・ニッポン）』『マダム・ニッポン』『ミスター・ニッポン』の三部作で注目された。群司が言うには、『ミス・ニッポン』は、プチ・ブルジョワの苦悩を描き、『マダム・ニッポン』はプロレタリアの偽らざる姿を描いたものだという。やはり、左翼の影があるんだ。そして、次は「ぜひマゲものを！」といわれて、翌年、『侍ニッポン』を書く。初め、頭にあったのは真田昌幸・信幸父子の連なった生き方だった。ところが、一人の左翼くずれの青年を見て、違うストーリーを考えた。尾崎秀樹の文を引こう。

〈そのころ村山知義のところに出入りしていた新納時千代という人物がおり、共産党のシンパとして官憲にマークされ、たまたま群司次郎正に資料蒐集を手伝ってもらっているうちに、むしろこの新納時千代をモデルに、幕末期を背景とした作品を書いてみてはどうかと思うようになった。〉

次は群司の文だ。

〈水戸の志士は薩長志士より単純で、今の左翼小児病みたいなものだったろう。そういう画一主義について行けない裏切者が出て来て、それで、さっきの侍の宿命観をうまくあしらえばウケるぞ、と笑った〉

この「笑った」のは共産党の新納時千代だ。「こんな話はどうだ」と喋ったんだ。「どうだ。俺を主人公に小説を書かないか」と言ったのだろう。「面白い。もらおう」と群司は言ったんだろう。モデル料も払ったのかもしれない。さらに、名前も使わせてもらった。ただし、「新納時千代」を「鶴千代」に変えた。又、舞台を幕末にした。まア、歌舞伎ではよくある手だね。時代を変えて、お話をつくるのだ。群司の文章は更にこう続く。

〈新納時千代の話を待合の一室で聞くうちに、共産党のシンパである彼が、やがて党の指令について行けず、脱落していく姿が目につく。大官の息子である彼が地下運動に耐えられなくなる時がくると設定して、私は小説の骨組を思い浮かべた。共産党の地下運動を水戸志士の井伊大老暗殺計画におきかえ、新納を水戸志士の鉄の団結のなかで鍛え、やがて仲間についていけない裏切者にする。同志を離れて人間らしく生きよう、と新納が考え始めたとき、そこに、侍の宿命観をねりませで骨組を肉づけしていく〉

なるほど。こういう風にして、プロットは生まれた。ここで僕が興味を持ったことがある。「水戸の志士は薩長志士より単純で、今の左翼小児病みたいなものだったろう」という部分だ。

尊皇攘夷運動はまず水戸から起こった。本来ならば明治維新をリードする藩だ。ところが、時期が早すぎたのか。それとも教条主義的な、あるいは「左翼小児病的」な人間が多かったのか。藩としてはまとまらず、内ゲバの繰り返しだ。そして、大きく遅れを取り、明治維新の果実は全て薩長に持っていかれた。水戸志士が中心になり桜田門外で井伊大老を討ちとり、それが明治維新の先駆けになった。あれがなかったら、明治維新は10年は遅れていただろう。又、激越な志士があまたおり、思想家、理論家もおりながら、時代の大勢には乗り遅れた。徳川慶喜を出した藩だからというだけではない。余りに早すぎ、激しすぎ、純粹すぎたのか。政治的妥協がなかったからでもある。血で血を洗う、殺し合いが続いて、時代からはおいてゆかれた。こんな状況は昭和の革命運動にもある。誰かが言ってたな。そうだ。中上健次だ。今から20年前、1984年の6月だ。池袋の文藝座で、徹夜討論会が行なわれた。テレビ朝日が放映し、「朝日ジャーナル」に載り、単行本にもなった。

「激論・全共闘。俺たちの原点」だ。中上の他には、高橋伴明（映画監督）、立松和平（作家）、前之園紀男、そして僕が出た。司会は田原総一郎だ。そう、これが「朝まで生テレビ」の原形になったのだ。その時、中上が、こんなことを言っていた。

〈いまから振り返ってみれば、左翼の運動だといわれてたものが全部右翼に見える。つまり、この全共闘でも、60年安保でもね、70年安保でもね、なんか、みんな右にみえちゃうんだ。俺に

は。

つまり頭ではレーニンだとかトロツキーだとか、いろいろ本を読んで人なみに考えたよ。けどどいまこんなふうな平和な時代を迎えていると、あの時代やってたことは、つまり全部護国運動だとかと変わらないんじゃないのかと思ってしまう。たとえば連合赤軍の事件なんかは天誅組の一種だったんじゃないかと、横にスライドすればそんなふうに見えるんだ)

そうだね。そうすると水戸の天狗党なんかもそうなるよね。早すぎた決起だったし、最期も無残だ。水戸はそんな悲惨な歴史ばかりだ。

ところで、「侍ニッポン」に話を戻す。群司は共産党の人間から話を聞いて、ストーリーを考えた。ところが、映画化の方が先に決定し、どんどん進んじやった。小説も同時に進められて一気に書いたんだという。さらに…。

〈映画主題歌としてつくられた西条八十作詞・松平信博作曲の「侍ニッポン」は、映画のイメージとともに、広く普及した。レコードはビクターから徳山たまきの吹き込みで発売された。満州事変を前にして、去就に悩むインテリ的心情に「昨日勤皇、明日は佐幕。その日その日のできごころ」といったややニヒルな歌の文句が、深い共感をよんだのだ〉

(3)そう、「すね者」「転び左翼」の時代だよ。昔も今も

そうか。当時のインテリは、この歌を「自分の歌」として歌ったんだ。幕末の話ではない。今の話だ。昨日までは共産党が正しいと思ってやってきた。しかし、これからは日本は世界に乗り出し、戦争になる。そんな時に、国内の革命だなんて言っていていいのか。大きく目を開け。世界に乗り出すんだ…！と。

何やら今の日本のようでもあるな。「一国平和主義」でいいのか。「国際協力だ」「アメリカと力を合わせて世界の平和のために…」と。あの時は〈反米〉で、今は〈親米〉だ。しかし、そこだけは違っても、「世界のために日本が乗り出さなくては…」という点では同じだ。

そして今日も、かつての左翼の人々がドッと右旋回している。そして保守論壇の主流をしめている。まさに、「きのう勤皇あしたは佐幕」だよ。で

も、あの時は、こんな自嘲的な歌があったが、今は、自嘲はない。「転向者」たちは胸を張って保守主義者、民族主義者になってるよ。

尾崎は「解説」では又、こう書いている。

〈作者の意図は明らかに、幕末の時代相と昭和初期の政治的傾向が、みごとダブル・イメージで追求されている。それがこの長篇の特色でもあり、当時話題になったゆえんでもある〉

〈鶴千代は民衆による時代の変革を夢みながらも、その新しい思想を誰からも理解されず、武士階級のもつ固苦しい意識に反逆して、勤王派志士たちの動きにもついてゆけず、かといって恋に身をまかすこともできないままにニヒルな生き方をおす姿を描いている〉

そうだ。舟橋聖一の『花の生涯』はNHKの大河ドラマの第一回だったと思うが、原作を読んだが、これも考えさせられる本だった。主人公は井伊直弼だった。今まで僕らが習ってきたのは「襲う側」からの歴史だった。しかし、井伊の側から見れば、又、逆の見方が出来る。そして、襲撃する志士たちの何と残酷極まりなきことか。それが、これでもか、これでもかと書かれていて驚いた。歴史は一方からだけ見てはならないんだと思った。

その点、この『侍ニッポン』は、「志士史観」でもないし、井伊を主人公とした「花の生涯」史観でもない。中間というか、「裏切り史観」か。いや、「自嘲史観」「自虐史観」なのかもしれない。皆も読んでみなせえ。

ところで、この『侍ニッポン』は、初版本が昭和6年3月に尖端社から出版された。続いて世界社からも刊行され、1年経たないで文庫に収録された。

映画化は最初の版と前後して封切られ、伊藤大輔監督、大河内伝次郎主演だった。その後、昭和10年にトーキー映画になり、阪東妻三郎主演で話題を呼んだ。

実は、この本を読んでから、「解説」を読んだ。そして、映画主題歌の作詞が西条八十だと分かった。そして、変だなと思った。だって、この小説の中に、歌詞が入っているのだ。1～4番までの全てが、（別々にだが）、三味線で女たちがお座敷で歌っているのだ。そんで、主人公の新納は、「おうおう、まるで俺の気持ちを歌っているようだな」と悦に入っているのだ。

じゃ、歌詞も全て、群司次郎正が考えたのか。それなのに「西条八十作詞」とはおかしい。その点は「解説」にも書いてない。しかし、私の推測す

るに、こうだろう。小説の大体のプロットは決まった。しかし、小説は出来てない。でも、映画は急ぐからと、制作はスタートした。小説は後から追っかける。むしろ、映画が全部出来て、それを文字化したのがこの小説なのではないか。当然、映画主題歌の方も先に出来た。勿論、西条八十作詞だ。

その映画を見てから、〈原作本〉を書き上げた。すでに出来ている〈歌〉も、だから小説の中には歌詞も（それこそ自嘲的に）入れてみたのだろう。最初から最後まで自嘲的な小説なんだ。

尾崎の「解説」はその点を踏まえたのか、こんな文章で終わっている。

〈群司次郎正は戦後出版した『じゃぱん物語』の自序で「過去においてわたしは半世の世すね人であった」といい、世をすねて関東武士から脱落した祖先以来の血が、力が気骨の中を流れているのかも知れない--と述べたことがあった〉

【お知らせ】

(1)6月4日(金) 7:00から千駄ヶ谷区民会館2F (JR原宿駅から徒歩5分)で、上田哲さんを支援・応援する「連名運動」の決起大会が開かれます。今までロフトで3回。上田さんとのトークをやりましたが、上田さんの政治への熱い思いと怒りを、ぜひ国政に送るべきだという声があがり、この日の決起大会になりました。

(2)6月8日(火) 7:00よりロフトで、松尾貴史、岸田秀、私のトークです。政治から性まで、そして幻想について語ります。お早目においで下さい。5月11日には何と、3人の打ち合わせ会もやりました。ロフトのために事前に打ち合わせをやったのなんて初めてです。楽しかったです。司会の美人女子大生も出席しました。6月8日の本番に向け準備万端です。期待できますよ。

(3)6月9日(水) 7:00から「一水会フォーラム」です。イラクで人質になった安田純平さん（フリージャーナリスト）が講師です。人質体験とイラクの現状について語ります。この日も、お早目においで下さい。場所はいつもと同じで、高田馬場のシチズンプラザです。参加費は千円です。

(4)6月16日(水) 7:00より高田馬場の「ライブ塾」で私のトークです。ゲストは塩見孝也さん（元赤軍派議長）です。「よど号」、連赤事件などの全てを語ります。ライブ塾のtelは、03 (5348) 4767です。

(5)7月6日(火) 7:00からロフトで、植垣康博さん（元連合赤軍兵士）と中村うさぎさん（作家）と僕のトークです。3月の「朝生」のように「連合赤軍」をテーマに、朝まで語り明かします。（朝までではないかな）

(6)「月刊タイムス」(6月号)が発売中です。「誰も書かなかったイラク人質事件」を私が書いてます。人質になった渡辺氏は元一水会の活動家でしたが、その当時の貴重な写真なども載せてます。さらに、人質解放に尽力した木村三浩氏の活躍などについても詳しく書いてます。大きな書店でもありませんが、ない時は本社に。tel 03 (5269) 8461

なお、「月刊タイムス」には、来月から1年間、私が大型連載をやる予定です。今、必死に下調べをしています。

【追加】 そりゃ、ちょっとないだろうと思ったね。家族会の人々の気持ちは分かるけど、「最悪の選択だった」とか、「子供の使いだ」「裏切られた」…は、ないだろうよ。小泉さんも必死でやったんじゃないか。「8人全員帰国」は出来なかったけど、5人の子供は連れて帰ってきた。それに、ジェンキンスさんは「脱走兵」だ。もし、無理に日本に帰国させたら、アメリカに送還になる。そうしたら又、「何というひどい事をするんだ！」の大合唱だろう。だから、「第3国で家族に会ってどうするか話し合う」。それしかないだろう。平沢勝栄が言ってたが、「全部を要求したらどれも取れない。一つずつやってゆかなくては…」が正論だよ。それにしても民主党の岡田代表はダメだね。「外交的な大失敗だ」と切り捨てている。じゃ、お前が行ったら出来るのか。「野党」として、何でも反対しなくては、と思ってるようだ。ヤダね。共産党や社民党だって、「前進だ」と言ってるのに。大体、今まで何もしなかった首相たち、政治家たちが悪いんだ。小泉さんはあえて火の中に飛び込んでいる。それなのに、「無能だ」「他の人にかわれ」はないよね。ともかく、向こうを話し合いのテーブルにつけ、10人の安否、さらに、100人もいるという不明者の安否をはっきりさせる。そして生存者を奪還する。これをもとにさらに前進して、がんばってもらいたいもんだ。ということのを来週、もう少し詳しく書く予定だ。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年5月31日

「生きてるって言うてみる！」と羽仁五郎さんに叱られた

(1)ジェンキンスさんにも言いたいよ

やっぱりだよ。先週、ちょっと「追加」で書いたけど、ありゃないと思った。「家族会」の会見ですよ。5人の子供が帰ってきたのに、「最悪の結果だ！」「子供の使いだ！」「首相をかわれ！」はないだろう。これはひどいと思った。そうしたら、案の定、家族会には、抗議の電話、メールが殺到したそう。

「あれは25年間、何もしてくれなかった政治に対するものだ。又、北朝鮮に向かって言ったものだ」という弁護論もあるが、だったら、キチンとそう言ったらいい。ジェンキンスさんと娘の3人が帰ってこなかったけど、よくやったよ。それなりに。これだけ叩かれるんじゃないだろう。

ジェンキンスさんも馬鹿だね、と言っちゃダメなのかもしれないが、小泉さんが、「万全の支援をする。帰ってきてくれ」と言ったんだ。それに乗りゃよかった。何らかの「確信」があったから言ったんだろう。アメリカとの〈密約〉があったのかもしれない。たとえなくてもあそこまで言ったんだ。あらゆる努力をするだろうよ。それなのに、「いや、アメリカが訴追しないという確証がないなら帰れない」と。ダメだよ、こいつは。

だって、被害者とは問題が根本的に違う。自分の意志で、自分の信念に従って、脱走した。そして、北朝鮮では「反米プロパガンタ映画」に出演した。つまり、祖国を敵にしたんだ。アメリカにとっちゃ「反逆罪」だよ。だったら、「死んでもアメリカになんか帰るか。その同盟国日本にも行かん。バカヤロー」と言えばいい。「罪をチャラにしてくれるなら帰る」なんて情けねえ。「自己責任」はねえのかよ。

俺だったら言うてやるね。「米帝国主義は敵だ。お前らも敵だ。そんな所に行けるか！ 共和国は地上の楽園だ。反米闘争の拠点だ。お前らも移住し

て来い！」と。

あるいは、「脱走」を反省し、自己批判して、日本で4人で暮りたいのなら、こう言うさ。「分かりました。日本に帰りましょう。脱走も自己批判します。アメリカに引き渡して下さい。罪を償います。刑務所にも入ります」と。それで何年かかってもいいから、日本に戻ってくる。それが「自己責任」だろう。

まア、そうなったら、日本でも必死に働きかけるだろうし、アメリカも、「じゃ恩赦を考えようか」ともなる。あるいは、その〈密約〉が出来てるかもしれないね。でも、事前には言えんやね。口がさけても。だって、脱走は重罪なんだし。

まア、その点も含めて、「だったら4人で、北京で話し合ったらどうか」と言った。すぐにも曽我さんは言ったらいい。脱走兵の夫に、「何年でも待つ。罪を償ってきてほしい」と言えばいい。まるで火曜サスペンス劇場みたいだ。「いや、悪いことはしてない。脱走は正義の闘いだった」と言うのなら、日本にくることはあきらめて、4人で北朝鮮で暮せばいい。いや、こんなことを言ったら大変かな。でも、何度も言うように、他の拉致被害者とは違う。

前に、やはり脱走兵に会ったことがある。ベトナム戦争の時に、ベ平連が手引きして、日本からソ連経由でスウェーデンに米兵を逃がした。その人たちは、ほとんどが恩赦を受けて、アメリカに帰った。でも、スウェーデンに残ってる人もいる。向こうの人と結婚したからだ。その人が日本に来て、講演をした。悲惨な人生だと思った。ベ平連のプロパガンダとしては〈成功〉したけど、当の米兵たちはどうだったんだろう。反省し、悔いている人の方が多かった。僕はそう思ったね。このことは来週でも書いてみたい。確か、『がんばれ！新左翼』の(3)に書いてたと思うけど。じゃ、ジェンキンスさんはどうなのか。会えるものなら、この脱走兵にも会って話を聞きたいね。

そうそう。平沢勝栄は「救う会」からも「家族会」からも見放されたね。「家族会」の人は、小泉さんとの話し合いの中でも、「平沢さんは豹変した。人間が変わった」と言われてた。こんな時に言ってもしょうがないだろうに。でも、追放された後の平沢さんは、やけに冷静だね。「キツネ憑きが落ちたみたいだ」と言ってた人もいたが、なにやら、キチンと大局的に冷静、論理的に話している。「一気にすべてを解決させようと思っても無理だ。ひとつずつやらなくては、今回は大きな前進だ」と。急に良識的なことを言い出した。僕もその通りだと思うね。

「家族会」の気持ちも分かるけど、あの怒号、批判、罵倒はないだろう。あれを見ていて、イラク人質の「家族」を思い出した人も多いんだ。次元が違うというかもしれないが、似ていた。

又、これに同調した民主党の岡田新代表も軽薄だね。「外交的に大失敗だ」と、切って捨てていた。だったら、お前が行ってやってみるよ。と皆、思ったはずだ。共産党、社民党ですら、「一步前進だった」と評価してるのに。

多分、自分たちは〈野党〉で、次の参院選が控えている。「小泉はよくやった」といったら、自分たちの「存在意義」がなくなる。そしたら、政権交替もない。だから、何が何でも「反対」しなくてはならない。そう思ったんだろうよ。浅はかだね。又、これに対し、「バカなことを言うな！」と思った民主党員も多いはずだろう。でも、その声は聞かれない。声も上げられんのか。だらしのない奴らだ。

上田哲さんが言ってたが、「民主党なんて思想も何も無い。ただの政権をとりたい亡者達の集まりですよ」と。そうだよな。さすがは、「世界の中心で怒りを叫ぶ」上田さんだ。ズバリと正論を言う。民主党は小沢のようなタカ派もいるし、元の社会党はいるし、民社党もいる。とても、一つの〈思想〉なんか無い。ただ、数を合わせて、政権をとろうとしてる連中だけだ。

それにもう一つ言いたい。一部のマスコミだ。「うーん、今の段階では小泉もよくやった。ジェンキンスさんはアメリカともよく話し合っただけならいい。安否不明の10人、さらに、もう100人もいるといわれる人々のことも、はっきりさせてもらおう。引き続き、小泉さん、がんばってくれよ。我々マスコミも支援する」

…と、多分、言いたいのだろう。本心はそうだ。でも、そんなマイルドな本心を出しては新聞も雑誌も売れない。それで、何と、「小泉売国外交を暴く!」「年金かくしの北朝鮮再訪を許すな!」…と書いている。

まったく、なんちゅうマスコミだ。自分たちは何もしないで、「これでもダメ」「これでもダメ」と言ってるだけだ。そして、「断固とした姿勢でやれ!」「戦争も辞さずの覚悟でやれ!」と景気のいいことだけをいう。しかし、それでは問題は何も解決しないのに…。

ということで、北関連の話は終わり。私も上田哲さんの影響で、中野区上高田の中心で怒りを叫んじゃいました。(ここまでは、急遽、付け加えた分です。これからが、前にも書いていた「本文」です)

(2)新井将敬さん。たしかにメッセージ、受け取りました。

「エッ？ 何で俺の原稿がこんな所にあるの？」と思った。ビックリした。いや、ゾゾゾッと背筋が寒くなった。だって、「遺品」の中にあったんだ。会場の中央に、ガラスケースがあって、そこに「遺品」が展示されている。会場の皆が集まって、覗き込むようにして見ている。その中に、僕の前稿があった。僕のメモがあった。僕の大学ノートがあった。

頭が混乱した。じゃ、俺はもう死んじゃったのか。それで、「遺品」が展示されているのか。それを皆が見ている。死んだことを気付いてないのは俺一人か。だから、「何で俺の前稿が？」と驚いているんだ。ブルース・ウィリス主演の映画にそんなのがあったな。本当は死んでるのに、自分だけが生きてると思っている。あっ、あの世界だなと思った。

でも、あの映画では、生きてる人と〈会話〉は出来ない。生きてる人には、「彼」は見えない。話も出来ない。ただ一人、純真な少年がいて、彼にだけは〈死者〉が見える。そして、ブルースに言う。「おじさんは死んでるんだよ」と。

しかし、この日の会場には「純真な少年」はいない。不安になった。ほっぺを抓ってみた。痛い。じゃ、生きてるんだ。会場に西部邁さんがいた。声をかけたら、「あっ、鈴木さん」と返事してくれた。あっ、大丈夫だ。俺は死んでない。

だったら、この原稿は何だろう。「似てる」だけなのか。いや、それだけじゃ済まない。絶対に〈俺の字〉だ。体は離れても、同じ字を書くのか。もしかしたら、我々は双子だったのか。（ところで、双子というのは、全く同じ字を書くのだろうか。同じ所を書き損じて、同じように直すのだろうか）。ウーン。分からん。人生は、迷宮入りの推理小説だ。では、この話は終わって、次の話だ。

えっ、気になるって？ そうですかね。まア、現象的なことを言っちゃえば、他愛のない話なんですよ。5月19日(水)の昼に、「新井将敬を語る会」があった。6年前に自決した政治家だ。この人は三島由紀夫、野村秋介さんを尊敬していた。「平成の竜馬」だと自ら言っていた。野村さんに紹介されて僕も何回も会った。テレビにも出たし、一緒にシンポジウムもやった。とても爽やかで、いい人だった。でも6年前に品川のホテルで自決した。株の問題で疑惑を持たれ、逮捕される前日に自決したのだ。自分は無実だ。潔白だ。しかしそれを証明するには時間がかかる。縄目の恥辱は受けたくない。そう思ったのだろう。

この日は、新井さんの写真が貼られ、ビデオが流され、著書、自分の読んでいた本、選挙の時に着ていた服…などが展示されていた。そして中央のガラスケースには、新井さんの原稿、メモ、そして大学ノートなどが置かれていた。それを見て、驚愕したのだ。「似てる」という以上だ。「そっくり」だ。「同じ字」だよ、これは。僕の字を知ってる人なら、これを見て、「うん、お前の原稿だよ」と百人中百人は言うだろう。でも、周りを見たら、僕の字を知ってる人がいない。やおら何か書いてみて、「どうです。似てるでしょう。同じ字でしょう？」と、その辺の人に同意を求めるわけにもいかん。発狂したと思われちゃうな。

でも、何で〈同じ字〉なんだろう。夭逝する人は皆、同じ字を書くものか。自決する人は字が似てるのか。いくら考えても分からない。じっと見続けていた。丸みがあった、人間らしい、あたたかい文字だ。やっぱり、同じ字だ。

大学ノートを見て更にビックリした。箇条書きにしたり、カッコしたり、線を引いたり、囲んだり…。そのやり方が同じなのだ。字が同じだけでない。メモの取り方、ノートの取り方も同じなんだ。こんな偶然ってあるものだろうか。それで、ずーっと見入っていた。

奥さんが近寄ってきた。「鈴木さん。どうしたんですか？」と聞く。様子が変わったのだろう。真っ青になって、足が震えていたのかもしれない。幽霊のようになって、ただ、ひたすら見ていたのかもしれない。気が触れたように…。

奥さんに声をかけられたので、「いやー、こんな不思議なことがあるんですね」と言った。「実は、同じ字なんです。いや、本当に似てるんです。僕の字と」と、勇気を振り絞って言った。「最愛の夫」と僕の字が似てるなんて。失礼なことを言ったかな、と悔やんだ。でも、「そうですか。それは不思議な縁ですね。きっと、国を思う主人の気持ちが鈴木さんに伝わって、時空を超えて、影響したのでしょう。これからは新井の気持ちを汲んで、新井になりかわって国政に出て下さい」

…なんて言われるのかな。でも、そんなことを言われたら困るな。と思っていた。でも、そんな心配は無用だった。「全く同じ字なんですよ」と言っているのに、奥さんはたった一言。

「あっ、あの頃の人には皆、同じ字を書いていたのよ」

エッ、そんなことないだろうよ。「あの頃の人」で十把一絡げにされて、

皆、「同じ字」を書いてんだって。そうかなー。学生運動をやった人は右も左も、ビラや立看板を書いて、ゲバ文字も書いてたから、字が似てくるってことかなー。ウーン。分からんち。「学生運動」って書いたけど、新井さんは東大にいた時に学生運動をやっていた。全共闘だ。在日だったが、帰化し、政治家になった。その頃から、「日本人とは何か」を考えるようになった。自分のアイデンティティを考えたのだ。そして、武士道、民族主義について考え、三島さんや野村さんの本を読みあさる。又、野村さんには直接会って、教えてもらった。

会場には、新井さんの原稿や、写真だけでなく、いろんな雑誌に出した文や、アンケートに答えた記事も出ていた。その中で、「私の好きな歌」というのがあった。新井さんらしさが出ていたので、ついメモにとってしまった。手帳に書きながら、その自分の字を見て、「うん、新井さんの字だな」と思っていた。「好きな歌」のベストセブンは以下だった。

- 1.人生の並木道
- 2.東京流れ者
- 3.インターナショナル
- 4.神田川
- 5.傘がない
- 6.夢の途中
- 7.あなたのブルース

いいですね。庶民的で。普通なら、外国の歌とか、あるいはスメタナ、マーラーとかクラシックを入れてみるでしょう。気取って。それがいいですね。新井さんは。それに、第3位にインターナショナルを入れている。これもいい。学生運動出身の政治家とか、大学教授は、皆、こんなことを隠す。絶対に「愛唱歌」に入れたりしない。それなのに新井さんは、堂々と入れている。又、その記事には、ヘルメットをかぶって、手を突き上げて叫ぶ新井さんのイラストも描かれていた。いやー、いいですね。

そうそう。今発売中の「創」（6月号）の僕の連載には、「インターをうたう私」の写真が出ている。何たる偶然か。いや、天上の新井さんが指示したのだろう。「創」のことだが、3月の「朝生」に出た次の日に、三上治さんの出版記念会があった。元全学連、元全共闘の人たちばかりで、最後には、皆で肩を組んで、「インター」を歌った。私も、大声で歌いましたよ。だって、大学の時は毎日のように聞いていたし…。「いい歌だなー」と思ったけど、〈敵の歌〉だから、僕らが歌うわけにはいかない。そう思ってい

た。「国際学連の歌」「ワルシャワ労働歌」などもよかった。奮い立つような歌だ。「いいなー」と思っていた。我々の陣営にはそれに匹敵する歌がない。(軍歌じゃダメだ)。「いい歌がないから左翼に負けるんだな」と思った。

でも今は、右翼も左翼もない。超翼だし、乱翼だし、混翼だ。だから三上さんの集会の時は、思い切って、大声で歌ってやりましたのさ。天上の新井さんに聞こえたんでしょうな。それで、この「新井将敬を語る会」に僕を呼んだんだ。又、インターが入ったこの愛唱歌にしる、原稿、メモにしる、奥さんは最初は展示するつもりはなかったという。ハッと気が付いて、「展示しよう」と思ったという。新井さんが言ってくれたんだよ。「それを展示なさい。そして鈴木さんに見せてあげなさい」と。

あせって、写真に撮った。でも、使い捨てカメラだからよく写らん。ガラスのケースで光が反射しちゃうし。小さいし。接写できるカメラか、デジカメがほしい。(でも、出来た写真を皆に見せたら、「そっくりだ」と言う。一水会の横山氏は、「鈴木さんの字でしょう」といって信じなかった。本当にそっくりだ)。

(3)高橋愛さんのファンが殺到し、大盛況でした

さて、この日は、夜が例のビッグイベントだった。それで高田馬場に行った。7時から「ライブ塾」で高橋愛さん(アイドル歌手)とライブだ。こっちも、驚いた。超満員だった。いつもなら、10人とか多くて20人しか集まらない。狭いスペースだから、20人も集まれば満員だ。ところが、この日は50人も集まった。席がなくて、その辺にペタリと座ってる人や、立ってる人もいた。「ライブ塾始まって以来ですよ」と主催者もビククラこいていた。後ろに4人のバンドを従えて、高橋愛さんが熱唱する。和服姿で華麗、妖艶だ。プロの歌を堪能しました。皆大満足でした。

終わってからも「アンコール！」の嵐で3曲ほど歌ってました。「若い時に自分で作った歌ですが…」と言って自作の歌も披露する。「若い時」っていっても、今だって若いのに。

この日は、ファンのおじさんたちもドツとつめかけて、花束を渡してました。いつものライブ塾とは違った光景でした。塩見孝也さん(元赤軍派議長)も来てました。「日本の歌も歌ってくれ！」と場違いなことも言ってましたが。

3時間びっちり歌をやってくれるのかと思ったら、30分で終わりました。

「もっとやってくれ!」「最後までやってくれ」というのに、「もう持ち歌はないから」と謙虚なグループでした。ドラムやギターをやってるバックのバンドの人は、実は皆、他のお勤めを持って人たち。でも、うまいんですよ。「リハーサルをやってたら、上の人から文句がきた」といって苦笑していた。このライブ塾、普通のマンションの一室なんです。地下一階だけど、これだけの大音響だと、さすがに響くのでしょうか。でも、「本番は30分だけですから」とか言って納得してもらったそう。そんなこともあって、30分でやめたのかもしれない。

「次は、島倉千代子の歌特集でやってほしい!」というリクエストもありました。うん。愛ちゃんの和服姿なら似合うでしょう。「人生いろいろ、男もいろいろ…」なんて歌うと。石川さゆり特集でもいいかな。顔も似てるし。「いや、革命歌特集にしてほしい!」と塩見さん。新井将敬の好きだった「インター」を中心に、「ワルシャワ労働歌」「国際学連の歌」「沖縄を返せ」なんていいね。「いや、いや。軍歌がいい」と言ってた人もいた。この日は右も左もたくさん来ていて、「混翼」状態だったんです。

で、歌が終わったあとは、愛さんと僕とでトーク。それに、塩見さんにも入ってもらった。あと、反戦自衛官の沢口ともみさんも来てたので喋ってもらった。上田哲さんを選挙に出そうと運動している人達も来てたので、やはり喋ってもらった。

塩見さんは、「ハイジャック事件」や「連合赤軍事件」について喋る。3月にやった「朝まで生テレビ」の連赤特集には大いに不満だという。それをまくし立てていた。じゃ、次に時間をとって、もっとじっくりと喋ってもらおうと思って、それで、6月16日(水)のライブ塾は塩見さんとトークで、「連合赤軍問題を語る」だ。ご期待下さい。塩見さんも、「連赤事件の全てを語る!」と意気込んでおります。

あとは、5月下旬の様子をざっと紹介してみる。

5月21日(金) 「月蝕歌劇団」の公演を見た。「はるかなるドン」だった。面白かった。このマンガは大河マンガだ。20年以上も連載されている。それを月蝕風の芝居にしてみたんだ。

5月22日(土) K-1が総合格闘技に進出した「ロマネスク」を見に行く。ボブ・サップが藤田にあっけなく負けた。須藤元気がホイラー・グレーシーに勝った。すごいやね。

5月23日(日) 全有連大会に出た。山梨県の石和(いさわ)温泉だ。「信玄のかくし湯」だ。と思ったら違う。40年前に突然、湧き出した温泉だそう

だ。でも、武田信玄はそれまで（死後も）ずっと隠し続けていたのかもしれない。

5月25日(火) 三島由紀夫についての原稿を30枚、やっどこさ書いた。それで、FAXで送ったら、時間がかかるの何の。普段はパソコンで送るのに、この日は三島の原稿だからと思い、手書きにしたんだ。「FAXを買い替えた方がいいんじゃないの」なんて向こうに言われた。「字だって読めないのに…」と言外に言われてるようで…。新井将敬さんも同じことを言われてたのかな。達筆ゆえの不運だ。

5月27日(土) 学校の授業。授業が終わって、留守録を聞いたら、三島由紀夫から電話が入っていた。だから生徒にも聞かせてやった。

夜、家に帰ったら、又、三島から電話があった。やっぱり原稿を書いたから分かったんだろう。FAXだと霊界からもキャッチされるんだろうか。霊媒師の太田さんを通してだったが、又、久しぶりに三島由紀夫と話をした。

【お知らせ】

(1)月刊「創」（7月号）は6月5日発売です。7年間続いた僕の連載「鈴木邦男主義」が終了しました。「じゃ、連載は全部なくなったの？ 言論の場はなくなったの？」とお嘆きの諸兄。でも安心です。新しく、「言論の覚悟」という連載が始まりました。やはり「創」で。「じゃ、連載のタイトルが変わっただけじゃないの」って。ウーン、そういう言い方も出来ますね。今回は、多彩で、さまざまな「一水会卒業生」について書きました。

(2)6月4日(金)は7時から千駄ヶ谷区民館（原宿から4分）で、上田哲さんを支援・激励する会です。私も行きますよ。皆さんも、いらして下さい。「世界の中心で怒りを叫ぶ」上田さんを永田町に送りましょうや。次は永田町から怒りを叫んでもらいましょうや。

(3)6月8日(火)はロフトで岸田秀、松尾貴史、私のトークです。お早くどうぞ。7時からです。

(4)6月9日(水)は7時から、高田馬場のシチズンプラザで一水会フォーラムです。イラクで人質になった安田純平さん（元信濃毎日新聞記者）が講師です。

(5)6月16日(水)は、高田馬場の「ライブ塾」で塩見孝也さんとトークです。「連合赤軍事件」についてです。

【追記】

又もや衝撃的なニュースだ。5月27日(木)、イラクで二人の日本人ジャーナリストが襲撃され殺された。痛ましい事件だ。橋田信介さん（61才）と甥

の小川功太郎さん（33才）だ。橋田さんはベテラン戦場記者で、先月の「朝まで生テレビ」にも出ていた。「朝生」では、橋田さんと木村三浩氏の二人が最もイラクを知る人間として発言にもリアリティがあった。木村氏が、「もし5人の人質が死んでいたら、英雄になってたであろう」と言うと、橋田氏は、それを受けてこう言っていた。

「判断が甘かったという点では、殺された二人の外交官も5人の人質も同じ。殺された人間だけが英雄になっている」。そして、もし自分が襲撃されたらどうするかという話をしていた。いつも奥さんに言ってるという。

「その時は政府に助けを求めるな。死んだら、“本望でしょう”と言ってくれ」

それに対し奥さんは、「何十年一緒にいると思ってるのよ」と答えたという。凄いね。立派ですよ。

そして今回、その通りになった。奥さんと息子さんは、インタビューを受けて、はっきりと、「本望でしょう」と言っていた。凄いね。これは〈戦死〉だ。普段は「自己責任だ」「無謀だ」と批判する産経新聞も、5月29日の「主張」では、「二人の仕事は、むしろ評価に値する」と言っていた。33才と若い甥の小川さんはかわいそうだと思ったが、この人のお母さんがインタビューに答えて、「覚悟の上ですから」と言っていた。それに、NHKをやめてフリージャーナリストになったという。これも偉い。凄い二人だったな、と思う。五人の人質事件なんて、これで吹っ飛んでしまった感がある。

しかし、イラクは無法状態だ。自衛隊だけは、「自衛」してるから安全だ。いや、「やましい」気持ちになっているだろう。又、橋田さんと小川さんを殺した犯人は「米国の手先！」と言ったという。生き残った運転手が証言している。「それは違うよ！」と橋田さんは反論したかったろう。これだけは不満だし、本望じゃない。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年6月7日

ベトナム戦争の脱走兵は恩赦令で皆、帰国したのに…

(1)ジェンキンスさんが、あの時、来日してたら？

「じゃ、日本へ行きしょう」とジェンキンスさんが言ったらどうなっていたのか。小泉首相は、「私が保証する」と言ったが、果たして、曾我さんと、娘2人と一緒に日本で平和に暮せるのか。これは「謎」だ。

アメリカは一貫して、ジェンキンスさんは「脱走兵」だし、「重罪だ」と言ってきた。又、「恩赦」はありえないと。そりゃそうだろう。脱走兵を簡単に許してたら、軍隊が成り立たない。日本とは違う。日本なら、自衛隊をいつでも辞められるし、逃亡したって銃殺されることもない。この点では「軍隊」ではない。（もし憲法を改正して、正式の軍隊になったら、「脱走」は大罪になるのだろう。その場で撃ち殺してもいい。そういうことになる）

では、小泉首相は、どんな「成算」があって、ジェンキンス氏を日本に帰そうとしたのか。「帰そう」じゃないな。来日だ。拉致被害者については全員を「原状回復」させようと政府はしている。当然だ。しかし、ジェンキンスさんだけは、日本が「祖国」ではない。又、日本から拉致されたのでもないし、アメリカから拉致されたのではない。在韓米軍として韓国に行っていた時に、自分の意志で脱走したのだ。つまり、他の人達とは違い、「罪人」だ。それも、脱走の大罪だ。さらに、北朝鮮に亡命してからは、「反米映画」に出演し、祖国を裏切った。それだけではない。他の米兵に対し、「脱走し、裏切ること」を唆した。アメリカにとっては大逆罪だ。死刑もありうる大罪だ。

「反米映画」に出たのも、自ら進んで出たのだ。イラクで人質になった3人が脅されて出たのとは違う。（あれだって、半分はヤラセだが）。又、34年前、「よど号」をハイジャックして赤軍派の9人は北朝鮮に亡命したが、

こっちの方がジェンキンスさんよりは、はるかに罪は軽いし、かわいいものだ。別に軍を脱走したわけでもないし、祖国に反逆したわけでもない。（それに今は共産主義を捨てて、皆、「愛国者」「民族主義者」になっている）。でも、「よど号」の人達を「恩赦」で無罪帰国させる！」という人はいない（まア、僕ぐらいだな。言ってんのは）。

「とんでもない。奴らは犯罪者だ。時効もない！」と皆、言う。だったら、ジェンキンスさんの方はもっと重い。「よど号」とは天地の差だ。それなのに、「アメリカと交渉し、恩赦をかちとれ！」「それで曾我さんと一緒に日本で暮せるようにしてやれ！」と皆が言う。

無理な話なのに、人々も、マスコミもそう言って政府に圧力をかける。首相も、仕方がないから、「8人を一緒に連れて帰るように努力する」と、訪朝前に言った。訪朝し、（案の定）、ジェンキンスさんは来日しない。娘も「お父さん一人を見捨てられない」と言って、北朝鮮に残る。だから、5人だけが帰ってきた。

そうしたら、「家族会」の人からは激しい批判、怒号、罵倒だ。「8人連れ帰ってきて当然なのに、5人しか帰ってこない」「最悪の結果だ！」「これでは子供の使いだ」…と。

でも、よく考えてほしい。もし、ジェンキンスさんが日本に来たらどうしたのか？

小泉首相は金正日総書記と1時間半しか話さなかったという。でも、ジェンキンスさんの「説得」には1時間もかけている。それほど重要なことなのか。どうやって「説得」したのか分からない。ただ、「私が保証する」と言った。だったら、それに乗ればよかったんだ。しかし、それ以上の具体的、物質的な〈保証〉をジェンキンス氏は求めた。しかし、もしアメリカとの間に、〈密約〉があったとしても、そんなことは言えない。だったら、ジェンキンスさんも、ともかく日本に来て、あとは任せたらよかったのだ。

産経新聞（6月1日）のコラム「産経抄」では、これは大きな謎だと言う。

〈首相は「私が保証する」と力説したそうだが、何を、どう“保証”しようとしたのか〉

そうなんだ。それが分からん。何度も言うように、アメリカは、「脱走は重罪だ」と繰り返し言っている。米兵はイラクで命をかけて闘っているのに、ジェンキンスさんを〈特別〉扱いにしたら軍隊の士気が緩む。「俺も逃げようかな」と思う人間が増えたら大変だ。

小泉首相は、「今回だけは特別だ。何とか恩赦にしてくれ」と頼み込み、両国で何らかの〈妥協〉が生まれたのかもしれない。しかし、それは大きな“借り”になり、外交上、いいことではない。そして「産経抄」は言う。

〈それより何より、米国が態度を変えようとしないうまま、かりに同氏（ジェンキンス氏）が説得を入れて来日を受諾すれば、むしろ小泉首相は困惑する事態を迎えていたのではないか。同氏が拒否したのは日本にとって幸いだった？〉

じゃ、来日出来ないことを知っていて、ただ、「家族会」や日本国民へのポーズのために一時間も説得するふりをしたのか。これじゃ、八百長じゃないか。

でも僕は、そうは思いたくない。もしかしたら、アメリカと何らかの〈密約〉が出来たのではないか。そう思っている。まさか、日本に連れてきたら、すぐに「恩赦」で「釈放」とはならない。一旦はアメリカに引き渡す。

「犯罪者引き渡し協定」があるんだし。そしてアメリカで裁判になり、刑務所に入れる。しかし、何らかの理由をつけて、早々に出す。そして、日本に帰す。そんな「筋書き」が出来たのではないか。しかし、そんなことはお互い、口が裂けても言えない。又、ジェンキンスさんにも、「こういう筋書きになってるから安心して来日して下さい」とも言えない。だから、「保証する」とか、「最大限努力する」ということしか言えない。

(2)明治24年。大津事件の「裏の裏」

ここでちょっと大津事件の話をする。皆も高校の教科書で習ったろう。明治24年（1891年）、来日中のロシア皇太子（のちの皇帝ニコライ2世）を、大津市で警備中の巡查、津田三蔵が襲い、負傷させた事件だ。日本中がパニックになった。大国ロシアを怒らせてしまった。きっとロシアは日本に戦争をしかけてくる…と政府も人々も脅えた。日本は、ひたすら、皇太子に謝った。こんな暴漢を出して申し訳ないと。謝罪のために割腹自決した女性まで出た。

さて、我々が学校で習ったのはこの次だ。政府はロシアを恐れて、犯人津田を死刑にしようとした。しかし、日本の刑法では死刑にはならない。日本の天皇に対しては、たとえ計画だけでも死刑だが、外国の元首、皇太子に対して未遂で死刑はない。「たとえ法律になくても死刑にしる。そしてロシアに誠意を示せ！」と政府のお偉方は言う。「いいえ、出来ません！」と大審

院長児島惟謙はあらゆる妨害に負けず、「司法の独立」を守り切った。そして、「普通謀殺未遂罪」で無期徒刑に処した。日本には偉い裁判官がいたのだ、と僕らは学校で教わってきた。これぞ、日本人の誇りだ、と。

ところがだ。吉村昭の『ニコライ遭難』（新潮文庫）を読んで、少し考えが変わった。児島もかなり意固地な人間だったらしいし、「司法の独立」を守るためだけではなかったらしい。犯人の津田は、死刑をまぬがれたが、それをむしろ恨みに思っていた。自決用の短刀をくれ！ と執拗に頼んでいる。又、幸か不幸か刑務所に入れられてすぐに病死している。もしかしたら、ロシアの報復を怖れて獄中で殺されたのかもしれない。

でも、「法は法だ」「司法の独立を守った児島は立派だ」というかもしれない。しかし、吉村の本を読んでたら、ロシアのニコライ側は別の思惑を持っていたようだ。つまり、日本は「外交上」、津田に死刑を宣告するだろう。その時は、ロシア皇帝が「助命の嘆願」を出すつもりだったと。助命の詔勅かな。それで、津田の死刑を覆す…と。エッ？ そんな〈密約〉があったのか、と驚いた。まさか日本から頼んだのではあるまい。「日本では死刑を宣告するから、そちらから助命嘆願を出してくれ」と。そんなことは出来ない。あくまでも、ロシア側の思惑だ。だったら、ロシア側の思惑通りにした方が、津田にもよかった。日露双方の為にもよかった。そう思った。

でも、そのタイミングが難しい。事前に日本側に言うわけにいかない。ましてや、児島にも言えない。そこで、感情的な対立だけがエスカレートした。

つまり、大政治家がいた明治という古きよき時代でも、二国間の外交は、このように難しかったのだ。日本が完全な独裁国家だったら、それが出来たかもしれない。しかし、立憲君主国だ。民主主義の国だ。完全な秘密は守れない。それで、「建て前」と「建て前」をぶつけ合うしかなかった。

明治時代ですらこうだった。今の時代では、なおのこと、二国間の〈密約〉は出来ない。ましてや、事前に口走ることも出来ない。

もしかしたら、小泉首相は何の「成算」もなく、「保証」もなかったかもしれない。それでもジェンキンスさんは賭けてみたらよかったんだ。だって、そうなったらどうする。アメリカの保証、確約が取れてないとしたら、「大きな決断」をするしかない。首相にそれをさせてもよかった、と思う。その決断とは何か。「アメリカと手を切って安保を廃棄する！」。うん、これが出来ればいい。しかし、出来ない。出来ないが、日本に来たジェンキンスさんをアメリカに手渡さない方法が一つある。もしかしたら、それを考え

ていたのかもしれない。

(3)ベトナム戦争脱走兵のホイットモアさんに会った

その前に、先週予告したことを書く。アメリカの「脱走兵」に会った話だ。『がんばれ！新左翼』（Part3・エスエル出版会）に出ている。第三章の「帰ってきた脱走兵とベ平連同窓会」だ。「ベ平連」とは「ベトナムに平和を！市民連合」の略だ。1960年代後半、ベトナム戦争に反対し、国内でデモや集会を毎日のようにやっていた。誰でも入れる自由なデモだった。しかし、そそんな温和、平和的な方法だけでなく、米兵に脱走を呼びかけ、実際に、北欧に逃がしたのだ。「イントレピット号の4人」（1967年）という映画もつくられた。実際の脱走兵の会見の映画だ。これに刺戟され、さらに脱走兵は増える。

この映画の中では、小田実、日高六郎、開高健、鶴見俊輔の4人が、「逮捕覚悟で同席し、証言していた」。日本から北海道に逃げ、ソ連に行き、そしてスウェーデンに行く。それが脱走ルートだった。その脱走手助けを一般市民がやったのだ。凄い。ベ平連は、このために、「ジャティック」という別個の組織をつくる。「Japan Technical Committee to Aid America Deserters」が正式名だ。日本語に訳すと、「脱走米兵支援日本技術委員会」という。この技術委員会というところがいい。そして、何十人と脱走させ、亡命させた。

脱走した米兵は、「ベトナム侵略戦争反対」を叫び、脱走したのだ。こんなせんそうをやるアメリカに〈正義〉はないと訴えて、亡命した。皆、一生アメリカには帰らないつもりだった。ところが、カーター大統領の時に、〈恩赦令〉が出た。脱走は大罪だ。しかし、全てを許す、と言ったのだ。これは、ベトナム戦争に関してのアメリカの「自己批判」でもある。あれはどうも間違っていた、という認識が出て来たからだ。それに従って、あの戦争に反対して脱走した人間にも言い分はあるし、彼らもやむにやまれぬものがあったのだらう…と、認めたのだ。

だったら、全ての「脱走兵」を許したかということ、そんなことはない。この前に、韓国から脱走してるジェンキンスさん達は許してない。彼には「恩赦」はない。「ベトナム戦争」に限って恩赦が出たのだ。

そして人間とは弱いものだ。いや、「脱走兵」にとっては「勝利」だと思ったのか。だって、「恩赦令」が出たということ自体、ベトナム戦争を政府が反省してるからだ。そして、ほとんどの脱走兵は勝利者のように、胸を

張ってアメリカに帰った。ベトナム戦争の反戦兵士を扱った映画が何本もあったよね。あんな感じで「凱旋帰国」したのだ。

ところが、テリー・ホイットモアさんは帰らなかった。『兄弟よ。俺はもう帰らない』（第三書館）という本も出している。だって、彼はスウェーデンで亡命中に、結婚しちゃったからだ。実は彼はアメリカで結婚していて、子供もいるのに。だから、アメリカの奥さんとは離婚するしかない。帰れないわさ。

そのテリーさんが、日本に来た。元ベ平連の人達が呼んだのだ。6、7年前だ。東京、京都で講演をし、僕は京都まで聞きに行った。ほとんど全部がアメリカに帰っちゃったのに、テリーだけはスウェーデンに残っている。それは、ベ平連の闘いと友情に応えるためだ、という。かつて、脱走米兵を助けた、という「正義の闘い」の生き証人なのだ。

彼はスウェーデンにいて、バスの運転手をしながら生活してるという。アメリカで妻と子がいた。しかし、スウェーデンでは、結婚し、そっちも子供もいる。だからアメリカには帰れないのだろうと思った。「思想上の理由」というよりは「家庭内の理由」だ。恩赦になったんだから、奥さんも子供も連れてアメリカに帰れる。でも、元の奥さんがいる。2人の奥さんと一緒に暮らすわけにはいかない。「だからアメリカに帰った時に、正式に離婚したんです」という。

「エッ？ アメリカには帰らない！」と言ったんじゃないのか。そう思ったら、帰ってずっとアメリカで暮らすということはしない。そういう意味では、「アメリカに帰らない」。スウェーデンに妻子がいるのだし。ただし、3回ほどアメリカには行ったという。短期間、「帰国した」のだ。そして元の妻にも会っている。ただ、あくまでも元妻として（今は友人として）会ったのだ。

フーン。複雑なんだな、と思った。これもベトナム戦争ゆえの悲劇か。

(4)こんな秘策を小泉首相は考えていたのでは…

しかし、ベトナム戦争で、あれだけ世界中に「ベトナム反戦！」を叫んだ「脱走米兵」が全員、恩赦になって、自由にアメリカに帰れたんだ。だったら、さらにその前の（小さな）脱走事件のジェンキンスさんなんか、「恩赦」にしてやり罪をチャラにしてやればいいじゃないか。いや、もしかしたら、チャラになってたんじゃないか。一体、これはどうなってるんだろうと思った。それで、作家の吉岡忍さんに電話して聞いてみた。吉岡さんは元ベ

平連で、脱走米兵の亡命にもかかわっていた。

そしたらやはり、「ベトナム戦争の脱走兵に限ってカーターが恩赦を与えたんです」という。それ以外は、たとえそれ以前でも脱走は許してない。

「アメリカでは脱走は重罪なんです。ましてや、『反米プロパガンタ映画』に出てますから」と吉岡氏は言う。

小泉首相がアメリカに電話して、「罪をチャラにしてくれ」といって、「はい、分かりました」で済む問題ではない。又、そんなことを頼んだら、もっと大きな見返りを押しつけられる、と言う。そういえば、今日の新聞に、小泉首相は、自衛隊は多国籍軍に参加する可能性もあると言っていた。政権がアメリカからイラクに移譲されたら、それをサポートする多国籍軍が残る。そこに編入してはどうかというのだ。まさか、それが「見返り」ではないだろうが…。

「ともかく、他の拉致被害者とジェンキンスさんは問題が全く別なんです、と吉岡さんは言う。

「ウーン、ジェンキンスさんが交渉のガン（障害）ですね、と僕が言ったら、「そう、彼はガンなんです」という。病気のガンのことだった。そういえば、病気だという。それもかなり重いのだと。だったら小泉首相は病院で会ったのだろうか。

もし、本当に重病だったら、日本に連れてきて、その後、アメリカに引き渡しても、刑務所の中で生き永らえるかどうか分からない。たとえば、アメリカがこう保証したとする。「一旦アメリカに引き渡せ。裁判をし、有罪で刑務所に入れる。しかし、2、3年で恩赦で出所させ、日本に帰す」とか。あるいは、裁判はするが、「超法規的措置」で日本に帰してやる…とか。

でも、もしかしたら、ジェンキンスさんの病状はそれにすら耐えられないのかもしれない。だから、小泉首相としては、最後の賭けだ。ともかく日本に連れて帰る。そして、すぐに日本で入院させる。そして、「重病だから動かさない」といって、親子4人で静かに暮らさせる。そうしたら、アメリカだって、文句も言えない。「治ったら、アメリカに引き渡すが、今は動かさない」といったら、アメリカの面子も立てられるし、「家族会」も納得する。

…という（決断）も考えていたと思う。

まあ、あの時に帰っていれば、こういう筋書きになったのでは…と思う。でも、それは一応、ご破算になった。これから北京で会うのか。他の国で会うのか分からないが。北京という話が出た時点ですぐに行けばよかった、と

僕は思う。どうも、やり方が後手後手だ。日本側としては、もう失うものはないんだから、どんどん攻めたらいい。でも、「曾我さんの意向」で、場所としては北京以外の国を探しているという。

さて、どこの国になるのか。見守りたい。

【附録】文中で、吉村昭の『ニコライ遭難』を紹介しましたが、吉村昭を初めて知ったのは田中義三さん（よど号グループ。在・熊本刑務所）のおかげです。タイで裁判を受けてた時、支援で行ったら、「鈴木さんは明治維新をもっと勉強してもっともっと民族主義に目覚めて下さいよ！」と言われた。そのために、まず、これを読んで下さいと二冊の本を渡された。吉村昭の『桜田門外ノ変』と『生麦事件』（どちらも新潮社。文庫にもなっている）だ。凄い本だった。勉強になった。それ以来、『戦艦武蔵』『冬の鷹』『ポーツマスの旗』『長英逃亡』などを読んだ。最近では『敵討（かたきうち）』を読んだ。この本には『最後の仇討』も入っている。面白かったし、考えさせられた。皆さんも読んでみなしえい。

【お知らせ】

(1) 6月9日(火)は午後7時からロフトで松尾貴史、岸田秀、私のトークです。前売りも売れてるようです。お早めにどうぞ。

(2) 6月9日(水) 午後7時から高田馬場のシチズンプラザで一水会フォーラムです。イラクで人質になった安田純平さんが講師です。

(3) 6月16日(水) 午後7時から高田馬場「ライブ塾」で塩見孝也さん（元赤軍派議長）とトークです。「連合赤軍事件について」です。ライブ塾のtelは、03 (5348) 4767です。

(4) 7月6日(火)はロフトです。やはり、連赤事件についてです。元連赤兵士の植垣康博さん、中村うさぎさん（作家）と私のトークです。

【追記】次から次と事件が起こりますね。小学生が自分のHPに「デブ」と書き込まれたことに怒って、同級生を殺しちゃうなんて。大体、小学生がHPを持つ必要がない。学校で直接会って話せばいい。今、若者の喧嘩の原因は7割が「メール」と「書き込み」だそうです。衝動的に、その場で書いたらイカンがな。文句、あるいは抗議するんなら、手紙に書いて、一晩おいてから投函したらいい。そしたら怒りも冷めてるかもしれない。だから皆さんも、BBSにカキコする時は、いいこと、明るいこと、建設的なことを主にやりませう。あるいは直接、私に手紙か電話して下さい。本のサインでも、送ってくればすぐにサインして返します。疑問・質問は電話して下さい。03 (3364) 0109です。留守の時は、そちらの連絡先を言って下されば、か

けます。よろしく。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン / 丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年6月14日

これは幻想ではない！松尾貴史、岸田秀で超満員。翌日は安田純平さん。郡山さんも！

(1)ロフトに170人。超満員で7割が女性！

驚きましたね。これも幻想じゃないのかと思いました。でも幻想ではありません。蜃気楼でもないんです。現実でした。超満員でした。170人も集まったのです。それも、半分以上が若い女性でした。ロフトに出続けて10年。こんな体験は初めてです。そう、6月8日(火)のロフトです。「岸田秀と松尾貴史と鈴木邦男の“幻想まっしぐら”」です。

この日の謳い文句はこうでした。

〈唯幻論者と新右翼とうんちく王がロフトに集結!! 時事問題、宗教からSEX。フェミニズム、恋愛に至るまでを明るくコミカルに、しかしどこかアカデミックにフリートークライブを展開!! 絶対必見!!〉

「どこかアカデミック」という所が気に入りました。実際、そうなったと思います。7時半から始まるので、7時に行きました。ところが、場内はすでに満員。「4時頃から来て、外で待ってた人もいた」といいます。凄いですね。今回は、値段が高い。これで、人が集まるかな、と思ったんです。でも、これだけの人が集まりました。

それにローソンでチケットを前売りしたんです。前売りで2200円。当日だと2500円。結構高い。それに「飲食代は別」だから、ビールとかつまみだけでも計4千円位はかかる。いつものロフトよりはグンと高い。「こんなに高くっちゃ、人も集まらんじゃないの？」と不安でしたが、こんなに集まったんです。それに、ローソンで買うにしても、前売りの機械の操作が難しい。僕なんて、とても出来ない。さらに、そこで予約して、レジに持って行

き、さらに、ファックスして、やっとお金を払う。「初めてなんで30分もかかっちゃいました」と言っていた人もいた。そんな面倒な手間をかけてまで前売りを買う人がいるのか、と思いました。

でも、いたんです。何と、ローソンで前売りが70枚も売れたんです。「じゃ、100人以上はくるよな」と思ってました。さらに、当日は、松尾ファンの女性、岸田先生の教え子、和光大学の学生たち、そして、私の教えているジャナ専、河合塾コスモの生徒たちも大挙して来てくれました。司会の和光の美人女子大生は、「7割は女性でしたよ」と言っていました。エッ、そんなにいたかな。でも、確かに半分以上は女性でした。そして、ロフト始めて以来の超超満員でした。さらに、「面白ければいい」「気持ちよければいい」という快樂的な「悪しきロフト主義」を打破したアカデミックなライブになったと思います。

大体、この日のために、岸田、松尾、私、それに司会の女子大生と4人で2週間前に打ち合わせまでやったんです。それだって、ロフト史上初ですよ。「30分前に来て打ち合わせする」というのはよくありますが、事前にわざわざ時間をとって打ち合わせをするなんて、今まで一度もないんです。それに、岸田、松尾といった超多忙な人を煩わすんです。「えっ、何もロフトのために打ち合わせなんて、必要ないよ。それに、2人とも忙しい人だし」と僕は言ったんですが、「その2人がやりたいというから」ということで小田急線沿線のお寿司屋さんで、わざわざやったんです。

でも、それだけの準備が生きましたね。7時半から11時まで、アツという間でした。楽しかったですね。松尾さんも、岸田さんも、生き生きと話していました。イラク問題、天皇制、SEX、フェミニズム、オウム問題、ハイジャック問題と、テーマは多岐にわたりました。際どい話も出ました。でも、「どこかアカデミック」なんです。僕も大いに勉強になりました。



それに、何よりビックリしたのは司会の美人女子大生ですね。高橋さんといいますが、「初めてなんですが」と言いながら、じつにうまい。度胸がい

い。大学生にしておくには勿体ない。「日本の首相になるべきですよ」という声も出たほどだ。構成もうまかったですな。「まるで猛獣使いだ」と松尾さんは言ってました。まず初めに彼女が考えたというのが、「質問ボックス」に手を入れて順番に質問用紙を取り出し、それに答える。こんなの、初めてだよ。

松尾さんは一回目は「フェミニズム」。二回目は「理想の国家像」。三回目は何だっけ。それに、一つ一つ、まじめに答えていく。岸田さんは、「憲法改正」、そして「イラク問題」「一夫一婦制」だったかな。しかし、イヤだな。変なのが来たら。こりゃ、場内の質問よりも嫌だ。大体、こんなのを誰が考えたんだ。司会者が一人で独断で考えたのか。「いえ、皆さんの意見を広く聞いて質問をつくりました」と言う。ても、広くって、一体誰に聞いたんだ。

と不安に思っていたら、「では鈴木さん」と言われ、手を突っ込んで紙をとる。迷い迷いながら、やっと取り出す。紙を開いた。アッと叫んだ。うるたえた。不安が的中した。仕方がない。こう言った。

「アッ、外れでした！ 何も書いてません」

途端に司会者に叱られた。「ダメです！ 嘘ついちゃ！ ちゃんと読みなさい！」

やだな。若いくせに、母親のような叱り方をする。そういえば、2週間前に、寿司屋で打ち合わせをした時もそうだったよ。料理が次から次と出ると、好きな魚ばかりだから、飲めないのに、つついグイグイとビールを飲んだ。そしたら、前の日、寝てなかったのが、急に酔いが回り、睡魔が襲ってきた。「いかん。大事な打ち合わせだ」「超多忙な二人の前で眠っちゃいかん」と必死で睡魔と闘った。でも、いつしか、負けて、寝入ってしまったらしい。

「すいません」と帰りぎわにお二人に謝ったわさ。そしたら、女子大生が、「この子はお酒に弱いんです。いつもこうなんですよ、おホホホ」と言っている。「この子は」じゃなくて、「この人は」と言ったのかな。それに、「おホホホ」はなかったかな。でも、こんなことを、いかにも母親のように言っていたんだ。20代だというのが、もしかしたら、本当は60代かもしれない。名探偵コナンのように薬で子供にされたのかもしれない。あっコナンは男だけど、コナンに出てくる、友達の女の子がいる。やはり、薬で子供になっちゃう。あの女性のような。そんなことはないか。

そうそう「コナン」といえば、マンガの「名探偵コナン」11巻に、松尾さ

んが実名で出ている。悪役で。番組を降ろされそうになった司会者がプロデューサーを殺す。完全犯罪のつもりだったのに、コナンに謎を解かれ、捕まってしまう。その悪者が松尾貴史だ。「マンガを描いている青山剛昌と対談した時、“僕も出して下さいよ”と頼んだら、本当に出してくれたんですよ」と松尾さん。

(2) 少子化問題について熱く語りましたよ

あっ、いかん。話が、あらぬ方向に飛んでいった。ロフトで、「質問箱」から私が引いた紙は何だったんでしょう。何と、「SEX」だったんです。

「今までしたことがないから分かりません」と言ったのに。「ダメだ！ちゃんと話をしろ！」と又もや司会者に怒鳴られた。客席からは、「歌舞伎町のゲーセンで20才位の女と手をつないでいたぞ！」という声も。ゲッ。見つかったか。そこで、SEXの話を真面目にしたよ。仕方ない。それと、日本の少子化問題をどうするのか、という問題についても。

「あっ、そうだ。実にタイムリーだ」と壇上で叫んじゃった。そして、当日の朝日新聞を皆に見せた。

実は、この日は、午前中、ジャナ専の授業だった。「戦後史」の授業だ。日本兵が大陸で中国人を虐殺した証言映画「日本鬼子（リーベンクイズ）」を毎回、少しずつ見せて、戦争と犯罪と人間性について話している。実に暗い授業だ。今日も、それをやろうと思っていたら、講師室で、正津勉先生（詩人）に声をかけられた。「今朝の新聞に出てましたね。読みましたよ」と。

エッ？ 何か出てたの。「鈴木邦男、とうとう逮捕！」という記事かな。でも、どの事件で逮捕だろう。あれかな。これかな。でも、僕はここにいる。だったら、逮捕されとらんよ。だったら何だろう。そしたら、「生活面に出てましたよ。少子化の問題で」。

それで思い出した。一週間ほど前に、朝日の記者に取材された。「自民党の少子化問題調査会（会長・森喜朗前首相）がまとめた「少子化社会対策大綱」を読んで、考えを聞かせてほしいと言われたんだ。その前にぶ厚い「大綱」が送られてきた。読んだ。胸にグサリと刺さる。胸が痛かった。だって、「ともかく子供を産め」「子供を産んでこそ、この国が成り立つ」「子供がいなかったら、日本は滅びる」…といった感じだ。つまり、子供を産まない奴は、国のためにならん。非国民だ！ そう言われてるようで、胸が痛かったんだ。

僕は40年も愛国運動をやってきた。「君が代」は五千回も歌った。何回も捕まった。命をかけて国のために闘ってきた。そう思っている。それなのに、大綱を読むと、「でも子供産まなかつたろう」「じゃ、非国民だ」。そう言われてるようだ。大体、国家があって個人があるんじゃない。個人の一人一人の生活があって、国家があるんだ。北一輝だって、そう言っとる。だったら、産もうと、産むまいと個人の勝手だ。「少子化の日本」になろうといいじゃないか。「老人大国の日本」になろうといいじゃないか。

今の1億2千万の人口を確保しようと思うから、こんなことになる。半数になっても、3分の1になってもいい。江戸時代や奈良時代なんて、そうだった。そんな人口の少ない時代の日本は「日本じゃない」というのか。「1億2千万の今の日本」だけが日本か。そんなことはないだろう。

…と、そんな話をした。朝日（6月8日付）の「生活面」に僕のコメントが載った。「政治面」には出たことがあるけど、「生活面」に載ったなんて初めてだ。「そうだよな。君は“政治”はしてたけど、“生活”はしてなかったもんな」と他の先生に言われた。朝日の記事は、「識者3人と読む少子化対策大綱」と見出しが書かれている。あとの2人は本当の「識者」だが、私だけは、「非常識者」だ。でも略すと「識者」だ。あと2人だが、岸本葉子さん（エッセイスト）、西沢和彦さん（日本総合研究所主任研究員）。

そして3人の写真も出ている。私は、落合のジョナサンの壁を背にして写っている。そこで、昼ごはんをご馳走になりながら取材を受けたのだ。冷やしうどん定食を食べた。うどんの他に、枝豆ご飯が付いてくる。それがいいのです。

全5段の記事でした。そして、見出しに、3人のコメントの一部が。

生き方に介入。違和感 岸本さん

子供産めば愛国者か 鈴木さん

施策に優先順位必要 西沢さん

何か、私だけが、世をすね、ひがんでいるようで。いいですね。

あっ、いかん。ロフトの3人の話じゃったわいな。だから、この朝日の記事を紹介しながら、少子化、さらにはSEXの問題を真面目に、熱く、語ったのでした（そんな気がする）。

そして、楽しい質問コーナーが終わって、15分休憩。そのあと、後半は、会場からの質問コーナー。質問ばかりだ。一つ一つ、読み上げて、3人が答える。「アナルセックスをどう思いますか？」という問いに、女子大生の

司会者が「アナルって何ですか?」。別にボケてるわけでも、カマトトぶってるわけでもない。本当に知らないのだ。純真に素直に育った女性で、まるで北朝鮮の子供のようだ。SEXは勿論、男性と手を握ったこともない。男の人と手を握ると子供が産まれると思っているらしい。今時、貴重な、純真無垢な女性だ。

そうだ。いっそのこと、握手しただけで子供が出来るようになればいいんだ。医学が進歩したら出来るだろう。そうしたら、いくらでも子供は出来るし、少子化問題なんて解決だ。朝日の取材の時に、そうやってやりゃよかったな。

(3) 「日本の歴史と文化が私を救ってくれた」と安田さん

ロフトの事について、まだまだ書きたいが、又、来週にでも、続きを書こう。では、翌日の話だ。6月9日(水)。高田馬場シチズンプラザで一水会フォーラムだった。イラクで人質になった安田純平さん(ジャーナリスト)が講師だ。だから、その日も大勢の人がつめかけた。100人近い人が来て、補助椅子をいくら出しても足りない。開会前に、関口君が月刊「創」を読んでたんで、声をかけた。やはり人質だった郡山総一郎さんがロフトに出ると、「創」に出ていた。だから、「郡山さんがロフトに出るって出てたよね。いつだっけ?」

そしたら、前にいる人が振り向いて、

「エッ? 僕のことですか」

何と何と、郡山さん、本人じゃないか。「あっ、初めまして。ご苦労様でした」と慌てて挨拶した。でも、どうして郡山さんが、と思ったら、「7月にロフトに出るんで、勉強のために聞きに来ました」と言う。

そうそう、ロフトでは、7月13日(火)の7時半から、「創」トークライブで、第1部が漫画表現規制問題、第2部が田代まさし、第3部(9時開会)が「イラク戦争報道と人質叩き」だ。これに郡山総一郎さんが出る。他に綿井健陽さん(アジアプレス)などが出る。

この日(6月9日)は、安田さんとも会ったし、渡辺氏は元一水会だし、「人質5人」のうち3人に会ったことになる。もう2人にもいつか会えるだろう。

では、安田さんの話だ。7時から8時まで1時間、拘束体験について語る。そして、1時間、質疑応答だ。そのあと9時から11時まで、下の居酒屋で安田さんを囲んで話をする。実にいい話だったし、有意義な時間だった。



それに、マスコミでは語られなかった向こうの実情も語られる。講演のテーマは「三泊四日のイラク拘束全真相」だった。始めに「自分たちは人質ではない。拘束されたのだ」と言う。捕らわれて金品を要求されたり、何かを要求されたわけではない。「スパイ容疑」で拘束されて調べられ、容疑が晴れて釈放されたのだ。だから人質事件ではない、と。なるほどと思った。

では、拘束したのは「テロリスト」か。違う。普通の村で拘束されたし、ちびっ子も歩き回っていたし、いわば地区の自治会運動のような感じだったという。一般の農作業をしている人たちの村で、そこに来た外国人は自治会で捕らえて調べる。そういう感じだという。最後の日は、場所を移し、ちょっと厳しい取り調べだったらしいが、容疑が晴れて釈放された。その厳しい取り調べの前は、一般の村の家で、ちびっ子も遊んで、入って来れる所だったという。アットホームな雰囲気、星が輝き、その中をコーランを唱える声が響きわたる。非常に神秘的な感じだった。

2人を捕らえた村人たちは、皆、日本を尊敬しているし、「サムライの国」と言っている。アメリカと日本は戦争をし、最後まで闘った。ヒロシマ、ナガサキに原爆を落とされるまで闘った。カミカゼは偉い…。と、日本を尊敬し、皆、親日派だ。

「そうした日本の歴史と文化によって私は助けられた」

と安田さんは言う。いい言葉だ。「それに武器を持ってなかったからだ」とも言う。それで助かったのだと。

4日間、拘束中に、「親日的」だということは分かったし、「これで殺されないだろう」と思った。だが、見張りの人との長い沈黙は耐えられない。必死で話しかけ、何とか〈笑い〉をとれる間柄になろうとした。

これは凄い。よく、そこまで考えられたものだ。見張りの人とジェスチャーを交えて話したり、布で覆面の仕方を習ったりしたという。そして、こうやるんですと、安田さんは講演中に、二通り位、やってみせる。他にも、いろいろやり方はあるそうだ。ネクタイの結び方と同じようなものか。

いろいろ、方法があるんだ。

安田さんは話もうまいし、冷静だ。市民運動の人達や左翼っぽいところからは随分と呼ばれてるだろうが、「右翼」からは初めてだ。それなのに、偏見もなく、喜んで来てくれた。ありがたい。4月に「朝まで生テレビ」で木村三浩氏と一緒に出了。その縁で来てくれたのだ。

この時の「朝生」は木村氏の右隣りが、亡くなった橋田信介さん。その隣りが安田さん。木村氏の左隣りは小林よしのりさん。「歴史的な朝生」になった。この時の模様が何度も何度もテレ朝では流されていた。

この「朝生」のあと、（つまり午前4時）、木村氏は安田氏とゴールデン街に行き、朝から昼過ぎまで飲んで、語り合った。そこはイラクのため、反米のために命を懸けて闘って来た2人だ。意気投合した。そして、「ぜひ一水会に来て話して下さいよ」となったのだ。

いい人だ。そして、安田さんには〈言葉〉がある。一般の人に理解してもらった普通の言葉がある。安田さんについては文句を言う人は誰もいない。

「いやー、いい人だね」と皆、言う。人柄だ。それに、大学時代に武道をやっていて、腹が据わっている。さらに、信濃毎日新聞の記者をやっていて、〈言葉〉の大切さを知っている。そういうことが大きいと思う。だから、「日本の歴史と文化が私を救った」なんてことを言えるのだ。

それと、安田さんの写真を新聞で見た時にどっかで会ったような気がした。よく聞いてみたら、去年、僕らがイラクに行った時、（別のグループだったが）、同じホテルに泊まっていたのだ。そうか。じゃ、大会やデモの時に会ってたわけだ。それに、ホテルの朝食の時なども…。

「お互い奇妙なグループだと思ってたんですよ」と言う。

僕らは38人の集団で、団長は木村三浩氏、赤軍派の塩見孝也さんがいる。大川豊さんがいる。パンタ（歌手）、雨宮処凛、反戦ストリッパー…と、奇妙な人ばかりだ。向こうだってジャミーラ高橋さんのグループだが、「人間の盾」の人がいる。踊り子はいる。「世界の若林」はいる。某新左翼セクトの大幹部はいる。奇妙な集団だな、と思っていた。

(4)全てはバグダッドから始まった

「そうか。全ては去年の2月から始まったんだ」と僕は言った。二次会の席で。2月、イラクのパレスチナホテルには、「人間の盾」もいたし、安田さんもいた。右翼も左翼もお笑い芸人も作家も、ストリッパーもいた。「人間の盾」の人は、そのまま残った。暗号名「ハリー・ポッター」はパレスチ

ナに行った。そして、イラクに行ったメンバーを中心に、「白船訪朝団」が組織された。去年、行く予定だったが、直前になって中止になった。その計画は今も生きている。今年こそは行けるだろう。計画も、より大規模になり、形をかえてやることになるだろう。全ての原点は去年のイラクだ。

安田さんとイラクの話は、又、書こう。

一水会フォーラムの翌日、6月10日(木)、夜、又、ロフトに行った。ターザン山本さんと吉田豪さんのプロレスの話を聞きに行った。超満員だった。そしたら、『紙のプロレス』の人が、「実は…」と言う。何ですか、と聞いたら、「中島らもさんに取材したんです」という。通販で武器を集めているので、何のために集めてるんですかと聞いたら、「鈴木邦男が襲ってくるかもしれないから、備えてる」って言うんです。「鈴木さんはそんなことしませんよ」と言ったんですけどね、と笑っている。僕も笑っちゃった。でも、「実は…」というから、オフレコの話だと思った。中島らもさんに取材したけど、書けなかった話を、こっそり耳打ちしてくれたんだと思った。

家に帰ったら、『紙のプロレス』（7月号）が届いていた。あれっ、中島らもさんのインタビュー記事がもう出てる。それでチラッと見たら、アッ出てるよ、ちゃんと。オフレコでも何でも無い。それに、冒頭に出ている。

〈（テーブルの上を見て）うわー、なんでこんなに武器があるんですか？

らも これは一、あの一、自己防衛。最近、バンドでやばい歌を歌ってるので、ね、プロレスの好きな鈴木さんとかいてはるでしょう？

--- す、鈴木さん？

らも ほら、右の。

--- ああ、鈴木邦男さん（笑）。

らも ああいう人に襲ってこられたら困るでしょう。だからいろんな武器を用意しています。

--- いったい何を言い出すんですか（笑）〉

私も驚きましたね。中島らもさんは好きだし、友達だと思ってる。だから襲いませんよ。それに襲う気力も体力も、もうありません。「友達」といったけど、会ったのは多分、一度だけだ。8年ほど前に「朝まで生テレビ」に一緒に出た。でも、思い出してくれて、『紙プロ』の話の出だしに名前を使ってくれたなんて嬉しいですね。光栄ですよ。

「じゃ、『紙のプロレス』で中島らもさんと対談させて下さいよ」

とお願いしちゃった。ロフトでもいいな。そういうわけで、実現するかもしれないよ。和光大の美人女子大生も、らもさんファンだというし。その時は又、司会してもらいましょう。

そうそう、映画「凶気の桜」に出て、右翼青年を演っていた窪塚洋介さん。「彼は愛国者ですよ。よく勉強もしてるし。鈴木さん、対談しませんか」と、ある雑誌の人に言われた。僕は「いいですよ。ぜひお願いします」と言った。でも、自殺してしまった。残念だ。という話を8日のロフトで言ったら、松尾貴史さんに、「死んでませんよ。“痛い”って言ってますよ」と叱られちゃった。じゃ、退院したら、ぜひやりませう。窪塚さんも。それにもらもさんも。

【追記】

6月4日(金)に上田哲さんを国会に送ろうと願う若者たちの決起集会がありました。千駄ヶ谷区民会館で大勢の若者が集まり、大盛況でした。僕も壇上から挨拶をしました。今は「総与党」で、野党はどこにもない。民主党もただ政権をとりたい亡者たちの集まりだ。本当の政策論争がない。又、政策論争の出来る人がいない。今こそ上田哲さんが国会に出て活躍してもらいたい。論争を忘れた野党全部よりも上田哲一人の方が、力になる。日本を変えられる。そう思う。出てもらいたい。そして国会に出て、この日本を変えてもらいたい。

【お知らせ】

(1)6月16日(水)は高田馬場のライブ塾です。午後7時からです。元赤軍派議長で「獄中20年」の塩見孝也さんと私のトークです。「いま語られる連合赤軍の真実」です。気合いの入ったトークになります。塩見さんも張り切っております。赤軍派結成、よど号ハイジャック、連合赤軍…と、事件の全てを語ります。ライブ塾は高田馬場から徒歩5分です。t e l 03 (5348) 4767です。

(2)7月6日(火)の午後7時からロフトです。やはり連合赤軍問題をやります。元連赤兵士で「獄中27年」の植垣康博さんがゲストです。「連赤ウォッチャー」の中村うさぎさん(作家)と私が、連赤事件の謎に迫ります。こちららもぜひ、おいで下さい。

(3)7月8日(木)は7時から一水会フォーラムです。「台湾問題の現状」です。講師は柚原正敬氏(日本李登輝友の会事務局長)です。

(4)7月13日(火)は7時からロフトで郡山総一郎さんらのトークがあります

(文中でも書きましたが)。

(5) 7月14日(水)はライブ塾です。評論家の上野昂志さんとトークをします。テーマは「ジャーナリズムは死滅したのか」です。7月からは基本的に月1回、第2水曜日に私がやる予定です。よろしくお願いします。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年6月21日

「二人して五人育てて一人前」の標語に怒り、「子供さえ産めば愛国者か！」と噛みついた私でした

(1)気宇壮大じゃわいな。世界を日の丸で埋め、米英を消しちゃうよ

「二人して五人育てて一人前」

ギョエ！と思った。今の「少子化対策」の標語ではない。戦時中の標語だ。でも、きっと、これからの日本でも言われるんだろうな、こんなことを。「子供を産まん奴は非国民だ！」と。先週紹介したけど、現実には、「一人暮らしの気まま、気安さに流れてはダメだ」「子供がいなかったら日本はつぶれる」といって、「ともかく子供を産め！」と言っている。

「いくら愛国運動をしようと、国のために闘おうと、子供を産まなかったら意味はない。子供を産まない人間は非国民、売国奴だ！」といった感じだよ。少子化対策の大綱は。

そのうちに、具体的な「方針」というか、「ノルマ」を提示するだろうな。二人が結婚し、二人の子供を産んだら「現状維持」。だから、「結婚し、子供二人以上は産みましょう」なんて標語が出来るかもしれない。

戦争中は「産めよ殖やせよ」だったし、それに、男の子は皆、兵隊になる。最初から、「天子様に捧げていた」んだ。だから、子供が二人か三人ではとても足りない。戦争で国の為に死ぬ分を勘定に入れて、最低五人はほしい。そういう標語だ。そうみえてくると、悲しい標語でもあるよね。「二人して五人育てて一人前」も。

これは、現代書館の『帝国ニッポン標語集』に載ってたんだ。面白くて、徹夜して全部読んじゃったよ。森川方達編・著で、1800円だ。「あっ、これは朝日の記者に教えてやらなくちゃ」と思った。そうだ。取材の前にこの本を知ってれば、もっとよかったのに…と思った。朝日新聞（6月8日付）の「生活面」に少子化問題で僕のコメントが出た。その1週間前に、落合の

ジョナサンで会って話したのだ。この時は、まだ『帝国ニッポン標語集』は読んでなかった。残念無念。でも、遅ればせながら、この部分をコピーして朝日の記者に送ってあげた。

そして、「この道はいつか来た道だな」と、ふっと呟いた。まるで左翼のように呟いた。左翼の人は言うよね。「今の日本はどんどん戦争中、戦前と同じ状況に戻っている」「右傾化だ」と。そんな左翼のように一面的には言いたくないが。でも、部分的には当たってるね。それは、人間の心が進歩していないからだ。いや、退歩している。ツール（道具）だけは進歩してるが、人間の心、いや人間そのものは退歩してるんだ。だから、それへの自戒の念を込めて、国歌は「君が代」をやめて、「この道はいつか来た道」にする。と、その位のことを左翼も言ってみるよ。昔は面白い左翼は一杯いたし、刺激されたが、今は死滅しちゃっていない。だからオラが左翼的なことまで言わなきゃならん。日本の悲劇だ。

さて、『帝国ニッポン標語集』だ。1995年に出ていた。迂闊だった。本好きの私が知らなかったなんて。「項目」毎に整理されてるから、読みやすかです。たとえば、「国防」「文化昂揚」「防犯」「防諜」「必勝決意」…とか。はじめに紹介したのは、「人口増殖」の項にある。昭和19年に作られた。後ろにカッコして、「日本カレンダー株式会社」と書かれている。この会社が募集したのだろう。

つまり、戦時中の勇ましいスローガンは決して政府や役人が作ったのではない。公募したのだ。そうすると「人民」が作ってドッと応募した。「これはどうだ」「こんなのもあるぞ」と過激さを競ったんだよ、人民が。一番、戦闘的なのは一般の人民だわさ。子供もたくさん応募したんだ。無責任に。その標語が採用されると、さらに人民の戦意を鼓舞した。これだって、「戦争協力」だし、（悪い言葉で言えば）「戦争犯罪」だ。でも、書いた奴はそんな「やましさ」を感じとらんじゃろう。無責任な奴だ。「自己責任」はないのか。

これらの標語を作った人は憶えてるはずだ。「あっ、これは俺が作った」「これはお爺ちゃんが作った！ 採用されたって喜んでたよ」と皆、心当たりがあるはずだ。でも、今、名乗り出る人はいない。口をつぐんで黙っている。卑怯者め。今、どう思っているか、名乗り出たらいい。そして今の正直な気持ちを言えばよかった。「すみません。あの時はムードに流されて、こんなスローガンを作っちゃってしまい、それで、戦争を煽り立て、申し訳ありません。私も戦犯です。死刑にして下さい」

と、言う人がいるかもしれない。逆に、「いや、今でも正義だと信じている。この時は、これしかなかった。再び戦争になったら、又、勇敢なスローガンを作ってやる！」

と言う人もいるかもしれない。お父さん、お爺ちゃんが作ったのなら、その時の「感想」「決意」でも紹介してほしい。標語を作った人の「子孫としての義務」はあるだろう。これも自己責任じゃ。

さて、この本に出てる「人口増殖」の項だ。昭和17年だ。こんなのが紹介されている。

よい児殖やして 興亜をリレー
肩身広いぞ 子宝世帯
産めよ珠の子 育てよ健児
産声にアジアが育つ 国伸びる
二人して 五人育てて 一人前

うん。やはり最後のがいいね。「五人」と具体的に数字をあげて、ノルマを強制している。耳にこびりついて、離れん。それと、今、気がついたけれど、こどもを産むというのは「私事」じゃないんだね。「国家的事業」だし、「世界的事業」だ。それによって、国を伸ばし、アジアを興すのだ。お父さんのこの一滴が、アジアを興し、世界を変えるのだ。「大河の一滴」になるんだ。すごいね。 そうだ。「必勝決意」の項には、こんな気宇壮大なものがあつたぞ。

日の丸で 埋めよ倫敦 紐育
米英を消して明るい世界地図

これを見せたら、学校の女生徒が、「何ですかこの“リンリン”と“さなだひも”は？」と言ってた。倫敦はロンドン、紐育はニューヨークと読むんだ。昭和17年のスローガンだ。大東亜戦争に勝って、イギリス・アメリカを占領し、日の丸で埋めるんだよ。東京裁判ではなく、「倫敦裁判」や「紐育裁判」をやり、チャーチル、ルーズベルト、トルーマン、マッカーサーなどをA級戦犯にして、処刑しちゃうんだよ。壮大だよな。

戦争に勝ったら、米英が日の丸で埋まり、そして米・英という国もなくなる。世界地図からも抹殺される。ウーン、凄か。その時は、かつての「米国」は何と呼ばれるのでしょうか。日本の政治家や軍人は、そんなことを考えていたのでしょうか。

いやいや。戦争指導者たちは、そんな「馬鹿げた」ことは考えとりゃせん。何とか勝ちたい。どっかで有利に講和したいと必死で考えていただけ

だ。標語を作ったアホな人民のように、脳天気な事は考えちよらんとでしょう。政治家や軍人の方がずっとリアリストですよ。

でも、凄いですね。面白いですね。ここまで言うかね、と思って。作った奴は名乗り出るよ、叱らないから。と言ってあげたいですね。でも、これを作った人の子供が学生運動をやってたりして。そんで中核派か何かに入り「青ムシ（解放派）を消して正しい学生運動」「焼き殺せ 人民の敵 KK（権力と革マル）連合」なんて標語を作ったりして。うん、ありうるよ。

(2)標語を作る人民、ひやかす人民。うん、これは「人民内部の矛盾」だ。 と私は喝破しましたね

でも、アホくさ、と思っても、語呂がいいし、マンガ的な気宇壮大さがある。だから、一度覚えたら忘れんね。「日の丸で埋めよ倫敦 紐育」「米英を消して明るい世界地図」。今でも使える。だから、一水会の横山氏にも知らせてやった。「レコンキスタ」の標語にだって使えと。いやいや、もしかしたら、アメリカの方が使ってるかもしれない。「イラク、北朝鮮を消して明るい世界地図」とか。あるいは、「イラク、北朝鮮、日本を消して明るい世界地図」だったりして。それに、星条旗はバグダッドを埋めてるし、東京も埋めてる。世界を埋めてる。いかんよな、「いい標語」をアメリカにとられちゃ。

では次だ。

「大政翼賛会神戸市支部」が募集した中にはこんなのがあった。

血みどろの 兵を偲んで 汗みどろ

血の犠牲 汗で応へて 頑張ろう

「血みどろ」を偲んで「汗みどろ」なんて下手な語呂合わせだ。それに、これを作った奴は、別に血みどろでも汗みどろでもない。涼しい顔して、他人を叱咤激励している。ズルイやね。

他にはこんなものもある。

ここも戦場だ

すべてを戦争へ

今日も決戦 明日も決戦

たらぬ足らぬは 工夫が足らぬ

欲しがりません 勝つまでは（大政翼賛会 朝日、毎日、読売）

最後の二つは有名だよな。オラも赤ん坊の頃は、「腹へった」とか、「お

にぎりが食いたい」といって泣いては親に、「欲しがりません 勝つまでは」だよ、と言われて叱られたらしい。

足らぬ足らぬの方は、「パロディ版」の方が有名だ。誰かが、「工夫」の「工」を消したんだろうな。そうすると、「夫が足らぬ」になる。そうなんです。夫は皆、戦争にとられちゃったし。でも、笑ってばかりはいられまじえん。深刻な事実も反映しちよります。若い娘っ子だって、結婚し、子供を産んで、「五人」のノルマを果たそうとしている。でも「夫」がいない。どうしてくれるんだ。そうも読み取れます。

(注：「贅沢は敵だ！」という標語では「敵」の前に「素」を入れた人がいた。「贅沢は素敵だ！」になる。庶民のささやかな抵抗だ。まてよ。「贅沢は敵だ」を作ったのも庶民だし、人民だ。それをからかったのも庶民だ。とすれば「庶民の内ゲバ」だ。「人民内部の矛盾」だ)

だから、「二人して五人育てて一人前」とセットで、「足らぬ足らぬは夫が足らぬ」も標語としたらよかったですよ。「パロディ版」として葬らずに。子供の増殖だけでなく、夫も増殖しなくっちゃ。日本の夫が足りなかったら、ロンドン、ニューヨークから奪ってきて、子供を産みゃいい。あっ、それではダメなのか。だって、昭和17年の標語にこんなのがあった。

正しい血から 強い民族

結婚は 一に健康証明書

若い父母から 伸び行く日本

「正しい血から」なんて、ナチスみたいですね。これだと、国際結婚はダメなんですね。もし、結婚したら、「売国奴」「敵のスパイ！」と言われたんでしょう。でも、一水会の人だって、国際結婚してる人はいるよ。これも非国民かな。ガチガチの右翼の先輩だって、「実は娘がアメリカ人と結婚しちゃって。でも黙ってて下さいよ。右翼業界の仲間に知れると恥かしいから」と言う人が一杯いるよ。いかな右翼だって、子供の結婚までは阻止できんしね。そうすると、右翼も皆、「非国民」「売国奴」だ。ザマーミ口。オラだけじゃない。嬉しいな。

「肩身広いぞ 子宝世帯」で思い出した。朝日新聞に出た私のコメントは、「子供さえ産めば愛国者なのか」だ。これは奇妙に符合する。戦争中だったら、「当然だろう！ 馬鹿野郎！」と怒鳴られただらうね。「子供も産まずに愛国者といえるか！」「肩身狭いぞ独身右翼」なんて嘲笑されただらうな。悔しい。

「栄養研究」の項目には、こんなのがある。

ドッサリ栄養 ガッチリ銃後
 子供が肥えれば 日本が伸びる
 栄養とるのも国のため、戦争のためなんだよな。しかし、今の子供は皆、
 肥ってるけど、日本は伸びとらんぞ。思想性がないからかな。
 アッ、大変だ。忘れてた。「人口増殖」の項では、まだまだあった。
 選べ配偶 国負う相手
 顔より血統 金より健康
 清い血で 護れ我家を 皇国を

「顔より血統」は凄いですね。今の日本を批判してますね。顔がかわいい
 とか、きれいだとか、そんな表面的なことで相手を選んじゃいかんと。偉い
 坊さんまでも、美しい顔の女優と結婚するなんて、許せない。こいつも「非
 国民」ですな。

しかし、戦争中は、健康で血統のいい人をまず第一にして選んだのでしょ
 うか。じゃ、「犬の種付け」と同じですね。お互いが血統書を持ってきて、
 「じゃ、かけ合わせてみますか」「交配ませう」なんて言って交わったん
 でせう。やーですね。「この人の方がかわいい。一緒になりたい」なんてわ
 がままは言えなかったんでしょう。「欲しがりません 勝つまでは」ですか
 ら。勝ったら、「血統のいい、顔の悪い妻」は離婚して、（血統は悪いけ
 ど）可愛い女と結婚したらいいんでしょう。そんなことまで見込んだ上の
 「欲しがりません…」という標語だったのです。（きっと、そうだ）。

子育て奨励の標語はまだまだあります。

大東亜 夫婦が土台 子が柱
 国策へ 添って晴れての 御奉公
 殖える子宝 夫婦の手柄
 産んで増やして育てて皇楯
 我家の翼賛 子沢山
 あがるうぶ声 興亜の凱歌

(3)スズキを着に酒を飲み、カラオケで軍歌をうたいまくりました

出産・子育て奨励はいくらでもありますね。

母のお腹に 忠義が育つ

護れ 国力産む母体

（母体は国力を産むマシンみたいですね。強力な武器なんですね）

一億を二億に ふやす 母まもれ

(おいおい、この狭い日本に二億もいたら、どうするんじゃい。無責任な標語だぜ。自己責任がないよな。多ければいいというもんじゃなかとよ)

強い母体に 神兵生る

初湯から 御盾と願った 国の母

(御盾となって天皇陛下の為に、国の為に立派に死になさいということだ。死ぬ為に生まれるんですな。あるいは、30年前ならば、「楯の会」に入って、三島由紀夫と共に死になさい、ということかもしれん)

木綿着せても 育てば錦

子供の健康 それ国防

どの子もお役に 立つように

(国の為にお役に立たない子はいらainんです。又、子供を産めない大人もいらainんです。非国民なんです。そういうことです) 征けぬ身は せめて育児で 御奉公

何はなくとも 子宝手柄

護れ興亜の桃太郎

殖やしてお手柄 子供と貯蓄

強く育てよ 召される子供

最後のは、ウツとと思いましたね。「召される」というのは「召集」ということで、兵隊になることだろう。でも、一般的には、「神に召され」というふうに、〈死〉をイメージする。一番初めに紹介した「二人して五人育てて一人前」にここで繋がる。たくさん産んで、たくさん戦死して下さいよ。と言われてるようだ。

これは最近のCMだが、銀行だったか何かのCMにあった。サケが出ている。「大きくなって戻ってらっしゃい」とコピーがあった。貯蓄も大きくなって戻ってくるという意味なのか。でも、おいらなんか、「大きくなって戻ってらっしゃい。食べてあげるから」と言われてるように思っちゃう。サケの身になって考えちゃう。

あっそうだ。サケじゃないが、スズキを食べたんだよ。きのう。6月15日(火)だよ。松尾貴史さん、岸田秀さん、和光生と僕と四人で、お寿司を食べたんだ。その時に、スズキ(魚だよ)が出た。「共食いですな」と言われたんだ。うまい寿司屋でしたね。「あれ、その一週間前にもロフトで会ったろう」って。そうなんですよ。ロフトで「幻想まっしぐら」のトークライブをやった。170人も集まり大盛況だった。松尾、岸田両氏のおかげだ。それに司会の和光生のおかげだ。準備を全てやってくれた。ロフトとの交渉、チ

ケットローソンとの交渉、当日の構成…と。司会も実にうまかった。それで、「我々三人が和光生に感謝し、慰労してあげよう」ということになりました。

「だから、お前が松尾さん、岸田さんに電話して、日程を調整しなさい。それに店を予約しなさい！」と和光生に言った。「私の慰労会をするのですが…と、私が連絡するんですか？ 何か変ですね」と和光生。変じゃない。自分のことは自分です。自己責任です。当たり前です。

それで、ロフトの一週間後に「和光生に感謝する夕べ」をしたわけです。その時、スズキを食べながら、皆に、この本を見せてあげました。『帝国ニッポン標語集』ですよ。「これは面白い。私も買おう」と皆、言っていました。「米英を消して明るい世界地図」がいいねと、松尾さん。「でも、今は、米英が日本を消したいでしょうね」。

「日の丸で埋めよ 倫敦 紐育」もいいね、という話になり、そこで突然、「よし！ ジャカラオケに行こう！」という話になりました。標語を読んで、血が騒いだのでありましょう。「僕はカラオケに行ったことがないから失礼します。歌も知らないし」と言って帰ろうと思ったけど、マズイかなと思い、一緒に行きました。偉いお二人の機嫌を損ねてはいけないし、又、和光生に怒鳴られるし。

それで四人で歌ったんです。私も、仕方ないから讚美歌を歌いました。私は「反戦平和」ですから。そしたら、挑戦するように、岸田さんは、「愛国行進曲」を歌うんです。まさに、「米英を消して明るい世界地図」ですね。それに、この店には「紀元二千六百年」という歌まであった。じゃ！ と三人で大声で歌いました。平和主義者の私も歌いました。（和光生は当然知らないから歌わない）。今は皇紀2664年位らしい。よく知らんが。だから今から64年位前か。「昭和15年が皇紀2600年ですよ」と岸田さん。「私は小学生で、この歌をうたわされました」。そうなのか。それでこの元気のいい歌を皆で合唱してお開きになりました。

「“三人のトークライブの第二弾をやってくれ”という声が多いんですよ」と和光生。「じゃ、やりましょう」と皆が言ってたから、やるでしょう。帰りぎわ、「鈴木さんが欲しがってたから」といって、松尾さんが「折りたたみ傘」をくれた。ただの「折りたたみ傘」じゃない。5段階に畳める。だから、本当に小さくなって、まるで携帯電話のようだ。ロフトで会った時に見せてもらい、「ひゃー凄い！」と思った。でも、気が弱いから、「ください」と言えず、あとで、メールした。「どこで売ってるか教えて下さい。買

いに行きますから」と。本当に買いに行くつもりだった。そしたら、何と、松尾さんがわざわざ買ってきてくれたんだ。申し訳ありません。「そんなメール送るからですよ。まるで催促してるようじゃないですか」と和光生に叱られた。そうかな。

それで私もお返しに、「ライター付き携帯」をあげた。超小型の携帯だ。火はつけられるし、とても便利だ。仲間と連絡を取り合いながら放火できる。すぐれモノだ。「打ち合わせの時、何げなくテーブルの上に置いてたらいいですね。そんで、ベルが鳴って、モシモシと応えたら、皆、ビックリするでしょうね。ついでに火も出るし…」と松尾さん。

「でも、もしかして、これは、ただのライターじゃないですか?」。いいえ。違います。ちゃんと携帯です。持ち運び出来ますから。

…という話をして、四人は解散したのであります。

【お知らせ】

(1)6月17日(木)発売の「週刊新潮」(6月24日号)に、「ワイド特集。それから」が出ています。トップは、「国に500万円の損害賠償を求めた元『イラク人質』」です。元一水会の渡辺修孝氏のことです。私のコメントも出ております。

(2)「月刊TIMES」で私の長期連載が始まりました。「三島由紀夫と野村秋介の軌跡=男のロマンを貫いた『二人の革命家』」です。今発売中の7月号は第1回で、「経団連襲撃事件の端緒となった日本赤軍のクアラルンプール事件」です。今月は400字で35枚。9頁です。「月刊TSMES」は大きな書店にあります。ない時は03(5269)8461へ。

(3)6月28日(月)、ロフトに「ザ・ニュース・ペーパー」が登場します。「ザ・ニュース・ペーパー」は時代を笑いで表現する社会派風刺コント集団です。過激です。ぜひ見て下さい。

(4)その「ザ・ニュース・ペーパー」の本公演が7月2日(金)~4日(日)に三宅坂ホール(社会文化会館5F)であります。ここまでやるかと思うほどの社会批判で、過激な風刺コントです。問い合わせは(株)トリック・スター社へ。03(3822)7463

(5)7月6日(火)はロフトで「連合赤軍とは何だったのか」。植垣康博氏(元連合赤軍兵士)と中村うさぎさん(作家)と僕のトークです。連赤について熱く語ります。「全く知らなかった連赤事件」が語られます。

(6)7月8日(木)は7:00から高田馬場シチズンプラザで一水会フォーラムです。柚原正敬氏(日本李登輝友の会事務局長)の「台湾問題の現状」です。

(7) 7月13日(火) ロフトに、イラクで人質になった郡山総一郎さんが出ます。

(8) 7月14日(水) 7時から高田馬場の「ライブ塾」で上野昂志さん(評論家)と私のトークです。テーマは「ジャーナリズムは死滅したのか」です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン/丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年6月28日

ある革命家の一生

(1) 島崎藤村の『夜明け前』の後に、姪のこま子の『夜明け前』が

エッ？ こんな「その後」があったのか。驚いた。こんなこと、学校で習わなかったぞ。島崎藤村は知ってるよね。「しまざき・ふじむら」と読みます。二人が合体した小説家です。中学の時はそう思っていた。あっ、藤子不二雄みたいな人か、と。でも違いましたね。「しまざき・とうそん」と言います。まざらわしい名前をつけるなよ。

藤村は大作「夜明け前」を書く前に、家に手伝いに来ていた姪（兄の娘）に手をつけてます。そして子供まで生まれます。叔父と姪の近親相姦です。叔父と姪だから結婚も出来ません。藤村の兄は激怒し、二人は生木を裂くように引き離されます。藤村はフランスに逃亡します。そして、『新生』という小説を書きます。事件の一部始終を書き、懺悔するのです。芥川龍之介は、藤村を「偽善者！」と呼んで批判します。

藤村としては、これでケリをつけたのです。文学者としての自己批判、「総括」を終えたのです。「自己責任」のつもりです。自分の欠点、逆境、失敗、すらも貪欲に小説に書いて、〈文豪〉の座を確保してゆく。大したものです。

でも、こま子（藤村の姪）はどうなったんでしょう。文学史的にはここで抹殺です。この失敗で藤村は作家として更に大きく成長しますが、こま子は文学史の舞台から淋しく消えます。二人の間の子供も、他人に引き取られ、どうなったのか分かりません。

ところが、ここに、「その後のこま子」を追いかけ、書いた本が出たのです。去年出たのです。そして、売れてます。静かなブームになってます。梅本浩志の『島崎こま子の「夜明け前」』（社会評論社）という本です。2900円と、ちょっと高い本ですが、実に面白い本です。教科書では教えてくれな

い、学校の先生も教えてくれない〈歴史〉です。

藤村と別れた後も、こま子は、しっかりと生きていたのです。それも何と、関西に行って、「革命家」として生きたのです。激しく運動し、特高には何度も捕まり、拷問もされるのです。そして、京大ケルンの同志たちと共に闘い、革命家と結婚し、子供も産んでいるんです。その子供は「紅子」と名付けられました。中国、毛沢東の「紅軍」からとったのです。革命の子です。

梅本は言います。藤村は筆で『夜明け前』を書いたけど、こま子は肉体で『夜明け前』を書き、生きた。二つの『夜明け前』があったのだと。「読売ウイークリー」（03年11月16日号）にこの本の書評が載ってる。まず、これから紹介ませう。

〈ハイライトは「愛断ち」--つまり別れである。二人の仲は二重に裂かれる。島崎家の決定として、さらに当の藤村の手によって、裂かれた。愛を断たれたこま子は以後、驚くべき変身を遂げる。京都大学の、今でいう過激派サークルに関係し、革命家としての道を歩む。国家権力から容赦のない弾圧を受ける。しかし、こま子はひるまない。なぜ、それほど「ラジカル」なのか。作者は、そこに藤村との激しい愛と別れを見る。藤村は『夜明け前』の執筆を決意し、こま子との関係を整理。愛を断たれたこま子だからこそ、後に自身の『夜明け前』を行動で書き下ろしたのだとする作者の筆致は、冴え渡る〉

おっ、そうだったのか。これは是非とも読んでみなきゃ、と思ったのだ。どうです。皆さんも、読みたいと思ったでしょう。そう、インターネットばかりやってちゃダメなんだ。本を読まなくちゃ。ローテクですよ人生は。このHPは、だから、「ハイテクを使って、ローテクの大切さを訴える」ものなんです。

ところで、この「書評」は実際に「読売ウイークリー」を読んで写したのではない。社会評論社の他の本を読んでたら、中に入った「新刊案内」のチラシに出てたのだ。さらに、「読書カードより」として、この本の感想も一つ載っていた。

〈「こま子」は強い意志をもってラジカルに生きた。藤村にはできなかった「夜明け前」のために生涯をささげた女性であり、

単なる「犠牲者」ではなかった。（神奈川県在住・無職・69才）

そうですね。単なる「犠牲者」ではなかったんです。叔父さんに犯されながら、でも、しっかり愛も生まれてます（子供も産まれたけど）。内田春菊は義父に犯されて『ファーザー・ファッカー』を書いたけど、こま子はさしずめ『アंकル・ファッカー』だね。いや、愛があったのか。しかし、藤村による「愛断ち」のために別離。そして藤村に捧げた愛を、今度は、もっと広い世界の、虐げられた弱者たちに捧げるのです。ボランティアの権化のような女性です。（今だったら、イラクに行くでせう）。そして、自らも〈革命家〉になるんです。彼女は本だって出してます。その前に、藤村のおさらいから…。

島崎藤村（1872--1943）。詩人・小説家。本名、春樹。長野県生まれ。明治学院卒。北村透谷らと「文学界」を創刊。「若菜集」で浪漫主義詩人として名声を博したが、のち小説に転じ自然主義の代表的作家となり。小説「破戒」「春」「家」「新生」「夜明け前」など。

今、これを『辞林21』から写している。初めの一行を書いた時に、アレッと思った。1943年に没している。正確には、1943年8月2日だ。ゲッ、私の生まれた日じゃないか！　じゃ、私は藤村の生まれ変わりなのか。

それに、奇妙な事がある。藤村は1891年（明治24年）明治学院を卒業した。19才の時だ。そして翌92年には20才で、明治女学院の先生になっている。しかし、教え子の佐藤輔子（すけこ）との恋愛事件で、同校を辞める（93年）。そして、24才の時、再び明治女学校教師となる。1894年。今から110年前だ。しかし、95年には又、辞して、今度は何と、東北学院の作文教師として仙台に赴任したのだ。24才の時だ（96年）。そこで、「若菜集」を発表する。お気づきだろうが、藤村が教えた東北学院こそ、私の母校だ。なぜ、藤村が、わざわざ、仙台に行ったのか。そして、なぜ、私がわざわざ東北学院に入ったのか。宿縁だ。これは私だ。前世では、東北学院で作文を教えていた。だから、それに呼び寄せられて、私は東北学院に入ったのだ。

(2)こま子は革命家になりました。そして果敢に闘うのです

では、話を藤村に戻す。1906年（明治39年）、藤村は「破戒」を発表する。衝撃の問題作だ。部落差別を糾弾する本だった。大変な勇気が要ったことだ。そして犠牲も大きかった。社会的、精神的にダメージを受けただけで

なく、肉体的にも大きなダメージだった。いや、このために「島崎家は崩壊した」と言ってもいい。「破戒」を書いて、破壊したのだ。貧しさの中で書き続け、三人の子供はバタバタと栄養失調で倒れて死んでしまう。妻も、とり目になり、死ぬ。「破戒」は凄い作品だが、妻子四人を殺してまで書く必要があったのか。と批判もされた。「小説の完成が三人の娘の死に値するか」と志賀直哉が腹を立て批判した事は有名だ。

三人の娘は死んだが、まだ男の子は残っていた。男手一人で必死に育て、藤村は生きようとする。それを見かねて姪のこま子が手伝いにくる。そして、禁断の愛が生まれ、〈事件〉が起きる。そのことは藤村の「新生」にも書かれている。

梅本の『島崎こま子の「夜明け前」』には、「エロス愛・狂・革命」とサブタイトルがついている。「狂」「革命」は分かるが、「エロス愛」とは何だろう。「精神的な愛」と区別して、「肉欲の愛」を言ってるのだろうか。そういえば、この本には、「同志愛と性欲」という小見出しもある。同じ思想ならば、この二つは一体にすべきなのか。あるいは、分けるべきか。そんな高尚な問題もこの本では論じている。

島崎こま子は、「家族会」の決定で、藤村と引き裂かれる。藤村はフランスに行き、こま子は台湾にいる親類へと引き取られる。そして、生まれた子供は、どっか知らない家にあげてしまう。しかし、フランスから帰国した藤村は再び、こま子とよりを戻す。でも、『新生』を書き、「愛断ち」をする。大作『夜明け前』にとりかかる。

こま子は、藤村と完全に別れて京都に行く。東京でキリスト教関係などのボランティアをするうち、紹介されて京都に行くのだ。京都大学の社研（社会科学研究会）の賄婦になるのだ。学生さんたちの食事を作る仕事だ。心の平安も得られるし、知的刺激もあって、学生さんたちの役に立つ。そう思い、喜んでゆく。

ところが、そこは「最も危険な場所」だったのだ。「京大ケルン」といわれ、革命運動の拠点だった。ケルンとは「中核」という意味だ。今でも中核派のことを「ケルン」と呼んだりする。革マルは中核派のことを馬鹿にして、「ケルン、ケルン、パー」と言った。

ともかく、そんな危ない所において、こま子も、すぐに引き込まれる。そこには全国の革命家、左翼が集まってきた。大学だということで「左翼の楽園」とも言われた。しかし、それも長くは続かない。警察の弾圧に会い、学生は次々と逮捕。こま子も一緒に逮捕され、拷問される。「食事係のおばさ

ん」のはずなのに、〈革命家〉にされて、マークされ、弾圧されるのだ。だったら、本当の革命家になってやろうと、10才下の京大の学生闘士と結婚し、名も「長谷川こま子」と変わる。そして、生まれた子供は「紅子（こうこ）」と名付けられた。革命の子だ。（1933年のことだ）。

同志である夫の長谷川は、逮捕され、四年間、刑務所にぶち込まれる。じっと耐えて待つこま子。やっと四年がたち、帰ってきた夫。しかし、夫は、すぐに若い愛人が出来て、そちらに去ってゆく。こま子35才、長谷川博25才の時に結婚したから、この時、こま子は40過ぎだ。同じ思想ならば、若い方がいいと思ったのか、長谷川は去ってゆく。

うーん、難しいな。革命の為の純粋な「同志愛」ならば、男が革命家として働きやすい環境を作ってやるべきだ。40女のところよりも20女の傍にいた方が、より運動ができ、革命が近づくなら、そっちに進ませてやるべきだ。それが同志愛じゃないか。「この男は自分のものだ。若い女にとられてたまるか」というのは、私有財産制に基づく、ブルジョア的な独占的な考え方だ。

でも、こま子は、そんなことは思わない。それに紅子もいる。あっ違った。紅子を出獄後に生まれた。つまり、20才の女にとられた長谷川をこま子は、押しかけてゆき、「内ゲバ」の結果、奪還する。闘争勝利したのだ。そして、再び熟女の肉体の虜にしてしまう。それで生まれたのが「紅子」だ。毛沢東の紅軍からとった紅子だが、そんな理想のために産んだのではない。長谷川をつなぎとめておきたいというブルジョア的欲求から産んだのだ。

この本の中でも、「最も危険な場所」「同志愛と性欲」「裏切り」…という章は、実に面白い。著者の梅本は言う。藤村は筆で『夜明け前』を書いたのなら、こま子は歩んだ人生で『夜明け前』を書いたのだ、と。『夜明け前』は藤村の父（正樹）の物語だ。明治維新に夢をかけた平田学派の神官が父だった。ところが、維新が成っても、父が夢見た「天皇制ユートピア」の時代は来ない。そして、父は気が触れ、座敷牢に入れられ、衰弱して死ぬ。そういう〈維新史〉だ。革命家の物語だ。民族派の運動をやる人は必ず読むべき本だ。長い小説だが、僕は二回も読んだ。以前、新国立劇場で芝居になった時も、見た。一杯の客を前にして、「でも、原作を二回も読んだのは俺だけだろうな」と思った。

つまり、「夜明け前」という革命物語を、藤村は文学で書いただけだが、藤村の父（正樹）は、「夜明け前」そのものを生きた。又、藤村の姪（こま子）も「夜明け前」を生きた。二人とも革命家だった。

正樹とこま子は祖父と孫娘だ。そうすると、〈革命家〉は隔世遺伝したことになる。

(3)藤村は「確信犯」だったのかもしれない。こま子の方が純粹だ

こま子も、少しはその自覚があるようだ。単に、叔父に犯された被害者（アंकル・ファッカー）だとは思ってない。彼女は、ただの、「かわいそうな犠牲者」ではない。後に「手記」で告白しているが…。「新生」はむしろ、彼女が藤村に勧めて書かせたのだという。苦しんでいた藤村を見るに見かねたのだという。

〈苦しみから逃れられるならと、私からすすめました。むしろ、あのように文学作品によって自己を貫いてきた叔父に尊敬をもつようになりました。

叔父は世間で噂するうよなひどいエゴイストではありません。思いやり深いところもたくさんあり、私は必ずしも作品のために犠牲になったとは思っておりません。叔父との共同制作だと思っております〉

そうか。大作『新生』は二人の共同制作なのか。もう一つ、共同制作したものがあろうが。子供だよ。でも、それは、二人の知らない所に預けられて、育てられた。

ところで、こま子の「手記」だが、この部分はいいが、全体として見ると、藤村問題をぶり返し、さらに藤村を追いつめる結果になる。この手記は、長谷川こま子の名前で、『悲劇の自伝』の題で発表された。

藤村に対しては〈愛〉があるから、単なる「暴露もの」ではない。藤村の『新生』は、懺悔、反省でありながら、小説だ。その点、こま子のは、暴露の「手記」だ。藤村にとってはスキャンダルだ。大きな打撃を受けたようだ。

前に、「アंकル・ファッカー」と呼んだが、これは違うようだ。内田春菊が義父に無理矢理に犯されたのとは全く違う。『新潮日本文学アルバム・島崎藤村』では、二人の関係がこう書かれている。

「こま子は、内面的・瞑想的で、鋭い知性の持ち主で叔父藤村の文学を尊敬していた。父の広助が家をかえりみないタイプであったために、ひたすら藤村を頼り、実父に対するような敬愛の念をもっていた。」

広助（こま子の父）は藤村の兄だ。広助は家をかえりみないというから、

他に愛人や妾でもいて、家に帰らなかったのだろう。あるいは、仕事人間で、家族との対話などなかったのか。そんな父への反撥で、こま子は藤村を頼り、愛するようになる。でも、藤村だって家庭をかえりみず、三人の子供を栄養失調で死なせ、妻をも死なせているじゃないか。でも、姪のこま子にだけは家族以上の愛でもって接したのだろう。

まさか、『新生』を書くために姪と関係したわけじゃないだろうな。と、フツと思った。近親相姦→世間の批判→孤立→新生。そんなテーマはめったにない。よし、やってみようかと、どこか〈確信犯〉的な意図があったのかもしれない。そんな馬鹿なと思われるだろうが、分からんぞ。藤村は。彼ならやりかねない。後世の作家だって、「人を殺したら、一般人には分からない境地になる。〈神〉を見るかもしれない」と思い、それだけの理由で人を殺した人もいた。つまり、その体験を小説に書くためだけに殺したのだ。

藤村は、姪とは一時の迷いで関係した。しかし、その一線を越える時、「えーい。どうにでもなれ」という気があった。どんな苦境に陥ろうと、それも又、小説のテーマになるだろう。そんな凶太い気持ちがあったのだ。これは間違いない。

だって、そういう男なんだよ、彼は。彼は親友の田山花袋（『蒲団』の作者）を病床に訪ねた時のことだ。『新潮日本文学アルバム』の年表にはこう出ている。

「昭和5年（1930）5月 田山花袋が没した。藤村は臨終の床で、（世を辞して行く）感想を問うている」

つまり、今、まさに死なんとする花袋に、「ねえ、死ぬ気分て、どんなもんなの。教えてよ」と言ったんだ。何という不謹慎な、無礼な奴なんだろう。でも、藤村にしたら悪気は全くない。自然主義作家として、あらゆることを知っておきたいのだ。死にそうな人がいれば、その様子を正確に観察し、そして、話せるならば、その気持ちも聞いておきたい。そう思ったのだ。好奇心ではない。作家としての当然の探求心だし、作家としての〈取材〉なのだろう。

そう、決して冷たい男ではない。根っから小説家なのだ。完全なる小説家なのだ。こま子の言うように周りの人たちが理解できないだけだ。革命家になったこま子だけは、それが理解できたのかもしれない。

そして、藤村は71才で死ぬ。昭和18年（1943）8月だ。そして、藤村の没した日、私が生まれた。

〈追記〉

藤村の死んだ日に私は生まれた。でも、他の本を調べて見たら、藤村の死んだ日は、正確には8月22日だったようだ。権威ある本にあたって調べてみた。私が生まれたのは8月2日。とすると、私が生まれた時はまだ藤村は生きていたのだ。死の床についていたのかもしれない。でも、20日間だけど、大文豪藤村と同じ時代の空気を吸っていたわけだ。だから、生まれ変わりではないんだね。すみません。お騒がせして。

【お知らせ】

(1) ザ・ニュース・ペーパーの公演は7月2日(金)～4日(日)に三宅坂ホールです。私は4日(日)の5時の回に行こうと思っております。ザ・ニュース・ペーパーの問い合わせは03 (3822) 7463です。

(2) 7月6日(火)ロフト。植垣康博さんと中村うさぎさん、そして私です。

(3) 7月8日(木)は一水会フォーラム。シチズンプラザで柚原正敬氏の「台湾問題の現状」

(4) 7月13日(火)はロフトに郡山総一郎さん（イラクで人質になった人）が出ます。

(5) 7月14日(水)は高田馬場のライブ塾で上野昂志さんと私のトークです。

(6) 「月刊タイムス」に新連載が始まり、さらに今月は別の原稿を何本か頼まれ、大変でした。出たら逐次紹介しましょう。

【さらに追記】

(1) 参院選がスタートしました。上田哲さんが決断してくれました。東京選挙区から出ます。ロフトで僕は上田さんと3回トークし、その時の熱気で、若者たちが、「ぜひ立候補してほしい。もう一度国会で闘ってほしい」と要望したのです。それが上田さんの決断を促したわけです。私も責任があります。その時、ロフトに来た人々も選挙を手伝っています。ぜひ勝利してほしいです。

(2) 元一水会の活動家で、ブラジル在住の笹井宏次朗氏が又、帰国しました。南米から立候補したミチオ高倉さん（自民党・比例区）の応援のためです。

「鈴木さんも推薦の葉書を書いて下さいよ」と笹井氏に頼まれて、何十枚か書きました。あなたの所にも行くでしょうから、よろしく。

(3) 新風からは、魚谷哲央さんはじめ、学生運動時代の同志が立候補してまます。ぜひ通ってほしいですね。

(4) 民主党（比例）からは、喜納昌吉さん（歌手）が出ています。推薦人に頼まれて引き受けました。何人も引き受けちゃいけないのかな。でも、この人もぜひ当選してほしいですね。

(5)自民党（比例）からは、友人の神取忍さん（プロレスラー）も出ています。きっと通るでしょう。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年7月5日

今日は「ハイジャック学」のお勉強です

(1) 「日本のレーニン」塩見孝也氏を迎えて熱狂のライブ塾

6月中旬の三大イベントは、どれも超満員でした。6月8日(火)のロフトは松尾貴史、岸田秀、私で178人。6月9日(水)の一水会は安田純平さん(イラク人質だった人)が講師で100人。6月16日(水)のライブ塾は塩見孝也さん(元赤軍派議長)と私のトークで、90人。全て満員御礼でした。7月7日発売の月刊「創」にはその様子を書いています。又、その時の知られざる事実、裏話なども書いてます。今月から私の連載タイトルが「言論の覚悟」になりました。「私の名前が変わります」という歌がありましたね、昔。そうそう、先月号から変わるとお知らせしましたが、「なんだ、変わってねえじゃんか。嘘つき！」と関口君などから批判されました。すみません。「創」の編集部との間に「時差」があったようで。あるいは、編集部が考える前から、僕が予知しちゃって、「変わったよ」と書きちゃったのかもしれない。超能力(予知能力)があるのも、よしあしですね。

さて、本題です。6月8日(火)のロフト、6月9日(水)の一水会の模様は前にも書いたので、今日は塩見さんを迎えてのライブ塾(6月16日)のことを書きます。「ザ・ニュース・ペーパー」という政治・社会問題を扱う風刺コント集団がありますね。ライブ塾は高田馬場にあり、元々はその「ニュース・ペーパー」の稽古場だったのです。いや、今も使ってるのですが、あいてる日には、じゃ、ここでライブでもやりまよう。ゲストも呼んで真面目な講演、討論会もやりましよう。ということになった。

新宿のロフトも同じようなことをやってるが、ライブ塾はキャパは小さい。40人も入れれば満員だ。その分、じっくりと話が出来る。その特色を生かして、ジャーナリスト、音楽家、お化粧評論家、お笑い芸人、コント作家…などを呼んで、ライブ、討論をやってきた。僕も何回か出た。

そして、6月から、「月一回やって下さいよ」ということになった。ありがたい話だ。それで第1回の記念すべき日は誰にしようかと迷ったが、僕が知っている人で一番大物といえば、この人しかいない。塩見孝也さんだ。元赤軍派の議長だ。「日本のレーニン」と言われた人だ。1970年の「よど号」ハイジャックも、1972年の連合赤軍も、塩見さんの部下たちが引き起こした事件だ。その他、大菩薩峠の福ちゃん荘に結集し、軍事クーデターをやろうとしたり、東京、大阪戦争を引き起こそうとしたり、凄い人なんだ。そのことを、この日は、じっくり聞こうと思った。

70年のハイジャックは、塩見さんが「指示」した。しかし、その直前に逮捕されたので、この時はシャバにはいない。逮捕された時、手帳には「HJ」と書き込まれていた。ところが日本の公安は無能で、これがまさか「ハイジャック」を意味するとは思わなかった。だから、直前に最高責任者の塩見さんを逮捕し、「HJ」と書かれた手帳も押収しながら、ハイジャックを阻止できなかった。公安も、「チクショー！」と自分で自分の頭をポカスカ殴って、反省し、総括したことだろう。その上司が、「馬鹿野郎、こんな証拠がありながら、何てことだ」と、ポカスカ殴って、「援助総括」したんでしょ。

「馬鹿野郎。何でHJのことを教えてくれなかったんだ！」と公安は塩見さんに詰め寄りますが、それは塩見さんのせいではない。公安がアホなんだ。その報復の意味もあって、何と、20年も刑務所に入れられたんですよ、塩見さんは。国家権力はひどいですね。残酷ですね。

だって、人殺しをしても10年位で出てくる。集団で、拉致し、そして殺して、さらに埋め、逃亡した人が昔、捕まったけど、刑は12年だった。中で勉強し、毎日、小説を書き、出てきたら一躍、作家になった。つまり、人殺ししても、その位だ。ヤクザ同士の殺し合いなら、5、6年で出ることもある。

ところが塩見さんは、20年だ。別に、人殺しはしてない。強盗、強姦、淫行もしてない。悪いことは何一つしてない。それなのに「赤軍派議長」というだけで20年も刑務所に入れられた。「これはもう“赤軍罪”ですよ」と塩見さんは言う。当時、赤軍派だ、というだけで多くの人々が捕まり、刑務所にぶち込まれたんだという。70年の3月にハイジャックがあり、その半年後の11月、それに影響を受けたかのように、三島事件がある。この年は、だから、忘れられない年になった。「よど号」も、「よくやった！」という感じだった。三島も、「あの日本刀の決起がいいね」と言っていた。日本刀を

握っていたのは田中義三さんだ。

そのせいか、田中義三さんには三島が憑いた。いや、そうとしか思えない。北朝鮮に行って、一番早く、「民族主義」「愛国心」に目覚めたのは田中さんだ。北朝鮮の愛国的な若者の姿を見て、「インターナショナリズムなんて言ってる時じゃない。祖国愛なくして革命はありえない」と言い出したのだ。そして、「よど号」グループは、皆、「反米愛国」になる。そして、「愛国心、民族主義」では右翼の一水会と同じだ。共闘できる。といって手紙をよこしたのだ。それが、一水会と「よど号」グループの付き合いの始まりだ。

そんな話も、ライブ塾ではした。塩見さんも、70年のハイジャック闘争はよくやった、と大評価だ。しかし、72年の連合赤軍事件については全否定だ。大体、赤軍派と京浜安保共闘が野合して「連合赤軍」を作ったのが間違っていた、と言う。「野合」という表現を使う。この野合があったから、後の「同志殺し」が起こったのだ、という。「俺さえシャバにいれば野合せなかったのに…」と悔しいのだろう。

この日は、ハイジャックと連赤の二つを中心に話した。この日のテーマは「今あかされる連合赤軍事件の真実」だったから、こっちの方のウエイトが重かったが。

(2)ハイジャックのスペルは「Hi」ですか「High」ですか

まず、ハイジャックだ。この日、7時から、はじめに塩見さんが立ったままで、大演説、いや、アジテーションだな。「ほう、昔の学生運動はこんな風に演説をしてたのか」と若い人達は、伝統芸を見るように、真剣に見、聞いていました。

そうそう、その前に、青学の女子大生に、朗読してもらったんですよ。「ハイジャック出発宣言」を。田宮高麿が書いた。ラストは、「我々は“明日のジョー”である」という有名な言葉で結ばれている。これを朗読したのだ。「ウーン、なかなかいいね」と塩見さんも感動していた。好評に答えて、この学生には、後でマルクスの「共産党宣言」を朗読してもらおうかと思ったが、これは時間がなくなってカットした。そうだ。7月6日に、ロフトで今度は植垣康博さんとやるから、その時に朗読してもらおうか。

ライブ塾では、ともかく、「出発宣言」。そして、塩見さんのアジ。それが終わってから、杉浦さん（ニュース・ペーパーの代表）と僕が加わり、トーク。そして会場の人達も参加して、大討論集会になった。

この日は、「塩見さんが来るぞ!」というので、口コミで、ドッと人が集まってきた。普段は40人も入れればビッチリなのに、この日は倍以上の90人が詰めかけ、まさに立錐の余地もない。そこで演説するんだから塩見さんも気分がよかったですでしょう。上着を脱ぎ、左手は腰に当て、右手を大きくふりながら、アジ演説をする。赤軍派の結成から、ハイジャック…と、いかに自分達は不当な権力と闘ってきたのか。人民の解放を目指してきたのかを語る。皆、シーンとして聞いておりました。昔ならば、「異議ナ―シ!」とか、「ナンセンス!」という掛け声がかかるのですが、今の若者たちはそんな掛け声のかけ方を知りません。(こういう事はキチンと学校で教えるべきでしょうな)。静かに、真剣に聞いておりました。

さて、演説が終わって、トークの部に入りました。杉浦さん、僕が加わり、〈連合赤軍事件〉の謎を解明するわけです。その前に、ハイジャックの話をしたんですね。6月8日のロフトでトークした時、「ハイジャック」の語源の話になった。ウンチク大王の松尾貴史さんに聞いていた。松尾さんの本にも出ていて、この日はさらに詳しく聞いたんだけど。

「ハイジャックの語源って知ってます?」と塩見さんに聞いた。考えりゃ、不遜で、失礼な話だよな。右翼に向かって「聖徳太子は知ってるか?」と聞くようなもんだ。日本で初めてハイジャックを計画し、部下に実行させたんだ。その責任で20年間も刑務所に入ったんだ。「HJ」と略したんだって、日本初だ。いわば、「ハイジャックそのもの」「ハイジャック命」の塩見さんにこんなことを聞いたんだ。

ところが。ところがですよ。知らないんですな。「紺屋の白袴」ですな。(注:この諺はですな。染め物を業とする紺屋は、多くが白いままの袴をつけているところから、その道の専門家でありながら、他人のためばかり忙しくて、自分のためにその技術を使う暇がないことのたとえ)

塩見さんはこう言ったんですよ。「ハイ (High) は高いだよな。ジャック (Jack) は奪うという動詞だ。だから、飛行機を奪うことだよ」。なるほど。理屈は通っている。一般の人はそう思っている。「一般の人」なんて、客観的に言っちゃいけない。私だってそう思っていた。

空を飛ぶ飛行機を奪うから「ハイジャック」だ。船なら「シー・ジャック」バスなら、「バスジャック」と言う。

でも「Jack」に奪うって意味があるんだらうか。英和辞書を引いてみた。そしたら、「もち上げる」しかない。(ジャッキ)で持ち上げる意味になる。そうか。「ジャッキ」という名詞はここからきたのか。と感心しちゃう

られん。「持ち上げる」「押し上げる」はあるけど、「奪う」なんてないぞ。jackalは動物のジャッカルだ。「ジャッカルの日」という映画があった。フランスのドゴール大統領を狙うテロリストの話だ。最近ではリメイク版も出た。

ともかく、「Jack」には奪うという意味はない。それで「ハイジャック」を辞書で引いてみた。

「Hi Jack」と出ていた。あれ？ highじゃないよ。変だな。そう思ってた時、松尾貴史さんに教わった。「ハイジャック」の語源を。これは松尾さんの本、『犬も猫舌』（ワニブックス）に出てたことなんだ。

元々は、イギリスの列車強盗だという。運転手に銃を突き付け、「はい！ ジャック！」と言った。それが始まりなんだと。嘘のような話だが、本当らしい。その証拠に、「ハイジャック」は、どの辞書を見ても、「hijack」と出ている。高い (high) ではなく、挨拶の「Hi！」なのだ。「ジャック」はイギリスで一番、ありふれた名前だ。日本なら太郎君か純一郎君だ。そういえば、「ジャックと豆の木」という話もあったし、僕らの中学の英語教科書は「Jack & Betty」だった。（でも、あれはアメリカ人かな）。

つまり、イギリスでは列車強盗がはやり、「ハーイ！ジャック！」と一声かけて銃を突き付けることが多かったんだとさ。それが、語源だ。だから、乗り物の強盗は全て、「ハイジャック」だわさ。「バスジャック」とか、「シージャック」という使い方は間違っているんだ。全く、最近の日本語は乱れちよる。

どうです。勉強になったでしょう。日本初のハイジャックを指令した塩見さんだって知らなかった。指令されて実行した9人の赤軍派の学生も知らなかったろう。じゃ、教えてあげなくちゃ。

では、次です。上級編です。1970年にハイジャックがあって、慌てて政府は「ハイジャック防止法」を作ります。では、この法律によって最初に逮捕された人は誰でしょう。「当然、赤軍派だろう」と答えたあなた。違いますかな。これ以降、赤軍派はハイジャックをする余力はない。人数が少なくなって、京浜安保と共闘し、山に登り、連合赤軍になっちゃうんです。

でも、函館とか、いろんなハイジャックがあったじゃないか…。と、お思いの方。確かにありました。中には、「塩見議長を釈放しろ！」というものもありましたね。又、「人質」になった乗客の中に歌手の加藤登紀子がいた。というケースもありましたね。そんで、トイレに入り、（当時は珍しかっ

た)携帯電話で警察に通報し、犯人の人数や武器、内部の様子を教えて「犯人逮捕」につながったんでしたね。えらい女性ですね。でも、感心ばかりしておられません。加藤の夫は藤本敏夫です。元全学連委員長です。塩見さん達とも同じ学生運動をしてたんです。それなのに「夫の同志」を裏切って敵権力に通報するなんて…、と文句言った友人もいました。ウーン、複雑ですね。しかし、この時の犯人は政治党派だけ? ただの強盗じゃないの。でも、ハイジャックというのが(誰がやろうと)赤軍的だ。だから、それを権力に売り渡すなんて、いけんじゃろうが。と思った人も多かったんじゃ。では話を戻し、念のために、「ハイジャック」について他の辞書を紹介する。まず、三省堂の『辞林21』だ。

ハイジャック (hijack) (脅迫や暴力行為によって) 航空機を占拠し、その航行を支配すること。スカイジャック。航空機乗っ取り。

続いては、『和英併用 机上辞典』(誠文堂新光社)だ。「ハイジャック 飛行中の航空機を乗っ取ること。hi-jacking」

(3)ハイジャック防止法の逮捕者1号は誰でせう

どの辞書を引いてもそうです。highではなくhiです。そうそう。田中義三さんの「ハイジャック裁判」の時、面白い問答がありました。検事側は、脅迫、監禁罪、傷害罪、とか、いろんな罪名を並べる。その中に強盗罪があった。つまり、飛行機を盗んだ罪だった。これには弁護団が猛烈に反対した。

「飛行機を盗んでいって、北朝鮮にとめておいたのなら強盗だが、〈よど号〉は、ちゃんと日本に返したじゃないか。だから強盗ではない。それに、あんなものを盗むつもりなど初めからなかった」

まあ、そうだよね。飛行機が欲しくてやったわけじゃない。又、アメリカのマジシャンのように飛行機を消したわけでもない。ちゃんと返している。じゃ、それはどんな罪になるのか。まだハイジャック防止法はないから、それでは裁けない。「だから、飛行機の一時使用罪」だ。あるいは「無断使用罪だ」と主張しとりました。これは面白かったですね。緊張した法廷で、「まア、そんなことはどうでもいいんじゃないか」という話をして、傍聴人は皆、聞いとりやした。しかし、「盗んで自分のものにするつもりはない。一時、借りて、使っただけだ」というのは面白いね。強盗罪も、「一時、使っただけだ」。こりゃ、通用しないかな。

あれっ? 何か忘れてると思ったら、ハイジャック防止法が出来て、第1号の栄えある逮捕者は誰でしょう。というクエスチョンでしたね。実は、新

左翼ではないんです。旧左翼でもないんです。日共なんかやるわきゃないか。

そうではなく、何と、右翼だったのです。(ジャーン!)。「塩見議長を釈放し、北朝鮮に行かせる!」といった左翼(orそのシンパ)のハイジャックはありましたが、このハイジャック防止法が出来て、かなりたってからです。第1号は右翼です。

「でも、右翼なんかハイジャックしとらんじゃろう」とお思いのあなた。あるんですよ。

日教組大会に右翼が大挙して抗議に行きますね。あの時、ビラを撒いたんです。空から。「エッ? 街宣車って空を飛べるの?」って。そんなわきゃない。黒い街宣車は皆、地上を行くんですよ。そして、途中で警察に阻止される。でも、頭のいい右翼がいた。キチンとスーツを着て、ヘリコプターをチャーターした。「地図をつくる会社だから航空写真を撮りたい」といって、日教組大会の会場の上を飛ばさせた。そして、会場の上に来た時、やにわにビラを出して、空から撒いた。

別にビラ配りだけだから…と思ったら大変だ。「やめて下さい」というヘリコプターの操縦士の忠告を無視し、力づくでビラを撒いた。それで、「ハイジャック防止法」違反で逮捕されたんですよ。

これは、さすがのウンチク大王・松尾さんでも知らなかった。だから教えてやった(教えなかったかな。じゃ、今、教えている)。

この松尾さんの本には、他にも、ためになる「語源の話」がいっぱいある。次週にでも紹介しよう。

【追記】

(1)6月19日(土) 午後4時から文春ビルで、「橋田信介さん、小川功太郎さんお別れ会」がありました。大変な人でした。入りきれなくて、外にも人が出てました。マスコミ関係の人が多かったんですが、橋田さんの奥様は気丈に、「夫は本望でしょう」と言っていました。参列者も「偉いよな」「たいしたもんだ」と讚える声が多く、「お別れ」という、湿っぽい感じはありませんでした。

(2)6月28日(月) ロフトに「ザ・ニュース・ペーパー」が初登場でした。凄い人気でした。政治コントが過激ですよ。お客さんは大喜びでした。小泉総理が演説してるところに、ニュースペーパーの役者(小泉そっくりの)が出かけて、バツタリ。小泉総理も驚きながら、指さして大喜びしてました。そのビデオが上映されました。その様子が「東スポ」はじめ各紙に載りまし

た。その直後ただただに、大人気で盛り上がってました。

前半の政治コトが終わり、9時半からはトーク。僕も入って、イラク問題、天皇制、憲法改正、などについて語り合いました。「おいおい、ここまで言っているのかよ。危ないよ」とロフト常連さんから注意を受けました。

(3)翌6月29日(火) この日もロフトに行きました。アイドルのライブです。何でも、「陸・海・空」という3人の美女が、自衛隊応援のライブをやるそう。沢口ともみさん(反戦自衛官)が司会をやる。だから見に来てといわれて行ったら、後半、舞台上げられた。ヘルメットに覆面をして、ハンドマイクで叫んでる新左翼が一人乱入してきた。口論になった。でも、ライブなんだから、何をやってもいいと思って、投げたおし、さらに、殴る、蹴るの暴行を加えてやった。立ち上がるや又も、突っかかってくる。「全ては言論でやる、と言ってるくせに、偽善者め!嘘つき!」と毒づいたので、又もや柔道技で投げ飛ばし、さんざん蹴飛ばしてやった。昔の「右翼暴力学生」に戻った気分で、暴れまくってやった。

会場は沸きましたね。芝居の演出だと思ってるから。でも、打ち合わせも何もし。ホンキでやったんだ。それなのに、「いやー、盛り上がりました。ありがとうございます」とロフトの人に礼を言われた。「こんなことなら毎日でもやりますよ」と言ってやった。見なかった人は損しましたね。

【お知らせ】

(1)いよいよです。7月6日(火)ロフトで植垣康博さんと中村うさぎさんと私のトークです。今まで全く知らなかった「連合赤軍」の真実が聞けます。中村うさぎさんは、昔から連赤には関心を持って、植垣さんとは雑誌でも対談しております。

(2)7月8日(木)は7時から一水会フォーラムです。シチズンプラザで、柚原正敬氏の「台湾問題の現状」です。

(3)7月13日(火)はロフトで「創」トークです。イラクで人質になった郡山総一郎さんも出ます。

(4)7月14日(水)は高田馬場のライブ塾で上野昂志さん(評論家)と私のトークです。「ジャーナリズムは死滅したのか」という衝撃的なテーマで熱く語ります。8月は11日(水)です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン / 丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年7月12日

ロフトの奇跡、再び。「幻想」の次は「連赤」だ！

(1) 50年後、連合赤軍は新選組になるぜよ

7月6日（火）、ロフトでやりました。「連合赤軍事件とは何だったのか」です。獄中27年の植垣康博さん（元連赤兵士）、そして人気作家中村うさぎさん。さらに私です。超満員でした。「この三人がどうして一緒に出るの？接点があるの？」と疑問に思った人が多かったようです。「だからこそ是非見なくちゃと思った」と言っていました。早く来た人に聞いたのです。



そういえば6月8日（火）に「幻想まっしぐら」をやった時も、「松尾貴史、岸田秀、鈴木邦男。全く接点がないじゃないか」と言われましたっけ。接点がなければ探せばいいんです。大体、同じ考えの人、同じ会社の人、同じ集団の人が集まって喋っても、面白くないでしょう。一見何の接点もない人々がテーマを決めて話すんです。そこに知的闘争があるし、刺激もあるんです。

実は植垣さんとはロフトでは何度かやっている。左右と立場は違っても、思想的・変革活動をやってきた人間同士だ。「創」でも対談してるし、植垣さんの本に「解説」も書いている。

じゃ、うさぎさんとは？去年だと思う。ある雑誌で「うさぎさんが佐川一政さんと会いたいというから紹介してくれ」と頼まれた。いいですよ、と引き受けて、六本木で、引き合わせ、対談をしてもらった。私は立ち合い人で、聞いていた。面白い対談だった。（その後、いろいろ問題があったが、それは省く。あとで教える）。「次は連合赤軍の植垣さんに会いたい」というので紹介した。静岡のバロン（植垣さんの店）にうさぎさんが行って対談した。すっかり意気投合したようで、その後も何度か静岡に行ったという。

だから、この日は連合赤軍事件の当事者（植垣さん）を囲んで、連赤ウォッチャーのうさぎ、鈴木が迫る、という構図だった。又、時期的にもよかったと思う。今年の3月28日（金）にテレビ朝日の「朝まで生テレビ」で「連合赤軍事件」をテーマにやった。植垣さんが中心で、宮崎学や僕らも出た。これが大好評で、「又、植垣さんの話を聞きたい！」という声があがった。さらに、6月16日（水）、高田馬場のライブ塾で塩見孝也さん（元赤軍派議長）と僕がトークした。「今明かされる連合赤軍事件の真実」というテーマだった。

つまり、「時代は連赤」なのだ。皆、もっともっと連赤の話を聞きたいと求めている。さらにはだね、誰が言い出したのか、「連合赤軍は50年後には新選組になる。NHK大河ドラマになる！」と言われ始めた。かつては、勤皇の志士だけがヒーローだった。

佐幕側、特に新選組は悪役。単なる「人殺し集団」だった。そして、敵を斬るよりも仲間を謀殺したり切腹させたりしたほうが多い。「内ゲバ殺人集団」だった。

ところが、司馬遼太郎の『燃えよ剣』のあたりから風向きが変わった。「新選組ブーム」になった。何せ、NHK大河ドラマにもなった。

同じことは連赤にもいえる。今は「仲間殺し事件」だが、50年後だったら新選組になる。そのときは、植垣さんは何になるのか。爆弾や、殺しや、銀行強盗の技術があり、腕がいい。そして男前だし、女にもてる。さしずめ沖田総司だね。じゃ、塩見孝也さんは何か。「ダラ幹め！」と殺された芹沢鴨だろう。そんな話を6月のライブ塾でも、さらっと言った。塩見さんに向かって言ったんだから、「陰口」じゃない。

でも、7月6日のロフトの日。家を出ようとしたら、塩見さんから電話があった。「いろんな人から連赤の話を聞くのはいい。しかし、あの事件を真面目に反省し、総括する。その気持ちが一番大事だ。それなしに、面白がって話してはいかん」「はいわかりました」「それから、これだけは、はっきり

言っておく。俺のことを芹沢鴨と言うな！絶対言うな！言ったら許さんぞ！」

はい分かりましたと言った。だからロフトに行って、客席の皆に「こういうわけだから、絶対に塩見さんのことを芹沢鴨と言わないように！」とキツく、言い渡した。だからこのHPを読んでも、絶対に塩見さんのことを芹沢鴨と言わないように！フーツ。つかれた。これだけ念を押しておけばいいでしょう。

…と、「7・6ロフト」の話は予告編だけで終わります。続きは次週だね。では6月8日のロフトの話。いや、そのからみで松尾貴史さんの天才的な名著の話をするぜよ。

うーん、どこから話そうか。そうだ。「ザ・ニューズペーパー」を見に行った話からませう。

(2)ニューズペーパーは面白かった。「朝日」の松尾コメントも面白く読んだ

7月4日（日）でした。「ザ・ニューズペーパー」の公演を見に行きました。あの和光大生も来てました。ロフトで松尾貴史、岸田秀と私のトーク「幻想まっしぐら」をやった時に司会をやって好評を博した美人女子大生ですよ。他にも、元赤軍派議長の塩見孝也さん、元「噂の真相」の編集長・岡留安則さん。漫画家の石坂啓さんなどが来てました。石坂さんは息子さんを連れてきてました。中学生なのに180センチくらいある。「自由に育ててるから、スクスク伸びたんですね」と言ったら、笑っていた。「妹の子供なんかもっと大きいよ。2メートルはある」と言っていました。妹と言うのは河合塾コスモで私の担当フェローをやっている福田さんです。息子は中学生になったばかりなのにもう2メートルです、凄いですね。高校になったら3メートル、大学になったら4メートルになるでしょう。

「福田さんにはお世話になってます」と和光大生があいさつ。和光に入る前に、去年まで河合塾コスモに通い、大検を受けたのだ。その時、フェローの福田さんのお世話になった。この福田フェローが石坂啓さんの妹なんだ。もう一人、姉か妹がいて、「大型美女三姉妹」と言われてたらしい。「大型」は余計だったかな。でも「美女」と言ったんだからいいやろう。大型だからその子供もさらに大型になる。メンデルの法則だ。

その和光生が「今日の朝日新聞に松尾さんのコメントが出てましたよ」と見せてくれた。選挙のコメントらしい。じゃ、社民党か共産党を応援したのかな、と思って読んだら、違う。「投票に行こう！」と呼びかけて、デモを

したそうなの。そのときのコメントだ。「選挙に行こう勢」というデモだ。（このキャッチコピーも松尾さんが考えたのだろうか）。田中長野県知事などと一緒に都心を歩いて、「棄権すんなよ」「投票行こうよ」と呼びかけたわけだ。朝日新聞によると松尾さんのコメントはこうだ。

「選挙は結婚と同じ。ベストの相手は現れない」

さすがうまいこと言いますね、と和光生が感心していた。ベストの政治家はいない、と棄権してはダメだ。ベターでもいいから選ぶべきだ、そう言ってるらしい。これを読んで、「やっぱり、奥さんとうまく行ってないのかな」と私はポツリと呟いた。「えっ！何言ってるのよ？」と和光生。だって、これは、選挙にかこつけて、自分の結婚の失敗を告白してるんじゃないか。ベストの伴侶を探していたが、とても見つからない。でもそろそろ年だ。いつまでも独身だとホモと思われちゃう。仕方ない。「ベスト」探しはやめて「ベター」でいくか。この辺で手を打つか。そんな結婚の悲哀が漂ってるじゃないか。

あるいは、「ベストの相手」なんかいないと思って結婚して長い年月がたったけど、今になって「ベストの相手」を見つけた。女子大生だ。でも手遅れだ。しまった！ そう思ってるのかもしれない。

「それは考え過ぎですよ。妄想ですよ」と和光生は言う。「はい、妄想まっしぐらです」と言った。でもこの文章を正確に読み解くとそうなる。私だって「現代文」の先生をやってんですから。文章読解には自信がある。大体、自分の結婚を選挙にたとえることからしておかしい。もしかしたら倦怠期かもしれない。あるいは浮気だろうか。…と謎は謎を呼ぶ、疑惑のコメントでありました。

では松尾さんの本を又読んでみませう。『犬も猫舌』（ワニブックス）がテキストです。先週は「ハイジャックの語源」をやりました。「とても勉強になった」とメールをたくさん頂いております。何年かたったら本当に、「ハイジャック学」という学問ができるでしょう。

そして、この松尾さんの本も、きっと大学の教科書になるでしょう。なんせ、こんなに教えられ、勉強になった本は近年ありません。ウソだと思ったら買って読んでみなせえ。もし、つまらなかったという人がいたら私がお金を返します。

だって、「これは何故だろう？」「どうして？」と思い悩んでいたことが、次々と分かり、疑問が氷解していったんです。たとえば。

制汗剤の「8×4」というのがあります。「エイト・フォー」と発音しま

す。テレビのCMでよく見かけますよね。何であれば「8×4」なんだろうと、ずっと疑問に思っていた。8×4=32だから、32歳までの女性は使いましょう、という事だと思っていた。しかし違うんだよな。汗をおさえる脇の下のサイズなんですな。「長さ8cm×幅4cmだから」といいます。ヒャー、知らなかった。でも脇のどの部分の8×4か。ということは6月8日（火）のロフトの時につぶさに聞きました（実演入りで）。

ちなみに、この製品は花王から出てますが、花王は「顔洗い石鹸」を作ったのが初めてだ。つまり「顔」から「花王」になったわけだ。流石はウンチク大王の松尾さんだ。何でも知ってる。では、次は汗ではなく、かゆみを抑える薬だ。「ムヒ」だ。こんなものに語源はないやろう。かゆくてたまらんとこに塗ると、ピタッと止まり、思わずムヒッと声を上げちゃう。つまり、喜びの感嘆詞だわな、こりゃ。

と思ったら違うんです。この効き目は「唯一無比」だからです。その「無比」だ。比べようがないんです。恐れ入りました。

次は、殺虫剤の「フマキラー」です。これは、アメリカにいるフマキラー男爵が発明したものだ。それで「男爵イモ」と呼ばれるようになった。違う違う。ゴチャゴチャになった。まず「フマ」と「キラー」に分解する。キラーは殺し屋ですね。「フマ」は虫ですよ。だから「虫を殺すもの」という言葉なんじゃい。何で「フマ」が虫かって？よく憲法のことを「不磨の大典」というでしょうが。それとは全く関係ありませんが。「フマ」の「フ」は「FLY（蠅）」なんです。「ザ・フライ（蠅男）」という映画がありましたよね。あの蠅です。「マ」は「MOSQUITO（蚊）」なんです。モスキートではなく正確にはマスキートーと発音するんだそうですよ。

では皆さんがよく行く居酒屋の「つぼ八」の語源は。これはあの容器の壺ではありません。「こけざるの壺」8ヶではありません。「坪」なんです。このお店の第1号店が「8坪」しかなかったんです。それで自虐的に、どうせ8坪だよ、「坪8」だよ。となり、「つぼ八」になったんです。今はどの店も八百坪くらいありますよね。

(3)松尾ウンチク学の成人版です。ペニスの話ばっかです

では、これから成人編です。18歳未満の方は見ないように。

「パイズリ」を考えたのはルイ15世の愛人だという。貴婦人ポンパドールで、自分のオッパイの谷間にペニスをはさんでこする性技を考案した。日本でも昔からあり「紅葉合わせ」という風流な名前が付いていたといひます。

中心がほんのり赤く紅葉したような乳が二つあって、サマワ、サマワと揺れるからだろうか。しかし、何に書いてあるんだろう。「源氏物語」かな。出典を聞きゃよかったな。文学史なんだから。

それから、どうでもいいけど、日本で初めてパンティを手にしたのは豊臣秀吉だったそう。ポルトガル人が献上したという。でもそれを正妻のネネにあげたとか、淀にあげたとか、そんな記録はない。使い方が分からなくて、頭に被って遊んでいたらしい。今でも、こんなことをして楽しんでいるオッサンがいるが、それは「先祖帰り」である。遺伝子が覚えているんだ。だから秀吉の真似を何気なくやってしまう。つまり、それは変態ではありません。現に私だって。いえいえ、私はしませんけど…。

これからは集中的にペニスのお話です。私は別に紹介したくないけど、松尾さんの本にはこんな話が多いのだ。それで仕方なく紹介する。

「ヘビはペニスを二つ持っている」

これはいいね。人間よりもずっと進化してるよ。一つが疲れたら、もう一つのを使う。ちょうど剣豪が多人数を相手にする時、予め地面にスペアの刀を突き刺しておく。一本が刃こぼれし斬れなくなったら捨てて、次の刀、次の刀と取り替える。これのようだね。いや、剣豪がヘビを見て考えついたのか。

でも、松尾さんによると、そんな「スペア」としてもう一本あるんじゃないそう。

「手足のないヘビは交尾時にメスを固定できないため、命中率を上げるように進化したのかもしれない」

そうですか。なるほどね。ニシキヘビは爪があり、やはりこれも固定して交尾するためだという。「メスは爪でおさえられると刺激されて興奮するらしく、メクラヘビの仲間にも爪がある」

じゃ、ヘビの爪は段々と進化して、「手」になるかもしれないね。そうすると人間そっくりに交尾するのでせう。さらに進化し、ヘビは人間になっちゃうのでせう。大変ですね、そしたら。ヘビと人間は競争しなきゃならん。ヘビ出身の「人間」のほうが強くて、うまいだろうな。かくして適者生存の法則により、「ヘビ出身の人間」が地球上を占拠するでありますよ。

しかし、この本で、「メクラヘビの仲間」なんて書いてますね。動物の言葉ではいいんですね。「メクラ」を使っても。そういえばNHKの「地球大発見」では海底に住む魚を紹介し、「これはイザリウオです」と言ってた。

「イザリ」は死語になってるし、差別語で使えない。なのに、動物の名前な

らいいのか。「ザトウクジラ」というのもあるぞ。目が見えない（あるいは、目が小さいのか）から「座頭」なんだよね。

次です。

「エイは船乗りのダッチワイフだった」

フーン、そうですか。解説を見てみよう。

「エイの性器は人間の女性器とそっくりなので船乗りたちはエイを釣っては、腹側から猛った男根を挿入して、肉欲を満たしていたのだ。

一方、陸上ではその昔、羊や犬、ロバ、ブタ、ニワトリなどを犯してセックス処理を行なう者も多かった。メス羊の性器も人間の女性器に非常に近いとの説もある」

フーン、松尾さんは実際に見て、試してみたんだろうか。ウンチク大王なんだから、きっと実験してみたんでしょう。ベストではなくてもベターだと思ったんでしょう。しかし、エイや羊やブタなど、さんざん犯しまくり、そのあげくに食べるんですよね。自分の奥さんを殺して食べるんだ。ヒデーな。あ、実際に女性を殺して食べた人もいたな。今度口フトで対談しようかな。

「猫のペニスの根本には、たくさんのトゲがあり、あのとき、メス猫は相当痛い」

まるで松尾さんが体験したようですね。「相当痛い」なんて。

「トゲの効能については、おそらくペニスが抜けにくく、固定するのに役立っていると思われる」と言います。動物は大変ですよ。種を残すために、あの手、この手を使っています。まア、人間だって、「少子化対策」なんて言ってんですから、同じかもしれません。

そして、極め付けはこれです。ペニスにトゲがあるとか、二つあるとか、爪で固定するとか…いろいろな方法があるが、これにはかなわない。ブタだ。

「ブタのペニスは螺旋状である」つまり、ネジなんですな。知らなかった。

「ワインの栓抜きのような螺旋状である、メスの膣内も螺旋状になっていて、ハマると容易に抜けない構造になっている。だから、ガッチリと固定して、大量の精液（ティーカップ3杯分）を放出する」そうだ。これも松尾さんが量ったんだろう。

こう見てくると、一番偉いのはブタですね。人間よりもはるかに「進化」している。そうそう、ブタの子宮は人間と全く同じだそうだ。だから、社会学者の橋爪大三郎さんは『社会学入門』の中で、『人間の胎児は10ヶ月間、ブタのおなかで育ててもらえばいい』と大真面目に書いていました。代

理母をやとわなくていいし、女性はその間も自由に働ける。そうしたら、出生率も上がる。万々歳だ、というわけだ。医学的には全く問題ないそうだ。でもね…。と皆、二の足を踏む。これがバシたら子供は「お前はブタから生まれたんだって…」 「あそこにいるブタがお前の母ちゃんか」と学校でいじめられるだろう。ネットに、子供（人間）と母（ブタ）の写真を公開する奴もいるだろう。「お前の母ちゃん食ってやったぞ」という残酷な奴もいるだろう。もう子供はヤケになって、テロリストか赤軍派になるしかない。「抑圧された人民の解放」だけでなく「抑圧されたブタ」たちの解放も訴えなくてはならん。大変だ。

あっ、話を戻す。「ブタのペニスは螺旋状」という話だ。

しかし、ネジ状にオスのチンチンも、メスの性器も作るなんて大変だ。固定するにはいいが、入れるのも、出すのも大変だ。

実は、（とここから学問的、歴史的な話になる）NHKの「歴史発見」が本になっている。それを読んでたら、種子島に鉄砲が伝来した時の話が出ていた。「よし、同じものを作ろう」とした。日本人は手が器用だ。すぐに来れると思った。しかし、ネジで固定する部分がうまくいかない。凸状に、つまり、外側にネジがあるのを「雄ネジ」という。逆に、筒の内側にもネジがある。これを「雌ネジ」という。本当の話だ。特に、この雌ネジを作るのが大変だったという。ウーン、そうだったのか、と先人の苦労を思った。それ以来、万年筆やボールペンを見ても、「雄ネジ、雌ネジ」と言って感心して見ている。しかし、こんな命名をしたのは誰なんだろう。偉大だと思う。そしてちょっといやらしいと思う。

ではラスト。コンビニの話だ。「ミニストップ」は「MINUTE STOP」の略で、「ちょっと立ち寄る」。ローソンは、かつてアメリカに「ミルクショップ＝ローソン」というのがあった。このミルクショップが後にコンビニになった。そのため、ローソンの看板はミルク缶になっている。

ロフトで松尾、岸田さんとトークした時、聞きいてやった。「じゃ、サンクスは？」と。「ありがとうございます」という。でもスペルが違う。ありがとうは *thanks* だ。コンビニは「*Sunks*」だ。全然違う。それに、「トヨクニ」の語源は？「なーにそれ？」。「落合にあるスーパーですよ」「豊国さんが作ったんでしょう」「じゃミラベルは？大島団地のスーパーですよ」「他と比べて安いから。ミラベルじゃないの？」「ほんとかなー」「大体、どうして、そんなことばかり聞くんですか？僕だって分からないことはありますよ！」という。だって、ウンチク大王じゃないか。何だって

知ってるはずだろうが。

というわけで、おわりです。

そうそう、松尾貴史、岸田秀、そして私の「幻想まっしぐら」はおかげ様で評判がいい。秋にもう一回やるそう。でもこの前はチャージが2500円。ちょっと飲み食いしたら5000円になっちゃう。「だから少し値下げしたら」と言ったら、司会をしていた和光生に叱られた。「ダメです。落としません。もっと高くしようかと思ってんです。その代わりトークの内容もグレードアップします!」。凄い。

【お知らせ】

(1) 7月13日(火)はロフトで「創」トークです。イラクで人質になった郡山総一郎さんも出ます。

(2) 7月14日(水)は高田馬場のライブ塾(トリックスター社) tel03(5348)4767で、上野昂志さん(評論家)とトークです。「ジャーナリズムは死滅したのか」です。

8月11日(水)は有田芳生さん(評論家)と「ニュースの裏側」です。

9月8日(水)は鳥井守幸さん(元『サンデー毎日』編集長)と「週刊誌よ、元気出せ!」です。

さらに、10~12月と今年一杯は第2水曜日に私は出る予定です。

(3) 8月5日(木)の7:00から一水会フォーラムです。高田馬場のシチズンプラザです。

講師は猪野健治さん(評論家)で、「9・11以降の右翼運動を概観する」です。猪野さんは右翼・民族派運動については最も詳しい人で、著書も多数あります。実は「新右翼」という名前をつけたのも猪野さんなんです。是非いらして下さい。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン/丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年7月19日

8月2日、誕生日に、全く新しい『ヤマトタケル』が生まれます

(1)ちょっと不敬でアナーキーな「神話の英雄」が…

久しぶりに、書き下ろしの単行本が出ます。それも、半分近くはイラストが載ってる、楽しい、そして挑発的な本です。現代書館の〈フォア・ビギナーズ98〉で、『ヤマトタケル』（1200円+税）です。神話を舞台にしていますが、〈現代〉をも論じてます。「時を往還する新たなヤマトタケルの誕生」と銘打たれています。表紙だけ、紹介しておきましょう。なかなか凄い表紙でしょう。私が文を書き、イラストは清重伸之さんが描いてくれました。



イラストは単に、僕の文章の「解説」とか「説明」というものではありません。これだけで一つの「主張」を持ってます。僕が書いてないこともイラストで描いてますし、時には、「文」に「絵」が反論しております。「文」と「絵」の真剣勝負です。今までの僕の本ではなかった、全く新しい本です。

発売日は、ヤマトタケルの誕生日に合わせて、8月2日です。「えっ、それはお前の誕生日だろう」って？ あっ、偶然ですね。二人は同じ誕生日だったんですね。いえいえ、ヤマトタケルは昔々の人ですから、誕生日なんて分かりません。だから私の誕生日にしちゃいました。すんません。

表紙をよく見てもらえば分かりますが、右の方はヤマトタケル、景行天皇、スサノオの命、ミヤズヒメ…といった神話の世界。左の方は、三島由紀夫、谷口雅春、平泉澄、田辺聖子、私…といった現代の人々が描かれてます。（本居宣長や清少納言もいるけど）。

そして、その「時を往還するヤマトタケル」を書きました。表紙のコピーは他に、こう書かれています。

「騙し合い、殺し合い、愛し合った神々の物語」

「ヤマトタケルは建国の捨て石か？」

「怖くて書かれなかった〈禁断の神話〉が白日に」

ちょっと書き過ぎたかな。危ないかな。というのもあります。不敬なところもあるでしょう。「これじゃ反天皇の本じゃないか！」とゲラを見た人に言われました。しかし、そんなことはないと思います。全体を読んでもらえば分かります。建国の英雄「ヤマトタケル」に対しての愛情があふれていると思います。

実は、この本は、2年以上かかりました。「ヤマトタケルを書いてみないか」と言われたのは一昨年冬でした。「とても、とても僕なんて」と初めは断りました。長い間、右翼運動をやってきたけど、「古事記」も「日本書紀」もキチンと読んでない。神話についても口々に知らない。だから、「無理だ」と断りました。しかし、しばらく考えて、考えを改めました。これは新しい「飛躍」のキッカケになるかもしれない、と思いました。

今まで書いてきたように、右翼や左翼や、そして政治的なことを書くのは楽かもしれないが、全く勉強してない分野に挑戦してみるのもいいんじゃないかと。それに、〈人物論〉を通して、逆に自己を語れるかもしれない。そう思ったわけですよ。

それで、去年の4月に、河合塾コスモの合宿があった時に、鈴木三重吉の『古事記』をテキストに使い、子供たちと神話を読み、神話について考えてみました。又、牧野剛先生からもヒントを与えられて、「よし、神話について本格的に考えてみようか」と思ったわけです。

そこで、『古事記』『日本書紀』を読み、さらに、それらについて書かれた本を手当たり次第読みました。100冊位読んだでしょう。そして、去年の7、8月の学校の休みの時に書きました。ところが、出版社は、他の仕事が忙しくて、遅れてしまいました。又、「フォア・ビギナーズ」でも、「新選組」などの時を得たものが先になり、こっちは遅れたわけです。今年になってやっとゲラが出てきたのですが、神話の世界だから、読み方がいろいろあったりして、どう統一するかとか、カナをどうする…という問題で、もう大変でした。何度も何度も校正し、あるいは分からない所を人に聞き、図書館で調べ…と、大変な労力でした。出版社の人にも迷惑をかけました。

でも、絵が出て来て、驚きました。そんな苦労も吹っ飛ばすような喜びでした。絵だけを見ていっても、楽しいし、十分に一冊の本になっている。こりゃ、凄いなと思いました。絵があるから、次に頁をめくる楽しみもあるし、読み通してくれるのではないか。と思います。まず実物を見て下さい。8月2日発売ですが、その前に書店に並ぶと思います。『ヤマトタケル』についてはいろいろと書きたいこともありますが、又、書きましょう。

(2) 応援した人は皆、落ちちゃって残念です

では参院選の結果です。自民は振るわず、民主は躍進ですね。「自民惨敗」となればもっと面白かったでしょうが、わずかに負けたんですね。「自民を否定」ではなく「自民を批判」だ、と新聞には出てましたが、そんなところかもしれません。

産経新聞（7月13日）の「産経抄」には、これは、「国民の絶妙なバランス感覚」だと言っていました。国民は自民党と小泉首相に熱いお灸をすえたのだと言います。ただし、「お灸」だから、「懲罰」ではないし、ましてや「否定」ではない…と。

〈小泉首相は確かにイエローカードをもらったが、しかしポスト小泉に手を挙げているものがだれもない。民主党は間違いなく躍進したが、ただちに政治を丸投げできるほど大人になってもいない。だからもう一度だけ小泉に続投させよう、やらしてみようが民意なのだ〉

と言います。〈民意〉というより、産経の〈社意〉であるようですが。又、青島幸男、鈴木宗男、辻元清美は落ちた。これも「国民の絶妙なバランス感覚」だし、「見えざる手」らしい。そして、社民、共産党だ。もうこの二政党には明日はない。

「たとえば改憲をなお、タブーとするような硬直した左翼イデオロギー。そういう時代が過ぎ去ったことを有権者は告げているらしい」

要は、「民意」とか「有権者」という言葉を使って自分の言いたいことを言ってるわけですね。全く都合がいい。

それにしても、私の推薦し、応援した候補者は皆、落ちてしまった。上田哲さん、ミチオ高倉さん、神取忍さん、辻元清美さん、そして、新風の人たち。残念でした。しかし、青島のアホなんかが出なければ、批判票は皆「怒りの上田哲」に集中して、当選できたのに。…と、悔やんでも仕方ないですがね。

蓮舫さんは知り合いだし、いい人だと思うけど、でも上田哲とは比べものにならない。上田さんの方が思想も哲学もあるし、国家をひっぱっていく識見、情熱がある。そんな力量のある人を落として、テレビで有名だからということで国会に出していいのかね。

島田紳助は民主党の候補を応援して、「今回だけは、ジャンプ選手やプロレスラーはやめてほしい。この人に入れてくれ」と言っていた。凄いことを言う。ジャンプ選手は、政治的な考えなんて何も無いが当選した。神取は落選した。

そうだ。喜納昌吉さんは当選したね。僕が推薦して当選した唯一の人だ。選挙中、新宿で演説してる時、声をかけたら、「ぜひ、応援演説をしてくれ」と言われた。しかし、僕が演説したのでは逆効果だと思って固辞した。

それに、喜納さんに声をかけようとして近付いたら、「反戦平和」の若者に阻止された。「あっダメダメ」という感じで。「右翼が襲ってくる」と思われたのかもしれない。まいったな。喜納さんとは友達なのに。そんな純粋に反戦平和を信じてる若者たちを前にして、僕が喋ったら、やっぱり逆効果だと思ったんだ。

その後も、スタッフから電話で、頼まれたが（他の用もあったし）、固辞した。上田哲さんにも行けなかった。でも、両方とも、行かなくてよかったと思う。塩見孝也さんは、「俺も上田哲の応援演説に行きたい」と言ったけど、「やめた方がいいんじゃないか」と言った。それで、選挙事務所にだけ、二人で激励に行った。

だって、塩見さんや、僕が応援で行ったら、絶対プラスにならない。「あのハイジャックや連合赤軍で毎度おなじみの赤軍派議長・塩見孝也が応援に来ました。日本のレーニン、獄中20年の塩見です。権力に屈せず闘いつづけた男、塩見です…なんてやったら、歩いてる人がビクビクする。誰がこんな奴に入れるか、と思っちゃう。

それに僕は、ある時、名古屋で立候補した人を応援に行ったことがある。本人が来てくれと言うから行ったのに、ある国会議員に、「応援はやめてくれ。東京にすぐ帰ってくれ」と言われた。ショックだったが、今考えたら、それが正論だったと思う。じっくりと論議するわけじゃないし、「一時の印象」なんだ。「なんだ。過激派が応援してんのか」「ペッ、右翼なんかが応援に来てやがるぞ」と、それだけで候補者が偏見をもって見られる。入るべき票も入らなくなる。悲しいことだが、今の日本の現実だ。

しかし、自民党と小泉さんは、選挙に向けて、「これでもか、これでもか」と奥の手を出してきたね。たとえば、北朝鮮に急遽行って、子供を連れ帰ってきた。又、曾我さんと、夫、子供をジャカルタで再会させた。又、やはり選挙に向けて、オウムを逮捕した。国松警察庁長官を狙撃したのはオウムだ、と断定したわけだ。次から次と、隠し球を出した。しかし、それだけやりながらも選挙では負けたんだ。じゃ、この隠し球がなければ大敗北だった。そう思うね。

では、その曾我さんとジェンキンスさん、娘さんたちとの再会の話だ。

(3)私の予想通りになりそうですね。ジェンキンスさんは

しかし、ねー。会って、いきなり「ブッチュー」だもんな。テレビを見ていた私らも驚きましたよ。曾我ひとみさん（45才）が、夫のジェンキンスさん（64才）と再会した瞬間ですよ。感動の瞬間だから、きっと4人で抱き合って涙、涙なんだろうな。と思った。ところが、娘2人はほっといて、夫に抱きつき、いきなり、ブッチューと、接吻！

新聞は、「熱いキス」「情熱的なキス」と書いてたけど、そんなもんじゃない。ディープキスで、ブチュブチュ、グチョグチョと20秒間！「熱いキス」というよりも、「暑苦しい接吻」「見苦しい口吸い」といった感じだった。別に批判してるわけじゃない。1年9ヶ月ぶりに会ったんだ。人目もはばからず、こうなるんだろうな。と思った。64才と45才の夫婦で、こんなに濃い夫婦は他にいないですよ。こんなに濃い再会もない。

ジェンキンスさんも驚いてたね。握手するとか、抱き合うとか。その位は

予測してたけど、いきなり、音をたててブツチューだもんね。「おいおい。人目もあるじゃないか。それはホテルに入ってからにしようよ」と思い、咄嗟に首を振り逃げようとした。元脱走兵だから、すぐ脱走しようとする。

「逃すものか。もう脱走はさせない」とばかりに曾我さんは夫の顔を両手でしっかり押しつけ、固定し、さらにブチュブチュだ。舌も入れた。そして20秒。長い。よほど飢えてたのだろう。いやいや、よほど会いたかったんだろう。だって、1年9ヶ月前に日本に帰った時は、シングルは一人だけ。あとはペアーの二組。夫婦仲のよさを毎日見せつけられた。そして、二組の夫婦は子供も帰ってきた。「どうして私だけ…」と思った。恨めしかったし、淋しかった。その思いが、この再会の一瞬に出たんだよね。

逃げようとする夫を、そうはさせるかと、押さえ込んで口を吸う曾我さん。「儒教の国」北朝鮮で育った娘2人は、母親のこのはしたない行為にあきれ、泣き崩れていた。いやいや。お母さんと再会して感激して泣いてたんだよね。

「感動的な再会」「熱いキス」と絶賛して書きながらも新聞記者たちは、「あの暑苦しい接吻はやりすぎじゃないのか」と思っているんだね。又、実際、そう言っている。「一緒に行った中山参与もちゃんと指導しなくっちゃダメだろう」と不満を言っている。「世界中の人々が見てるんだから、曾我さんと中山参与でリハーサルをやりゃよかったんだ」と言っている。「礼の国」日本と、「儒教の国」北朝鮮にいた人が出会うのだ。もの足りない位、シンプルに、気持ちを抑えて再会の瞬間を演出してもよかったんじゃないか。と外部の人間だから、やっかみ半分に思っちゃうのかもしれない。でも、新聞記者の不快は当たっている。その証拠に、一般紙は、ディープキスの写真を載せてない。それが終わった後、顔を離して見つめ合ってる、「きれいな写真」を載せている。「ディープ・キス」の写真はスポーツ新聞が大々的に載せていた。「一般紙じゃ載せらんないから」という配慮というか、「棲み分け」が示されたようで興味深かった。

この再会の直前だったと思う。テレ朝の「TVタックル」を見ていた。ほら、あるでしょう。「朝生」をもうちょっと下品にしたようなやつが。浜幸がよく出てて吠えてるのが。その中で誰かが、「ジェンキンスも男らしくない。だらしがない。堂々とアメリカに行って自首すればいいんだ!」と言っていた。へエーと思った。なかなか言えない正論だよ。そしたら他の人が、「でも、そうしたら死刑になるんじゃないの?」

「バカな。死刑になんかなるか。アメリカだって考えるよ。“窮鳥懐に入れば

猟師もこれを殺さず”と言うだろう」

「“きゅうちょう”って何？」

「バカモン！ お前だって東大出てるんだろう。こんなことも知らんのか。自分から飛び込んできたら、アメリカだって悪いようにはしない、ということだよ」

といった論争があった。東大出のくせに「窮鳥」もしらんのか。アホだ。

でも、〈反米〉の意志が固いジェンキンスさんも、どうも、日本に来るようだ。そして日本で入院・治療をするらしい。やっぱり僕の言った通りじゃないか。1ヶ月ほど前にこのHPに書いた。日本に来たら、「アメリカの脱走兵だ」という問題がある。すぐに逮捕されるか。あるいは、引き渡すか。引き渡したら、「何と無慈悲なことをするんだ」と国民の批判は一斉に小泉首相に行く。「こんなことなら、北朝鮮においておけばよかったじゃないか」となる。それを避けるために、アメリカと秘密裏に交渉している。恩赦が無理なら、形式的に裁判をして執行猶予にするとか。…いろいろ考えた。しかし、秘中の秘は、これだろう、と私が言ったのは、「日本で入院」だ。つまり、「重態だ。動かさない」といって、ずっと日本におく。そして4人で一緒に暮らせる。これしかない。そのことを1ヶ月前にHPに書いた。やはり、政府はそれしかないと思ったんだ。まさか、このHPを読んで作戦を考えたわけじゃないだろうが…。

(4)じゃ、「よど号」グループの「無罪帰国」も認めてやれよ

それと、「よど号」の4人も帰ってくるようだ。こちらは、たとえ帰ってきても、曾我さんたちのように「熱烈歓迎」にはならない。そして、即逮捕だ。かわいそうだ。本音を言えば、彼らは帰りたくないのだろうし。

1970年に「よど号」をハイジャックして北朝鮮に行ったんだから、今から34年前だ。この時は、赤軍派は9人だった。ところが、3人が死亡し、2人は日本にいる。残るのは4人だけだ。北朝鮮はずっと庇ってきたが、もう庇い切れなくなったんだろう。「もう日本に帰ったら」と言ったんでしような。実質的には、ところ払いだわさ。強制送還だ。

でも、「よど号」グループは、そうはっきりは言えない。34年間もお世話になった国だ。たとえ、追い出されるとしても、それなりの礼儀を尽くさなくてはならない。「我々は帰国したい。その要望を伝えてきたが、許可してもらった」と言っている。いじましい。田中義三さんは去年、懲役12年の判決が下りて、今熊本刑務所にいる。北朝鮮の4人は田中さんよりも上の人

だ。田中さんが12年なら、他の人はそれ以上だ。さらに、ヨーロッパで有本さんたちを拉致したと思われる。その裁判もあり、罪も加わる。それに皆、50代後半だ。これから15年とか20年刑務所に入るのは大変だ。

「よど号」リーダー小西さんのお母さんとは田中さんの裁判の時によく会ったが、「息子は帰ってこなくていい」と言っていた。「帰ってきたら監獄に入れられて20年も全く会えなくなる」と。「北朝鮮にいるのなら、いつでも会いに行けるし、電話なら毎日だって出来る」と。そうだろうね。

脱走兵のジェンキンスさんの「恩赦」や「執行猶予」を求めてアメリカにお願いするのなら、まず、「よど号」の4人を〈恩赦〉にしてやれよ。「無罪帰国」させてやれよ。これはアメリカに頼まなくて、日本だけで出来ることだし。あるいは、日朝国交回復の時点で〈恩赦〉にしてやるとか。あるいは、「全ては塩見孝也の判断ミスからきたことだから、4人は帰してくれ。そのかわり塩見を北朝鮮に身代わりでやるから」とか。もっとも、もらっても迷惑だろうね。

【追記】

(1)7月10日(土)、ロフトで中島らもさんに会いました。終わってから、深夜まで酒を飲みました。相変わらず危なかったですね。ジャワのナイフを振り回していました。「8年前に朝生で一緒しましたね」と言ったら、「そうだったか?」ときれいさっぱり忘れてました。でも、秘書の人が、「そうですよ」と言ってくれたので助かりました。でないと、私も、「あれは幻想だったのか」と思うところでしたし。しかし、らもさんはプロレス、格闘技は好きだし、やたら詳しい。ロフトか、どっかの雑誌でプロレスや力道山について話しましょう。となりました。

(2)7月13日(火)、「創」のイベントでロフトに。イラクで人質になった郡山総一郎さんの話を聞きにいただけなのに…。何でも、元一水会の渡辺修孝氏(イラクで人質になった人)も来るということで、「その時は、鈴木さんが対決して下さい」と言われた。ロフトへ行った段階で、「しかたないな。その時はその時だ」と覚悟してました。「今日も又、鈴木さんの暴れる姿が見れる」と期待してた人もいたそうで。困るよな一。でも、幸か不幸か、渡辺氏は来なかった。「鈴木さんの闘志も空ぶりでしたね」と言われた。別に、闘う気はないんだし、ただ、郡山さんの話を聞きに行っただけなのに…。

この日、田代まさしさんに会いました。金嬉老の映画をつくってるそう

で、その話をしました。ロフトの人が、「鈴木さんと田代さんでトークしませんか。金嬉老事件について…」と言ってました。いいですね。思想的背景をふくめて、あの時代のことも語り合いたい。だから、近い内に実現するかもしれません。

【お知らせ】

- (1)「月刊TIMES」（8月号）が発売中です。連載「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」は2回目で、「死後も生き続ける二人の魂」です。
- (2)8月5日(土)の7時から一水会フォーラムです。高田馬場のシチズンプラザです。猪野健治さん（評論家）の「9.11以降の右翼運動を概観する」です。
- (3)8月11日(水)は高田馬場のライブ塾03(5348)4767で、有田芳生さん（評論家）とトークです。テーマは「ニュースの裏側」です。
- (4)ライブ塾では、9月8日(水)鳥井守幸さん（元『サンデー毎日』編集長）がゲストです。テーマは「週刊誌よ、元気出せ」です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年7月26日

やはり、「知の復権」ですよ。猛暑に負けないで…

(1) 「校正」と「校閲」の違いって知ってました？

オラは「物書き」としては失格だな、と思った。だって、「著作権」とか、「個人情報保護」について、何も知らない。さっぱり分からない。ジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）の会議に出た時、そういう話になった。オラは話についていけない。たとえば「引用」はどこまで許されるかも分からない。出典を明記すれば、いくらだって許されると思ったが、どうも違うらしい。大体、句読点の打ち方だってよく知らない。

「鈴木さんの本には随分と危ない所がありますよ」と言われた。「著作権」や「個人情報保護」のことらしい。厳密に言うと、それらを侵してるんだらう。一度ゆっくり教えてもらわなきゃ、と思った。

ついでだから、いつも疑問に思ってることを聞いた。「校正と校閲って同じことですか。違うとすれば、どこが違うんですか？」と。

さすが、ジャナ専だね。専門の先生が多いから立ちどころに教えてくれる。

「全く違うものですよ」と。「校正」は、文字の間違いを直す。たとえば、文字がひっくり返っているのを直す。「ささいな」が「さささいな」になっている。じゃ、「さ」を一つとる。といった〈技術的〉な問題だ。最近では、パソコンが同音異義語を勝手に作ってくれるから、それを直すのが校正の主眼になる。たとえば、先週の「主張」では…。「上田哲さんは国家をひっぱってゆく識見がある」と書いた。ところが、パソコンは「識見」を「指揮権」と打った。「国家をひっぱる」という表現にひっぱられて、「指揮権」の方がいいと思ったんだらう。ウーン。これでもよさそうな気がする。でも、上田さんは首相になって国家を指揮するわけじゃない。それで「指揮権」を消そうとした。「でも、上田さんには首相になってもらいたい

と、お前は思うんだろう」とパソコンが反論する。又もや、迷った。そこでパソコンと話し合った。パソコンも〈頭脳〉だから自分で考える。オラの頭脳と、がっぷり四つになって考え、討論する。その結果、「今回はひとまず“識見”でお願いしますよ」とパソコンの許可を得て、訂正した。

フーッ。文字を校正するのにも苦労があるよ。そうそう。野村秋介さんが、昔、『週刊朝日』でインタビューされたことがある。「我々の運動は破邪顕正だ」と言った。「破邪顕正の剣を持つべきだ」と言ったのかな。「悪を討ち、正義をあらわす」のだ。右翼にとっては基本的な4文字熟語だ。ところが、発売された『週刊朝日』では、「覇者牽制」となっていた。権力者の横暴を阻止するということか。ウーン。これでも意味が通る。しかし、こんな四文字熟語はない。

だから、それを書いた記者に教えてやった。ところが、「エー！　そうですか」と驚いている。「破邪顕正」という言葉を知らなかったんだ。国立一流大学を出てるのに。今は、その人は記者をやめて、大作家になっている。だから名前を出すのはひかえよう。

話が横道に外れた。「校正」は分かった。じゃ、「校閲」だ。これは文字の間違いを直すだけじゃない。もっと内容的なものだという。たとえば、この「出典」は正しいか。この引用の仕方は著作権に触れないのか。ここに年代が記されているが、果たして正しいのか…と。

なるほど、と思った。「校正」と「校閲」は違うんだね。初めて分かった。こんなことも知らなかったなんて、「物書き」として失格だね。「内容をチェックする」ということは、下手をしたら「思想チェック」にもなる。行き過ぎるとそうなる。だから、「検閲」にもなる。校正は「検正」にならないが、校閲は「検閲」になる危険性がある。米軍が日本の占領下に出版物に目を通したのも、「検閲」だ。日本の警察が戦前、戦中にやったのも「検閲」だ。

「では、校正・校閲は英語で何と云うんですか？」と私は聞いた。ジャーナ専の並いる専門の先生方に聞いた。出版の世界では、どんどん横文字ばかりが横柄な顔をしている。キャッチ・コピー、デザイン、リライト、レイアウト…、と。しかし、最も基礎的な（ベーシックな）仕事である校正・校閲は英語で言わない。もしかしたら、これに相当する英語がないのかもしれない。アメリカやイギリスでは校正・校閲なんかしないのかもしれない。

「いや、英語はありますよ」と一人の先生が言う。「校正はproof-readingと云うんです」

エッ？ そうなの。聞いたことないよ。readingは「読むこと」だ。でも、proofは分かんない。

「時計の防水のことをwaterproofというでしょう。そのproofです。〈防ぐ〉ということです」間違いを防ぐ、ということか。でも、本当かな。と、失礼ながら思った。校正なんて、ここ40年位、毎日のようにやってきた。それなのに、「英語で何ていうか」を知らない。奇妙な話だ。そして今、「proof-reading」という全く見知らぬ言葉を教わった。ホントかよ、と思うのは当然じゃろうが。

それで家に帰って調べた。誠文堂新光社の『和英併用机上辞典』を取り出した。これには対応する英語もちゃんと出ている。それによると…。

「校正 組み版の誤りを正すこと。

proof-reading」

ウワー、本当だ。さすがは専門の先生だ。脱帽だ。じゃ、「校閲」だ。

「校閲 書物、原稿などの誤りや不備などを調べること。

revision」

そうか。校閲はrevisionというのか。reは再びだ。visionは見る、検討する、だろう。「誤り」だけでなく「不備」も調べるのだ。「この原稿は、民主的な識見が不備だ」とか。「革命的識見が欠如してる」とか。今なら、「愛国心が足りない」とか。でも、やっぱり容易に「検閲」になっちゃう。

そうそう。私は、昔、産経新聞に勤めてた時、無能で各局をトライ回しにされてました。どこでも使いものにならんかったんでしょ。4年のうちに9回も部署が変わりました。その一つに、「広告局の校閲課」がありました。朝から晩まで広告ゲラをチェックしてました。でも「内容」のチェックはなかったと思うけどな。文字の間違いを見つけるのが主でした。でも、よく、間違いを見逃して、上司に叱られました。「お詫び広告」を出し、さらにその字もミスしてました。どうしようもないダメ社員ですね。これじゃ、クビになるのも当然です。僕という人間存在が「校閲」されちゃったんです。

(2)久しぶりに『ニセ学生マニュアル』を見つけ、再読したよ

ジャナ専の図書館で珍しい本を見つけた。浅羽通明の『ニセ学生マニュアル』（徳間書店）だ。これは売れに売れた本だ。1988年8月31日に初刷。91年5月10日に4刷だ。このあと、もう2冊ほど〈続編〉が出ている。

「逆襲編」と「死闘編」だ。これも売れた。それだけ皆が〈知〉に渴いてい

たのだ。〈知〉を求めていたのだ。今、こうした本は出ない。ということは、「学生」も「ニセ学生」も、レベルがグンと落ちたということだ。日本人はアホになったということだ。

この本は、「いま、面白い〈知〉の最先端講義300」が紹介されていた。こんな面白い講義は、その大学の生徒に独占させておくだけでは勿体ない。他の人達も、「モグリ」でどんどん聞きに行け！ とけしかけているのだ。いいことだ。

「マニュアル」と銘打った本は、随分とある。自殺、家出、盗聴、痴漢、薬物…と。しかし、はっきり言うが、〈知的〉で、人生に役立つマニュアル本は、この『ニセ学生マニュアル』だけだ。まず、こう言っている。

〈この本は、ニセ学生のニセ学生によるニセ学生のための実用書である。ニセ学生、つまり学籍が無いのにあつかましくも大学に赴き、入室チェックがないのを幸いに講義を盗聴しにゆく物好きたちのことだ。

この本はニセ学生もしくはニセ学生になってみたい人のために、データを提供し、またそのほかの人たちをニセ学生というさやかな冒険、快樂もしくは悪徳に誘うために仕掛けられた〉

凄いね。「講義を盗聴」と言ってるよ。こんなにしてまで〈知〉に触れたいと思い、勉強したい人が沢山いたんだよ、当時は。今なんて、全くいない。他大学にまで行って、盗聴しようという学生もニセ学生もいない。それどころか、どんなにいい講義をしても、そこの学生すら聞いていない。寝てたり、私語していたり、メールしてたり…だ。「本物の学生」が「ニセ学生」化している。そして昔の「ニセ学生」ほどの覇気もない。知的関心もない。困ったことだ。

こんな本が売れた時代が懐かしい。目次を見ると、あらゆる分野の講義が紹介されている。西洋哲学、メディア論、科学史、幻想文学、外国文学、経済学、国際関係論…と。「人間とは何か」「学問とは何か」を問うものが多い。今なら、コンピューターや「人間関係論」といったものが多いだろうが…。

ただ、アカデミックに、真面目に紹介しているだけじゃない。全国の大学には、「こんな変な教授がいるぞ」「こんな、とんでもない授業があるぞ」…というのも紹介していて、それが面白い。この本だったか〈続編〉だったか忘れたが、関西にはナチスカぶれの先生がいる、と紹介されてい

た。研究室には奇妙な写真が掲げられている。教授本人が、負傷した軍人に扮し、左右を看護婦に支えられている。今なら「コスプレ写真」というのだろう。ドイツのために戦い負傷した名誉ある軍人になり切って、恍惚とした表情で写真に収まっている。変な人だ。それに左右の看護婦は、実は自分のところの女子大生だ。

ヒャー、とんでもない先生がいる。驚いた。それで関西に行った時、私は「ニセ学生」になり、その大学にモグっていった。ところが、残念にも、その数カ月前に亡くなっていた。別にイスラエルのモサドに暗殺されたわけじゃないだろうが。勿論、私も彼の死には無関係だ。

うん、こんな変な先生が紹介されてるんだから、和光のあの先生も出てるはずだと思って探してみた。ありましたね。ちょっと長いけど紹介しよう。

〈岸田秀。和光大学の看板教授。例年は一般教養の「心理学」でフロイト理論をベースとした精神分析入門を講じ、他にも、「精神分析と日本文化特講」というタイトルで史的唯幻論に基づく日本近代史化の分析を行う。〉

そうか。随分と前から、一貫して「史的唯幻論」をやってたのか。この頃は私も岸田さんと会ってなかったから、ここは〈一般論〉として読み流していただだけだ。最近、よく会うし、女子学生にもてることも知った。合宿などでは、女子学生と接吻したり、乳をもんだりしてる。それを写真に撮って堂々と公開してる。「俺はセクハラ教授だ！」と隠すこともなく公言している。それでも誰からも文句をいわれない。凄い先生だ。でも、この本が出たのは15年も昔だから、そんな〈秘密〉はまだ明らかにされてなかっただろう。…と思ったら違う。こう紹介されてるからだ。

〈ニューアカデミズム・スター群像のひとりゆえ、フォークロアも多く、唯幻論応用の口説きのテクニックは誰もまねできないとか〉彼女を寝取られた、ある学生が殴りかかり（よく学生に殴られることは、著書でも書いている）。「すべて幻想なら痛くないだろう！」とやられ、「君はわたしがノックアウトされた幻をみているのだ」と言い返した。とかいろいろ伝わってるが、どうもおおはなしとして底が浅い〉

へエー、こんな昔から、「武勇伝」があったんですね。伝説も、残ってたんですね。学生と女をとり合うなんて、若いですね。又、こんなことが暴露

されてもクビにならない。それどころか、ハクが付く。凄い人だ。僕も去年は、和光大学に「ニセ学生」として、岸田さんの授業を聞きに行った。広い教室に30人位しかいない。「初めは400人いたんですが…」という。十分の一以下になってる。それに、その30人がうるさい。岸田さんも、「出席にしてあげるから、帰ってくれ。私語はするな!」と言ってるが、学生は聞く耳を持たない。

「こんなに有名な先生でも、こうなのか」と私は嘆いて岸田さんに言ったら…。

「私が有名だというのも幻想です」と言われた。そして、一緒に研究室に戻った。岸田ファンの女性たちが学外から来ていた。その点では今も「ニセ学生」に支えられている。巨乳の女が、「先生、乳もんでエ」と言い寄ると、「ハイ、ハイ」と言って、もんでいる。痴漢だよ。でも、本人が「してくれ」と言ってんだから、痴漢でもないし、セクハラでもない。「そんなことを考えるのは幻想です」と言われた。

でも、でも。今は、学生は聞く人も少なく、うるさいが、15年前は、大教室も一杯になってたんだらう。私語する人もいなくて、皆、真面目に聞いていたんだらう。そう思って、この本を読んでたら…。

〈一般教養科目の「心理学」など、立ち見が出るほどの人気だが、どうもマスコミで有名な岸田秀の異貌を見にきただけらしく、授業中もがやがやとやかましい。たまりかねた岸田先生は、しばしば怒鳴りつける。どうやら「幻」と聴き流すことはできないようだ〉

なるほど。15年前も全く同じだったんですね。この頃から学生はもう私語をしていたのか。最近、数年のことだと思ってたけど。それにしても、昔から、同じ話をし、同じように私語されて、同じように怒鳴っていたんだ。

(3)この頃から、元気な右派教授も台頭してたんですね

ジャナ専の図書館に『ニセ学生マニュアル』を返しに行ったら、〈続編〉もあったので二冊、借りてきた。『逆襲編』（1989年9月30日初刷）と、『死闘編』（1990年10月31日初刷）だ。アレッ、今、気付いたが、『ニセ学生マニュアル』が出たのは1988年だ。すると、翌年に『逆襲編』、その翌年に『死闘編』が出版されている。毎年だ。ということは、『現代用語の基礎知識』のように、毎年、改訂版を出すつもりだったのだ。凄いね。で

も、〈知の時代〉が去ったので、改訂版も終わった。

3巻目の『死闘編』を見ていたら、知ってる人がかなり出ている。たとえば、

〈中村黎 日本文化特講 独協大。『諸君！』連載の「大東亜戦争への道」をテキストに大東亜戦争を防共への戦いとして捉える反日本断罪論に立ち、戦争肯定論を日露戦争以来の近代史の再検討として提示する。なんでも、「他所では絶対に聞かれぬ独自の講義で、学生諸君の裨益する所絶大なるものがあると信ずる」のだそうだ。そういえば、街角の右翼の講演会のポスターでこの名前をとときどき見かける。まあいいけど。〉

そうですね。一水会でも何度か来てもらい話してもらいました。あっ、じゃ、「右翼のポスター」って一水会のことかな。

〈長谷川三千子。哲学（埼玉大）。天皇制擁護の大会に出席して武道館で演説したり、生態系破壊を憂う立場から、男女機会均等法に反対したり右翼おばさんとしてのパフォーマンスが目立ったが、元もとは野上彌生子の孫という育ちのよさと少女期のIQ160という頭脳を持つ哲学者。

（中略）

講義は西欧中心主義批判だが、難解と聞こえるのか授業中私語が絶えないとか。ゼミは道元を読む。コンパには必ず出席するが、家庭を持つ身ゆえすぐ帰るお嬢様哲学者。座談中、自分が持ち出した友人の哀話や苦労話などに自ら涙ぐむ純情さでも知られる〉

この長谷川先生も何度か一水会に来てもらった。いい人だ。言ってることは超硬派、タカ派だが。野村秋介さん追悼の「群青忌」で記念講演をしたこともある。右翼だけでなく、仁侠の人達も多く参加していたが、全く恐れない。それどころか、「こういう男くさい人たちって好きなの！感動した！」と喜んでた。純情な人だ。この調子で紹介していたら、キリがないね。だからやめる。興味あったら、図書館か古本屋で見つけて読んでみなせえ。あつ、岸田秀さんが又出てる。毎年出すんだから、ほとんどは直さないでそのまま、新しい人を少し入れたり、やめた人を取ったり…と、その位の改訂かと思った。ところが違う。毎年、全面的に書き足している。岸田さんに

については、「女を寝取られた男子学生に殴られた」という有名な話はない。そして、こう堅く書かれている。

〈岸田秀 精神分析（和光大）。

今年はじめ、マルクスの時代は終わった。これからはフロイトだ！ と産経新聞だかでのたまっていた岸田であるが、70年代に唯幻論で登場した頃ならともかく、今はむしろ逆をいうべきではないのか？ 昨年『[逆襲編] ニセ学生マニュアル』で書いた通り国家も恋愛もすべては幻想であるとする唯幻論ニヒリズムは、結局、何事も真剣にやる価値はない幻想なのだからという怠惰と無責任の言い訳を新人類に与えただけだった〉

そうなのか。あの「新人類」に理論的根拠を与えたのが岸田さんだったのか。この本は、かなり真面目に岸田さんの〈毒〉と〈悪影響〉を評価している。そして、憂えている。さらに、こう反論する。

〈すべてが幻想であろうとなかろうと、私たちは何かを食べなければ生きられないし、幻想としての貨幣という富の価値、学歴や社会的地位という幻想の価値を無視しては生きられない。ならば、これら幻想を現実と見て、その操縦法を学んでゆくしかあるまい。ではこれらの幻想からなぜ私たちは逃れられないのか？ そのひとつの大きな答えを出したのがマルクスであった。プロゼミは昭和天皇論、精神分析はこれまでは唯幻論一刀流で学生にあらゆる質問を出させて全て答えて見せるという見せ物まがいをやっていたが、今年はフロイト理論の専門的研究でつまらないだろうと岸田自身が言っている〉

しかし、70年代から30年以上も〈唯幻論〉一本でやってきた岸田さんも凄いやね。そして和光大をやめた後も、ロフトプラスワンで〈幻想まっしぐら〉だもんね。10月か11月位には又、岸田、松尾、鈴木の「新・三馬鹿大将」で「幻想まっしぐら。Part2」をやる予定です。勿論、司会はあの美人和光女子大生です。

【お知らせ】(1)7月24日(土)、『ヤマトタケル』（現代書館。1200円）が発売されました。「フォービギナーズ・シリーズ」の1冊です。全国の書店でおいてあります。2年かけて苦労して作った本です。表紙もいいし、中の絵もいいです。「絵本」のようです。ヤマトタケルが主人公なのですが、三

島由紀夫も野村秋介さんも、谷口雅春先生も出てきます。絵を見てるだけでも楽しいです。売れてくれれば、と思います。

(2)8月5日(木)の7時からは一水会フォーラムです。高田馬場のシチズンプラザです。猪野健治さん(評論家)の「9月11日以降の右翼運動を概観する」です。猪野さんは、右翼問題では日本で一番詳しい人です。現代書館のフォービギナーズの『右翼』も書いてます。名著です。読んでみて下さい。

(3)8月11日(水)は高田馬場のライブ塾03(5348)4767で、有田芳生さん(評論家)とトークです。有田さんは、日本テレビの「ザ・ワイド」に毎日出てコメントしております。いわば、「ワイドショーの顔」です。興味深い話が聞けると思います。又、統一教会、オウム、赤報隊と今まで取材、報道してきました。そうした話も聞いてみたいと思います。

(4)ライブ塾の次は、9月8日(水)で鳥井守幸さん(元『サンデー毎日』編集長)がゲストです。テーマは「週刊誌よ、元気出せ」です。

ライブ塾では今年一年間、毎月第2水曜日に僕のトークをやる予定です。10月の予定も決まりました。

10月13日(水)で、宮崎学さん(作家)です。テーマは「権力としてのマスメディア」です。

11月10日(水)、12月8日(水)も、今、強力な講師陣と出演交渉中です。お楽しみに。

(5)8月15日(日)に、快樂亭ブラックさんの落語会がありますが、私と沢口ともみさん(反戦ストリッパー)が特別出演する予定です。

(6)7月22日。いよいよ発売になりました。『格闘技&プロレス』vol3(芸文社・1050円)です。爆発的に売れてます。だって、「迷宮ファイル。あの事件はいったい何だったのか?」です。前田vsアンドレ戦、神取忍vsジャッキー佐藤戦など、〈迷宮事件〉の数々を特集しています。「日本のポアロ」と言われる私も、二本、原稿を書いています。一本は前田論。そしてもう一本は、戦後最大の謎〈力道山vs木村政彦〉戦について書きました。何と9ページの大作です。(自分で大作といっちゃいかんのか)。題して、「力道山vs木村政彦戦がある限り、プロレスは不滅である」。『ヤマトタケル』や連合赤軍について原稿を書きながら、プロレスの原稿も書いてるんですね。でも、「右翼も左翼も歴史も、要するに、全ては格闘技である」と言ってた人がいますからね(私でしたかね)。

そういえば、『ヤマトタケル』の〈タケル〉というのは〈強い男〉という意味だ。クマソで一番強い男(クマソタケル)と闘い、「あなたは日本で一

番強い人だ。今日からは、ヤマトタケルと名乗って下さい」と言われて、「ヤマトタケル」になるんだ。いわば「タケル」はPRIDEやK-1の「チャンピオンベルト」のようなもんじゃ。この西征の帰り、『イズモタケル』と闘い、これも破っている。日本（ヤマト）最強の男（ヤマト）となったんだよ。…ということも現代書館の『ヤマトタケル』に書いた。

そうすると、力道山は「ヤマトタケル」になろうとして木村と闘ったのかもしれない。じゃこれは、「フォービギナーズ」じゃなくて、「フォー中級者」の『ヤマトタケル』で書いてみようかな。いけねえ。こんなことを書くと『ヤマトタケル』は不真面目な本だと思われちゃうかな。こんな〈遊び〉も少々あるけど、あとは、真面目な本ですから、ぜひ読んでみて下さいな。オワリ。暑い！

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年8月2日

中島らもさんが死んじゃった

(1) 「鈴木 of 襲撃に備えて武器を集めてる」と言ってた

中島らもさんが亡くなった。7月26日午前8時16分、神戸市内の病院で脳挫傷のため亡くなった。52歳だった。あまりに若い。「らもさんが亡くなった」と初めて聞いたのは7月27日(火)の夜だった。新聞記事を紹介するネットで知った。ショックだった。ガーン！と頭を殴られたような衝撃を感じた。そして、「やっぱりダメだったのか」と思った。重症だとは聞いていたが、何とか回復してほしい、そう思っていたのに。残念だ。悔しい。



夜中に、月刊「創」副編集長の荒井さんからFAXが入った。「らもさんが急逝したそうですよ」と。それで電話した。実は、8月7日発表の「創」（9月号）に、らもさんのことを書いたばかりだった。二人で撮った写真を入れて。「これから二人でいろいろやっていこう。『創』でも格闘技の対談をしよう、と新しい展開を予想させる原稿でしたね。それなのに追悼原稿のようになってしまって」と荒井さん。

そうなんだ。残念だ。「詳しくは次の号に書くとして、末尾でも欄外でもいいから、らもさんが急逝したことを書いて下さいよ。そして、心からお悔やみ申し上げます、と」。

「ところが、今日のお昼で校了になっちゃったんですよ。もう直せませ

ん」

そうなのか。8月7日に発売された「創」を読んだ人は、奇妙に思うだろうな。じゃ、ここで、経過だけを報告しよう。

格闘技の雑誌で、大きいのが三つある。『格通』（格闘技通信）と、『ゴン格』（ゴング格闘技）、そして『紙プロ』（紙のプロレス）だ。僕は『ゴン格』に毎月、コラムを連載している。「誰がために鐘は鳴る」というタイトルだ。ヘミングウェイの小説からとっている。鐘に「ゴング」と仮名を振っている。ボクシングや格闘技のゴング、そして雑誌名ともかけている。

『格通』は今月号がもうすぐ出るが、骨法道場の堀辺先生と漫画家の小林よしのりさんが対談をしている。「武士道」について語っている。僕も同席したが、とてもスリリングで、面白い対談だった。一水会の木村代表が紹介して、二人を引き合わせてくれたのだ。

さて、もう一冊の『紙プロ』だ。この最新号に、中島らもさんが登場していた。らもさんはプロレスや格闘技が大好きだ。それで、インタビューに応じていた。このことはこのHPにも書いた。らもさんは今、やたらと危ない武器を集めている。日本ではとても買えないものを通販で買っている。外国の、それも高価なものばかりだ。『紙プロ』の記者の前に、ズラリと並べて見せて、ひとつひとつ、使用法を説明する。「どうして、こんなものを集めてるんですか」と記者に聞かれ、らもさんは答えている。

「プロレス好きの鈴木邦男さんとかいてはるでしょう。ほら、右の。ああいう人に襲ってこられたら困るでしょう？ だから、いろんな武器を用意してます」

エッ？俺のせいなの。でも、らもさんとは口喧嘩だったことないし、襲う理由もない。まいったなーと思った。まア、本気じゃないだろうが。ギャグかな。親愛の情かな。

大体、らもさんとは一度しか会ってない。それも8年前だ。96年9月27日(金)の「朝まで生テレビ」に一緒に出たのだ。この時は、野坂昭如が司会で、出席者は、他に小林亜星とか黒川紀章。それに、小田実、山崎哲、辛淑玉、テリー伊藤、井沢元彦、嵐山光三郎、下村満子、宮崎哲弥、藤井良樹だ。「激論！こんな日本に誰がした！」というテーマだった。おじさん達が皆で、ワイワイ、ガヤガヤやっていた。黙っていると、終わるまで発言のチャンスはない。だから僕も必死になって、話に割り込もうとした。

ところが、らもさんだけは「我関せず」なんだ。全く発言しない。話の輪に入らない。それだけじゃない。別のことを考えているようだ。もしかした

ら、今朝生に出てるのも分からないのかな。小説の創作の世界にいるのか。ともかく、心がスタジオにないのだ。

普通なら、朝生は喋らない人はどんどんおいてゆく。黙っていたら最後まで一言も喋れない。しかし、この時の司会は野坂さんだ。優しい。だから、何とかからもさんに喋らせようとする。「これはどうですか」「ところで、らもさんは」と必死で何回も振る。しかし、らもさんは黙ったままだ。「ああ」とか「うーん」とかは言ったと思うが、意見は発言しない。こりゃ一体、何だと思った。最後まで発言しなかったようだ。じゃ、何のために出演したのか分からない。

番組が終わって、挨拶をした。初対面だし、「本をいつも読んでます」と言って。でも、「あっ」と一言いっただけで終わり。それが8年前の初対面だった。

それなのに、どうして『紙プロ』で僕は「仮想敵」にされたんだろう。こりゃ、「会いにこいよ」というサインかな、と好意的に解釈して、行ってやりました。ロフトに。ロフトでは2ヶ月に一回、らもさんが出演している。いつも超満員だ。それに、「ダ・ヴィンチ」の主催で、まずそこに載る。さらに、単行本になる。一回で三回も楽しみ、三回も稼いでいる。凄い。そしてロフトの帰りには次の回の券を売っている。前売りで2800円だ。高い。飲み食いしたら、軽く5000円をオーバーする。それでも熱心なファンが多くて超満員だ。

(2)中華料理店の2階でプロレスや武器の話をした。夜中まで

2ヶ月に一回やってるといったが、7月10日(土)にあるというので、行った。「酒が入ると酔っ払って分からなくなるから、始まる前に来て下さい。紹介しますから」とロフトの人は言う。紹介するも何も、僕は知り合いだ。でも、突然行って、「襲ってきたか。返り討ちだ」と通販ナイフで斬りつけられたら困る。だから、ロフトの人の指示に従った。「じゃ私も連れてって。らもさんのファンなの」という女子大生もいたので一緒に行った。彼女はらもさんの本は全部読んでるという。

で、ロフトは始まるのが7時半だ。じゃ、7時に行けばいいやと、行った。ところが、もう始まっている。客席は超満員だ。らも節が冴えわたっていた。喋り、わめき、時にはギターを弾いて歌い…と、サービス精神旺盛だ。例のナイフも持って紹介している。「この前のライブの時はうるさい客がいたんで、このナイフで脅してやった!」と言ってる。ぶっそうな話だ。

でも、何で7時でもう始まってたんだらう。ロフトは全て7時半開始と決まってるじゃないか。と思ってロフトのスケジュール表を見たら「18:30スタート」となっていた。この日だけは特別なんだ。何でも、早く終わって早く酒を飲みに行きたい。という理由らしい。「らもさん独演会」かと思ったら、正式には「らもはだ」というんだ。中島らもさんだけでなく、鮫肌文殊、大村アトムの三人で出る。それでい「らもはだ」だ。この日は「vol.17」となっていた。もう17回もやってるのか。凄い。稼いでいる。さらにこの日は、三木俊治さん（ひょうたんオーケストラ代表）がゲストで出ていた。

さて、6時半に始まった「らもはだvol.17」も9時半には終わった。それでやっと、楽屋に案内された。「あ、鈴木さん、初めまして」なんて言う、らもさんは。「あの一、8年前に会ってるんですけど。朝生で4時間もずーっと一緒でしたけど」「えっ、そんなはずないですよ」と断言する。じゃ、僕のうる覚えか。記憶違いか。不安になった。「じゃ、『初めまして』ですかね」と言ったら、らもさんの秘書が、「いや、確かに8年前に朝生でご一緒してますよ」と助け船を出してくれた。ホッとした。僕がボケたんじゃない。

それで、いきなりプロレスの話になった。いきなり、「力道山vs木村政彦戦」の話になった。僕は、この原稿を最近書いた。ビデオだって何十回と見たし、木村、力道山双方の書いたものも読んだ。村松友視の本も読んだ。だから、つい昨日のように語れる。ところが、らもさんも、ついきのうのように詳しく語るのだ。これには驚いた。

「力道山はフェアーに行こうとしたら、木村が突然、金的蹴りを仕掛けてきたんですよ。シュートになったんですよ。チクショーと力道山は思ったんです。だって、このままだったらやられるでしょう。それで、“そっちがその気なら”と思って、潰す気でやったんですよ。いやー、壮絶でしたね」

まるで、今、見てきたように記憶がしっかりしている。凄い人だ。さらに、猪木、長州…と、次から次にプロレスの話になる。周りの人もあきれていた。「これから、メシ食いに行くんだけど、一緒に行きましょうよ」。それについていった。らもファンの女子大生も大喜びだった。

コマ劇場の裏側の中国料理屋に入った。確か「小吃」という店だった。何と読むのか知らん。「小さいドモリ」かな。分からん。小さな店だったが二階は広い。そこで、痛飲した。いろんな珍しい上海料理を食べた。プロレスの話が終わったら次は武器の話だ。いろいろ持ってるが、お気に入りには10万

円で買ったジャワ・ナイフだ。大きい。円形だ。とてもナイフのようには見えない。大きな分度器のようだ。しかし、鋭利な刃がついている。それに指を通して、握る。親指はそのギザギザの所にあてるんですと、握ってみせる。「こう手の中にスッポリ入って、なじむんです。こう腹を突くでしょう。丸いから、腹中で回転して、内蔵をズタズタにするんです。これさえあれば、誰が襲ってきても負けません」と言う。

「ところで鈴木さんは武道をいろいろやってるんですよね。合計何段ですか？」

「いやいや。算盤が4級で書道が6級。それだけです。武道なんて、とてもとても。らもさんのナイフの前にはかないませんよ」と言った。「そうですか」と満足そうにナイフをしまっていました。でも、どうやって使い方を覚えたんだろう。そしたら、このジャワ・ナイフを買った時に、ティーチング・ビデオが3本もついてきたそうな。それを見て勉強しなさいと、いうことだ。それでマスターしたという。ヒャー、凄い。

(3)大麻店の主人、スティーブン・セガールの娘も来てたよ。最後の晚餐に

この時は中国料理店に10人位いた。「らもはだ」ご一行、ロフトの人。それに大麻料理店の主人。そして女性の藤谷文子（あやこ）さん。あ、大麻料理店の人は説明しとこう。「鈴木さん。久しぶり」と言われたけど、思い出せない。「うちで大麻食べたでしょう」。「あっ、下北沢の大麻料理店のマスターか。あの時はお世話になりました。おいしかったです」と礼を言った。

らもさんもいるから、大麻というと誤解されるかもしれないな。大麻は吸うのは犯罪だ。しかし、合法的に料理して、食べる方法がある。下北沢にその店がある。でも誰と行ったんだろう。「何かHPのオフ会だと言ってましたよ」。あつそうか。このHPの二代目管理人、赤坂細子が主催して、この店に来たんだ。きっとそうだ。ちゃうかね。細子さん？

もう一人紹介しとこう。藤谷文子さんだ。何年か前に大槻ケンヂと一緒に会った時、大槻の事務所にいたのでついて来ていた。「あっ、ゴジラに出てた女優さんですよ」「ちゃいます。ガメラです」「ですから、ゴジラとガメラが闘った」「いえ、ゴジラとは闘いません。ガメラだけが出たんです」

「でも、双子で、歌をうたって呼ぶと来るんですよね」

「それはモスラです」

と、話が全然かみ合わない。でも、「スティーブン・セガールの娘さんです

よね」「それだけは当たってます」

そうなんだ。お母さんは大阪で合気道の道場を開いている。そこに入門したセガールは、お母さんと結婚し、合気道をマスター。まもなく、ハリウッドから声がかかり、合気道を武器に、アクションスターとして大活躍。「ハリウッドで成功したら、母子をアメリカに呼ぶから」と言っていたのに、成功したら、金髪女と性交し、結婚してしまった。「私達、母子は捨てられたの」と、悲しい話でありました。でも、文子さんは、時々、お父さんと会ってるような。そういえば、目のあたりが似ている。

「僕も合気道をやってたんですよ」と、しばし合気道の話で盛り上がりました。1時位まで皆で飲み、食べ、さて、お開きとなりました。階段が急だ。ファンの女子大生は手をかして、「らもさん、気をつけて下さい」と心配り。らもさんは、酔って、よろよろしながらも何とか下まで降りました。

私はこれで帰りました。「9月に又、ロフトでやるから来て下さいよ。今度は横山ノックを呼びますから」とらもさん。握手をして別れました。その握手の力の強いこと。さすが、ナイフで鍛えているだけはある。ファンの女子大生はそのまま残り、皆と朝までカラオケをしたような。

「でも、よかったな。久しぶりにらもさんに会えて」と満足感で私は帰途につきました。プロレスの話や格闘技の話で盛り上がった。「じゃ、今度は『創』で対談しましょうよ」「いいですよ」と言ってくれた。又、「創」（9月号）に書いたが、突然、野村秋介さんの話になり、「野村さんの俳句はいいねー」と、野村論を語り合った。

ナイフで襲われることもなかったし、気さくな人だったな。これからいろいろ話し合えるな、と思った。ところが、これが最後の別れになるうとは。

この日から6日たった時だった。「らもさんが階段から落ちたらしいですよ」と、女子大生に聞いた。メールが来たのだ。酒を飲んで、階段を踏み外し、ズルズルと落ちたのだと思った。それじゃ、大したことはない。大丈夫だろうと思った。ところが、「そんな落ち方じゃない」と言う。背中からズルズルじゃなくて、頭からダイビングするように落ちたという。それで床で頭を強打して、重傷だという。そりゃ危ないなー、と思った。それが7月16日未明のことだ。神戸市内の飲食店で階段から転落し、同市内の病院に入院したという。

じゃ、次のロフトは中止かな。治るまで少し時間はかかるだろう、と思った。だって、らもさんに近い人から聞いたが、「時間はかかりますが、治るそうです」と言っていた。

それから10日たった。7月27日(火)、夜、ネットの新聞記事(読売)に出
ていた。「作家でミュージシャンの中島らもさんが死去」と。ショックだっ
た。「治るっていったのに」「でも、やっぱりダメだったのか」と、いろ
んな思いが交錯した。

27日に亡くなったのかと思ったら、26日②の午前8時16分。脳挫傷のた
め亡くなったと、出ていた。52才。本名 中島裕之(ゆうし)だった。密葬
は27に済ませ、告別式は行わず、近く有志による追悼ライブを行う予定だ
という。もう少し、引用しよう。

らもさんは、兵庫県尼崎市出身。大阪芸術大学卒。バンド活動とともに小
説、エッセー、脚本など幅広く活躍し、1986年に劇団「リリパットアー
ミー」を結成。関西を代表する劇団に育てた。

92年に「今夜、すべてのバーで」で、吉川英治文学新人賞、94年に「ガダ
ラの豚」で日本推理作家協会賞(長篇部門)を受け、直木賞候補にも数回
なった。

2003年2月、自宅に大麻などを隠し持っていたとして現行犯逮捕。同5
月に懲役10月、執行猶予3年の判決を受けたが、20日余りの拘置所生活を
テーマに『牢屋でやせるダイエット』を出版した。

同名小説を原作にした映画「お父さんのバックドロップ」(10月公開予
定)にも出演。4月に東京で行われた撮影では元気な姿を見せていたとい
う。

しかし「敵の襲撃から身を守るんだ」といって、あんなに武器を集めていた
のに。でも、酒と階段に負けてしまった。「ダメじゃないか。らもさん」と
叫びたい。こんなことなら、本当に襲撃してやりゃよかった。いや、「襲撃
するぞ!」と脅してやりゃよかった。そしたら、「おっ、やっぱり鈴木は襲
撃してくるつもりだな。ウカウカしとられん。武器の使い方もしっかりマス
ターし、練習しなくちゃ。よし、酒もやめて、トレーニングだ。飲み屋なん
かも行かんぞ! いつでも来い!」

と、気を引き締めて、準備してくれただろう。そこまで気が付かなかった
私が悪かったんです。申し訳ありません。これから、いろんな〈戦い〉を一
緒にやっていこうと思ったのに、残念です。らもさんの本は、これから全部
読んでみます。そして又、お手紙を書きます。ご冥福をお祈りいたします。

【追記】

(1)らもさんに『ヤマトタケル』(現代書館)を送ろうと思ってたのに、本当
に残念だ。この本には格闘技の話もあるから、きっと喜んでくれると思った

のに。「らもはだ」は2ヶ月に一回、ロフトでやっていた。次は9月11日(水)の6:30からで、もう前売券も売っている。ということは、らもさんがいなくとも、やるんだろう。横山ノックもゲストで来ると言ってたし。じゃ、「中島らもさんを偲ぶ会」にするのかな。知ってる人に皆、集まってもらって、ぜひ、そうしてほしい。

(2)骨法道場の堀辺正史先生が『ヤマトタケル』を一気に読んだ、と電話をくれました。「鈴木ワールドになってるね。今までで一番いい本だ。北一輝の書き方を思い出しました」と言っていた。光荣ですし、恐縮です。北一輝は、「日本の歴史は忠臣の歴史ではない。天皇を殺し、島流しにして、乱臣賊子の歴史だ。皇統だってキチンと続いてはいない」と言っていました。一見、自虐的です。しかし、「皇統連綿、万世一系というのは、これから将来に向けての民族の決意だ」と言います。いいですね。僕はただの自虐史観で、北一輝のような〈夢〉はありませんが、でも、少しでも近づけたらと思います。

他に、二人ほどメールが来たので紹介します。

「イラストが多いのはもちろんですが、なにより鈴木さん独特の文体のおかげで、するすると読めて、とてもおもしろいです。登場人物の名前が、いつも覚えられず、途中で読むのをあきらめていた『日本書紀』『古事記』ですが、これは絶対に最後まで読めると思います。今日は、これから弟橘比売命の話を読むところです。楽しみです」(Tさん)

「ヤマトタケル、とてもおもしろくて、おもしろい、おもしろいと思っっているうちに終わってしまった感じです。もっと長く読みたいです。神話を読みとく鈴木さんの視点がすごく斬新で、かたっくるしくなくて、読みやすかったです。これで神話を読んで好きになってくれる人が増えますネ」(Sさん)

他にも来てるけど、批判、罵倒が多いので紹介するのはやめときます。気が滅入るので。

【お知らせ】

(1)今日、8月2日はヤマトタケルの誕生日です。それを記念して『ヤマトタケル』(現代書館)が出版です。でも、早く出来たので、もう本屋に並んでますが。今年はおかげで、生涯で一番長く暑い夏になりそうです。他にも仕事があって、ヒーコラってます。いつもは全く仕事がないんですから、嬉しいことですが…。

(2)8月5日(木)7時、一水会フォーラム。高田馬場シチズンプラザ。猪野健

治さんの「9・11以降の右翼運動を概観する」です。

(3)高田馬場のライブ塾 03 (5348) 4767 の予定は。 8月11日(水)
有田芳生さんと「ニュースの裏側」 9月8日(水) 鳥井守幸さんと「週刊
誌よ、元気出せ」 10月13日(水) 宮崎学さんと「権力としてのマスメディ
ア」です。午後7時スタートです。

(11月か12月に、『ヤマトタケル』出版記念として、ヤマトタケルさんと
対談しようと思ってます。自分の心の中のヤマトタケルさんと。でも、これ
じゃ、独り言だと思われるかな。じゃ、ヤマトタケルの霊が降りるオバちゃ
んと対談しましょうか。でも、怖がって誰もこないかな。しょうがない。こ
れは中止だ！)

(4)8月7日、月刊「創」(9月号)が発売されます。私の連載は「連合赤軍
の逆襲」です。植垣康博、中村うさぎさんとのトーク。それに、中島らもさ
んのことを書きました。あと、立松和平さんと連赤の話をしたことも…。

(5)8月15日(日)は快樂亭ブラックさん(落語家)の「終戦記念寄席」があり
ます。午前11:30開場。12:00開演です。ブラックさんと川柳川柳さんの
「軍国落語」。白山雅一さんの「歌謡声帯模写」。梅田佳声さんの「紙芝
居」。スペシャルゲストは「反戦ストリップ」の沢口友美さん。おまけで私
も出ます。何をやるのでしょうか。入場料は前売2200円。当日2500円。オ
フィス 快樂亭へ。090 (3692) 3405。場所は、お江戸日本橋亭
(03-3245-1278)です。(地下鉄三越前駅A10出口。2分です)。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年8月9日

「終戦記念日」に向けて頑張ってます。原稿もトークも落語も ありますよ

(1)ヤマトタケルはこうして生まれた

久しぶりの新刊です。本屋に平積みされてます。嬉しいですね。でも、「歴史書」の所なんです。それも、「古代史コーナー」です。こういう所に置かれたのは初めてです。タイトルが『ヤマトタケル』（現代書館）だからでしょう。僕にしたら、むしろ〈現代〉を書いたつもりだったのに。三島由紀夫、森田必勝、野村秋介、谷口雅春、平泉澄…と、僕が影響を受けた人々について書くのが主眼でした。その原点にヤマトタケルがなったのです。

この本は2年かかったと言いましたが、実は6年ほど前から考えていたのです。その頃から、歌舞伎を見てました。随分と遅い開眼ですが…。民族派だと言いながら、歌舞伎も文楽も見たことがないアホだったんです。私は。驚きましたね。「あっ、物語はこうやって作られるのか」と思いましたね。それから、〈悪人〉が生き生きと活躍している。今の犯罪小説のように、事件を起こした人は捕まり、それで終わり。悪いことはやめましょう。といった薄っぺらな勧善懲悪はない。

又、忠臣蔵や、義経や、菅原道真や、いろんな人々が主役だが、現実の話の基にしながらも、思いっ切り、話をふくらませ、飛んでいる。実際の話よりも面白い。「もしそうだったら面白いのに」「こうだったらどうだ」といった人々の期待やイマジネーションが自由自在に入り、物語がそれ自体で息づき、動き回る。

だから、物書きとしての「勉強」のつもりでずっと見てました。「凄い世界ですね。今まで全く知らなかった自分が恥ずかしいですよ」と、現代書館社長の菊地さんと話した。時々、歌舞伎座で一緒になるからです。（他にも、快樂亭ブラックさんや立松和平さん、昇太さん、などにも会ってます

ね)。

そしたら、菊地社長が、「歌舞伎の本を書きませんか」と言う。「それは無理ですよ」と言った。僕は、見始めたばかりだ。夢中で見て、勉強している。「いくら図々しくても、それだけは出来ません」「いや、初心者が初心者用に書いたらいいでしょう。面白いと思いますよ」と言う。「いやいや、とても無理です。とてもそんな力はありません」

でも、時々、歌舞伎座で会う。相も変わらず、本の話をする。「又か」とウンザリする。そして時がたち、2年前のことだ。電話がかかってきた。

「ヤマトタケルをやりませんか。フォービギナーで」という。あっ、歌舞伎の話の延長線上だな、と思った。だから、「やっぱり無理ですよ。古事記や日本書紀だって口クに読んだことはないし」と、その場で断った。

しかし、菊地社長は諦めない。何度も電話や葉書を寄越す。段々と僕の心も変わってきた。たしかに、今の僕じゃ力不足だ。知らないことが多すぎる。しかし、「知ってることを書く」だけじゃ、自分の勉強にならない。これはいわば「アジビラ」になる。自分はこれだけのことを知ってる。お前たちも知れ！ という形になるからだ。こんなのばかりやっていると「物書き」として墮落する。ダメになる。

よし、じゃ、やってみようか。「ヤマトタケル」を。と思った。知らない世界だ。いや、名前は知ってるし、粗筋もザツとなら知っている。でも、詳しくは知らない。又、〈神話〉は、今の人々に何を伝えたかったのか。その辺も勉強してみようと思った。

それで、決断したのが、おとし (02年) の暮でした。そして、ヤマトタケルについて書かれた本を読みまくりました。「歴史読本」の関連も読みました。そうそう、あまりに詳し過ぎて、オッサンのオタクじゃないのかと思う本も読みました。又、古代史研究家の本も読み、ウンザリしたことも度々でした。他にどんな本を読んだかは、本文で紹介しています。鶴見俊輔さんの本には勇気づけられましたね。

実際に書いたのは、去年 (03年) の7月と8月です。学校が夏休みになるし、この機会を逃したら、もう書けないと思ったのです。ところが、本が出来するには、それから1年近くもかかったのです。イラストをお願いした清重さんが仕事で外国に行ってたし。又、同じフォービギナーズで『新選組』を出すことになり、こっちの方が時期的にもピッタリなので、先に出すことになり、僕の本は後回しです。

そして、今年の4月頃から、やっと編集作業に入ったんです。ゲラが出て

きて、この校正が又、大変でした。

そんなことを書いてたらキリがないな。で、出版日をいつにするか、になったんです。「8月15日」の終戦記念日がいいんじゃない、と菊池さんはいう。「いいですよ」と僕は言う。そのうち、「鈴木さんの誕生日は8月2日ですよね」「そうです」「じゃ、その日にやりましょう」

そんで決まりました。「8月2日発行」に何の意味があるのか、と思った人が多いようですが、そんなことです。自分の誕生日に出すというのはおこがましいけど、でも、本当はヤマトタケルの誕生日が8月2日だという説もあるし。たまたま、重なっただけですよ。

さて、8月2日に出ることになったのですが、実際は7月末には書店に並びました。歴史書、古代書のコーナーに。今日から私は「古代史研究家」です。

本の見本が出来たのは、7月20日(火)でした。前にも書きましたが、この日はジャナ専の授業でした。昼に終わって、家の留守電を聞いたら、「見本誌が出来たので、宅急便でこれから送ります。明日には届くと思います」と入っていた。ヒャー、早い！ と驚きました。でも、「明日」が待ちきれずに、「これから取りに行きます！」と電話して、飯田橋の現代書館に行ったわけです。

行ったら、会社の皆に、「おめでとうございます！」と言われました。嬉しかったですね。本を手にとり、感激でしたね。やっと出来たか。うん。表紙もいいし、きれいだし、いい本だと、うっとりしてました。

それにしても、校了してからは早かった。

だって、この一週間前の7月12日②の3時に、菊地社長にイラストの清重さん、それに僕の3人で会って、最後の校正をしたんです。何回も何回も校正してますが、神話の名前は難しい。いろんな書き方があり、仮名もいろいろだ。

基本的には『古事記』で統一するんだが、それも、諸説ある。そして、この時点でもまだ、直しがあったりして、バタバタしてました。

「谷口雅春先生は余り似てないね。もう少しやせてる」と僕が言ったら、イラストの清重さんが気にして、「じゃ、写真にしましょう」と写真にしちゃった。でも表紙の方は、かなり前に出来てるから、そっちは谷口先生のイラストは出ている。

又、「あとがき」の下に空白が出来ちゃった。どうしようか、ということになった。

僕が書き加えてもいいけど、それよりは、清重さんのイラストを入れた方がいいんじゃないかな。そう言ったら、「じゃ、やりましょう」「どんな絵がいいですかね」「ウーン。こうやって、3人でギリギリまで苦しんでる様子を描いたらどうですか」と言った。

「じゃ」と言って清重さんは10分位でスラスラと描いちゃった。それが、最後のイラストですよ。3人が必死で書いている。そして僕の横からはヤマトタケルが「ふーん」といった感じで、のぞき込んでいる。いやー、いい絵ですね。さすがはプロた°と感心しました。

(2)又、有田さんの本を読みまくりましたよ

では、有田さんの話にうつる。8月11日(水)は7時から、高田馬場のライブ塾で、有田芳生さんと僕のトークです。有田さんは日本テレビの「ザ・ワイド」に毎日出ています。いわば「ワイドショーの顔」です。日本中、誰でも知っています。世界中のニュースを扱っているし、全てのことを知ってます。何を取り上げ、何を捨てるか。その辺のことも聞いてみたいです。

しかし、超多忙な中を、引き受けて下さって感激しております。いい話が聞けるように、こっちも努力します。

有田さんは1952年生まれ。というと52才かな。出版社に勤めていて、86年にフリーになった。それからは「朝日ジャーナル」で統一教会の「靈感商法批判キャンペーン」に参加した。又、『週刊文春』にも引き続き、統一教会、オウム、赤報隊などについて書いていた。僕は、赤報隊事件について何度か有田さんに取材された。そのことは、「夕刻のコペルニクス」でも書いたと思う。かなり、きびしく質問され、私はオタオタしたことを覚えちやります。

あっ、落合の「ジョナサン」で取材されたんでしたな。そのあと、有田さんの知っているおでん屋さんがあるというので、連れて行ってもらい、ごちそうになりました。とてもおいしゅうございました。ありがとうございました。

有田さんといえば「オウム」「統一教会」の取材という印象が強いのですが、都はるみについての本もあります。又、テレサ・テンの伝記も書いてるそうです。『AERA』では阿木耀子、宇崎竜童、石堂清倫などの人物ノンフィクションをやってました。

有田さんの本を事前に読んで勉強しておこうと思ったんですが、昔書いた本は本屋さんになくって、図書館で注文しました。そして以下の4冊を読み

ました。

『現代公明党論』（白石書房・1985年）。

希望を断たれた失業中であって図書館に通いつつ完成させた最初の著作。いまから見ればきわめて不十分かつイデオロギーにとらわれた内容だが、第2部の「現代政治と公明党」では公明党と自民党との連立をすでに予測している。

これは僕の紹介ではなく、ネットに出ていたものです。誰が書いた文でしょう。有田さん本人かな。だって、「いまからみればきわめて不十分かつ」と謙遜してますから。それとも、他人が「勝手に謙遜」してんのかな。でも、いい本でした。教えられました。僕は、「生長の家」にいた時、生政連が出来、選挙の手伝いをさせられました。当時他にも神社本庁、立正佼成会など、政治に進出してました。「共産革命に対する危機意識」と共に、「公明党への危機感」が強かったのです。公明党がこのままの勢いで、政権をとったら大変だ。そうなったら、創価学会が「国教」になってしまう。そう思って脅えたんです。そんな時代に私も運動してたので、この本は、リアルに読みました。

『保守の冒険』（白石書房・1987年）。

フリーとなり最初に原稿を書かせてくれたのは『政界往来』『宝石』『噂の真相』だった。『朝日ジャーナル』で最初に書いた「〈御大典〉にかける京都〈産・学〉の打算」やシュミレーションノベル「昭和最後の日」など、マスコミで書きはじめた初期の原稿をまとめたもの。

しかし、このシュミレーションは、こんなこと書いて大丈夫だったのか？と思いましたね。よくぞ書いたものだと。右翼が出てきて暴れたりもするんですね。

『天皇をどう教えるか』（教育史料出版会・1988年）

渡辺堅二氏との共著。ここに収録した『朝日ジャーナル』の沖縄ルポは私をはじめ同地を訪れた衝撃を綴ったもの。2週間の沖縄取材は、集団自決で生き残った金城重明さんや天皇奉祝運動を沖縄で支えた人たちから話を伺うのが目的だった。

今気付いたけど、「私が…」と書いている。ということは、これらの本の紹介は有田さんが自分で書いたんだ。偉いね。大変だ。

『靈感商法の見分け方』（晚餐社・1988年）

『朝日ジャーナル』などを舞台に告発してきた靈感商法の実態を一冊にまとめたもの。実はある出版社から出すことがきまっていたが、統一教会と自

民党との関係を書いた所を外してほしいと求められたので原稿を引き上げた経緯がある。

しかし、ふざけた出版社ですね。そんなことを言うなんて。でも、晚餐社で出せてよかったですね。この出版社からは僕も昔、本を出しました。『僕が右翼になった理由。私が左翼になったワケ』（1400円）です。和多田進さんとの対談です。いつ出したのかな、と思って、本棚から探して奥付を見たら、「核時代52年3月3日初版第一刷」となっていた。何だこれは。勝手に元号を変えてるよ。それに「核時代」って何だ。そしたら、奥付の左横にこんな「ことわり書き」が出ていた。

〈奥付の年号を「核時代」とすることについて----。1987年12月以降に刊行しました小社発行物の奥付記載年号には「核時代」が使用されています。「昭和」的「平成」的年号の拒否と私たちが生存している今日の状況をふまえ、ジャーナリズムの果たす役割を忘れぬためとの思いをこめております〉

(3)僕も「核時代」に一冊だけ、本を出している

凄いね。1987年というと、昭和の終わりだ。この時から、もう昭和も平成も使わないという。それだけなら分かるけど、西暦も使わない。キリスト教的、アメリカ帝国主義的だからなのかな。

でも、「核時代52年」といわれても困るな。これも、僕の本なのに。「この対談本は、実は核時代52年に発行されました」と言わにゃならん。未来の話みたいだ。

でもでも、取り次ぎだって、書店だって困るだろうよ。商売が出来ない。だから、その点を慮って、核時代52年の下に小さくカッコで、（1997年）と出ていた。そうか。じゃ、7年前か。ウーン、そうかな。もっともっと前に対談したような気がする。15年位前に出た本じゃないのかな。それで、和多田さんの「あとがき」を読んだら、「1997年1月24日」になっていた。じゃ、やはり、7年前でいいのか。

でも、この「あとがき」の最後には、変なことを書いてる。

〈なお、私の発言中、「コギヤル」と「援助交際」は対談当時には存在しなかったはずの言葉で、本書刊行のために書き加えた

ことをお断りしておきます)

フーン、正確を期して「ことわり書き」を入れたんだ。どうでもいいような気もするけど。対談した時から、かなりたってグラが出来、その時に校正したから、「時差」が生まれたんでしょ。でも、そんな話もしたのかな。

この対談本は、出た翌年、つまり核時代53年（1998年）には初版第3刷が出ている。じゃ、売れたんだ。そういえば本屋で僕の他の本はないのに、この本だけポツンと置かれている所があるよね。題名で売れたのかな。「核時代」で売れたのかな。

さて、話を本筋に戻して、有田さんの本『靈感商法の見分け方』だ。僕は、この本が一番面白かった。たとえば、いろんな人達が訪問販売にくる。これは靈感商法（統一教会）だ、と見分けるには、こんな点に注意しなさいという。

〈話の途中で、しばしば「お父さん」「お母さん」という言い方をすることが多い〉

〈人相の話のあとに手相の話になる〉

〈「転換期」という言葉を使う〉

〈街を歩いていると、目的のはっきりしないアンケートを取りにくる〉

〈市民大学講座、カルチャーセンターという名称の催しにも注意〉

それから、「服装で見分ける法」も書かれている。

「アイシャドウは禁止。胸のあいてるもの、ノースリーブ、足が出るような短いスカートは男性の目を刺激し、目で淫行を犯させてしまい、罪となってしまうので禁止。髪はショートカット。短い方がスッキリするし、霊的基準が高まるとのこと…」

そして、「これがゲンチャン（原理）ルックだ」というイラストまで描いてある。原理研究会（統一教会）に「入会前」と「入会后」の違いも紹介していて、分かりやすい。とにかく、地味な服装だ。連合赤軍の女性兵士と同じだよ。派手な服や、イヤリングをすると、「ブルジョワ的だ」といって殺された。

資料編としては、実際の「勧誘」の時のマニュアルも出ていて、面白かつ

た。では、8月11日(水)に、有田さんからもっと詳しくお聞きしましょう。

8月15日(日)は終戦記念日です。又、「PRIDE」の決勝戦です。だからそれを見に行こうと思っていたのに。でも、半年も前に、ブラックさんと約束してたんです。だから、落語会に行きます。その「終戦記念寄席」のチラシが送られてきました。驚きました。こう書かれてました。

〈日本が泣いたあの日から59年。戦争を知ってる芸人と、戦争を知らないあいの子、右翼、元婦人自衛官の反戦ストリッパーが激突する不思議な落語会〉

ホント、不思議ですね。先週も紹介したと思いますが、出演は、
快樂亭ブラック（軍国下ネタ噺）

川柳川柳（軍歌落語）

梅田佳声（紙芝居）

白山雅一（歌謡声帯模写）

鈴木邦男

（スペシャルゲスト）沢口友美

8月15日(日)11:30開場12:00開演です。お江戸日本橋亭です(03-3245-1278)。どんなことに相なりますか。ご期待下さい。

さて、今、発売中の『正論』（9月号）を読んで又、ビックリ。出演者の川柳川柳（かわやなぎ せんりゅう）さんが出ている。「戦争を語り軍歌を叫ぶ寄席の爆笑王、とっておきの話」

そう、この人は、有名な爆笑王です。NHK教育テレビの「日本の話芸」にも出てました。

実は、この川柳さんの本、『天下御免の極落語』（彩流社）が出たんです。その出版記念落語会が8月12日に内幸町ホールであるそうです。そして3日後の8月15日には、ブラックさんの「終戦記念寄席」に出るわけです。楽しみですね。

あれっ、この川柳さんの本は彩流社から出るのか。ここは、永田洋子、植垣康博、などの連合赤軍本を出している所だよ。それに私の『新右翼』『テロ』『読書大戦争』も出している。と、驚きながら、今週も終わります。

【お知らせ】

(1)この夏は、大変です。『ヤマトタケル』を出したと思ったら、すぐに、次の仕事です。半年前に書き下したのですが、半分以上、書き直しさせられ

て。秋に出る予定です。必死でやってます。三度もダウンしながら、フラフラになって寝床の中で書いてました。さて、ちゃんと仕上がるのでしょうか。

(2)高田馬場のライブ塾 03 (5348) 4767 は、8月11日(水)有田芳生さんとトークです。「ニュースの裏側」です。9月8日(水)は鳥井守幸さん、10月13日(水)は宮崎学さんです。

(3)8月15日(日)は、本文にも書きましたが、「終戦記念寄席」です。いらして下さい。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年8月16日

三島由紀夫の仇討ちが始まった

(1)高森明勅氏の「わが皇室典範改正論」

高森明勅氏の「わが皇室典範改正論」が出てたので、『正論』（9月号）を買いました。よかったですね。おすすめですよ。「わが国と皇室の永遠を祈念して提起する」と書かれている。今、保守、右派の人達から言われているのは、「男系でなければならない」「そうでなければ天皇制はなくなる」という論理だ。

ところが、高森氏だけが、その〈主流〉に反論する。「男系主義の伝統を超えて。わが皇室典範改正論。双系主義の採用からその先の“応用”まで」と書かれている。

たしかに皇室はずっと男系によって皇位が受け継がれてきた。過去十代八方の女帝の存在も、この男系主義を変更するものではなかった。では今後も末永く男系主義を維持しうるか。残念ながら、それは困難だという。なぜなら、男系主義の長期存続を支えてきた最大の条件は庶系継承だった。つまり側室の皇子による継承があったからだ。歴代天皇125代中、ほぼ半数の60代が庶系だ。その庶系継承の可能性が、ほぼ閉ざされてしまったら男系主義は難しい。と言う。

中には「側室制度の復活」を言う人もいるようだが、とても無理だ。今の国民感情が許さない。時代は戻らない。

だから、皇室典範の第1条を

「皇位は、皇統に属する皇族が、これを継承する」

と改めたらいいと言う。男系に限るべきではないと高森氏は言う。これにより、「男系の男子」だけでなく、「男系の女子」も、「女系の男子」「女系の女子」なども皇位継承の可能性をもち得ることになる。この高森氏の論理は分かりやすいし、はっきりしている。

前に、このHPで紹介したが、三島由紀夫も同じことを主張している。それも、「憲法」にこう書けと言っているのだ。

〈天皇〉

天皇は国体である。

天皇は神勅を奉じて祭祀を司る。

皇位は世襲であって、その継承は男系子孫に限ることはない。

注目すべきは3番目だ。単に女帝を認めているだけでなく、女系をも認めている。高森氏と同じことを言っている。それも、今から34年以上前にだ。三島事件は1970年で、今から34年前だ。その前に、この「改憲草案」を書いている。35年前か。そして、驚くべきことに、この時は、すでに皇太子（当時は浩宮）さまは生まれていた。そして、秋篠宮（当時は礼宮）さまも生まれていた。つまり、男子の世継ぎが生まれ、万々歳の時なのだ。そんな時に、「女帝」「女系」を考えていたのだ。これを漏れ聞いた人々は、「三島は何て、不敬なことを考えているのだ」と怒っていた。

この提案については三島は孤立無援だった。誰も賛同する人はいない。しかし、35年先のことを見越していたのだろう。やはり天才だ。

高森氏の論文に戻る。

「現下の皇統の危機をもたらした要因として、占領下に十一宮家、五十一名の皇族方が皇籍離脱を余儀なくされた事実を重視すべきではないか」という意見について答えている。

たしかに、その通りだが、

「だが、半世紀余の歳月が流れる中で、十一の旧宮家の中、すでに七家が絶家、または男子の跡継ぎがゐない状態に追ひやられてゐる冷厳な事実も、あはせて直視しなければならない」

そして、こう言う。

「何故このやうな事態に立ち至ったのか。やはり庶系継承の選択肢がなければ、男系主義は早晩、行き詰まるほかないことが大きな原因となつてゐる」

「したがって、占領下の多数の皇族方の皇籍離脱の影響は決して軽視できないものの、庶系継承の可能性が消えたことの方が、男系主義を維持する上で、より致命的な障害となつてゐる事実気づくべきだ」

なるほどと思った。これは「占領軍の日本弱体化だ」と叫ぶことは簡単だが、たとえ、十一宮家が續いていても、今のような危機は生まれたという。じゃ、やはり三島だけが今の危機を見通していたわけだ。

前に、「週刊SPA!」に「夕刻のコペルニクス」を連載してる時だった。「楯の会」の1期生何人かに取材した。(これは、単行本には入ってない)。そのうち、初代の学生長・持丸博と、3代目学生長、本多清の話が印象深かった。(2代目学生長は森田必勝だ)。

「三島先生は将来のことが何でも見えてたんです」と二人は言う。皇室がどうなるか。国民生活がどうなるか。全てが見えていた。見えすぎるくらいに見えていた。

前にも書いたが、三島は、「自衛隊二分論」を言っていた。半分は祖国防衛隊、もう半分は国連警察軍にあげる。それは「日本を守る」義務はない。世界の平和を守る。

凄いことを考えていた。勿論、国連警察軍なんてない。でも、日本が出すことによって、実体的につくってゆく。日本人であるとか、天皇への忠誠とかもいらぬ。彼らは〈国際人〉として、日本をこえた次元で、世界の平和を守るというのだ。もしかしたら、一時的に「日本国籍」の離脱まで考えていたのかもしれない。

又、「自分は愛国心だとか、人類愛だとかいう言葉は嫌いだ」と三島は言っていた。日本人でありながら、ポツと抜け出して、上から日本を見て、あたかもおもちゃのように〈愛する〉なんて気持ちはおかしいと言っていた。又、「愛国」「人類愛」などの〈愛〉もインチキだとも言っていた。

「それだけ見えすぎてたんだから、死ぬしかなかったんでしょうね」と持丸氏は言っていた。この言葉は衝撃的だった。

女帝を認めたことについて聞いてみた。もしかしたら、「叩き台」は三島が書いて、あとは学生の意見が入ってるのかと思った。しかし、それはないという。「少なくとも、天皇の条項は全て三島先生の考えです」と本多氏は言う。

その時、学生から疑問が起きなかったのだろうか。〈女帝〉について。だって、当時、女帝なんてことを言う人はいなかった。ましてや皇太子(当時は浩宮)さま、秋篠宮(当時は礼宮)さまは生まれた後だ。世継ぎの不安は何もない。万々歳だ。「それなのに、どうして女帝のことを考えてるんですか?」と学生が疑問を出さなかったのか。

「いやー、出なかったですね。僕らがアホだったんでしょうね。そんな問題意識はありませんでした」

と、本多氏は正直に言っていた。

(2)あの衝撃的な「朝生」事件が単行本になるそうな

この改憲草案は「楯の会」の中の「憲法研究班」という部会で討議されていた。その研究班の代表は阿部勉氏だ。

阿部氏はその後、僕と一緒に一水会をつくり、副会長になる。学生時代からよく知っていた。改憲草案の全文は知らなかったが、「女帝」や「自衛隊二分論」のことは漏れ聞いていた。

その頃は、僕も、その〈革命性〉について知らなかった。「何を言ってんだ。三島さんも」「奇を衒っているのか」「マスコミ受けを狙ってるんじゃないか」と思った。「楯の会」の人を批判できない。僕だって全くアホだった。

再び、高森論文に戻る。高森氏は、女帝を認めている。又、「女系男子」も、「女系女子」も認めている。一番、スッキリとしている。

僕は「生長の家」の運動を学生時代にやっていた。「生長の家」の初代総裁は谷口雅春先生だ。しかし、男のお子さんはなく、娘さんにお婿さんを取った。その人が、第二代総裁の谷口清超先生だ。そして、お子さん（長男）の雅宣先生が、次の第三代総裁になる。「女系の男子」だ。これはごく当たり前だと思っていたし、何の不思議も感じてなかった。だから高森論文を素直に受け入れたのだと思う。

前に、テレビの党首討論会で女帝の話題になって、共産党は、「コメントを拒否します」と頑なにことを言っていた。しょうがない連中だと思った。

「天皇制を認めた上での女帝論議には反対だ」というなら、「天皇制を廃止すべきだ」と堂々と言ったらいい。あるいは、「個人的にはこう思う」といってもいい。いや、そんな「個人的」考えを許さないのだろう。この党はこわい。社民党の人が聞かれて、「女帝でいいと思います」と言っていた。そして、こう付け加えていた。「うちもずっと女帝ですから」。

これには笑った。この位のユーモアがあった方が、支持される。（いや、ユーモアはあっても参院選では支持されなかったか。かわいそうに）。

高森論文の出た『正論』（9月号）をパラパラとめくってみてたら、「セイコの『朝ナマ』を見た朝は」という記事が目についた。六月末の「徹底討論！ 皇室とニッポン」のことを取り上げていた。

〈口火を切ったのは、工藤雪枝女史。雅子妃と大学時代から仲良くさせて頂いてます〉と語り始め延々と無内容な発言を羅列、

痺れを切らした田原さんが「長すぎるんだ、あなたのは」とカット。それでも工藤さんは「皇太子殿下が（海外派遣されてる）自衛隊を激励するようなことがあってもいいのでは」と発言。その途端、宮崎哲弥さんが、「天皇を利用することになる」と批判)

工藤雪枝はさんざんだ。たしかに、朝生での発言はいただけない。しかし、これを書いている『正論』には、その工藤雪枝の論文も載っているのだ。高森明勅氏と並んで、女帝問題で、「皇太子殿下の岐路」と題し。たとえば、論文を書いてる人であっても、自由に批判し、こきおろす。いいですね。この姿勢は。これぞ『正論』だと私は思いました。

さて、この「セイコ」のお話は、次は、「孤軍奮闘した八木先生」。そういえば、八木秀次もこの『正論』には巻頭言を書いてる。だから、ほめたわけじゃないだろうが。

そして、「例の事件」にふれている。見出しもズバリと。

「民族派活動家はカルシウム不足？」

そうです。あの四宮正貴氏のことを言ってんですね。番組中に四宮氏が激怒したことで、「怒りっぽいのはカルシウム不足」と言ったんですな。見てなかった人のために、この部分を紹介しよう。

〈驚いたのは「民族派活動家」の四宮正貴さん。高橋教授に「そんなバカなことを言っちゃダメだよ、君」と気色ばみ、田原さんにも「そんな無礼な質問があるか」と激昂。「そんなことを言うから人格破綻と言われるんだよ」（田原）と返されるや、「人格破壊は君だよ、無礼な質問をして」「謝れ！」と臨界点を完全突破。四宮さんって、カルシウム不足??〉

「臨界点を突破」って、要するに、キレちゃったということなんでしょう。その「突破」前から、田原氏はじめ皆に、ジワジワといじめられていた。「ABCDラインで、追いつめられた日本のようだ」と評していた人もいた。そして、田原さんが、「聖徳太子を知ってる？」と聞いたのに激昂した。民族派の理論家に向かって、「聖徳太子を知ってるか？」はない、と思ったんだね。「じゃ、君はイエス・キリストを知ってるのか？」とやり合う。さらに、田原氏から「こんなことで怒るなんて、人格破綻だ！」なんて凄い言葉まで飛び出る。こりゃ、ひどいやね。

でも、このシーンは〈語り草〉になっている。もう〈伝説〉になっている。このシーン見たさで、「あのビデオ持ってない？」という話が居酒屋で飛び交っている。ロフトでは、コントのネタにされていた。「君、聖徳太子知ってる？」「キサマ！ 右翼に向かって何ということをするんだ。許さん！」と怒鳴る。

又、（前にも書いたけど）。知り合いの女子大生は、学校に行く前に、必ずこのシーンを見て、自分に気合いを入れて学校に行くそう。「よし！私も頑張ろう！」と。

いろんな活用の仕方があるもんですね。さらにこのシーンが話題になって、何と、この「朝生」が本になるそうです。凄いです。「朝生」で本になっているのは、「日本の右翼」とか、数冊しかありません。楽しみです。でも活字だけではあの場の雰囲気は伝わらんでしょう。だったら、巻末附録として、あのシーンだけをDVDにして付けたらよか。と思います。

そうそう、この「朝生」に出たあとの感想を四宮氏本人が『政治文化情報』（7月20日発行号）に書いてました。

〈多くの方々をご覧になったやうで、お電話やメールをたくさん頂戴致しました。また、ホームページにも翌日と翌々日にはあわせて一万人以上の人々がアクセスして下さいました。その後のアクセスが続き本稿執筆時点までで二万件以上になりました。有難う御座います。

小生が田原氏の発言に対して反発したことについて、多くの方々から御激励・御賛同・御批判・御忠告などを頂きました。ただでさへ顔が大きく声が大きいものですからどうしても目立ってしまひ、その上あのやうに大声を出したのですから、大きな反響と言ふか、驚きを与へたのでせう。「相手が田原氏だから構はない」と言ふ人が多かったやうです。しかしやはり興奮するのは良くないと反省してをります〉

(3)コナンと「楯の会」の仇討ちも始まった

8月5日(木)に一水会フォーラムがあって、講師は猪野健治さんでした。「時の人」四宮氏も聞きにきてました。「カルシウム不足なの？」と聞いたから笑ってました。「平成2年の『日本の右翼』の時も、小沢療子に怒鳴って

ましたよね」と言ったら、「はい、あの時からずーっと人格破綻です」と言って笑いをとってました。

しかし、HPのアクセスが二万件とは凄いですね。「カキコもあったんでしょ。どんなのがあったの？」と聞きました。そしたら、「激励もあったけど、批判、罵倒もあった」と言います。「たとえば？」と聞いたら…。

「デブ!」「ブタ!」「眼鏡ブタ!」といったもんだ、という。ヒャー、よくないね。「カキコ」は。どうして、こんな便所の落書きみたいなものを書くんだろう。名前を名乗ったら、こんなことは言わないのに、「どこが間違っている」「ここはいいが、ここには反対だ」と、キチンと冷静に論争すればいいのに。それをやらないで、いきなり、「ブタ」とか「デブ」だもんね。もしかしたらHPのカキコは日本を亡ぼすかもしれないね。

さて、今週のHPもこれで終わり。それで新宿のTSUTAYAに行く。刑事もの、推理ものは全部見ようと思って、予定を立てて、借りている。「刑事コロンボ」は50巻全てを借りて見た。今は、「モース警部シリーズ」（全25巻）を見ている。渋くて、なかなかいい。21巻まで見た。もう4巻だ。モースは中年警部だが、独身。趣味は読書とクラシック音楽。そんで、毎回、音楽や哲学の話が出てくる。知的なドラマだ。これだけでも勉強になる。日本の犯罪物とは段違いだ。（と自虐的になっちゃう）。

あっ、それとね日本の探偵ものも借りてる。「名探偵コナン」だ。子供用とあなどっちゃいかん。なかなか凄い。役立つ（人生にも。犯罪にも）。劇場版の8巻は見た。今、挑戦してるのはテレビ版だ。これは一体何巻あるのやら。百巻位あるんじゃないだろうか。「シリーズ1」の10巻を見た。「シリーズ2」の8巻も見た。「シリーズ3」の10巻、「シリーズ4」の10巻も見た。そして今、「シリーズ5」に入った。毎週4本ずつ借りて見ている。20本位まとめて借りて見たら早いんだろうが、本も読まにゃならん。何せ、「月30冊」のノルマがある。中野図書館、東中野図書館、ジャナ専の図書館からも借りてきて、ノルマを決めて読んでいる。いつまでたってもノルマがあって、学生みたいだ。

そうそう、「モース警部」を借りてる時に、会ったんですよ。その美女と。ある仕事をしてる人だ。その仕事には興味があったし、話を聞いてみたいな、と思っていた。そう思っていた時に会ったので、ビックリした。「思い」は通じるもんですな。「あっ、朝生で見えますよ」と言っちゃった。そんで、いろいろと仕事の話聞いた。とても興味深かった。もっと具体的に紹介したいんだけど、やめとく。個人情報保護。守秘義務だ。おわり。

【お知らせ】

(1)BBSでも、ちょっと紹介しましたが、元「楯の会」一期生の本多清氏が本を出しました。本多氏については、今回の「主張」でもちょっと書いてますが、「楯の会」の中心人物で、三島さんの信頼も一番厚い人でした。その彼が34年の沈黙を破って、本を出したのです。タイトルが変わってます。

『314』（毎日ワズ）で、1500円です。「さんいちよん」と読みます。その上に、「あなたが9+1=10倍輝く」と書かれています。何だ、これは、と初めは思いました。数字あわせのトンデモ本か、と思いましたが、違います。その証拠に、サブタイトルとして、「三島由紀夫の仇討ちが始まった」と書かれています。やはり、三島由紀夫の本なんです。三島由紀夫の予言なんです。読んでみて下さい。特に、三島さんと「楯の会」の訓練の話は興味深かったですね。「よど号」ハイジャック事件に三島が衝撃を受けたところなんか、「やっぱり！」と思ってしまいました。

(2)やはり、BBSで紹介しましたが、今、発売中の『格闘技通信』（9月8日号。（株）ベースボールマガジン社。700円）も凄いですよ。小林よしのりさん（漫画家）が格闘技雑誌に初登場です。骨法道場の堀辺正史先生と対談しています。『武道待望論』です。現在のイラク問題、愛国心について語ってます。又、現在の武士道とは何かについても熱く語ってます。格闘家も、そして格闘技ファンも、もっと目を広く、高く持て！ と言っております。

「日本人の誇りを取り戻せ！」と訴えております。これは画期的な対談です。総合雑誌でも、なかなかこれだけの対談はありません。読んでみて下さい。

(3)9月8日(水)7時から高田馬場のシチズンプラザで一水会フォーラムです。高池勝彦氏（弁護士）の「憲法改正への筋道」です。ぜひいらして下さい。

(4)9月8日(水)7時から、高田馬場のライブ塾（03-5348-4767）で、鳥井守幸さん（ジャナ専校長）と僕のトークです。『週刊誌よ、元気出せ！』です。ぜひいらして下さい。

アッ、今、気がついたんですが、一水会と同じ日ですね。お忙しい講師だから、こういうこともあるんですね。では、どちらかに参加して下さい。それとも、同じ高田馬場ですし、歩いて10分の距離です。両方参加してもいいでしょう。一水会は7時～9時が講演。9時から10時半までが隣の居酒屋「いろり」で二次会です。ライブ塾は7時～9時がトーク。そのあとそこで10時半まで座談会です。ですから、半分ずつ、出ることも可能です。多元的

な知の冒険に挑戦してみてもいいでしょう。

次回のライブ塾は10月13日(水)で宮崎学さんですよ。『権力としてのマスメディア』です。

(5)女帝問題で週刊誌、月刊誌はどこも特集してますね。僕も2、3取材されました。雑誌が出たら紹介しましょう。それとあの美人作家と対談しました。これも出たら紹介しましょう。

(6)『ヤマトタケル』（現代書館・1200円）は健闘しています。歴史コーナーに置いてあります。まだの方はぜひ読んでみて下さい。買って見て、つまらなかった、損したという人がいたら申し出て下さい。私がお金を返します。がんばって書きましたので、ぜひ、読んでみて下さい。

(7)今年、秋に出る単行本も必死でやってます。今年の夏は働きすぎですね。一生分の仕事を2ヶ月でやってる感じです。まア、たまにはいいでしょう。

(8)8月11日(水)のライブ塾は超満員でした。有田芳生さんの話は面白く、スリリングでした。ここまで喋っていいのかと思いました。詳しくは書けませんが、凄い話でした。それに有田さんの人柄の良さが出ていて、「又、やってくれ」と皆に言われました。来た人は本当に、トクをしたと思います。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年8月23日

リンゴを噛ったことで、人間の原罪が生まれ、コンピュータが生まれた

(1)アップル・コンピュータに宿る「アダムのリンゴ」

有田芳生さんはとてもよかったですね。8月11日(水)のライブ塾です。参加した人達も、「感動した」「とってもトクした気分」「ニュースの裏側が分かった」「又やってほしい」と言っておりました。

有田さんは日本テレビの「ザ・ワイド」に月曜から金曜まで出演しています。午後、テレビのスイッチを入れると必ず有田さんが出ている。「ワイドショーの顔」だ。ここには、世界中のニュースが集まる。これは凄い話だ。そのどれを採るか。どれを捨てるか。どうやって判断するのだろうか。又、どういう斬り口でやるのか。それも考える。まさに、「神の視点」が必要とされる。あらゆる情報が集まる。ニュースの裏だけでない。裏の裏の、そのまた裏まで集まってくる。「都市伝説」のような〈噂〉もある。「こんな噂があるが、本当なのか？」と視聴者からの問い合わせもある。そのたびに、真偽を調べて報道するそう。大変な仕事だ。



「でも、喋れないことの方が多いです」と有田さんは言う。毎日のそんな「喋れない」フラストレーションがたまっていたのでしょうか。この日は一

気に吐き出してくれました。「ニュースの裏側」というテーマになっていたので、頑張っただけで応えようとしてくれたのかもしれない。心優しい、そして人柄のいい人なんだ。

「ワイドショーのコメンテーターを数年前からやってます」と僕が紹介したら、「いや、もう10年になります」と言う。エッ、そんなになるの。統一教会の靈感商法やオウム取材をしていたし、フリーライターをやっている、それで、つい3年ほど前からコメンテーターをやっていると聞いたのに。10年か。僕らが「新しい」と思うのはいつまでも新鮮だからだよ。

コメンテーターというと、「こんな奴の話なんか聞きたくねえよ」と思う人が多い。そんな人ばかりをよくもこれだけ見つけて、テレビに出すものだと思う。でも、有田さんだけは例外だ。有田さんの悪口を言う人は誰もいない。喋り方もソフトで、謙虚だし、説得力がある。論争になっても激昂したり、キレたりすることは一切ない。いつも冷静だ。やっぱり人柄なんだろう。思想より前に、人柄だ。人格だ。これは、もって生まれたものだ。

「思想は動産だが、人柄は不動産だ」と言ってた人がいた。思想、考え方はあとから学ぶものだ。人柄は生まれながらのものだ。いわば親が残してくれた不動産のようなもので、ア・プリオリなものじゃわいな。あっ、難しい言葉を言っちゃった。ア・プリオリは先験的と訳されるんじゃない。その反対は、ア・ポステリオリだったかな。

蘊蓄ついでに話しちゃおう。先日、蘊蓄大魔王といわれる芸人さん（松尾貴史さん）と飲んでた。たまたま、人を食べた人の話になった。「あっ、かじるはバイト (bite) だな」と言った。biteの変化はbite (バイト)、bit (ビット)、bitten (ピトン) だな。最後は「ピトン」で、ブランド品になっちゃった。と呟いた。そしたら、傍にいた美人OLたち3人が、「バイトはバイト、ビット、ビットでしょう」と言う。「ピトンになんかならないわよ」。そうかな。仙台の高校ではそう習ったはずだったけど。（家に帰って辞書を引いたら、やはり私が正しかった。bite、bit、bittenでした）。

蘊蓄ついでに教えてやった。私が今、使ってるのはアップルだ。コンピュータのことだよ。アップルは日本語で林檎だ。だから、リンゴの絵が描かれてある。「でも、このリンゴ、一口、かじってますよ」と僕の傍らの主人が言う。そう、そこに神が宿るからだ。かじるはbiteだからだ。

「関係ないじゃん」と言われるかもしれないが、ちゃうんです。bite (かむ) はbit、bittenと変化する。過去形のbitは、名詞になって、「かんだもの」「小片」という意味になっている。嘘だと思ったら、辞書を引いてみん

しゃい。このbitというのは、コンピュータの〈単位〉になっている。1ビットとか2ビットとか、使うんじゃない。10ビットで1センチ、100ビットで1メートルになる。（そんなことはないか）。

だから、噛む (bite) とアップルコンピュータとは大いなる関係があるんです。つまり〈原罪〉です。だって、アップルコンピュータのリンゴを一口食べたのはイブです。あれ、アダムだったかな。イブが「食べなさい」と言って（それもヘビにそそのかされて）。言ったんだ。

そのリンゴを一口、biteしたら、神の声が聞こえてきた。「何をしとるんだ」と。あわててアダムはリンゴを飲み下そうとした。ところが、喉の真中で、止まっちゃった。それが「喉仏」になった。男の人は皆、ありますよね。だから、喉仏のことを英語では、「Adam's apple」というんです。「アダムが食べたリンゴ」です。リンゴの1ビット（食い切れ）が一つ入っているんです。

私もアダムとイブの子供です。ずっと遠い子孫です。ご飯を食べるたびに、喉仏が上下します。そのたびに懺悔します。「あっ、すみません。私の遠いおじいちゃんが、遠いおばあちゃんに騙されてリンゴを食べちゃって。申し訳ありませんでした」と謝っています。神様に。

(2)なぜ、「喉仏」というのか。喉に絡む仏教と基督教の因縁

ここで、クエスチョンです。では、「喉仏」はなぜ、喉仏というのでしょうか。喉に仏が宿ると思ったのでしょうか。そうなんです。「言霊（ことだま）」があるとでしょう。言葉は神なんです。何気ない言葉で人は勇気づけられたり、絶望したり、死んだりします。「いじめ」だって、ほとんどが言葉のいじめです。

その神である「言葉」を発するのが喉です。だから、喉に神が宿り、仏が宿るんです。そう信じたんです、日本人は。というのは、ちょっとオーバー。いやいや、本当です。だって、火葬が始まって、喉仏のあることを発見したんです。人の骨を拾っていたら、どうみても「仏」に見える骨があったんです。それは本当です。仏というよりも、「人が祈ってる姿」に似ている骨が見つかったんです。「あれっ、こんな骨はどここのやる？」と思って探したら、喉の骨だったんです。それで、この骨を「喉仏」と名付けたんです。そんな馬鹿なと思うでしょうが、大病院の先生に聞いたのですから間違いはありません。その証拠に、写真を見せましょう。この「主張」のあとに紹介したので、よく見て下さい。そして驚いて下さい。本当に、「祈ってる

姿」でしょう。

それにしても不思議ですね。喉仏は。西洋では「アダムのリンゴ」といい、キリスト教が宿っている。日本では「喉仏」といい、仏教が宿っている。こんな小さな部分に、キリスト教と仏教が共存してるんです。凄いことです。「生長の家」では「万教帰一」と言いました。全ての宗教は同じことを説いている。「人間は神の子である」「真理は人間を解放する」「神は愛である」…と。ちょうど道は違っても、富士登山にいろんな道があるように、同じ真理を目指している。そう言ったんですな、谷口雅春先生は。谷口先生のごことは私の『ヤマトタケル』（現代書館）にも書いておきました。谷口先生の『古事記と現代の預言』も紹介しました。日本の神話は〈現代〉を預言していたんです。それを言霊の面から解き明かしています。

そうそう、この『ヤマトタケル』の中では、アダムとイブの話も書いてます。さらに、この二人の子供（カインとアベル）の悲劇についても触れてます。人類初の息子は何と、「人殺し」なんです。カイン（兄）はアベル（弟）を殺してしまうのです。だから僕らは、「兄弟殺しの子供」なんです。リンゴを盗み食いした「罪人」の末裔であり、さらに「兄弟殺しの末裔」なんです。そんな罪深いのが私達なんです。自虐史観なんです。これほどの「自虐」はなかとです。でも誰も、「キリスト教は自虐史観だからけしからん。自尊の心を持て！」なんて言う人はいませんね。不思議です。

有島武郎は、「カインの末裔」という有名な小説を書いています。聖書の「兄弟殺し」を直接書いたわけじゃなくて、その「末裔」たる人間の悲しさ、切なさ、実情を書いたんですよ。

『ヤマトタケル』になぜ聖書の話が出てくるかという事です。ヤマトタケルは兄を殺しているんです。「兄弟殺し」が日本の神話と聖書に共通している。これも不思議な因縁です。そのことを考えてみたわけです。

それで、思い立って、北海道の岩内にある木田金次郎美術館に行ってきました。木田金次郎（1893～1962）は、岩内に生まれ、岩内を地盤としながら制作を続けてきた画家です。北海道の大自然を描き続けた人です。

実は、この木田は有島武郎が見出し、世に出した画家なんです。有島武郎の「生まれ出る悩み」のモデルになった人です。木田はある日、突然、有島の家を訪ねてきて絵を見てくれと言います。有島は木田の才能を認め、激励します。でも、その後、木田は郷里に帰り、絵を捨て、漁業に専念します。だめな奴です。でも、有島は、あきらめずに、励まし続けます。そして木田は立派な画家になるんです。

この木田金次郎美術館は10年前にオープンしました。とても立派なものでした。皆さんもぜひ行って見て下さい。札幌から車で2時間です。私は、札幌からレンタカーを借りて、自分で運転して行ってきました。8月2日のヤマタケルの誕生日は私の誕生日でもあります。そして車の免許更新の日でもあります。だから、更新記念のドライブですわ。実は、札幌にいる姉が病気で倒れて入院したので、見舞いに行ったのです。あまり会ってませんが、高校を退学になった時は、懺悔の教会通いをさせられ、その時に、毎日、付き添ってくれたのが姉でした。とてもお世話になったんです。私の人生は、全て「聖書」に基づいております。まア、それで、見舞いに行ったんです。でも、元気でホッとしました。又、孝行息子が付き添ってますし、大丈夫でした。

でも、でも、暑いんです、札幌は。何とこの日は33度でした。何だこりゃ。これじゃ何のために北海道に来たか分からんじゃないかと叫んでしまいました。（すみません。見舞いに来たんです）。病院に行ったら、冷房はない。「暑い、暑い」と病人が立ち上がって、ウロウロ歩いてました。北海道は涼しかったから、冷房のない所がまだまだあるんです。でも最近、北海道もヒート・アイランドです。

それに、我々、本土から来る人間も、失望します。何だ、猛暑の東京を脱出したのに、ここも猛暑かよ！と驚き、怒ります。中には、「憲法を改正して、北海道は一年中、22度にしろ！」といったアホな東京人もいました（私です）。それは無理な話です。それに憲法に決めたからといって、実行できるものでもありません。「だから地域冷房をすりゃいいだろう」と言う人もいますが…。そうそう、以前、井上周八さんと対談した時、井上さんがこの「地域冷房」の話をしたんですよ。井上さんはチュチェ思想（主体思想）研究会の会長さんです。「北朝鮮は正しい」「北朝鮮は理想の国だ」と今でも信じてる人です。人間を信じ、人間の未来を信じているんです。この人が、人類の文化、技術は進み、「地域冷暖房」が出来ると言っていました。

そうすれば、北海道は常に22度にする、ということも可能です。東京も、春と秋だけにする。夏と冬はいらぬ。ということも可能です。よし、やってもらおうじゃないか。金正日さまの力で。と思いましたが、今は出来ぬ。人間が賢くなって、世界が全て北朝鮮のように「正しく美しい国」になったら、出来るといいます。でも、世界中が正しく美しい国になり、人々は、皆正直な人間になったら、もう北朝鮮という国は存在しないと思いますけど。

しかし、井上さん、今はどうしてるんでしょうか。「拉致」を金正日が認

める前に井上さんと対談したんです。「拉致なんかありえない。やるはずがない」と言ってました。今は、どう考えているんでしょう。又、会ってお話を聞いてみたいですね。そして、『続・北朝鮮原論』を出したいですね。

(3)北の果てで、日共系と反日共系の武闘（舞踏）を見ただよ

では、話を岩内に戻します。木田金次郎美術館を見て、帰ろうとしたら、すぐ隣の広場で、「盆おどり」をやってました。露店が出て、若者たちも繰り出していました。「盆おどり」と「よさこい」をやってました。盆おどりは、テレテレしていて、なんか、やる気がないようでした。老人も多いし、振り付けも覚えてない人がいるし。

その点、「よさこい」は若者の踊りです。テンポが速いし、躍動感があるし。「盆おどり」と同じように「民謡」を原点としてるのですが、格好からして違います。

黒いシャツにズボン。それにハッピを着て、キビキビとしてます。何やら空手の演武のようでもあります。暴走族のような格好の人もあります。

そうですね、デモに例えるならばですな。「盆おどり」は日共系のデモですな。整然と行進するが、躍動感がない。そこにいくと「よさこい」は反日共系のデモですな。手をつないで道一杯に広がるフランスデモをやったり、スクラムを組んで、走り回る「ジグザグデモ」をやったり…。時には機動隊と衝突して乱闘したり…。

しかし、岩内で、美術館を見て、「聖書」を思い浮かべ、町の人々の踊りを見て、日共、反日共といった政治のことを連想する。凄い人ですね（あっ、私のことか）。

岩内の木田金次郎美術館のことを書いてたら、今、郵便がきた。なんやろか、と試してみたら、「札幌タイムス」だった。8月17日号だ。あれっ、岩内のことを考えてたから札幌の新聞が送られてきたのかな、と自分の「念」の強さに驚きました。頭の中は北海道モードで、いろんなものを引き寄せちよるとです。

で、札幌タイムスをパラパラとめくってたら、アッと叫んだ。『ヤマトタケル』の写真が出てた！それもカラーで。「超新刊書評」として。7段も。ヒャー、ありがたい。

「新右翼の雄、大胆不敵に神話の英雄描く。

時を超える奔放な筆、これぞ“鈴木邦男史観”？

凄い！「鈴木史観」になっちゃったよ。「司馬史観」みたいで、カッコい

い。よく、読んでくれてる。ありがたい。あっ、もしかしたら、これを書いた人は…と思い出した。去年の12月に札幌で辛淑玉さんと天皇制をめぐる討論会をやった。あの時、来て、記事を書いた人だ。嬉しくて、つい電話してお礼を言っちゃった。「著者から電話をもらうなんて」と向こうも恐縮していた。札幌の本屋で、偶然見つけたという。「普段、鈴木さんの本があるのは政治、社会のコーナーだし、歴史のコーナーにあるはずがない、同姓同名の人かなと思ったんです」と言う。

「いやー、面白かったですよ。鈴木さんの世界が出ている。ここまで書いて大丈夫かと、ハラハラしながら読みました」と言っていた。

いい書評なんで、このHPでも全文を紹介したい位だ。来週でもやろうかな。

そうそう、この記者と電話で話した時に、お礼に教えてやった。岩内の木田金次郎美術館のことを。「開館したことは知ってましたが、そんなにいいところですか？」と言う。

3階建ての立派な美術館で、きれいだ。よく岩内町で建てられたものだと驚いた。内部も充実してるし、見ていてあきない。

こんな素晴らしい画家がいたということは岩内町、いや、北海道の誇りだ。「だから、ぜひ行ってみなさい！」と教えてやった。東京の私が言うのも変だが…。

私が行った時は、「木田金次郎・画業の全貌」展をやっていた。「開館10周年記念特別展示」だという。「岩内スピリットの源流」と書かれている。うん、反日共系の「よさこい」も岩内スピリッツなんじゃろう。

木田金次郎が、いかにして有島武郎と知り合い、どういう交流があったか。詳しく書かれている。有島は小説家だが、絵も描く。実は、その絵を見て、木田は訪ねて行くんだ。「白樺派」の小説家は有島にしる、武者小路実篤にしる、理想家肌で、皆、絵を描く。

武者小路は九州に「新しき村」をつくり、理想の共同体を目指す。一緒に働き、一緒に文化運動をする。昼は働き、夜は音楽を聴き、本を読み、絵を描く。文化的な生活だ。ロダンの誕生日には「ロダン祭」をやったりする。

武者小路の絵は有名だ。（有島よりもずっと有名だ）。今だって、よく、食堂などにかかっている。トマトやナスやカボチャなどを描き、「仲よきことは美しきかな」と書いている。僕も、本のサインを求められると、真似をして、トマトやカボチャを描いて、「仲よきことは美しきかな」とサインした。最近本を出してなかったから、サインすることもなかったが…。

よし、『ヤマトタケル』では、書いてやろう。野菜と、「仲よきことは…」を。でも、ヤマトタケルはお兄さんを殺し、クマソタケル、イズモタケルを騙し討ちにしてるんだよね。じゃ、「騙し討ちは美しきかな」にしようかな。でも、これじゃ、いけんかな。

九州で、武者小路たちが共同体をつくった時、東京からは若い男女がドツと来た。それを見た地元の人たちが、驚いた。何だ、この人たはちは？と、思った。ハイカラな服装をした男女がドツと入居してきて、働いてるのやら、ダンスしてるのやら、音楽を聴いてるのやら分からない。何をしてるんだ、と思った。今なら、「オウムが来た！」といった感じでしょうな。それに、「武者小路」という小説家の名前も知らんのじゃ。「武者が来た！」
「武者が来た！」とって怖れたそう。暴れサムライが来たと思ったんだ。これは本当だ。伊藤聖の『日本文壇史』にも書いとったことだし。

【附録】

(1)8月15日(日)の「終戦記念寄席」も盛況で、満員でした。快樂亭ブラックさんの落語もよかったし、川柳さん、白山さん、梅田さんも面白かったです。沢口友美さんも華麗な踊りで、良かったです。最後は、アメリカに抗議し、白鳥になって飛んでゆくイメージでした。「ヤマトタケル」でした。そういえば、ストリップの源流はアメノウズメの命です。やはり神話の世界です。詳しくは来週書きましょう。

(2)8月18日(水)ロフトで、岡留安則さんと参議院議員一年生の喜納昌吉さんのトークがあり、聞きに行きました。喜納さんの気宇壮大な話に圧倒されました。終わって、誘われて近くの居酒屋に。「朝生」(朝まで生ビール)でした。

【お知らせ】

(1)9月8日(水)は7時からシチズンプラザで一水会フォーラムです。高池勝彦氏(弁護士)の「憲法改正への筋道」です。

(2)同じく、9月8日(水)、7時から高田馬場のライブ塾で、鳥井守幸さん(ジャナ専校長)と私のトークです。「週刊誌よ、元気出せ！」です。

これ以降は…。 10月13日(水) 宮崎学「権力としてのマスメディア」

11月10日(水) 二木啓孝さん(日刊ゲンダイ)。「夕刊紙の読み方・読ませ方」です。

(3)今、発売中の「サイゾー」(9月号)にコメントが出ています。「テレビも黙殺した危険ネタの追跡」特集の中で、「皇太子発言」についてです。他

には天野恵一、浅羽通明、原田実さんなどが語ってます。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年8月30日

『ヤマトタケル』の読書会をやります！ 9・15（水）に。愛 国心や歴史、教育について考えませう

(1)女帝問題をめぐる衝撃、ド迫力の「朝生」が単行本になった！

田原総一郎さんの奥さん、節子さんが亡くなられ、8月20、21日にお通夜、告別式が行なわれました。日本の政・財・マスコミ界のトップ1000人が参列しました。『FLASH』（9月7日号）にも、その模様が報道されてました。

「小泉首相から朝鮮総連最高実力者まで。田原総一郎愛妻・節子さん葬儀にズラリ並んだ日本のVIP」

というタイトル。首相はじめ自民の幹部、野党党首も全員来ておりました。政治家以外では筑紫哲也、古舘伊知郎、鳥越俊太郎などが来てました。

『FLASH』に写真入りで載った〈VIP〉は29人。この29人が日本を今、動かしているVIPです。その中に、「民族派団体一水会代表 木村三浩氏」も出てました。凄いですね。日本のVIP29人の一人です。

「鈴木さんと間違っただけでしょう」なんて謙虚なことを木村氏は言ってますが、間違いではありません。日本の民族運動を領導している第一人者です。又、イラクに行って人質を解放した功労者です。国民栄誉賞ものです。

「時の人」です。「旬の人」です。

焼香を済ませてから、木村氏、横山氏、四宮正貴氏と一緒に、築地で食事をしました。（葬儀は築地本願寺でやったのです）。この時、四宮氏が、「この前の朝生が単行本になるんですよ」と言っていた。今日（8月25日）、書店に行ったら、新刊書コーナーに平積みになっていました。装丁もいいし、よく出来ている。これは売れるだろう。それにPHPから出してるのがいい。

前に、平成2年にやった「激論・日本の右翼」も単行本になってるが、あ

の時はテレビ朝日が出版元だ。だから、そんなには売れなかった。今回はPHPだし、売れる本に作られているし、実際売れるだろう。

でも、活字だけだと、「あの時」の衝撃、迫力は伝わらないな。本に写真はあったけど、やっぱり、「あの時」のバトルは映像で見なきゃね。田原氏に四宮氏が喰ってかかった問題のシーンですよ。「聖徳太子、知ってる？」と田原氏に聞かれて、カチンと来た四宮氏が激怒し、猛然と噛みつくシーンだ。「何を言うんだ！無礼な！じゃ、君はイエス・キリストを知っているのか？」と四宮氏。「何もそんなに怒鳴らなくても。だから、人格破綻者と言われるんだ！」「無礼な！君こそ人格破綻者だ！」…と。そんなやりとりがあったんですよ。でも、いくら書いても活字ではあの迫力は伝わらない。本の巻末にDVDかCD-ROMを付けるべきだよ。「あの時」の映像だけ、5分位を。でも、そうしたら、何でこの5分だけを映像化するんだ！と抗議されるかな。「怒鳴ったシーンだけを売りものにして、晒しものになっている。人道的に許せない！」となるのかな。そんなこんなで、付けなかったんでせう。（でも、2ちゃんねるでは動く映像が見られるそうですよ。興味のある方は、そちらを見てみなせえ）。

さて、20日の通夜から帰ってきて、産経新聞を読んだ。一面コラムの「産経抄」は珍しく、戦場ジャーナリストを誉めていた。産経はイラク戦争には賛成だし、アメリカ支持、小泉支持だ。だから、イラク戦争の大義を疑うような人々は徹底的にこきおろす。人質になった人達にも、「自己責任」はどうした！と迫る。

しかし、戦場ジャーナリストの勝谷誠之さんのことは絶賛して書いていた。勝谷さんが最近出した『イラク生残（せいざん）記』（講談社・1500円）という本だ。本の帯にはこう書かれている。

〈亡くなった橋田・小川両氏とチームを組み、自らも武装集団に銃口を突きつけられた著者が、それでも現場に立たずには「発言しない」ことにこだわり続けた渾身の「戦場文学」！〉

「だからこそ書くことは、偶然『生き残った』私の義務なのだ」と勝谷さんは言う。そうか、それで「生残記」なのか。橋田さん・小川さんの葬儀の時に勝谷さんに会った。その前は、「連合赤軍・オウム」を取り上げた「朝生」で一緒だった。この時は、「今度、新宿でラーメン店を出したんですよ」と言っていた。その後、イラクに行き、橋田・小川さんと合流しようとしたが、二人はゲリラに襲われ殺されてしまった。この辺のことを、この本

では詳しく書いている。

表紙は、「フセインの穴」に入ってみた時の勝谷さんの写真が出ている。フセインが隠れていたといわれる穴だ。米軍はそう発表した。しかし、本当か？ 違うんじゃないかと思い、実際に行って調べてみたんだ。あとは本書を読んでほしいが、ただの食糧貯蔵庫じゃないか、と言う。フセインが隠れていたにしては狭すぎるし、無理がある。

これはイラクに詳しい木村三浩氏も、「この穴は違いますよ」と断言していた。米軍の情報操作なんだろう。それに私が思うに、本当に、この穴にいたのなら、「穴から引きずり出されるフセイン」の写真を撮って、世界中に配信するはずじゃないか。本当のところは、フセインが見付かった民家に、たまたま小さな食糧貯蔵庫があった。「もしかして、ここに隠れていたんじゃないか」「きっとそうだ」と伝言ゲームのように話が大きくなったのだろう。又、途中で意図的に話を捻じ曲げた人もいたんだろう。

もう一つ、勝谷氏が現地で調べたことがある。日本人の二人の外交官が殺された時、「これは米軍の誤射で殺された」という噂が流れた。噂じゃないな。実際に新聞や夕刊紙にも載っていた話だ。米軍の車が、「ゲリラか」と思って撃ってしまったというのだ。「うーん、ありうる」と思った。又、「反米好き」の人達もこの噂というか説に飛びついた。

しかし、本当のところはどうなんだろう。こんな「説」を言う人たちは、じゃ、実際に現地に行って取材したのかというと、それはやってない。おかしいだろう。それだけのことを言うなら、現地を見て、証拠を示せ！ と勝谷氏は言う。そして実際に行ってみて、多くの人に取材している。これは凄い。詳しくは本書を読んでほしい。

又、イラクに行く途中、武装グループに銃を突きつけられ、有り金を全て奪われている。凄い体験をしている。ひょっとしたら殺されていたかもしれない。又、ひょっとしたら、運転手は犯人とグルだったのかもしれない。とにかく、信じられない所だ。今のイラクは。そして、サマワの自衛隊にも行って取材している。

(2)勝谷誠彦さんの本には敵も味方も感動し、脱帽！

勝谷さんは橋田さん、小川さんとチームを組み、不肖宮嶋カメラマンとも行動を共にしている。イラク戦争を起こしたアメリカには批判的だ。でも、だったら、なぜ「産経抄」が勝谷さんを絶賛するのか。それは、イラクに行く前に残っていた「特異事態発生時行動指針」のためだ。もしイラクで事

故に遭って、人質になったり、死んだりしたら、こうしてほしいという「指針」「指示」だ。それは実に、スッキリしている。全ては自分の責任だ。

「ゲリラと交渉しないでくれ」「殺されても仕方ない。誰も恨まない」というものだ。

この点に、「産経抄」は感動したのだ。いや、この一点だけに感動して、この本を誉めたたえている。ちょっと紹介してみます。

〈イラク戦争については小欄とはやや主義主張や見解を異にするが、しかし『イラク戦争生残記』は出色の作品なのだった。

どう出色か。まず勝谷さんは自分の行動基準を明確にしている。「私は国家の『行くな』という意思に背いて、イラクへ出かけるのである。ならば何かが私の上に起きた時には、それなりの責任を自ら負うつもりであることを明記しておくのが、日本国民としての礼儀であろう」と書く。

そしてあらかじめホームページで、万一の際はすべて自分の責任であり、日本政府に多大の労力と国税を使わせたことをわびる〉

ここに「産経抄」は感動したのだ！ ほら見る！ イラク戦争反対の勝谷さんだって、「自己責任」といってるじゃないか。5人の人質たちは何だ！ 国家に心配をかけ、金を使わせながら、政府・自衛隊を批判している。勝谷さんを見習え！ という気持ちがありありと、ある。だから、他のことでは（本当はこれが大事なんだが）、意見がいくら違おうと、「いいよ、いいよ」と寛大に受け入れるのだ。

〈それはともかく、著者は、「フセインの穴」や「二人の日本人外交官殺害現場」を、自らも武装集団に銃口をつきつけられながら自分の目で確かめるのだ。

「フセインの穴」にはヘッドランプをつけてもぐりこみ、米軍発表の不審な点をいくつか挙げ、「フセインがわざわざここを選んで隠れたとは考えられない」という。当否はともかく、現場至上のジャーナリスト根性に脱帽するのである〉

「当否はともかく」といっている。これは大事なことだし、「産経抄」は米軍発表を信じるのだろうが、でも、「こんなことはいいや」と寛容に許す。なんせ勝谷さんは「自己責任」を言ってくれた人だから…と。それに、

勝谷さんを誉めるにはもう一つ理由がある。「週刊SPA!」で勝谷さんは連載をもっている。「SPA!」を発行している扶桑社は「フジ・サンケイグループ」だ。そういった「身内意識」もあるのだろう。（だから、誉めるというのは単純かもしれないが、少なくとも同じグループで批判はしない。）。

しかし、去年の2月に木村氏らと共に僕はイラクに行ったが、あの時だって、僕らは同じような「申し合わせ」をした。外務省から「行くな!」という勧告を受けて、それに逆らって行った。「国家に反逆して行くのだから、どんなことになっても国家の助けは求めない」と言って。「その時は、潔く死のう!」と塩見さんも言っていた。「イギなーし。その時は、裸になって、米軍に抗議のストリップを踊りながら死んでやる!」と、沢口友美さんも言っていた。

「人間の盾」になった人たちも同じだ。イラクに行った人たちは皆、同じような決意と覚悟で行ったはずだ。ところがあの5人は、人質になった。その時は、「ごめんなさい」「すみません」と言ってればいいのに、活動家が多かったから、つい、「一言」いってしまった。自衛隊が悪いとか、ゲリラも親切だったとか。又、人質の家族もヒステリックに政府批判をした。「自衛隊を撤退させてほしい!」と訴えた。又、支援する人たちにも、「これはちょっとな」と思う人たちもいた。

そんなこんなで、5人はマスコミからもバッシングされた。「自己責任」があるだろう。子供じゃあるまいし…と。それに比べたら、同じくイラクにいった勝谷さんのこの「自己責任」は立派だ。学べ!というわけだ。

でも、5人は「言葉」が不足だったんだ。適切な言葉を言えなかった。いや、不要なことを言いすぎたのか。いいたいことは、あとでゆっくり言ったらいい。皆に迷惑をかけたんだから、とりあえず、謝るしかないだろう。それだけのことだ。

勝谷さんの「自己責任」の潔さと、「SPA!」連載者という「身内の意識」もあってか、「産経抄」は絶賛していた。

でもなあ、私らだって、「自己責任」でイラクに行ったんだけどな、と思った。ちょっと、ひがんでいる。それに、私にも「身内」意識も感じてほしい。私だって、「SPA!」に6年間、連載していた。その前は、4年半も産経新聞に勤務していた。それ以来、34年間、一貫して産経新聞をとっている。勝谷さん以上に僕の方が「フジ・サンケイグループ」に貢献してるんだがなー。（テレビだって、フジテレビしか見ないし）。と一人でぼやいてしまった。

そしたら、元自衛官のストリッパー・沢口友美嬢もぼやいていた。ひがんでいた。「私も人質になればよかった」と不穏なことを言う。8月15日(日)に快樂亭ブラックさんの落語会があったが、そこで「反戦ストリップ」をやって、その後、ポロリと本音をもらしていたのだ。

人質になった5人は、帰国後、マスコミにバッシングされたが、それでも逆に一躍「人気者」「時の人」になった。皆、本は出しまくるは、全国で講演会に呼ばれるは…と。「講演会で稼いでるんだらう。(イラクからの)帰りの飛行機代を出せ！」と嘯みついていた週刊誌もあった。5人の中には、「冗談じゃない。自衛隊が行ったために我々は人質になったんだ。国家は我々に償え！」と賠償請求裁判を起こした人までいる。

沢口さんは、3度もイラクに行っている。ちょっとテレビに取り上げられたが、それだけだ。今は仕事も少なくて、地方を流れて踊っている。かいそうだ。「悔しい。人質になってたら、本を出し、全国で講演できるのに…」と言っていた。

そうだね、そしたら高遠さんと二人で、米軍と小泉に抗議し、「怒りのヌード」を週刊誌に出したらいい。高遠さんも、同じ仕事に誘っちゃえばいい。それで二人で「反戦ビューティ・ペアー」でも結成し、全国を回る。「歌と踊りと講演」で回る。うん、これはいいやね。

(3) 「人質コーナー」の本が売れてるね。がんばれ、日本！がんばれ！沢口

と、ここで新宿に行ったついでに本屋に入ってみた。やっぱり、ありましたね。「イラク人質コーナー」が。目についただけで…。

高遠菜穂子『愛しているって、どう言うの？』（文芸社）

『戦争と平和』（講談社）

安田純平『囚われのイラク』（現代人文社）

今井紀明『ぼくがイラクへ行った理由』（コモンズ）

『自己責任』（講談社）

渡辺修孝『戦場イラクからのメール』（社会評論社）

これで4人か。もう一人いたな。あっ、郡山総一郎さんだ。ここではなかったが、本を出してるのかもしれない。

それに、亡くなった橋田信介さんの本があった。

『イラクの中心でバカとさけぶ』（アスコム）

『戦場特派員』（実業の日本社）

高遠さん、今井さんなんて二冊も出してるよ。凄いね。それに皆、売れて

いる。沢口さんが悔しがるのも分かるね。でも、人質になっても、帰ってこれればいい。そうしたら、本も出せるし、全国で講演もできる。橋田、小川さんのように、いきなり殺されたりしたら、それも出来ない。かわいそうだ。

そうだ。橋田・小川さん殺害について奇妙な噂がある。「これはやり方が違う。ゲリラとは別のグループではないか」という人がいる。「アメリカに出ていってもらいたい」というゲリラがやってるのには不自然だという。病院を襲ったりして、死んでるのはイラク人ばかりだ。又、日本人をいきなり殺している。これではゲリラへの反撥が強まるだけだ。

そう、この「ゲリラへの反感」を引き起こすために実はアメリカのCIAがやってるのではないか。というのだ。これはイラクに行った何人かから聞いた。マスコミにも一部、出ている「説」だ。

つまり、イラクで何でもいから破壊活動をする。それで、「ゲリラのやり方は許せん。やはり米軍が必要だ」という方向に世論操作しようとしている。というのだ。日本人の二人の外交官は米軍の誤射だった。しかし、そのあとの、橋田・小川さんはこの謀略グループがやった。それだけではなく、無用な殺戮を続々とやっている…と。

勝谷さんに会った時、この疑問をぶつけてみた。「それはありません！」とはっきりと否定した。「ゲリラも急激に変わったんです」という。本人も、銃を突きつけられた体験がある。説得力のある話だ。

「ちょうど明治維新の日本のようなもんですよ。幕府はいくら止めても、各地で尊皇攘夷の運動が起こり、暴走したでしょう。生麦事件のように外国人を斬り捨てたり…。同じようなことが、今、イラクでは頻発してるんですよ」と。なるほどと、思った。だったら、なおのこと、米軍は撤退した方がいい。自衛隊も。

ということで今週はおわり。先週言ったように、「札幌タイムス」に載った『ヤマトタケル』の書評を次に紹介したい。



超新刊書評

鈴木邦男、清重伸之著

『ヤマトタケル』

新右翼の雄、大胆不敵に神話の英雄描く

時を超える奔放な筆、これぞ“鈴木史観”？

関係者には失礼ながら、現代書館の「For Beginners」シリーズは翻訳物だけの企画なのだとずっと思っていた。本書の発行を知ったのもまったくの偶然である。

で、改めて同社のホームページでそのラインナップをひと通り眺めてみて驚いた。こんなひとも書いてたのね。思いつくまま列挙すれば、遠藤誠（22『般若心経』ほか）、太田竜（23『自然食』）、竹中労（31『大杉栄』）、猪野健治（42『右翼』）といった調子である。また、知ってるひとは知ってることだが、本道出身のマンガ家に平口広美というひとがいて、後にアダルトビデオ男優などもやったりする異色の絵描きなのだが、この画伯が26『冤罪・狭山事件』の絵を担当していたりする。どうも一筋縄ではいかないシリーズだったらしい。

そして、98冊めにあたる本書で鈴木邦男の登場となる。どういう経緯で決まった企画なのかはよくわからないが、この取り合わせを考えたひとは天才である。面白くならないわけがないからだ。これは、ヤマトタケルを題材にした映画『日本誕

生』（1959年、稲垣浩監督）を観て、学校に提出する感想文に「嘘っぱち」「下らない」と書いた高校生が（164ページ）、還暦を過ぎてその主人公と再会する物語だ。

それにしても、ここまで自在な筆でいいのだろうか。『古事記』や『日本書紀』はもちろん、梅原猛や鶴見俊輔、右翼の中村武彦や平泉澄、果てはヤマトタケルが登場しない橋本治の小説までを縦横無尽に引用し、神話の人物を甦らせるペンは痛快だ。さらに猿之助のスーパー歌舞伎や小林多喜二まで登場し、随所に自身の右翼運動の日々や連合赤軍事件などの現代史もからめている。若き日の野村秋介とのツーショットまで収めている（101ページ）。

登場する主人公は、架空の人物であると同時に実在の入だ。人間離れした英雄であると同時に人間くさい青年だ。単純かつ複雑なその人生を“鈴木史観”で辿る著者の筆は、自在すぎて時に危うい。東征の際に草那芸剣を持っていくのを忘れる主人公を「ドジ」と表現し、すかさずこう続ける。

…天皇の皇子にドジなんて言っちゃ、右翼に襲われちゃう（あっ。僕が右翼か。じゃ大丈夫だ…

（130ページ）

ここで笑わない読者はいないだろう。だが、それどころではない、主人公を父・景行天皇から愛されなかった不幸な御子と表現した時、隣のページに今上天皇のイラストを添えて「そこまで言われると困るな～」と言わせる反則技には、一瞬どきりとする（159ページ）。

「ビギナーズ」は言うまでもなく、たぶん研究者も一日置くだろう自由な伝記は、案外スタンダードになるかもしれない。「皇室の方々にも読んでもらいたい」（174ページ）って、けっこう本気かも。

（小笠原惇）

8月2日発売、現代書館、本体1200円

【お知らせ】

(1)9月8日(水)7時から一水会フォーラムです。高田馬場のシチズンプラザです。高池勝彦氏（弁護士）の「憲法改正への筋道」です。

(2)同じく、9月8日(水)高田馬場のライブ塾 03(5348)4767 で、鳥井守幸さん(元「サンデー毎日」編集長・現ジャナ専校長)と僕のトークです。テーマは「週刊誌よ、元気出せ!」です。鳥井さんは、以前、よくマスコミ人を集めて、毎月勉強会をしていて、その時、野村秋介さんを講師に呼んで話してもらったことがあるそうです。凄いですね。経団連事件の話を中心にしてもらったそうです。「その時は鈴木さんも一緒に来てたよ」と鳥井さんに言われました。完全に忘れていました。いかにですね。当日、詳しく聞きたいと思います。

「サンデー毎日」をやっていた時は、実に果敢に闘い、「イエスの方舟」の時は、同行取材しました。さらに、警察に追われてた彼らを毎日新聞の寮にかくまってやったりしたんです。そのことで、後に警察から取り調べを受けています。あれは今から考えても警察のやりすぎだ。しかし、敢然と闘ってたのは「サンデー毎日」だけだった。他にも闘いの記録はある。当時は、そんな話をじっくりと聞いてみたいです。

(3)この一週間後の9月15日(水)、同じライブ塾で、「ヤマトタケル読書会」を緊急にやることになりました。7時からです。『ヤマトタケル』を読んだ人も、まだ読んでない人もいらして下さい。車座になって本を読み合い、お喋りをしませう。本がない人も、当日買えますから大丈夫です。

(4)ライブ塾は、この後は、10月13日(水)が宮崎学さん、11月10日(水)が二本啓孝さんです。

(5)「三島由紀夫と野村秋介」を連載している「月刊タイムス」は8月は休刊。次は9月13日発行です。連載の第3回「野村秋介と新井将敬」が載ります。9月6日発売の「創」も夏でお休み。次は10月6日発売です。

(6)先日、雑誌で中村うさぎさん(作家)と対談しましたが、面白かったです。鋭い人でした。教えられました。雑誌が出たら紹介します。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年9月6日

オリンピックの閉会式で考えた。〈時間〉、〈空間〉とは何か。猛暑の中で猛烈に思索した

(1) 『ものぐさ精神分析』を30年ぶりに読み返して、考えた

オリンピックの閉会式は、オリンピック選手村で見ましたよ、私は。「えっ、アテネに行ったの？」と早合点してもらっては困る。40年前、東京オリンピックの時につくられた「選手村」に泊まって、河合塾コスモの合宿をしてたんですよ。神宮橋にある。今は、「国立オリンピック記念青少年総合センター」という。

8月29日(日)から30日②にかけて、この旧選手村で合宿をした。牧野剛先生と私の「基礎教養ゼミ」の合宿だ。30人近くも生徒が集まり、泊まりがけで勉強した。牧野先生は、難しい本をテキストにやっていた。森嶋通夫の『思想としての近代経済学』（岩波新書）。それに、宇野弘文「ケインズ『一般理論』を読む」（岩波セミナーブックス）。宇野弘文著作集4『近代経済学の転換』（岩波書店）。私は、皆さんの要望に応じて、私の『ヤマトタケル』（現代書館）をテキストにやりました。自分の本を読み合うなんて恥ずかしくて嫌だったんだけど、牧野先生も生徒も「やれよ」というもので、仕方なくやりました。でも、分かりました。自分の本だと思うから恥ずかしいので、客観的に、突き放して見ればいいんですね。皆で読みながら、私が時々、解説してやりました。

「こんなこと考えるなんて、この著者はアホですね」

「いやらしいですね。この著者は」

「おっ、こんなことを考えるなんて凄いですね。天才かもしれませんね。著者は」

と客観的にコメントしてあげました。皆、喜んでおりました。この本の次のところを読みました。

- 「1.偉大な父・景行天皇」
- 「2.凄惨な兄殺し」
- 「3.もう一人の自分を殺したのか」
- 「4.女装して熊曾を討つ！」
- 「5.敵からもらった称号『ヤマトタケル』」

と、第5章まで読んでしまいました。

9月15日(水)には「ライブ塾」で、やはり『ヤマトタケル』の読書会をやるので。では、この時は、続きをやりましょう。「第6章」の「卑劣にも、出雲建を騙し討ち」からだね。だから、ぜひ、皆さんもいらして下さいませ。

『ヤマトタケル』にばかり時間がかかったので、私は、これ一冊で終わった。本当はもう二冊、テキストを準備し、コピーしてもらってたんだが、これは後期の授業が始まってから使いましょう。二冊とは…。

勝谷誠彦『イラク生残記』（講談社）

岸田秀『ものぐさ精神分析』（青土社）

だ。『イラク生残記』のことは、先週のHPで紹介した。じゃ、ついでだ。岸田さんの『ものぐさ精神分析』の方も、紹介しとこう。コスモの生徒も、アウトラインを読んどくと便利でしょう。授業は9月9日(木)から始まるし、予習にもなるだろう。

というわけで、このHPは、いろんな所へ自由自在にリンクしていく。なんせ、アップルコンピュータだから（と意味の分からんことを言う）。では何で今頃、『ものぐさ精神分析』を読んでみたか。そんで、何で、コスモの授業のテキストにしようと思ったか。この本のどこに感動し、このHPで紹介する気になったか。それらの点について書いてみよう。

あっ、これは昔、読んだなと思った。でも12年も前の本だ。もう一度読んでみようと思った。それに12年前は、著者のことは全く知らなかった。将来会うことになるとも思わなかった。ましてや、ロフトで一緒に「幻想まっしぐら」というトークをやるとも思わなかった。

個人的に知る前は、多分、読み方も違うんだろうと思った。それで読んでみた。岸田秀さんの『ものぐさ精神分析』（青土社）を。でも変だ。この本はもっと前に出たんじゃないのかな。奥付には1992年6月10日第一刷発行と出ている。しかし、この次の頁には「岸田秀コレクション」として、11冊の本が紹介されている。この『ものぐさ精神分析』はデビュー作だ。続いて出た『二番煎じものぐさ精神分析』『出がらしものぐさ精神分析』『黒船幻

想』…と、紹介されている。

つまり、「岸田秀コレクション」として主要著作がまとめて発行し直されたんだ。それが12年前だ。

では、『ものぐさ精神分析』が初めて単行本として発行されたのはいつか。「あとがき」の日付は昭和51年（1976年）11月になっている。28年前か。「あとがき」にはこう書かれている。

「本書は、1975年の1年間、『ものぐさ精神分析』と題されて『ユリイカ』に連載されたものを中心とし、そのほか『現代思想』などに掲載されたものを集めたものである」

つまり、29年前に書かれたものだ。そんなに昔なのか。ということは、僕が『腹腹時計と〈狼〉（三一新書）を書いた年だ。つまり、デビュー作を出した年は同じなんだ。でも、その後の差は段違いだが。

そして、この29年前の本を読んで驚いた。これは文句なしに名著だ。岸田理論のスタートにして、「完成」だ。もうここに「全て」がある。このことに驚いた。このデビュー作に、エッセンス`は詰め込まれている。いわば、岸田理論の〈原液〉がここにはある。それを基にしながら、29年かけて、いろんな分野に適応させて、それらを大系化をしてきたのだ。

(2)いいのかよ。難解な本に、「女子学生への恋文」なんか入れて

今、もてはやされている「史的唯幻論」も、「性的唯幻論」「恋愛論」「擬人論」も、「言語の起源」「現実と超現実」も書かれている。又、「心理学無用論」や、「心理学者の解説はなぜつまらないのか」という文もある。犯罪が起きるたびに心理学者が偉そうにコメントしている。つまらないし、下らない、とこき下ろしている。だから「心理学者はいらないと言われるんだ」と言う。29年前もそうかもしれないが、それ以降の方がずっと当てはまる。とすれば岸田さんは未来を予言していたのだろう。まるで三島由紀夫のような人だ。

又、こんな難しい論文だけでなく、巻末には自作の詩も載せている。なんせ若い時は詩人になりたいと思ってたそう。だから詩の腕前もプロ級だ。

しかし、読んでみて、ぶっとんだ。こんな詩を載せていいのか、と思った。だって、「片想ひ」という詩には、こんな但し書きが付けられている。

「和光大学人文学部人間関係学科のある女子学生に捧ぐ」

この時は、岸田さんは勿論、和光大の教授だ。そして教え子の一人に恋をし、その恋歌を、青土社から出てるカタイ本に入れているのだ。こんなこと

ありかよ、とビックリした。島崎藤村の「初恋」のようだ。岸田さんの「片想ひ」はこう始まる。

いまだ19の春浅き
穢れを知らぬをとめこの
黒髪匂ふ花の香に
乱れし熱きわが心

もとより恋の苦しみを
忍ぶ宿命（さだめ）は変わらねど
せめて君がひとときの
情（なさけ）にわれをとどめかし

さらに恋情は延々と続く。29年前といえば41才の教授と19才の女子大生の禁断の恋か。「片想ひ」というけど、相手は知っていたはずだ。そして、二人の恋はどうなったのだろうか。あるいは、この恋も〈幻想〉だったのか。

こんな大胆な恋愛詩を発表して大学で問題にならなかったのか。いや、あけっぴろげにしてるから、かえって大丈夫だったのか。だって、岸田さんはファンの女子大生や卒業生が多い。「接吻して!」とか、「胸をもんで」と言い寄って来る女性も多い。凄いもて方だ。又、それにキチンと応えている。偉い人だ。普通なら、「セクハラといわれるんじゃないか」「スキャンダルになるんじゃないか」と恐れて、やれない。それなのに、堂々と岸田さんはやる。勇気がある。「両性の合意に基づいているんだから、セクハラでも犯罪でもありません」と実に堂々としている。そして接吻してやる。胸をもんでやる。立派だ。

さて、この本のことだ。岸田理論はいままでこの「主張」でも何度か紹介した。「人間は本能の壊れた動物である」とか、「この世界は医者のない精神病院である」とか、ズバリと言い切る。又、歴史についての発言も多く、「日本は黒船によって強姦されたのだ」と言う。それらのことごとくが、実はこの本にすでに収められている。昔、読んだはずなのに、すっかり忘れていた。僕がアホだったんだ。又、29年前に、岸田さんと知り合うこともなく、「知り合いの人の本」という親近感もないから、読んでいても余り頭に入らなかったのかもしれない。

ウーン。実は、これ1冊読むと、その後の岸田理論は全て、ずっしりと詰

まってるんだね。それだけ濃い本ですよ。気がつかなかったが、「吉田松陰と日本近代」という論文もあったんだ。教えられました。「吉田松陰が好き」といった女性がいたよね。ぜひ読んでみんしゃい。あと、「擬人論の復権」という論文は、確か大学入試に出たんじゃないかな。だから、受験生にとっても必読の書だよ。

今回は一つだけ、集中的に紹介しよう。「時間と空間の起源」という論文だ。「初出誌一覧」を見たら、『ユリイカ』75年9月号となっていた。まず、こう言う。

「時間は悔恨に発し、空間は屈辱に発する。時間と空間を両軸とするわれわれの世界像は、われわれの悔恨と屈辱に支えられている」

名言ですな。哲学的名言ですな。凄いですな。人間は悔恨があるから時間を持ち、歴史を持つんですな。動物は本能のままに生きてるから、悔恨がない。歴史もない。人間だけが歴史を持つ。

無意識においては、抑圧がなく、すべてが可能であり、空間の障害も存在しない。人間が時間を知り、歴史を持つようになったのは、抑圧する動物だからだ。ライオンは、ウサギを前にして、腹は減ってるが、今回は我慢しようとは思わない。食欲を満足させるか餓死するかだ。そのいずれかしかない。動物はそのように必要不可欠な本能しか持ってない。

それに反して、人間の欲望は、現実とずれて幻想と結びついているため、一億円あれば二億円ほしくなり、二億円あれば三億円にしくなり、どこまでいっても満足を知らない。

「そのため、人間の欲望の満足は、自己保存または種族保存のために必ずしも必要ではない。それどころか、かえってその目的のために有害である場合が多い。人間は無益に自他の生命を殺傷する唯一の動物である。妊娠している雌を雄が性交する唯一の動物である」

そうか。やっぱり人間は「本能の壊れた動物」なのだ。納得する。

そして、人間は本質的にアナクロニズムな存在である、という。人間は、固着や退行を起こし得る存在、つまり、神経症になり得る存在である。アナクロニズムの存在であるが故に、時間を発明（発見ではない）したのである。満足されなかった欲望を媒介として過去が絶えず現在に割込んでくるが故に、現在と、現在の中に割込んできた過去とを区別する必要があるのである。時間を年、月、日、時、分、さらに秒に分割したのは、過去に侵触されることを恐れ、過去のある時点はあくまで過去であって現在ではないことを確認しようとする強迫神経病的症状のようにわたしには思える。と岸田さん

は言う。

(3)私らは「アダムとイブ」「カイン」の末裔だ。そして浦島太郎の末裔だ

なるほど。〈時間〉の説明としてはこれが一番説得力がある。

「過去が過去として充足し、現在が現在として充足しているならば、時間は不必要かつ不可能である」

そうだよ。ところが、我々は、過去に釘付けになり、常に過去をもう一度やり直したがっており、過去から現在へと流れる線の延長線として未来という時点を設定した。「未来とは、逆方向に投影された過去、仮装された過去に過ぎない。未来とは、修正されるであろう過去である。

これも名言ですな。

抑圧がないなら時間はない。楽しいことをやっていると時間を忘れる。又、全てが満足されたユートピアにも時間はない。龍宮城にいる浦島太郎にも時間はない。

ここで岸田さんは凄いことを言う。

海の底にある龍宮城。実は胎児の時にいた子宮のシンボルであると。海は羊水である。浦島を乗せる亀は浦島自身のペニスを表わしている。

「その頭がペニスの亀頭に似てい、陸にやってきて、また海に戻る亀は、子宮外にあって、ときおり子宮へ、少なくとも子宮への通路たる膣へ戻るペニスのシンボルでなくて何であろう」

そうだったのか。これは一大発見だ。つまり、SEXとは、龍宮城へ行って時間を忘れるためになされる原初的、実存的な行為なのだ。浦島は、龍宮では時間を知らない。乙姫の言いつけを破って玉手箱をあけてはじめて、〈時間〉を知る。

ここからが又、岸田理論の凄いところだ。玉手箱は実は乙姫のシンボルであるという。浦島は、もはや龍宮にいないのに龍宮の乙姫を性的に求めた。それは挫折せざるを得ない欲望だ。だから、浦島太郎はとてつもなく深い、物語なんだという。知らなかったよ。学校の先生はそこまで教えてくれなかった。岸田版「浦島太郎」はこうだ。

「浦島太郎の物語は、性的欲望に仮託されたる子宮復帰願望の物語であり、われわれが時間をもったのは、二度とふたたび帰れない母の子宮に帰りたいたいというむなしい願望を断ち切れない存在、いいかえれば、ゆきて返らぬ昔の夢をいつまでも追いつづける存在であることを暗示している」

そうだったのか。本当は恐い昔話だ。しかし、昔の人は、本当に、こんな

深遠な哲学を（後の世の人に教えるために）浦島太郎の物語を作ったんだろうか。謎だ。私なんて、単純に「亀をいじめちゃいけないよ。動物を助けてやればいいことがある！」ということ教えるために出来た話だと思っていたけど…。

それに、岸田さんは〈確信〉をもって語っているけど、この解釈が正しいという証拠はない。もしかしたら、岸田流幻想かもしれない。そうだ！『フォービギナーズ・浦島太郎』なんていいかもしれないな。「浦島伝説」を調べながら、そこから人間とは何か？ 歴史とは何か？ 国家とは何か？ を考える。これはいいかもしれない。

ここで又、一つ疑問が浮かんだ。昔話というのは「男の子」に向けてだけ作られたのだろうか。浦島太郎は男だ。だから自分の亀頭を出し入れして、ユートピアに行ったり、現実に戻ったりする。じゃ、女の子はこの物語をどう読めばいいのか。疎外されてるじゃないか。まさか、乙姫の立場に立って読めということじゃないだろう。

それとも、こうかな。昔話には「男用」と「女用」があるのかな。トイレのように。でも、日本の昔話は皆、男の子が主人公だ。女の子が主人公の話なんて、外国にしかない。シンデレラとか白雪姫とか。それは、日本にはフェミニズムがなかったからか。あるいは、文字を使い、書き残したのが男だったからか。ウーン。分からん。今度、岸田さんに会った時に聞いてみよう。

そうだ。浅羽通明の『ニセ学生マニュアル』（徳間書店）でも、岸田さんは大きく取り上げられている。第2巻の『ニセ学生マニュアル・逆襲版』にも、第3巻の「死闘篇」にも出ている。そして的確に批判もしている。私のように、ただ驚嘆し、感動してるだけじゃない。この点が、浅羽の偉さだね。たとえば、こんなふう書いている。

〈現代思想ブームの頃は読んでいると通に軽蔑された単純明解さがとりえの唯幻論教祖。

フロイトを換骨奪胎したその理論仮説（よく誤解されるが真理ではなく、説明のための仮説として岸田は展開している）によれば人間は進化の過程で生まれつき本能が壊れた欠陥動物である。したがって個体維持も種族維持も単独ではできない。しかし、文化という幻想を共有することにより、混沌とした性エネルギーを鋳型にはめ「正常」な欲望へと変型することで種族絶滅を免れ

た。性的異常はこうした鑄型あてはめの無理が出て、鑄型によって無意識の方へ押し込められていた本来の混沌としたわけのわからない人間存在がにゅうっとはみだしたものとされる)

『ニセ学生マニュアル・死闘篇』になると、さらに厳しく糾弾している。

〈国家も恋愛もすべては幻想である、とする唯幻論ニヒリズムは、結局、何ごとも真剣にやる価値はない幻想だから、という、怠惰と無責任の言い訳を新人類に与えただけだった〉

さらに、こう批判する。

〈岸田は『ものぐさ精神分析』で大宰の『人間失格』を《この上なく卑劣な根性を「持って生まれ」ながら、自分を「弱き美しきかなしき純粋な魂」の持ち主と思いたがる意地汚い人々にとってきわめて好都合な自己正当化の「救い」を提供する作品》との確に評したが、唯幻論は、既存の価値に従って努力し明日を築くことから逃避し、別の価値を生み出す道を選ぶのも億劫がるくせに自分を全ての価値を幻想と知るほど聡明でそれに振り回されなだけで冷静な知性の持ち主と思いたがる怠惰な人々にとってきわめて好都合な自己正当化の論拠を提供する理論として消費された。しかも彼らのニヒリズムがニセ物だったことは、反原発、地球環境ブームに多くの新人類が躍らされたことだけでもわかる〉

(4) ジャナ専の凄さは昔から有名だったんだね

これは厳しい。でも一面の真理を衝いている。この『ニセ学生マニュアル』は名物大学教授の授業を紹介し、「どんどん、授業にもぐってみなよ！」とけしかける、きわめて知的刺激に富んだ本だ。 いやいや、大学だけではない。専門学校も取り上げている。わがジャナ専(日本ジャーナリスト専門学校)も取り上げている。平岡正明、猪野健治、玉川信明の三講師を取り上げている。それは凄い。しかし、その前にジャナ専を、こう「定義」している。

〈ジャナ専は、大学、短大に入れぬ、偏差値に不自由な若い人たちを集め、食えない新左翼評論家や文芸評論家に御託並べさせて食わせている妙な装置。百恵を菩薩とよんだ元犯罪者同盟首領

も、授業中、芸能界ネタのおしゃべりでうるさいアーパーには、
「君たち。僕の話をお聴く気があるのか！」と怒鳴るというフォー
クロアがある〉

こりゃ、ヒドイ紹介だ。専門学校はどこも試験がない。だからといって、
大学や短大に入れない人だけが来るとは限らない。「食えない左翼」に仕事
を与えて、食わせている、というの凄いな。今だったら、「食えない新右
翼」もいて、食わせている、と書かれるかもしれない。でも、週に一時間だ
けだから、そんで食わせてもらっているという感じはないな、私は。

でも、新左翼出身であれ何であれ、有名で、有能な講師がたくさんいる。
その辺の大学には負けない。平岡正明は、知る人ぞ知る、「新左翼のカリス
マ」。太田竜、竹中労と並んで「世界革命浪人」「三馬鹿大将」とも言われ
ていた。浅羽の紹介によると、こうだ。

〈60年安保騒動敗北ののち、暴れ足りなかった最若年層から
犯罪者同盟が派生する。その首領、平岡は早稲田の古本屋でサド
を万引きするパフォーマンスで吉本隆明を感激させ、『犯罪と革
命についての序章』から『すべての犯罪は革命的である』さらに
『水滸伝——窮民革命のための序章』まで、社会変革と歴史の原
動力となる革命的犯罪を賞揚し続けてきた〉

〈同じジャナ専では猪野健治も教えている。『親分』『任侠』
『戦後水滸伝』などの戦後暴力団ルポでかつて活躍した左翼ルポ
ライター、焼け跡闇市の民衆自治の側面がわずかながらにあった
終戦直後のやくざの魅力へ過剰に思い入れていることが明らかな
情熱的口マンだった。ジャナ専では、交通事故のルポの企画から
取材までの演習なんかをやっている〉

猪野さんは日本の右翼についても詳しい。一番詳しいだろう。8月の一水
会フォーラムでも、講師に呼ばれて、現在の右翼の状況と思想について語っ
た。又、「新右翼」の名付け親としても有名だ。現代書簡からフォービギ
ナーズ・シリーズの『右翼』を出している。又、僕の『テロ』（彩流社）の解説
も書いてくれている。解説で思い出したが、猪野さんの『やくざと日本
人』（ちくま文庫）の解説は私が書かせてもらった。

さて、最後に玉川信明さんだ。「逆襲版」ではこう書いている。

〈玉川信明も底辺を漂泊する左翼のルポライター。リクルートの外回り営業マンとしてポケットベルとともに都市をさすらいつつ、「人生は各自が書きこんでゆくべき白紙である」という大杉栄の言葉をこよなく愛する。富山の薬売りのフォークロアを描いた『反魂丹の文化史』、中国革命の歴史に埋もれた日中アナキストの活躍を発掘した『中国の黒い旗』（ともに晶文社）がある〉

玉川さんのこの中国アナキズムの本は凄い本だ。いい本だ。本人もアナキストだと言っている。でも、革マル派の黒田寛一と、幼なじみだったから、今でも思想を超えて親交がある。そして最近では、革マル派が出した『内ゲバにみる警備公安警察の犯罪』（あかね図書販売）の編集者になっている。ただし、巻末で黒田と激しい対談をやっている。

ともかく、有能・異能の人々がジャナ専には大勢いる。だから皆も、もぐってみたいらいいでしょう。ただし、平岡正明は数年前にやめた。猪野、玉川も残念ながら定年退職してしまった。しかし、元中核派No.2や、日本を代表する詩人、文芸評論家など有名な先生はまだまだいる。右翼くずれの先生までいる。

最後に、現代書館の「フォービギナーズ」シリーズだ。現在98巻まで出ている。私の『ヤマトタケル』が98巻目だ。私はジャナ専と、河合塾コスモに行ってるが、両校では、この「フォービギナーズ」にかかわってる人が何人かいる。コスモでは管孝行さんが『天皇制』『差別』『全学連』と書いている。阿木幸男さんが『非暴力』と『マルコムX』を書いている。ジャナ専では猪野健治さんが『右翼』を書いている。又、吉田和明さんが『三島由紀夫』『太宰治』『吉本隆明』『芥川龍之介』『宮沢賢治』を書いている。私は『ヤマトタケル』だ。つまり、コスモとジャナ専だけで12冊だ。これも凄いね。皆、おもしろい本だし、読みやすい。読んでみんしゃい。おわり。

【お知らせ】

(1)9月8日(水)は7:00から高田馬場シチズンプラザで、一水会フォーラムです。高池勝彦氏(弁護士)の「憲法改正への筋道」です。

(2)同じく9月8日(水)7:00から高田馬場のライブ塾 03(5348)4767で、鳥井守幸さん(元「サンデー毎日」編集長。現ジャナ専校長)と僕のトークです。テーマは「週刊誌よ、元気出せ!」です。

(3)9月10日(金)はあるところから呼ばれて、私の講演会です。久しぶりで。終わったら報告します。

(4)9月15日(水)は、やはりライブ塾で、『ヤマトタケル』（現代書館）の読書会です。 「独りで読んでも面白いこの本を、みんなで読んだら一体どうなるのか？ 全く予想がつかないが、とにかく破天荒な展開になることだけは間違いなし！」

(5)ライブ塾、これからの予定は。

10月13日(水) 宮崎学さん

11月10日(水) 二木啓孝さん

12月8日(水) 森達也さんです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年9月13日

思想同一性障害。あるいは思想的進化論をめぐる哲学的考察

(1) コミュニスト・渡辺氏は「様々な社会運動」を経てイラクに行った

先々週は書店の「イラク人質コーナー」にある本の数々を紹介した。又、(人質ではないが)勝谷誠彦氏の『イラク生残記』(講談社)を紹介した。産経新聞のコラム「産経抄」が絶賛していた本だったし。勝谷氏の「自己責任」の決意と覚悟を紹介した。安田純平氏の『囚われのイラク』(現代人文社)については前に紹介した。今回は安田氏と一緒に人質になった渡辺修孝氏の本、『戦場イラクからのメール』(社会批評社)を紹介しよう。実は、「人質の本」としては、出たのがこれは一番早い。

今年の4月14日に、イラクでゲリラに拘束され、4日後に釈放。21日に日本に帰国した。この本の奥付を見ると「5月20日 第一刷発行」になっている。というと、帰国してから1ヶ月で出版されたわけだ。しかし、実際に書店に出たのはもっと早い。2週間ほどで本が出来たらしい。奇跡だ。

「いや、帰国して10日位で出来た」と言う人もいる。あるいは「1週間で出来たらしい」と言う人もいる。出版関係者も驚いている。「イラクに行く前から書いてたのではないか」と言う人もいるが、それはない。いや、イラクからのメールは送っていたし、それもかなり入っている。でも、帰ってきてから書いたのも多い。それを合わせて緊急出版した。普段、送っていたメールがあった。それを基にしたから、こんなに早く出版できた。それと、これを出した出版社と一体だから出来たのだ。

彼は、「米兵・自衛官人権ホットライン」の一員として、イラクに派遣された。この「ホットライン」は元反戦自衛官の小西誠さんがやっている。そして、この本を出した社会批評社の発行人も小西さんがやっている。だからこんなに早く出来るのだ。

渡辺氏も元自衛官。やめてからはある右翼団体に入り、タイのゲリラを支

援に行き、帰国後は一水会に入り、さらには、そこにあき足りず、共産主義に目覚め、新左翼に進化する。そしてイラクに行き、「人質」になる。「自己責任なんてとんでもない。むしろ自衛隊が行った為に、我々が拘束された。国家は我々に謝れ！」と、国家に賠償を求める訴訟を起こしている。「人質」の中でも、最も戦闘的で、最左派だ。本の帯にはこう書かれている。

〈「自己責任」が必要なのは誰か？

イラクで「誘拐」された当事者が戦場のイラクを緊急レポート〉

本のタイトルは『戦場イラクからのメール』。サブタイトルに、「レジスタンスに『誘拐』された三日間」と書かれている。「誘拐」にカッコがあるのは、「いわゆる誘拐じゃない。調べるために拘束されたただけだ」という気持ちがあるからだ。一番悪いのは米軍と、その尻馬に乗った小泉、そして自衛隊。イラクは自衛のために自警団的な住民組織をつくり、自分たちの国を守ろうとしていた。それに我々はひっかかったのだ。初めは外国のスパイと思われ調べられた。しかし、この疑いが晴れて釈放された。だから「誘拐」ではない。と言う。

「その証拠にゲリラ側は何らの〈要求〉も出してない。金を出せとか、自衛隊は撤退しろとか。先の3人の場合とは違う。誘拐ではなく拘束だ」と。これは安田氏が一水会フォーラムに来た時に言っていたのだ。安田氏と渡辺氏は、一緒に拘束されたが、同一組織ではない。たまたまイラクで出知り合い、同宿し、その日、事件に遭ったのだ。渡辺氏は小西さんの「ホッライン」から派遣されて行っていた。安田氏はフリージャーナリストで、一人で取材に行っていた。

さて、渡辺修孝氏だが、「わたなべ・のぶたか」と読む。ちょっと難しい。一水会にいた時も、皆読めなくて、「しゅうこう」と言っていた人が多かった。

奥付の著者紹介のところを見た。自衛隊をやめたあと、大日本誠流社に入り、その後、タイのゲリラに参加し、そして、一水会に入る…と、略歴が載っていると思った。ところが、違う。こう書かれていた。

〈1969年生まれ。栃木県足利市出身。地元の高校を卒業後、陸上自衛隊第一空挺団に入隊。満期退職後、陸上自衛隊板妻駐屯

地へ再入隊後退職。以後、様々な社会運動を経て、04年から「米兵・自衛官人権ホットライン」の「在イラク自衛隊監視センター」スタッフとして、イラク現地で自衛隊の調査・監視活動にあたる。同年4月14日、現地の武装勢力に拘束され、解放後帰国。現在、イラク占領の現状を市民にレポートする活動を行う

アレっ?と思った。「以後、様々な社会運動を経て」で、全てが語られてしまっている。右翼団体に入り、タイのゲリラ活動に参加し、そして一水会に入ったことも、全て、「様々な社会運動」で片づけられている。これは勿体ないだろう。だって、イラクに行く契機になったのは、その「様々な社会運動」の時なんだし。

タイのゲリラに二度も参加した。さらに、帰国後、右翼団体から一水会に移った。この間だって大変だった。それほどまでして一水会に入りたかったんだろう。そして、木村氏と共に、イラクに2回も行っている。それがイラクに目を向けるキッカケになる。一水会の活動も熱心にやってたし、野村秋介さんが選挙に出た時は、毎日、献身的に活動していた。その時の体験も、大きかったと思う。それらが「ゼロ」だったわけじゃないだろう。ましてや、「マイナス」だったわけでもない。

…と思って、本文を読んだら、さすがに本文の中では触れていたのが安心した。

〈自分の人生は、何だったのか。 私は14年前、自衛隊を除隊してすぐに先輩隊員の紹介で右翼団体を通じて、当時はビルマの国内で抵抗闘争を続けていた「カレン民族解放戦線」の闘争に義勇兵のオブザーバーとして参加した。

本物の戦場を体験するなかで、銭湯で死んでいく兵士たちの命の虚しさを思い知らされた。それでもなお、自由を求めて闘っている人々の姿に共感を覚えた日々。確かにあの頃は右翼の思想などどうでもよかった。国の命令ではなく、自分の意志で闘いに参加できる「義勇兵」になりたかった〉

(2)一水会に入り、過激に闘い逮捕される。しかし、「民族論」をめぐる退会

自衛隊をやめてから、右翼団体に入る。それは知っていたが、「先輩隊員の紹介」だとは知らなかった。じゃ、隊員の中にも「右翼シンパ」がたくさんいるのだろうか。「右翼の思想などどうでもよかった」というが、今から見てそう思うのではないか。当時は、右翼の思想にも共感する部分があったから入ったのだろう。まさか、その右翼が「カレン民族解放戦線」を支援してたから、それだけの理由で右翼に入ったわけじゃないだろう。そこに入ったら、ゲリラになれると思っただろうが、その為だけに利用したのではない。もっと純粋な民族主義があったし、熱い血があったからだろう。このゲリラはビルマで抵抗闘争をしていたが、渡辺氏はタイから入った。さて、ゲリラに参加した後だ。

〈その直後に、マラリアを患って半年間、発熱を繰り返し戦場をリタイアする。が、義勇兵への参加の意思は尽きることなく、「湾岸危機・湾岸戦争」が始まると、在イラク大使館が新右翼・一水会を通じて発効した「イラク・反米義勇兵募集」の呼びかけに応じて申請書にサインして大使館に提出した。

また、当時のブッシュ大統領が来日した際に、来日反対闘争に参加して、首相官邸でビラを撒き、もうひとりが赤ペンキを路上に撒いて逮捕されることもあった〉

この闘いは一水会機関紙「レコンキスタ」にも大々的に報じられている。一水会の2人が決起し、ビラを撒き、赤ペンキを撒いた。この「赤」は「虐殺されたイラク人の血だ!」という意味で撒いたという。2人で撒いたと思ったが、もう1人の方だったのか。これも知らなかった。でも、理想に燃えて一水会に入り、逮捕されるほどの闘争にも参加している。充実した「闘争の日々」だった。では、何故、一水会をやめることになったのか。

〈その後、フセイン政権下のイラクに渡って客人待遇で持てなされるが、民衆運動の観点からかけ離れた、国家主義運動を目指す一水会の路線には違和感を覚えていた。

決定的に離れたのは「民族問題」に関する志向性の違いだった。一水会・政治局は、「日本単一民族論」、あるいは「民族統一化」というスタンスだった。そこでは国内のマイノリティに対する歴史的な差別と抑圧の構造を検証することはなく、「民族統一化」とかをファシズムの論理で空騒ぎしているだけだった。

さらに、組織論も上から下への縦の線を情報保全のために最優先して、他の運動団体との横の連帯の自由を認めず、ボス交渉のみが認められ、下部はそれについて行くだけという硬直したものであった。これは、左翼組織にも当てはまるが、「遊撃戦」の感覚に憧れた私にとって、こういった「組織論」は肌が合わなかった)

ウーン、そうだったのか。「民族論」で一水会について行けないと思ったのか。又、この頃は活動家が多くて、毎日のように若者が一水会に入ってきた。そして、街宣し、勉強し、闘っていた。一水会が一番輝いていた時期だと思ったのに。「ついて行けない」と思った人もいたんだ。

でも、民族論とか、ファシズム論とかいうけど、いろんな考えの人がいたと思うけどね。又、渡辺氏は一水会の仲間と靖国神社に参拝したり、野村さんの「風の会」の選挙でも熱心に闘ったりした。楽しかったことや、生き甲斐を感じ、よくやった。と思ったこともあったはずだ。そうしたことも、もっと書いてくれたらよかったのに、と思ったね。では、一水会を辞めた後はどうしたか、だ。

〈右翼から転向した後は、アナキストの運動に興味を持って接近する。その関連で「爆取犯」の死刑確定囚の再審請求研究会に関わって、「東アジア反日武装戦線」の被告たちの獄中闘争と民衆を犠牲にした爆弾闘争への自己批判に影響を受けた。私はそこから獄中救援に参加していくようになった。しかし、複数の救援会を持ち回りに関わっていくうちに結局、どれも主体的な参加が出来ず、中途半端な関係になった〉

一水会を辞めてから、「東アジア反日武装戦線〈狼〉」の支援をする。ウーン、なんか因縁を感じるね。だって、僕がものを書くキッカケになったのは〈狼〉だったからだ。〈狼〉をキッカケに三一書房から『腹腹時計と狼』を書き、それを野村秋介さんが評価してくれて。そして、いわゆる「新右翼」運動が起きる。いわば新右翼の〈原点〉が〈狼〉だ。渡辺氏は逆に、一水会を辞めて、原点の〈狼〉に行った。いや、一水会に入ったのも、僕の『腹腹時計と〈狼〉』がキッカケだったのかもしれない。そうならば、僕も大きな責任がある。

そういえば、初期一水会は、『腹腹時計と〈狼〉』を読んで一水会に入っ

た活動家が多かった。そして、その人たちは、（何らかの形で）運動を続けている。それだけあの本が、というより、〈狼〉事件の衝撃が強かったのだ。

1970年によど号ハイジャックと三島事件があった。1972年に連合赤軍事件があった。これで左翼はもう終わりだ、と言われた。1974年に、〈狼〉事件があった。連続企業爆破事件だ。実行者は、市民生活にひそむアナキスト「東アジア反日武装戦線〈狼〉」だった。爆弾犯とはいえ、彼らの真面目な、ひたむきな姿勢、思いに感じ入り、僕は本を書いた。右翼からは総スカンだった。「何だ左翼の闘いを支持しやがって」「バカヤロー。あいつらは敵だ！」…と。

その中で、唯一、野村さんは評価し、支持してくれた。そして、『現代の眼』で対談した。タイトルは「反共右翼からの脱却」だった。これが「新右翼をつくった対談」と言われた。（この対談は僕の『新右翼』（彩流社）の中に収録されている）。野村さんは言っていた。三島事件が起こっても、右翼はこれを継げなかった。三島の声は〈狼〉にエコーし、さらにそこから右翼に跳ね返ってくる。と言っていた。凄いことを言うと思った。しかし、その時はよく意味が分からなかった。でも野村さんは、「次は俺が継ぐ」と決意してたんだろう。数年後、経団連事件を起こしているし。この時は、元「楯の会」の伊藤氏、西尾氏も参加している。中で2人は自決しようと思った。しかし、三島由紀夫の未亡人が駆けつけて止めた。経団連事件は第二の「三島事件」だったのだ。

(3)僕は〈狼〉の縁で野村秋介さんと出会う。これが新右翼の原点になる。そして、この10月、原点回帰の本を出す

「アナキスト」で思い出した。遠藤誠弁護士だ。とてもいい人だった。遠藤さんの勉強会で僕は、反戦自衛官の小西誠氏と会った。（あつ、2人とも「マコトちゃん」なんだ!）

渡辺氏も、最後には小西誠さんの「米兵・自衛官人権ホットライン」に行く。そこで、イラクに派遣されて、人質となり、一躍日本中にその名が知られるようになる。〈狼〉の救援運動をし、そのあと渡辺氏は、日本赤軍の人々とかかわる。2000年、ダッカ事件の岡本公三のいるレバノンに行く。NGO「ウナディコム（レバノン・日本民衆連帯）」から生活支援スタッフとしてレバノンに派遣されたのだ。一年間、そこにいて岡本の支援をする。そして、日本に帰ってからは、「重信房子さんを支える会」にかかわる。

〈その後、移り変わる情勢の変化に対応する必要性を痛感して、救援よりは反戦運動の方に多く関わっていくようになった。こうして、「米兵・自衛官人権ホットライン」に参加するようになる〉

これが渡辺氏の「様々な社会運動を経て」の具体的内容だ。でも、たいしたもんだね。うらやましいね。これだけのことをやってきたんだ。何千人、何万人分の人生を生きてきたんだよ。なかなか出来ないですよ。重信房子は昔、お父さんに会った。お父さんは右翼で、戦前の「血盟団」に参加していた。会ったら、「娘は右翼だよ」と言っていた。戦前は右翼こそが反体制、革新運動の担い手だった。だから、「右翼だよ」というのは最大級の誉め言葉なんだ。

お父さんは重信末夫さんといった。この時の血盟団の同志が四元義隆だ。「政界のフィクサー」「黒幕」と呼ばれた人だ。この人も最近、亡くなった。「レコンキスタ」では、追悼記事が出ていた。

渡辺氏がかかわった岡本公三も凄い人だ。昔、彼の手記を読んでたら、「三島由紀夫が好きだ」と書いてあった。特に『奔馬』が好きだという。その理由も詳しく書いてあった。このことに関しては、僕はどっかで書いたな。三上治さんとの対談かな。『保守反動思想家に学ぶ本』（宝島社）での対談のような気がする。あとで調べてみよう。

僕が『腹腹時計と〈狼〉』を書いたのは事件直後の1975年だった。今から30年前だ。これが処女出版になった。男なのに処女出版だ。かなり話題になり、2万部売れた。その後、50冊近く本を出したが、この本を超えるものはない。出版部数でいうと、エスエル出版から出した『UWF革命』というプロレス本が3万売れたから、こっちの方が売れた。しかし、思想的なものとしては『腹腹時計と〈狼〉』だ。今でも、これを読んだという人に会うことがある。僕個人としては、『夕刻のコペルニクス』『がんばれ！新左翼』『言論の覚悟』『言論の不自由』などの方が、がんばって書いたと思うが、「いや『腹腹時計と〈狼〉』の方がいい」という人の方が多い。中には、「お前はあれ一冊で終わりだ」という人もいる。悔しいやね。それで、今年の10月に、その〈原点〉に〈迫る〉べく、一冊の本を出す。本当は2年前からやっていたんだが、出版の時期が『ヤマトタケル』（現代書館）の直後になった。この夏は、この二冊を出す。（10月はもう秋か）。果たしてデビュー作を超えられるか。

では又、渡辺氏の話。右翼から新左翼に「進化」した人だ。本人も、「転向した」と認めている。「凄いですね。一水会から新左翼に進化した唯一の男です」と僕はいろんな所で喋った。そしたら、ロフトで「いや、他にもいるぞ!」といわれた。よく知らなかったが、「一水会をやめてブント（戦旗派）に行った人」がいるという。じゃ、2人なのか。でも、よく聞いてみると、この人は、元、ブントにいて一水会に入り、又、ブントに戻ったという。じゃ、純粹に新左翼になったのはやっぱり渡辺氏1人だろう。

(4)渡辺氏だけでない。私だって新左翼に進化したんだ!

そうだ。思い出した。渡辺氏は日本に帰ってきて、「一緒に帰ろう」という親を振り切って、小西さんたちの集会に参加した。「帰国歓迎集会」だった。その時の発言がテレビで流れて、ぶっ飛んでしまった。

「私は共産主義者だから、日本政府はわたしを助けないと思った」

こう言ったんだ。ヒャー、「共産主義者になったのかよ」とこの時は驚いた。一水会を辞めて、〈狼〉や日本赤軍の支援運動をしてるとは聞いてたけど、「シンパ」だと思っていた。実際、岡本や重信にしても、もう共産主義者じゃないだろう。そんなものは卒業している。「よど号」だって共産主義を捨て、民族主義者になっている。それなのに、救援する渡辺氏の方が「共産主義者」になったのか。

でも、実は、この時の発言は、ここだけが断片的に取り上げられ、流されたようだ。実はイラクでの人質体験の時に言われた言葉のようだ。本の中で、書いているが。「日本はなぜ派兵したのか。それにお前は何のために来たのか」と武装グループに聞かれた。

〈私自身もこういった日本の情勢を批判する見解を述べていたので、下手に「米兵」とか「自衛官の人権」とか言うと余計に話がややこしくなってしまうと思いました。

そこで、イラク人にもわかりやすく、自分は日本では反体制派であることを伝えるために、「私は коммуニストだ」と言いました。なぜなら、イラクでも коммуニストといえばサダム時代からずっと「政治的な反体制派の代名詞」のようなものですし、それくらいはわかると思ったからでした)

なるほど。それで言ったのか。彼は小西誠さんの「米兵・自衛官人権ホットライン」のスタッフとしてイラクに行った。しかし、たどたどしい英語

で、「米兵」とか「自衛官の人権」なんて言ったら、「米帝の手先か」と誤解されて射殺されてしまう。だから苦慮の末に「コミュニストだ」と言ったのだろう。さらに、次のような問答が武装勢力との間にかわされている。

〈そして、「もし日本政府は君が拉致されたことを知ったら、どのような対応をすると思うか?」と聞くので、私は逆に、「もし、あなたたちが私を殺そうと思っているのならば、どうぞ殺して下さい。しかし、それはおそらく日本政府にとって、喜ばしいことになるでしょう。なぜなら、私は政府にとって、反体制派だからです」と述べました〉

帰国直後の集会でも、このことを話したんだろう。でも、テレビではそんな前後関係が出ないから、よく分からなかった。ということで、今週はおしまい。

【お知らせ】

(1)「レコンキスタ」(9月号)は充実してますね。沖縄ヘリ墜落事件の木村三浩代表の巻頭論文もいい。木村代表と蜷川正大氏の対談「野村秋介先生没後11年特別企画第1弾」もよかった。又、猪野健治さんの講演記録「9.11以降の右翼運動を概観する」もいい。さらに、「公安警察の実態」を暴いた記者座談会も凄かった。16ページで、これだけの内容がつまって500円は安い。私は、中島らもさんと朝生のことを書きました。ぜひ、読んでみて下さい。年間購読は6000円です。申し込みは、tel 03(3364)2015、FAX 03(3365)7130です。

(2)9月15日(水)は、ライブ塾tel03(5348)4767で、『ヤマトタケル』の読書会をやります。読んだ人も、まだ読んでない人もどうぞいらして下さい。この本を叩き台に、国家、愛国心、日の丸、君が代…について考えようと思います。

(3)ライブ塾の続いての予定は。

10月13日(水) 宮崎学

11月10日(水) 二木啓孝

12月8日(水) 森達也 です。

(4)10月の一水会フォーラムは10月6日(水)です。宇垣大成氏(軍事評論家)の「日米地位協定の諸問題」です。7時から高田馬場のシチズンプラザです。

(5)10月10日(日)。私の新しい本が出来る予定です。でも、間に合うのか

な。今、必死で校正してるんですが。

(6)9月28日(火)はロフトに三浦和義さんが出るんですね。三浦さんの映画も出来たそうです。それも上映するのでしょうか。

(7)四宮正貴氏が激怒した例の、「朝生」が本になりました。『徹底討論！皇室は必要か』（PHP 1500円）。いい本ですね。資料も一杯ついていて、勉強になります。

(8)田原総一郎さんの『連合赤軍とオウム＝わが内なるアルカイダ』（集英社）も新発売です。「朝生」の「徹底討論！連合赤軍とオウム」の基になった本です。植垣康博、三上治、花園紀男さんたちとの対談などが載っています。この「検証2・赤軍派創設メンバーから見た連合赤軍」で、花園紀男氏と対談しています。冒頭、こう書かれています。

〈花園紀男と最初に会ったのは、1984年のことだった。場所は池袋の文芸座。場面は「激論・全共闘 俺たちの原点」というパネルディスカッションだった。出演者は、花園のほか、作家の中上健次、立松和平、映画監督の高橋伴明、新左翼の鈴木邦男だった〉

〈このメンバー、このギャラリーで朝まで討論した。

「朝まで生テレビ！」の原形はここにあり、私と「朝生」の原点となった〉

そうです。ここに「朝生」の原形があるんです。その歴史的な現場に私はいたんです。それに、「新左翼の鈴木邦男」として。これは私のパソコンの打ち間違いではありません。又、集英社の誤植でもありません。嬉しかったですね。「ウワー、俺は新左翼に進化したんだ！」と飛び上がりました。田原さんも、「うん。鈴木君はもう、新左翼に進化したんだろう」と思って書いてくれたんでしょう。そう、思想同一性障害とは俺らのことだ。だから、絶対に直さないでほしいです。これでいい。満足し喜んでるんですから。

(9)「実話マッドマックス」（コアマガジン）に「中村うさぎが『鬼に会いに行く』という連載がありますが、今出てる号（第5号）で、僕が出ています。なかなかムードに迫っています。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン / 丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年9月20日

中島らもさんの追悼ライブに行きました

(1)らもさんの本に、8年前の「朝生」のことが書かれとった

9月11日(土)、ロフトに行きました。「らもはだ 最終回」でした。中島らもさんと鮫肌文殊さんのトークイベントです。ロフトの案内にはこう出てました。

「なんと、らも欠席。つきましては、らも関係者の方々をお招きして、最終回ライブを行います。いつも来てくれた人は是非来てね」

前は7月10日(土)でしたね。らもさんは、「次回(9月11日)は元大阪府知事の横山ノックを呼ぶ。ぜひ鈴木さんも来て下さい」と言っていました。でも、この日の6日後に大阪で、階段を踏み外して病院に運ばれ、その一週間後に、亡くなったんです。9月11日は、残念ながら〈最終回〉になりました。そして、くしくも、この日が49日でした。

鮫肌さんの他に、豪華なゲストがこの日は来てました。らもさんを「お師匠さん」と仰ぐ松尾貴史さん、それに、ミュージシャンの大槻ケンヂさん。女優の藤谷文子さん。そしてガンジー石原さんなどでした。

藤谷さんは、らもさんの短編を朗読してました。それを聞いていた松尾さんがポロポロと涙を流して泣いていました。11時からテレビの本番があるというのに、酒をあおり、酩酊してました。そして、マネージャーに促されて帰る時、足元がふらついて、何と、階段を踏み外して、落ちるところでした。「危ない！」と私はかけ寄って、支えました。そしたら、藤谷さん、「演技ですよ、演技！」

エッ、こんなに泣き崩れていたのに、その直後にはもう〈受け〉狙いをしてるの。凄いやね。芸人のサガは。

大槻ケンヂさんとは久しぶりに会いました。以前は、リングスなど、プロレス会場でよく会ってましたのに。野球帽をかぶって、ノーメイクで、ジュー

ンズなんか着てると、その辺の普通のアンちゃんで見分けがつきやせん。
「鈴木さん」と声をかけられても分からん。「大槻ですよ」なんて言われて、やっと分かりましたよ。

私の『ヤマトタケル』（現代書館）をあげたら、「おっ、フォービギナーズですね。随分読んでますよ」と言っていた。そう、勉強家なんですよ、この人は。じゃ、僕も、とって、『オーケンの、私は変な映画を観た』（キネマ旬報社）をくれました。ありがとうございました。

オーケンも、らもさん追悼の歌をうたっていました。10時頃おわり、そのあと、近くのお店に行って皆で飲みました。

実を言うと、私はらもさんの本はあまり読んでなかった。でも、8年前にテレビで一緒し、亡くなる一週間前に濃い付き合いをさせてもらいました。何か運命を感じた。それで、今、集中的に読んでいます。

だから、今、中島らもさんの『さかだち日記』（講談社）を読んでいた。なかなか面白い。毎日忙しいんだ。それに毎日飲んでいる。大阪に住んでいて、たまに東京に来る。来た時に、まとめて東京の仕事はするらしい。「9月27日」の日記を読んでいた。いつの9月27日だろう。5年前か10年前か…。

全日空ホテルに入り、3つのインタビューを受ける。凄い。売れっ子だ。でも、疲れるだろう。僕なんて、人と話すのが苦手だから、1日に1つのインタビューでも、疲労困憊してしまう。それなのに、3つだよ。さらに、この夜は、もっと大きな〈仕事〉があるのに。

〈少し疲れたのでホテルの近所にある居酒屋で一服する。おれ、バタヤン、K嬢、いしい君。いしい君は経験豊富な人で、話がいちいち面白い。K嬢は小柄な人で、スーツケースにぴったり入ることができるというポータブルな人だ。可愛いから、スーツケースに入れて持って歩きたい気になる。一同はこのまま「朝まで生テレビ」へ。〉



そうです。これは8年前（1994年）の9月27日なんです。テーマは「激論！こんな日本に誰がした！」でした。僕もこの時、出てました。初めて、らもさんと会ったんです。そのことについて書いてます。でも、こんな〈大仕事〉の前に、インタビューを3本も受け、居酒屋で飲んでるのか。たいした余裕だ。それに、小柄なK嬢を見て、「スーツケースに入れて持って歩きたい」と思ったりして。実際、やってみればいいのに。作家なんだから、やってみなくっちゃ。でも、これをヒントにして、らもさんは小説「南くんの恋人」を書いたんだね。今、テレビドラマ化されとるけど。あれっ、原作は違うかな。内田春菊やったわ。それに、「恋人」はもっと小さくて、ポケットに入るんや。こっちの方が、よりポータブルや。でも観賞用だけだ。使えない。

さて、「朝生」の話や。例の何も喋らんかった「朝生」の話や。朝生の前に3本もインタビューを受けたと書いてたけど、その前には、他の雑誌、テレビ局との打ち合わせをやる。写真撮影がある。これじゃ、ヘトヘトになる。それで力を出し尽くして、「朝生」はもういいや、となったのかもしれへん。こう書いとった。

〈一同はそのまま「朝まで生テレビ」へ。テーマは「こんな日本に誰がした」司会は野坂先生。パネラーは小林亜星、嵐山光三郎、テリー伊藤、小田実etc etc。おれは、全四時間の番組中三回だけしゃべった。三回のうちには「これについて中島さんはどう思いますか」という野坂さんのフリに、「えっ、何ですか」と言ったのも含まれている。おれなんか呼ぶからこんなことになるのだ〉

最後は威張って、「おれなんか呼ぶから…」と言っている。しかし、僕も出てたけど、「etc、etc」になっちゃった。「etc」で括られた人は…。辛淑玉、下村満子、井沢元彦、宮崎哲也、藤井良樹、山崎哲、黒川紀章、そして私だよ。



でも、あの時は「朝生」は4時間だったのか。スタート時点は、たしか、5時間だった。12時から5時まで、文字通り「朝まで朝テレビ」だった。ギャラリーの学生を呼んでも、終わるのは5時だ。始発の電車で帰れる。安上がりだ。

ところが、5時間じゃ、長すぎる。司会の田原さんもキツイ。それで、4時間になり、今は3時間だ。ともかく、らもさんが出た8年前は4時間だ。司会も田原さんじゃなく、野坂昭如だ。らもさんは野坂さんとは親しい。師弟の関係に近い。師と仰ぐ野坂さんから声をかけられ、仕方なく出演したようだ。

(2)何と、朝生では8回も喋ってたよ。歴史発見だ

この朝生については何度か書いた。僕の印象では、「らもさんは一言も喋ってない」と思っていた。他の人が余りに喋りすぎるから、特にそう思ったのかもしれない。でも、らもさんは「3回だけしゃべった」と言う。そのうち1回は、「え、何ですか」だ。じゃ、もう2回は何だろう。

らもさんの弟子筋の松尾貴史さんに聞いたら、「いや、4回はちゃんと喋ってますよ」と言う。そうだったかな。それで、家探し（一人「ガサ入れ」）して、やっと見つけた。8年前の朝生のビデオだ。でも、自分で見るのは恥ずかしい。それに4時間も見るのがカッターイ。そこで、らもさんの熱烈なファンだという女子大生に貸してやった。大喜びだった。「そのかわり、らもさんの発言だけは、ちゃんとメモとってくれよ」と言った。「課題レポート」だ。

そのレポートを見て驚いた。エッ？ らもさんは、こんなに喋っていたのかよ、と。では、「レポート」から…。

く「あなたの記憶に残る歌」のテーマの時に…。

鈴木「先ほど、『昭和ブルース』の話が出ていましたけれど、1970年に三

島由紀夫と一緒に亡くなった森田必勝がこの歌が好きでしたね。私の好きな歌は、子供の頃だと『雪の降る街』ですね。雪の降るところで育ちましたので。〉

アラアラ、私の発言までレポートしてくれたよ。いいのに、これは。森田必勝は天知茂が歌う「昭和ブルース」が好きだった。ちょっとニヒルで、感傷的な歌だ。「昭和維新の歌」じゃないの、とよく右翼の人が聞き返すが、違うんだ。あんな元気のいい勇壮な歌ではなく、悲しい、厭世的な「昭和ブルース」が好きだったんだ。皆も、このCDを買ってきて、森田必勝を偲んでくんなまし。あっ、そうだ。毎年、三島・森田追悼の野分祭を11月24日にやっているが、今年から、「昭和ブルース」を流したらいいな。

野村秋介さんは谷村新司の「群青」が好きだった。だから、追悼祭は「群青忌」で、いつも歌「群青」が流れている。じゃ、「野分祭」も、本当なら「昭和ブルース忌」だね。そして、この歌を流す。でも、これじゃ、サマにならないか。

あっ、「朝生」の話だ。中島らもさんが、何を喋ったか、だ。「野坂昭如氏が最近の歌を批判的に見るのに対して」、らもさんは言う。

[1] 中島「あの、今の歌詞が悪いとかるくな歌がないとか言い出したら、人生行路さんですよ。僕は別に今の歌が悪いとは思いませんよ。僕自身はローリングストーンズですね。年代的に。今から見れば西条八十さんの作詩は素晴らしいものですけどね。それと比べると今のものは低いですけど。でも残っている歌は淘汰されたものですからね。今の歌が良くないとかって悪いですよ。今の歌にも100曲の中に一ついいものがありますよ」

えっ、結構長く喋ってるじゃん。でも、「人生行路さんですよ」って何だろう。人の名前かな。よく分からん。グーグルで調べたら、「ボヤキ漫才の人生幸露（故人）のことやろ！」と教えてくれた。そうなのか。この、らも発言に対し、野坂さんは「かっこ悪くてもいいんだよ。今の人は歌詞を軽んじている」と反論している。ともかく、これが、らもさんの1番目の発言。以下、番号をうって紹介ませう。

[2] 中島「昔の歌の方が詩の意味が重かった。だけど、メロディーがついていかなかった。演歌とか特にそうですよね」

[3] (嵐山光三郎氏が中島氏に批判したのに対し)

中島「(今の歌にも) 100曲あって1曲くらいいいものがありますね」

[4] (テーマ「官僚」について)

野坂「官僚について、中島さんはどうお考えですか」

中島「何を？」

[5] (テーマは「戦争・国家・政治」に移った)

野坂「中島さんは戦争責任や原爆投下については、どうお考えですか」

中島「僕はそういうところに自分の考えをおかないでいる。答弁のしようがない。そこに自分の世界をおくと、僕を書くものが一切できなくなってしまう」

[6] 野坂「でも考えざるをえなくなることがあるでしょう」

中島「ない」

[7] 野坂「いつから考えることができなくなったんですか」

中島「18才の頃から」

[8] 中島「私、選挙権をもらって24年。一回も投票へ行っていない」

辛「選挙権があるのに行かないのは、犯罪と同じです」

おっ、辛淑玉さんも怒ってますね。まア、理由は分かりますよね。だって、辛さんは選挙権も被選挙権もない。あんなに朝生に出たり、政治番組に出てるのに。なぜなら、帰化してないからなんです。おかしいですよ。辛さんなんか、国会に出すべきですよ。あるいは、日本の首相にすべきですよ。だから、選挙権がありながら行かない人を見ると、カーッとなるんですよ。らもさんも、「犯罪だ！」と叱られていますね。しかし、らもさん、朝生では本当は8回も喋っているんですよ。「歴史発見」でした。これも、らもファンの女子大生のおかげです。謝謝。

では又、らもさんの『さかだち日記』に戻ります。らもさんはなかなか、哲学的なことを言ってるんですよ。

〈人間は誰だってもともとどこかが欠けている。みんなその欠けた部分を補うために何かに依存して酩酊して生きていく。酒に走る人もいるし、異性に走る人もいる。おれはギャンブルだという人もいるだろうし、それが自分の子供に向かったり、権力や金に向かったりする人もいるということなんじゃないか〉

(3) 「今ならアメリカに勝てる！」と野坂昭如さんが言いよる！

なるほどね。プラトンは、いってますね。初め、男女は一体だったのに二つに切り離された。だから「一つ」になろうと思って男女はひかれ合うんだと。じゃ、らもさんは酒と一体だったのか。だから、酒にひかれ、いつも酒と共にいるんか。政治運動をする人間もそうやね。欠けたものを求めて運動に走るわけじゃね。

らもさんは、いつも酒が入っていた。原稿を書く時も、酒が入っていた。酒の勢いで書いて、酔って寝込んでしまう。でも、朝、目が覚めるとちゃんと原稿が出来てるんだそう。凄いですね。まるで自動書記じゃないか。僕もそうになりたいな。

でも、こんな人はアル中というんでしょう。あるいは、アルコール依存症かな。と思ったら、二つは明確に違うんだそうです。この本の中で、野坂昭如とらもさんが対談してるが、野坂さんが、こう発言してる。

野坂 アル中はいわば身体とアルコールの関わり、依存症は精神とアルコールの問題。だからアル中は治っても、依存症は治らないんですよ。

エッ、本当かよ、と思った。アル中は「身体」の問題だから、意志を強く持てば、自分で治せる。でも、依存症はダメだという。野坂さんは言う。

「僕はアルコール依存症になって、これは病気だと知っていながら長い間、意志の問題とか理性の問題に置き換えていた。血圧の高い人が意志でもって血圧を下げられないのと同じで、薬で治すより手がないんです」

そうだったのか。これで「中毒」と「依存症」の違いが分かった。

と納得しながらも、もしかしたら、これは野坂流の詭弁かもしれないぞ、と私は疑いましたね。だって、英語では「中毒」と「依存症」の違いはあるのだろうか。だって、「アルコール中毒」は英語ではalcoholismだ。alcoholの主義（イズム）なんだよ。ismは「中毒」だわな。マルクスに酔って、中毒になるのはマルキシズムだ。中毒の人はマルキストだ。国家や民族に中毒になるのはナショナリズムだ。それにこのismは「依存症」でもあると思うがどうやろう。と思って、和英辞典を引いてみたが、おらんちのは、「アルコール依存症」は出ていない。うん、アメリカ人にはいないんじゃないだろうか。みんな、中毒だけで。ちなみに、「肩こり」「腰痛」「痴漢」という英語もない。日本人にしかない病気だからだ。そう、「痴漢」も病気です。あんなおどおどと、さりげなくやる行為は他の国の人にはやらん。日本人だけだ。他の国では、どうせやるんなら、レイプとか、もっと荒々しくやる。

これはやっぱ、谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』ですよ。ほのぼのと、ひそやかにやるなんて。だから、肩こりと痴漢は〈日本文化〉だ、という人もいる。（オラだけだ）。

さて、再び、らもさんの本だ。この日記の巻頭は野坂さんと「禁酒マッチ」という対談。そして巻末は「バイアグラ・マッチ」という。凄い。この対談、2人で同時にバイアグラを飲んで、どっちが早く効いてくるかという対談だ。その中で、野坂さんが言っていた。

野坂 聞けばアメリカではすでにバイアグラの処方箋が三百万人に出ている。ということは、実際に飲んでる奴は二千万人になる計算だということですね。一方、アメリカは人口が約二億六千万。男はそのうち半分だけど、さらに子供や老人をカットすれば、普段からセックスしてる奴は八千万人くらいでしょう。もし八千万人のうち二千万人がインポテンスだとしたら、これはとんでもない数です。いま真珠湾奇襲すれば勝てますよね。

凄い結論だ！ それに、ちゃんと数字の裏づけがある。じゃ、対米戦争、やるべしだよ。

という景気のいい話で、勃然としたところで、今週は終わり。

【お知らせ】

(1)9月10日(金) プレスセンタービルの日本記者クラブ会議室で講演してきました。主催が何と、日比谷一水会。会社の社長や、役員、編集者などの勉強会だった。他にも「一水会」というのは絵画の団体や、政治家の集まりにあるようだ。いつか「全国一水会連合」をつくろう。

(2)今発売中の『文芸春秋』（10月号）のトップは、衝撃レポート「タカラジェンヌと創価学会」。話題になっている。書いた人は与那原恵さん。よく知ってる人だ。元、図書館につとめていた。一念発起して、ライターになろうとした。そして、編集プロダクションに入った。最初の仕事が宝島社の『平成元年の右翼』。最初に取材したのが一水会の鈴木。そう私なんです。その後、あれよ、あれよと言う間に大ルポライターになってしまった。凄いですよね。

(3)『月刊TIMES』（10月号）の私の連載「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」は第3回目です。「死を通して行った『自分探し』＝三島のように死んだ野村と彼を追った新井将敬の武士道精神」です。大きな書店にはありますが、ない時は本社へ。03(5269)8461

(4)9月28日(土)はロフトに三浦和義さんが出ます。私も聞きに行くつもりです。「じゃ、壇上で話してよ」と三浦さんに言われました。

(5)10月6日(水)は一水会フォーラムです。宇垣大成氏の「日米地位協定の諸問題」です。午後7時から、高田馬場のシチズンプラザです。

(6)10月13日(水)は高田馬場のライブ塾です。03(5348)4767 です。宮崎学さんで、「権力としてのマスメディア」です。

11月10日(水)は二木啓孝さん。

12月8日(水)は森達也さんです。

(7)今発売中の「実話マッドマックス」（5号・コアマガジン）の中村うさぎさんとの対談は好評です。「さすがはうさぎさんだ。うまい！」「今までの対談の中で一番いい」と皆に言われてます。ぜひ、読んでみて下さい。

(8)9月22日(水)のライブ塾に上田哲さんが緊急出演します。滝大作さん（作家）と対談します。現代マスコミ論、政治論をやります。私も聞きに行きます。皆さまもどうぞ。午後7時からです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン / 丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年9月27日

全ての始まりは『平成元年の右翼』だった

(1)天皇の名前を覚えること。そしてプロレスだね、右翼撃退法は

2ヶ月前、兵庫県西宮市にあるエスエル出版会の松岡社長から電話があった。エスエル出版会からは、『がんばれ！新左翼』『赤報隊の秘密』など、僕も何冊か本を出している。この出版社は、昔は新左翼の出版社だった。「エスエル」という名前からしてそうだ。ロシア革命の時の革命党派の名前だ。

『がんばれ！新左翼』は3巻まで出している。4巻目を出そうとしたが、連載していた雑誌がつぶれて、頓挫してしまった。そうか。今思いついた。じゃ、このHPに時々書いて、それをまとめるという手もあるな。

このエスエル出版会。今はむしろ、「暴露本」出版社として有名だ。ジャニーズとか宝塚とか、いろんな暴露本を出している。その松岡社長から電話がきたのだ。別に緊急の話ではない。僕が『ヤマトタケル』を送ってあげて、そのお礼の電話だったと思う。その時、「あっ、そうだ。東京からライターの与那原恵さんという人が訪ねてきましたよ。鈴木さんとも知り合いだと言っていました」と言う。

「へー、あの与那原さんが。又、どうして」と思った。別に新左翼の取材でもあるまいし。ジャニーズの取材か。「いや、宝塚のことを書いてると言っていましたよ。だから、いろいろと紹介してやりました」という。フーン、宝塚についての本でも出すのか。と、その時は思っただけだ。

ところが、『文芸春秋』（10月号）を見てビックリ。トップに出ている。「衝撃レポート・タカラジェンヌと創価学会」。この為の取材だったのか、とやっと分かった。たいしたもんだ。文章もうまいし、取材もしっかりしている。今、最も話題になっているレポートだ。

前に、このHPでもちょっと紹介したが、この与那原さん、僕はデビューか

らずっと知っている。元々は、図書館に勤めていた。図書館勤めから作家になった人といえば、阿刀田高さんや、その他にも何人かいる。彼女は子供の時から本を読むのが好き。文を書くのも好きだった。

都内の図書館に勤め、お金をためてから辞めた。フリーのライターになろうと思ったのだ。でも、すぐには生活できない。軌道に乗るまでは、「貯金」で食いつなごうと思った。堅実な人だ。ちゃんとプランを練って、実行した。

初め、編集プロダクションに入った。そして、最初にやった仕事が、宝島社の『平成元年の右翼』だった。昭和天皇が亡くなり、時代は平成となった。では、右翼はこの時代に、どうなるのか。それを特集した本だ。ブックレットのような薄くて、安い本だ。でも中味は充実している。いろんな団体が取り上げられ、いろんなリーダーがインタビューされた。僕もされた。

平成元年だから今から16年前だ。その時は、落合にジョナサンはまだない。その代わりといっでは何だが、もっと近い所に、「ロイヤルホステス」じゃなかった。「ロイヤルホスト」があった。早稲田通りに出た所にあった。家から歩いて100メートル位だ。便利だし、助かった。そこで、取材は全て受けてたし、夜中など、そこで原稿を書いたり、本を読んだりしていた。ところが、2、3年ずつぶれてしまった。残念だ。他にも、落合には3軒、喫茶店があったのに、皆、潰れた。東中野には大きな喫茶店が2軒あったのに潰れた。コンビニや薬屋、居酒屋になった。文化の破壊だ。おらに本を読ませまいとするフリーメーソンの陰謀だ。

さて、ロイヤルホストだ。そこで、『平成元年の右翼』の取材スタッフと会った。といっても宝島社の人ではなく、フリーのライターだった。それも、2人の若い女性だったのでビックリした。聞くところによると、フリーのライターを10人ほど投入して、この本を作っているという。「それで人手が足りなくて、私も使ってもらったんです」という。それが与那原恵さんだった。彼女の初仕事が、「右翼の鈴木邦男」の取材だったのだ。ライターとしてのデビューの仕事が僕だったわけだ。幸せだったのか、不幸だったのか。

一緒に来たもう一人の女性の方は大沢久子さんといった。その後も、いろんなところに書いていた。又、この時、投入されたライターで、後に、活躍してる人も多い。こわもての人たちを取材してすっかり度胸がついたのだろう。

この時のエピソードは一杯ある。あるライターは、これを書いた後に、そ

の団体に呼び出された。「こんな書き方はないだろう」というのだ。天皇陛下が亡くなった日、右翼の人たちは皇居に弔問に行った。ところが、その中に金のブレスレットをした人がいた。「こんな時に、それはないだろう」と批判して書いたわけじゃない。さりげなく書いただけだ。ところが、その団体は怒った。

「たとえ事実だとしても、そんなことは書くべきじゃない。わざと書いたのか。我々に対する当てつけだ」と。

でも、呼びつけられたライターも偉かった。たった一人で行った。初めは、一方的に怒鳴られて恐かった。でも、その怒鳴る右翼の人の座ってるソファに、一冊の本があった。それを見つけた。場違いな本だ。「週刊プロレス」だった。それで、ライターは言った。

「あっ、プロレスが好きなんですか？」その右翼は、「エッ？」と、驚き、「まあな」と言った。「それがどうした。今はそんな話をしてる時じゃないだろう」と右翼は思ったが、ライターは、強引にプロレスの方に話をもってゆく。「私もプロレスは好きなんです。それに空手もやってるんですよ」…と。お互い、好きな話だから、話がはずむ。「抗議」なんて忘れてしまい、すっかり「プロレスファンの二人」として、意気投合し、仲良くなった。うるわしい話だ。

この時の、ライターは、岩上安身といい、今は超大物のライターになっている。この時の体験が役立ち、その後の仕事にも自信をもったのだろう。

「趣味」のプロレスが身を助けたわけだ。呼びつけた右翼もはじめは「訂正記事を書け！」とか、「謝罪しろ！」とも言ったらしいが、でも、お互い、プロレスファンだと分かって、そんなことは全てナシになった。いい話だ。その後も、思想を超えて、仲良しになった。

もしかしたら、右翼にはプロレス好きの人は多いのかもしれない。だったら、右翼についてもものを書く人は、プロレス好きになっておく方がいい。それが、「右翼対処法」にもなる。あるいは、『ヤマトタケル』でも紹介したが、井上ひさし、矢崎泰久のように、歴代天皇陛下の名前を全部憶えておくとか。二人とも、右翼に抗議された時、これを言ったら右翼は帰ったという。「私だって国のことを考え、皇室のことを考えてるんです。天皇陛下のお名前だって全部言えますし。あなた方、愛国者の方々は、もちろん言えますよね。だから私が言いますから、正しいかどうか聞いて下さい」なんて、言われたら、右翼は帰っちゃうよ。

現に、昔、僕らは「不敬な井上ひさしを許すな！」と、彼に、嫌がらせの

電話をした。ところが彼は、一步も退かず、電話に出て、この「天皇の名前」を盾に逆襲してきた。奥さんが出た時も、この奥さんも同じことを言う。さらに、「右翼の人は普段はどんな暮らしをしてるんですか。朝から晩まで“国賊”を糾弾して電話してるんですか？好きな女性はいないんですか？結婚はしないんですか？普段何を食べてるんですか？」と“取材”してくる。うるさくてかなわない。

「バカヤロー！ウルセー！」と言って電話を切っちゃった。「もう、井上ひさしの家に電話をするのは嫌だ」と皆、言った。

…と、まあ、そんなことがあったんですよ。だから結論。「プロレスファンになる」「歴代の天皇の名前を憶えてる」。この二つですな。「右翼撃退法」は。

(2) 「右翼に取材に行って、行方不明になった人がある」だって

さて、与那原さんに話を戻す。この時、『平成元年の右翼』に投入されたのは猪野健治さん。さらに、その指揮下に新人ライターが10人ほど。中には不幸にも、右翼に呼びつけられた男性ライターもいたが、でも、これは例外だ。あとのほとんどは、取材がスムーズにいった。特に、この時、半数以上が女性だった。だから、右翼の方も、警戒心を解いた。いかつい右翼団体の事務所に、若く、かわいいライターが取材にくる。こりゃ、どこだって、歓待をする。「どうぞ、どうぞ。何だって聞いて下さい。何を書かれたっていいですよ。どんなことを書かれたって抗議したりしませんよ」と、あたたかく迎えた。

与那原さんと大沢さんに取材された僕だってそうだった。長い間、右翼をやってたけど、こんな若い女性に取材されたなんて初めてだ。大体、女性の友達もないし、女生と話をするのも初めてだった。（そんなことはないか）。それで、何でもペラペラと喋ってしまったようだ。

その時、与那原さんが言った言葉が忘れられない。

「私はライターになりたいから、どんな仕事でもやってやる！と引き受けたんです。初めは恐かったんです。だって、他のフリーの人に聞いたら脅されるんです。

“俺の知り合いのライターは右翼の取材に行ったまま行方不明になった。きっと、どこかに売り飛ばされたんだ”

全く無責任なことを言う連中だ。こんなことがあるわけがない。「右翼は怖いよ。そんな取材はやめなよ」と言い、その時、こんな、話をしたらし

い。ひどい話だ。

まあ、ライター仲間からは、さんざん、脅されて、ビクビクしながら、右翼の取材をした。

「でも、会ってみると、皆、いい人ばかりで。紳士だし、丁寧に話してくれるし。偏見が吹っ飛びました」と言っていた。僕の他にも、三人ほどの右翼に会ったようだ。野村秋介さんにもインタビューした。それですっかり野村さんのファンになった。そのあと、「週刊朝日」や「宝島」などでも、又、野村さんにインタビューしていた。「いい文章を書くね」と野村さんも評価していた。

そんなこんなで、与那原さんたちは右翼の人たちとも、すっかり仲良しになった。一水会の勉強会にも何度も来てくれた。ジャナ専や河合塾コスモの生徒をつれて、彼女の家遊びに行ったこともある。「沖縄料理をつくるから、生徒をつれて遊びにきなさいよ」と言われた。生徒を10人位、つれて大喜びで行った。皆、パクパク食べていた。食べながら、与那原さんから、「取材の仕方」や「原稿の書き方」を習った。生きた勉強だ。

生徒は、大喜びだった。しかし、あとで与那原さんに苦情を言われた。「今の若い子は礼儀を知らない」と。自分だって「若い子」じゃないか。でも「鈴木さんは生徒を甘やかしてる」と言われた。全員がそういうわけじゃないが、「ごちそうさま」も言わない人がいる。これは、他の家に行ったら困るでしょう」と言う。確かに、暗い子や、気分的に沈んで、黙りこくってる子もいる。まア、そんな子もいるだろうと思って、こっちは注意しない。「それが甘やかした」と強く叱られたのだ。若いくせに、古風なことを言う人だなと思った。

でも、彼女の言う通りだと、最近思う。子供の頃から、「自己主張」をするように学校では教えられる。しかし、それ以前に、もっと基本的なことを教えなくてはいけない。

親切にされたら、「ありがとうございます」と言う。間違っただけをしたら、「ごめんなさい」と謝る。この二つさえ、知っていればいい。「それでいい」はオーバーかもしれないが、これが基本だ。これを知らない人が多い。そのくせ、「自己主張」ばかりしようとする。これじゃダメだろう。イラクで人質になった人たちだって、言いたいことは山ほどあるだろうが、救出された時は、ともかく、「すみません」だけでいい。そして、救出してくれて、「ありがとうございます」と。それだけでいい。これがなかったから、「自己責任はどうした！」と責められたんだ。

(3) 9月27日、別冊宝島から『皇位継承と宮内庁』が出る！

それにしても、感慨深いものがあるね。今、別冊宝島の『平成元年の右翼』のことを書いている。ところが、この「主張」がアップされる9月27日には、別冊宝島の『皇位継承と宮内庁』が発売される。そこでも、僕は喋っている。『平成元年の右翼』の時と同じく、この本も、センセーショナルな話題になるだろう。女帝を認めるかどうかで「朝まで生テレビ」は激論を闘わせ、それはPHPから本になっている。『皇室は必要か！』という挑発的なタイトルの本だ。それに負けず劣らずの内容だよ、この別冊宝島は。表紙にはこう書かれている。

「平成天皇家」の苦悩から「皇位を巡る歴史ドラマ」まで。

シミュレーションでここまで見えてた皇統断絶の深刻！

愛子女帝誕生か？ 旧宮家の皇籍復帰か？

問題の核心！ 無責任官僚の巣窟「宮内庁」の病巣

歴史に見る皇位継承の事件簿 神武天皇から自称南朝の末裔まで

皇室かくあるべし！

松本健一、八木秀次、鈴木邦男

この「かくあるべし」の主張の一人が僕だ。では、この本の目次も紹介しよう。

第一章 皇室と皇位継承の危機

ここでは、皇太子殿下「ご発言」と雅子妃殿下の「苦悩」が取り上げられている。ここから、この緊急出版が決まったのだ。以下。

第二章 孤独な平成天皇家

第三章 語られざる明治・大正・昭和の皇室

第四章 日本人の物語としての皇統譜

第五章 皇室かくあるべし！

この第五章で、松本、八木、そして僕が喋っている。

松本健一「役人主導の“公務”は反皇室である」

八木秀次「皇統の本質は男系にある。不勉強な女帝論は世論をミスリードする」

鈴木邦男「神話時代のおおらかなる天皇への回帰を！」

という内容だ。9月27日発売で、1470円だ。

別冊宝島は、いろいろと衝撃的な本を出している。『保守反動思想家に学ぶ本』というのもあった。これは古典的な名著だ。ここで僕は、三上治さん

と対談している。あと、『隣のサイコさん』だったかな。僕の知り合いの作家・見沢知廉氏が、女性ストーカーに追いかけられた恐怖の日々のことを書いている。ともかく、面白い本が多い。

9月27日発売の『皇位継承と宮内庁』は、実は8月27日に出る予定だった。1ヶ月、遅れた。それだけいい本になっただろう。

取材されたのは8月6日(金)だった。「本当に緊急出版ですから。ゲラが8月16日に出ます。すぐ見て下さい。そして月末には出版します」と言う。ヒャー、大変だなと思った。しかし、目次をみても、これだけの内容だ。1ヶ月では出来ず、9月末の発売になった。

そうそう。この『皇位継承と宮内庁』が出る翌日の9月28日(火)には、例の本の見本誌が出来る。10月10日に全国の書店に並ぶ。これも衝撃的な本だ。今まで、50冊位、本を書いているが、これが一番キツかった。次週には、もっと具体的なことを紹介出来るだろう。

では終わりにするか。先週は9月11日(土)のことを書いたが、その前後のことを少し紹介しよう。

9月5日(日) 上田哲さんの選挙の報告会があった。渋谷で。

9月8日(水) ライブ塾で鳥井守幸さん(ジャナ専校長)とトークをした。「週刊誌よ、元気出せ!」のテーマで。

9月9日(木) 河合塾コスモの授業が始まった(二学期)

9月10日(金) 「日比谷一水会」から呼ばれて講演。プレスセンターで、「一水会」という名前は、いろいろあって、この「日比谷一水会」は会社員、経営者、自営業の人たちの勉強会だった。一水会つながりで呼ばれた。

9月11日(土) 中島らもさん追悼ライブ。

9月15日(水) ライブ塾。『ヤマトタケル』の読書会。

9月17日(金) 元北朝鮮工作員の安明進さんに会う。レコンキスタで木村三浩氏が対談したので、同席させてもらう。

9月18日(土) 日比谷公会堂。「教育基本法改悪ストップ!国民集会」に出る。日教組、解放同盟などが主催。「日の丸・君が代」について僕が喋ったビデオも流された。終わって、一緒にデモをした。詳しくは10月6日発売の「創」に書いた。

9月21日(火) ジャナ専が始まった。後期はニコマになった。9時から10時半までがライター科で「時事問題」。10時40分から12時10分までが文芸科で「現代史」。

夜、骨法道場の堀辺正史先生と対談した。

9月22日(水) 1時から、「レコンキスタ」の対談。野村秋介さんの秘書だった蜷川正大氏と。夜、ライブ塾。滝大作さんと上田哲さんの対談の予定だったが、上田さんは急病で来れなかった。

9月24日(金) 元過激派の大物と対談して本を作ることになり、その打ち合わせ。

【お知らせ】

(1)9月28日(火) 7時からロフトで三浦和義さんが出ます。僕も行きます。三浦さんの映画も上映されます。

(2)10月6日(水) 7時から一水会フォーラム。講師は宇垣大成氏で、「日米地位協定の諸問題」。高田馬場のシチズンプラザで。

(3)10月6日(水) 月刊「創」(11月号)発売。僕は、中島らもさん追悼と、日比谷公会堂の集会について書きました。

(4)10月13日(水) 7時からライブ塾。宮崎学さんと。テーマは「権力としてのマスメディア」。

ライブ塾は11月10日(水)は二木啓孝さん。

12月8日(水)は森達也さんです。そして、来年3月の予定も決まりました。作家の立松和平さんで、3月9日(水)です。立松さんは連合赤軍のことを書いた小説『光の雨』が話題になり、映画化もされました。この話を中心に、連合赤軍問題をやろうと思っています。

(5)今回、取り上げた与那原さんは、単行本も随分と出してます。『美麗島まで』(文芸春秋)。『街を泳ぐ、海を歩く』(講談社文庫)。『物語の海、揺れる海』(小学館)。『もろびとこそりて--思い出の場を歩く』(柏書房)などです。読んでみて下さい。

(6)岸田秀さん、松尾貴史さん、そして僕の「幻想まっしぐら」の第二弾の日程が決まりました。12月14日(火)の7時から、ロフトです。

(7)ロフトといえば、7月13日(火)、田代まさしさんとロフトで話しました。田代さんは、「金嬉老事件」のビデオを出したばかりで、僕も興味があったので、かなり話し込みました。「では、9月か10月に田代vs鈴木でトークをやりましょう。テーマは金嬉老で」という話になっていた。そして日程も決まった。だからその準備のため、金嬉老事件について書かれた本は全て取りよせて読んだ。金嬉老に会いに韓国にも行こうと思っていた。ところが、9月21日、田代さんは逮捕されてしまった。覚醒剤容疑だ。「実刑は免れない」と新聞には出ていた。「創」の田代さんの連載も休載になるそう。残念だ。

7月10日(土)にロフトで会った中島らもさんは亡くなった。7月13日(火)にロフトで会った田代まさしさんは捕まった。ロフトはのろわれているのか。あるいは悪いのは私なのか。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年10月4日

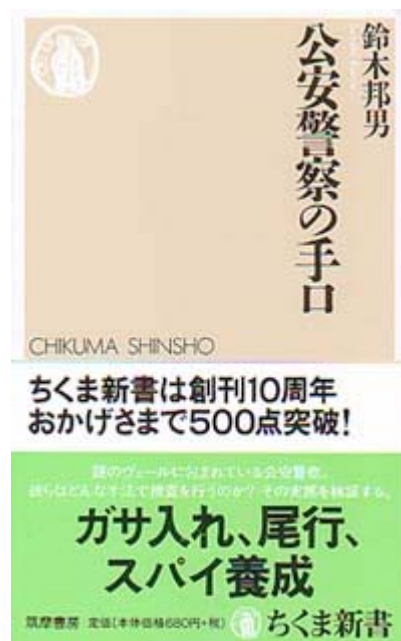
『公安警察の手口』（ちくま新書）が、いよいよ10月8日(金)に発売です！

(1) 1年かかり、苦勞して、やっと書き上げた

お待たせいたしました。いよいよ発売です。今週の金曜日、10月8日に全国の書店に並びます。私の『公安警察の手口』（ちくま新書・680円）です。

「これは売れますよ！」と、ちくまの担当者も言ってました。目立ちますよね。それに、タイトルで、ドキッ！としますよね。さらに、本の帯には、こう書かれています。

〈ガサ入れ、尾行、スパイ養成。 謎のヴェールに包まれている公安警察。彼らはどんな手法で捜査を行うのか？ その実態を検証する。〉



凄いですね。本屋で見たら、「おっ、これは何だ！」と思っちゃいます

ね。今までにない本です。思わず手にとってしまうでしょう。カバーの見返りのところには、こう書かれています。

〈急速に監視社会が進む日本。少しでも体制に衝突けば逮捕される時代になりつつある。こうした状況のなかで、不当逮捕を繰り返し、統治機構の末端で暴力を行使しているのが公安警察である。

しかし、その捜査手法は謎に包まれており、実態は明らかになっていない。いったいヴェールの向こう側では何が起きているのだろうか？ かつて赤報隊事件で公安警察の濡れ衣を着せられた経験を持つ著者が、その捜査手法や権力構造を照射し、知られざる公安警察の〈真実〉を追究する。〉

意気軒高ですね。体制に逆らい、歯向かってますね。そして、ズバリこの本の全体を紹介しています。ちくまの担当者が書いてくれたんです。優秀な人です。この人がいたから、この本は出来たんです。それに、筑摩書房も、よくこんな挑発的で、危ない本を出してくれたものだと思います。それに、これは何も僕が無理を言って作らせたのではありません。向こうから話があったのです。「エッ！ 本当ですか。ちくま新書でそんな本を出しているんですか？」と思わず聞いちゃいました。原稿を書きながらも、本当に出るんだろうか？と思いましたが、見本誌の出来た今になっても、まだ信じられない位です。では、目次を紹介します。

まえがき

序 章 やりたい放題の公安警察

第一章 公安警察の論理

第二章 組織構造と歴史

第三章 「潜在右翼」の発見

第四章 共産党へのスパイ作戦

第五章 新左翼へのスパイ工作

第六章 ガサ入れ、尾行、張り込みの実態

第七章 監視社会のゆくえ

あとがき

よく本になったなーと、今でも思います。特に、タイトルです。『公安警察の手口』です。別に僕が無理押ししたわけじゃありません。40年、公安には苛められ続けてきたから、その復讐か、と思われては困ります。そんな個

人的な感情は脱却しています。もっと広い視野から書いたつもりです。

本の話があったのは、去年の春でした。おととしの暮には、現代書館の『ヤマトタケル』を頼まれていました。だから、去年の夏休み（7、8月）で、『ヤマトタケル』を書き上げよう。冬休み（12、1月）で、『公安警察の手口』を書き上げようと思いました。去年1年間、この二冊のことだけを考え、関連の本を買い集め、図書館に通い、そして、関係者に話を聞き…と、大変でした。

いやー、「1年間で10年分の仕事をしたなー」と思いました。ところが、去年の苦労なんて、今年の苦労に比べたら、ほんの序の口でした。『ヤマトタケル』は、ゲラが出るのは遅れましたが、出てからは、スムーズにいきました。名前や地名、読み方などが、いろいろあって、どう統一するかとか、そういうことは大変でしたが、でも、全体的にはスムーズに行きました。そして、8月2日の発売になりました。イラストも多いし、とても楽しい本になったと思います。

ところが、『公安』の方は、原稿を書き上げてからが大変でした。一気に冬休みに書き上げたのですが、270枚を書くとなると、どうしても途中でダレてきたり、話があっちこっちに飛んだり…となる。「そこは書き直して下さい」「ここはダメです」と、担当者にビシビシと言われた。さらに、「組織と歴史も書きましょう。至急、書いて下さい！」と言われ、調べ直し、いろんな人に取材し、聞いたり…と大変でした。とりわけ今年は暑い夏なのに、さらに暑くなりました。

多分、半分以上は書き直しをしました。こんな体験は初めてです。とても自分の力の限界を超えてるよ。もう、ムリだよ。と何度も思いました。「こんな危ない本は出せるのか？」という不安よりも、「自分の力じゃ、書けないんじゃないか」という不安の方が大きくなりました。でも、この不可能に挑戦し、やり遂げなければ、ライターとしての新しい一歩はない。そう覚悟し、歯を喰いしばりながら、書き続けました。

「あとがき」でも書きましたが、初めこの企画がきた時には、「よくぞ、僕に話をもってきてくれた」と思いました。「これを書くのは僕しかない」とも思いました。でも、傲慢だったんです。「公安のことは全て知っている」と思ってたのに、そうではなかったんです。

(2)日本「最後のタブー」だわ、公安は…

それからは苦労でした。資料を集め、人に聞き、さらに「ああでもない」

「こうでもない」と、自問自答を繰り返し…と。さらに相手（公安）は、厚いヴェールに包まれている。人員も、何をやってるかも発表しない。殺人や強盗を捜査する刑事警察ならば、分かる。裏金などの不祥事があっても、バレルし、責任者が処分されるし、上の人間も顔を見せて謝罪する。

ところが、公安警察は全く顔が見えない。公安は全てが「裏金」だし、存在自体が「不祥事」だ。隠密のように、姿をかくし、スパイを育てている。左右の「過激派」だけでなく、おとなしい公党の共産党にまで、それをやっていて、膨大な金と人員を投入して、スパイを養成している。公安のスパイになった党员で、自殺した人もいる。しかし、誰も責任をとらない。「こんなことはやめよう」「公安なんかいらぬ」と言う人もいない。マスコミも、公安の問題だけは避けて通っている。

ある意味では、日本最後の「タブー」だ。誰もそれに手をつけぬ。

「でも、過激派がいるから、取り締まりのために公安はいるんだろう」「危険から我々を守ってくれてるんだろう」と反論する人もいるだろう。そう思う気持ちは分かる。しかし、殺人事件を追い、交通事故を調べる警察とは全く違うんだ。「人間が何を考えているか」を調べ、監視しているのが公安なのだ。人の心をのぞきこんで、取り締まろうとしている。それは本書を読んでもらえば分かる。

又、公安があることによって、左右の活動家も疑心暗鬼になって、「こいつはスパイじゃないか」と思い、内ゲバをやったり、暴走したりする。そうした事件の数々も紹介した。さらに、一般の市民運動や、ボランティア活動にまで、網を張って、監視社会化を強めている。

大体、60年代後半の、学生運動が激しい時に、それらを力で叩き潰すべく、公安は人員、予算が急増した。しかし、今、学生運動も左翼も右翼もない。「ない」と言い切ってしまうのは正確じゃないか。少なくとも当時の千分の1、あるいは1万分の1しかない。ところが、公安は昔のままだ。いや、人員も予算も増えている。

これは奇妙なことだ。「いや、まだオウムがいる」「革マルがいる」「潜在右翼がいつ暴発するか分からない」「国際テロもある」…と、理屈をつけて、公安は自らの存在と必要性を認めさせ、居直っている。そして最近は、「国際テロ」をことその他、強調している。「スペインの列車事故のようなことが明日にも起きるぞ」「まだまだ過激派いる。爆弾魔がひそんでいるぞ」「アルカイダとつるんでる奴らが日本にもいる」…と、大声で喚んでいる。

そうした情報の嵐の中で、人々は毎日、〈洗脳〉されている。「そうか。そんなに危ないのか。だったら公安は必要だ」「何とんでも〈安全〉が大切だ。少くから、不自由になっても仕方ない」…と思っている。

たとえば、渋谷や新宿の町で、警察官が通行人を呼びとめ、いきなり、「カバンの中を見せる!」と言っている。言われた人も、警察に逆らっても無駄と思ひ、おとなしく荷物を見せている。しかし、20年前、いや10年前だったら、暴動になった。「警察国家化を許すな!」「戦前の暗い時代に戻すのか!」と。

しかし今は、そんな怒りの声も起きない。闘う学生運動、労働運動もない。そして、公安警察だけは、どんどん強大化している。「いや、外国人犯罪は増え、少年犯罪も増えている。ストーカー、痴漢も多い。子供を虐待する親もいる」と言うだろう。その通りだ。

何度も言うように、警察は必要だ。だから、公安警察は全廃し、(あるいは最小限度にして残し)、それを全て、刑事警察に回したらいい。こっちの方が警察の本来の役目のはずだ。又、刑事警察は人手が足りなくて困っているのだ。

ところが、そんなことはしない。公安はエリート意識が強い。そして、刑事警察をバカにしている。「人殺しや強盗が捕まらなくても国家はビクともしない。しかし、左右の過激派は国家を転覆させようとしている。俺たちは、奴らから日本を守るために闘っているんだ」。そういうエリート意識だ。歪んだ〈愛国心〉だ。

それに、警察内部でも公安はエリートだし、出世コースだ。そうした問題もこの本の中では書いた。このエリート意識に対しては他の部署からの反撥もある。「公安警察と刑事警察」の対立といわれる構図だ。それらについても書いた。

(3)よく、こんなタイトルを付けたね。「手口」なんて

それにしても、このタイトルで、よく出してくれたと思う。だって、「手口」といったら、いい意味はない。「犯罪の手口」「殺しの手口」というように、〈悪の手法〉だ。公安に喧嘩を売っている。

はじめ、担当者は、『公安の手口』という本を書いて下さいと言ってきた。『公安の手口』か。いい。ゴ口もいい。スッキリしている。こりゃ、凄いと思った。ところが、「公安」だけでは、何のことか分からない人も多い。僕ら運動家にとっては「公安」といったら、すぐにピンとくる。だか

ら、『公安の手口』と聞いて、ヒヤーと思ったのだ。でも、一般の人々はちょっと分かりにくい。

それに、最近警察を批判する本や、告発本が多い。宮崎学もよく書いている。全部、刑事警察の不祥事を暴いている。こっちは、公安警察の不祥事を書いている。だったら、『公安警察の手口』と書いた方が、分かりやすい。そういう結論になった。

「しかし、こんな危ないタイトルで大丈夫ですか」と聞いた。「ウーン」と担当者は言っている。

「もし、これでダメなら、もっと温和なタイトルでもいいですよ。要は、この本が出ることが先決問題ですから」と僕ははつい弱気に言っちゃった。

たとえば、『公安警察の手法』『公安警察のお仕事』『公安警察の方々』…でもいいですよ。『公安警察の皆様、ご苦労さま』でもいいし。なんて言っちゃった。

「でも、そんなことを考える時点で、もう負けてますね」

と担当者にピシャリと言われた。叱られた。

あっ、そうか。と僕も目が覚めた。よし、じゃ、「手口」で行きましょう。「手口」しかないですね、と僕も腹をくくった。

そして、タイトルなどを決める会議も通り、校閲も通り、無事、『公安警察の手口』誕生となりました。バンザーイ！

ともかく、ちくまの勇気に心から感謝します。それに、出す時期もラッキーでした。『公安警察の手口』のカバーを見て下されば分かりますが、こう書かれています。

〈ちくま新書は創刊10周年。 おかげさまで500点突破！〉

10周年記念で出るんです。そして、500点突破の記念の時に出るんです。今月出るのは7冊。それで、500点突破なんです。「じゃ、僕の本は何冊目ですか？」と聞いたら、「498冊目です」よく見たら、背表紙の下に「498」と書かれている。これが私の背番号か。

これを聞いて、アレッと思った。『ヤマトタケル』は現代書館のフォー・ビギナーズ・シリーズの98冊目だ。498冊目と98冊目。何という偶然でありましょう。同じ「98」だなんて。8は八であり、「末広がり」をあらわすそうです。『ヤマトタケル』でも書いとりましたね。じゃ、幸せの薄かった私も、これからはハッピーになれるのかもしれない。さらに本もどんどん出て、売れるのかもしれない。

でも、せっかくハッピーな気分になってる時に、水をかける人もいるんですな。

「『ヤマトタケル』にも書いとったぞ。8は横に倒すと∞で永遠・無限を表わす。つまり、98というのは“苦しい生活が無限に続く”ということじゃ。これからも苦闘の旅は続き、貧乏のままじゃよ」…と。

せっかく、幸せ気分ひたっていたのに、ガックリきますね。

でも、そんな予言、数字占いに負けずに頑張りましょう。皆さんもよろしく。うん、売れるでしょう。と祈って、今週もおわり。

【附録】

(1)こりゃ、偶然じゃなかとよ。今年初め、「窪塚洋介と対談しませんか。あの人も右翼っぽいし」と、ある出版社から打診され、「よかとよ」と答えました。「じゃ、向こうにあたってみます」と言った途端に、本人がビルから飛び降りて、自殺。いや自殺未遂。奇跡的に一命は取りとめたものの、病院通い。対談はパーになった。

(2)7月10日、中島らもさんと会った。プロレスや格闘技、あるいは三島、野村さんの話をどっかの雑誌でやって、本にしましょうよと言っていた。ところが6日後に、階段から落ちて、その10日後に亡くなった。

(3)7月13日、田代まさしさんと会った。今は、真面目になって、「日々是精進」の生活を送っている。「韓国に行って金嬉老に会ってきました」と言っていた。彼のビデオをつくったのだ。もらって見た。文句なしに素晴らしい。力作だ。感動したし、ジャナ専の授業の時、生徒に見せてやった。僕も金嬉老には関心があった。野村さん、三島、は「立てこもり」で、思想を訴えた。だが、日本で初めて「立てこもり」をやって思想を訴えたのは金嬉老だ。その意味で、「立てこもり」のルーツだ。又、思想的なものにも共鳴するところがある。

「じゃ、ぜひ金嬉老について二人で対談して下さい」と「創」の編集長にいわれた。そして11月にロフトの日程も押さえてくれた。僕は金嬉老事件のあらゆる本を読み、資料を集めて勉強した。そして、よし、対談しようと、メモをまとめていた。ところが、9月21日、田代さんは逮捕されてしまった。覚醒剤で。残念だ。本人もかわいそうだが、対談をやる予定になってた人も、かわいそうだ。

(4)9月28日(火)、ロフトで三浦和義さんと会った。三浦さんの映画完成イベントだった。「三浦和義事件・もうひとつのロス疑惑の真実」を全編大公開した。いい映画だった。迫力あるし、感動的だ。現代の裁判やマスコミ批判

にもなっている。文句なしに感動した。上映会・トークで壇上に上がった。三浦さんは今は、冤罪事件の被害者支援などをやっている。刑事警察の暴力性を告発し、糾弾している。僕も、公安警察の暴力性を告発した。じゃ、どっかで対談して本にしましょうや、となった。今度は大丈夫でしょう。

【お知らせ】(1)アレっ？ 9月27日に別冊宝島から『皇位継承と宮内庁』が出ると言っていたけど、出ないじゃないか。これは私が言っていただけ？ 権力の弾圧で発行が潰れたのかな。あるいは私の聞き違いで、本当は「発行は、10月7日」なのかな。手帳には、そうメモしてるようにもとれる。「10月7日」と「9月27日」を間違ったのかな。こいつは。なんせ、字が汚いから、読めんのじゃよ、こいつは。あとでキツク叱っておきやしょう。

(2)10月6日(水) 7時から、シチズンプラザで、一水会フォーラムです。講師は宇垣大成氏で、「日米地位協定の諸問題」です。

(3)10月6日(水) 月刊「創」(11月号)発売です。僕の連載もあります。田代まさしさんの連載は今回を限りに、しばらく休載だそうです。東スポには「実刑5年か」なんて出てました。そんなに長くなるのでしょうか。残念です。

(4)10月8日(金) 私の『公安警察の手口』(ちくま新書)が、発売です。680円と安い本ですので買って見て下さい。そして、批判、悪口なんでもいいですから、BBSに書き込んで下さい。

(5)10月13日(水) 7時からライブ塾。宮崎学さんと「権力としてのマスメディア」。宮崎学さんは警察の不祥事を告発する本も、随分と出している。私の『公安警察の手口』も読んでもらい、〈警察悪〉についての話もしてみたいと思います。

(6)今、発売中の『わしズム』(vol.12)の後ろのページに、骨法道場の堀辺正史先生と小林よしのりさんが対談した時の写真が出てます。

〈『格闘技通信』(9月8日号)に掲載されたこの対談では“武士道”について熱く語っています！〉

そして、

〈対談のあとには、“優しい右翼”の鈴木邦男さんと一緒に、夕食をいただきました〉

と出てました。小林さんの秘書さんが書いてくれたんですな。そして堀
辺、小林そして私の写真も出てました。嬉しいですね。でも今や、小林さん
の方が僕よりもずっとずっと極右ですよ。激しく闘ってますよ。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年10月11日

「軍縮」と「死刑廃止」は日本史に学べ！

(1)日本の「反戦平和」の理想を具現した将棋のルール

将棋の本を読みながら、「戦争と平和」について考えた。さらに、「武士道」について考えた。

将棋は1000年以上も昔から連綿として伝えられ、皇族、貴族から僧侶や武士、そして庶民にいたるまで人々に愛されてきた。とすれば、これはすでに〈文化〉だという。これは永世棋聖の米長邦雄が言っていたのだ。NHK人間講座の『大局を観る』で言っていた。さらに、こう言う。

〈そう思って将棋を見直してみれば、電気を使わずに木の素材だけを用いたところといい、礼に始まり礼に終わる作法といい、取った駒を再び使うことができるルール（つまり戦死者のいない戦い）といい、負けたほうが潔く「負けました」と言ってはじめて勝負が決まる終わり方といい、すべて現代の日本では失われた、古く美しいものから成り立っていることに気づきます。将棋とは日本の伝統文化のみならず、今や変わり果てた日本の姿を映し出す鏡でもあることに、目から鱗が落ちるような気持ちになったものでした。〉

そうか、「戦死者のいない戦い」か！ これは凄い。世界中に、将棋と同じようなものが沢山あるが（昔のものを含めると100以上あるような）敵の駒を自分の駒として再び使い、戦死者がいないのは、他にない。チェスにしても…。又、チャトランガ（インド）、象棋（中国）、シャタル（モンゴル）、マークルック（タイ）もそうだ。皆、激しく闘うだけだ。そして死んでゆく。戦死者のいないのは日本の将棋だけだ。

そう見てくると、日本は案外と平和な国だったのではないか。僕らは自虐

史観で習ったせい、日本は野蛮な国で、戦争ばかりしてた国民だと思ってきた。しかし、将棋にすら、「反戦平和」の思想が宿っている。もしかしたら、これからの未来の世界平和を先取りした理想があったのかもしれない。

それに、日本の平安時代には350年にわたって死刑が廃止されていた。これは世界の歴史においても例がない。今、「死刑を廃止すべきか」で日本でも論議がある。世界中では死刑を廃止する国も増えている。日本では馬鹿な保守派が中心になって、「死刑を廃止したら凶悪犯罪が増える」と煽っている。しかし、平安時代に日本は世界に例のない「死刑廃止国」だったのだ。未来を先取りしてたのだ。「死刑廃止」と「戦死者のいない将棋」。この二つに代表されるように、日本は平和国家だったんだ。少なくとも、平和を切実に希求する国だったし、国民だったのだ。そう思ったら、何と、米長も同じことを考え、言っていた。

まず、何故、将棋には、「戦死者がいない」という不思議なルールが生まれたかだ。おそらくそれは、日本がイスラム教やキリスト教のような厳格な一神教の国ではなく、ゆるやかな多神教の国であり、それによって形づくられた日本人独特の寛容な精神に基づいているのではないかと米長は言う。

さらに、米長は死刑廃止の歴史について触れる。薬子の変（弘仁元年・810）から保元の乱（保元元年・1156）までの約350年間、すなわち、ほぼ平安時代の全期間にわたって、国家による死刑が行われなかった。これは歴史上、稀なことだという。

さらに米長の凄いところは、「戦死者のない戦争ゲーム」と「死刑廃止」はつながりがあると云ってる点だ。こう言う。

〈…とすれば、厳密な年代設定はともかく、死刑を行わなかったという歴史的事実と戦死者のいない特異な将棋のルールとは、やはり何かつながっていると思わざるを得ません。私は、その両者をつなぐ何かとは、多神教によってつちかわれた寛容な日本人の精神というものであり、そのことが日本の、日本人のすばらしさというものだろうと思っています。そういう観点から見ると、将棋とは何と奥行きのあるすばらしいゲームであることかと思えます〉

そうだったのか。知らなかった。この点は、歴史学者もキチンと書く必要があるだろう。現代の死刑廃止論者は、「人権」の点から死刑廃止を訴えて

いる。又、「人を殺してはいけない」と国家は言いながら、その国家が人殺しをしている。これは許されない、と言う。死刑にされる人間の人権もある。それと同時に（それ以上に）、死刑をする刑務官の人権もある。つまり、裁判官は「死刑」と判決するだけだ。自ら手を汚して死刑囚を殺すわけではない。判を押す法務大臣もそうだ。しかし、刑務官は自分の手で死刑を執行する。「人殺し」を強要されるわけだ。こんな人権無視、人権蹂躪はない。

「でも、何人も殺した奴や、子供を誘拐して殺した奴は死刑にするしかないだろう」と言う人もいる。「そんな奴が、いつか又、出所したら大変だ」と…。だったら、出所させなければいい。今、日本に「無期懲役」はあるが、一生、獄にいるわけではない。20年位で出る。だから、アメリカのように、「懲役150年」とか「200年」とかをやればいい。200年生きてたら、釈放してやればいい。又、「いや、死ぬまでいるのはいやだ。殺してくれ!」と願う死刑囚の為には、「自殺の権利」を認めてもいい。武士らしく死にたいと思う人には公儀介錯人をつけて、切腹も認めたらいい。これだけで日本文化の復活だ。

さて、蛇足ながら。だからといって、死刑のなかった平安時代を、余りに理想化することもない。国家による死刑はなかったが、殺し合いは、日常的にあったし、戦闘もあった。それに、今のような「人権的な理由」で死刑が廃止されていたのではない。人を殺すと崇る、と思われていた。だから死刑にしないで、島流ししたり、重労働を課したり、死ぬまで牢屋に入れたり…と、したのだ。つまり、〈迷信〉が死刑を廃止したのだ。

だって、飢餓や、天変地異は、死んだ人間の怨みのせいだと思われていた。だから、怨みをのんで死んだ人間をお祭りして、怒りをしずめた。平将門や菅原道真だって神社をつくって霊をしずめた。さらに、祟りの元凶になるからと、死刑をやめたのだ。

これも「多神教」による寛容さかもしれない。一神教ならば、そんな〈迷信〉が生まれなかつただろう。

でも、現代のような一神教的・啓蒙的・合理的立場に立って、迷信を排除し、死刑を行うよりも、迷信に基づいて死刑を廃止してた時代の方が、ずっと進んでいたし、精神的に豊かだったと思うよ。違いますかね。

(2) 「武器の進化」を止めた世界唯一の国なんだ、日本は!

もう一つ、蛇足ついでに。日本は平和国家だったという例証だ。日本は、

武器の進化を止めたのだ。大体、武器は常に進化するものだ。刀から鉄砲になったら、もう後戻りは出来ない。さらに機関銃、大砲へと進化する。しかし、その戦争の常識に逆らったのが日本だ。

種子島に鉄砲が伝えられ、信長は大量生産し、鉄砲を使い、日本を統一した。しかし、その後、鉄砲は消え、再び刀の世界になった。こんなことは世界に例がない。このことを研究した、ノエル・ベリンは『鉄砲を捨てた日本人』（中公新書）という本を書いている。サブタイトルには、「日本に学ぶ軍縮」とある。つまり、これも世界平和を先取りしてるのだ。本のカバーにはこう書かれている。本の内容を簡単に紹介している。

〈16世紀後半の日本は、非西欧圏で唯一、鉄砲の大量生産に成功し、西欧のいかなる国にもまさる鉄砲使用国となった。にも拘わらず江戸時代を通じて日本人は鉄砲を捨てて刀剣の世界に舞い戻った。武器の世界において起るべからざることが起ったのである。同時代の西欧では鉄砲の使用、拡大によって戦争に明け暮れていたことを考えると、この日本の〈奇跡〉が示唆するところは大きい〉

つまり、「軍縮」と「死刑廃止」という未来世界のテーマが、日本ですでに実現されていたのだ。今、「9条連」という集まりがある。憲法9条を守るだけでなく、それを世界に拡めようという運動だ。だったら、この「軍縮」と「死刑廃止」の方が説得力がある。だって、9条は、アメリカから押しつけられて、仕方なく受け入れたものだ。それに比べ、「軍縮」と「死刑廃止」は日本が実際に断行し、実行してきたことだ。「世界は日本を見習え！」と自信を持って言えるだろう。

最近読んだ現代文のテキストにも、この鉄砲の話は出ていたな。佐々木力の『学問論』だ。

かつてテクノロジーは人間の目標を達成してくれるよき道具、ないし手段とみなされた。テクノロジーが悪用されることはあっても、それを使う人間が悪いのであり、テクノロジーそのものは本質的に善いものとされた。技術者は社会的責任を免罪され、責任は一方的に悪しき政治家に転嫁された。

しかし、そうではないだろうと佐々木は言う。テクノロジーも社会的に構成されたものであり、社会の欲望の関数だという。反対に、人間の欲望も自律的なものでなく、テクノロジーの関数なのだ。この辺、現代文のテキストになるような文章だから、表現が難解だ。

分かりやすく言えば、必要のないものでも発明されると、アホな国民はワッと群がって使ってしまう、ということらしい。ウォークマンや携帯電話などがその例だ。別に、必要だから使ってるわけじゃない。あるから、使ってみたら手放せなくなり、その依存症になってるのだ。ギャンブルも酒もそうだわさ。だから時には、「こんなものはいらん！」とテクノロジーの進化を止めればいい。捨てればいい。しかし、今、「民主主義」の世の中ではそれは出来ない。下らない番組しかないからといって、テレビを廃棄することも出来ない。軍備の拡張競争もそうだ。

でも、日本はかつては「軍拡」をやめた実績がある、と佐々木は言う。

〈…しかし、より根源的なのはテクノロジーの方ではなく、社会の方なのである。それゆえ、場合によっては、ある種のテクノロジーは消滅することを鼓舞される。たとえば、ほとんどの軍事テクノロジーがそうであろう。現在もしくは未来にそういったテクノロジーの消滅が期待されるだけではなく、かつての日本は実際ある種の軍事テクノロジーを馴致することに成功した。徳川時代における鉄砲である

織田信長の時代に日本は鉄砲技術の世界最先進国であったと見なされうる。しかし、ほとんど政治的・軍事的紛争を免れた安定した徳川時代の政体は、一般に鉄砲のような武器を必要としなかった。それでその技術は衰退した〉

そして、こう結論する。

〈社会はテクノロジーによって無分別にリードされるべきではなく、社会が真に必要な健全なテクノロジーのみを選択的に備えた。いわば自己意識をもつ成熟した社会に成長しなければならぬ。〉

織田、豊臣、そして徳川と。日本は世界に例のない〈軍縮〉をやったんだ。もっとも、鎖国してたから、それが出来たということもある。だって、明治維新になって、西欧列強と肩を並べようとした時は、急に軍拡につぐ軍拡だ。そして日清、日露の戦争をやり、大東亜戦争になった。だったら、明治維新などやらずに日本はずっと鎖国をしていればよかったのか。そうしたら、「非武装中立」の国として、これ又、世界の未来を先取りした国になったかもしれない。

でも、それは無理か。明治維新をやらなかったら、国家として自立出来なかったろう。それにしても、平安時代の「死刑廃止」と徳川時代の「武器の退歩＝軍縮」は世界に誇っていい。問題なのは、明治維新以降、こうした日本人の〈知恵〉が全く生かされなかったことだ。西欧列強と肩を並べなけりゃと思うあまり、「西欧列強の論理」に呑み込まれたのだ。いわば、「一神教の原理」に呑み込まれ、日本人が本来もっていた「多神教のよさ」を捨て去ったのだ。これは大きな問題だ。

鉄砲は必要がなかったから衰退したのではない。意図的に衰退させたのだ。つまり、わざと「不便なもの」「不自由なもの」に戻ったのだ。戦争をやれないために、そうしたのだ。勿論、政権を握ってる側の論理だ。各藩が武器を大量に持っていたら、何かあったら大変だ。刀なら、一人は一人だ。ところが鉄砲なら一人で十人分、百人分になる。小さな藩でも反逆したら怖い。そうした鉄砲の利便性を恐れたのだ。

さらに、参勤交代をさせて金を使わせ、武器に金を回せないようにした。城の改修も禁じた。さらに、日常生活でも、明らかに〈不便〉なことが長く続いた。たとえば正座にしても、歩く時の袴にしてもそうだ。長く引きずった袴を踏んづけて歩いている。歩きにくい。歩き難くすることで、「早く歩かない」「争いを起こさない」ことを目論んだのだ。（でも、吉良上野介は斬られたね。必死に逃げたけど。あの袴じゃ、逃げるのにも邪魔だ）。

戦国時代の武将は皆、軍議の時でも戦場でも椅子に座っている。その方が動きやすいからだ。足も楽だし。でも、椅子は武士の日常生活には普及しなかった。明らかに便利なのに。多分、お城でもどこでも、敢えて「不便」を採ったのではないのか。争いを避けるためにだ。つまり、テクノロジーをコントロールするストイシズムを日本人は持っていたのだ。

(3)GHQと闘い、論破したのが将棋の升田幸三だよ！

さて、米長邦雄の本に戻る。NHKのテキストだから、本を読んでもいいし、テレビを見てもいい。ともかく、将棋の話に戻る。この将棋にも試練が訪れる。平和な思想を表現した将棋なのに、何と、敗戦後、GHQはこの将棋を目の敵にした。「取った駒を兵隊として使うというのは捕虜の虐待だ！」と難癖をつけたのだ。冗談だろうと思うかもしれないが、本当だ。

GHQが教科書に墨を塗らせた。歴史や地理を廃止した。柔道や剣道も禁止した。歌舞伎の「勧進帳」や「忠臣蔵」も上演禁止にした。たとえば、「忠臣蔵」は仇討ちの話だ。日本人はこれを大変好んで観ている。年末は必ず観

てる。これは、「今に見ている。アメリカの大統領の首を取ってやるからな」ということにつながってくる、と考えたのだ。 そんな馬鹿な、と思うかもしれないが当時のGHQはそう思ったのだ。とにかく、特攻隊をやるような民族だ。何をするか分からない。反抗の芽は全てつんでおこうと思ったのだ。

さらに、GHQの矛先は将棋にも向けられた。そこに呼び出されたら生きて帰れないとさえ言われたGHQに将棋の代表が呼び出された。出て行ったのは升田幸三だ。これが又、凄い話なのだ。米長が升田から実際に話を聞いたというから本当のことだ。本文を引こう。

〈さっそくホイットニーからの質問です。 「日本には将棋という野蛮なゲームがある。われわれのチェスと違って、取った駒を兵隊として使うが、これは捕虜の虐待である。日本軍の捕虜虐待につながる思想ではないのか」

これに升田先生が応じます。

「取ってきた相手の駒を、例えば飛車を歩として使ったり、角を歩として使うのであれば虐待だが、その駒の肩書きどおりに使うのは人間の活用であって虐待とはまったく違う。その人の持つ能力を尊重し活かす。これこそ民主主義だ」

ホイットニーも応戦します。

「チェスの駒は芸術品。美術品であり、チェスは知的で優雅な世界最高のゲームである。クイーンという駒もあって、女性を大事にしている。日本では男が威張ってばかりいて、だから戦争を起こすことにもなるのだ」。これに対して先生は「閣下、キングとクイーンの両取りをかけられたとき、キングはクイーンを犠牲にして逃げるのではないか。女性尊重だのレディファーストだのとしきりに言うけれども、あれはどういうわけだ」と斬り込みます。〉

ヘエーと驚きましたね。GHQを相手にして将棋界の人がこんな闘いをしてたなんて。日本史では全く習ってない。学校も教科書も教えない日本史だ。こうした歴史はキチンと書いて、教えるべきだよな。それにしても、チェスと将棋をめぐりよくもこれだけ壮大な話になるもんだと感心した。

升田はさらに、「民主主義、民主主義と唱えるより、人材を登用する日本の将棋を勉強して政治に活用したらどうだ」などと追い打ちをかける。凄い

ですね。GHQに説教してるよ。

〈やりこめられたホイットニーは、堂々とした升田先生とその話に感心し、この国の統治について知恵を貸してくれと頼みます。升田先生はビールをくれたら教えてやると言って、「チェスのルールではこの国は治まらない。将棋のルールを活用することを勧める。巣鴨プリズンに捕らえられている政界人や財界人をうまく活用すべきだ。彼らを手駒として活用したらどうか、将棋のルールを以てしか、この国は治められない」と助言します。〉

ヒャー、GHQを相手によく、これだけのことを言ったもんだ。本当にここまで言い切ったのかな。多少は誇張もあるんじゃないのかな、とは思いますが、基本的には真実なんだろう。この件については、もっと他の本も調べてみよう。しかし、ここまで断言するとは凄い。占領軍を相手に、一番しっかりとしたことを言ってるのが将棋界だ、ということになる。

特に「戦犯を釈放して使え」というのは凄い。僕も『ヤマトタケル』に書いたけど、明治維新の時の政府なら、やったね。これ位の腹を持ってた。度量があった。その証拠に、函館で敗れて捕らえられた賊軍の大將、榎本武揚、大島圭介を政府は高官に登用して使っている。ただ、大東亜戦争の時はどうだろうか。国民の心も変わっている。GHQが「よし！将棋の精神で戦犯を使ってやろう！」と思っても、日本人の心が反撥したのではないだろうか。すでに日本人の心が荒み、「チェスの精神」になっていたんだよ。私はそう思いますね。さて、米長は「GHQvs升田」の闘いを紹介した後に、こう結論づけてます。

〈占領下という時代の刻印はあるにしても、たしかに升田先生の話には、取った駒を再び使おうという将棋のルールについてのみごとな洞察があると思います。こうして、古代インドで発生したゲームが、時代と地域を経て日本に伝わり、思えば日本の将棋の歴史は、一千年以上になるわけです。これほど長い時代にわたり人々に愛好され、連綿と受け継がれれば、すでに将棋は一つの伝統文化であると言ってよいと思います。〉

ここで思い出した。この前、テレビでマイケル・ムーアの『ポーリング・フォア・コロンバイン』をやっていた。アメリカで凶悪犯罪が多いのは銃社会だからだ。それを追究している。と共に、暴力的な映画やテレビも影響し

ている。さらに、日本のゲームも大いに影響しているという。暴力的な、殺伐としたゲームは全て日本製だという。この点では、日本がアメリカを侵略し、子供の心を蝕んでいる。アメリカからの自立は必要だが、同時に、日本のこうした侵略は改めるべきだ。

米長の「取った駒を使う」ということだ。昔、僕らが見た映画は、「悪人が改心する」というのが多かった。悪人だから斬り捨てるというのは少なかったような気がする。悪人でも人間だ、何とか改心させて、仲間にする。これも「将棋の思想」であり、「多神教の寛容さ」なのだろう。と、そんなことを思い出した。あーあ、今週は難しい話をしちゃった。

【お知らせ】(1)『公安警察の手口』（ちくま新書）は読んで頂けましたか。タイトルもハツとするし、売れ行きも順調のようです。

(2)10月13日(水)のライブ塾は宮崎学さん（作家）とのトークです。「権力としてのマスメディア」です。マスメディア論と警察論をやろうと思います。宮崎さんは警察の腐敗を糾弾する本を多く出しています。

(3)別冊宝島の『皇位継承と宮内庁』（宝島社・1200円）は凄いですね。意欲的な編集です。素晴らしいです。天皇論、女帝論ではこれ一冊読めば完璧です。こんな立派な本の中に僕なども加えてもらって恥ずかしい気もしますが。でも、とにかく、いい本です。永久保存版としてぜひ買ったらいいでしょう。

(4)『格闘技通信』（11月8日号）で、「武士道待望論」と題し、骨法道場の堀辺正史先生と私に対談をしております。

(5)月刊『創』（11月号）は田代まさしさんの逮捕直前に書いた原稿が載っています。私の連載は「お笑いでエロスと漢方」です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年10月18日

よし、『続・公安警察の手口』も書いたらるか！

(1)公安の被害者が立ち上がり、本を買ってくれたんや

こんなにも公安に虐められてる人がいるんだ。と痛感した。だって、本を読んだ人から毎日のように電話がくる。『公安警察の手口』（ちくま新書）が都内の書店に並んだのが10月7日(木)だ。地方だと8日か9日だろう。7日の夜から、電話がひっきりなしに鳴る。

左翼の人が多く。「公安」「手口」と言われると、すぐにピンと来るらしい。「よく書いてくれた」という人が多い。「本当は我々左翼がやらなくてはならないのに…。ありがたい」と礼を言われた。「こんな大きな出版社が、よくこんな危ない本を出してくれましたね」とも言われた。その意味では、ちくまに感謝している。

新左翼出版社ではなく、大手・中立のちくまだったのが又、よかったようだ。苦勞して書いただけのことはあった。「これで初めてライターとして認められるんじゃないですか」と言う人もいる。そうなりたいですね。ありがたいです。

今、活動してる人。元活動家だった人からの電話では、具体的な話を聞いた。革労協の人もいた。ここは、「内々ゲバ」までやって殺し合いをしている。それもナイフで刺殺している。ここにも公安の影があるという。公安が殺人をやってるわけではないが、情報操作をし、殺し合いを煽り、エスカレートさせている。「僕の親友まで殺されたんです！」と言って、電話口で突然泣き出した。まいった。「左翼電話相談室」になっちゃった。

「たしかに公安は悪い。それを訴えるためにこの本を書いた。しかし、公安の煽りに乗り、人を殺してる君達が一番悪いんだ」と、さとしてやった。これは中核、革マルにも言えることだ。公安の「手口」に乗ってはならない。それを知らせるために書いた。

中には、運動とは全く関係のない人からの電話もある。「あの一、うちのアパートの隣りの人はピストルを持ってるんですが。警察に言うべきでしょうか」と相談してくる。「市民の義務としては通報すべきですが、仕返しがこわくて…」と言う。深刻な悩みだ。僕も真剣に話してやった。

時には、明らかに電波系というか、いっちゃってる人の電話もある。メチャ面白いのもあるが、紹介すると、「なんで書いたんだ！」と又、深夜に電話がくる。だから書けん。

中には、「こまったな」「迷惑だな」と思う電話もある。しかし、本を買ってくれた読者だし、大切にしなくっちゃ。それに、「匿名集団＝公安」を批判してるんだ。こっちは住所も電話も明らかにして、批判は受けなくっちゃ、と思っている。

元赤軍派議長の塩見孝也さんから電話を頂きました。「うん、これはいい。鈴木君の本の中ではこれが最高だ。よくやった」と、初めて褒められました。塩見さんは今、20年に及ぶ獄中体験について書いていて、11月に出版するそうです。「出来たら、二人で対談しよう」と言われました。いいですね。やりましょう。

「レコンキスタ」（11月1日号）には、横山孝平氏が書評を書いていた。ありがたい。なかなかいい文章だ。それに、この本の「初めての書評」だ。それに僕の知らないこともあった。だから紹介しよう。

〈ちょっと厄介な、すごく物騒なタイトルの本が10月10日、筑摩書店から出版された。

その名もズバリ『公安警察の手口』（ちくま新書・定価680円＋税）。著者鈴木邦男。『ヤマトタケル』に続き本年2作目の出版。精力的な執筆活動に頭が下がる。同時に、顧問の書道五級の原稿を入力された方にも頭が下がる（これは権力に対する組織防衛上あまり公開してはいけないことか?）。ともかく初版1万2千部、大々的に発売される。この本は、故野村秋介先生と鈴木顧問の対談「反共右翼からの脱却」の中で預言されていた。野村先生は、「警察がどう仕掛け、どう切り崩してくるか。連中は連中なりの定石があるんですよ。そういう意味では我々も『腹腹時計』みたいなものをつくらなくてはならない」と断言され、それに対して顧問は、「連中のやり口を暴露して、それに対するガードを固めなくては」と答えている。

その対談から約30年。現代の、誰でも読める『腹腹時計』としてこの本が発売される。「ユーモア」と、ときたま覗かせる「悪意」。様々な弾圧を乗り越えてきた顧問だからこそ書ける内容の濃い一冊である。活動家は勿論のこと、そうでない方も是非ご一読を！)

うれしいですね。好意的に紹介してもらって。

しかし、「30年前の預言」は、すっかり忘れていた。野村さんとこんな話をしたのか。そして、この本が「現代の腹腹時計」なのか。自分でも知らないことを気付かせてもらった。野村さんと、こんなやりとりをしたことも忘れていた。でも、きっと潜在意識の中であって、今回の本になって実現したのでありましょう。

前にもちょっと書いたけど…。1970年に三島事件があり、72年に連合赤軍事件があった。そして74年に、東アジア反日武装戦線〈狼〉による連続企業爆破事件があった。この〈狼〉グループの教典が『腹腹時計』だった。爆弾の作り方が書かれ、さらに、「活動家の心得」が書かれていた。公安対策は勿論、その辺のだらしない左翼とも付き合ってはいけないと、書かれていた。そのストイシズムに衝撃を受けた。それで、僕は『腹腹時計と〈狼〉』（三一書房）を書いた。この時は2万部売れた。

一般には売れたし、左翼の人が買ったようだ。でも、右翼の人からは評判が悪かった。「公安を敵にしている。これはおかしい」と露骨に言われたこともある。「だって敵じゃないか」と思ったが、大部分の右翼の人にとっては、「公安は味方」なのだ。共産革命を阻止するための「仲間」なのだ。まいったな—と思った。でも、野村さんだけは理解し、評価してくれた。「今の右翼は、その辺が分からない。三島由紀夫の叫びだって、受け取れない。だから、〈狼〉にこだまし、それから右翼にくるんだ」と言っていた。感性の鋭い人だなと思った。

この時、三一新書で出した『腹腹時計と〈狼〉』のサブタイトルは『〈狼〉恐怖を利用する権力の謀略』だった。つまり、〈公安〉のことを書いている。デビュー作がすでに「反公安」の本だったんだ。そういえば、「レコンキスタ」に「反公安学入門」という連載があったな。あっ、おいらが書いたのか。忘れていた。それを基にして、僕は、『右翼・公安用語の基礎知識』（コアラックス）を書くわけだ。たまたまそれを見たちくまの担当者が、じゃ、『公安の手口』を書きませんか、という話をもってきたわけ

だよ。

つまり、全ては1974年の〈狼〉事件なんだ。あの事件がなければ、あの本も、この本も出なかつたらう。『腹腹時計と〈狼〉』は今は絶版だ。しかし、書き直して今は彩流社から出ている。『テロ』と題名も変わって。サブタイトルは「東アジア反日武装戦線〈狼〉と赤報隊」だ。赤報隊のことを加えたのだ。

でも、『テロ』だと、分からない人がいる。だったら、昔の名前に戻って、『腹腹時計と〈狼〉』にして復刻してくれればいいのに。あるいは、どっかで文庫にしてくれたらいいのに。「幻冬舎のアウトロー文庫なんかがいいんじゃないの。お前の存在そのものがアウトローなんだし」と言う人もいた。宮崎学さんにでも頼んでみっかな。

(2) 「悪意」なんか無いのにね。善意のかたまりなのに…

さて、再び、レコンの書評に戻る。気付かなかった「預言」は、教えられた。しかし、〈「ユーモア」と、ときたま覗かせる「悪意」〉って何だ。ユーモアはあるだろうが、「悪意」はないぞ。いや、この本の性質上、真面目に書いたから、ユーモアも余りないと思うよ。まして、おいておや、あにはからんや、「悪意」なんて…。大体、おらは、「善意のかたまり」と皆に言われている。オドオドと、遠慮しいしい生きてきた。小心者じゃけん、ビクビクしながら、他人に気を使いながら生きてきた。どこに「悪意」があるのでしょうか。

でも、善人は早死にするというからね。「悪意」が少しでもあるなら、かえって、いいことだ。「悪党」になって、長生きしてやりませう。

そうそう、「悪意」で思い出した。「邪眼」という言葉がある。「イーブル・アイズ」というんだそうな。この眼を持っている人が「悪意」を持った人か。この「邪眼」は中島らもさんの本で知った。『らもチチ。わたしの半年〈青春篇〉』（講談社）という本に出とった。変なタイトルの本だと思って衝動的に万引きして、読んだ。いや、違う。衝動的に図書館から、（キチンと手続きをして）借りてきたんだわい。

『らもチチ』というから、中島らもさんのオッパイかと思った。しかし、違うんだな。らもさんと、チチ松村という人の対談だ。男なのに、チチ松村だ。（じゃ、女だったら、チンポ松村か）。

「青春篇」があるから、「中年篇」もある。そして、「熟年篇」「老年篇」と出す予定だった。でも、らもさんは中年篇の半ばで死んでしまった。

残念だ。

この「青春篇」に、「ジャガーの眼」じゃなかった。邪眼（イーブル・アイズ）の話が出てるんだ。どんな話だったのかな。街を歩いていて、新婚さんを見かけた。「いい乳だな。いいケツだな。今夜二人はやりまくるんだろうな。俺もまぜてくれよ」といった思いで見てる。その邪眼を背後に感じて新婚さんは、そそくさと逃げ出す。…と、そんな話じゃなかったのかな。

うん、そんなことはよくあるね。電車の中だって、半チチのネエちゃんはいる。超ミニのネエちゃんもいる。背中が全部あいてるネエちゃんはいる。汚いヘソを、「ほら、見ろ！」と言わんばかりに突き出してるネエちゃんもいる。困る。いきなり、パッと目を外らすのも不自然で、わざとらしいし、仕方ないから、じっと見ている。そうすると、こっちの邪眼に気付いたのか、キッと睨まれる。困る。どうしたらいいのでしょうか。中島らもさんの『明るい悩み相談室』に相談しようかしらん。でも、らもさんは死んじゃったか。

生徒に聞いたんだけど。彼女は、ちょっと胸がある。それで半チチの服を着てる。胸の谷間が見える。電車に乗っていると、隣に座ってるオッさんが身を乗り出し、その谷間の百合を覗き込むそう。な。「これって、痴漢じゃないのかしら？」と相談された。ウーン、難しい。触ったとか、ビデオやカメラで盗撮したとか、それは痴漢になる。でも、肉眼で、（たとえ邪眼でも）見た分には痴漢にならんのかな。

でも、超ミニのネエちゃんの後をつけて、いきなり、「イタタタ…」と行って、倒れて転ぶ。その瞬間にスカートの中を覗く。名付けて、「転び痴漢」。これなんかはどうだろう。石につまずいたとか、人に押されて転ぶ。立ち上がりようと思ったら、たまたま目の上にスカートの中味があった。これなら不可抗力だから、痴漢じゃない。

でも、ワザとやったらどうか。そりゃ、痴漢になる。しかし、不可抗力か、ワザとか、見極めが難しい。『公安警察の手口』では、「転び公妨」の話が出ている。公安の「伝家の宝刀」だ。捕まえたい人間の前に立って、いきなり転ぶ。そして、「お前が突き飛ばした。公務執行妨害だ！」と言って逮捕しちゃう。難癖をつけて逮捕するんだ。そんなことを民主警察がするはずがないと思うかもしれないが、するんだ。森達也監督のドキュメンタリー映画「A」には、バッチリと撮られている。

まア、それと同じように、「転び痴漢」もあるんじゃないのかな、と私は思ったわけですよ。まさか公安がやってるわけじゃない。民間の普通の痴漢

さんの方々ですよ。でも、電車の中で、いきなり揺れたりしたら、人にぶつかったりしますよね。これは仕方ない。いきなり、わしづかみにしたり、いきなり、グニュっとにぎったり…。そういうことはあるでしょう。でも、これはアクシデントです。

「産経新聞」（10月13日付）に面白い記事が出ていた。

〈電車内で痴漢。

防大教授逮捕。〉

という記事だ。名前は出てない。名前を防衛している。男性教授（43）と出てるだけだ。電車の中で、女性会社員（23）の下半身を触り、女性から渋谷駅ホームで駅員に突き出されたという。教授は容疑を否認してるという。

しかし、だらしのない教授だ。防衛大学の教授だろう。自分すら守れないで、国の守りが出来るのか。自衛隊のエリートを教育するのが防大だ。その教授だよ。嘆かわしい。それに、23才女性に「突き出された」といのも嘆かわしい。これじゃ、日本の国防なんて頼りにならん。いっそ、この女性に防大教授になってもらったらいい。しかし、これで、教授もクビだろうな。一家も離散、注意一秒、怪我一生、だ。

でも、「冤罪」かもしれない。しかし、それを証明するのが難しい。痴漢にされないためには、ともかく、女性のそばには近づかない。両手はつり革を持って、疑われないようにする。それしかない。「男の自衛術」だ。

それでも、痴漢する人はいる。『痴漢の手口』を書いてみようか。そんな本はもうあったかな。それと、「痴漢された」と難癖をつけて、男から金を脅し取っている人もいる。「3万円とってやった」という女の子から話を聞いたことがある。その人は、本当に尻を触られたそうだ。すかさず腕をつかんで、「警察に行こう!」。男は青くなって「許して下さい。出来心で…」。「じゃ、お金出しなよ!」。それで3万円とったそうだ。

わざと自分から近づいて尻を押しつける。「あっ触った!」と騒ぐ。隣の仲間も、「たしかに見た!」といったら、男はもう逃れられない。こんな『かつあげ女の手口』も暴かなきゃ。しかし、こんなのは何というんだらう。「転び逆痴漢」かな。こんなかつあげはかなり多いはずだ。しかし、新聞に出ることはない。本当は「オレオレ詐欺」よりも多いんじゃないかな。それに「被害者」の男は絶対に警察に訴えない。大体、自分は痴漢を「やった」。あるいは、「やった」と思われている。「加害者」だ。警察に突き出されたら、新聞に名前が出て、会社はクビ、妻や子供は出ていく。

「冤罪だ！」と叫んでも、無実を証明するのは大変だ。だから届けない。かつあげ女のやり放題だ。アンタッチャブルだ。公安みたいだ。

(3)ヤダね。浮気調査に「公安の手口」が使われちゃ

あっ、いかん。いかん。まじめに『公安警察の手口』の話をしとったのに、すっかり痴漢の話になってしまった。そうそう、昔、「週刊SPA!」に超オモロイ記事が出とった。男の浮気を調べるのに最近、FBIや公安の手法を取り入れている女が多いという。合いカギを作っておき、男がいない時に、いきなり入り、「ガサ入れ」をする。そして「証拠品」を押収する。又は、男を「尾行」する。「張り込み」をする。電話を「盗聴」する。さらに凄いののは、「おとり捜査」だ。チャットや出会い系を利用して仮名で自分の彼氏とコンタクトをとる。どんな女が趣味か分かるから、それで釣る。男が出かけてきたら、「何よ！私という女がありながら！」と「査問」し、「総括」し、「処刑」しちゃう（処刑まではしないか）。

つまり、「公安の手口」は男の浮気発見にも使えるというわけだ。男を「おとり捜査」するってのは、テレビでもあったな。ロンドンブーツだったか、ロンドンハーツだったか。オトリの女が男に近づく。男は落ちるわな。そしたらオトリ女が彼女に言う。「ほら、あんたの彼氏は、チャンスがあったら、いくらでも浮気するのよ」と証明してみせる。これは卑怯だよな。こんなのダレが見るんだ、と思いながら、オラは毎週見ていた。

と、ここでFAX。あらあら、「週刊SPA!」のことを書いたら、伝わるんですね。念が。元SPA!の記者からだ。

〈ごぶさたしております。ちくまの新刊、書店で発見し、すぐ
買い求めました。一気に拝読。知ってるようで案外知らないこと
(公安警察組織の変容etc)、忘れてしまったこと、がたくさん
書いてあり、興味深かったです。〉

彼は今は某新聞社で地方勤務。奥さんは東京にいる。新婚なのに別居でかわいそうと思うだろうが、奥さんは「別居を条件に結婚した」という。変わった女性というか、自立心が強いんだろう。ネットで、二人はバーチャルな「新居」を作って、そこに毎日、亭主は帰ってきて、「ただいま」「おかえりなさい」と会話を交わしているそう。あたたかい家庭で、ほほえまし

いですね。

じゃ、今週は終わり。と思ったら電話だ。こんな早朝にFAXは来るわ、電話は来るわ。うるさいな。でも電話に出てビックリした。「あの一、本を読んだのですが…」。「前の担当者は人間的にいい人だったから会って、情報を渡していたんです。でも、担当者が変わって、その人はイヤな人で。でも、時々、呼び出されて情報を渡せといわれるんです。どうしたらよかでしょう」。ギャ！ 本物の「協力者（スパイ）」だよ。謝礼金を聞いたら、ピンときた。「これは本物だ」と。普通、スパイといったら、大変な金が動いていると思うだろう。しかし違う。公安が渡せる金は決まっている。そして、「仮名」で領収証を書かせる。

いろいろと詳しく話を聞かせてもらった。他にもいろんなことを知ってる人は電話下さい。又、「電話じゃ盗聴されるかもしれない」と思う人は手紙で下さい。この本を出すことによって、そんな情報がどんどん入ってくる。うん、面白い展開になってきたな。じゃ、『続・公安警察の手口』も書けるかしんないな。

よし、現職の公安にも話を聞いてやろう。一水会フォーラムの時など、表で張り込みしてる公安がいる。誰かにビデオを撮ってもらって、話しかける。名刺を交換して、仕事の内容をインタビューする。マイケル・ムーアのように突撃取材をする。嫌がるだろうな。公安はもう寄ってこないかもしれない。（まア、それはそれで、いい事かもしれないが）。

【追記】

10月13日(水)、ライブ塾で宮崎学さんと対談しました。60人が集まり、超満員でした。警察の話を知りました。さすがは宮崎さんだと思いました。詳しくは次回に…。

【お知らせ】

(1)「レコンキスタ」（10月1日号）には僕も随分出てます。連載「平成文化大革命」には、「日比谷一水会」で講演した話を書きました。又、「野村秋介先生没後11年企画」では、蜷川正大氏と対談しています。それと、元北朝鮮工作員の安明進氏と木村三浩氏の対談には、附録として参加してます。又、本文で書いたように、横山氏が僕の本の書評をしてます。16ページの内容の濃い新聞です。これで500円は安い。年間購読料は6000円です。ぜひ、購読下さい。「一部だけ見てみたい。見本紙を送れ」という人もどうぞ。一水会はtel 03(3364)2015。FAX 03(3365)7130です。

(2)ライブ塾、11月10日(水)は二木啓孝さんの予定でしたが、二木さんの事

情で、変更になりました。申しわけありません。当日は上田哲さん（元社会
党国会議員）がピンチヒッターで出ます。「マスコミ労組のたたかい」とい
うテーマで話してくれます。ぜひ、いらして下さい。

(3)11月13日(土)は6時半から、宮台真司、高岡健（精神科医）、鈴木邦男の
シンポジウムがあります。「ザッツジャパン編集委員会」の主催です。場所
は新宿区牛込筆筒区民ホールです。都営地下鉄大江戸線・牛込神楽坂駅A1
出口徒歩0分です。

(4)11月24日(水)は午後7時から三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の野分祭
です。シチズンプラザです。

(5)『月刊TIMES』（11月号）が発売中です。僕の連載「三島由紀夫と野村
秋介の軌跡」は第4回で、「愛国心を鼓舞した日本刀での決起」です。

(6)おかげさまで、『公安警察の手口』（ちくま新書）は売れてます。10月
8日(金)に発売して5日目で何と、増刷が決まりました。1万部の増刷で
す。これで計2万2千部です。デビュー作の『腹腹時計と〈狼〉』（2万
部）を超えました。まだ読んでない方は、ぜひ書店で買って読んでみて下さ
い。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年10月25日

今、明かされる「釧路事件」の顛末

(1) 凄い「右翼の手口」があったんだよ。何と…

テレビで、「行列のできる法律相談所」を見てたんですよ。日曜の夜だったかな。面白い事例を扱っていた。パソコンの大安売りのチラシが新聞に入っていた。「超目玉。採算度外視！」と大々的に書かれている。値段を見て驚いた。パソコンが「10円」だ。

こりゃ、驚きだ。確かに超目玉だし、採算度外視だ。ドッと人が押しかけた。中には仕事を休んで並んだ人もいた。そして開店。最初の客が言った。

「パソコンを買いたい。はい、10円！」と店員に渡した。驚いたのは店員だ。「お客さん冗談はよして下さいよ」 「冗談じゃないよ。ほら、チラシにちゃんと10円って書いてるじゃないか」

店員はチラシを見て、アッと声を上げた。

「大変だ！『万』が抜けていた。これは誤植です。印刷ミスです」

「そんなんー！でも、これを信じて並んでるんだから、売って下さいよ」

「でも、印刷ミスなんです。大体、10円でパソコンが買えるわけないでしょう。常識で考えて下さいよ！」

「だから、〈超目玉、採算度外視〉だと思ったんだよ。じゃ、他の人はともかく、僕にだけは10円で売ってよ。〈超目玉はこれ一台でした！〉って言えばいいじゃないか」

「それもダメですよ」

と、後ろに並んでた人も騒ぐ。パニックになりました。

さて、どうなるでしょう、という問題だ。パネラーが必死に考える。「印刷ミスだから謝ればいい」「謝って済む問題か。ゴメンで済むなら警察も公安もいらぬ」「書いたものには責任を負うべきだ。それが言論の覚悟だろう。自己責任だ。赤字になっても売れ」…と、いろんな意見が出た。弁護士

もパネラーで、いろんなことを言うんだ。中にはこんなことを言った人もいる。

「この値段で売りたい。はい買いましょう。と、この時点で契約は成立している。だから、10円で売るべきだ」

これはちょっと説得力がありますね。人間社会は〈契約〉で成り立っている。それが人間の信頼にもなる。「10円」と書き間違えたのは事実だろう。しかし、それを信じて、会社を休み、並んだ人もいる。パソコンを買えないどころか、一日の仕事もパーにした。バイトだったら1日のバイト料もパーにした。それも補償してくれないのか。踏んだり蹴ったりだ。泣きっ面に蜂だ。

それで、「解答」というと。「印刷ミスだから、謝る。しかし、10円で売る義務はない。ただし、仕事を休んで並んだ人は1日のバイト料1万～2万円を請求できる」

というものだった。まあ、常識的な解答だね。「10円」でパソコンを売ってたら、この店は破産するかもしれない。思い切って、「先着3名様にだけ、10円でお売りします」という妥協策を出しても、並んだ4人目以下は納得しないだろう。「チラシには先着3名なんて書いとらんぞ。店にあるだけのパソコンを10円で売れ!」「そうだ、そうだ。並んで人間全員に売れ。なかったら、他から買ってきて10円で売れ!」「そうだ、そうだ!」「異議なし!」となるでしょう。

あるいは、店が印刷業者を相手に訴えるという手もあるな。「お前がミスしたために、暴動が起っている。お前が弁償しろ。うちのパソコンを全部10万円で買って、10円で売ってやれ」と。でも、こんな訴えは認められندでしょうな。「いや、おたくの原稿が10円となっていた。その通り印刷したんだ」というかもしれないし。「馬鹿野郎。常識で考えて分かるだろう。10円でパソコンが買えるかよ」「だから、〈超目玉〉と思ったんですわ」…と。ここでも同じ喧嘩が繰り返されるのでありませう。

実は…と、ここから話は核心に入る。この「10円パソコン」の話は実話なのだろうか。実話らしいね。ありそうだ。でも、「あの事件」に似ている。いや、「あの事件」をヒントにして考えたものじゃないか、と私は思いましたね。「灰色の脳細胞」を持ち、「日本のポアロ」と言われる私のことです。ピンと来ましたね。「あの事件」をヒントにして脚本は書かれたのだろう…と。

「あの事件」とは、そうです。三億円事件です。いや、赤報隊事件です。

これも違う。それは、15年前、雪深い北海道で起った奇怪な事件なんです。その事は、以前に何度か本に書いた。テレビ局のひとにも喋った。それが基になって、今回の話が作られたのではないか。私はそう睨みましたね。

では、この続きは来週に。と思ったけど、読んでる人が怒っちゃいますね。では、出し惜しみしないで書きちゃいましょう。

北海道にA氏という右翼がいた。今もいるんだろうが、僕の意識の中では過去形だ。ある朝、新聞のチラシを見ていた。パソコンの大安売りだ。違う、違う。中古車の大安売りだ。200万、300万、500万…と値段が出ている。と思ってよくみたら、「万」が抜けている。馬鹿め、印刷ミスで「万」を落としてやがって…と思った。そして、「しめた！」と思った。小躍りし、黒い街宣車で乗り込んだ。チラシには、200円、300円、500円…と書いている。だから、この値段で買いに来たと言った。会社は青くなった。ペコペコ謝る。「印刷ミスでして…。本当は200万、300万なんです」と言う。でもA氏は引き下がらない。「ここにちゃんと書いてんだ。だからその値段で売ってもらおう」。その繰り返した。それで、粘った。会社側はとうとう根負けした。バカな会社だ。そして、三台も売ってしまった。チラシの値段で。A氏は200円と300円と500円の車を三台買った。合計、千円だ。

凄いですよね。千円で三台も買ったのだ。自分で一台は乗り、もう一台は奥さんに。さらにもう一台は子供に与えた。気前のいい父ちゃんだ。今どき、200円ではオモチャの車も買えない。それなのに、200円で本物の車を買ってきたのだ。偉大な父ちゃんだ。この話を、僕はどっかに書いた。テレビ局の人にも話した。だから、この話を原形にして、テレビ用に「パソコンが10円」と変えたのだろう。いや、同じような話は各地方でもあるのか。でも、チラシの印刷ミスは各地にあったとしても、それをタテにして、実際に買ったのはこのA氏一人だ。

(2)政治犯を「無銭飲食」で逮捕するなんて

しかし、後日談がある。この1年後、この右翼は逮捕されてしまう。何かの理由で、捕まえたかったのだろう、警察は。右翼にはホコリ高き男達が多い。叩けばホコリが出てくる。調べてみたら、この「中古車事件」があった。「よし、これで逮捕しよう」となって、彼は捕まった。

取り調べで彼は抗弁した。「これは不当逮捕だ！冤罪だ！」と。「善良な市民に対し、こんなことをしていいのか。公安警察の手口は許せない！」と。「200円、300円と書いてあった。これは出血サービスで、特別に売る

のだと思った。だから、その値段で売ってもらった。何も脅迫したわけではない。おとなしく話し合って納得して、売ってもらったのだ」と。

もし彼が一般の人間だったら、この理屈も通ったかもしれない。大体、中古車の会社が売ったんだ。自らの過ちを認めて…。

ところが警察はうまい。会社側から被害届を無理に出させた。「要は、Aがうるさいし、わずらわしいし、それに脅威を感じたから売ったんだろう」と責めた。さらには会社のアラを見つけて、「もし被害届を出さなければ、お前の会社を捜索するぞ。まずい事もあるんだろう」と脅した。それで会社は、「はい、そうです。怖かったので、仕方なく売りました」と被害届を出した。

それでA氏は逮捕だ。元々、A氏も悪いから、弁護するつもりはないが、こうやって「被害届」を無理に出させることはよくある。

赤報隊事件の関連でも「無銭飲食」で逮捕された人間が何人かいる。「こいつは怪しい」と公安が目をつける。引っ張れば何か吐くのではないか。でも、容疑がない。でも、行きつけの飲み屋にツケがある。警察はこれに目をつけた。高田馬場にある、「楯の会」の人もよく出入りしていた庶民的なスナックだ。

警察は押しかけていって、「こいつはこの前、金を払わないで帰ったろう。無銭飲食だ」と言った。驚いたのはママさんだ。「この人はいつも払ってくれてる。無銭飲食なんて、とんでもない」と言った。

ところが警察は、「風営法を知ってるか。この店は時間も守らないし、カラオケの声も大きい。近所の住民から苦情がきている。上からは逮捕しろと言われている。そうしたら、こんな店はすぐ、潰れるぞ。さあ、どうする。今回のことで協力すれば、何とか上にとりなしてやれただけだな」と。

完全な脅迫だ。ここまで言われたらどうしようもない。泣く泣く「被害届」を出した。そして、あはれ、活動家のC君は、無銭飲食で捕まったのでありました。

何ヶ月かして、C青年は、娑婆に帰ってきた。毎日、赤報隊のことばかり聞かれたという。そうだろう。無銭飲食のことなんか聞きもしない。彼と一緒に、訴えた店に行った。ママは、泣きながら彼に謝っていた。「ごめんなさい。警察に脅されて…。店を営業停止にするぞ！って言われたもんだから」と。「事情は分かってるからいいですよ。気にしないで下さいよ」と彼は言っていた。無理矢理、友人や客を裏切らせるなんて、公安もひどい事をする。人間じゃない。こんな例は他にもある。『続・公安警察の手口』で書

こう。

ところで、中古車3台を千円で買ったA氏だ。捕まって、刑務所に行き、今は出てきている。本当は、こんなふうに「右翼の手口」をバラしちゃいけないんだろうが…。でも、彼のことはバラしてもいいんだ。「貸し」があるし…。

『公安警察の手口』（ちくま新書）の中に釧路で警察の尾行をまいた話が出てくる。1977年だから、27年も前のことだ。タクシーに乗ったら、運ちゃんが「変な車がついてきますよ」と言う。「つけられてるんだ」と言ったら、その運ちゃん、目を輝かして、「まいちゃいましょうか」と言う。

「ムリだよ」と言ったが、「まかして下さい。こんなの一度やってみたかったですよ」と言う。そして、暗い脇道に入る。さらに車のライトを全て消して、全速力で走る。

真っ暗な中を、真っ暗な車が疾走する。こっちは生きた心地がしない。それで、まいてくれた。凄い運ちゃんだ。

これで気を良くして、東京に帰ればよかったんだね。今から思うと。でも、次の日は、日ソ友好会館反対闘争がある。建設が決まり、その阻止の為にきたのだ。「ふざけんな。何が日ソ友好だ。馬鹿野郎。つぶしてやる！」と思ったわけですよ、私は。「実力で阻止しましょう」とA氏も言う。そう、（後に中古車事件で有名になる）A氏が僕を呼んだんだ。「他の右翼はアテにならない。我々二人で実力でもってつぶしましょう」と言って、東京から僕を呼んだ。こっちは単純だから、本当に実力で阻止しようと思って、突っ込んだわさ。警備の警察官と乱闘になったわさ。払い腰かなんかでぶん投げられて、手錠をかけられたわさ。そして、23日も釧路警察署の留置場にぶち込まれたわさ。寒かったわさ。

僕を呼んだ右翼のA氏は、「一緒に突っ込まなくっちゃならないのに。申訳ない」と言ってたが、なに、こっちがカーツとなって暴走したのだ。その後、彼とは何回か会っている。そして、「中古車事件」のことを本人の口から聞いた。ヒャー、よくそんなことをやるなー、とビククラこいた。「鈴木さんにも一台やりますよ」と言われた。「200円出せば又、一台買えますから、行きませんか」とも言われたが、やめてよかった。共犯になって捕まっていたよ。

(3) 「釧路国立大学」でドロボー哲学、カツアゲ哲学を教わった

『公安警察の手口』を買った人から言われた。「自分の身を切るようにし

て書いてますね。釧路で捕まった事なんて初めて知りました」と。そうだったかな。自分じゃ、いろんな所に書いてるから忘れちゃった。初めて書いたことも多いんだろう。それに公安についてまとめて書いたのも初めてだ。

それにしても、いろんな奴らがいたなーと思った。釧路の留置場のことですよ。地方だから政治事件で入る人なんていない。私は珍しがられ、皆から話しかけられましたよ。中にいる人はヤクザ、チンピラ、ドロボー、覚醒剤、カツアゲの人たちだわさ。

ドロボーとは同じ房だった。若いドロボーだったが、腕がよくて、「この世界」では有名なんだという。でも腕がよくっても捕まっちゃ仕方ないだろうが。なぜ捕まったかを、クドクドと話すんだわさ。それに、こうすれば絶対に捕まらないとか、こんな手がある。といった話を毎日してくれる。おかげで私もドロボーについては詳しくなった。いくら万全の計画を練っても、相手は生き物だから、必ず思わぬ出来事が発生する。サスペンス・ドラマのようにうまくいかない。その時、一瞬早く、その危機を察し、どう逃げるか。それが一番大事だ。退路を確保した上で、犯行に移るんだよね。「イザという時の為に僕はいつも単独でやります」と彼は言う。二人や三人でやると、見張りがいて安全なようだが、かえって心に隙が出来る。又、イザという時に俊敏に逃げられない。だから単独犯に限るといふ。

彼の「ドロボー哲学」を毎日、レクチャーしてもらった。「初めてやるには、置き引きがいいですね」と、ドロボーの初歩から教えてくれる。うん、これは使えると思い、出てから僕もやってみた。簡単に出来た（嘘ですよ。やりやしませんよ）。

そのドロボー君、「僕が自分の仕事のことを教えたんだから、鈴木さんも仕事のことを教えて下さいよ」と言う。それで右翼のことを教えてやった。三島事件や経団連事件のことも教えてやった。「右翼は儲かるんですか？」と聞く。儲かんねえよ。思想運動なんだから。でも、儲かる人もいるかな、と答えた。

興味を持って聞いてたようだ。「東京に行くことがあったら訪ねていいですか」と言う。いいよ。と言って電話番号を教えた。メモは出来ないから、暗記する。

それから何年後かな。彼は上京した時に訪ねてきた。あれから刑務所に行って、出て来たという。「ドロボーをやめて、右翼をやりたいんです」と言う。今度、合宿があるんでしょう。参加していいですか。と言う。「いいよ」と言おうと思ったが、躊躇した。彼を何と紹介すればいいんだろう。

「同房だった人で、ドロボー君」と言うわけにもいかない。「エッ、ドロボーかよ。じゃ、サイフに気をつけなくちゃ」と皆、警戒するだろう。又、何かなくなったら、彼が真先に疑われるだろう。それじゃ、彼もかわいそうだ。職業に貴賤はないし、過去にこだわるのもいかなのかもしれないが。迷った末に言った。「いや、合宿は会員だけだから。内容も高度だし、面白くないと思うよ。それよりは月に一回、講演会があるんでそれに来なよ」と誘った。そして何回か来た。幸い、盗難事件はなかった。その後は、どこでどうしているんだろう。立派な大ドロボーになったでせうか。成長が楽しみだ。

隣の房のヤクザの組長にはチャカ（拳銃）の密輸の手口を習った。こんな手があるのかと感心して、出てから使ってみた。そんなわけないね。慣れないことをしたら、すぐに捕まる。だから、ここでは、「使えない知識」をたくさん教えてもらった。

元気のいい強盗君もいた。タタキだ。単なる盗みじゃない。ソーっと忍び込んで、寝ている人間の枕元から金を盗んでくるなんて、情けない。そんな〈女性的〉なことが出来るか、と強盗君は言う。

堂々と入り、殴りつけ、縛り上げ、時には拉致して行って、金を出させる。この方が〈男性的〉だし、立派だという。男らしいし、日本男児のやることだ、と言う。彼は「有名人」だった。この頃、テレビで、「ウイーク・エンダー」というのがあった。犯罪事件を取り上げて、漫才師やタレントがレポートする。泉ピン子も出てたな。現地に飛び、取材する。犯人の顔写真も大々的に出す。「こいつが悪い奴でねえ」「見て下さい。この顔。おそろしいですね」「それに、やり口がひどいんですわ…」と、面白おかしくレポートする。

この強盗男も出た。この時は恐喝をして捕まったのかな。タレントや漫才師たちが、よってたかって、彼の顔写真を出し、ポロクソにけなす。「警察や被害者に言われんなら分かる。しかし、何でこんな奴らに言われにやなんのだ。許せん。刑務所を出たら、必ずオトシマエをつけてやる！」と吠えていた。「このレポーターの女どもをさらって犯してやる！」と息まっていた。

それからしばらくして、「ウイーク・エンダー」は中止になった。視聴率はメチャメチャいいのに、なぜ突然中止になったのか。と思う人が多かった。きっと、復讐に駆られた恐喝男の犯行があったのではないだろうか。と私は思いますね。

『恐喝の手口』『ドロボーの手口』『右翼の手口』も書いてみようかな。
では、終わり。

【附録】

最近の日記から。

9月25日(土) K-1を見る。「ゴング格闘技」の取材で。曙の壮絶なKOシーン（負けたんだけど）は、何やら感動的だった。人間というより、象が崩れ落ちる感じがした。そうそう。知り合いの女子大生が、レポートを出したそうな。フェミニズムの授業かな。「これが私の考える女性像です」と。ところが、「女性像」が「女性象」になってたそうな。「メス象の話を書いてどうするんだ！」と先生に馬鹿にされたそうな。これも感動ですね。いい話だ。

9月27日② 新橋演舞場で「西太后」を見た。人間らしい面もあったのか、と驚いた。

9月28日(火) ロフトで三浦和義さんのトーク。「ロス疑惑」をテーマにした映画も上映。その後、一緒にトークした。

10月2日(土) 大宮。JR東日本労組の文化祭に行く。前は（「創」にも書いたけど）、日教組の集会に出て、デモにも出たし、組合の行事に出ることが多い。

10月4日② 下北沢で、松尾貴史さんの芝居を見る。

10月6日(水) 一水会フォーラム。宇垣大成さん（軍事評論家）のお話。講演中、携帯電話が鳴ったら、出て話していた。それも、二回も。「今、とり込んでるから、又、あとで電話するから」と。「常在戦場」の軍事評論家だから、いついかなる時にも緊急連絡ができるようにしてるんだろう。たいしたもんだと、感動した。

10月7日(木) 河合塾立川校で、「グレート・ジャーニー」の関野吉晴さんの話を聞く。おわって生徒を含めて、飲む。

10月8日(金) JR東労組で松崎明さん（元会長。元革マルNo.2）と対談。

10月9日(土) 月蝕歌劇団を見る。「ステーシー・少女ゾンビ再殺譚」（大槻ケンヂ原作）。夜、宮台真司、高岡健さんの対談を聞く。来月は僕も呼ばれている。

10月10日(日) SWS（サブミッション・アーツ・レスリング）の試合を観る。

10月13日(水) ライブ塾。宮崎学さんとトーク。60人が集まり、超満

員。

10月17日(日) 「生長の家」の講習会。昔の仲間が券を送ってよこした。「殺伐とした政治運動の世界にいるんだから、たまには真理の話を聞いて心を浄めるよ」と。「言葉で人生は変わる」という話だった。暗い事を考えると暗い事を引きよせる。明るいことばを使えば、人生は明るくなる。「ついてる。ついてる」と毎日、口癖のようにいましょう。人生は好転しますと。

いい話だった。それから私も、これを口癖にしよう。「ついてる。ついてる」「しめしめ」「おかげで捕まらなかった」「無事、時効まで逃げ切った」「本当についてる。ついてる」「しめしめ」…と。あっ、犯罪に利用しちゃいけないのかな。

10月20日(水) 野村秋介さんの墓前祭。全国から多くの人が集まった。三浦和義さん、植垣康博さん(連合赤軍)、見沢知廉氏(作家)、牧田吉明さん(ピース缶爆弾)など、凄い人たちも台風の中、駆けつけた。台風よりも凄い面々かな。

【お知らせ】

(1)おかげ様で『公安警察の手口』(ちくま新書)売れてるようです。「売り切れ店が続出です」「ベスト10に入った店がかなりあります」とちくまの担当者から電話が。「本当かな」と思っていたら、売り上げの結果を見せてくれた。凄い。今週は第二刷(1万部)が出る。ありがたいですね。「公安って一体何だ」と思っ買ってくれる人が多いみたいです。それに、公安にいたためつけられた人も。いためつけた公安も買ってるんだろう。

(2)11月10日(水)は7時からライブ塾です。上田哲さんとのトークです。マスコミのこと、政治のことを熱く語ってもらいます。

(3)11月13日(土) 6:30から、宮台真司、高岡健(精神科医)そして私のシンポジウムがあります。ザッツジャパン編集委員会の主催です。牛込筆筒区民ホールです。(都営地下鉄大江戸線・牛込神楽坂駅A1出口徒歩0分です)。

(4)11月24日(水)は午後7時から三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の野分祭です。シチズンプラザです。

(5)管理人からメールが来た。「八重洲ブックセンターで、売上げベストテンに入ってますよ!」と。10月10日~16日の「ベスト5」に入っていた。驚いた。「他の店でも、続々とベストテンに入ってます!」という。本当だったんだ。凄い。更に第2弾。三省堂書店では8位。オンライン書店では8位。

日販調べでは10位。北海道新聞調べでは5位だ。凄い！ 信じられない。

(6)「週刊読書人」（10月29日号）に書いてます。田原総一郎さんの『連合赤軍とオウム』（集英社）の書評だ。これは力の入った、いい本だ。皆さんぜひ読んでみて下さい。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年11月1日

おかげ様で、各書店で「ベストテン」入りです。『公安警察の手口』が…

(1) 『バカの壁』や『十津川警部』と張り合っているよ

「3万部は行きたいですね」と、ちくま新書の担当者は言う。「いやいや、初版で1万2千部を出してもらっただけで幸せですよ」と僕は言った。

『公安警察の手口』（ちくま新書）のことだ。「3万部か」と僕は呟いた。この担当者、若いのに、時々、凄い事を言う。気宇壮大な事を言う。『公安の手口』を出しましょうと、去年の初めに言われた時も驚いた。「そんな。ちくまのような大手出版社がこんな危ない本を出せるんですか」と僕は疑っていた。一年半かけて書き下ろしたが、書きながらも疑っていた。「すみません。編集会議でボツになりました」なんて言われるんじゃないだろうか（そんな事が今までに何度もあったし）。そう思って不安だった。

でも、この担当者は楽観的だ。「大丈夫ですよ。必ず出しますよ」と言う。そして、「3万部は行きたいですね」と言う。さらに、恐ろしいことを言う。「ライバルは『バカの壁』ですよ」と。馬鹿な！ 養老孟司のあのベストセラーと張り合えるわけがない。何を考えてるんだ、この人は。と思った。

とにかく、「出してもらえれば幸せだ」と思っていた。「こんな危ないのはやめよう」「著者が前科者だからやめよう」「いくら何でも、右翼じゃねえ」…とか言って、途中でボツになるんじゃないかと思った。だから誰にも言わずに、秘密にして書き続けていた。「何だ、やっぱり出なかったじゃないか」「嘘つき！」なんて言われちゃかなわない。

それに、公安警察に喧嘩を売ってる本だ。どこで邪魔が入り潰されるかもしれない。あるいは、いきなり逮捕されるかもしれない。理由は何だっつけられる。「転び公妨」もある。微罪、ひっかけ逮捕…なんでもある。だか

ら、書店に並ぶまでは安心できなかった。信じられなかった。このHPでも、一切書かなかった。

だから、書店に並んで本を見ても、まだ半信半疑だった。次に思った。「公安の本なんて買う人がいるのかな？」と。ちくまも出すには出したけど、全く売れなくて、「失敗した」と思ってるんじゃないか。だったら、せっかくチャンスを与えてもらったのに申し訳ない。切腹してお詫びしなくちゃならないな。と、悲壮な覚悟をかためていた。金が有れば友人たちに頼んで、買い占めてもらうのに…と思ったりもした。でも、貧乏だから、とてもそんなことは出来ない。

10月8日(金)に都内の書店に出た。11日②には全国の書店に並んだ。その時点で、「売れてるですよ」と担当者から電話があった。僕の不安な気持ちを見抜いて、なぐさめてくれたんだろう。そう思った。それに、今日全国の書店に並んだばかりじゃないか。売れてるかどうか。そんなことは分からない。

そして、10月13日(水)、担当者に会った。高田馬場のライブ塾で宮崎学さん(作家)とトークをした。宮崎さんは警察批判の本を何冊も出している。ここで、公安警察の話をして、本も売ろうかと思った。それで、本は事前に宮崎氏に送っておいた。「じゃ、私も聞きに行きますよ」と担当者が言う。

この時、「嘘じゃありません。本当に売れてるんですよ」と一覧表を見せてくれる。全国の主要書店の売上げの詳細だ。どこの書店に何冊配本した。そこで、10日は何冊売れた。11日は何冊売れた。そして今日まで何冊売れた…ということが出ている。こんなことが分かるのか。驚いた。

昔だったらなかった。今は本を買う時に、バーコードをなぞる。よく分からんが、あれがコンピューターに入って、どこで何冊売れたかが1日、1日分かるんだ。凄い。1週間もたたないのに売り切れた店もかなりある。「ヘエー、本当に売れてんですね。一体誰が買ってるんだろう」と驚いた。信じられなかった。

そして、「このデータを基にして、もう増刷が決定したんです」という。本当かよ、と思った。1万部増刷だという。これで2万2千部だ。「3万は行きたいですね」と言った言葉も、実現に近くなった。

そして今日、(10月25日②)、第2刷の本が届いた。本当に増刷してくれたんだ。ありがたい。と思った。でも、大丈夫なのかな。無理してんじゃないかな、と思った。そしたら、「いや、いろんな書店でベストテン入りしてますよ」と言う。そして、「証拠」を見せてくれる。又、このHPの管理人

も、「ベストテン」をメールで送ってくれた。嘘じゃないんだ。

管理人の爺やは感極まって叫んでいた。「こんなに売れてるなんて、右翼じゃ初めてですよ。書店のランキングを見て下さいよ。養老孟司の『バカの壁』や西村京太郎と競い合ってますよ！」

まさか、と試してみたら、確かにそうだ。担当者は、「ライバルは養老孟司の『バカの壁』ですよ」と言ってくれたが、これも、まんざらホラじゃなくなってきた。

たとえば、紀伊国屋書店の全店売上（新書）ランキング（10月11日～10月17日）だと、こうだ。

- 1.頭がいい人、悪い人の話し方（樋口裕一）
- 2.バカの壁（養老孟司）
- 3.言論統制（佐藤卓己）
- 4.サルヂエ vol.1
- 5.パラサイト社会のゆくえ（山田昌弘）
- 6.ツイてる！（斎藤一人）
- 7.上司は思いつきでものを言う（橋本治）
- 8.公安警察の手口（鈴木邦男）
- 9.故事成句でたどる楽しい中国史
- 10.経営者の条件（大沢武志）
- 11.死の壁（養老孟司）

信じられないね。8位ですよ。『バカの壁』と同じくベストテンに入っている。『死の壁』は抜いている。（ここで紀伊国屋新宿本店のランキング表がきた。何と6位だ！）

八重洲ブックセンターになると5位だ。『上司は思いつきでものを言う』は7位。西村の『十津川警部』は9位だ。

三省堂書店だと、8位だ。1位は、『頭がいい人、悪い人の話し方』。2位が『上司は思いつきでものを言う』。『バカの壁』は5位。うーん、こんなベストセラーと並んでいるのか。信じられん。（と、頬っぺをつねってみる。痛！）

オンライン書店では8位だ。ここでは1位は、ハーレクイン・ロマンスの『誰も知らない結婚』だ。2位は『頭のいい人…』だ。日販調べ（10月8日～10月14日）だと10位だ。ここは取次だから、全国の売れ行きを一番よく反映してるだろう。

1位 頭がいい人、悪い人の話し方

- 2位 バカの壁
- 3位 死の壁
- 4位 上司は思いつきでものを言う
- 5位 ツイてる！
- 6位 座右のゲーテ（斎藤孝）
- 7位 頭がいい人の習慣術（小泉十三）
- 8位 パラサイト社会のゆくえ（山田昌弘）
- 9位 オニババ化する女たち（三砂ちづる）
- 10位 公安警察の手口

そんなに売れてるのか。でも、実感がない。北海道放送調べだと、

- 1位 頭がいい人、悪い人の話し方
- 2位 十津川警部「悪夢」通勤快速の罨
- 3位 反時代的毒虫（車谷長吉）
- 4位 あぶない脳（沢口俊之）
- 5位 公安警察の手口

(2)元公安の人達も電話や手紙をくれたよ

さらに続々と、こういうランキング表が送られてくる。それに、毎日、「知らない人」から電話がある。本の裏表紙に住所と電話番号を書いているからだ。友人や知り合いの記者がかけてよこすのなら、「知り合いだから…」と分かるが、全く知らない人が多い。じゃ、売れてるのか、と思う。中には抗議、批判、反論もあるが、それだって本屋でわざわざ買ってくれた人だ。全ての電話に出て、キチンと話を聞いている。元公安の人もかなりいる。今日は、一時間以上も話し込んでしまった。ほとんど、こっちの「取材」になってしまった。

公安は上から決められる。優秀な人間をピックアップして公安にするのだ。

ところが今日、話した人は、自分から志願して公安になったという。珍しい。「なぜ、公安になったの？」と聞いたら、彼なりの「愛国心」だ。特に、日本は情報・諜報戦でアメリカやロシア、中国に負けている。このままでは国家は潰される。そう思って、憂国の情で志願した。

じゃ、僕の本を読んで、「これじゃ不十分だ」「何も知らないな」と思ったんじゃないか。そう聞いたら、「いや、僕の知らないことも沢山書かれて

たんで驚きました」と言う。まさか、と思ったら、地方の県警の公安だった。「東京とは違うんでしょうが…」と、苦労話をしてくれた。

公安はエリートだし、「俺たちが日本を守ってる」と豪語している。だから、刑事警察や交通課がどんなに忙しくても手伝うことはない。逆に、刑事、交通、交番の警察官は「指名手配の過激派はいないか」「アジトはないか」と探させられる。つまり、全員が「公安」化されている。

「それはありますが、うちの県では、人手が足りない時は公安も交通取締りに駆り出されますよ」と言う。へエー、そんなこともあるのか。

それと、担当によって公安の「言葉つき」も変わってくる。「それはありますね」と彼は笑っていた。たとえば、革マルを担当して、革マルの本ばかり読んでると、段々と、考え方が革マル的になる。捜査会議の時も、「まず一に調査。二に調査ですよ」とやたらと几帳面になる。中核担当は、「そんなことより、一発やりましょう。ドカンと連中を潰すんです。一点突破・全面展開ですよ」と言う。中核派の用語まで使っちゃう。

共産党担当だと、「いや、合法的にやりましょう。我々公安も人民の支持を得てやらなくては」と言う。

右翼担当は、段々アホになって、「もうどうでもいいんじゃないの。楽しくやりましょうや、かたいこといわずに。まあ飲みましょう!」となる。

別に「敵」にシンパシーを持つわけではないが、取り締まる対象と考え方や、発想が似てくるのだ。よく、テレビで、暴力団が逮捕されるシーンが出る。左右を刑事がはさんでるんだが、どっちが暴力団か分からない顔をしている。顔も、スタイル、考え方も似てくるのだ。これは不思議だ。

暴力団担当も、右翼、左翼担当も、相手に会って話を聞いたり、時には酒を飲んだりする。その時、相手の話をよく聞き、合わせなくてはならない。段々と服装や、考え方も合わせるようになる。あくまでも、情報をとるためだ。でも、段々と、どっちがどっちか分からなくなる。でも、踏み止まって、「公安」の役目を果たす。それは偉いことだと思う。それだけ、「思想教育」が徹底してるからだろう。元公安の人には、そんな〈秘密〉を聞いた。

まア、中には、公安としてのアイデンティティを失う人も、まれにだがいる。アイデンティティ・クライシスだ。沖縄の島袋氏のように公安をやめて、告発本を書く人もいる。カムイのような「抜け忍」だ。

中には、「共産党の言ってることの方が正しい」と思い、「二重スパイ」になる人もいる。これは僕の本の中でも書いた。そうそう、ロシア革命前夜

の時は、皇帝の秘密警察が何十人も、反体制派に潜り込んでスパイになった。しかし、スパイとして信用されるためには、反体制派で〈実績〉をあげなくてはならない。だから、政府の建物を破壊し、要人の暗殺に加わる必要がある。「皇帝を守るためなら、それも仕方ない」と、政府の要人を殺す。しかし、それが面白くなって、自分はスパイなのか、革命軍のテロリストなのか分からなくなる。そして、本当に「皇帝暗殺」を計画して、やろうとする。

これは実際にあった話で、僕の『テロ』（彩流社）の中に書いている。そこまでドラマチックなスパイなら、尊敬に値する。日本でもいるのだろうか。会ってみたい。中国映画では「HERO」がこれに近かったな。始皇帝を暗殺するために、信任を得なければならない。だから、皇帝を狙うテロリストと闘い、次々と殺していく。そして、「よくやった」といって皇帝に感謝され、すぐ近くで拝謁を許される。そこを狙う。

大変だよな、刺客は。僕も何人かの日本人刺客を知ってるが、皆、凄い人ばかりだ。そうか、日本の「刺客列伝」を書いてもいいな。『刺客の手口』でもいいかな。

元公安の人は何人かから話を聞いた。他に、中核、革マル、革労協…と左翼の人が多いな。現スパイもいる。

(3) 「新聞は絶滅した。テレビは乗り越えられた」…と記者が

新聞記者からも手紙や電話を沢山もらった。以前、赤報隊を追って僕を訪ねてきた大手新聞社の記者はこんな手紙をくれた。

〈『公安警察の手口』早速読みました。まず、一気に最後まで読んだ後、もう一度じっくり読み返しました。「公安」を取り上げた書物は極めて少ないうえ、公安に虐められた当事者の実体験を交えたものなので、大変貴重だと思います。まさに「適任」でしょう〉

〈ところで、国松警察庁長官銃撃事件の容疑者としてオウム信者を逮捕しておきながら、起訴せずに釈放しました。あれだけ世間を騒がせた事件で、逮捕した容疑者を起訴できなかったというのは前代未聞です。この事件について、釈放した段階でもまだ「あいつらが犯人だ」と言わんばかりの警察のコメント。誰も責任を取らなかったばかりか榮転すらしてしまう無責任人事を含

め、内部からも強烈な批判が上がっています)

そうだろうな、と思った。本当なら「大失態」だ。ところが、警察の人間は処分もされないし、責任も問われない。それどころか栄転している。

「やっぱりオウムは怪しい」とあれだけ世間に印象づけたんだ。よくやった、ということだろう。ひどい奴らだ。僕の本の中に書いたが、「転び公妨」をやって無実の人間を逮捕した警察官も一切、処分されないし、責任も問われない。本当はこいつが「犯人」なのに。責任を問われないどころか、彼も、栄転してるのだろう。

僕は昔、「捜索令状を破いた」という容疑で逮捕され、23日間もぶち込まれた。しかし、誰が、令状なんか破くものか。見ていたら、「もういいだろう」と、警察官がいきなり取り上げたのだ。それで、ビリッと破れた。それなのに、自分の責任になっちゃまずいからと、僕に罪をなすりつけた。「あっ、公文書毀棄だ!」と言って。

本当は、そいつが「公文書毀棄」の犯人なのだ。しかし、冤罪をデッチ上げながら、彼は一切、処分されないし、責任も問われない。それどころか、「仕事熱心だ」ということで、何と、あろうことか公安三課長に栄転した。ひどいやね。

では、記者の手紙をもう少し紹介する。

〈最近、「ものわकारいのいい人」が多すぎるように思います。長官銃撃事件でも、「公安部はそういうところですから。活動家を逮捕してもほとんど釈放しています」などというあまりに客観的な評論家のコメントを聞くと、「それ自体が問題じゃないか」と言いたくなります。「わからずや」と言われるぐらい、頑固に「駄目なものは駄目だ」と言い続ける勇気が必要だと感じました。

長官銃撃事件に限らず、マスコミの対応は自戒も含めて大いに問題があると思います。インターネットが普及した情報化社会では、鈴木さんの言葉を借りれば「新聞は絶滅した。テレビは乗り越えられた」という事態になりかねないと思っています。〉

この本が契機になって、新聞記者も、どんどん公安批判をやってくればいい。それにしても、彼は、気の利いたことを言う。いや、本当は恐ろしい事なのか。「新聞は絶滅した。テレビは乗り越えられた」か。現状を表わし

ている。でも、インターネットがとってかわるだろうか。それよりも、「情報」なんかどうでもいい。世の中どうなってもいい。恋人のことさえ考えてればいい。仲間さえいればいい。そんな感じになってるんじゃないのかな。

この記者は「鈴木さんの言葉を借りれば」と言ってたけど、多分、右翼・左翼について、どっかで僕が言った言葉だよな。「左翼は絶滅した。右翼は乗り越えられた」と言ったんだ。でも、右翼、左翼どころじゃない。世の中に関心がなくなって、「自分さえよければ」と思う人間が増えてくる。政府は、「それは愛国心がないからだ。愛国心を教える！ 日の丸だ。君が代だ。教育基本法の改定だ！」と言ってるが、それで解決のつく問題じゃないと思う。では終わり。

【お知らせ】(1)11月6日(土)は「創」(12月号)の発売です。松崎明さん(JR東労組元会長)と僕の対談が載ってます。松崎さんは元革マル派のNo.2といわれた人です。又、僕の連載「言論の覚悟」では、「陸軍中野学校と公安」を書いています。

(2)11月10日(水)発売の「格闘技通信」で、骨法道場の堀辺先生との対談(2回目)が載ってます。

(3)11月10日(水)7時からライブ塾です。上田哲さんとのトークです。

(4)11月12日(金)、「月刊TIMES」(12月号)の発売です。僕の連載「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」は5回目で、「三島が変えた右翼の決起スタイル」です。

(5)11月13日(土)6:30から、宮台真司、高岡健(精神科医)、そして私のシンポジウムです。ザッツジャパン編集委員会の主催です。牛込笹笥区民ホールです。都営地下鉄大江戸線・牛込神楽坂駅A1出口徒歩0分です。

(6)11月24日(水)午後7時から、三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の野分祭です。シチズンプラザです。

(7)BBSにも書きましたが、10月26日(火)発売の「FLASH」(11月9・16日号)が巻末で「宮内庁vs雅子妃報道。これが真相だ！」をやっています。7ページの特集です。塩見孝也さん(元赤軍派議長)と僕のコメントも出ています。

(8)今、管理人から電話。「『公安警察の手口』、本屋でもう、二刷が並んでましたよ!」。ありがたいですね。

(9)僕の『新右翼』(新增補版・彩流社)が売り切れで、大幅加筆し、「新々増補版」を出すことになりました。頑張っただけでやらなくちゃ。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年11月8日

小泉首相の証しは、どこに生きてるのだろうか

(1)政府も、マスコミも、自衛隊も冷酷だね

香田証生さんはかわいそうだね。日本政府にも見捨てられ、殺されてしまった。「生きて世の中の為に働かせて下さい」という両親の願いも無に帰した。「世の為になる子供です。生きて証しを見せるようにと付けた名前です」と言っていた。

確かに香田さんは無謀だった。「冬山に夏の軽装で行ったようなものだ」と批判していた人もいた。「危機の認識がない」と皆が批判していた。その通りだ。しかし、それは無事に奪還してから、叱りつければいいことだ。たとえどんな人が、どんな理由で人質になろうとも、日本政府は日本人を救う義務がある。小泉首相は「救出に万全を尽くす」と言いながら、「自衛隊は撤退しない」と即座に言い切った。そして、その「言葉」で香田さんは殺された。

もっと言い方があつただろうと思う。「撤退については今考えているところだ。国会で議論する」とか、「駐留の延長はしない」「熟考している」とか、言いようがあるだろう。あるいは、「よし、分かった。撤退する」と言ってもいい。そして、香田さんを奪回したあと、「あれは脅されて言ったんだ。自衛隊は撤退しない」と訂正してもいい。人命がかかっているんだ。国民だって、非難しない。昔は、日本赤軍に脅されて、日本で勾留されてる活動家を釈放したんだ。「超法規的措置」をやったんだ。それに比べたら、嘘をついて、人命を救うくらい何でもない。それとも、「撤退しない！」はアメリカに向けての証しなのか。その証しで生きてるのが小泉首相なのか。どうも、そう思えてならない。

それに今回は、政府だけでなく、マスコミも、一般の人々の反応も冷たい。「別に市民運動家でもないから」「思想があつてイラクに行ったわけ

じゃないし…」と、左翼の側も冷たい。小田実だけが関西で、「香田さんを救おう！」という集会をやった。新聞に出ていた。しかし、出席者は100名と出ていた。（あっ、辛淑玉さんもデモをしたらしい。辛さんの教え子から聞いた）。新聞の論調は厳しいが、中でも産経新聞（11月1日）はそうだ。コラム「産経抄」ではこう書いていた。

〈非道卑劣なテロリストの蛮行には憤りを抑え切れないが、無謀な日本の若者の行動にも哀しみとやり切れなさを覚えずにいられない。気の毒だがこれこそ自己責任ではないか〉

冷たいね。「自己責任」だという。それじゃ、「殺されても当然だ」、と聞こえる。そこまで言うかよ、と思う。軽率で無謀だ。でも、助けなくちゃならん。そして、二度と、そのような事件が起きないようにすべきだろう。

イラクに詳しい木村三浩氏（一水会代表）に聞いたら、「この武装勢力には接点がない」と言う。前の5人の人質の時は、聖職者協会のクベイシ師が間に立って、釈放してくれた。木村氏も、そのために尽力した。しかし、今回は、クベイシ師たちの力も及ばない。前に、勝谷誠彦さんに聞いた。勝谷さんは『イラク生残記』（講談社）を書いた人だ。ゲリラに襲われた体験も持つ。彼が言っていた。「ちょうど明治維新前夜の日本のようですよ」と。脱藩した人間たちが、外国人を見るといきなり襲って殺した。そんな「攘夷運動」と似てるといふ。だから、話し合いの余地もない。「自分がイラクに行く時は、だから書き置きを残して行ったんです」と言う。そのことは、以前、このHPにも紹介した。「もし、自分が人質になったら、日本政府は何もしないでくれ。運命と思ってあきらめる。自分で選んだ道だから」と言うものだった。「産経抄」も、この「覚悟」は絶賛していた。

勝谷さんほどの覚悟がある人ならいい。でも香田さんは、それほどの覚悟もなく、使命感もなく行った。ある意味では、ごく普通の日本人だ。「あんな政治的見識も覚悟もない人間は救わなくてもいい」というのだろうか。だったら、日本の若者全てを救わなくてもいいことになる。これは極論だろうか。だって、ほとんどの若者は、思想性もないし、右と左の違いも知らないし、覚悟もない。フラフラと外国に行く人間もいる。「自分探し」をする人間もいる。「だから、そんな奴は放っとけ」とはならないだろう。

大体、自衛隊の人間だって、心が痛まないのだろうか。確かに、大変な仕事だとは思ふよ。でも、イラクにいるのに日本人が人質になっても助けに行けない。殺されても何も出来ない。自分たちだけを「自衛」している。これ

では意味がない。

それに、これは重要なことだが、自衛隊がイラクにいるために、5人は殺されたのだ。外交官2人、橋田さんと小川さん、そして今度は香田さんだ。さらに、釈放されたとはいえ、5人が人質になった。そのことに心が痛まないのだろうか。

「俺たちが5人の日本人を殺したんだ！」 「もう、日本に帰ろう！」と反乱を起こす隊員はいないのか！ 三島由紀夫だったら、そう叫び檄を飛ばすだろうよ。

それと、もう一つ言いたいことがある。「香田さんを止めたんだが…」と言っていた人だ。他にも、「イラク行き」を知っていた人がいた。だったら、それこそ、首に縄をつけてでも、止めたらよかったのだ。イラクへ行く時は、アンマンから出国する。僕らも去年の2月に行ったが、車で14時間もかかる道だ。僕らの頃は安全だったし、何度も途中で休憩し、食事したり、コーヒーを飲んだりした。ところが今は「アリババ街道」とか「略奪街道」「虐殺街道」と呼ばれている。日本人が襲われたのも、全て、この街道だ。

だったら、アンマンからイラクへ向かう日本人は全て止めたらいい。阻止したらいい。向こうの警察に頼んで、止めてもらう。あるいは日本大使館に連絡する。何なら、一時的に「逮捕」してもいい。その位のことはすべきだろう。又、簡単に出来ると思う。それすらもやらないで、「あっ！ イラクへ行っちゃった」「バカだな。自己責任だよ」「あっ、殺された」…と。これじゃ、余りにもひどいと思う。冷酷だと思う。（それでは、記者やカメラマンの取材の自由を制限するのか、と反対する人もいるだろう。だったら、夜は止めて、「覚悟」を聞いてから入国させたらいい）。この問題については又、書く。

さて、次の話題に移ろうかと思ったら、ロフトから印刷物がきた。ロフトプラスワンが出している月刊情報誌「Rooftop」（11月号）だ。パラパラと見たら、何と、『公安警察の手口』の書評が載っていた。ありがたい。書いたのは、ロフトの総裁・平野悠さんです。読んでない人もいるだろうから、じゃ、紹介します。それと、関口和弘君が、わざわざ、『ヤマトタケル』の書評を書いてメールで送ってくれた。僕だけが読むんじゃ、もったいない。だから、これも載せちゃおう。

書評『公安警察の手口』 = (平野悠) = 監視社会化する日本では、アナタもいつ公安に睨まれるかわからない。

先日高田馬場にあるトークライブハウス「トリックスター」で宮崎学さん

と鈴木邦男さんの「権力としてのマスメディア」と言うトークライブがあつて、わたしやそれを見に行つてその会場でこの本を手に入れた。鈴木邦男さんは一人一人にサインをしながら、私に向かっては「平野さん、この本は私にとっては史上2番目の売れ行きなんですよ」とうれしそうに言つてたな。こりゃ～最低2～3万部は売れているなと思つたら私も何かうれしくなつてしまった。まして、この本を企画した編集者は元プラスワンのアルバイトの奴で「プラスワンで働くことによってそれこそ雑多な著名人と知り合いになれたので出版することが出来ました」とその若い編集者から言われた時は何かいい事でもしたみたいでとてもうれしかったな。鈴木邦男さんは三島事件に加わつた森田必勝の死に衝撃を受けて「一水会」を結成したが、たんなる反共右翼からの脱皮を主張。テロ、ゲリラなど非合法活動をしな、他人に強要しない、団体の威力を背景に主張を押し通さないの「非暴力三原則」を掲げ、「発言の場がないからテロだ」という右翼の論理を批判、「言論右翼」と呼ばれた。旧ソ連、東欧の共産主義国家の崩壊を目の当たりにして、反共の右翼は最終的に終つたと述べ、民族主義は穏やかな郷土愛に基づくボランティア的な活動に戻るべきだと論じる。柔道4段合気道3段という以前は右翼武闘派だった人だ。

おつと話が横道にそれてしまった。

前書きで著者は、現在の日本はどんどん監視社会になつていて、警察官の目で「怪しい」と映る人物を見つけて荷物検査をしている。「怪しい人間だから調べられるんだ。僕らは関係ない」「国際テロの危険があるからしかたがない」と多くの国民は思つている。果たしてそうだろうか？という民主国家にあるまじき基本的な人権の疑問を投げかけている。そもそも町を歩いている人をいきなり呼び止めて荷物検査をするなんてちょっと前の民主警察なら考えられなかつた。これでは戦前、戦中の警察と同じではないか？・・・あなただって公安に監視され、知らない間に不審者リストに加えられるかもしれない」と私たちや特に環境や人権団体、NGOやNPOなんかのボランティア活動家にも警告を発しているのだ。

この本の著者・鈴木邦男さんは三島由紀夫～野村秋介～新右翼一水会の流れをくむ経歴の持ち主だから過去、公安や警察から徹底的にマークされた経験の中からの著作なのでそれは自分の実体験の「ガサ入れ」や「冤罪」「尾行」「張り込み」「スパイ工作」などの手口が事細かに書かれていて、どうして日本という国が9.11同時多発テロ以降どんどん加速された「警察国家」になつてしまつたのか？と言うことを警察の「組織構造」や「歴史」をも交

えて、誰にでも解る簡素な言葉で書かれているのでとても読みやすい。

確かに警察や公安は、多くの個人情報を持っている。だから警察や公安が悪事を働いても誰も追及できない。特に国会議員や大手マスコミなんか典型的に警察ともちつもたれつの関係だ。だから警察権力の数々の不正を暴き出している、宮崎学さんや寺沢有さんそして鈴木邦男さんなんかには敬意を表したい。

=書評『ヤマトタケル』= (関口和弘) 「鈴木邦男の草那芸の剣」

三島由紀夫が対談で、天皇を最後に守るべきとは考えていないという石原慎太郎に対し、「歴史を、神話を勉強したか」と憤慨する。この『ヤマトタケル』は神話を研究した書ではない。そもそも神話を学ぶことに意義があるのだろうか。

「神話を読むというのは、自分の心を読むことかもしれない」(七十三頁)そして「神様や天皇の話ではない。僕らの先祖の話だ。だから僕らのDNAの中にも、その人々が生きています。」(七十三頁)と鈴木邦男は語る。つまり神話の登場人物を客観視せず、我々の血肉と同化させ読み解こうと試みている。しかし、その解釈が偏った精神世界に埋没してしまうことを頑なに避けている。それは「フロイトならばなんと解くだろうか」(四十五頁)という一文でも明らかである。

精神分析学の祖であるフロイトは、「見る思想書」フォービギナーズシリーズの一号を飾る。原始社会では王(父親)を倒した後継者は、その肉を衆人の前で食べたと言われ、フロイトは推測する。「食べることにより、その〈強さ〉が自分の体内に入る。そう実感したのだ」(五十三頁)と鈴木も解説している。

人類史における光と影を肯定的に見るか、否かによって神話特にヤマトタケルの評価も分かれる。「正々堂々とした大和魂から反する」(六十一頁)としてイツモタケルの騙し討ちを描かなかった平泉澄氏だが、その著書を「きわめて公平で、血の通った歴史書だ」(六十二頁)と鈴木は評価する。平泉氏と鈴木は民族派運動の過程で面識があり、その印象を「純粋で誠実な人物だった」と語っている。真面目で純粋無垢なるが故に、国難に向かう若者を、敗戦濃厚で命を落とす兵士を、皇統の伝統美で抱擁してあげたかったのかもしれない。

歴史家の色川大吉氏は東大在学中、平泉教授の日本思想史を受講している。学徒出陣壮行会の数日前、教壇で短刀を抜き、短歌を誦し、生徒に別れを告げた。

「ある演習の日のこと。『古事記をよんでどう思うか』と聞かれたから、『面白いと思います』と答えたところ、『なに古事記を読んで面白いとは何事です…古事記は畏れ多くも文武天皇のおんみことのりとして…』と怒られる。」（色川大吉『明治の精神』）と述べている。この『ヤマトタケル』を読んだら平泉教授は何とのたまふであろうか。

鈴木が敬慕する民族派の重鎮、中村武彦氏は形式よりも情を重んじている。

「〈…勇氣凛々の豪語よりも深いところから出てくる真の勇者の心を見る思いがする。〉中村先生は、泣き言をいうヤマトタケルに、むしろ好感を持ち、これこそ勇者という。同じように〈右翼〉と呼ばれながら、「行動派」の中村先生と、「学者」の平泉澄の違いを見たような気がする。」（九十三頁）つまりここでは、主体か客体か、行為者との距離感が問題となる。自己は一切傷つかず、他者の血をどれ程の言葉で美化しようとも、それは自己欺瞞であるばかりか、他者（戦没者）をも冒瀆する。この自己と他者の認識と行動（死を含めた）の確執が先の三島と石原の争点であった。

「若者は愛に飢えている。美にもろい。この特性を利用して、支配の意図を遂げようとする政治家は残酷である。それに力を貸す詩人や思想家も許しがたい。」（色川大吉『歴史家の嘘と夢』）戦地に行けと命令する立場になるか、自らが赴くか。しかし現実はそのような単純ではない。王が命令を下す前に、その心情を察し行動しなければ英雄にはなれない。この構造は左右を問わず、どの集団組織にも当てはまる。鈴木邦男の左右を超えた普遍的な、人類の業をふまえたメッセージは、無敵の武器つまり草那芸の剣として言論活動を支えている。その対戦相手に諧謔と寛容を焦点とした古事記の世界、ヤマトタケルが選ばれた。

神話の登場人物から派生し、さまざまな社会問題や事件を連動させる器用な発想力と筆力は驚愕と敬虔の限りだ。しかしその広がりや普遍性が逆に剣の先鋭を摩耗している。誰からも批判されない（批判できない）言論思想は、そこで生長が止まる。神話や皇室史の甲殻は鈴木邦男の剣をもってしても貫くことはできない。文中で鈴木は何度も「右翼に怒られるかもしれない、不敬かもしれない」と弁解している。もちろん皇統批判が本書の目的ではない。むしろ賛辞している。

最後の白鳥伝説では、ヤマトタケルを追い三島や森田必勝そして野村秋介が天に羽ばたく。鈴木はこの飛翔を「憂国の連鎖」（百五十六頁）と呼ぶ。苦勞した書き下ろし作品をあえてロマンシズムで締めくくりたかったのかも

しれない。しかしフロイト流に言えば、これは鈴木の実逃避願望と解釈せねばならない。鈴木に憧れ一水会の門を叩いた若者が多勢いる。組織のリーダーとしての責任を果たしていない。それは事件自決という次元ではなく、剣を捨て丸裸の徒手空拳で闘うことである。ヤマトタケルのようにおおらかに恋をし、何もかも脱ぎ捨て発言して欲しい。その姿勢こそが我々後輩の指針になる。右翼民族派いや日本浪漫派として学ぶ者にとって飛翔を選ぶか、どろどろとした人間社会と向き合うか。その選択が課されている。(了)

【日記的附録】

(1)10月29日(金)、田代まさしさんの面会に行ってきました。11月中旬から裁判が始まります。「金嬉老事件」について、ロフトで一緒にトークをやるはずだったのに…。残念です。多分、実刑でしょうが、出てきたらロフトでやる予定です。

(2)この日の夜、『勝負あり＝猪熊功の光と影』（河出書房新社）の出版記念会に出ました。猪熊さんは柔道五段金メダリスト。ところが2001年9月に自決しました。この本は猪熊さんの秘書で、長い間、傍らにいた井上斌（たけし）さんと、ライターの神山典士さんの共著です。なぜ僕が呼ばれたかというと、書いた井上さんと知り合いだからです。実は、40年前（大学1年生の時）に合気道を習い始めた時、この井上さんが先輩として僕を教えてくれたんです。なぜ自殺したのかと聞いていたら、「切腹」を目指した覚悟の自決だといいます。又、井上さんも手伝っています。ショッキングな本でした。この本については又、書きます。関心のある人は読んでみて下さい。

(3)10月30日(土)2時から新生日本協議会の松本実さんの葬儀。松本さんには本当にお世話になった。池袋で、一緒に街宣をやらせてもらったし、「新しい日本を創る青年集会」でもお世話になった。又、台湾にも連れて行ってもらった。思い出はたくさんあるが、又、書いてみたい。

(4)10月31日(日) PRIDEの取材に行く。ジャナ専生に会う。3万円のリングサイドで見っていた。凄い。

(5)11月1日② 1時から、千代田公会堂。JR東労組の集会に出る。「冤罪。JR浦和電車区事件から2年。公正な裁判を求める11.1集会」。2年前に労組員7名が不当逮捕されたことへの抗議集会だ。この7人は「革マルの幹部だ」と言って逮捕された。全くのデッチ上げだ。でも、マスコミは皆、公安情報を垂れ流しにして、「革マルだ」と書いていた。ひどい話だ。最後に、労組委員長が挨拶。「鈴木邦男さんが、『公安警察の手口』で書いてるように、日本は監視国家、警察国家に向かって進んでます。国家権力は我々

の平和運動をつぶそうとしてるんです！」…と。突然僕の名前が出てきたので、ビックリした。

(6)11月3日(水)、3:30からスカパーの文化チャンネル「桜」に出演する。

「報道ワイド日本」という番組で、何と高森明勅氏が担当している。僕の『ヤマトタケル』を取り上げて、日本の神話、古典について話した。高森氏と30分、じっくりと話をした。「桜」は今年の8月15日に開局したばかりだが、なかなか凄い。中村黎（あきら）氏の「大東亜戦争への道」、渡辺昇一氏の「世界偉人伝」、小堀桂一郎氏の「再検 東京裁判」、西村眞悟氏の「眞悟十番勝負」。それに「日本武道アワー」「防人の道・今日の自衛隊」…といった番組が毎週ある。さかもと末明（漫画家）の「週刊ほめ殺し」もある。まるで、「正論」か「諸君」がそのままTVになった感じだ。

【お知らせ】

(1)11月10日(水)7時からライブ塾です。上田哲さんとのトークです。

(2)11月13日(土)6:30から宮台真司、高岡健（精神科医）、そして私のシンポジウムです。ザッツ・ジャパン編集委員会の主催です。牛込筆筒区民ホールです。都営地下鉄大江戸線・牛込神楽坂駅A1出口徒歩0分です。

(3)11月19日(金)6時から塩見孝也さんの『監獄記』（オークラ出版）の出版記念会です。後樂園の涵徳亭です。そして12月6日②はロフトで出版記念トークです。僕も出ることになってました（ロフトの案内を見て初めて知ったけど…）。

(4)11月24日(水)午後7時から、三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼の野分祭です。シチズンプラザです。

(5)これを書いてたら電話。僕の本を読んでかけてきたのだ。「僕の後輩がイラクで殺されたんです！」と言って泣いている。東海大高校で香田証生さんの先輩だったという。「今、ちょうどHPで香田さんのことを書いてたところですよ」と話しました。「日本政府はアメリカの顔ばかり見ている。日本人を救うこともできない！」と憤慨してました。同感です。

(6)又、ここで、別の人から電話。「三省堂神田店で、本が三位になってたよ！」と。ホントですか。嬉しいですね。

(7)アメリカの大統領は又もやブッシュでしたね。残念ですね。

(8)ジェンキンスさんは「禁固30日」。脱走し、利敵行為なのに！ これに比べたら、「よど号」の人達は日本に反逆もしてないし、利敵行為をしてない。だったら、彼らも全員、「禁固30日」で釈放してやれよ！

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン / 丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年11月15日

これは革命だ。JR東労組の松崎明さんと対談してるぜよ

(1) 「田代まさし効果」で月刊「創」が爆発的に売れちよる！

月刊「創」のことが、スポーツ紙全てに出てましたね。ビックリしました。11月6日(土)です。田代まさしさんの「獄中手記」が出てたからです。8日②はテレビのワイドショーで取り上げられました。12日(金)は初公判です。この時もマスコミは殺到するでしょう。田代さんも、一躍、「時の人」です。

「創」は、いつもは7日発売だ。7日が日曜の時は6日発売だ。しかし、田代さんの手記が載ってることを嗅ぎつけて、新聞社、テレビ局が殺到。発売前日の5日(金)は、どこも、バイク便で買いに来たそうです。これだけ新聞が全て、田代さん、「創」を報道したのも珍しい。売り切れの本屋もあったそうです。

「田代まさし被告、獄中手記。『5番と呼ばれています』」「妻へ…田代まさし被告・獄中手記」「自殺考えた」「厳しい刑を覚悟している」とスポーツ紙を見ると見出しが躍っている。そして必ず、どこも「今日発売月刊『創』掲載」と書かれている。

『創』は僕の家には6日(土)の昼に届いた。田代さんの「獄中独占手記」は表紙にも大きく書かれている。他には、映画「血と骨」崔洋一監督インタビュー。集英社「国が燃える」に街宣抗議。そして、「公安警察と公安報道の危険な本質」。松崎明vs鈴木邦男」だ。



先週のHPでも紹介したが、松崎明さんはJR東労組元委員長だ。その前は革マル派のNo.2だった。今は革マル派やめている。しかし、公安は「いや、今も革マルだ。JR東労組も革マルだ」と言いふらしている。それだけではない。2002年にはJR浦和電車区の7人が、元組合員への強要罪容疑で逮捕され、この7人は革マルだというキャンペーンがマスコミを使って張られた。

この7人は革マルとは関係はない。又、強要罪は冤罪だ。しかし、「やはり革マルか」「革マルは労働組合に入り込んでいるから怖いな」「列車テロなんかされたらたまらない…」と、一般の人は不安をもつ。つまり、公安にとって〈事実〉はどうでもいいんだ。「革マルは危ない」「革マルはJR東労組にいる」と思わせるだけでいい。そのことに、マスコミはただ、使われている。危ない話だ。さて、松崎さんとの対談だが、リードにはこう書かれている。

〈鬼と言われた労働組合幹部と新右翼と言われた論客が公安警察とそれに追隨するマスコミのあり方を批判！〉

何と、13ページもある。読んでみて下さい。実は、対談は、このあと、さらに4回もやっている。これはその第1回分だ。もう何回か対談をやって、単行本にしようとしている。松崎さんにも焦りがある。JR東労組を狙い撃ちにした「公安の手口」に我慢がならない。それと、自分もいつ、デッチ上げ逮捕されるか分からない。だから、今のうちに、キチンと語っておこうと思った。本に書こうと思った。その相手に、「昔の敵」の僕が選ばれたのだ。これは光栄だ。

昔は、(JR民営化の前は)、動労・国労にはよく僕らも抗議に行ってい

た。街宣車で押しかけたり、ストに反対して、電車内に落書きしたり。又、「スト反対に立ち上がれ！」と人々を煽動して暴動を起こさせようとした。

当時は「鬼の動労」だったし、「鬼の松崎」だった。それに、松崎さんは、黒田寛一に次ぐ「革マル派No.2」だ。これこそ、日本を悪くしている元凶だと思った。それが、今や、こうして対談し、共に「公安の手口」を批判し、マスコミを批判している。ここでは、秩父困民党を扱った映画「草の乱」の話もしている。JR東労組の組合員も千人、エキストラで出演している。凄い迫力だ。皆も、ぜひ見てほしい。今は、松崎さんたちは、「ストはしない」と明言している。しかし、「草の乱」を見て感動する熱い血は持っている。「本当はこれをやりたいんでしょう」と言ったら、笑っていた。まア、詳しくは本文を。

そうそう、『ダカーポ』（10月6日号）に松崎さんのことが出ていた。元『噂の真相』の記者たちが企画したのだ。「マスコミ報道の裏側、全部バラします。復活。『噂の真相』週刊誌記者匿名対談」だ。

この中では、「アテネ五輪のバカ騒ぎと橋本派1億円授受報道」「UFJ合併報道とデタラメな国松長官狙撃事件捜査」などに続き、公安の話が出る。そして、こう言う。

〈C ところで、その警視庁公安部がこの秋、新たな事件に着手するっていうんでマスコミが騒然となっているの、知ってる？

D ああ、例の鉄道会社を牛耳る超大物組合幹部を狙ってるっていうんだな。組合費を着服してハワイに別荘を購入したという横領事件にするつもりらしいね。一部の社はハワイまで記者を飛ばしているとか。

C この超大物組合幹部にはこれまでもさまざまな疑惑がささやかれてきたんだが、マスコミにとっては、流通や広告の関係で、触れることのできない最大のタブーだった。そのタブーがいよいよ崩れるっていうんで、各社、かなり意気込んでいるね。

B でも、長官狙撃事件で大失態を演じた公安部がそんな大物をほんとにやれるのかな。

C 問題はそこだな。少なくともマスコミは警視庁が動かない限り報道できないだろうから。

A 結局、タブー解禁も当局頼みということか。この国のメディア状況を象徴している話だな。〉

この「超大物」は松崎さんだ。しかし、記者もだらしがない。「疑惑」だと思ったら、直接取材に行けばいい。しかし、行かない。それでいて、「タブーだ」と決めつけている。「警視庁が動かない限り報道できない」というが、公安が発表したら、「それだけを書く」ということだ。情けない。7人の逮捕の時もそうだ。革マルではないが、「でも、警察が発表したことだから」と、自分の責任逃れをする。

この「超大物」についても同じだ。取材に行けばいい。「疑惑」を正せばいい。僕のような「昔の敵」に対しても腹を割って話してくれたんだ。「記者は取材には来ません。それで勝手に書くだけです」という。逮捕された「7人」に対しても、取材しないで、「だって、警察が言ってることだから」と書くだけだ。これじゃ、メディアではない。「警察の広報紙」だ。

僕と「創」で対談した時も、これらの「疑惑」について語ってくれた。組合費を着服できるかどうか。考えたら分かりそうだ。しかし、そんなことも調べないで、書く。本当を言うと、「タブー」は、「超大物」の方ではなく、「公安」の方なのだ。超大物について、書けないのではない。取材して書くと、公安に睨まれるからだ。「何だ、革マルの言い分を載せやがって。我々警察に喧嘩を売るのか」と。そう思われるのが怖いのだ。だらしのない記者連中だ。

(2) ジェンキンスさんが転び、敗北した日

では、次の話だ。それにしても、もうちょっと骨のある人だと思っただのにな。ジェンキンスさんのことだ。だって、北朝鮮通の新聞記者たちからは、僕は、さんざん聞かされていた。「ジェンキンスさんだけは違いますよ。アメリカに屈服しませんよ。何せ、自分の意志で北朝鮮に亡命し、反米映画に出演してたんですから」…と。

いわば、「よど号」グループと同じだ。確信犯だ。いや、「よど号」よりも、もっと政治的、思想的に強固だ。だって、「よど号」は、日本に対し「反日的」なことをやったわけではない。むしろ、一貫して、日本を愛し、日本を慕っていた。革命家にしては珍しく「望郷の念」を素直に表明していた。

それに比べ、ジェンキンスさんは祖国、アメリカの政策に反対し、北朝鮮に亡命した。そして、終始、アメリカを批判し、他のアメリカ兵にも脱走を呼びかけ、反米映画にも出演し、反米思想を鼓吹した。国家反逆罪で死刑、あるいは終身刑を言い渡されても文句を言えない。

又、それらを覚悟しての確信犯だと思った。新聞記者たちは皆、そう言っていた。勿論、ジェンキンスさんは被害者ではない。「むしろ、北朝鮮そのものだ」と。「それに、ジェンキンスさんは思想堅固で、絶対に転向するような人ではない」…と。

それはそれで立派だと思っていた。今や、北朝鮮の「広告塔」になっている。「悪の帝国・アメリカ」になんて死んでも帰るか！ アメリカと同盟している日本だって同罪だ！ そんな国には行くもんか！…と、思っていた。いや、思っていたはずだ。それなのに、日本に帰ってきたら、簡単に「転向」した。謝罪し、「悪の帝国」アメリカと司法取引もした。だらしがない話だ。

あれだけ信念を持ち、思想性を持ってアメリカと闘っていたのに…。新聞記者たちも正直言って、あきれている。「おいおい、もう少し頑張ってもよかったんじゃないか」と言ってる。

今年の7月、ジェンキンスさんは2人の娘と共に北朝鮮を出国した。その時は、さっそうと歩いていた。ところがインドネシアのジャカルタで曾我さんと再開。7月18日、4人そろって日本に帰国した。しかし、その時は、杖をついて、ヨロヨロと歩いていた。全ては「演技」だったのだ。クサイ芝居をする奴だ。元「俳優」だったから、これも「映画」と割り切って演じたのかもしれない。同行した娘2人は失笑していた。

そして日本に帰ったら、すぐに病院に直行。それもこれも全て「演技」だったのだ。あるいは日本政府とアメリカの間で了解が出来ていたのだろう。

さらに、司法取引だ。何と判決は、「禁固30日」という軽いものだ。脱走し、国家に反逆したのに30日か。「産経抄」は、「こんな軽い刑では米軍の志気にかかわる」と嘆いていた。そうだろう。命を賭して軍務についている兵士たちの怒りを買うだろう。

しかし、「司法取引」というのはよく分からない。闇だ。よく、アメリカのマフィアなどの判決に使われる。麻薬や殺人などで、捕まえた人間に対し、「トップの罪を白状したら、お前の罪はチャラにしてやる」と持ちかけるのだ。捜査のやり方としては邪道だ。犯人は自分が助かりたい為に、他人の罪を告発する。ということだ。いやな感じだ。

ジェンキンスさんには、何が「取引」の材料にされたのか。北朝鮮情報だという。北朝鮮で、スパイに英語を教えたり、反米映画に出たり。さらにもっと、いろんな「反米活動」「反逆活動」をした。本当なら、死刑か終身

刑だ。「でも、それをチャラにしてやる。そのかわり、北朝鮮での生活を反省し、全てを白状しろ！」と迫ったわけだ。そして簡単に、転向した。情けない。彼の「自白」によって命が危うくなった人々もいるだろう。

「反省はする。やってきたことは謝罪する。しかし、世話になった北朝鮮のことは言えない。ましてや、アメリカに対するスパイ活動、反米活動については言えない。迷惑をかける人が多すぎる」と言って証言・協力を拒否する道もあったはずだ。「それで文句があったら、何年でも刑務所にぶち込めよ！」と…。それ位、言ったらよかった。北朝鮮では、エリートの反米活動家だったんだし。

ところが、ジャカルタでの曾我さんの「ブチュ」に負けたのか。日本政府や米軍に懐柔されたのか。いとも簡単に転向した。

あるいは、日米間の「司法取引」もあったんだろう。「日本はこれだけアメリカに協力して、イラクに自衛隊まで送った。国民が5人も殺されながら、それでもイラクにとどまっている。その点を考えてほしい」「うん、そうだね。じゃ、本来なら、死刑だが、1ヶ月の禁固で許してやるか」

…といった「取引」が行われたのだろう。日本人の命でもって、脱走兵1人を助けたわけだ。ジェンキンスさん本人だって、複雑な思いだったろうよ。

もう少し、蛇足だ。拉致家族や、その子供たちが帰ってくるたびに、言われていた、「今度は違いますよ。エリート教育を受けてるんですから。むしろ、“日本人を洗脳してやる”位の覚悟をもって来てるんです」と。子供の時から、北朝鮮で徹底的なエリートの社会主義教育を受けてきた。さもありませんと思った。「腐敗堕落した日本資本主義になんか染まるもんか！」と思って来日したはずだ。「共和国(=北朝鮮)の素晴らしさを教えてやろう！」と意気込んで帰ってきたはずだ。

帰ってきた子供たちも、顔はキリリとりりしいし、そう思った。ところが、帰国して何週間もたたないうちに、テレビゲームやパソコンにはまり、「腐敗堕落した日本の資本主義」に打ち負かされてしまった。なんとも淋しい話だ。

(3)じゃ「よど号」も司法取引で「禁固30日」にしるよ！

ジェンキンスさんは、4つの罪に問われていた。4つの罪のうち、脱走と英語教育を行った利敵行為について有罪を認め、他の兵士への脱走教唆と軍への背任行為の奨励は否認。この2つの罪状は審理から除かれた。この除い

たことも「司法取引」だろう。

ジェンキンスさんは、在韓米軍として韓国に駐留していたが、「ベトナムに送られる」という話を聞き、恐くなり、毎日おびえて、酒びたりになった。(この頃から、アル中だったんだ)。そして、1965年に、ふらふらと脱走し、北朝鮮に亡命した。平壤の軍の大学で81年から85年にかけて英語を教えた。裁判官の質問に答えて陳述。「自分のしたことを深く悔いている」。しかし、「北朝鮮では、拒む自由はなかった」と言っている。弁護側証人として、曾我ひとみさんも証言。

「夫は家族を心から愛してくれた。わたしたちが日本語や英語を北朝鮮に教えるのを嫌だと言ったら、家族と一緒に生活できなくなったかもしれません。

ここで話をかえよう。いや、ちょっと別の視点から見てみよう。ジェンキンスさんが、ただの脱走兵だったら、勿論重罪だった。アメリカに連れて行かれ、十年以上は刑務所暮らしだ。「司法取引」をしたって、余り変わらない。ところが、拉致被害者の曾我さんと結婚した。それで、「拉致被害者の夫」になった。そのことで、今回は日本国民からも温かく迎えられた。「曾我さんの夫だ。かわいそうだ。一家4人で平和に暮らさせてやれよ」と。まさか、そんな先の先まで考えて、ジェンキンスさんが曾我さんと結婚したわけではない。(いや、それ位の計算をしてたという人もいるが)。

だったら、「よど号」グループも、もし、拉致被害者と結婚していたらどうだろう。「拉致被害者の夫」として、「かわいそうだ。早く帰せ。禁固30日位で釈放してやれよ！」と国民世論もなったかもしれない。いやいや、そうはならないだろう。「結婚したということは、彼らも拉致に手を貸していたのだ」「結婚するために拉致に協力したのだ」と叩かれただろう。

何度も言うように、ジェンキンスさんのやったことに比べたら、「よど号」のやった罪なんて軽い。だったら、日本政府も、寛大な心で、「よど号」をうけいれてやったらいい。あんな大罪を犯したジェンキンスさんが「禁固30日」なら、「よど号」は「禁固10日」だ！と。その位、やってやってもいい。

でも、そうはならない。かわいそうだね。「よど号」は。逮捕覚悟で帰国するようだ。

田中義三さんは懲役12年の判決で、今、熊本刑務所にいる。だったら、他のメンバーも同じか、それ以上だ。かわいそうだ。

【日記風附録】

(1)11月5日(金) 田代まさしさんの面会に行く。「金嬉老事件と三島事件」について話す。前の時より元気そう。

(2)11月6日(土) 「創」(12月号)発売。田代まさしさんの「獄中手記」が載っている。その日、スポーツ新聞、夕刊紙には全て、大々的に載っている。どこも「創」の記事をもとに書いている。凄い。

午後2時から、河合塾池袋校で、保阪正康さん(ノンフィクション作家)の講演を聞く。「いま、日本国家はどこへ向かっているのか=昭和史から学ぶこと」。超満員。司会は青木裕司さん(世界史科講師)。お2人とも久しぶりに会って、いろいろと話した。

(3)11月7日(日) 午後5時より、大日本生産党再建50周年大会に出る。日本青年館で。

(4)11月8日② 「ゴング格闘技」の対談。水道橋のファイティングカフェ「コロッセオ」で。格闘技版ロフトみたいな居酒屋だ。そこで「K-1」決勝大会について話す。猪狩元秀さん、ニコラス・ペタスさんと三人で。「武蔵は優勝できるか」がテーマ。

(5)11月10日(水) 「格闘技通信」(12月8日号)発売。骨法道場の堀辺正史先生と僕の対談「武道待望論」の第2回目が載っている。「敗北(死)を覚悟し、それを正視することが、本当の強さである」というテーマだ。

午後2時から、元JR東労組委員長・松崎明さんと対談。今月の「創」でその第1回目が載っている。

夜7時から高田馬場のライブ塾で上田哲さんとトーク。満員。上田さんは相変わらず元気一杯で、皆を叱咤していた。

(6)11月11日(木) ロフトプラスワンで、「ザ・ニュース・ペーパー」のDVD『笑国日本』発売記念ライブ。超満員でした。ニセ小泉、ニセ石破、ニセ宗男など変装ゲストが多数で、観客を笑殺してました。DVDは3675円。イラク、北朝鮮、小泉をネタにした過激な社会風刺コントです。なぜか、私も特別出演しちよります。

【お知らせ】

(1)11月19日(金) 6時から塩見孝也さんの『監獄記』(オークラ出版)の出版記念会です。後楽園の涵徳亭です。会費は5000円(本付き)です。

(2)11月24日(水) 午後7時から、三島由紀夫、森田必勝両烈士追悼の野分祭です。シチズンプラザです。

(3)12月はロフトに3回出ます。

12月6日② 塩見孝也さんの出版記念トーク

12月14日(火) 岸田秀、松尾貴史、鈴木邦男の「幻想まっしぐら」第2弾

12月27日② 月刊「創」プロデュース・イベント

(4)12月8日(水)は7時からライブ塾です。映画監督の森達也さんです。テーマは「表現・虚と実」です。

(5)12月21(火)、22(水)、24(金)、25(土)と「ザ・ニュース・ペーパー」の本公演があります。場所は一ツ橋ホール（神保町、日本教育会館）です。ゲストに高橋哲哉さん、斉藤貴男さん、大内裕和さん、そして僕も出ます。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年11月22日

愛と謀略の田代まさし公判

(1)せっかく並んだのに。傍聴できなかったよ

田代まさしさんの第1回公判が、11月12日(金)、東京地裁で開かれた。マスコミも殺到。さらに、傍聴マニアも殺到。30枚の傍聴券を求めて278人が並ぶ。「10倍」の難関だ。1時半開廷だが、9時頃から傍聴券を求める人が並ぶ。12時50分に、抽選。私も並んでましたが外れた。高須基仁や、そのまんま東も外れて、すごすごと帰っていった。

裁判は1時半から1時間ほどで終わったようだ。この日は、「求刑まで行くんじゃないか」と書いてた新聞もあったが、それはなかった。次の公判は12月17日だ。この日のテレビでは、どこも大きく報道していた。

しかし、それにも増して、次の日のスポーツ紙は凄かったね。「田代バッシング」の嵐だ。見出しを見ただけでも、オドロオドロしい。

「田代まさし、覚せい剤取締法違反で初公判。快樂求め転落。外国人密売人から購入…ホテル嬢と共に逮捕。自ら女に注射」(サンケイスポーツ)

「性的快感のため覚せい剤。恋人のホテル嬢に勧め注射」(日刊スポーツ)

「髪薄く、げっそり…田代まさし被告“別人”」(スポニチ)

そして圧巻は「東スポ」だ。

「田代まさし、ヤク中SEX狂い。2週間ラブホにこもってクスリ打ち続け…。藤原紀香似の愛人ホテル嬢と。第1回公判。傍聴者思わずア然」

この「藤原紀香似の愛人」も見てみたかった。最初は「客」である田代さんに呼ばれたが、すぐに愛人関係になったという。「福井節子被告(38才)」と、名前・年齢も出ている。しかし、「藤原紀香似で、20代半ばに見える福井被告に田代はゾッコンだったという」。じゃ、20代半ばに見える本物の藤原紀香も実際は38才位なんだろうか。違うか。

それにしても、クスリをやめるのは、そんなに難しいのか。田代さんは2年前（平成14年）に、覚せい剤で逮捕され、執行猶予中（3年）だった。それで懲りて、もうクスリはこりごりと思った。はずだったのに。今年3月ごろには再びクスリに手を染める。意志が弱いのか。「創」の手記によると、芸能界復帰が絶望的になり、落ち込んでいた。さらに、奥さんや子供たちからも見捨てられ、ショックだったようだ。そんな中で、再び、クスリに手を出す。

僕がロフトで会ったのは今年の7月13日だ。金嬉老事件の話や、三島、野村さんの話をした。10月には2人でロフトでトークをやることも決まっていた。でも、この時は既にクスリをやっていたのか。そんな素振りは全く見えなかったけど。

「今年6月、ホテル嬢としてやってきた福井被告と付き合うようになった」（東スポ。以下同じ）という。じゃ、ロフトで会った時は、「ヤクと女」にはまっていた頃なのか。でも、金嬉老のビデオを上映し、民族差別撤廃を訴える「金嬉老の闘い」について熱く語っていた。僕も金嬉老に会ってみたい、と思った。田代さんと一緒に韓国に行って取材したいと思った。

さて、六月にホテル嬢と会った田代さんだが…。

〈最初は週1回エッチをする仲だったが、8月10日ころに田代被告が「セックスが気持ちよくなるから」と福井被告に覚せい剤の使用を持ちかけた。その後数十回にわたり、セックス前に覚せい剤やMDMAを使用したという〉

MDMAというのはDVDではない。大麻系のクスリらしい。しかし、どう気持ちがよくなるのだろうか。出てきたら、本人に聞いてみよう。それから2人はヤク友達のセックスフレンドになり、会う回数が増える。週1だったのが、週3回になる。そして、9月20日に逮捕される直前には中野区のラブホテルにこもりっきりになり、クスリを使ってのセックスを繰り返していたという。

〈ここで驚かされるのが、田代被告のあきれた“セックス狂い”ぶり。クスリの力があつたとはいえ、48歳という身で2週間ぶっ続けでやりまくっていた事実、傍聴に詰め掛けていた人たちから驚きとため息が上がった〉

「ため息」って何だろう。「オレはもうダメなのに48才で、ここまでやる

のか。偉い！」というため息か。確かに、クスリさえなければ、全く非難されない。「男のかがみだ！」と称賛されただろう。しかし、ラブホテルって、2週間も居続けられるのか。掃除のオバさんも入れず、食事をとって、立てこもったのか。いや、それも「引きこもり」なのか。「武装勃起だから、立てこもりじゃないの」と言う人もいたが、私はそんな下品なダジャレは言わない。

それにしても、2週間もやり続けるなんて、出来るものなのか。不思議だ。と言っても試してみる気はないが。

「紀香似」の愛人は、この日に証言している。

〈この日は福井被告の公判も同時に開かれた。証言によると、8月10日に田代被告に「覚せい剤持ってきたけど、使ってみる？」と初めて勧められた。以後、田代被告に勧められるまま十数回使用したという。福井被告は「もう薬物使用はやめてと数回話したが、嫌われることが怖くて強く言えなかった」と涙を流して証言した。同被告は懲役2年を求刑された。〉

そして、11月19日に判決公判だという。第1回で求刑。1週間後にはもう判決だ。執行猶予で、即日、釈放だろう。9月20日に逮捕されたから、勾留生活2ヶ月だ。「田代に無理に注射を打たれたんだから、むしろ被害者だ」という気持ちが検事や裁判官にもあるのだろう。「女にクスリを打って、やった」ということでその分、田代さんの罪は重くなる。「家族に捨てられて淋しかったから、自分一人でクスリをやってればいいんだ。シロウトの女性に無理矢理クスリを打つなんて許せない」とテレビで言ってた人もいた。でも、シロウト女ではない。立派なホテル嬢だ。それに密室の中のことだ。彼女の言い分が100%正しいとは言えない。

でも、田代さんは「全ては自分の責任だ」と認めた。何とか、立ち直ってほしい。そうだ。思い出した。田代さんが捕まった時、これは「囮捜査」で捕まったんだ、という噂が流れた。何人かの新聞記者から聞いた。だって、あまりにタイミングがよすぎる。9月20日、中野区の路上にとまっていた車に警察官が職務質問をした。田代さんと愛人が乗っていた。免許証を見せれば、それですむ。ところが、「カバンを見せる」と言った。見せたら中にナイフがあった。さらに、女のバックを探したら、覚せい剤があり、逮捕した、という。

交通検問で、そこまでするのか、と思う。前々から尾行、張り込みをして

いて、それで捕まえたのではないか。ある記者は、「同乗していた女がヤクの売人です」という。ある記者は、「いや、この女がマトリ（麻薬捜査官）で、囮捜査だったんです」と言う。

田代さんは、ヤクをやめて、更生していた。月刊「創」には「日々是精進」と書いてたし、反省の日々だった。ところが、ある日、女が近づいてきた。交わってみると気持ちがいい。「ねえ、もっと気持ちがよくなるクスリがあるのよ」と、言葉巧みに誘って、覚せい剤を打たせた。つまり、この女性は囮捜査官だった。つかこうへいの小説に『売春捜査官』という小説があるが、まさにこれだ。「ホテル捜査官」だ。

「いや、そこまではいかないが、ヤクの売人を装って近づいたのは間違いありません。それに、逮捕の瞬間も、あまりにタイミングがいいし、鮮やかです」という記者もいた。

僕も初めは、この「謀略説」を信じた。公安の手口ならぬ、驚きの「マトリの手口」だ。マトリックスだ。

でも、この女と一緒に起訴されちゃったよ。「しかし、執行猶予で釈放です。勾留されてたのは2ヶ月です。マトリの捜査官として、2ヶ月位どうってことないですよ」と、その記者は言う。ゲッ？そこまでやるかなー。それに、「20代半ば」と言って「商売」してたのに、この逮捕で38才だとバレてしまった。そこまでして、マトリの仕事をしてるんだろうか。この女性の「その後」については「創」でやってほしいね。僕は秘密捜査官だったとは、思わないが。でも謎だ。不思議だ。世の中は謎で満ちている。

(2)コナン君になぞを解いてほしいね。この逮捕、公判は

では、次は少年秘密警察官の話だ。違った。少年探偵の話だ。

それは、ある雨の日のことだった。夕方じゃったわいな。学校の授業が終わり外に出ようとして傘を開いた。ビニール傘だ。開きながら考えた。傘に小さく穴をあけ、そこから手を出してピストルを撃つ。そうすると、傘がガードしてくれて、自分の服の袖には硝煙反応が出ない。傘はどっかに捨てる。これで完全犯罪だ。

…と、いう事を眩きながら、傘を開けたんだわさ。そしたら、生徒に言われた。「それって、名探偵コナンに出てた話ですね！」。ギクっとした。あっ、そうか。自分で考えついたと思ったのに。前に読んだコナンのことで覚えていたのか。その生徒は、コナンは全て読破し、ビデオも全て見てるといふ。ちくしょう。負けてられないと思った。「よし、じゃ、オラも挑戦し

てやろう！」と決意した。それで、新宿のTSUTAYAに行ってみた。劇場版のやつが8巻ある。これをまず見た。それから、テレビ版のコーナーを見たら、「シリーズ1」から「シリーズ11」まで出ている。各10巻だ。つまり、全部で110巻だ。ヒャー無理だな、と思ったが、子供に負けちゃおれん。それに、クリスティー、クィーン、ドイル…と世界中の推理小説を読破して、「日本のポアロ」と呼ばれる私だ。そんなことでくじけてはならん。それで、4巻ずつ借りて、ひたすら見た。そして、やっと「シリーズ10」まで見た！ もう10巻で目標達成だ。

でも、今もテレビでやってるから、ビデオも増えるんじゃないだろう。困った。それと、新宿TSUTAYAではない巻がある。いつも貸し出し中になってる。次の週もない。その次の週もない。頭にくる。仕方がない。絶望的になった。110巻全部見た気になっても、ちょぼちょぼと虫喰い状態になって、見てない巻がある。（手帳に書いてメモしておるんよ。でないと、どれを見たか分からん）。

ところが、ある日、うちのすぐ近くのビデオ店の前を通った。小さいビデオ店だ。余り品揃えもよくない。客もあまりいない。こんな所にあるはずないよな。でも念の為にと思い、入ってみた。ビックリした。あった！（世界最大の）新宿TSUTAYAにないビデオが落合の小さなビデオ屋にあったのだ。お宝は近くにあったんだね。メーテルリンクが「青い鳥」を書いたのは、僕にこのことを知らせる為だったのか。と、「青い鳥」の話の意味が初めて分かった。

さて、コナンだ。コナンはビデオだけでなく、単行本でも出ている。47巻までである。生徒が、「じゃ、本は私が貸してあげるわ」というので、毎週5冊ずつ借りてみている。もうすぐ全巻読破だ。でも、週刊誌で今も連載中だから、どんどん次の巻が出る。永久に終わらない。永久に「全巻読破」が達成できない。じゃ、仕方がない。青山剛昌を殺すしかない。そうしたら、もう後は続かないから、「全巻読破」できる。「名探偵コナン・全巻読破殺人事件」なんて、いいじゃないか。

そして、コナンが終わったら次は「金田一少年の事件簿」だ。見るものが沢山あって大変だ。

それに外国の推理物、探偵物は全部見てやろうと決意し、挑戦してる。これからは、オラも、「手口」もの、「謎」「秘密」ものを中心に書くんじゃないから、勉強せにゃならん。（今までに、『赤報隊の秘密』と『公安警察の手口』を出しちよる）。

「刑事コロンボ」（全50巻）は見た。これは前に書いた。「モース警部シリーズ」（全25巻）も見た。「マルティンベック」（全6巻）も見た。他に、「メグレ警部シリーズ」「ペリーメースン」「刑事コジャック」も見た。変な警察もいたな。「モンク」のシリーズだ。高所恐怖症、閉所恐怖症で、そのため、時々犯人をとり逃す、というドジな警察だ。それに、精神を病んで、病院に通っている。でも推理力は超一流で、ホームズ並み。オラみたいだ。そんで、難事件を次々と解決する。それと、「リーバス警部」シリーズ、「ダルグリッシュ警部」シリーズも見ている。見なきゃならんのがありすぎて困る。

さて、又、コナン少年の話だ。彼は本当は高校3年生だが、悪者に捕まって、クスリを飲まされて小学校の1年生になっちゃう。12才も若返っちゃうんだ。「若返り」というのかな。ともかく、より子供になっちゃう。（そういえば、48才のオトナがクスリで若返り、2週間、ホテル嬢とやり続けた、という事件があったよな）。

高校生探偵の工藤新一が、小学生になっちゃって、「江戸川コナン」になっちゃうんだ。大変だろうな。高3の勉強をし、高3の友人たちと話し、遊んでたのに、いきなり、小1の勉強をし直すんだ。馬鹿らしくてやってらんないだろう。でも、コナン君は、ちゃんと、ランドセルをしょって、学校に行き、毎日のように出くわす事件を解決する。

しかし、こんなに毎日、殺人事件に出会い、死体を見ている少年はちょっといない。大人だっていない。警察だっていない。普通なら、ショックでPTSDとかいう病気になっちゃうよ。でも、コナン君は平気だ。又、高校生の時の「恋人」はそばにいる。小学生になってからコナン君を恋する女の子も出来る。いわば過去と現在の三角関係だ。いや、高3に戻ったら、現在の三角関係になる。どうするどうなる、コナン。危うしコナン！

「でも小学生になって、小学生の女の子と遊ぶなんていいな」とオラがポロっと喋ったら、コナン好きの生徒に、ジロツと睨まれた。「いやらしい！」「不潔！」とその目は言っていた。

そういえば、中島らもさんも同じことを考えとったよ。天才の発想は似てるもんじゃ。

中島らも、いしいしんじの対談集『その辺の問題』（メディアファクトリー）だ。らもさんが言う。

「いつも思うねんけどな。現時点の頭のまま、40男のタクティクスを持って、小学生に戻りたいわねえ」

いしいが言う。「ほほう。タクティクスですか。いったいどんなタクティクスで、小学校女子生徒を…」

らもさん答える。「やっぱりな、酒飲まして、膝に抱いて、ブチューとキスする」

ヒャー、凄いことを言いますね。らもさんも。「朝生」に出た時も、こんなことを言ってくれりゃよかったのに。そしたら盛り上がったよ（盛り下がったかな）。

(3)もし、オラが新聞記者になっていたら…

この対談本は、他にも、凄い話が載っとる。「獣姦してみたい動物」って章があった。羊、牛、ヤギ、犬、猫…とあるけど、1位は「エイ」なんだ。エイ！とばかりに、エイとやっちゃうんだ。でもエイって魚じゃろうが。魚姦じゃないのか。なぜ、エイがいいかというと、人間の女性の性器と似てるんだそうな。ジュゴンもそうだというよね。そんで、「人魚」といわれるらしい。だからエイやジュゴンは本当は人間なんです。粗末に扱ってははいけません。らもさんが、言っとった。

「羊に戻りますと、アメリカには、牝羊を妻とする男の会というのがあって、メンバーが5万人くらいいて、1年に1度、スワッピング大会を開くそうです」

ホンマかいな？ ウソだろうと思うが、本当だったら怖い。スワッピングのあとは、ジギスカンにして食うんだろうか。いや、そんなことはしないな。「妻」だから。今、世界中で、同性の結婚を認める！という運動があるし、世界の一部では許可されてる所もある。じゃ、「動物や魚との結婚も認める！」という運動が起きてるかもしれない。思いがけない展開があって、楽しいやね。この世は。

しかし、羊はかわいそうだ。自分の意志なんか聞かれなくて、勝手に毛をかられてウールとして売られ、犯されて妻にされ、さらに、食われちゃう。人間の勝手に、三度も利用されちゃう。一粒で三度おいしい。グリコのようだ。獣姦で羊を犯すのは、羊姦（ヨーカン）と言うのだろうか。ヨーカンを食べながら、よう考えよう。でも、羊の生まれかわりの私としては悲しい。グスン。

【日記風味の附録】

(1)11月12日(金) 田代まさしさんの第1回公判。傍聴券をもらおうと並んだが抽選で落ちた。本文に詳しく書いたね。

(2)11月13日(土) ザッツジャパン編集委員会主催のシンポジウム。6時半から牛込筆筈区民ホールで。宮台真司、高岡健（精神科医）、そして僕。2人とも難しい話をする。こっちは頭が悪いので、ついて行けなかった。必死で対応したが、僕だけが浮いちゃったような気がした。反省。自虐。

宮台さんが、僕の『腹腹時計と〈狼〉』（三一書房）に触れて、「あれはいい本だった。あれを書いたのは邦男さんが産経の記者をしていた時ですかね」と言っていた。すかさず、「いえ、記者をやめた後です」と答えりゃよかったな、と後悔。そうしたら面白かったのに。受けて。実際は、キマジメに、告白しちゃった。「いや、記者じゃなかったんです。無能だったから、販売と広告にいたんです」。ホントだけど面白みのない答えだったと反省しちよります。

(3)11月14日(日) 午後1時から、「在日コリアンの政治参加を求めて」に行く。「参政権、国籍、アイデンティティ」をテーマにしたシンポジウム。白眞勲（ハクシンクン。民主党参院議員）、高英毅（弁護士）、陳賢徳（チンヒョンドク。民団中央執行委員）、辛淑玉、二木啓孝…の五氏によるシンポジウム。水道橋のYMCAで。辛さんには久しぶりに会った。「鈴木さんにも出てもらいたかったんだけど…」と言っていた。昔、大阪で、李英和さん主催の「在日コリアンの参政権」討論会に出たことがあった、と思い出した。

「参政権を認めるべき」と言ったら、右翼の新聞に、「鈴木 of 売国発言！」と大々的に取り上げられ、批判された。又、「売国奴」と言われてみたい。弁護士の李宇海（イークヘ）さんと久しぶりに会った。昔、「朝日ジャーナル」で〈狼〉事件について話をした。

この日のシンポジウムは辛さんが、やはり冴えてたね。感動して、私は聞き惚れてしまいました。去年の12月は札幌で一緒に討論会をしたが、又、ぜひやりたい。「そうですね。愛国心、在日コリアンについてやりましょう」と辛さんも言っていた。

そうだ。辛さんの近著『怒りの方法』（岩波新書）をテキストにして、学校で読書会をやった。その時、沖縄の名菓「チンスゴウ」を東京駅で買ってきて、生徒に食べさせた。チンスゴウを食べながら、チンスゴウを読んだ。あっ、逆か。風流ですよ。と一人、悦に入ったら、生徒に見破られ、馬鹿にされた。「これを買ってきたのは鈴木さんでしょう。そんな子供っぽいことを考えつくのは、鈴木さんしかない！」と。子供から子供と言われたら、オラは、コナンかいな。

(4)11月17日(水) 田代まさしさんの面会に行ってきた。18日(木)には小菅

の東京拘置所に移るそうだ。『月刊タイムス』と『格闘技通信』を差し入れた。『月刊タイムス』（12月号）には、三島由紀夫に影響を与えた金嬉老事件について書いた。そのことに気づかせてくれたのが田代さんだ。田代さんが監督した金嬉老事件のビデオで、気づいたのだ。

(5)その『月刊タイムス』（12月号）だが、「編集後記」で編集・発行人の香村啓文さんが、僕の『公安警察の手口』について触れていた。この取材力は産経記者だった体験から得られたものと思われるかもしれないが、さにあらず。販売局と広告局にいた。と書いてます。さらに、

〈産経新聞社はじつに惜しいことをしたものだ。鈴木氏を編集局におき、取材、記事づくりに活躍させていれば、いまごろ論説委員長か産経抄の執筆者になっていただろう。それほどの才能がある〉

これには驚いた。考えてもなかった。ほめ過ぎですよ。別に謙遜するわけじゃないが、「記者」になれるなんて全く思わなかった（なりたかったけど）。ましてや論説委員長なんて…。だって、販売、広告にいた時だって、無能社員で、部署を9回も変えられた。使い物にならんから、トライ回しにされてたんだ。ホントです。仙台二高を落ちて以来、全て、不合格、落第、クビ、解任…の連続です。「負け組」ですよ。だからこそ、こんな私ですが、何とか生きていこうと勉強してきたんですよ。

でも、「産経は惜しいことをした」という香村さんの文を読んで、うかつにも涙が出てきました。そこまで評価してくれるなんて…と。とても、そんな能力はないんですが。あまりに感動、感激したんで、来週でも「編集後記」の全文を紹介ませう。

(6)「日記」としては、この位が公表できるところだ。あとは非公然、非合法の裏日記がある。公安の本が出て以来、いろんな人から電話、メール、手紙があり、直接会った人も多い。元公安、元公安記者、過激派。それに、「今、公安の協力者（スパイ）をやってます。お金も、もらってます」という人にも会った。「組織に知られたら、どうするんだ。やめろよ！」と忠告してやった。それから連絡がない。消されたのかな。又、「ロシアのKGBを紹介してやる」という人がいて、会った。いろんなスパイと会っている。

【お知らせ】(1)11月24日(水)、午後7時から、三島由紀夫、森田必勝両烈士追悼の野分祭です。高田馬場のシチズンプラザです。どなたでも参加できますから、どうぞ。式典のあとは、元「楯の会」一期生・伊藤邦典氏の記念

講演があります。

(2)ロフトは12月に3回出ます。7時半からです。

12月6日② 塩見孝也さんの出版記念トーク

12月14日(火) 岸田秀、松尾貴史、鈴木邦男の「幻想まっしぐら」第2弾

12月27日② 月刊「創」プロデュース・イベント

(3)12月8日(水)は7時からライブ塾です。「A」「A2」で有名な、映画監督の森達也さんです。テーマは「表現・虚と実」です。森さんは本もたくさん書いてます。放送禁止歌、超能力、下山事件などについて本を出してます。小説も書いてます。『池袋シネマ青春譚』（柏書房）です。面白かったです。映画、芝居に熱中していた学生時代の話です。恋愛も勿論、出てきます。

(4)12月21日(火)、22(水)、24(金)、25(土)と、「ザ・ニュース・ペーパー」の本公演があります。一ツ橋ホールです。ゲストは高橋哲哉さん、斉藤貴男さん、大内裕和さん、そして私です。私は4日間、出ます。

(5)明るいニュースですね。紀宮様ご婚約おめでとうございます。しかし、宮内庁は新潟地震の被災者を思いやって発表を延ばしたとのこと。明るいニュースですし、かえって、励ましになると思いますがね。又、来週書きませう。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年11月29日

「藤原紀香似の美女」の公判傍聴記

(1)関係ない交通違反の裁判も傍聴しちゃった

こんな不純な動機で裁判を傍聴に行ったのは初めてだ。実は、「藤原紀香似のホテル嬢」を見てみたいと思った。本当は38才だが、どう見ても20代半ばにしか見えないという。11月22日、その女性の裁判に行った。

あの田代まさしさんと一緒に捕まった女性だ。9月20日に逮捕されたが、その前は、2週間、2人で中野のラブホテルに泊まって、覚醒剤を打ちながらSEX三昧だったそうだ。第1回の裁判が、11月17日(水)にあった。田代さんと、その女性が出廷した。でも、マスコミの人がドットつめかけ300人も来た。30人しか傍聴できないし、抽選になって、私は外れた。この日は、田代さんが主犯。ホテル嬢の方は、いわば従犯というか、被害者ということもあり、この日、求刑までいった。そして、5日後の11月22日にはもう判決だ。田代さんは別だ。12月17日(金)に第2回公判がある。そして何回か公判があって、実刑判決だろう。

さて、ホテル嬢の判決だ。ホテル嬢と書いちゃいけないのかな。じゃ、福田被告だ。スポーツ新聞には全て実名が出てたからいいだろう。

田代さんがかわいそうだ、と支援している人が何人かいる。その人から「ぜひ福田被告の公判を傍聴に行きましょう」と誘われた。22日の朝10時頃、家に電話があった。地裁に公判の「予定」が出てないという。表に出てないし、中の人に聞いても分からない。フルネームは何ていうんですか、というから、「福田典子だよ」と教えてやった。「あれっ、それ河合塾コスモのフェローじゃないですか？」と言う。僕の担当フェローだ。なぜか、彼女のことを知っている。漫画家の石坂啓さんの妹だ。「姉の原作ドラマが今、NHKでやってるから見てね」と言われたな、先週。「冬のソナタ」の後番組で、「アイムホーム」だ。時任三郎が主演だ。

そんなことを考えてたら、電話の音が、怒っている。「だから、それはフェローですよ！」

そうか。知らなかった。フェローをやりながら、覚醒剤をやり、ホテル嬢までやってたのか。三つの顔を持つ女だな。ふとい奴だ。だったら知り合いだから、わざわざ裁判所まで見に行くことはないな。

「典子じゃないですよ。ちゃんと調べて下さいよ」と、電話の声はさらに怒鳴っている。仕方ないから、東スポを探した。あっ、福田節子（38才）だった。「藤原紀香似の美人で、20代半ばにしか見えない」と出ていた。

「藤原紀香似の美人」といって裁判所の受付で聞けばいいじゃないか、と言ったら、「そんなこと言ったら、バカにされますよ」と叱られた。

それでも調べるのに手間どったようだ。「本日の1時20分、覚醒剤。福田節子被告」と分かってても、受付の台帳には出ていない。実は「通称」で出ていたのだ。「○○○○こと福田節子」と出ている。だから、普通の人とはとても探せない。司法記者クラブの記者くらいしか分かんよ、これじゃ。この日は、スポーツ新聞を手に、「田代さんの愛人の公判はどこかな？」と探していた裁判マニアの女性が多数いたらしいが、法廷を探せなくて、皆、帰ったらしい。「私は、いじ悪だから教えてやらなかった」という。別に、いじ悪ではない。早い者勝ちだし、重要度が違う。我々はひやかして見に来てる連中とは違う。（ウーン、僕は、そう断言できないことが辛いが）。

では彼女は何故、法廷が分かったのでせう。台帳に載ってないので、地裁を一階、一階調べて、全ての法廷を調べたんです。凄い執念だ。それで見つけた。「分かりましたよ」と11時に電話があり、私もすぐに駆けつけた。1時20分開廷だが、傍聴券はない。大体、公表してないんだし、5階のその法廷に行って、廊下に腰を下ろして並ぶ。司法記者クラブの記者しかいない。シロウトは誰もいない。

午後からはこの法廷で、4つ位の裁判がある。午後1時10分から交通違反の裁判。1時20分から福田被告。1時20分開廷。1時25分閉廷と書いている。ひゃ、5分間しかないのか。でも、交通違反が終わって、それから一度、皆が出てきて、そんで福田被告の裁判が始まるのかな、と思った。そして、1時になったら、ドアが開いて、傍聴人を入れた。並んでいた新聞記者はゾロゾロと皆、入る。アレッと思った。まさか、一般人の交通違反を目当てに来てるわけじゃないだろう。時間があるから、ついでに見てみようと思ってるのか。迷ったが一緒に入った。満席だった。

1時10分、交通違反の裁判が始まる。名前も忘れたが、普通のサラリーマ

んだ。何でも新車を買って嬉しくて、スピードを出しすぎたという。そんなことで逮捕されて、裁判までされんのかよ、と思った。別に、人を殺したわけでも、怪我させたわけでもない。ただ、スピードの出しすぎの度合いが大きい。それだけだ。でも、制限速度を80キロもオーバーしたそうな。それで判決。懲役3ヶ月。執行猶予2年だ。この被告人は、一度も事件を起こしたことはなく、深く反省もしている。職場でも真面目で、上役も、「しっかり監督しますから」と上申書を出している。それで情状を酌量して執行猶予だ。

「これからは、絶対にスピードを出しすぎないように。なお、2年以内に罪を犯すと、その罪は勿論、今回の懲役3ヶ月も加算されます。…」と、裁判長の説教（というのか訓示というのか）がある。この間、5分。早い。

(2)田代さんが夢中になるのも分かるわな

裁判長はそのまま、検事、弁護士、被告が替わる。福田被告だ。傍聴人はそのまま。満席のまま。早く入っておいてよかった。この時から入ろうと思っても、満員で入れなかったよ。

「次は1時20分からの公判ですが、検察、弁護側も揃ってるようなので始めます」と裁判長。5分早く開廷するなんて、初めてだ。

手錠をされた、華奢な女性が連れて来られた。福田被告だ。手錠が痛々しい。かわいそうだと思った。瞬間そう思った。そう思わせるものがある。痩せて小柄で、頼りなげで…。まぶしそうに前を見る。うん、藤原紀香似だ。紀香をもうちょっと優しく、頼りなげにした感じだ。いや、それよりも大韓航空機事件で捕まった金賢姫に似ている。と思った。隣りでは、女性が必死にイラストを描いている。「スポーツ新聞が書き立てるほどの美女じゃないわよ」と、ブツブツ言いながら描いている。でも、見たら、ヤケに可愛い。少女マンガのヒロインのようだ。

「えっ！そんなに可愛いかな」と、後で言ったら、「大体のデッサンだけです。これからシワなんかを描いて精巧なものに仕上げます」と言う。「シワなんかあった？」と聞くと、「ありましたよ。見えなかったんですか。38才だし」と言う。同性の目は厳しいと思った。

福田被告は上は黒、下はネズミ色のジャージ。化粧はしていない。それでも、こんなにきれいだし、色気がある。化粧したら、紀香以上だろう。お客さんは誰だって買っちゃうよ。「被告は元タレントの田代まさしと中野のスターズホテルで性交し、その間、覚醒剤を使用し、…」と裁判長は読み上げる。「性交し」というのか。裁判用語では。「sexし」とか、「情を交わ

し」とか、「交尾し」なんて言わないんだ。

あっ、その前に主文があったな。「主文。被告人・福田節子を懲役2年に処す。ただし、判決の日より3年間、その執行を猶予する」

これを2回繰り返す。予想していたとはいえ、ホットした様子で、ハンカチを口に当てて、嗚咽をこらえ、涙を流している。可憐だ。検事や裁判長だって、こんな女性を見たら、「かわいそうに」「早く出してやりたい」と思うだろう。

客として初めて田代さんに会った時から好きだったという。なんせ、チャンネルズの時からのファンだった。会った瞬間、「ラッキー！」と思った。（判決文には、「ラッキー！」なんて言葉は出てないが。私が補足して書いちよるとですよ）。1回目はお金をもらったが、あとは無料。ボランティア。売春ならぬ捧春。ただで捧げてたんですな。週1回が週3回になり、ついには2週間もホテルに入りびたりで、SEXびたり。「これを打つと気持ちいいよ」と田代さんに言われて、打たれちゃった。注射を打たれながら、あっちも打たれた。

本当なら、断固として断らなくちゃいけない。でも、嫌われなくなかった。それで、打たれ続けた。10回も打たれたという。さらに、警察に捕まった時は、覚醒剤の入ったナップザックを、「自分のものです」といって嘘をついて、隠した。けなげですな。ホロリとする。田代さんを庇おうとしたわけだ。

誰だ、こんな可憐な女性をつかまえて、「囮捜査だ」とか、「マトリ（麻薬取締官）だ」なんて言った奴は。あっ、オラか。いや、正確にはオラじゃない。そう言った新聞記者がいて、それを紹介したんだ。まずいやね。確かめもしないでそんなことを書くなんて。オラもそうだけど。自己批判します。

さて、では、先週予告したように、「月刊タイムス」（12月号）の「編集後記」を紹介ませう。発行・編集人の香村啓文さんが書いてました。私はこの雑誌で、「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」を連載している。一年間続ける予定で今、5回目だ。20枚ずつ、自由に書かせてもらっている。この「編集後記」では僕の『公安警察の手口』について紹介してくれている。「産経新聞社もじつに惜しいことをした」というくだりを読んだ時は、思わずホロリとして、福田被告のようにハンケチで涙をぬぐいました。又、公安と言論人の関係についても生々しい証言が紹介されてます。公安は右翼や左翼に対し、金を出してスパイにする。それは本の中で書いた。ところが、ライ

ター、編集者にまで金を出しているような。この点は、僕も知らなかった。続編を書く時には、詳しく聞いて書いてみたい。ともかく、香村さんの「編集後記」を紹介する。

(月刊タイムス) 「編集後記」

本紙に好評連載中の「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」の著者である鈴木邦男氏から近著『公安警察の手口』をいただいた。

簡にして要を得た、ズバリ本質を衝いた鈴木氏の文章には常日頃から敬服している。

著書にも触れられているように、鈴木氏は、1970年から4年半、産経新聞社に在籍していたのである。そう記すと、公安記者でも書けない記事が書けるのも、てっきり編集局の第一線で旺盛な取材活動をしてきた体験が然らしめたと考えるむきがなくもなかろうが、さにあらず、鈴木氏は在社中、編集畑と対極にある販売局と広告局で地道な仕事を行ってきたようだ。

産経新聞社もじつに惜しいことをしたものだ。鈴木氏を編集局におき、取材、記事づくりに活躍させていれば、いまごろ論説委員長か産経抄の執筆者になっていただろう。それほどの才幹がある。かつて鈴木氏を取り調べた検事が「現代の北一輝」と形容したほどだ。

しかし、別の観点からみれば、鈴木氏が産経を辞め、民族運動に身を投じたからこそ、そして、権力側と対峙してきたその体験が、既成のジャーナリストに書けない前掲書を世に送り出すことができたともいえる。

「公安警察の手口」にサブタイトルを付けるなら、〈体験的公安権力陰謀論〉とでも形容できるこの労作は二年以上に亘る取材、執筆の成果である。

〈公安〉といえば、一般の人には馴染みの薄い存在だ。制服を着た交番や交通警察、あるいは暴力団や盗難事件など事件を扱う警備担当の刑事、警察官と異なり、あまり素顔をさらさないらしい。といっても情報収集のため特定の人物には会う。

プライドも格も公安の方が、警備よりも上位にあり、時たま〈公安〉対〈警備〉がマスコミを賑わす。著書によれば公安には〈俺たちこそが警察であり、俺たちが日本を守っている〉という矜持があるようだ。そして、〈公安はきわめて政治的だし、思想的〉ともいう。

左翼や右翼（旧・新を問わず）の過激な活動やテロが日本の治安や安全を損ない、国を危うくすると、多分、公安は考え、それが彼らをして異常なほどの捜査、監視活動を正当化させているのだろう。

公安警察が新左翼などに覆面的行動をとるのに対し、右翼とはオープンな

付き合いをする。かつての暴力団担当刑事が、組事務所に気楽に顔を出したりするように。四十年以上にわたる鈴木氏の民族運動生活でいかに公安と身近に付き合い、痛い目に遭ってきたのか。公安というものは本当に、日常、こんな活動をしているのかと驚かされる内容がふんだんにある。

以前、本誌で北朝鮮に関するグラビアを掲載したとき、ある右翼関係者が知人を介して接触してきたことがある。「書店に並ぶ前に内容をみせて欲しい。じつは公安から頼まれたのだ」という。北朝鮮国内の写真よりも、あとで推測したら、そこに写っている右翼の人物に公安は関心を抱いたのだろう。

鈴木氏の本の中にも出てくる、この人物は過去に事件を起こし、グラビア写真を持ち込んできた人物もそれによって連座している。公安は一度マークすると徹底的につけ狙うのが習性のようなのだ。脱落しようが引退しようが思想変更しようが、それは彼らにとっては〈偽装〉にしか映らないようだ。

共産党に対する警戒の念が未だ根強いのに驚かされる。公安も内調も官僚機構の一つだから、既得権益といったものがあるのだろう。

森永グリコ事件のとき、元警察官が、
「犯人は特定できている。いつでも逮捕できるが泳がせているのだ。というのも公安予算を計上してもらうため」

と推測してくれたものだ。ならば、事件が起き、左右の過激、不穏な動きがたえずあることが公安にとって大事となる。

鈴木氏は〈公安があるから日本の治安が守られているなんて真っ赤な嘘〉で、むしろ〈公安があることによって不必要な事件が起り、治安が乱されている〉と喝破する。

公安担当は自ら危険な場所に飛び込んで行くと同時に、スパイやシンパなど情報提供者の育成にも余念がないようだ。

かつて、ある雑誌の発行人が「オレは公安なんて怖くない。公安からカネを貰っているんだ」と自慢していたが、その後、なにかの恐喝事件でパクられた。バカな男だ。

また、某フリーライター、宮仕えの経験もある酒癖の悪い男にも公安(?)からカネを貰っているという噂が流れていた。この人物と夜、飲み屋などで会うと、度々警察関係者らしき者が傍にいたと、彼の友人が言っていたものだ。

あるとき、同伴者が酔った勢いでセカンド・バックからポロリと警察手帳を落としたというから本当のことだろう。

世は情報公開の社会に向かう反面、国家保護法の制定などにより管理化が強まりつつある。盗聴や隠し撮りなどでプライバシーや人権が侵される国ならそれは民主主義国家ではない。（啓）

(3) 昼は毛沢東。夜はレーニン。革命的な日々やねん

【日記チックな附録】

(1)11月17日(水) 1時半から田代まさしさんの公判。私は抽選に外れて中に入れなかった。ということは先週、書いたか。この夜、「月刊タイムス」の香村さんに誘われて、6時20分から京王プラザホテルへ。「社団法人日本地方新聞協会55周年記念全国大会」。会長は中島繁治さん。5階コンコードBCが満員だった。知った人も多かった。小泉首相からの祝電も披露されていた。花輪も来ていた。知り合いのジャーナリスト、右翼人もいた。格闘家の戦闘竜も来ていた。少し話した。司会者が一人一人、名前を読み上げる。戦闘竜は「セント・リュウさん」と読みあげていた。何か漫才の人みたいだな。

いろいろな人に挨拶されたが、分からん人も多かった。声をかけておきながら、向こうも忘れてる人がいる。「あっ、木村さんお久しぶり」「木村会長、お元気ですか」と。「はい、木村です。お世話になってます」と、丁寧に挨拶を返した。「もう木村氏の時代だし、オラは忘れられたんだ」と思った。「違います。鈴木です」と言おうと思ったが、クレームをつけると、相手の面子を潰すだろうと思ってやめた。オラも気が弱いやね。

そうそう。京王プラザに来る途中なんて、路上で、「李（リー）さん！」と呼びかけられ、つい、「はい、リーです」と答えてしまった。でも、話が通じない。「あれっ、違うリーさんですね。すみません」と言って相手は去って行った。何か、悪いことをしたのかな。

夜、木村氏から電話があったんで、「地方新聞協会のパーティで、何人かから“木村さん”と言われたよ」と言った。そしたら、「僕だって、よく“鈴木さん”と言われてますよ」。ホンマかいな。そういえば、一水会に来る年賀状では、「鈴木三浩様」なんていうのが、よくある。面倒だから、これに統一しちゃおうか。

(2)11月19日(金) 河合塾池袋校に「世界史」の授業を聞きにゆく。伝説のカリスマ講師・青木裕司さんの授業だ。生きているうちからもう「伝説」になっている。現代文は牧野剛先生、英語は誰々…と、カリスマ講師が河合塾には大勢いるが、世界史なら青木さんだ。前々からこの先生の噂は聞いてい

た。いつも超満員で、生徒は感動し、涙を流して聞いているという。ホントかな、と思った。それに、授業をとるのが大変だ。特に、夏や冬の講習の時は、何十倍もの申し込みがあって抽選だ。裁判の傍聴のようだ。そして、外れた人は廊下に座り込んで、泣き崩れているという。「アイゴー！」と言って、地面を叩いて号泣しているという。そんな！朝鮮じゃあるまいし。と思っていた。それに、大学入試に落ちたって、そんなに泣きはしないだろうに…。

3限目（午後1時から90分）と、4限目（3時から90分）の連続授業だ。この日は、中国革命の話だ。ぜひ、聞いてみたいと思った。40分も前に行ったのに、ズラリと人の列が…。3階の教室なのに、1階まで続いて、さらに外にまで続いている。前の授業が終わると、ドツと入って、一番前から争うようにして座る。300人入る教室はたちまち超満員。私はやっとのことで一番後ろの席を確保した。噂に違わぬ授業だ。うまいだけでなく、熱がある。迫力がある。へエー、中国革命って、こんなだったのか、と思った。全く知らなかった。毛沢東の長征の話なんて、私が聞いていても、つい涙ぐんでしまった。周りの女性生徒も、グスン、グスンとすすりあげ、拳で涙を拭いている。ヒャー、凄いと思った。

それに、全員が喰い入るように先生の授業を聞き、熱心にメモをとっている。寝てる人はいない。私語も一切ない。ましてや、メールを見てる人もいない。ビックリした。本当にここは日本か、と思った位だ。これだけ生徒が熱心に聞いているなんて、東大だってない。

こんなに迫力あって、生徒を惹き付ける先生がいるんだ。オラなんて、とってもやっていけないはずだ。圧倒され、打ちひしがれた。オラなんて文章を書かせても下手だし、喋らせても、口々に喋れない。最低の男だな。オラなんて生きてる価値がないや、と思った。オラなんて、何て未熟で、無学なんだ、と思った。よし、一からやり直した。勉強し直したと思って、「来週から毎回、勉強させて下さい！」と青木さんに言ったら、「ダメですよ。鈴木さんがいるとやりにくいから」と断られてしまった。

だから、皆さんも、行っても満員で入れないし、だから、本を買ってみるとよいでせう。受験生用としては、『世界史講義の実況中継』シリーズ（語学春秋社）が大人気で、何と、累計150万部のベストセラーだ。元々は、福岡に住んでおり、九州校の先生だが、週に1回、東京にも教えにきている。

「サテライト講座」というテレビの授業もやっちょる。テレ朝の「ニュースステーション」で久米宏を撮っていたカメラマンが撮っている。

「久米宏を撮ったカメラマンが、今は、久留米の裕司（ひろし）を撮るとる」と言った。でも、こんなギャグはほとんど言わん。正統派の熱弁、気迫で、生徒を惹き付ける。受験生相手だけじゃ、勿体なからうが、と私は思ったが…。

青木さんは、受験生向けだけでなく、一般の大人向けの本も書いている。『知識ゼロからの現代史入門。アメリカ・ロシア・中国・パレスチナの60年』（幻冬舎）、『知識ゼロからの日本・中国・朝鮮近代史』（幻冬舎）などだ。読んでみなせえ。あなたも感動して、泣きよるとよ。

(3)同じく、19日(金)の夜、6時から、「塩見孝也さんの出版を楽しむ会」。昼は3時間ぶっ続けて「毛沢東」の話聞き、夜は、「日本のレーニン」塩見孝也さんの出版記念会か。まさに革命的な日だ。場所は後楽園の涵徳亭（かんとくてい）。去年、白船訪朝団の失敗・残念会をやった所だ。ゲンがいい。

出た本はといえば、『監獄記』（オークラ出版。1905円）だ。読んでみて驚いた。読みやすい。文章が分かりやすく変わっている。これなら売れるだろう。塩見さんに会った瞬間、「一体、誰が書いたんですか？」と聞いてしまった。本人は喋って誰かが書いたと思ったからだ。「バカヤロー！俺はあんたよりも文章がうまいんだよ。思い知ったか！ボケ！」と怒鳴られた。大勢がつめかけて、皆、温かい祝辞を述べていた。僕も喋った。「困るなー。鈴木君はいつも誉め殺しで」と照れている。全く誉めてないのに。幸せな人だ。このあと、二次会に。このパーティのこと、本の内容は次号に書きましょう（忘れてなかったら）。

(4)11月20日(土) 維新政党「新風」党大会。第4部の懇親会だけ出る。埼玉県浦和の「ときわ会館」で。代表の魚谷哲央氏は僕と同じく民族派学生運動出身。日学同にいた。昔から、几帳面で真面目だった。地道に「新風」の運動をやり、毎回、果敢に選挙に挑戦している。こういう真面目な人の前に出ると、何やら、「やましさ」を感じ、コンプレックスを抱いてしまう。私のようなデタラメで無能な男は。元日学同（神田派）の吉川誠氏とも会った。独身だ。「こういう人にこそ嫁さんを世話してやれよ。人道支援だ。新風の目標にきなよ」と言ったら、皆に笑われた。

帰り、浦和駅を通ったら、騒々しい。「号外です！」と配っている。革命が起きたのかと思ったら、浦和レッズが優勝したとのこと。まア、よかったね。

(5)11月22日② 1時から、福田被告の公判にゆく。帰りに本屋に寄った

ら、小林よしのりさんの『新ゴーマニズム宣言 第14巻』（小学館）が出ていた。本日発売だ。テーマは「勝者の余裕」。いいですね。骨法道場の堀辺正史先生との対談「武道待望論」も載っている。内容が濃い。これで1100円とは安い！

(6)11月23日(火) 『ゴング格闘技』（05年1月号）発売。私の連載「誰がために鐘は鳴る」では、柔道王・猪熊さんの自殺について書いた本、『勝負あり』を取り上げた。又、K-1決勝戦特集の座談会に出ている。猪狩元秀（K-1審議員）、ニコラス・ペタスさん（元K-1選手）、そして僕だ。

【お知らせ】

(1)ロフトプラスワン。12月は3回出ます。 12月6日は塩見孝也さんの出版記念トーク。パンタさん、平野悠さん、らも出るそうです。

12月14日(火)は「幻想まっしぐら。Part2」岸田秀、松尾貴史さんと。12月27日②は「創」のトークライブです。

(2)12月7日(火)は一水会フォーラムです。田中宇さんが講師です。7時からシチズンプラザです。

(3)12月8日(水)は7時からライブ塾。映画監督の森達也さんです。

(4)12月21(火)、22(水)、24(金)、25(土)と、「ザ・ニュース・ペーパー」の本公演があります。一ツ橋ホールです。僕はゲストとして、4日間、出ます。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年12月5日

「日本のレーニン」塩見孝也さんの『監獄記』を読みませう！

(1) 「背中流し事件」「一点突破事件」の話をしてやった

「獄中20年」と、一口に言うけど、大変だ。塩見孝也さん（元赤軍派議長）だ。70年3月に逮捕され、89年、満期で府中刑務所を出獄する。逮捕された時は29才だ。でも、「日本のレーニン」と呼ばれ、赤軍派の議長だ。奥さんは21才。子供も生まれたばかりだった。しかし、権力によって、残忍にも夫婦は引き離され、20年の歳月が流れる。普通なら離婚する。「20年も待ってられないわ！」と思う。実際、刑務所仲間にも、そう言われた。

「3、4年だって待ってられない。皆、別れてしまうよ」と。

ところが塩見さんの奥さんは、待った。20年も待った。子供を連れて、よく面会にも来た。凄い。だから、塩見さんは奥さんには頭が上がらない。

「出獄した日、一緒に風呂に入り、感謝の意味を込めて奥さんの背中を流してやった」。その部分がとてもよかった。ホロリとした。

…といったことを塩見さんの出版記念会で喋った。正式には、「塩見孝也さんの出版を楽しむ会」というんだな。11月19日(金)、6時から、後楽園の涵徳亭でやったのだ。『監獄記』（オークラ出版。1905円）という本だ。その名もズバリだ。

スピーチを求められたので私は、その「カーチャンの背中流し事件」を話した。事件じゃないか。ともかく、心あたたまるエピソードだ。浅田次郎の小説のようだ。結集した全国の同志たちも目を潤ませて聞いている。ところが、当の塩見さんが…。

「そんなこと、書いてねえぞ。デタラメ言うな！ちゃんと読んだのかよ！」と文句をつける。まいるなー。祝辞を言って、当人にクレームをつけられるなんて、初めてじゃわいな。

あれっ、このお風呂の話は、塩見さんの別な本に書いてたのかな。いやい

や、実は、前に塩見さんから直接聞いたんだ。だから嘘じゃない。書いてないけど、僕が一番心に残ってる「監獄記」だ。

「じゃ、しょうがないな。もう一つ感動したエピソードを紹介しようか」と、喋ったわいな。

獄中では何でも規則、規則…だ。隣りの人と喋るのも「不正通声」でいかん。喋るのは「通声」っていうんだ。普通じゃ、こんな言葉使わんよ。とにかく、24時間、監視されるし、あれをしちゃいかん、これをしちゃいかんと、がんじがらめだ。勿論、基本的自由なんてない。20代の若い男なのに交わる自由もない。21才の奥さんを20年間も放ったらかしだ。アメリカならば、奥さんが面会に来たら、一泊して、交わることも出来る。全ての刑務所がそうだというわけじゃないが。でも、これは進んでいる。奥さんだけでなく、恋人でもいいらしい。だったら、ホテル嬢でもいいんだろう。監獄専門のホテル嬢は「ゴクトル嬢」と言うのかな。

そうそう。「ホテル」という言葉だけど、元々は、「ホテル出張のトルコ嬢」という意味だ。今、トルコとはいわん。ソープと言う。だから本当なら、「ホテソブ嬢」だ。でも、ここまで言い換えが及ばなかった。それで、トルコ嬢はいないのに、「ホテル嬢」だけはある。ホテルだけでなく、自宅にも来てくれる。なんせ、みやま山荘という長屋にまでチラシが入っている。でも、貧乏人ばかりだから誰も、ホテル嬢なんて呼べない。

落合にはホテル専門学校というのがある。似たような専門学校は他にもある。そこに通ってる女子生徒は、ホテ専嬢と呼ばれている。（なんてことはない）。しかし、マンションにホテル嬢を呼んで、盛り上がり、クスリをやりながら、交わり続けて捕まった人がいる。又、自宅にホテル嬢を呼んで交尾したら、18才以下だった。それで淫行で捕まっちゃった人もいる。だから皆さんも気を付けませう。

あっ、いかん。塩見さんの話をしてたんだ。せっかく新婚なのに、ご馳走は取り上げられ、交わりも出来ない。そうだ。ある新聞のコラムで、「従軍慰安婦は必要だった」と書いてた。「必要悪」ではなく、「必要善」だったというんだ。若くて性欲のあり余る若者を外国に何年も送り出すんだ。「性交をするなというのは人道的に問題だ！」という。禁止すると、現地の女を犯して問題になる。だから、商売女を連れて行って欲求を満たす。兵士に食糧や水を与えるのと同じだ、という。

でもなー。10年も20年も戦争をやってるわけじゃない。1年か2年位、我慢したらいい。それにだよ。若者の性欲を抑えつけるのは人道的に問題だ、

というんなら、獄中20年の塩見さんはどうするんだ。「そいつらは犯罪者だから仕方ない。兵士は違う」というかもしれない。でも、塩見さんだって、革命兵士だ。いや、闘い破れて捕まった「捕虜」だ。だったら、交尾の権利ぐらい認めてやればいい。何も、「ゴクヘル嬢」を呼ぶわけじゃない。自分のものを差し入れてもらうだけだ。認めてやればいい。

もう出て来たから、今から言っても遅いか。ともかく、交接の権利はない。じゃ、自家発電をやってやる、とオナニーをすると、これも禁止だ。懲罰なんだ。「陰部摩擦罪」という罪になる。本当だ。看守が取り押さえ、中止させる。すでに終わっていたら、使ったティッシュを押収し、証拠物件として提出し、「懲罰審議会」にかける。

そんな馬鹿なと思われるかもしれないが、ホンマどす。塩見さんだけでなく、連合赤軍事件の植垣さんにも聞いたし、見沢氏にも聞いた。

でも塩見さんは断固貫徹したんだ。看守が取り押さえようとしても、振り払い、「これは人民の権利だ！」と喋って貫徹した。武装勃起だ。「一点突破・全面射精」だ。「造反有理・オナニー無罪」だ。

知り合いの女子大生に聞いたけど、アダルトビデオで、「一点突破・全面展開」というタイトルのビデオがあったそうなの。でも、女子大生がなんでそんなコーナーを見とるんじゃ。いやらしい。「でも、その監督は昔、中核派だよ」と教えてやった。そのビデオに出てる女の子は、何のことか分からなくて演じてるんじゃないだろうが…。

(2)これは憂うべき事態じゃよ。留学生以下の国語力なんて…

…ということを塩見さんの出版記念会で喋った。この全部じゃないが、「獄中のオナニー闘争」の心温まるエピソードを紹介してやったんだ。そしてまた、「それだって、本には書いてないぞ！」と塩見さんの怒号。あれ、そうだった。でも、前に聞いたから、本にもあったと思ったんだ。それに私も、このエピソードは、どっかに書いておいた。

「あっ、そうだ。予定稿で書いておいたんだ。塩見孝也追悼文集の予定稿だ。それを書いてたから、勘違いしちゃった。すみません」と謝った。いかん、いかん。早トチリだ。

何故、こんな「勘違い」「早トチリ」、悪くいえば「誤報」が起こるんだ。私は考えた。そして、ホテ専、じゃなかった。ジャナ専の図書館で一冊の本を見つけた。借りて家で読んだ。山下恭弘『誤報・虚報の戦後史』だ。サブタイトルには、「大新聞のウソ」となっている。東京法経学院出版が出

している。ホテ専嬢も恥ずかしいが、法経学院も恥ずかしいな。きっと友達に、「ヤーイ、包茎！」って冷やかされてるんだらうな。冤罪ならいいけど、本当に包茎で、法経の生徒だったらヤダな。自殺サイトで仲間を探して集団自殺するしかないな。「法経学院の男女4人、包茎を苦に自殺」なんて新聞に出るんだらうな。車に目張りして、練炭自殺だわいな。ついでに、車に白ペンキで、「憲法改正！」とか「北方領土奪還！」とか書いたらいいね。そしたら、政治的主張を訴えてるんだから、「自殺」ではない。「自決」にグレードアップしちゃう。「憲法改正を訴えて男女4人が憂国の自決！」となる。カッコいいやね。あつ、今、気がついた。「男女4人が包茎を苦にして自殺」なんて新聞に出るわきゃないよな。女は包茎を苦しめない。いかな、こんなことを書いた新聞も、「大新聞のウソ」じゃないか（いや、まだ、書いてないのか）。

又もや、話が飛ぶ。「憂国の自決」で思い出した。11月24日の産経新聞には驚いたね。大学生の「国語力の低下」が報じられていた。「留学生以下」と出ている。凄いやね。そういえば、留学生は皆、よく勉強している。日本の大学生の方が日本語を口々に知らん。「まさか」と思うかもしれないが。たとえば、「憂国」の「憂うる」だ。この意味を問うと…。

- (1)うとましく思う (16.7%)
- (2)たじろぐ (0%)
- (3)喜ぶ(66.7%)
- (4)心配する (0%)
- (5)進歩する (16.7%)

正解は(4)の「心配する」だが、正解は0%。圧倒的に多くの人が「喜ぶ」だと思っていた。じゃ「憂国」も、「国を喜ぶ」だわな。

ただ、これは大学生の中でもレベルの低い生徒に聞いたのだ。大学生では国語力が低下し、中学生レベルの国語力しかない学生が、国立大で6%、4年制私立大で20%、短大では35%に上がるという。つまり、この「中学生レベルの大学生」に聞いたら、「憂うる」の正解はなし。全員が間違っていたというわけだ。じゃ、「大学生レベル」とされた優秀な大学生ではどうか。

その中でも、正解率は50%にとどまり、まさに“憂うる”結果になっている。

ついでに、「露骨に」だ。

- (1)ためらいがちに (0%)

(2)おおげさに (83.3%)

(3)あらわに (16.7%)

(4)下品に (0%)

(5)ひそかに (0%)

正解は(3)の「あらわに」だ。しかし、16%しかいない。でも、結構使ってるよね。学生だって。「キャー、ロコツ!」「ウツソー、ホント、ロコツ」といってる。でも、それは「おおげさ」という意味で言い、聞く方もその意味で受け取ってるんだろう。全く別の言葉として、通用しとるんじゃない。もう大学なんかいらないな、と私はロコツ（おおげさ）に思いましたね。

では次。「懐柔する」。

(1)賄賂をもらう (50.0%)

(2)気持ちを落ちつける (33.3%)

(3)優しくいたわる (16.7%)

(4)手なずける (0%)

(5)抱きしめる (0%)

正解は(4)の「手なずける」だが0%だ。圧倒的に多くの人が「賄賂をもらう」。でも、ワイロを渡して手なずけることが多いから、あながち見当外れでもないと思うが。それに、ワイロと読めたんだろうか。又、ワイロの意味を知ってたんだろうか。だったら、こっちの方がかしこいかもしれん。

ともかく、大学生では、「留学生以下の国語力」の学生が多いんだそう。独立行政法人「メディア教育開発センター」（千葉市）の小野博教授（コミュニケーション科学）らの調査で分かったという。産経では、さらにこう言う。

〈外国人留学生より劣る実態で、授業に支障が出るケースもあるという。同教授は、「入学後の日本語のリメディアル（やり直し）教育が必要」と指摘する〉

じゃ、大学生に日本語を教え直すんだ。いっそ、留学生と一緒に「日本語学校」に入れたらいい。それとも、外国語を学ぶ前に、まず国語の授業をするんだね。いや、もしかしたら、「日本」とか「愛国心」というのも間違っ
て理解しているのかもしれない。ぜひ、調べてほしいな。ことわざや四文字熟語になったら、もっと惨憺たる結果だろうよ。

(3)チャキリス似の塩見さん、カルディナーレ似の奥さん

と、いうことで、話を戻す。なぜ、「誤報」「虚報」が生まれるかだ。確かに塩見さんの本に書いてたと思って僕が喋ったら、本当は出てなかった。これは、純然たる意味での「誤報」じゃないが。似たような「誤報」は他にもある。

この山下恭弘の『誤報・虚報の戦後史』では、こんな〈事件〉を伝えている。有名な話だが、東大総長の卒業式辞は毎年のように新聞に出る。64年、大河内総長の告辞が3月28日付の夕刊に載った。朝日、読売などが大々的に載せた。あの、「太ったブタになるよりは、やせたソクラテスになれ！」という余りにも有名な言葉だ。「あっ、あれか」と思い出す人もいるだろう。こんなことを言ったのだ。

〈…出世街道をはずれても悲観することはない。“太ったブタになるよりは、やせたソクラテスになりたい”というイギリスの経済学者ジョン・スチュアート・ミルの言葉があるが、諸君がやせたソクラテスになることを決意した時、日本はほんとうにいい国になる〉

こういう言葉だ。僕も新聞で見た。デカデカと報じられた。しかし、大河内総長は、本当は、こんなことを言わなかったのだ。卒業式に出た学生も新聞を見て、「アレッ？」と思った。「こんなことは一言も言ってないぞ！」と。じゃ朝日、読売の誤報・虚報なのか。ところが、必ずしもそうとは言えない。

実は、大河内総長は、告辞の前に記者に「告辞原稿」をコピーして渡した。記者は、念のために、告辞を全部聞き、それでチェックして原稿を書けばいいのだが、夕刊の×切に間に合わない。だから、告辞を聞かないで（あるいは途中で立って）本社に送稿した。大河内総長は、自分の原稿を見ながら喋るから、それでいいはずだった。ところが記者がワーツと来たし、カメラのフラッシュがパチャパチャとたかれる。すっかり上がってしまい、「ふとったブタになるよりは…」の部分を飛ばして読んでしまった。だから、「喋ってないこと」が記事になったのだ。でも、「喋る予定のこと」だから、必ずしも誤報・虚報ではない。そこが難しいところだ。この後、大河内総長の談話があった。

〈各社とも同様な記事がのっていると、つい私もその一句を

喋ったのではあるまいか、自分の思い違いではあるまいか、など
と試してみたりするので、念のため、その録音テープをかけてみ
た)

でも、やっぱり喋ってなかったんですね。それにしても、新聞にデカデカ
と書かれると、自分でも喋ったような気になる、というのは凄いやね。だから、私も大河内総長の気分なんですよ。

では、塩見さんの『監獄記』の中から、いくつかのエピソードを紹介しま
しょう。一番感動的なのは、(P193)でしたね。連合赤軍事件が起こり、
森恒夫が自殺した直後だ。東京拘置所にいる塩見さんの所に奥さんが子供を
連れて面会に来る。

〈丁度、森君が自死した、1973年の1月4日のことです。同
志や救援の仲間たちが、彼の死因を究明するために大勢で（その
時は、もう小菅の東拘だったのですが）押しかけてきました。妻
たちは、東拘の守備隊や機動隊と、もみ合って対峙しました。そ
の際、息子が、とことこ東拘側の陣営の方に出てゆき、「ここ
は、お父ちゃんの家だ。会わせろ！」と叫んだそうです)

これは映画にしたいようなシーンですね。塩見さんも、まるで映画のよう
だと言っとります。だって、こんな文が続くんです。

〈妻としては、夫に同伴し、生涯を共にしてゆくかどうかの問
題でして、妻はその時、24歳になったばかりでした。その模様は
映画「ブーベの恋人」にいくらか似ていたかもしれません。妻
はクラウディア・カルディナーレにいくらか、感じが似ていたか
もしれません。さしずめ、僕の役どころは、ジョージ・チャキリ
ス演じるレジスタンスの闘士、ブーベといったところでしょう
か)

ヒャー、凄いことを書きますね！とビックリしましたね。このカルディ
ナーレ似の奥さんも、出版記念会に来てました。僕がこのエピソードを紹介
したら、「ほー！」と歓声があがりました。中には、「どこが？」「まさ
か」と言う人もいました。いかな。共産主義者は疑り深くて。隣りにいた
元赤軍派は、「クラウディア・カレディナーレ」というよりも、「苦勞して
枯れてしまった。あーあ」という感じだね、と言っていた。ひどい事を言

う。無礼な奴だ。いやいや、今だって、カルボナーラの面影はありますよ。あれ？カレディナーレだけ。

この本には、他にも面白い所、勇気づけられるところが一杯あるが、又、紹介ませう。

【ダイアリーの附録】

(1)11月24日(水) 三島由紀夫・森田必勝両烈士追悼「野分祭」。7時からシチズンプラザで。追悼祭の後、伊藤邦典氏（元楯の会一期生）が記念講演「楯の会会員としての一千日」。なかなか感動的ないい話だった。

市ヶ谷の決起に参加したのは三島、森田、小川、古賀、小賀の5人。そのうち古賀、小賀両氏は伊藤氏がオルグして「楯の会」に入れた。その伊藤氏を「楯の会」に紹介したのは実は私だ。そして伊藤氏と私は、実は小学校の時から友人だった。といった宿命的な事実から話し始め、楯の会での生活、三島さんのことなどを語ってくれた。「レコンキスタ」の12月号に講演要旨は載る予定だ。

(2)11月26日(金) 後樂園に「パンクラス」の試合を見に行く。取材をかねて。帰りに山下書店に寄る。「刑務所本コーナー」があった。塩見さんの「監獄記」があった。元国会議員の山本謙司の『獄窓記』もあった。山本謙司と阿部譲二の『獄窓対談』という本もあった。ついでに私の『公安警察の手口』も、同じコーナーに置いてあった。ありがたいことです。

(3)11月27日(土) 代々木第二体育館に大道塾の北斗旗選手権大会を見に行く。塾長の東孝さんは元極真のチャンピオン。愛国者で、高校生の時、三島の「楯の会」に入りたいと思い手紙を出したという。しかし、「大学生でないとダメ」といわれて断念し、自衛隊に入る。そして早大に入り、空手の道に進む。『ゴング格闘技』に柔道の猪熊さんの自殺について僕は書いたが、それについて話をする。「残念だが、あのいさぎよい自決には頭が下がる」といっていた。

(4)11月29日 ロフト。ラス・メイヤー監督の追悼映画祭に行く。

【お知らせ】

(1)12月6日 ロフト。塩見さんの出版記念トークに僕も出ます。

(2)12月7日(火) 7時、一水会フォーラム。田中宇さん。シチズンプラザです。

(3)12月8日(水) 7時から高田馬場のライブ塾。映画監督の森達也さんとトークです。

(4)12月14日(火) ロフトで、「幻想まっしぐら」のPart2です。岸田秀さ

ん、松尾貴史さん、そして私です。コンビニで前売券を発売中ですので、ぜひお買い求め下さい。

(5)「週刊実話」(12月9日号)に田代まさしさんの支援者の話が出てました。「スクープ・田代まさし被告の留置場に日参する美人女子大生の素性」。凄いですね。支援してくれる人がいるんですね。心温まるニュースです。「ゆくゆくは、この美女と獄中結婚なんてことも!!」と書かれています。凄く美人らしいです。会ってみたいです。

(6)『ダカーポ』(12月15日号)。「2004年。人・モノ・ブーム・事件の総まとめ」。私のコメントも載っている

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年12月13日

これは〈事件〉ですよ。「赤旗」に私の本が紹介された！

(1)他にも東京新聞、北海道新聞、現代産業情報に…

これは〈事件〉ですよ。だって、「赤旗」が僕の本『公安警察の手口』を紹介してくれたんだ。あの日本共産党の「赤旗」（12月5日付）だ。それも、カコミ三段で大々的に。これはやはり、歴史的大事件だろう。

5日、HPのBBSに赤旗読者が知らせてくれた。「赤旗」に載ってるよ、と。でも、赤旗って、どこで売ってるんだろう。近くのコンビニにもないし、JRにもない。そうだ、元民青（民主青年同盟）の大学生がいる。それと、月刊「創」なら、とってるかもしれないと思い連絡した。それでやっと手に入れた。

「右翼が書いたもんだから…」と批判的に紹介されてるのかと思った。ところが、ちゃんと、好意的に紹介している。ありがたい。驚いた。実は、この本で、共産党のことは随分書いたけど、絶対無視するだろうと思っていた。「内容はどうあれ、右翼反動の本なんか紹介するか」。そういう姿勢だと思っていた。ところが違った。偏見を持った私が愚かだった。間違っていた。これだけ、ちゃんと取り上げ、紹介してくれたんだ。共産党も度量が広い。感心した。感動した。

では、まず、その全文を紹介しよう。

『公安警察の手口』…存在自体が問題な組織を告発

鈴木邦男著『公安警察の手口』（ちくま新書・六八〇円）を読むと、こんな違法行為が許されていていいのかと、腹がたってきます。

「公安はその存在自体が問題である。にもかかわらず、大手マスコミもこの問題をあえて取りあげようとはしないし、国会で問題になることもない」

「新右翼」として知られる著者は、自身が長年にわたり公安にマークされてきた経験もふまえつつ、公安の実像を描きます。

「どうです、共産党か日教組に突っ込みませんか。そうしたら政治犯として逮捕されます。男になれますよ」

覚せい剤や売春などの「不名誉な罪で逮捕状が出ている人間のところに公安が行き」、こんなことを「耳元でささやく」というのです。「公安の意識のなかでは彼らこそが国家なのだろう」と、交通違反のもみ消しの事例なども指摘。「日本共産党用の、「どういう人間をスパイにするかのマニュアル」も載っています。

日本共産党への「新右翼」らしい誤解はあるものの、「公安の人員も予算も半分近くは共産党に向けられている」ことを批判。

「盗聴をしたり、スパイを使ったりして非合法的やり方をしても共産党の情報をとろうとしている」、「公党に対するこの警察のやり方は議会制民主主義の否定ではないのか」と指摘しています。

僕の本を、キチンと紹介してくれてる。ありがたい。確かに、日本共産党に対する公安のやり方は許せないと思って、かなり詳しく書いた。又、書く上で、ダブルスタンダードは使わなかった。

たとえば、右翼の中にも「公安は許せない」という人がいる。しかし、「自分たちへの弾圧は許せないが、共産党への取り締まりは強化すべきだ」と言う。でも、これじゃ、本当の「公安批判」ではない。その点、僕は、共産党だろうと新左翼だろうと、公安の存在、やり方が悪いと思っている。ダブルスタンダードではなく、公安そのものを批判したつもりだ。

特に、議席を持ち公党の共産党に対し、監視、盗聴を繰り返し、スパイを獲得して情報をとっている。こんなやり方は議会制民主主義を否定するものだ。そう思ったから、怒りをもって公安批判を書いた。そんな気持ちがかつてもらえたのかと思った。嬉しい。右翼の書いた本を載せてくれたなんて、赤旗も変わったと思う。

この『公安警察の手口』が出てから2ヶ月。いろんな反応、書評があったが、この赤旗の書評が一番嬉しい。〈日本共産党への「新右翼」らしい誤解はあるものの…〉と言ってるが、それはあるだろう。どの辺のことかな。いつか、会う機会でもあったら、教えてもらいたい。でも、それ以外は全て、

好意的に紹介している。

しかし、赤旗を読んでも人もビックリしたでしょうな。「なんだ！　なんで右翼の本を紹介するのだ！」と。編集局の人も、よく許可したと思う。凄い。あるいは、これも「新右翼らしい誤解」で、本当は赤旗はもっともっと開かれた新聞なのかもしれない。

そうそう、JR東労組の集会に行ったら、労組委員長が、この本を紹介し、推薦していた。又、日教組の「教育基本法反対の集会」に行ったら、幹部の人たちが誉めてくれた。そして赤旗にも大々的に紹介された。日本共産党指定推薦文献になるかもしれない（それはないか）。

ともかく、左翼の人達にはばかり読まれているようだ。そうだ。「創」の副編集長が、「東京新聞と北海道新聞にも出てたよ」といってメールをくれた。これも紹介しておこう。

東京新聞（11月21日付朝刊）

四十年の政治運動歴を踏まえ、隠密に行動する公安警察の本質に迫る。国家を守るというエリート意識をもち、時代ごとに〈敵〉を選んできた組織の論理を解剖。公安調査庁との関係や存在意義にも光を当てる。「公安にマークされる」とはどんな事態を意味するのか、スパイを泳がせる一方で「公安は恐ろしい」との評判を組織自ら作り出してきた経緯を明かすなど、興味深い読み物になっている。

北海道新聞（11月28日付朝刊）

極秘扱いにされている警察の一部署“公安”とはどんな組織なのか。新右翼団体の長として活動していたことから、公安警察に厳しくマークされた経験を持つ著者が、その行き過ぎた捜査方法と徹底した秘密主義の実態を暴きだす。都合のよい公務執行妨害、共産党へのスパイ工作など、まさかの「仕事」の数々にぼうぜんとする。

さらにもう一つ。会員制経済情報誌で「現代産業情報」というのがある。その519号（11月15日）に僕の『公安警察の手口』が紹介されていた。やはり「創」の副編集長が、見つけてFAXしてくれたのだ。かなり長く、丁寧に紹介してくれてる。

『公安警察の手口』（鈴木邦男）が暴露する「公安」の許しがたき実態

右翼・民族派の活動家として、鈴木邦男氏の名は広く知られている。著作は多く、週刊誌や月刊誌にコラムを執筆、討論番組などのテレビにも出演する。温厚そうな表情とソフトな語り口ゆえ、「活動家」というより、右翼・民族活動の「啓蒙家」というイメージの方が強く、実際、鈴木氏は「一水会」の会長を4年前に退き、今は一線の「活動家」ではないという。

その鈴木氏が、国家からは徹底的にマークされる存在であることが、著書『公安警察の手口』（ちくま新書）で明らかになった。ソフトなイメージの裏に「凶暴な右翼」の顔を隠し持ち、それを恐れた警察が、鈴木氏を徹底的にマークするというのではない。ここで明らかにされる公安警察は、「公共の安全」を名目に、鈴木氏のみならず、捜査対象とする「右翼・新左翼・共産党」などの人権を無視、犯罪のデッチ上げも厭わない恐るべき集団なのである。

例えば、何十回も鈴木氏が受けたという家宅搜索の次のようなシーンは、にわかには信じ難い。

「ドンドンと荒っぽくドアを叩く音。『警察だ。開けなさい』という声。何度体験しても嫌なものだ。ぐっすり眠っている明け方に決まって叩き起こされる。ガサ入れ（家宅搜索）は、何十回やられたか分からない」

「容疑はいくらでもデッチ上げられる。たとえば、どこかの大使館に火炎瓶が投げられたとする。『犯人は分からないが、どうやら新右翼らしい。じゃ、全国で新右翼と言われる人間全てにガサをかけよう』と、そんな程度の見込みで簡単にガサ入れは行われる」

公安警察が、こんな人権無視の見込み捜査をしているのを、一般の人が信じられないのは、「交番のお巡りさん」やテレビドラマの「刑事」と違い、直接的にも間接的にも、「公安の刑事」と出会うことがないうえ、その姿をマスコミの公安担当記者が伝えないためだという。

「公安は日本最後のタブーだ。このまま闇のなかに置いていいのか。公安記者がその闇を切り開かないで誰がやるんだろうと焦燥

にかられる」

ガサ入れだけではない。鈴木氏のように既に右翼活動の第一線から退いたことで、自分では「普通の一般人」と思っている、いったん右翼活動家と認定されれば、尾行されて行動をチェックされるのはもちろん、「同伴尾行」といった嫌がらせを受けることもある。

「すぐ隣を歩いてどこまでも離れない。喫茶店にいけば隣の席に座る。電話をかけに行けば、すぐ隣で聞いている。普通の人間ならカーッとなる。怒鳴るか、突き飛ばすだろう。公安はそれを待っている。そして、『公務執行妨害』『暴行』で逮捕する」

鈴木氏は自分がさんざん嫌がらせを受けたからというわけではなく、対テロ対策などは別にして、新左翼・過激派が急速に勢力を減らし、日本共産党に「暴力革命」の意志などなく、右翼に国体を揺るがせるほどの力はないという現実の上に立って、「公安警察」など要らないという。

「公安がいるために日本の治安が守られているのではない。逆に、公安が事件を起こし、治安を攪乱させているのだ」

少なくなった仕事を確保、組織防衛のために、捜査対象者に食らいつき、事件をデッチあげるか誘引するという公安警察。鈴木氏ならずとも今の規模と現状の組織形態のまま存続する意味があるかどうかは疑問だし、マスコミはおもねることなく、「危険な組織」となってきた公安警察の実態を暴露、その存在意義を世に問うべきだろう。

それを気付かせてくれるという意味でも、必読の一冊。新書で読みやすくもある。

(2) 「監獄解体！」 「監獄民主化」をスローガンに塩見さんは闘った

では次。塩見孝也さんの『監獄記』（オークラ出版）だ。先週の続きだ。この本にこんな箇所がある。

〈「ありがとう」という感謝の心

「お陰さまで」という謙譲の心

「すいません」という素直の心

「ごめんなさい」という謙虚の心

あと一つは思い出せません。

もしかしたら、「させていただきます」という奉仕の心、ではなかったでしょうか。これら合わせて五つ、懲役は作業する前と作業が終了した後、この5条の訓を唱和します。誰が考えたのでしょうか。懲役たちを訓育するにはよくできています。僕はこの五訓を唱和しながら、北部第3工場、印刷工場に就労しました)

この「五訓」の話は他でも聞いたことがある。野村秋介さんも書いていた。字面だけ見れば、こんなに素晴らしいものはない。でも誰も心から唱和してない。「強制」されているからだ。野村さんは、そんなことを書いていた。僕もそう思う。

このHPに、僕も書いたと思うが。小学生の時から、「自己主張」「自己表現」なんか教える必要はない。要は、「ありがとうございます」と「ごめんなさい」を言えるように教えればいいんじゃないか。そう思っている。それが言えないから、トラブルが起こる。でも、小学生を起立させ、「ありがとう」という感謝の心…なんて唱和させたら逆効果だろう。「馬鹿野郎、誰がそんな気持ちをもつか！」と反撥されちゃう。どんなにいいことでも〈強制〉されちゃ、台無しになるんだ。野村さんは刑務所の中で、日の丸が翩翻と翻り、その日の丸をバックにして、強制や監視、処罰が行われた。それが嫌だったと書いていた。これでは五訓だけでなく、日の丸に対しても反撥し、恨みを抱くことになる。

五訓という形で強制されるのは間違いだが、でも、ここで言われてることは間違いじゃない。

前にライブ塾で塩見さんと対談した時、塩見さんはこんなことを言っていた。

「世界革命だとか前段階武装蜂起だとか言ってきたが、でも、人間が生きていく上で守るべきことは五つ位だろう。『殺すな』『盗むな』…と」

これだと2つだが、あと3つ言ってたな。モーゼは「十戒」を言ったが、その半分位でいいという。タレントの北野誠さんは、「殺すな」と「盗むな」。この2つさえ守ってればいい。と言っていた。極端な話、そうかもしれない。憲法も刑法もいらない。「殺すな」と「盗むな」だけにする。これはスッキリしていい。そうか。国士舘大のサッカー部のような例もあるな。じゃ、「犯すな」も入れよう。「殺すな」「盗むな」「犯すな」。これだけ

でいいだろう。子供たちには、それさえ教えたらいいい。日本語は「ありがとうございます」と「ごめんなさい」の2つだけ教えたらいいい。どうせ難しい言葉を教えたって分かりゃしない。「憂うる」って教えても、「喜ぶ」ことだと思っし、「懐柔する」も「露骨」も知らないんだし。大体、義務教育なんて、いらぬやね。小、中、高と一回も学校に行かぬ不登校の子供だっ、立派に成長して。そんで大学に入って頑張っちょる。

では又、塩見さんの本に戻る。今、刑務所には政治犯、政治囚という人は少ないが、60年代後半、70年代にはかなりいた。そして彼らが、刑務所内の意識を変えたと言う。

〈権利意識を持った70年安保・全共闘世代が大量に「政治囚」として刑務所に流れ込んできました。この世代の「活動家」を自称する人々や本物の革命家は、自分たちの権利闘争をやる中で、この懲役たちの惨状を見るにつけ、義憤を感じ、監獄制度の改革に乗り出してゆきます。

彼らに、やくざも含め懲役犯罪者を「一般刑事囚」と命名し、自分たちを「政治囚」とし、自分たちも含め、懲役全体を「民衆」「人民」と位置づけます〉

中に入っても「獄中闘争」をやるんですね。旗印は「監獄解体」「監獄民主化」なんです。でも、自分たちは「政治囚」だ、というエリート意識、前衛意識があるような気もします。「いや、それは違う」と塩見さんは言います。ここでも、「一般人民」「一般刑事囚」に奉仕し、人民のために闘うのが革命家、政治囚なんです。

〈実際、日本の監獄では、金持ちも、貧乏人も区別なく、無名の人も有名の人も区別なく、やくざも非やくざも区別なく、被抑圧の共通の運命に置かれます。懲役は原則、平等な扱いを受けます。「天皇の下での一君万民」、難しい言葉で言えば「アジア的総体的奴隷制」です。誰かが、これを皮肉って「監獄共産主義」と言いました。命名したのは誰あろう、この僕です。同時に彼らは自分たちを「護民官」と規定し、正に「人民の前衛」として体を張って闘い始めます。つまり、やくざの人にも代弁できなかった、否やくざも含めて言えなかった懲役たちの要求、感情を彼ら、彼女らは代弁せんとしたのです〉

これは、中にいる人でないと分かりませんね。貴重な証言です。

話を戻す。「十戒」「五訓」じゃないが、人間社会は「殺すな」「盗むな」「犯すな」の3つさえ守ればいい。という話だ。あとのことは大したことではない。盗撮する、痴漢する…なんてのも「十戒」には入ってない。だから、むしろこれは病気だね。これで何回も捕まってる人がいるけど、刑務所よりは、むしろ病院に入れて治療したらいいのだ。

(3) 「殺すな」「盗むな」「犯すな」…の「三戒」があればいいでせう

旧約聖書にこんな話が出てくる。ソドムとゴモラはみだれに乱れ、腐敗し、墮落し、どうしようもない町だった。今の日本のようなもんだ。そこで、神はこの町を滅ぼした。だが、信心深いロトだけは助けた。「後ろを振り向かずにひたすら逃げろ」と神はロトの一家に言った。ところが、妻だけは不安になって後ろを振り返った。その瞬間、塩の柱にされてしまった。

神の言葉を疑ったからだ。ロトと娘二人は無事に逃げのびた。この話は今でも生きている。元統一教会の乾太一君から聞いた。(前にも紹介したかな)。統一教会ではワゴン車に乗って全国を行商して歩く。M作戦(資金獲得)のためだ。珍味や印鑑などを売る。車の中で寝て、公園の水道で顔を洗い、パンを一日に数個食べるだけだ。ひたすら珍味を売る。でも、時々、疲れてぼやいたりする人がいる。「あーあ。キツいな」とか。「早く家に帰りたいな」とか。そんな時、リーダーが叱りつけるんだそう。「お前は塩の柱になりたいのか!」「エジプトが恋しいのか!」と。

凄いやね。「振り返ったら塩の柱になるぞ」「ロトの妻のようになるぞ!」と言って叱る。そんな大昔のことを持ち出して叱るんだ。「エジプト」というのは、モーゼがエジプトから人々を解放し、脱出した話だ。あの時も、苦しい旅だから、「あーあ、エジプトにいた方がよかった」とこぼす人もいる。モーゼは叱って、「又、奴隷に戻りたいのか!」と言う。今も、統一教会の人達は「モーゼの時代」を生きてるんです。

さて、旧約の話に戻ります。妻は塩の柱になっちゃったけど、ロトと娘二人は逃げのびた。そして洞窟で生活する。でも、人間は滅びた。そうしたら子孫を残せない。人類はどうなる。そこで娘二人は相談し、ロトに酒を飲まず。酔って寝たロトと娘二人は交互に交わる。そして子供を生む。近親相姦だ。でも、これがなかったら、今の我々はない。ロトの娘に感謝しなきゃならん。

司馬遼太郎は『街道を行く』(朝日新聞社)の中で言っている。この時

代、近親相姦はまだ罪ではなかった、と。「十戒」が出来てなかったからだ。「十戒」は神との契約だ。その法が出来前だから、いわば「何でもあり」なのだ。

もう一つ。骨法の堀辺正史先生に聞いたが、キリスト教では自殺を禁止してるというが、聖書には書いてない。キリストも言ってない。後世の人がつくったことだと。そうだ。日本の切腹の話をした時に聞いたのだ。西欧では、キリスト教があるから、日本のような「自決」はない。という話をしてたら、いや、キリスト教だって元々は自殺を禁止してない、と言う。

自分の肉体は自分のものだ、と思うだろうが違う。これも神のものだ。だから勝手に傷つけたり処分してはいけない。それが理屈なんだろう。でも、「自殺禁止」はモーゼの「十戒」にもない。キリストの「山上の垂訓」にもない。二人とも「自殺はいけない」と言ってない。後世の、イエスの弟子か、教会の偉い人が言った。ローマ時代に生まれたのかもしれない。司馬だったと思うが、「奴隷が勝手に自殺されたら生産が落ちるから、こんな教えが出来た」と言っていた。そうか。ありうる話だと思った。

ここで再び、旧約聖書のロトの話に戻る。今、山形孝夫の『図説・聖書物語。旧約篇』（河出書房新社）を見つけた。調べてみる。ロトと娘の性交の話が出ている。

〈ある夜、姉が妹に言った。

この辺りには、わたしたちのところへ来てくれる男はいない。さあ、父にぶどう酒を飲ませ、床を共にして、子種をうけよう…。その夜も、そして次の夜も、娘たちは父と床を共にした。だが、酔い痴れた父は娘が来たことも、そして立ち去ったことさえ気づかなかったという。〉

そうか、何度も交わったんだ。でも酔った父は気づかない。夢の中で夢精でもしてる気になっていたのだろう。

〈やがて娘たちは、父の子を身ごもり、それぞれ男の子を産んだ。姉の子はモアブびと、妹の子はアンモンびとの先祖となる。これは、言うまでもなく近親相姦の物語である。モアブびともアンモンびとも、その恐ろしい罪ゆえに、神の選びの民、イスラエルの系譜からは、排斥され、除外されてゆく。ロトの物語には、滅びの原理が、仕掛けのように布石されているのを見る〉

僕は、この話は「第二のアダムとイブ」だと思っていた。でも、違うんだ。ソドムとゴモラの街が滅びたら、人類は口ト一家しかいなくなる。だから、娘二人は父と交わって人類を継承させた。そう思った。でも、これを読むと、逃げた所にはいなくて、この辺では来てくれる男がないから、というので父と交わった。じゃ、究極の選択じゃないわけだ。それで、イスラエルの系譜からは外されたんだと…。いや、そういうことにしたんだ、という説もある。わからん。我々はこんな近親相姦の子孫ではない、とりたいために正統の系譜から外したのかもしれない。

しかし、口トと娘の間に生まれた男の子、モアブとアンモンはどういう間柄なんだろう。同じ父の子だから、「兄弟」だ。でも姉妹の子供同士だから「いとこ」だ。又、口トにとっては、「子供」でもあるし、「孫」（娘の子だから）でもある。不思議な関係だ。

【附録】(1)11月30日(火) 『公安警察の手口』を書いたんで、ボルテージが上がったせいか。警察官と闘った。乱闘した。そして投げ飛ばしてやった。でも逮捕されない。講道館で柔道の稽古だからだ。こういうルールのある闘いはいい。初段か2段なのだろう。僕より弱い。だから何本かは、投げられてあげた。上級者として気をつけている。後半、投げまくった。

「俺って結構強いんだな」と思った。だって普段は上級者とばかり闘ってるから、なかなか勝てないんだ。たまに下の人とやるといいね。自信がつく。

(2)12月2日(木) 河合塾コスモの授業は最後。今日は、保坂正康さんの新著『真説・光クラブ事件』（角川書店）をテキストに読書会をする。三島由紀夫の『青の時代』（新潮文庫）も使って説明する。終わって生徒と食事をする。「では、いいお年を」といって別れる。代々木駅に行く人と千駄ヶ谷駅に行く人と、別れる。僕らは千駄ヶ谷駅から乗る。生徒が、「私たちは反代々木系ですね」と言っていた。今時、「代々木系」「反代々木系」なんて用語を知ってるなんて面白い。河合の先生（元全共闘）が教えるんだろう。代々木予備校と反代々木系（河合、駿台）というふうに…。

(3)12月4日(土) 東京ドームでK-1決勝戦を見る。取材で。「電撃ネットワーク」のギウゾウさんに会う。久しぶりだった。前はよくライブを見に行ってた。「又、いきますから教えて下さいよ」といった。「鈴木さんのHPはいつも見えます。面白いです」と言ってた。ありがたい。ギウゾウさんは昔は、右翼団体に入って街宣してたんだそう。その後、芸人になった。「表出」ではなく、「表現」運動になったんだろう。

前に美術館でバツタリ会ったことがある。ものすごくスタイルのいい美女

を連れていた。背は高く、スラリとして、それでいて巨乳。生身の人間というよりは、これはもう芸術品だ、と思った。感動した。

(4)12月5日(日) 学校の生徒の見舞いに行く。病院で、「接見時間は何分ですか?」「差し入れは?」なんて聞いちゃった。いけない。ここは病院だったんだ。警察や拘置所の接見、面会ばかり行ってるから間違えた。

(5)12月6日(月) ロフト。塩見孝也さんの出版記念会。前に出版記念パーティをやったのに、又、出版記念イベントだ。うらやましい。塩見さん、パンタさん、平野悠さん。そして私が壇上で話す。リラックスして、楽しいトークになったのではないのでしょうか。

【お知らせ】

(1)12月14日(火) 7:30からロフトで「幻想まっしぐら」part2です。岸田秀、松尾貴史、そして私が出ます。前売券はコンビニで売ってます。当日券でもどうぞ。司会はあの美人女子大生です。今回も又、楽しいイベントになるでせう。

(2)12月21(火)、22(水)、24(金)、25(土)はニューズペーパーの本公演です。一ツ橋ホールです。私もゲストで4日間、出ます。

(3)12月27日② 7時半からロフト。「創」プロデュースのイベント企画です。私も出ます。

(4)来年の話ですが、1月12日(水)は7時から高田馬場のライブ塾です。島田裕巳さんで「オウム事件の教訓」です。

(5)ここで、ちくま新書からメール。「祝!重版」と書かれていた。『公安警察の手口』が、何と3刷になったのです。『赤旗』効果かもしれません。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン/丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年12月20日

毎日が「幻想まっしぐら！」です

(1)再び、「みやま山荘事件」が勃発だ！

裸の女が寝ていた。全裸だ。ヘアーヌードだ。

朝方まで原稿を書き、疲れ果てて寝床にもぐり込もうとしたら、そこに、全裸女が寝ていたのだ。そんな馬鹿な！これは一体どうしたことだ。ヤベー、又、女を拉致してきたのか！と思った。そんで又、殺しちゃったのか。でも息はある。それにしても、どうしてここに若い女の裸があるんだ！気が動転した。夢だ。これは夢だ。そう思って拳で目をこすった。ほっぺをペタペタと叩いた。

そしたら、消えた。裸の女が消えたんだ。幻覚だった。白日夢だった。裸の女がいるのもヤベーが、そんな幻覚を見る私の方がもっとヤベー。最近、仕事のしすぎなんだよ。「最近」といっても、今年の夏のことだけど。ほら、8月に『ヤマトタケル』を出し、『公安警察の手口』を10月に出すんで、原稿を書き、直し、校正し…と、追いまくられていた。半年で10年分位の仕事をした。ヘロヘロだった。寝るのも2時間とか3時間とか、不規則にとった。焦っていたし、パニックっていた。学校もあるし、他の仕事もあるし、「とても出来ないよ！」と思った。でも、ここで断念したら、終わりだ。そう思って、歯をくいしばって頑張った。

みやま山荘は、6畳間が勉強部屋。ここで机に向かって原稿を書く。疲れたらフスマを開けて、次の3畳間で寝る。でも、寝ながらでも腹ばいになって原稿を書いている。書くだけ書いて、限界になったら、そのまま寝れるから便利だ。でも、ペンもそのままだから、畳やシーツにインクがついたりする。これは困る。

今年の夏は、我が生涯の中でも最も暑い夏でありました。本当に暑かったけど、さらに、私の仕事、熱気、アセリ…と、肉体的・精神的にもホットな

のでありました。だから、この大変化に脳がついて行けない。そこで、いろんな幻覚を見たのでありましょう。

これじゃ、体がもたない。体がこわれたらどうする。そう心配したんでしょうな、脳が。休めよ。休めば、もっと楽しいことがあるんだぞと、裸の女を出してみせたんでしょ。聖書にもあったな。キリストのもとに悪魔が出てきて、「この世の全てをあげよう」「裸の女も黄金も思いのままじゃ」と囁く。裸の女はなかったかな。でも、この世の「全て」には入っとる。普通なら、悪魔に魂を売ってでも、手に入れようとする。でも、キリストは偉い。「サタンよ、去れ！」と言ったんだ。

私なら、「この世の全て」をもらっちゃうな。意志が弱いから。だから幻覚を見てしまう。「サタンよ去れ！」と言う勇氣はない。愚かにも、裸の女に抱きつこうとした。しかし、向こうから勝手に消えた。悔しい！

こんな幻覚をよく見た。いかな。疲れちよる。それに信心が足りない。ある日、やはり寝ようと思ってフスマを開けたら、別れた女房がいる。子供2人をつれて帰ってきたのだ。チャブ台の上にご飯を並べている。「お父ちゃんも一緒に食べようよ！」と長男が言う。「早く、早く」と次男が手をひく。座って食べる。あーあ、やっぱり我が家はいいな、と思った。「我が家」にいるのは間違いないが、ちょっと違う。

多分こうだろう。こんな不規則な生活をやめて、家族と共に規則的な生活を送りなさい。ほら、こんな風に。と、脳がモデルケースを見せてくれたんだ。あるいは10年後の「未来」を見せてくれたのかもしれない。そう分析する私でありました。

ともかく、今年の夏は、3畳間にいろんな人の来訪があった。ガヤガヤとうるさいので、ガラリとフスマを開けたら、7、8人の男女が酒盛りをしている。3畳によく入ったもんだ。放っておいたら、そのうち服を脱ぎ出して、乱交パーティになっちゃった。ヤベーな。「スーパーフリー」か、こいつらは。「オラも入れてくれよ！」と言ったが拒否された。何だ、何だ、人のうちを勝手に使うだけかよ。

又、ある日のこと。男女6人が集まって、ガムテープで部屋に目張りをしている。そして、七輪に練炭を起こしている。ヤベー。自殺サイトで知り合った連中だよ。「ここで死ぬのはまずい。他でやってくれ」と言った。又、「どうせやるんなら、『憲法改正!』とか何かスローガンを出せよ。そしたら“憂国の自決”になるぞ」とアドバイスしてやった。いやにリアリティのある幻覚だ。

でも、まだ小人は出てこない。戸棚から小人がゾロゾロ出てきてラインダンスをやり出したら、危ないんだそうな。その寸前で、『公安警察の手口』は完成したんで、私は救われた。もう一ヶ月遅かったら、頭が狂っていた。しかし、アル中でもないし、ましてやヤク中でもないのに、どうして、幻覚を見るんだろう。

中島らもさんの本を読んでたら、こんな箇所があった。

〈40になってから精神の調子が悪く、鬱病が一回、躁病が一回、アル中で二回、計百二十日入院したが、そこはむちゃくちゃに面白いところだった。

はっと気がつくとも目の前に、18才の女の子が一糸まとわぬ姿でじっと立っていたりする。とにかく毎日何かが起こるのだ。そんなことを思い出しつつ読んでいたので興が深かったのだろう〉

らもさんの『砂をつかんで立ち上がれ』（集英社）に書かれていた。ヒャー、同じ体験をしてるんだ、私と。いや、私が疲れ果てて、らもさんの域に達したのだ。進歩なのかもしれん。でも、何で裸の女を見て「18才」と分かるんだろう。不思議ですね。「18才位」だったら分かるけど。裸を見て17と18の違い、18と19の違いが分かるんだろうか。オラは18才と40才の違いなら分かるけど、あとは分からん。それとも、らもさんは「本人」に訊いたんだろうか。「あんた、なんぼや？」と。なんぼやは違うか。「いくつや？」と。「あら、私はあなたの幻覚だから年なんてないんです」と、答えると思うけどな。きっと。

ところで、今の引用部分のラストに、「そんなことを思い出しつつ読んだ」と書いている。そうなんや。これは本の書評のコーナーなんや。何の本かという、別冊宝島281の『隣のサイコさん＝電波系からアングラ精神病院まで』という本だ。私も昔読んだ。ベストセラーになった。皆さんご存知のあの人のことも出ている。らもさんの書評から抜き出してみませう。

〈…次は、精神病院の患者（これを玉（ぎょく）と呼ぶのだそうです）の買いつけと手配師のルポ。患者を物と考えて、それを動かすブローカーがいるのである〉

「患者」を売り買いするんですか。ヤダね。次は、おなじみのあの方だ。

〈そして見沢知廉氏のルポ。元右翼で千葉刑務所で八年半を厳

正独居房で過ごし、八王子医療刑務所精神舎へも行ったという人である。体験者のルポだからこの文章は鬼気迫るものがある〉

見沢氏は、彼をつけ回す中年女のストーカーについて書いたんで、鬼気迫る文章ですよ。でも、僕はこのストーカーに会ったことがあるけど。「この人が？」と思う位、外見的には普通の人でしたが…。違うんでせうか。

〈次に「盗聴器発見業」で食べてる人の話。電波妄想で、自分の家には盗聴器がとりつけられていると考える人が非常に多いそう。中には「自分の体の中に盗聴器が埋め込まれている」と信じる人もいるらしい〉

凄いですね。自分の体の中に埋め込まれてるなんて…。もの凄い超大物でしょうね。会ってみたいですね。いかんいかん。そんなことを書くと本当に訪ねてくるでしょうし。どうせなら、もっとユニークな人に来て話してみたいです。そのうち、僕の方が妄想系になってたりして。裸の女をみやま山荘で発見したんだから、私も十分に電波系なのかもしれん。

(2)自由と個性尊重の和光大学で激励してきた！

【だいありー】

[1] 12月7日(火) 一水会フォーラム。田中宇さん（国際情勢解説者）で「ブッシュ政権二期目の行方」。なかなか、興味深い話だった。世界情勢の裏の裏の話が聞けた。

[2] 12月8日(水) ライブ塾。映画監督の森達也さんとトーク。「表現・虚と実」。この前の夜、電話があった。「ひどいカゼで寝ている。明日行けなそうにない」と。焦りましたね。「あったかくして寝て、汗を出して着替えたら治りますよ」と言った。「そんなのは迷信だって言われたんだけど。科学的根拠はないって…」。「何を言ってんですか。僕が証拠です。治ります！」と言った。仕方ないから、夜中、念を送った。そしたら、どうも、自分にカゼを引き寄せたらしい。頭がガンガンして寝た。何度か汗を出し、着替えて、治した。信仰の勝利だ。

その甲斐あってか、当日、ライブ塾に定刻に森さんは現われた。「念を送ったから治ったでしょう」と言ったら、「かえって悪くなった。ムリして来た」とあいそのない返事。「私もカゼをひいた」と、アシスタントの女子大生も言っていた。

カゼなのに森さんは頑張って話してくれた。森ファンの女性もたくさん来て、盛り上がった。映画「A」や「A2」の後日談も聞かせてもらった。

「エッ？本当ですか」という話もあった。

[3] 12月9日(木) 塩見孝也さん達と新宿で飲む。「白船訪朝団」の忘年会らしい。去年は幻に終わったが、来年こそは実現しようという声。「“日朝友好”なんて。今行ったら全国から又バッシングだよ。やめようよ」「いや、今こそ行くべきだ」「向こうに行って、拉致問題で強力に談判したらいい」と、いろんな意見が出た。さて、行けるのでしょうか。

[4] 12月10日(日) 公安調査庁の元大幹部と会う。公調の話詳しく聞いた。公安の本を出したおかげで、いろんな人に会えて嬉しい。情報収集にもなる。

[5] 12月12日(日) 1時から東中野の骨法道場で、堀辺正史先生の武道講話。塩見孝也さんを連れて行く。塩見さんは、映画「ラストサムライ」を見てから、武士道に目覚め、ネットなどに論文を書いている。

「堀辺vs小林よしのり」の武道対談も読んでいる。「じゃ、堀辺先生と会って話してみてもどうですか」と紹介したのだ。講話を聞きながら、「そうだ」「異議なし」と、しきりにつぶやいている。終わって、食事した。二人とも意気投合して、武道論、革命論を展開していた。凄かった。「会わせてくれてありがとう」と二人に感謝された。「鈴木君もたまにはいい事をすると塩見さんに誉められた。しかし、もったいない。どっかの雑誌で対談してもらいたい。テーマは、「革命と武士道」でいいだろう。

[6] 12月14日(火) 7時からロフトプラスワンで「幻想まっしぐら」Part2。岸田秀さん、松尾貴史さん、そして僕。満員。司会の女子大生もうまい。楽しかった。後半、三浦和義さん（「ロス疑惑事件」の）も特別参加してくれた。

はじめに、「公安」の話をした。岸田さんが言ってた。「鈴木さんの本は面白かった。知らないことが多かったので、教えられた。『今年感動した3冊』として書評を書きました」。

ありがたいお話でした。本を出したあと、どんな反響があったかを私は話した。公安、元公安、記者、活動家、スパイ…などからの電話、手紙、そして実際に会った人のことを話した。「そうだ。電波系の人が多かったな。7~8割がこれかな」と言ったら、司会の美人女子大生が、「電波系って何ですか?」。困るなー。深窓の令嬢で、親に大事に大事にされて育ったから、下々の言葉を知らんのだ。だから説明してやった。

活動家でもないのに、「尾行されている」「盗聴されている」という人がやたらと多い。被害妄想だろう。でも、そういうと怒って何をされるかわからん。又、放火されたらたまらんから、どんな電話にも、丁寧に応じている。疲れる。

「エッ？放火されたんですか。ドン・キホーテも放火されましたね」と松尾さん。

「ええ。同一犯です」と私が断言。

「ホ、ホントですか」と、松尾さんは驚いていた。

「で、動機は何ですか？」

「金持ちに対する嫉妬です」

皆、啞然としてた。「でも、お前は貧乏じゃないか」と皆、心の中では言っている。そう顔に書いとる。

「本当の話、動機は何ですか？」と畳みかけられる。ウルセーな、と思いながら、

「それはゆっくり考えます」

…と、訳の分からんトークになった。又、恒例の「質問箱」から選んだテーマに三人が答える。でも、私にはハードなテーマばかりで、「イスラエルとパレスチナ」とか、「テレビ」とか、難しい。分からないのでパスした。皆に不評だった。

あと、教育基本法改正についてどう思うかといった教育問題に関するトークもあった。大変だった。でも楽しかった。でも、睡眠不足で思い出せん。又、来週でも詳しく書いてみる。

[7] 12月15日(水) 4:30から和光大学に行く。学生の決起集会にゲストで呼ばれる。オウムの麻原の娘（三女）が今年の春、和光を受験して合格した。ところが入学手続に書かれた書類（家族構成）を見て大学側はビックリした。あの麻原の娘か！と。これは大問題になる。娘が通ったら、マスコミは連日、押しかけるし、学生もオウムに勧誘されちゃう。そう思ったのだろう。大学側は、入学を拒否した。ひどい話だ。

その問題に対し、これは「学問の自由」を否定するものだと、「自由な教育」「差別撤廃」を訴えてる和光の精神に反する…と、教員、学生が立ち上がった。そしてこの日の集会になった。和光大教授の最首悟さん、講師の切通理作さん、それに、学生たちで満員。和光を訴えている娘の弁護士も来たし、「創」の編集長も来て、そして、私も一言発言した。

「和光は自由な大学で、昔から、あこがれていた。なんせ、パリで女性を

殺して食べた佐川一政さんも卒業生だ。又、連合赤軍事件の加藤三兄弟のうち、二人は和光出身だ。こんな型破りの、スケールの大きい人も輩出している。誇るべき、自由な大学だ。だから、麻原の娘も入れるべきだ。今からでも遅くない。入れてやれ。ここは日共もいるし、革マルも統一教会もいる。いろんな人がいて、雑然、騒然としていて、はじめて学問の自由はあるのだ」

…といった話をした。「えっ、あんな人もウチの卒業生なの?」「ヤダー!」と学生はビックリしていた。そうだよ。誇りをもっていいんだ。

7時まで集会をやって、そのあと鶴川の駅の傍の居酒屋で11時まで飲む。

[8] 12月16日(木) 夜、久保内薫君と会う。昔、「やまと新聞」に勤めていた人だ。昔といっても30年も前か。僕が産経新聞をクビになって、仕事がない時に、「やまと新聞」に連載させてもらった。それがまとまって、『腹腹時計と〈狼〉』（三一新書）になった。僕の処女作だ。その時の僕の担当者だ。資料を集めてくれたり、取材に同行してくれた。彼のおかげであの本は出来た。

又、次の連載をまとめたのが、『証言・昭和維新運動』（島津書房）だった。この時は、さらに彼にお世話になった。血盟団、5.15事件、2.26事件など昭和維新運動を闘った人達を訪ねて話を聞いた。これらの人々を探し出し、アポイントメントをとり、車で案内してくれた。彼の協力がなかったら、あの本は出来なかった。

「やまと新聞」をやめてからは、物書きの世界から足を洗い、タクシーの運転ちゃんをしている。もったいない。もう一度、ライターの世界に戻れよ、と言った。

そうそう。久保内薫というけど、れっきとした男子です。そういえば、他の連載の担当者も、女っぽい名前の人ばかりだな。「創」の担当者は荒井香織さんだし、前に「SPA!」の担当者だった人は河井かほりさんだったし（違ったかな）。「ゴング格闘技」の担当者は山本千代さんだ（あれ、この人は本当の女性だった）。

(3) 「尾行の本」が出る。そして「日刊ゲンダイ」に書評が

【お知らせ】

[1] 12月21日(火)、22日(水)、24日(土)、25日(金)は、「ザ・ニュース・ペーパー」の本公演です。一ツ橋ホールです。ゲストには、高橋哲哉、斉藤貴男、大内裕和氏が出ます。私も4日間出ます。「今年のニュース」解説を

する予定です。見に来て下しゃんせ。問い合わせは、トリックスター社。

TEL03(5331 3261

[2] 12月27日(月)は7:30からロフトで「創」プロデュースのトークライブです。森達也、綿井健陽、原田浩司さんの他に、私も出ます。統一テーマは「イラク・日本・北朝鮮。メディアが伝えない真実」です。

[3] 12月31日(金)はロフトで朝までトークだそうです。「鈴木さんも来て下さいよ」と言われましたが、PRIDEの取材がありますので、と断った。

「でも、終わってからでも来て下さいよ」と言う。そうか。PRIDEが終わってもまだやってんのか。じゃ、寄ってみっかな。

【更にお知らせ】

[1] 「サンデー毎日」(12月26日号)の巻頭トップは大型企画「皇室・波乱の一年。知られざる全内幕」です。力の入った特集です。6ページです。その中で、僕も取材された。コメントしました。記者が言ってました。「企画会議の時には、これはやはり鈴木さんに話を聞かなくちゃ、という意見になったんですよ」。嬉しいですね。期待に応えられたかどうか分かりませんが、がんばりました。

[2] 『推理力』(双葉社)という本に以前、〈尾行〉のことを書きました。その本が好評で、今度、文庫本になるそうです。改題して『脅迫状であてましょう』(双葉社)です。ぜひ、読んでみて下さい。『公安警察の手口』にも出ている〈同伴尾行〉についても詳しく書いてます。「尾行され歴40年」の私が書くのですから、詳しいし、貴重ですよ。

[3] 月刊「創」(1月号)は好評発売中です。私の連載は「金嬉老事件('68)再考」です。金嬉老事件と三島事件、そして経団連事件をつなぐ糸について書いてます。さらに細川元首相などの関係についても…。

今月号は、田代まさしさんの獄中手記、又、田代さんを励ます、女性の投稿も載ってます。

[4] 『新刊ニュース』(No.654。株式会社トーハン)に、「作家が選んだこの3冊」が載ってました。ロフトで言ったように岸田さんは、私の本をあげてました。「プライドが高くスパイごっこが好きで社会秩序に維持に役立っていない公安警察」と。

[5] 「立川反戦ビラ事件」に無罪判決。東京新聞(12月17日付)に私のコメントが載ってます。

[6] 「創」の副編集長が、「書評が載ってましたよ」と送ってくれた。「日刊ゲンダイ」だ。それも偶然見つけたそう。11月11日付だ。もう

1ヶ月以上も前だ。ありがたい。河合塾の牧野先生は、「仙台に行ったら、河北新報に書評が載ってたぞ」と教えてくれたが、いつの新聞か分からん。見てみたい。

では、今回は、「日刊ゲンダイ」（11月11日）の書評を紹介ませう。

〈ガサ入れ、尾行、スパイ養成など公安の実態

= 『公安警察の手口』 鈴木邦男著 =

交番や交通の警察官、あるいはテレビのミステリーに出てくる刑事などが、警察の一般的なイメージである。

しかし、公安の仕事はよく分からない。新左翼や右翼の過激派を調査している。あるいはテロの対策を考えている。その程度にしか想像できない。過激派も、いまやかなり少なくなっている。では公安の存在価値はあるのだろうか。

日本の警察のなかで、この公安という組織はかなり特殊な存在のようだ。活動がほとんど外にもれない謎の集団で、しかもエリート意識が強い。警察での出世に公安出身が有利なのも事実だ。泥棒や殺人犯を取り逃したところで国家がひっくり返ることはない。ところがカルト宗教や過激派は日本そのものを破滅させようとしている。そういう敵から守るために闘うというのが、彼らの論理である。そのためにはあらゆることが許されるということになる。

著者はかつて一水会という団体の代表で、いわゆる「新右翼」のシンボリック的存在であった。それゆえ過酷な扱いも受けてきた。その体験を生かし、この組織の秘密に迫ったのが本書である。

組織の構造と役割、刑事警察との確執、ガサ入れ、尾行、張り込み、スパイ養成などの実態。さらには右翼と左翼との対応の違い。ベールに包まれている内側は興味深いし、闇の中で行われる捜査活動もよく分かった。

なかであきれたのは右翼対策である。酒も酌み交わす。それだけではない。団体の綱領や規約まで作ってやったりする。日教組大会にいく右翼に餞別を出したり、個人的な相談事に乗ったりしているというのだ。その一方、いまだ共産党への警戒をゆるめていない。

現実から遊離している公安の体質は、もっと議論されてしかる

べきだという意見に大賛成である。〉

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

今週の主張・2004年12月27日

ビラ配布事件と田代さん事件。今週は2つの裁判物語です。

(1)無罪は当然だ。でも75日も勾留された

久しぶりに爽やかなニュースだった。暗いニュースばかり、暗い世相の日本において、雨空に一瞬青空が見えたような感じだった。「立川ビラ配布事件」に無罪判決が下ったのだ。だから、朝日新聞（12月17日）や東京新聞は1面トップで報道した。「やった！」という記者の喜びが出ている。

でも、冷静に考えると、「無罪」は嬉しいが、本当は「当然」のことなんだ。大体、ビラを新聞受けに入れた位で逮捕するのが異常だ。それも75日も勾留してたんだ。信じられない。恐るべきは公安警察の手口だ。

事件をちょっと説明しよう。市民団体のメンバー3人が今年1月17日、東京都立川市の防衛庁立川宿舎で、「自衛隊のイラク派遣反対！」などと書いたビラを各戸の新聞受けに入れた。まア、そんなことはよくある。ピザの宅配便や、ホテル、便利屋のチラシなどもよく入っている。とりたててどうということはない。ところが、ビラ入れから1ヶ月後の2月27日に、住居侵入容疑で、3人は、いきなり逮捕されてしまった。5月の初公判後までに75日間にわたって長期拘留が続いた。

こんなことで逮捕する警察もひどい。又、検察は「懲役6ヶ月」の求刑をしていた。これもひどい。しかし、東京地裁八王子支部の長谷川憲一裁判長は、「無罪」の判決を下した。勇気ある判決だ。

「住民のプライバシー侵害の程度は低く、ビラ入れが憲法で保障された政治的表現活動の一つとして民主主義社会の根幹をなすことを考えれば、刑事罰に値するほどの違法性はない」と述べた。

新聞記者から聞いたけど、この判決の瞬間、法廷内はウワーツ！とどよめいたという。そうだろう。分かる。「おっ、まだ日本の裁判所も捨てたもんじゃないな！」「日本にも民主主義があったのか！」と思ったのだ。それが

朝日、東京新聞の1面トップとなって反映されている。毎日1面トップではなかったが、かなり大きく取り上げている。読売は社会面に小さく。産経なんて、ベタ記事。読み落としてしまうほど。世界日報になると無視。載せていない。

これは一体どうしたことか。これだけ「差」がある。果たして新聞とは何か。新聞の使命とは何か。考えさせられた。

ビラを配布した位で逮捕し、75日も勾留した警察はテレビに出て、謝罪すべきだよ。そして、3人に賠償すべきだ。ところが、立川署は「捜査は適正だ」と居直っている。朝日によると。

〈3人の無罪判決を受けて、警視庁立川署は「裁判所から逮捕令状を取得して身柄を確保するなど、捜査は法令に基づいて適正に行っており、判決についてコメントすることはない」としている〉

じゃ、捜査令状を出した裁判所も悪いよな。これは問題にすべきだ。大体、裁判所は「ガサ（家宅捜索）令状」は簡単に出す。だが、逮捕令状となると少し慎重になる。ところが、ビラ配りで逮捕なんて、裁判所もどうかしている。

それに、住民が不安がって警察の届けて、それで逮捕したのではない。公安が市民運動を狙い撃ちにしたのだ。

今年6月30日の公判の時に、証人から暴露されたのだが、何と「被害届」は警察があらかじめ作り、そこに「署名」させるだけだったという。「一応中身は読んだが、そこに署名させられた」「届は警察が持ってきた。それに印鑑を押した」と住民は証言した。捜査官の多くは刑事部ではなく、公安部の所属だった。

ひどいやね。住民が不安になって、被害届を出したのなら、まだ分かる。何も不安を感じてない。あっビラが入ってるわ、という感じだ。それなのに公安が、「被害届」を勝手に作って、「どうです。迷惑を受けたでしょう。不安でしょう。こいつらは過激派ですよ。放火、殺人をやり、アルカイダとも関係あるんですよ。こんな奴らが敷地内に入ったら不安ですよ。じゃ、ここにハンを押して下さい」と言葉巧みに話して、ハンコ、署名をさせたのだ。

そういわれたら、「まア、怖いわね」「不安を感じます」と答えるだろう。警察に対し、「いや、不安はない。公安の方が悪い」なんて、面と向

かって言えない。そんなことを言って警察に目をつけられたら大変だと思う。

つまり、それは「踏み絵」だ。「警察を認めるか、認めないか」と選択を突きつけてるようだ。警察は必要だし、パトロールはしてほしい。不審な人間がうろいつたら怖い。過激派がうろついたら不安だ。そういった一般人の一般的な〈不安〉に突け込んで、「だったら被害届を」と無理矢理、署名させる。詐欺だよ。やり口が。「公安警察の詐欺」だ。

「被害届」に署名した住民だって、ただ、「不安を感じた」といつた程度だ。（本当は感じてないが、警察の誘導尋問で、そう答えさせられた）。だから、これに署名することによって、3人が逮捕されるとは思ってない。ましてや75日も勾留されるとは思ってない。「申し訳ないことをした」と思ってるだろう。署名は一瞬、後悔は一生だよ。住民も、ちゃんと考えてから署名しなくっちゃ。

面白い話を聞いた。裁判の過程で、検察側は、「逮捕した3人はただの市民団体ではない。過激派のメンバーだ。それを立証したい」と言った。3人全部か、あるいは少なくとも1人は新左翼のメンバーだと睨んでいたようだ。しかし、裁判長は、「そんなことは必要ない」といって却下した。これは凄い。偉いやね。

この市民団体は、「立川自衛隊監視テント村」といい、昔から運動をやっていた。中には新左翼のメンバーがいたかもしれない。いたっていいだろう。それが気に入らないから、何でも捕まえるというのでは民主主義ではない。

これも新聞記者に聞いた話だ。この自衛隊官舎には、新聞の勧誘ビラもよく入っていたし、ピザ屋、風俗店、それに何と、「自衛官募集」のビラも入っていたという。まア、軒並み、自衛隊勧誘ビラを入れたんだ。そこが官舎とも知らないで。だったら、このビラを配った奴も逮捕しろよ。それに、新聞はどうだ。「産経や読売はいいが、朝日、毎日、東京はイラクの自衛隊派遣に反対だから逮捕する」とでも言うのか。つまり、その程度のことなんだよ。そんなことで逮捕された。

公安も事件がないから、ムリに事件をデッチ上げているんだ。本当なら、この公安を逮捕すべきだ。でも、彼らは、何のおとがめもない。出てきて謝罪するわけでもない。そして、必ずや、昇進するんだ。そこまでやって、「仕事熱心」だと内部では思われる。それは、今までのケースをみると、分かる。

無罪は当然だ。なのに立川署は認めない。それに、何と、「無罪は行きす

ぎだ」と言う人もいる。毎日新聞に出ていた。帝京大学法学部教授の土本武司さんだ。あれっ、この人は、「朝生」で一緒に出た人だよな。おとなしい人だったが、言ってることはひどい。でも、元最高検検事だからな。

「刑を軽くするなら理解できるが、無罪というのは行きすぎた判決だ」

と言う。法に基づいて逮捕し、求刑したんだから、キチンとやってほしいということか。やだね。

さらに、中央大学院教授（刑事法）の渥美東洋さんだ。個人的に知ってる人だが、言ってることは納得できない。こんなことを言ってるよ。

「日本ではあまりにも政治的自由が主張され過ぎて私的領域の個人の自由への配慮が不足しており、改める必要があると思う。ミスを犯した判決だと思う」

そうかな。政治的自由が主張され過ぎてるのか？ 違うでしょう。

渥美さんは、いろんな所で講演している。僕も何度も聞いた。我々の集会へ来てもらったこともある。街でその講演会のチラシもまいたし、時には郵便受けに入れたりもしただろう。それで捕まったら、こんな他人事のコメントは出来ないはずだ。それに渥美さんはよく、右翼や宗教団体の新聞にも書いている。だからといって、「渥美はけしからん」なんて言われたら、本人も嫌だろう。どこに書こうが、何を言おうが自由だ。気にくわない表現だって守らなくてはいけない。それが民主主義というものだ。

では最後は、東京新聞に載った私のコメントを紹介ませう。ちょっと長いが…。

〈『公安警察の手口』（筑摩書房）の著者で、新右翼団体「一水会」顧問の評論家、鈴木邦男氏は言う。

「政治的なビラでも『イラクへの自衛隊派遣に賛成』と記してあれば、捕まらなかっただろう。ビラ配布という程度の活動は合法。これを取り締まったら、逆に市民運動を非公然、非合法的な活動へと追い込む結果になるだろう。公安は治安を守るどころか、治安を乱し、自分たちで仕事を増やしているのではないか」

判決後、捜査を主導した警視庁公安部はコメントを出さず、立川署は滝沢敬治署長名で「警察としてコメントするものではありません」と、“ノーコメント”の姿勢を貫いた。

無罪判決は出たものの、前出の鈴木氏は今後、公安警察主導による狙い撃ち捜査に歯止めがかからなくなる事態を危惧する。

「殺人や交通事故で警察全体では人手が足りないのだから、本来は公安畑の余剰人員を刑事、交通畑へ回せばいい。ただ、公安は脅威もない『共産党や新左翼』のために人手と巨額の予算を握って離さない」

イラク問題でも、「人質事件」での参院の自民議員による「反日分子」発言など、戦前を想起させる「国家」を至上とする風潮が目についている。

「いま多くの国民は、商店街や住宅街に増えた監視カメラも『悪い人を監視するのだからしょうがない』と思っている。でも、果たして本当にそうか。悪い人とだれが決めるのか。いまの政府に批判的な人も含まれるだろう。この事件は決して人ごとではない」

(2)謎だ！ 果たしてどちらの言い分が正しいのか？

では、次は田代まさしさんの裁判報告だ。覚醒剤で捕まった田代まさしさんの第2回公判が12月17日(金)の午後1時半から東京地裁で行われた。1時間以上にわたり、田代さんが弁護側、検察側の質問に答えた。座って、ボソボソと喋っていたが、かなり衝撃的な発言もあった。本人は真面目に、一生懸命、答えてるのだろうが、「受け」狙いの『ギャグ』か、と思われる発言もあった。

その辺を「東京スポーツ」（12月19日）では、「法廷でしゃべり過ぎ田代。裁判官の心証最悪でピンチ」と見出しで書いている。さらに、こう書いている。

〈この日の公判で、裁判官から「麻薬は水道の蛇口から簡単に出てくるようなものではない。麻薬を購入する間までは時間があるわけだから、その間にクスリをやってはいけなかつたのか」と質問された。

すると田代被告は何を思ったのか、「つつい遠くにある蛇口に手を伸ばしてしまいました」とポロリ。〉

〈当の田代被告の“芸人魂”がアダになってしまった。“口は災いのもと”ということなのだろう。田代側の弁護士からは「もともと

お笑いタレントだったから仕方ないかもしれないけど、ちょっとしゃべりすぎだよ」というため息が漏れた。〉

でも、必死に田代さんは答えていた。なぜ、覚醒剤に手を出したか。女性（ホテル嬢）にはどうやって覚醒剤を打ったのか…などの描写も、実にリアルだった。ありのまま、全てを話そうとしている。この前の、女性の裁判も聞いたが、両者の言い分はかなり違う。でも、裁判官は、「かよわい女性」の話を信じるのだろうか、と思った。

田代さんがクスリに手を出したのは平成3年頃。ハワイに行った時だった。音楽仲間たちと行った。日本を離れた解放感もあった。それに、ハワイでは、ピストルも銃も撃てる。お金さえ出せば、そういう場所で自由に撃たせてくれる。日本では非合法だが、ここでは合法だ。そんな解放感で、クスリもやった。

うん、この気持ちは分かるね。ハワイの他にもフィリピンやタイなど、射撃の出来る国は多い。本物のピストルやライフルを撃たせてくれる。

「シューティング（射撃）センター」といった名前で、大きく看板も出ている。観光客向けでもある。僕もタイでは何度も行った。射撃の腕もA級だ。でも、日本じゃ、ピストルを持ってるだけで実刑だ。ピストルをブツ放したら、なおのこと大変だ。タイでは、いくらでも撃てる。だから、何でも出来ると思う。解放感で、私もクスリをやった。いや、これだけはやんなかった。

田代さんの話に戻す。ハワイから帰ってきて、クスリはやめた。「あっ、ここは日本だ。ここではやっちゃいけないんだ」と頭を切り換える。それで、もう二度とクスリとの出会いはないはずだった。

ところが、平成12年、盗撮で捕まる。皆から、批判、バッシングで四面楚歌になる。孤立する。普通なら酒を飲むところだろうが、一滴も飲めない。それで、クスリに走った。

さらに今回、又だ。特に、今回は女性にもクスリを打った。かわいそうに。何も知らない女性に無理矢理、クスリを打つなんて。ひどい。と皆、思った。その女性は、「いやだったけど、でも嫌われたくなくて…」と涙ながらに証言した。それで、執行猶予で、釈放された。裁判官も女性の涙には弱い。それに、その女性は38才だが、25才位にしか見えない。藤原紀香似の美人だ。「こんな可愛い子に、無理矢理クスリを打ったのか！」と裁判官は思っちゃう。「悪逆非道な田代め！」と思っちゃう。

ところが、田代さんは、「合意」だったと証言する。彼女は、クスリを前にもやっていたようだ。今回だって、彼女の方から誘った。とも言う。

初めは、「合法ドラッグだから…」と言って、煙を吸って、口移しで、彼女に吸わせた。その時、彼女が言った。「あら、本物みたいね」。リアルな証言だ。田代さんの作り話とは思えない。

本物のクスリだと見破られた。その時、彼女がさらに言った。「煙を吸うなんて、女・子供のやることよ。腕はバレルから、足に打てばいいのよ」と。

田代さんもその気になって、「やる?」「いいわよ」と合意が成立し、あとはラブホに泊まり込んでクスリとSEXだ。

「快感を高めるためにクスリを使ったのか?」と裁判長が聞く。スポーツ新聞の記者みたいな質問だ。それに対し、田代さんは、

「いや、淋しさをまぎらわすためです」と答えていた。

なぜ二度もクスリに手を出したか、については、

「絶望的で、ヤケになっていた。もうどうなってもいいと思っていた。死んでもいいと思っていた」とその時の心の状況を語っていた。

せめて、酒でも飲めればよかったのか。じゃ、肉体改造をして、酒を飲める体にしたらいいだろう。あるいは、愛をもって助けてくれる人が必要なのか。多分、実刑は免れないだろう。3年になるのか。4年か、5年か。「出てきたらどうしますか」という質問には、「1人の人間としてやり直したい。老人介護の仕事をしたい」と言っていた。

(3) 「ザ・ニュース・ペーパー」の4連戦に出るよ!

【だいありー】

[1] 12月17日(金) 1時半から田代さんの公判。又もや抽選。前回は10倍だったが、今回は5倍位。私は何とか当たったので、傍聴した。

[2] 12月18日(土) 1時半から、『鉄路の7人』(白順社)の出版記念会。JR浦和電車区で、7人の組合員が逮捕され、長期拘留(344日)された。組合つぶしの、全くのデッチ上げ逮捕だ。裁判は今も続いている。この闘いを記録し、無罪判決に向けての本だ。7人の決意発表、記念講演のあと、「激励のスピーチ」は三浦和義さんと僕。いいだももさんも予定されていたが来なかった。久しぶりに会えると楽しみにしてたのに。

いいださんは三島由紀夫の「論敵」だった。『三島由紀夫全集』(第40巻・新潮社)に、三島vs石原慎太郎の対談が出ていた。石原が、「この前、

いいだももと対談したんだろう。あんな奴、ぶった斬ってやればよかったのに」。それに対し三島が、「あんな奴を斬っちゃ刀のけがれだよ」。何とも凄いことを言う。

[3] この日の夜、映画「ジョニー・ウォーカー」じゃなかった。「レディ・ジョーカー」を見る。あのグリコ・森永事件をモデルにした映画だ。高村薫の原作。期待して見たが、ガッカリした。〈事実〉の迫力の方がはるかに凄い。

[4] 12月21日(火) 7時からザ・ニュース・ペーパーの本公演。ゲストコーナーで、斉藤貴男さん（ジャーナリスト）、大内裕和さん（松山大学助教授）とトーク。小泉、サマワ、皇室などをネタにしたコントがあり、それが終わって3人で話す。2回、出番があった。出るなり、「ウッチー！」と若い女性の掛け声。松山から出てきた大内先生の追っかけだ。凄いやね。自衛隊の話、反戦ビラの無罪判決、皇室の話などを3人でする。終了後、打ち上げ。元「びっくりハウス」編集長の高橋章子さんも見に来ていて、一緒に飲む。

[5] 12月22日(水) 7時から、ザ・ニュース・ペーパー。今回は高橋哲哉さん（東大教授）とトーク。高橋さんは福島出身だ。同じだ。同郷意識がわいた。今回は出番は1回にして、まとめて2人で30分話した。現代日本の〈保守化〉〈右傾化〉について話をした。24日(金)、25日(土)も出る。

[6] 『月刊タイムス』（1月号）が発売中です。僕の連載「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」は第6回目です。「柔道家・猪熊功の『完璧な死』」です。

【お知らせ】

[1] 12月27日(月) 7時からロフト。「創」プロデュースのイベント。テーマは「イラク・日本・北朝鮮。メディアが伝えない真実」です。出演者は、綿井健陽、原田浩司、森達也、そして私だ。（ここにきてニュース。何と、辛淑玉さんが後半、特別出演することになった！乞御期待！）

[2] 1月12日(水) 7時から高田馬場ライブ塾で島田裕巳さん（評論家）とトーク。「オウム事件の教訓」です。2月9日(水)は三浦和義さんと「ロス疑惑の真実」。3月9日は立松和平さん（作家）と「連合赤軍事件」です。

[3] 1月26日(水) 7時から一水会フォーラム。高田馬場のシチズンプラザ。講師は何と、民主党衆議院議員の長島昭久氏です。テーマは「日米同盟の新しい設計図」です。ぜひ、いらして下さい。

[4] では、よいお年を。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

ページデザイン／丸山條治